茨城県教育財団文化財調査報告第275集

仁井谷遺跡
神岡上遺跡
古屋敷遺跡
叶南前A遺跡

一般県道里根神岡上線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成19年3月

茨城県高萩土木事務所
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第275集

仁井谷遺跡
神岡上遺跡
古屋敷遺跡
叶南前A遺跡

一般県道里根神岡上線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成19年3月

茨城県高萩土木事務所
財団法人　茨城県教育財団

仁井谷遺跡　第１号道路跡完掘状況（南西方向から）

仁井谷遺跡　第１号道路跡路面構築状況（北東方向から）

序

茨城県は長期的な展望のもと，産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と，県全域にわたる調和のとれた発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めております。一般県道里根神岡上線の整備事業も，その目的に添って県土の一体的な振興を図るために計画されたものであります。

このたび，茨城県高萩土木事務所は，北茨城市神岡上地区において，里根神岡上線の道路改良事業を決定致しました。

この事業地内には，埋蔵文化財包蔵地である仁井谷遺跡・神岡上遺跡・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県高萩土木事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，平成17年11月から平成18年３月にかけて発掘調査を実施しました。

本書は，仁井谷遺跡・神岡上遺跡・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡の調査成果を収録したもので，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県高萩土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，北茨城市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，感謝申し上げます。

平成19年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　人　見　實　德

例　　言

1　本書は，茨城県高萩土木事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成17年度に発掘調査を実施した，茨城県北茨城市関南町神岡上3001番地に所在する仁井谷遺跡・神岡上遺跡・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調　査　　平成17年11月１日～平成18年３月31日

整　理　　平成18年８月１日～平成19年３月31日

3　発掘調査は，調査課長川井正一のもと，以下の者が担当した。

仁井谷遺跡

首席調査員兼班長	樫村　宣行	
主任調査員	大塚　雅昭	
主任調査員	杉澤　季展	平成18年３月１日～平成18年３月31日
調査員	鹿島　直樹	平成18年３月１日～平成18年３月31日
調査員	早川　麗司	

神岡上遺跡

首席調査員兼班長	樫村　宣行	
主任調査員	渡邉　浩実	平成17年12月１日～平成17年12月31日
主任調査員	大塚　雅昭	
調査員	早川　麗司	

古屋敷遺跡

首席調査員兼班長	樫村　宣行	
主任調査員	大塚　雅昭	
調査員	早川　麗司	

叶南前Ａ遺跡

首席調査員兼班長	樫村　宣行	
主任調査員	栗田　　功	平成17年11月１日～平成17年11月30日
主任調査員	大塚　雅昭	
調査員	早川　麗司	

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長大森雅之のもと，以下の者が担当した。

主任調査員	渡邉　浩実	第４章神岡上遺跡
調査員	早川　麗司	第１章～第２章　第３章仁井谷遺跡　第５章古屋敷遺跡 第６章叶南前Ａ遺跡　第７章まとめ

5　福島県浜通り地方の古墳時代及び奈良・平安時代の土器と砂丘上の遺跡の調査について，財団法人いわき市教育事業団調査第一係長中山雅弘氏に御指導を頂いた。また，神岡上遺跡・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡の自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し，考察は付章として巻末に掲載した。

凡　　例

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X＝＋92,560m，Y＝＋83,000mの交点を基準点（A１a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ１，２，３…とし，「A１区」「B２区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ１，２，３…０と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A１a1区」，「B２b2区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は，次のとおりである。

遺構　SI―住居跡　SB－掘立柱建物跡　UP－方形竪穴遺構　SK－土坑　SD－溝跡
SF－道路跡　SA－柵跡　SE－井戸跡　PG－ピット群　Pit－ピット　P－柱穴

遺物　P－土器・陶磁器　TP－拓本記録土器　DP－土製品　Q－石器　M－鉄製品・古銭
W－井戸枠

土層　K－撹乱

3　土層観察と遺物における色調の判定には，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著　日本色研事業株式会社）を使用した。

4　遺構・遺物実測図の掲載方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の１，各遺構の実測図は60分の１の縮尺で掲載することを基本とし，種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物は，原則として３分の１の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

□ 焼土・凝灰岩　□ 粘土　■ 竈部材・黒色処理

● 土器　○ 土製品　□ 石器　■ 井戸枠　△ 鉄製品・古銭

5　遺物観察表・遺構一覧表の表記については，次のとおりである。

(1) 遺物番号は各遺跡ごとに通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の（　）内の数値は現存値を，［　］内の数値は推定値を示した。計測値の単位は，m，cm，gで示した。大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に単位を表示した。

(3) 備考欄は，土器の現存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6　「主軸」は，炉または竈を持つ竪穴住居跡についてはそれらを通る軸線とし，他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸･長軸（径）方向」は主軸が座標北から見て，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10－E）。

7　整理時に遺構名称・番号を変更した場合，旧遺跡名称・番号を（　）を付して併記した。

抄　　録

ふりがな	にいやいせき　かみおかかみいせき　ふるやしきいせき　かのうみなみまええいいせき
書名	仁井谷遺跡　神岡上遺跡　古屋敷遺跡　叶南前A遺跡
副書名	一般県道里根神岡上線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第275集
著者名	早川　麗司　渡邉　浩実
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL029－225－6587
発行年月日	2007（平成19）年３月23日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
仁井谷遺跡（にいやいせき）	茨城県北茨城市関南町神岡上3001番地（いばらきけんきたいばらぎしせき なみまちかみおかかみ）	08215－095	36度49分50秒	140度45分49秒	5.6m～6.5m	20051101～20060331	3,564㎡	一般県道里根神岡上線道路改良事業に伴う事前調査
神岡上遺跡（かみおかかみいせき）	茨城県北茨城市関南町神岡上3001番地（いばらきけんきたいばらぎしせき なみまちかみおかかみ）	08215－027	36度49分50秒	140度45分49秒	4.4m～5.5m	20051101～20060331	4,220㎡	
古屋敷遺跡（ふるやしきいせき）	茨城県北茨城市関南町神岡上3001番地（いばらきけんきたいばらぎしせき なみまちかみおかかみ）	08215－084	36度49分50秒	140度45分49秒	4.9m～5.8m	20051101～20060331	2,018㎡	
叶南前A遺跡（かのうみなみまええいいせき）	茨城県北茨城市関南町神岡上3001番地（いばらきけんきたいばらぎしせき なみまちかみおかかみ）	08215－092	36度49分50秒	140度45分49秒	4.5m～5.7m	20051101～20060331	3,301㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仁井谷遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡　10軒 掘立柱建物跡　１棟 方形竪穴遺構　２基 道路跡　１条 溝跡　２条	土師器，須恵器，陶器，手捏土器，石器（敲石，磨石，砥石，支脚），土製品（紡錘車），鉄製品（刀子，釘）	神岡上遺跡群は，推定棚嶋駅家の周辺に位置する遺跡群であり，仁井谷遺跡からは，陸奥国に通じるものと考えられる官道が確認されている。
		奈良・平安	竪穴住居跡　９軒 掘立柱建物跡　11棟 柵跡　２条 火葬墓　１基 ピット群　１か所 溝跡　２条 土坑　５基	土師器，須恵器，石器（敲石，磨石，砥石，支脚），石製品（紡錘車），土製品（紡錘車），鉄製品（刀子，釘，椀状滓）	
		不明	竪穴住居跡　５軒 掘立柱建物跡　３棟 方形竪穴遺構　１基 柵跡　２条 ピット群　１か所 溝跡　12条 土坑　38基 ピット　71基 円形周溝状遺構　１基 不明遺構　１基 泥炭層　１か所	弥生土器，土師器，須恵器，手捏土器，円面硯，土製品（泥面子），石器（鏃，磨石，台石，砥石），鉄製品（刀子，火打ち金），古銭	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神岡上遺跡	集落跡	奈良	溝跡 1条 土坑 2基	土師器，須恵器，石器（敲石）	
		中世	掘立柱建物跡 2棟		
		近世	溝跡 3条	陶磁器，石器（砥石）	
		不明	溝跡 7条 土坑 19基 泥炭層 1か所	縄文土器，土師器 須恵器	
古屋敷遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 2軒	土師器，ミニチュア土器	
		奈良	竪穴住居跡 2軒 掘立柱建物跡 4棟 柵跡 2条 土坑 2基	土師器，須恵器，製塩土器，石器（敲石），鉄製品（刀子・釘）	
		近世	溝跡 3条	陶器	
		不明	掘立柱建物跡 1棟 溝跡 2条 土坑 27基 ピット 17基 整地面 1か所	弥生土器，土師器，須恵器，陶器，土製品（泥面子），石器（砥石），鉄製品（釘）	
叶南前A遺跡	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 2軒 掘立柱建物跡 6棟 井戸跡 1基 土坑 5基	土師器，須恵器，鉄製品（釘），井戸枠	
		中世	井戸跡 1基	陶器	
		不明	柵跡 1条 溝跡 5条 土坑 30基 ピット 17基 泥炭層 1か所	土師器，須恵器，石器(鏃)	
要約	神岡上遺跡群の中の4遺跡で，古墳時代後期に本格的に集落が形成され始め，律令期の開始とともに栄えた多珂郡新居郷に属する集落群である。仁井谷遺跡で確認された住居跡からは，東北地方南部の古墳時代後期の土器である栗囲式土器が出土している。また，古代の須恵器は県内の須恵器の他に，いわきの窯で製作された須恵器や在地で製作された可能性がある須恵器も出土している。				

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第１章　調査経緯…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査経過…… 1
第２章　位置と環境…… 2
　第１節　地理的環境…… 2
　第２節　歴史的環境…… 3
第３章　仁井谷遺跡…… 9
　第１節　遺跡の概要…… 9
　第２節　基本層序…… 9
　第３節　遺構と遺物…… 13
　　1　古墳時代の遺構と遺物…… 13
　　⑴　竪穴住居跡…… 13
　　⑵　掘立柱建物跡…… 37
　　⑶　方形竪穴遺構…… 39
　　⑷　道路跡…… 41
　　⑸　溝跡…… 47
　　2　奈良・平安時代の遺構と遺物…… 51
　　⑴　竪穴住居跡…… 51
　　⑵　掘立柱建物跡…… 70
　　⑶　柵跡…… 86
　　⑷　火葬墓…… 89
　　⑸　ピット群…… 91
　　⑹　溝跡…… 92
　　⑺　土坑…… 94
　　3　その他の遺構と遺物…… 99
　　⑴　竪穴住居跡…… 99
　　⑵　掘立柱建物跡…… 105
　　⑶　方形竪穴遺構…… 108
　　⑷　柵跡…… 109
　　⑸　ピット群…… 111
　　⑹　溝跡…… 112
　　⑺　土坑…… 118
　　⑻　ピット…… 125
　　⑼　円形周溝状遺構…… 130
　　⑽　不明遺構…… 131
　　⑾　泥炭層…… 132
　　⑿　遺構外出土遺物…… 133
第４章　神岡上遺跡…… 139
　第１節　遺跡の概要…… 139
　第２節　基本層序…… 139
　第３節　遺構と遺物…… 141
　　1　奈良時代の遺構と遺物…… 141
　　⑴　溝跡…… 141
　　⑵　土坑…… 145
　　2　中世の遺構と遺物…… 148
　　掘立柱建物跡…… 149
　　3　近世の遺構と遺物…… 151
　　溝跡…… 151

4　その他の遺構と遺物…… 154
⑴　溝跡…… 154
⑵　土坑…… 158
⑶　泥炭層…… 161
⑷　遺構外出土遺物…… 165
第５章　古屋敷遺跡…… 166
第１節　遺跡の概要…… 166
第２節　基本層序…… 166
第３節　遺構と遺物…… 168
1　古墳時代の遺構と遺物…… 168
竪穴住居跡…… 168
2　奈良時代の遺構と遺物…… 170
⑴　竪穴住居跡…… 170
⑵　掘立柱建物跡…… 178
⑶　柵跡…… 184
⑷　土坑…… 186
3　近世の遺構と遺物…… 188
溝跡…… 188
4　その他の遺構と遺物…… 190
⑴　掘立柱建物跡…… 190
⑵　溝跡…… 191
⑶　土坑…… 192
⑷　ピット…… 197
⑸　整地面…… 199
⑹　遺構外出土遺物…… 201
第６章　叶南前Ａ遺跡…… 204
第１節　遺跡の概要…… 204
第２節　基本層序…… 204
第３節　遺構と遺物…… 206
1　奈良・平安時代の遺構と遺物…… 206
⑴　竪穴住居跡…… 206
⑵　掘立柱建物跡…… 209
⑶　井戸跡…… 216
⑷　土坑…… 219
2　中世の遺構と遺物…… 224
井戸跡…… 224
3　その他の遺構と遺物…… 225
⑴　柵跡…… 225
⑵　溝跡…… 226
⑶　土坑…… 228
⑷　ピット…… 234
⑸　泥炭層…… 236
⑹　遺構外出土遺物…… 238
第７章　まとめ…… 239
付章　古屋敷遺跡・神岡上遺跡・叶南前Ａ遺跡の自然科学分析…… 265
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

茨城県高萩土木事務所は，北茨城市の神岡上地区において，一般県道里根神岡上線道路改良事業を進めている。

平成16年４月22日，茨城県高萩土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，一般県道里根神岡上線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成16年６月17日に現地踏査を，平成16年10月28・29日にかけて試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成16年11月26日，茨城県教育委員会教育長から茨城県高萩土木事務所長あてに，事業地内に仁井谷遺跡，神岡上遺跡，古屋敷遺跡，叶南前Ａ遺跡が所在する旨回答した。

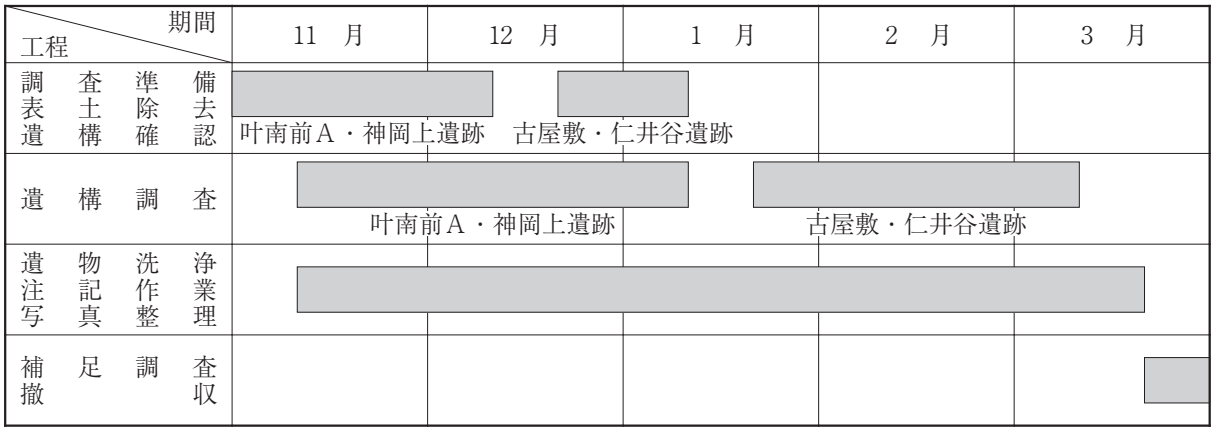
平成17年２月14日，茨城県高萩土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第57条の３第１項（現　第94条）の規定に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，平成17年３月２日，茨城県高萩土木事務所長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成17年３月22日，茨城県高萩土木事務所長は，茨城県教育委員会教育長に対して，一般県道里根神岡上線道路改良事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成17年３月23日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県高萩土木事務所長あてに，仁井谷遺跡，神岡上遺跡，古屋敷遺跡，叶南前Ａ遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県高萩土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成17年11月１日から平成18年３月31日まで，仁井谷遺跡，神岡上遺跡，古屋敷遺跡，叶南前Ａ遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第２節　調　査　経　過

調査は，平成17年11月１日から平成18年３月31日まで実施した。以下調査の経過については，概要を表で記載する。



第2章　位 置 と 環 境

第1節　地 理 的 環 境

仁井谷・神岡上・古屋敷・叶南前Ａ遺跡は，茨城県北茨城市関南町神岡上3001番地に所在している。

北茨城市は，茨城県の最北部に位置する市で，福島県いわき市と接している。市域の地形は大きく二つに区分でき，西部は福島県から南北に連なる阿武隈高地で，東部は太平洋に面する常磐海岸地帯である。山間部から東に向かって順次標高が低くなり，山地，丘陵地，低地，海岸と配列しており，山地や丘陵地は東流する河川によって分断されている。

当遺跡群は，大津から平潟にかけて海岸に突き出た北部丘陵地と，二ツ島付近で海岸まで迫っている中央部丘陵地に挟まれ，南北に細長く形成された低地に位置している。この低地を流れる河川に，里根川と江戸上川がある。里根・江戸上両河川は，その下流域の関本下，仁井田・神岡下に沖積地を形成している。河川改修以前の里根川は，河口付近で進路を南に取り，約300m南の江戸上川と水路で繋がれていた。江戸上川は関南町の丘陵を開析しながら谷底平地を流れ，支流と合流して神岡下から低地に流れ出る。関南町神岡上地区，磯原町二ツ島地区では，丘陵が西側からせり出していて低地を狭くしており，特に二ツ島地区では，海岸線近くまで丘陵が延びている。神岡上地区の丘陵を流れている小河川は，東善寺池，叶岡前池，南前の堤などで堰き止められ，低地を横断して太平洋に注いでいる。土地区画整備前は，今よりも多い小河川が神岡上地区を流れていたという。

北茨城市の低地は，このように海岸まで突き出た丘陵にその幅を狭められながら南北に海岸に沿って広がっており，その低地の前面を縁取って，市域南部の小野矢指，足洗，下桜井，磯原，神岡，大津まで約12㎞に渡って弧状に砂浜が広がっており，その内側の低地に砂丘が形成されている。

砂丘は足洗地区･神岡地区には、南北に細長く東西にそれぞれ二列形成されている。足洗地区の東列砂丘は，海岸沿いに足洗から下桜井を経て，大北川河口まで南北約４㎞，幅約400ｍで，最も高いところで標高約５ｍである。大北河口では，「中州」と呼ばれる幅200ｍ，標高約３ｍの砂州が形成されており、大北川を北流させている。西列の砂丘は，長さ約１㎞，幅200ｍで，規模は東列砂丘よりも小さく，標高は足洗の中郷中学校付近が最も高く，約７ｍである。神岡地区の砂丘は，長さが約２㎞，幅は南部の神岡上が約600ｍと幅が狭く，北端の神岡下付近は約１㎞と広くなっている。東列砂丘は，海岸線に平行している。幅は約100ｍと狭いが，標高は５～６ｍと高く，浜田付近では，水田との比高が約２ｍある。西列の砂丘は低平である。この砂丘の西側には，低地が広がり丘陵地に至る。

仁井谷・神岡上・古屋敷・叶南前Ａ遺跡は，いずれも神岡上地区の西列砂丘の西縁部に南北に連なっている。仁井谷遺跡で砂丘は丘陵に一番寄っており，神岡上・叶南前Ａ遺跡の一部は，砂丘と背後の丘陵との間の低地にかかっている。今回の調査区は，仁井谷・古屋敷遺跡の西縁部を，叶南前Ａ・神岡上遺跡のほぼ中央部を南北に縦断している。標高は今回の調査区で，仁井谷遺跡が5.6～6.5m，神岡上遺跡が4.4～5.5m，古屋敷遺跡が4.9～5.8m，叶南前Ａ遺跡が4.5～5.7mである。調査前の現況は，仁井谷・古屋敷遺跡が道路・更地で，叶南前Ａ・神岡上遺跡が更地である。

第2節　歴 史 的 環 境

ここでは神岡上遺跡群周辺の遺跡を，先学の研究や遺跡分布調査，及び発掘調査の成果をもとに記述していく。神岡上遺跡群の周辺には，古墳や横穴墓が多数存在しており，寺院跡や祭祀遺跡もある。それらを河川の流域ごとの大きな範囲で概観していくと，里根川流域には，塚山古墳〈１〉・八塚古墳群〈２〉・稲荷塚古墳群〈３〉・長浜古墳〈４〉・平潟横穴〈５〉・長浜横穴群〈６〉がある。里根川が大津港に注いでいる河口付近に位置する大塚山古墳〈７〉は，採集された土器から中期の可能性があり，市内最古の古墳と考えられる。以前は２基以上からなる古墳群で，宅地造成時に勾玉が出土している。大津港の北側にある丘陵の，太平洋まで突き出したその先端に，立野祭祀遺跡〈８〉がある。中期に属する多種の石製模造品が採集されており，「航海の平安祈願など海の祭祀が行われた可能性」が指摘されている[1)]。津を眼前にしたこの地で祭祀が行われたことや，古墳が築造された理由は，津が重要視されたためと考えられる。また大津港を見下ろす丘陵の南崖面には，明治時代に松村瞭氏が調査し[2)]，直刀・鉄鏃・金環・釧などの副葬品と，「少なくとも八名」の人骨が出土した唐帰山横穴群〈９〉がある。

江戸上川流域には神岡上遺跡群を取り囲むように，神岡上古墳群〈10〉・富士ノ腰横穴群〈11〉・叶岡堤横穴群〈12〉がある。神岡上古墳群は埴輪が伴わない古墳が４基調査されている。[3)] その内３号墳は円墳で，横穴式石室内部から七鈴鏡・直刀などが出土し，須恵器・手捏土器・鏡・勾玉・小玉の土製模造品による墳丘祭祀が行われている。第１号墳からは，明治44年に金銅製刀装具類が出土しており[4)] 豪華な副葬品から被葬者の権限の大きさがうかがえ，この地域の盟主と考えられる。

中央部丘陵地の海岸近くまで迫り出した縁辺部とその崖面には，南蛭ノ平古墳〈13〉・二ツ島古墳群〈14〉・大森古墳群〈15〉・権現塚古墳〈16〉・神岡上横穴群〈17〉・二ツ島横穴Ａ支群〈18〉・二ツ島横穴Ｂ支群〈19〉がある。二ツ島観光ホテルの拡張工事中の際に発見された横穴墓が調査され，直刀・須恵器横瓶・耳環・玉類と人骨が出土しており[5)]，この横穴墓は，現在の二ツ島Ａ支群に含まれるものである。

大北川流域の尾形山横穴群〈20〉は，８支群73基と推定されており，その内８基が調査されている[6)]。また，出土した横穴墓は不明だが，銅鋺蓋・珠文鏡・武器類・装身具類・須恵器・人骨が紹介されており，いわき市中田横穴墓の銅鋺蓋との形態的類似点や，いわき市八幡横穴群や白穴横穴群のように武器が多く副葬されているといった類似点から，横穴群が形成された時期に「多珂国造」といった共通の支配者がこの地域を治めていた可能性が考えられている[7)]。駒木横穴墓〈21〉も４基調査されており[8)]，隣接した尾形山横穴群と同一の横穴群の可能性がある。『常陸国風土記』[9)] には，「建御狭日命，遣はれし時に当たりて，久慈の堺の助河を以ちて道前と為し，郡を去ること，西北六十里，今も猶，道前の里と称ふ。陸奥の国の石城の郡の苦麻の村を，道後と為しき。」とあり，現在の日立市助川町から福島県双葉郡大熊町熊期辺りまでが，多珂国造の領域に比定されている[10)]。七鈴鏡が出土した神岡上古墳群の第３号墳と，五鈴鏡が出土したいわき市横山古墳群の被葬者は，「多珂国造家の呪術･占術を司る集団の長」と考え，「同じ葬送儀礼文化圏」を想定するのが大竹憲治氏である[11)]。この地域には共通した文化や社会があったことが考えられる。

奈良・平安時代の北茨城市は多珂郡に属し，『和名類聚抄』によると北茨城市には高野郷・新居郷・梁津郷の三つの郷が比定されている[12)]。新居郷は北茨城市関南町・磯原町・華川町南部一帯に比定され，神岡上地区の遺跡群である仁井谷遺跡・富士ノ腰遺跡〈22〉・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡・叶南前Ｂ遺跡〈23〉・神岡上遺跡・東側遺跡〈24〉・東浦遺跡〈25〉・南前遺跡〈26〉・善才原遺跡〈27〉を含めた砂丘上の遺跡は，古代の遺物が多量に散布しており，「神岡上遺跡群」と呼称できるまさに新居郷の中心的な集落群である。新居郷に比定

される地域にあるその他の古代の遺跡は，小高山遺跡〈28〉・小坂遺跡〈29〉・陣馬山遺跡〈30〉・シサ遺跡〈31〉・幌見平遺跡〈32〉・青ノ平A遺跡〈33〉・青ノ平B遺跡〈34〉・青ノ平C遺跡〈35〉・青ノ平D遺跡〈36〉・八木沢遺跡〈37〉・尾形山遺跡〈38〉・手掫遺跡〈39〉・一本松遺跡〈40〉・堂ノ前遺跡〈41〉・元谷地遺跡〈42〉・前鍛冶屋遺跡〈43〉などがある。梁津郷にある古代の遺跡は，見合遺跡〈44〉・柿木遺跡〈45〉・上野台遺跡〈46〉・鍛冶前遺跡〈47〉・梨木遺跡〈48〉・蛭田遺跡〈49〉・唐帰山遺跡〈50〉・宮西遺跡〈51〉などがある。この内，上野台遺跡からは掘立柱建物跡が確認されており[13]，大規模な集落の可能性も考えられる。

多珂郡は国造時代から，「癸丑の年に，多珂の国造石城直美夜部･石城の評の造部の志許赤等，惣領高向の大夫に請ひ申して，部ぶる所遠く隔たり，往来に便よからざるを以ちて，分かち多珂･石城の二つの郡を置きき。石城の郡は，今，陸奥の国の堺の内に在り。」[14] と，多珂郡の一部が陸奥国岩城郡になる。また，養老２(718)年に，「常陸国の多珂郡の郷，二百十戸を分離して菊田郡と名づけ石背国に所属させた」[15] とあるように陸奥国との行政区画の整理が行われている。これ以降は梁津郷が常陸国の最北端の郷になり，陸奥国への玄関口である勿来（菊田）関がすぐ北側にある[16]。また，「守護国界」の思想に基づいて，平安時代初期に「国界寺」である中山寺が関本上に建立されている[17]。

このように古代の東北地方との国境の郡として，重要な役割を果たしていた多珂郡は，東海道に属している。常陸国国府以北の駅家として多珂郡には，助川駅家・藻嶋駅家・棚嶋駅家がある。養老３(719)年に，「岩城国に初めて馬家十ヵ所」[18] が設置され，国府以北のこれらの駅家は陸奥国の海道10駅に連絡していたものである。８世紀になると国の蝦夷征討事業が活発になり，それに合わせてこれらの駅路が設置されたと考えられている。棚嶋駅家は新居郷に置かれたものと考えられており，磯原町の天妃山付近に比定されている[19]。「榎の浦の津あり。便ち，駅家を置けり。東海の大道にして，常陸路の頭なり」[20] とあるように，常陸路の最初の駅家や港があった榎浦津を見降ろす位置に，下君山廃寺跡がある。終点の港の梁津を見降ろす高台に，一堂規模の寺院である大津廃寺跡〈52〉がある[21]。これらの常陸国における駅路の起点と終点にある寺院は，「常陸国内の鎮護と蝦夷征伐討に向かう将兵や船団の平安を祈念するため」建立されたと考えられている[22]。律令期は蝦夷征討が本格化してきた時期である。多珂郡はそのような時代背景の中存在し，特に陸奥国との境の津がある梁津郷と，推定棚島駅家のある新居郷は蝦夷征討という国の事業と深く関連したものと考えられる。

※　文中の〈　〉内の番号は，表１及び第１図の該当番号と同じである。

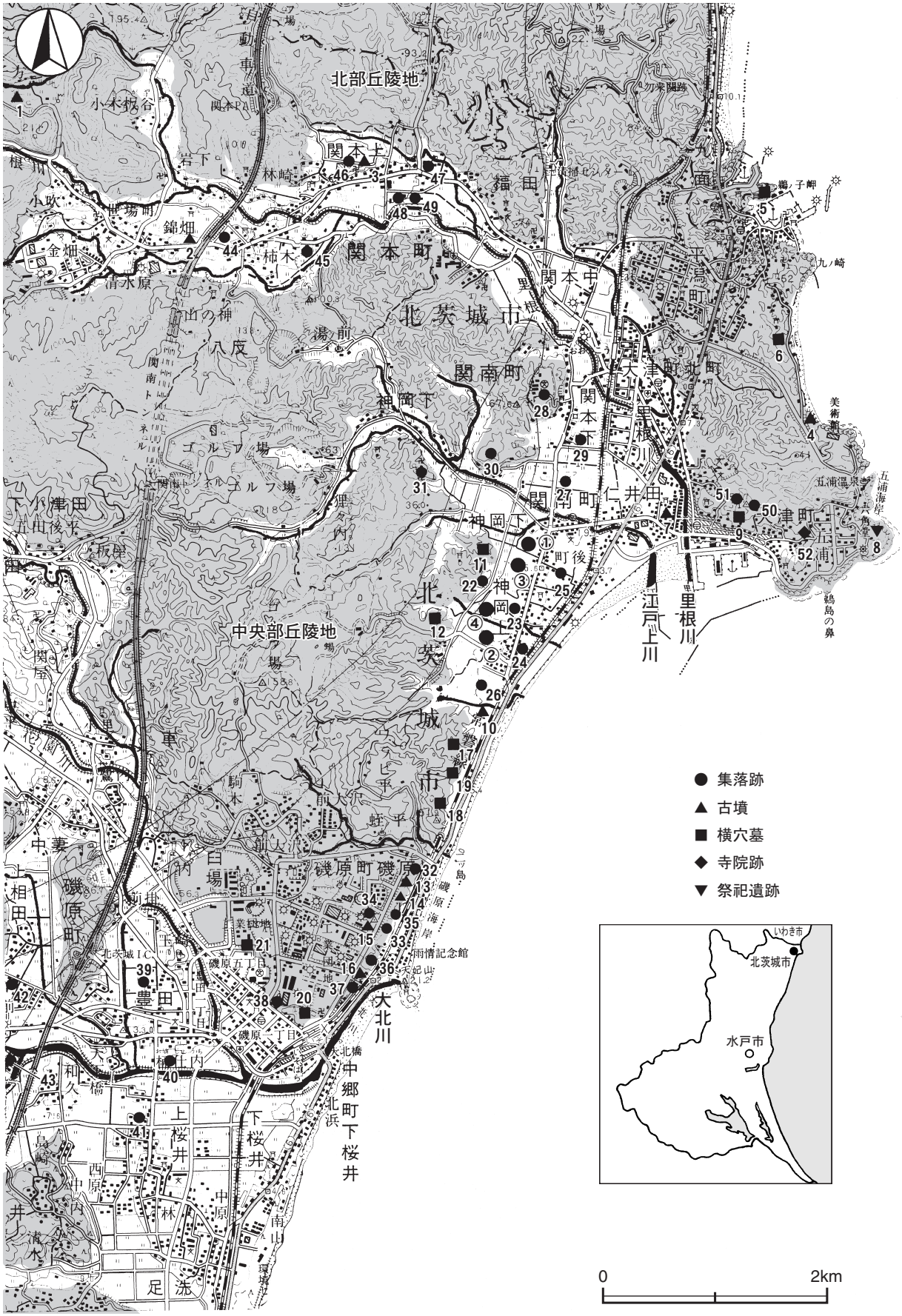
註

１）樫村宣行「茨城県の祭祀遺跡」『東国土器研究』５号　東国土器研究会　1999年５月
２）松村瞭「常陸国多賀郡大津の横穴」『東京人類学会雑誌』第21巻第2377号　東京人類学会　明治38年12月
３）折原洋一「神岡上古墳群－北茨城市関南町神岡上－」『北茨城市文化財調査報告』Ⅵ　北茨城市教育委員会　1995年10月
４）瓦吹堅「北茨城市内の古墳と横穴」『北茨城史壇』第４号　北茨城市役所　1984年３月
５）滝田宏　川崎純徳　渡辺明「北茨城市横穴墓の調査」『常総台地』７号　常総台地研究会　1976年５月
６）市毛美津子　瓦吹堅　瓦吹勢津子「尾形山横穴群Ｄ支群調査報告」『北茨城市文化財調査報告』Ⅴ　北茨城市教育委員会　1993年３月
７）市毛美津子「第４節まとめ　尾形山横穴群　Ｄ支群調査報告」『北茨城市文化財調査報告』Ⅴ　北茨城市教育委員会　1993年３月
８）市毛美津子「駒木横穴群」『北茨城市文化財調査報告』Ⅶ　北茨城市教育委員会　1996年３月
９）秋本吉徳『常陸国風土記全訳注』講談社学術文庫1518　株式会社講談社　2001年10月
10）志田諄一「第三章律令制下の多珂郡　第一節多珂郡と郡内諸郷」『高萩市史』上　高萩市役所　1969年11月
11）大竹憲治「考古学から見た岩城評の成立－特に多珂と岩城出土の鈴鏡・鈴釧・鐙瓦を中心に－」『いわき地方史研究』第41号　いわき地方史研究会　2004年９月
12）久信田喜一「古代常陸国多珂郡の郷について－梁津・高野・新居・賀美郷を中心として－」『北茨城史壇』８　北茨城市市役所　1989年３月
13）瓦吹堅　樫村宣行「上野台遺跡群発掘調査概報」『北茨城市文化財調査報告』Ⅲ　北茨城市教育委員会　1982年９月

14）註９と同じ
15）宇治谷孟『続日本紀』（上）　講談社学術文庫1030　株式会社講談社　1992年10月
16）瓦吹堅　志田諄一「第二章　国境の港と勿来関　第一節常陸路の終点と粱津」『北茨城市史』上巻　北茨城市　1988年６月
17）志田諄一ａ「第二章　古代の北茨城　四　蝦夷征伐と天台宗」『図説北茨城市史』上巻　北茨城市　1983年３月
　　志田諄一ｂ「第三章　蝦夷征討と天台宗　第三節常陸五山と天台宗」『北茨城市史』上巻　北茨城市　1988年６月
18）註15と同じ
19）ａ志田諄一「第三編古代　第二章国境の港と勿来関　第一節常陸路の終点と粱津」『北茨城市史』上巻　北茨城市　1988年６月
　　ｂ志田諄一「道と駅家」『図説　那珂・久慈・多賀の歴史』株式会社郷土出版社　2004年11月
20）註９と同じ
21）瓦吹堅「大津廃寺跡発掘調査概報」『北茨城史壇』５　北茨城市役所　1985年３月
22）註16と同じ

参考文献

高萩市史編纂専門委員会『高萩市史』上　高萩市役所　1969年11月
安達鉱太郎『常陸多賀郡史』　常陸書房　1979年３月
北茨城市史編さん委員会『図説北茨城市史』　北茨城市　1983年３月
北茨城市史編さん委員会『北茨城市史』上巻　北茨城市　1988年６月
瀬谷義彦監修『図説　那珂・久慈・多賀の歴史』株式会社郷土出版社　2004年11月
瓦吹堅「北茨城市の土師遺跡」『北茨城史壇』第３号　北茨城市役所　1983年３月
瓦吹堅「北茨城市内の古墳と横穴」『北茨城史壇』第４号　北茨城市役所　1984年３月
瓦吹堅「北茨城市内古墳及び横穴墓出土の新資料」『北茨城史壇』第12号　北茨城市役所　1995年３月
瓦吹堅「北茨城市遺跡地名表」『北茨城市文化財調査報告書』Ⅱ　北茨城市教育委員会　1976年３月
瓦吹堅「古代常陸国多珂郡の古瓦－大津廃寺跡を中心に－」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論集』　1999年11月
茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』　茨城県教育会　1987年３月
茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』　北茨城市教育委員会　2001年３月



第１図　仁井谷･神岡上･古屋敷･叶南前Ａ遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院５万分の１に加筆）

表１　仁井谷・古屋敷・叶南前Ａ・神岡上遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	仁井谷遺跡		○	○	○	○	○	○	25	東浦遺跡					○		○
②	神岡上遺跡		○	○	○	○	○	○	26	南前遺跡					○	○	○
③	古屋敷遺跡			○	○	○	○	○	27	善才原遺跡				○	○		
④	叶南前Ａ遺跡					○	○	○	28	小高山遺跡		○	○	○	○		
1	塚山古墳				○				29	小坂遺跡				○	○		○
2	八塚古墳群				○				30	陣馬山遺跡					○		
3	稲荷塚古墳群				○				31	シサ遺跡				○	○		
4	長浜古墳				○				32	幌見平遺跡			○	○	○		
5	平潟横穴				○				33	青ノ平Ａ遺跡		○	○		○		○
6	長浜横穴群				○				34	青ノ平Ｂ遺跡		○					
7	大塚山古墳				○				35	青ノ平Ｃ遺跡					○		
8	立野祭祀遺跡				○				36	青ノ平Ｄ遺跡					○		○
9	唐帰山横穴群				○				37	八木沢遺跡					○		○
10	神岡上古墳群				○				38	尾形山遺跡					○		○
11	富士ノ腰横穴群				○				39	手掫遺跡					○		
12	叶岡堤横穴群				○				40	一本松遺跡					○		○
13	南蛭ノ平古墳				○				41	堂ノ前遺跡					○		○
14	二ツ島古墳群				○				42	元谷地遺跡					○		
15	大森古墳群				○				43	前鍛冶屋遺跡					○		
16	権現塚古墳				○				44	見合遺跡		○			○		
17	神岡上横穴群				○				45	柿木遺跡		○			○		
18	二ツ島横穴Ａ支群				○				46	上野台遺跡		○		○	○		
19	二ツ島横穴Ｂ支群				○				47	鍛冶前遺跡					○		
20	尾形山横穴群				○				48	梨木遺跡					○		
21	駒木横穴墓				○				49	蛭田遺跡					○		
22	富士ノ腰遺跡				○	○			50	唐帰山遺跡		○	○	○	○		
23	叶南前Ｂ遺跡					○			51	宮西遺跡		○	○		○		
24	東側遺跡					○		○	52	大津廃寺跡					○		

第２図　仁井谷遺跡・神岡上遺跡・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡調査区設定図

第3章　仁 井 谷 遺 跡

第1節　遺 跡 の 概 要

仁井谷遺跡は，南北に延びる標高5.6～6.5mの砂丘上に立地している。調査区は遺跡の西縁部を縦断するように設定され，調査面積は3,564㎡で，調査前の現況は道路及び更地である。

今回の調査によって，古墳時代から奈良・平安時代を中心とした遺構と遺物が確認された。確認された遺構は，竪穴住居跡24軒（古墳時代10，奈良・平安時代９，時期不明５），掘立柱建物跡15棟（古墳時代１，奈良・平安時代11，時期不明３），柵跡４条（奈良時代２，時期不明２），方形竪穴遺構３基（古墳時代２，時期不明１），道路跡１条（古墳時代），火葬墓１基（平安時代），溝跡16条（古墳時代２，奈良･平安時代２，時期不明12），土坑43基（奈良･平安時代５，時期不明38基），ピット群２か所（奈良時代１，時期不明１），ピット71基（時期不明），円形周溝状遺構１基（時期不明），不明遺構１か所（時期不明），その他泥炭層１か所（時期不明）である。

遺物は，遺物コンテナ（60×40×20㎝）に23箱出土している。主な遺物は縄文土器（深鉢），弥生土器（壺形土器），土師器（坏・椀・皿・盤・蓋・高坏・鉢・浅鉢・短頸壺・甕・甑），須恵器（坏・高台付坏・高台付皿・盤・蓋・高盤・鉢・浅鉢・瓶・長頸瓶・甕・甑・円面硯），陶器（軟質土器・碗・擂鉢），磁器（碗），手捏土器，土製品（紡錘車・泥面子），石器（鏃・磨石・敲石・台石・砥石・支脚），石製品（紡錘車），鉄製品（刀子・釘・火打ち金・鉄滓・椀状滓・不明），古銭などである。

第2節　基　本　層　序

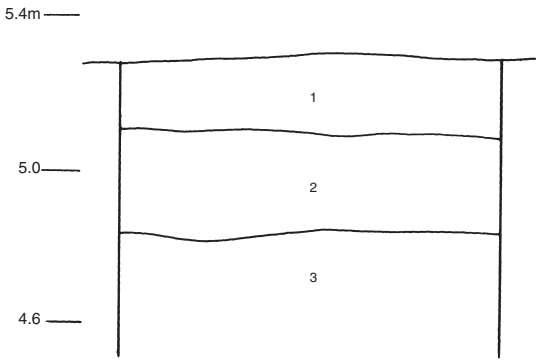
調査区南部のＤ９j2区にテストピットを設定し，基本土層（第３図）の堆積状況の観察を行った。観察結果は，以下の通りである。

第１層は，黒褐色を呈し，現在の水田の盛土層で，層厚は20～25㎝である。

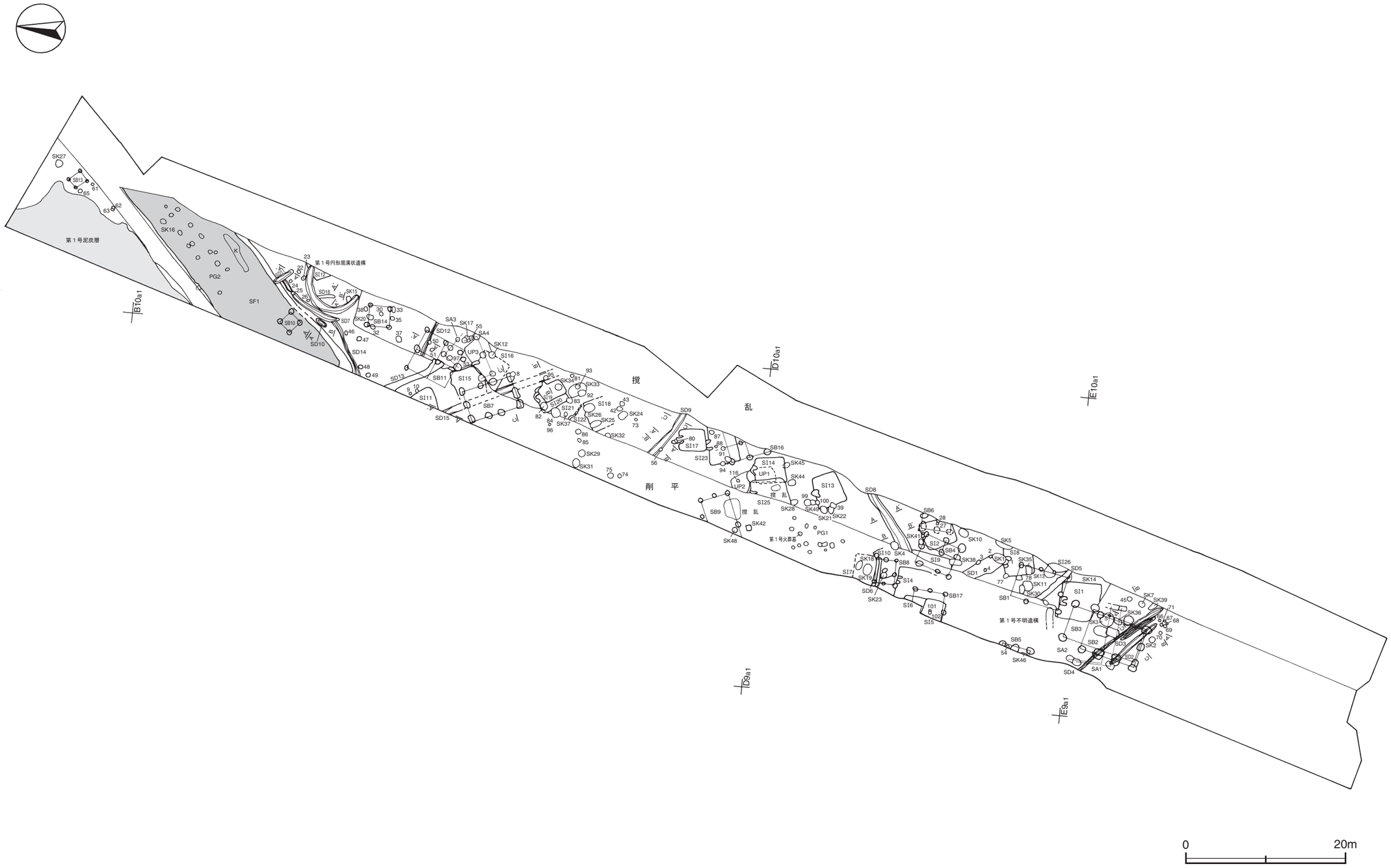
第２層は，灰白色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，層厚は30～45㎝である。

第３層は，黄色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，層厚は不明である。

遺構は，第２層上面で確認されている。



第３図　仁井谷遺跡基本土層図



第４図　仁井谷遺跡全体図

第3節　遺 構 と 遺 物

1　古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡10軒，掘立柱建物跡１棟，方形竪穴遺構２基，道路跡１条，溝跡２条が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第２号住居跡（第５～７図）

位置　Ｄ９f6区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第６号掘立柱建物跡を掘り込み，第４号掘立柱建物，第27・28号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.9m，短軸3.5mの長方形で，主軸方向はＮ－26°－Ｗである。壁高は15～20㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁の中央部に付設されている。焚口部を第４号掘立柱建物に掘り込まれているため，焚口部から煙道部までの規模は不明で，袖部幅は80㎝である。袖部は，ロームブロック・焼土化した粘土ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は地山面を凹凸に掘り込んで，黒色砂・黄色砂・灰白色砂を埋土しており，弱く赤変している。支脚は火床部の左寄りに据えられている。煙道部は壁外に20㎝掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒　色	焼土ブロック・凝灰岩ブロック微量	3	黒　色	焼土ブロック・凝灰岩ブロック・灰白色砂微量
2	灰黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック・凝灰岩ブロック多量	4	灰白色	凝灰岩ブロック中量
			5	灰白色	黒色砂多量

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ18～21㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	灰白色砂少量	2	黒　色	灰白色砂多量

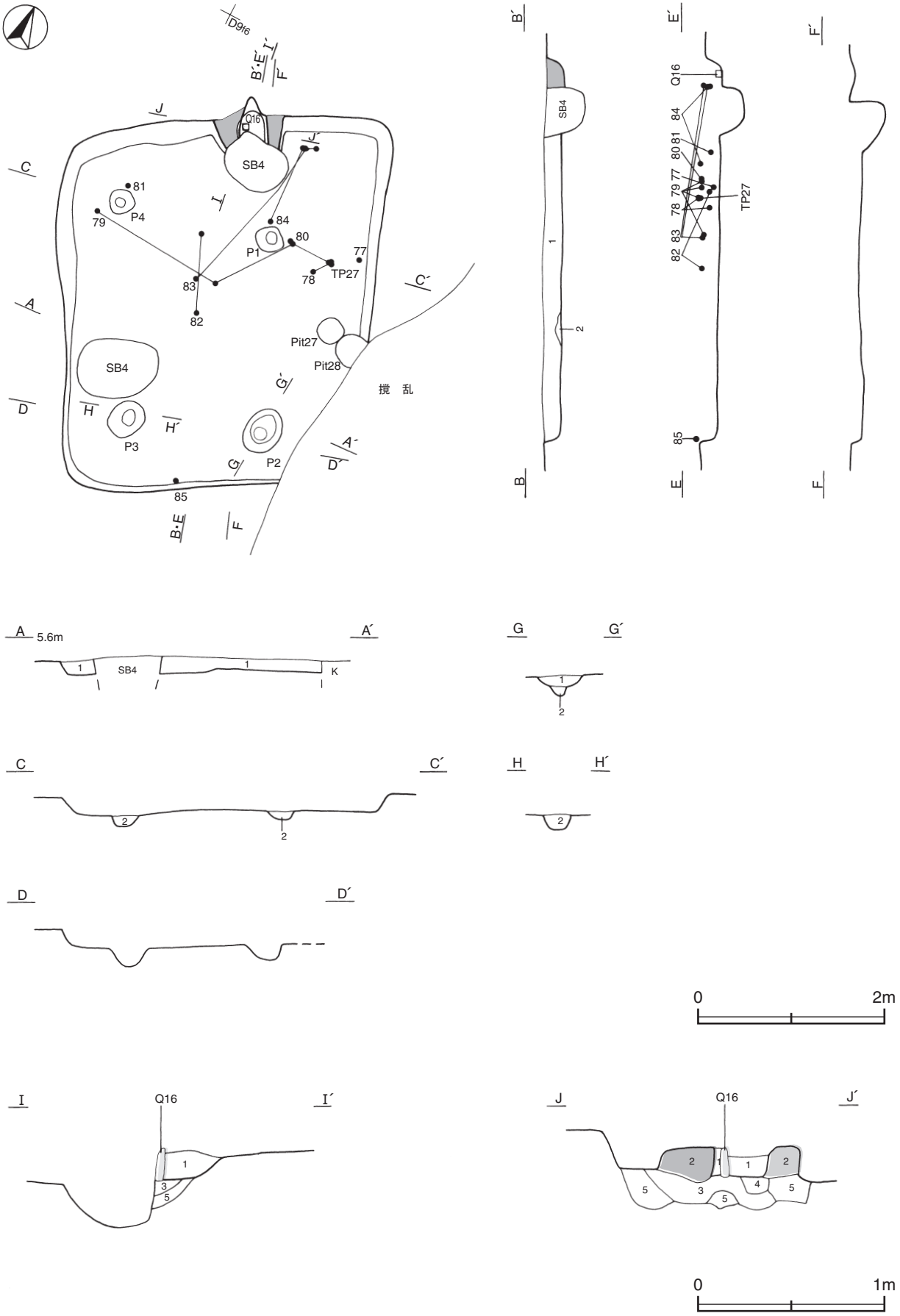
覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入し，均一に堆積した状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

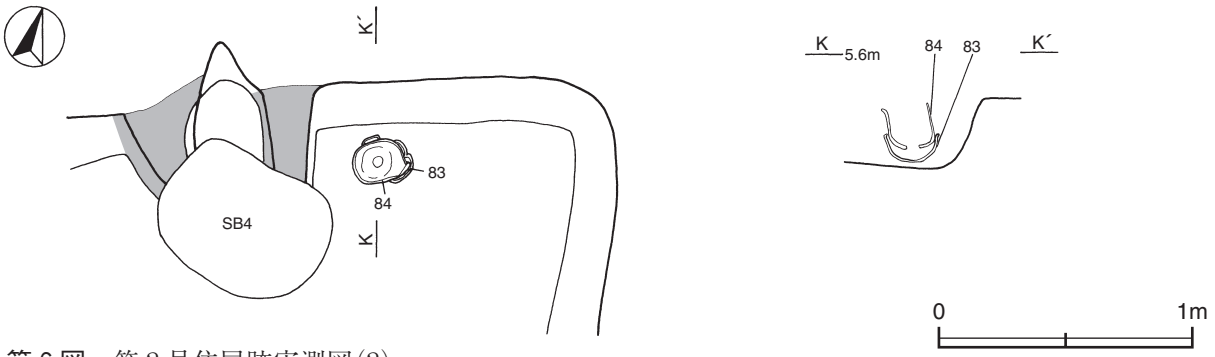
1	黒　色	焼土粒子・炭化粒子少量，灰白色砂微量	2	灰白色	黒色砂少量

遺物出土状況　土師器片433点（坏・高坏・椀106，甕・甑327），須恵器片17点（蓋），陶器１点（軟質土器），石器１点（支脚）が出土している。また，混入した須恵器片33点も出土している。遺物は，覆土中層から下層を中心に散在した状態で出土している。78は東部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。77は東壁際の下層，80は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。79は北西部及び中央部の覆土中層に散在している破片が接合したものである。83・84は竈右脇の床面からわずかに浮いた位置で，正位で入れ子の状態で出土している。また，83は覆土中層から出土した破片とも接合している。85は南壁際の覆土上層から出土している。

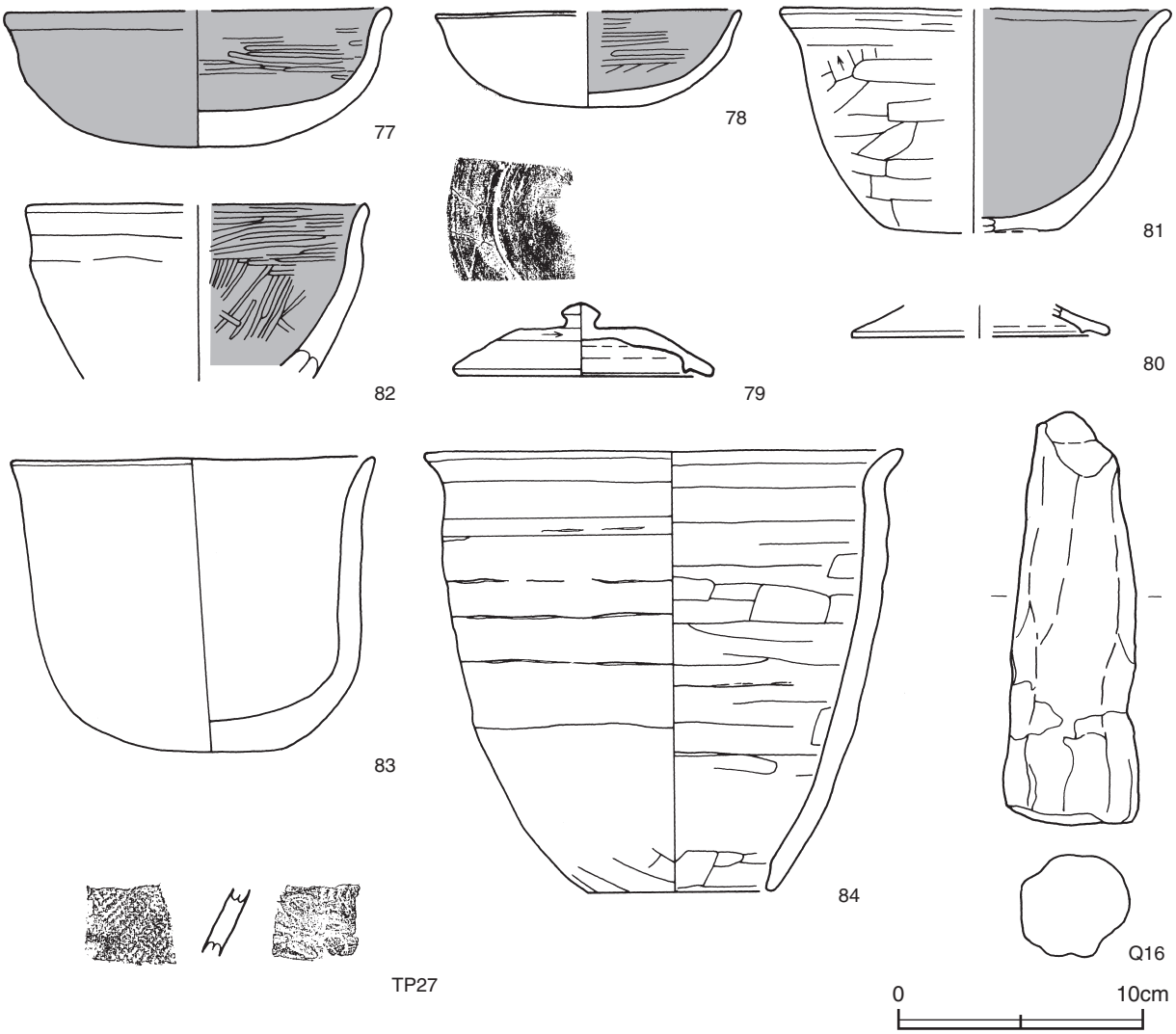
所見　時期は，出土土器から７世紀後半と考えられる。



第５図　第２号住居跡実測図(1)



第６図　第２号住居跡実測図(2)



第７図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
77	土師器	坏	[15.6]	5.6	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ナデ 体部外面の一部に木葉痕　内面ヘラ磨き	覆土下層	60%
78	土師器	坏	[12.4]	3.8	－	黒雲母・白色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ナデ　内面ヘラ磨き	覆土中層 下層	30%
79	須恵器	蓋	10.4	3.0	－	白色粒子・透明粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り調整	覆土中層	90% PL20

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
80	須恵器	蓋	[10.4]	(1.3)	－	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	天井部ロクロナデ	覆土中層	５％
81	土師器	椀	[15.8]	9.1	[7.0]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後磨き状のナデ　内面磨き状のナデ	覆土中層	30%
82	土師器	椀	[13.8]	(7.1)	－	白色粒子・透明粒子	橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ナデヵ(器面剥落) 内面磨き	覆土中層	30% 二次火熱痕
83	土師器	甕	14.8	12.2	4.4	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子 黒色粒子・赤色粒子	橙	普通	内・外面二次火熱により剥離が著しく調整不明	覆土下層	80%
84	須恵器	甑	19.6	18.1	7.5	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面輪積み痕を残したナデ　内面ヘラナデ　底部内面ヘラ削り	覆土下層	90% PL21
85	陶器	－	－	－	－	白色粒子・透明粒子	灰白	普通	緑色の釉残存	覆土上層	PL20 写真図版のみ

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP27	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	灰	普通	外面格子目叩き　内面青海波文　内・外面叩き後ナデ	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q16	支脚	17.0	5.5	4.5	193.0	凝灰岩	円柱状に整形　内部まで赤変	竈火床部	

第４号住居跡（第８・９図）

位置　Ｄ９e4区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第５・６号住居，第８・17号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　西側部分が調査区域外に延びていることや，南側が削平されているため，東西軸3.9ｍのみ，南北軸4.1ｍのみが確認されている。平面形は長方形と推測され，主軸方向はＮ－７°－Ｅである。遺存する壁高は４～６㎝で，壁の立ち上がりは不明瞭である。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで64㎝，袖部幅98㎝である。袖部は床面と同じ高さの地山面を基部とし，ロームブロックと凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は床面よりわずかにくぼんだ地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に掘り込まれておらず，火床部からほぼ直立している。また，第２層は竈構築材の崩落土である。

竈土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰 黄 褐 色　ロームブロック・凝灰岩ブロック中量
3　黒　　色　灰白色砂少量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ10～40㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ15㎝で，Ｐ４の支柱穴と考えられる。

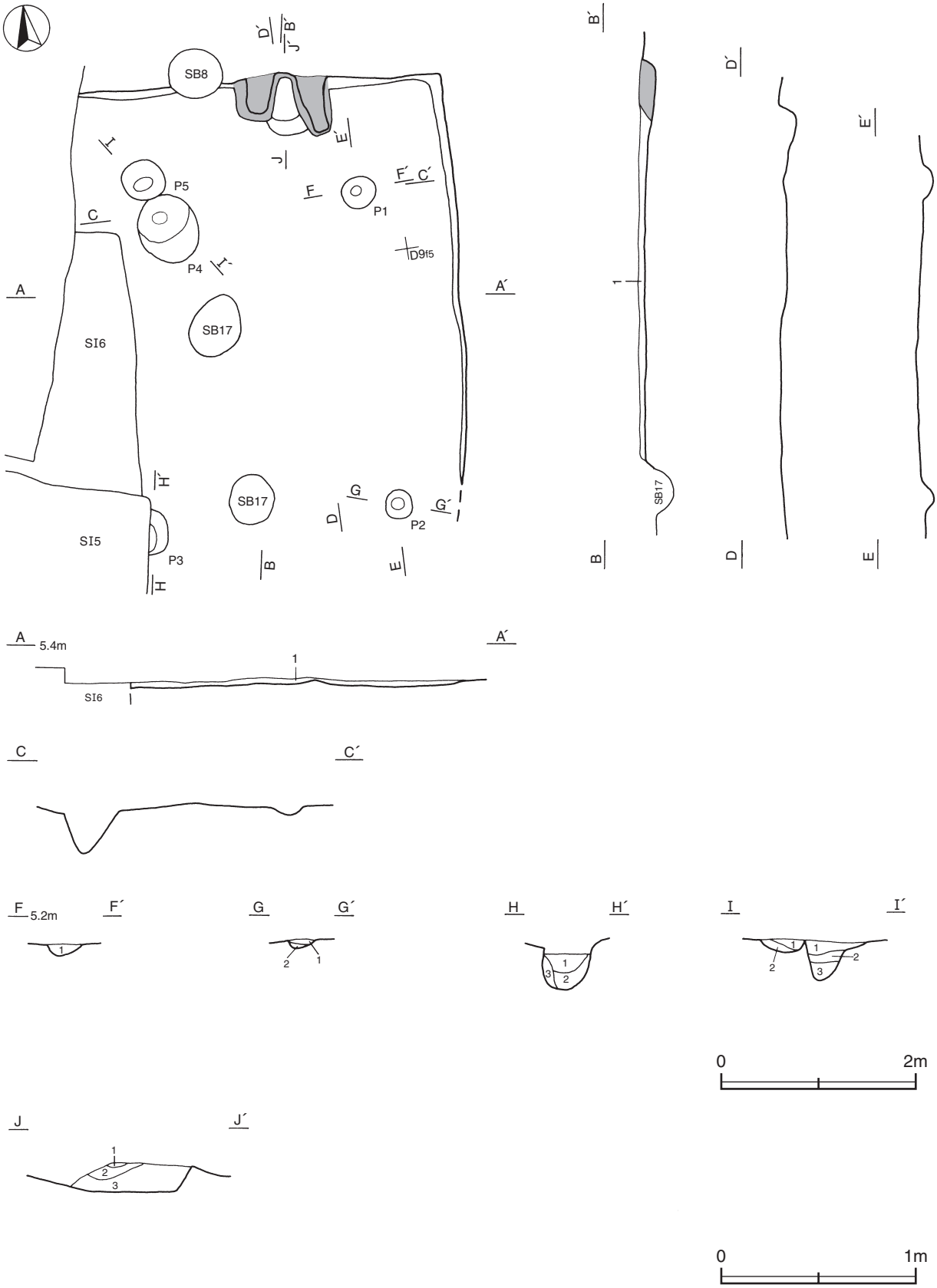
土層解説
1　褐　灰　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　　色　灰白色砂中量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

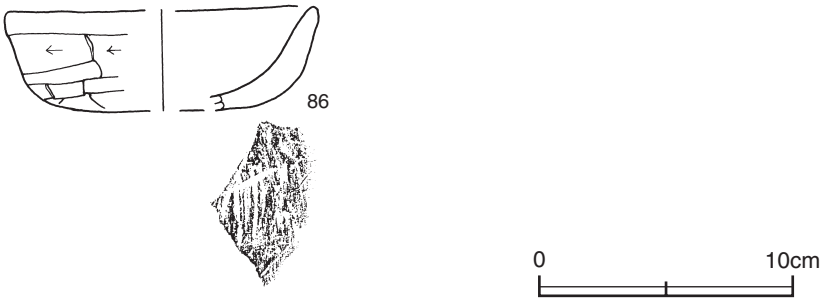
土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片199点（坏・高坏68，甕・甑131），また，混入した須恵器片14点と陶器片１点も出土している。覆土中から細片が多く出土しており，86も覆土中からの出土である。

所見　時期は，出土土器からは明確にできないが，重複関係から８世紀前葉以前であり，古墳時代後期後半と考えられる。



第 8 図　第 4 号住居跡実測図



第９図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表（第９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
86	土師器	坏	[12.0]	4.0	[6.6]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り　内面ナデ	覆土中	10%

第８号住居跡（第10・11図）

位置　Ｄ９i5区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号掘立柱建物，第１・５・35号土坑，第１・77・78号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　東側部分が撹乱を受けているため，東西軸3.3ｍのみ，南北軸3.6ｍが確認されている。平面形は方形または長方形と推測され，主軸方向はＮ－10°－Ｗである。壁高は23～32㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁中央部に付設されている。遺存状態が悪く，袖部と火床部のみが確認されている。袖部幅130㎝で，右袖部は床面と同じ高さの地山面に，左袖部は砂層を一部掘り残して基部とし，それぞれ粘土と砂の混合土の上に粘土を貼り合わせて構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。

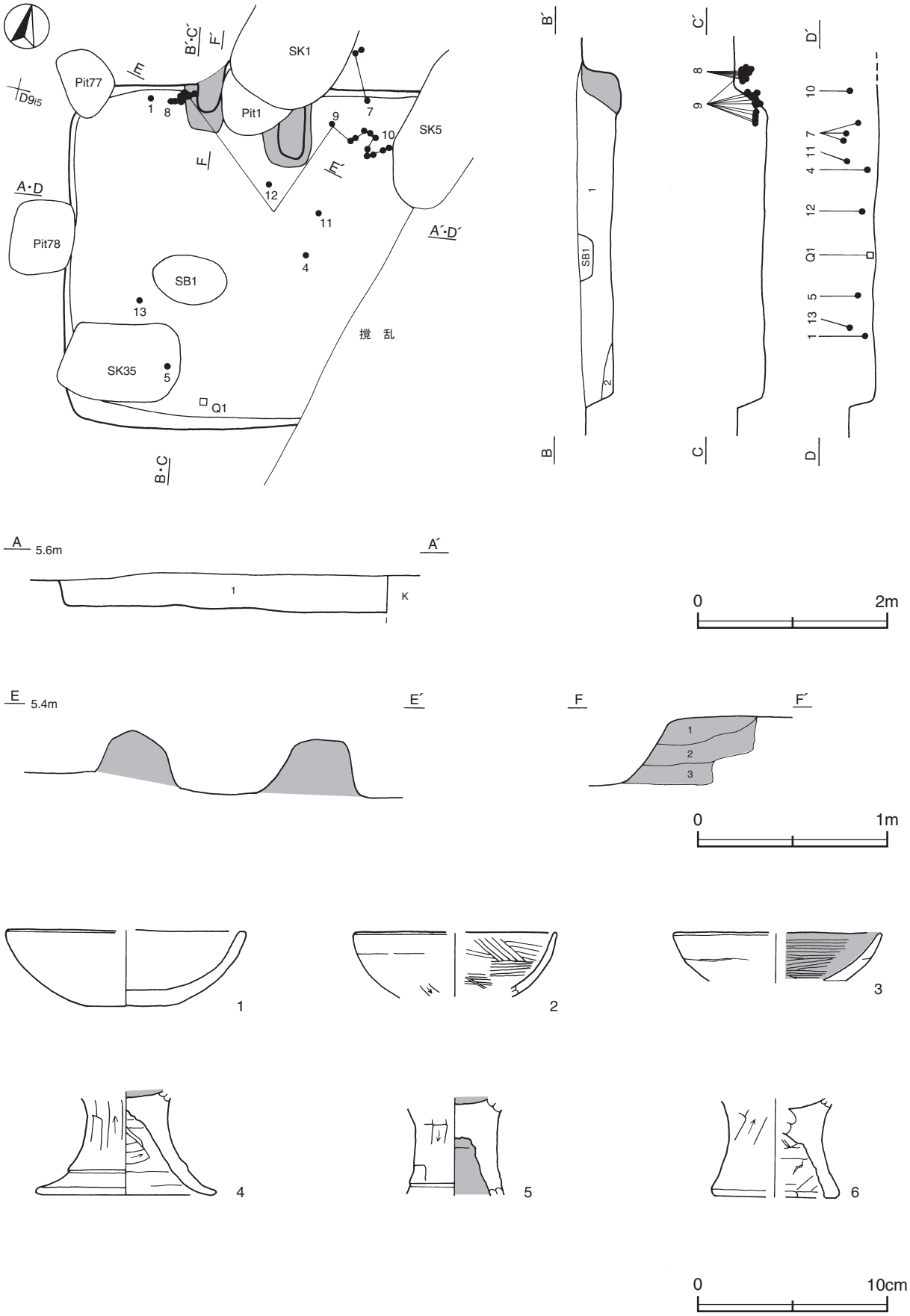
竈土層解説
1　灰黄褐色　砂多量，焼土ブロック・凝灰岩ブロック少量
2　灰黄褐色　焼土ブロック・凝灰岩ブロック・砂多量，炭化物少量
3　黒　　色　粘土多量，焼土ブロック・凝灰岩ブロック微量

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

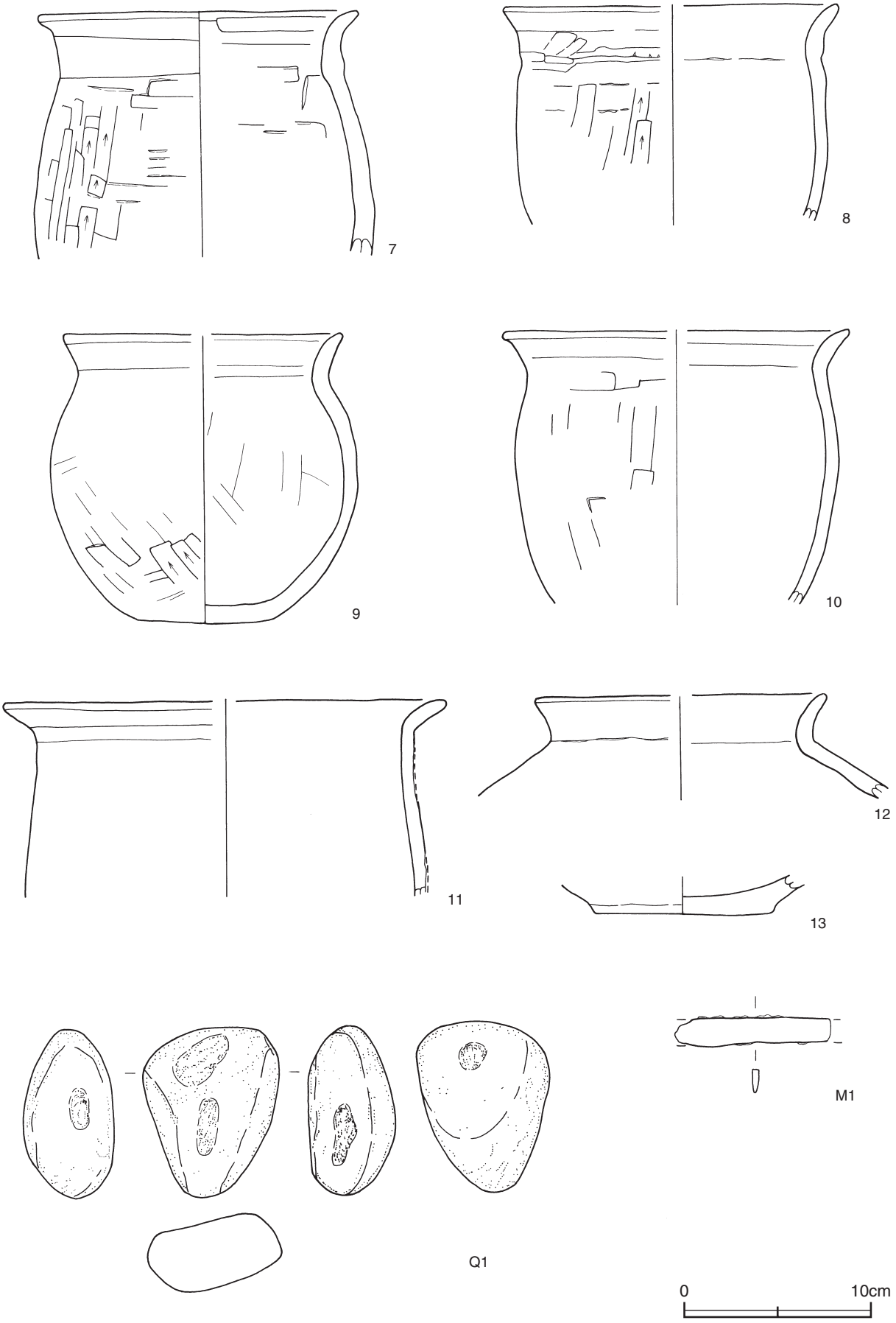
土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子少量，灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂少量

遺物出土状況　土師器片583点（坏・高坏41，甕・甑542），石器１点（敲石），鉄製品１点（刀子）が出土している。また，混入した須恵器片14点と陶器片１点も出土している。遺物は，覆土上層から中層を中心に散在した状態で出土している。７は竈右脇の確認面と覆土中層から斜位で出土した破片が接合し，９は竈周辺の覆土中層に散在している破片が接合したものである。８は竈左脇の覆土上層から散在して出土した破片が接合したものである。１は北西部の覆土下層，４・Ｑ１は中央部・南壁際の覆土下層，10は北東部の覆土上層に散在している破片が接合している。３は南東部の覆土下層，Ｍ１は北東部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から７世紀後半と考えられる。



第10図　第８号住居跡・出土遺物実測図



第11図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡出土遺物観察表（第10・11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
1	土師器	坏	[12.6]	4.0	4.2	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	内・外面ナデ	覆土下層	90%
2	土師器	高坏ヵ	[10.8]	(3.4)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面下端ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層	10%
3	土師器	高坏	[11.0]	(2.6)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	橙	普通	坏部外面横ナデ･ナデ　輪積み痕残存　内面ヘラ磨き	覆土下層	10% Ｐ４と同一個体
4	土師器	高坏	－	(5.5)	9.4	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	橙	普通	脚部内・外面ヘラ削り　裾部内・外面横ナデ	覆土下層	50% Ｐ３と同一個体
5	土師器	高坏	－	(5.2)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	浅黄	普通	脚部内・外面ヘラ削り	SK35に流入	20%
6	土師器	高坏	－	(5.3)	[6.4]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	橙	普通	脚部内・外面ヘラ削り　裾部内・外面横ナデ	覆土中層	10%
7	土師器	甕	17.0	(13.1)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面上半ヘラ削り後ナデ 下半ヘラ削り　内面ヘラナデ・ナデ	確認面 覆土中層	60%
8	土師器	甕	[17.8]	(11.7)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面上半ナデ　下半ヘラ削り　内面ナデ　口縁部～体部に輪積み痕残存	覆土上層	20%
9	土師器	甕	[14.8]	15.5	7.4	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面上半ナデ　下半ヘラ削り　内面ヘラナデ・ナデ	覆土中層	40%
10	土師器	甕	[18.4]	(14.7)	－	黒雲母・白色粒子 黒色粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土上層	20%
11	土師器	甕	[23.6]	(10.6)	－	白色粒子・透明粒子 黒色粒子・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部内・外面丁寧なナデ	覆土上層	５％
12	土師器	甕	[15.4]	(5.6)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	覆土下層	５％
13	土師器	甕	－	(2.0)	9.5	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい橙	普通	底部外面ナデ	覆土上層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ１	敲石	9.1	7.3	4.7	385.0	ホルンフェルス	４面に敲打痕	覆土下層	PL22

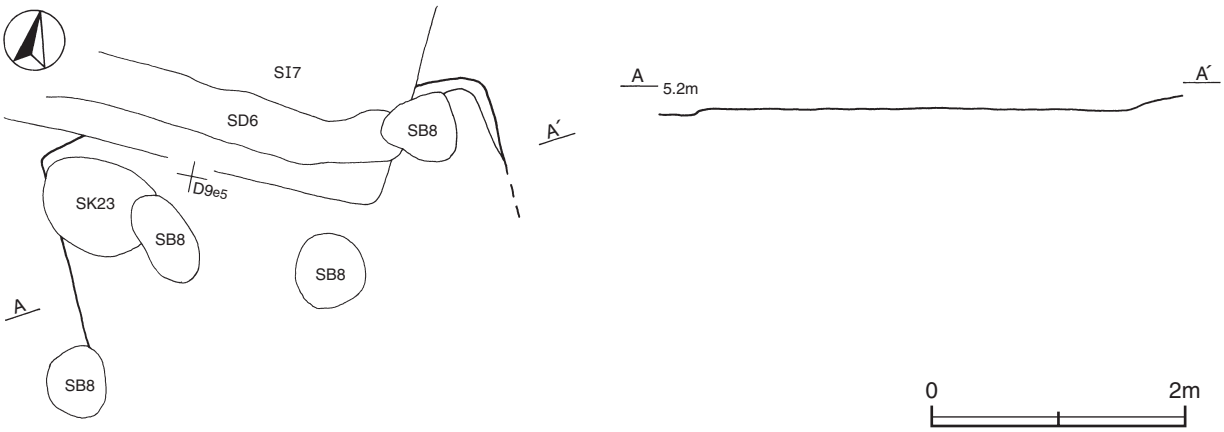
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｍ１	刀子	(8.4)	1.6	0.4	(8.6)	鉄	両端欠損	覆土上層	PL22

第10号住居跡（第12図）

位置　Ｄ９e5区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第７号住居，第８号掘立柱建物，第６号溝，第23号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　削平されていることや重複のため，東西軸3.5ｍのみ，南北軸1.6ｍのみが確認されている。平面形は方形または長方形と推測され，主軸方向は不明である。遺存した壁高は４～７㎝で，立ち上がりは不明瞭である。



第12図　第10号住居跡実測図

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

覆土　部分的に黒色砂が残っているだけであり，堆積状況は不明である。

所見　出土土器がないため時期を明確にできないが，重複関係から８世紀前葉以前であり，古墳時代後期後半と考えられる。

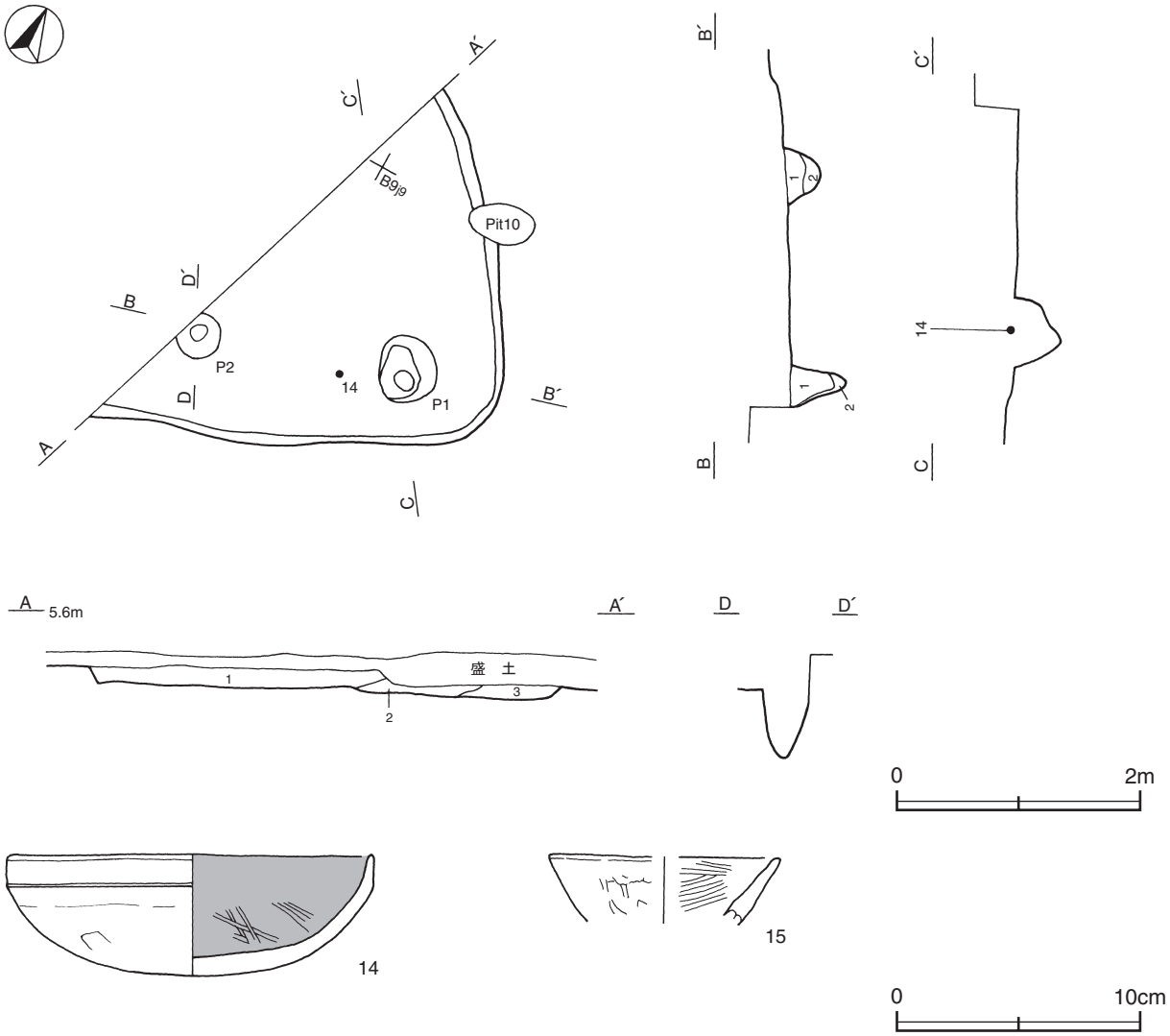
第11号住居跡（第13図）

位置　Ｂ９j9区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第10号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　北・西側部分の大部分が調査区域外に延びており，東西軸3.0ｍのみ，南北軸2.9ｍのみが確認されている。平面形は方形または長方形と推測され，Ｐ２を通るラインから推定できる主軸方向は，Ｎ－25°－Ｗである。壁高は９～15㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。



第13図　第11号住居跡・出土遺物実測図

ピット　２か所。Ｐ１は深さ35㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ２は深さ54㎝で，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂少量，黄砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量
3　黄　　色　黒色砂少量

遺物出土状況　土師器片62点（坏・高坏12，甕・甑50）が出土している。また，混入した須恵器片14点と陶器片１点も出土している。遺物は，覆土中からまばらに出土している。14は南部の床面とＰ２内から出土した破片が接合したものである。15はＰ２内から出土している。

所見　時期は，出土土器から７世紀前半と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
14	土師器	坏	14.9	4.9	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	床面 Ｐ２覆土中	70%
15	手捏土器	－	[9.4]	(2.8)	－	黒雲母・白色粒子	橙	普通	外面押圧ぎみのナデ　内面ヘラ磨き	Ｐ２覆土中	５%

第13号住居跡（第14～19図）

位置　Ｄ９c7区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

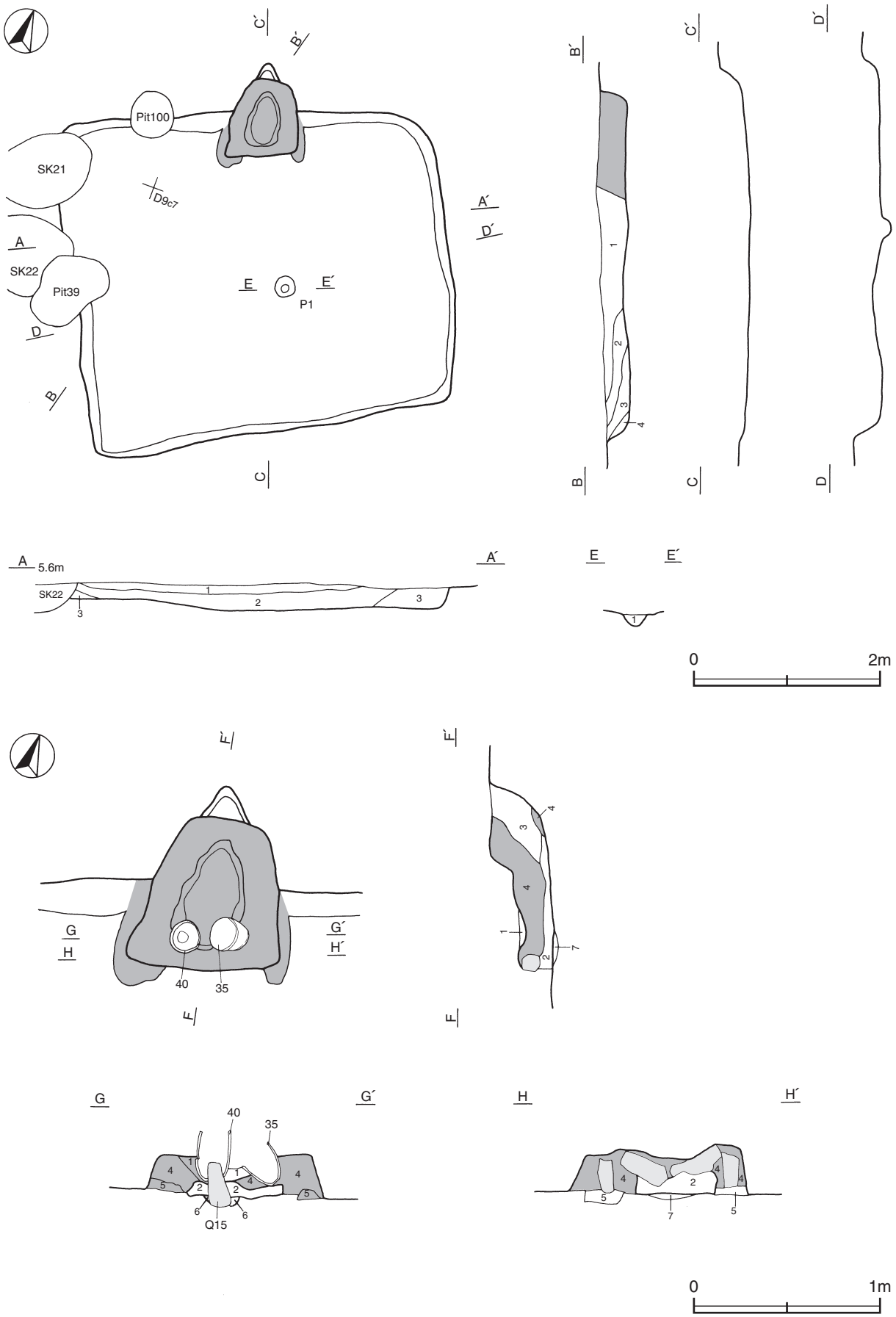
重複関係　第21・22号土坑，第39・100号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.1ｍ，短軸3.5ｍの長方形で，主軸方向はＮ－20°－Ｗである。壁高は16～28㎝で，外傾して立ち上がっている。

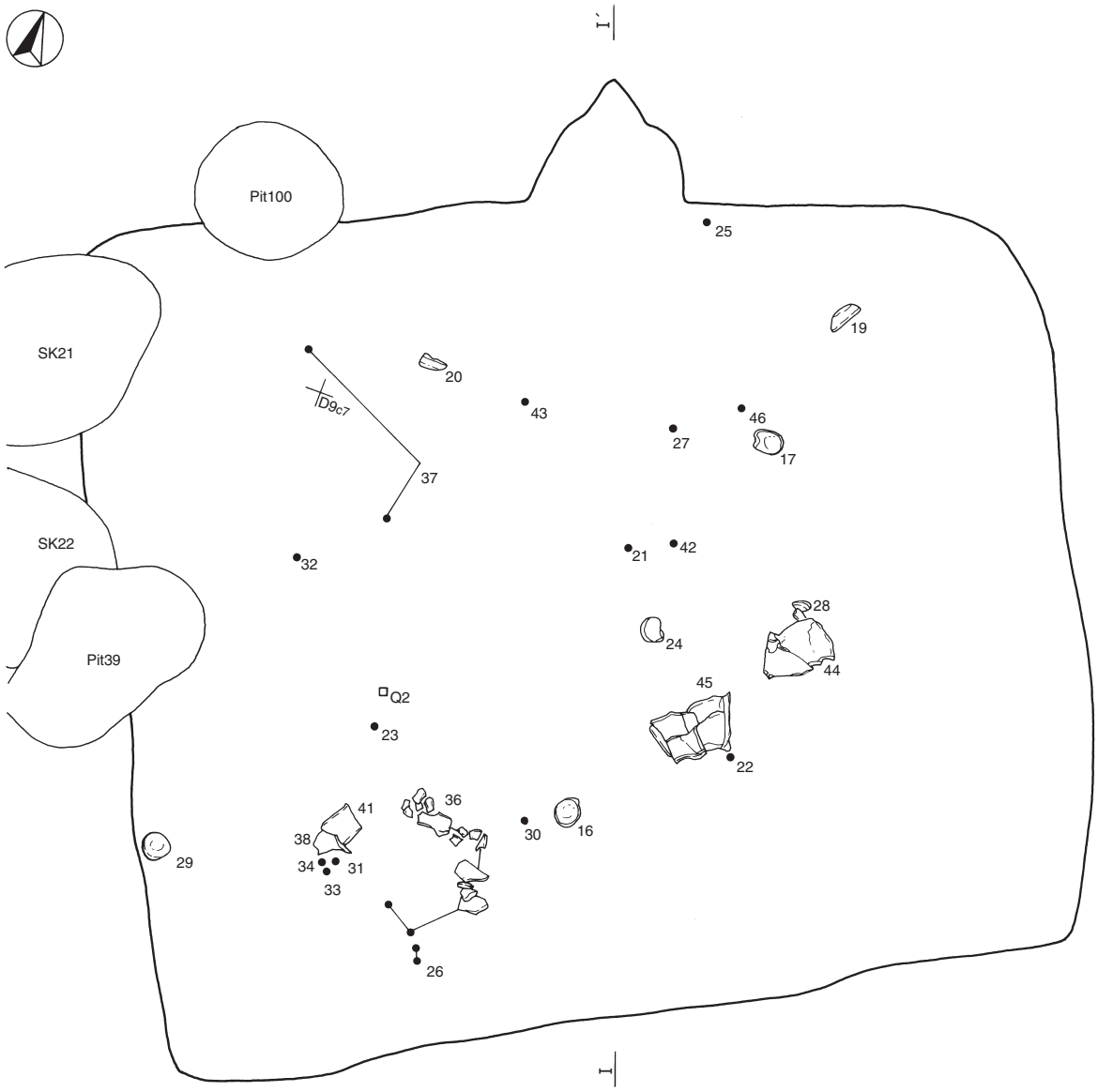
床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

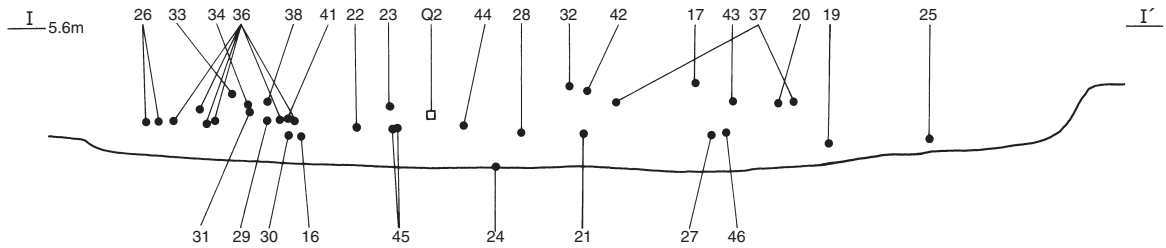
竈　北壁中央部に付設されている。遺存状態が良く天井部も残っており，甕が２個体掛かったままである。規模は，焚口部から煙道部まで105㎝，袖部幅は95㎝である。両袖部とも角柱状に整形された凝灰質泥岩を芯材としている。左袖部は地山をピット状に掘り込んで石材を差し込み，黒色砂と灰白色砂の混合砂で埋土している。右袖部は地山面に黒色砂と灰白色砂の混合砂を充填して，その上に石材を置いている。それらの芯材の上に，長方形に整形された凝灰質泥岩を架けて天井石としている。凝灰質泥岩の切石で焚口部を組み上げてから，ロームブロック・焼土化した粘土ブロック・凝灰質泥岩ブロック・砂岩の中礫を混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面を使用し，火床面は赤変しており，焼土層の厚さは３㎝ほどである。円柱状の支脚は，火床部の左寄りに円形に20㎝ほど掘り込まれた穴に差し込まれ，端部を埋められて据えられている。煙道部は壁外に60㎝掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　焼土ブロック少量，炭化粒子・粘土粒子微量
3　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4　灰黄褐色　砂多量，ロームブロック・焼土ブロック・砂岩中礫少量
5　黒　　色　灰白色砂多量
6　黒　　色　灰白色砂少量
7　赤褐色　焼土粒子多量，中礫少量



第14図　第13号住居跡実測図(1)





第15図　第13号住居跡実測図(2)

ピット　深さ10㎝で，性格は不明である。

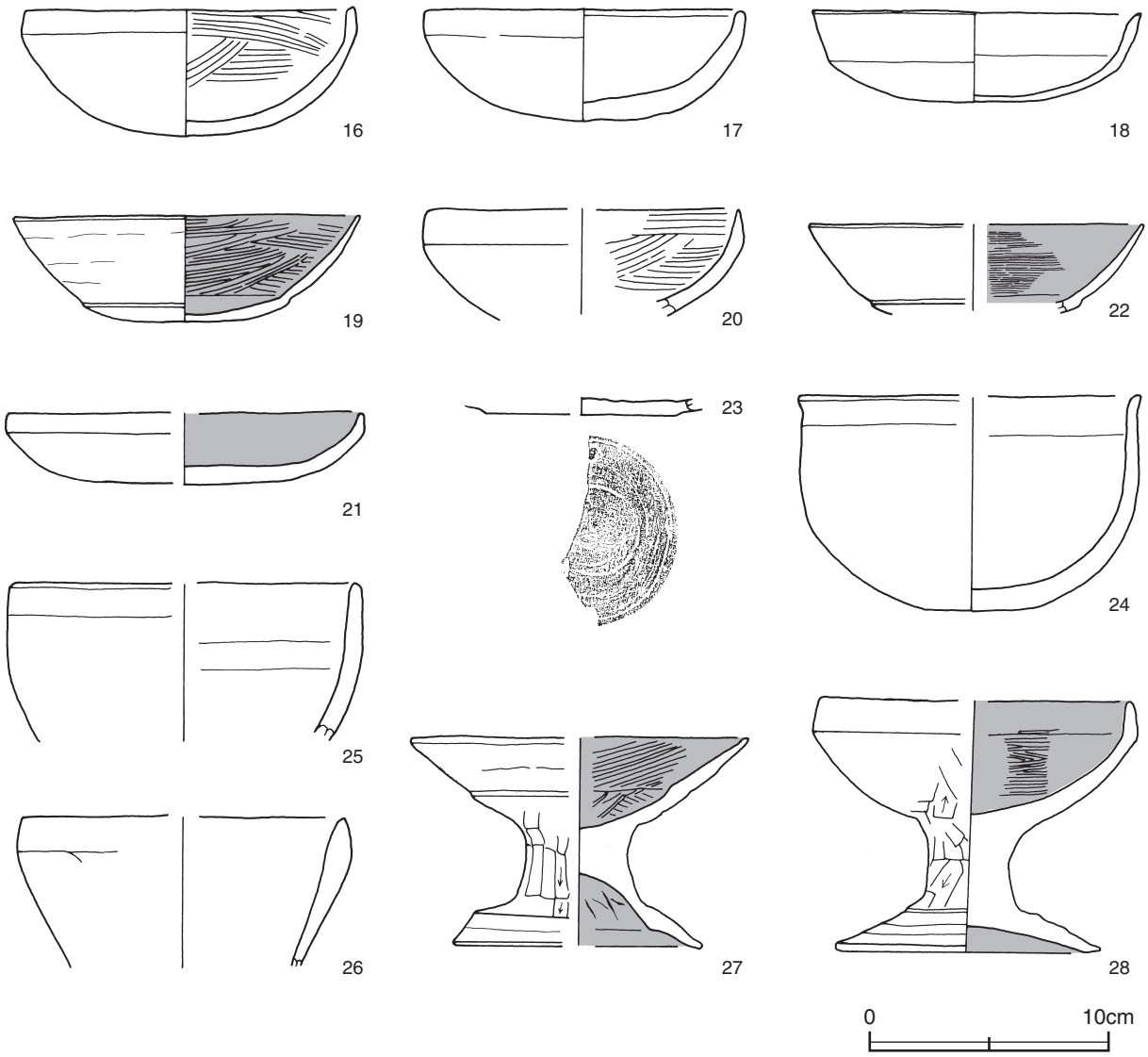
土層解説
1　黒　　色　炭化物・灰白色砂微量

覆土　4層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

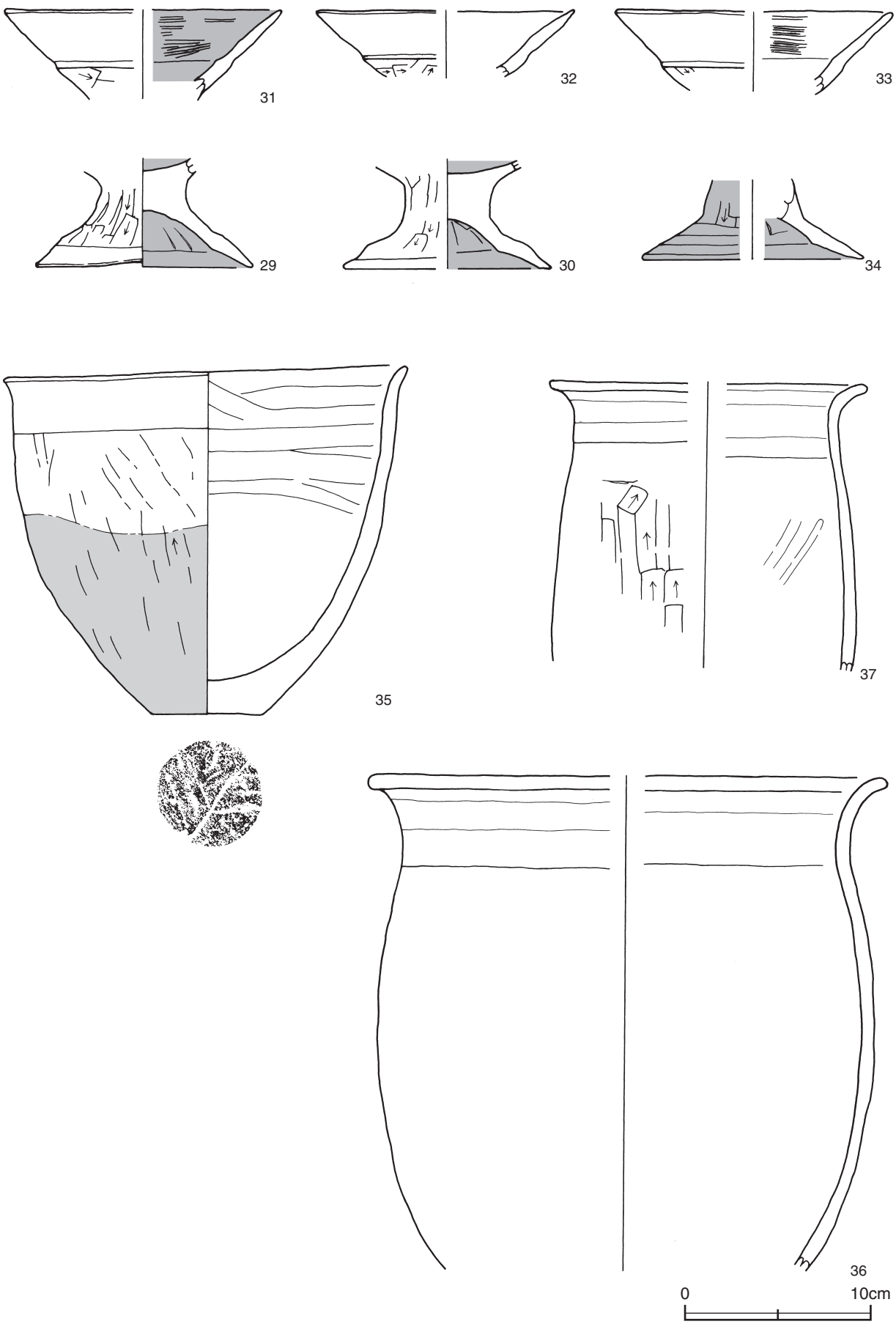
土層解説
1　黒　　色　炭化物・灰白色砂微量
2　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量
4　灰　白　色　黒色砂微量

遺物出土状況　土師器片412点（坏・高坏・椀89，甕・甑323），石器2点（磨石・支脚）が出土している。また，混入した須恵器片6点も出土している。破損品や大形の破片が，南西コーナー部から中央部にかけての覆土上層から中層を中心にまとまって出土している。特に南西コーナー部に大形の破損品が集中している。23については，混入と考えられる。35と40は竈に掛かったままであり，土圧による天井部の若干の崩落によって，どちらも内側に傾いている。40の底部は抜けており，Q15が内部に突き抜けている。また，40の内部の覆土中から骨片と思われる白色の破片が出土している。

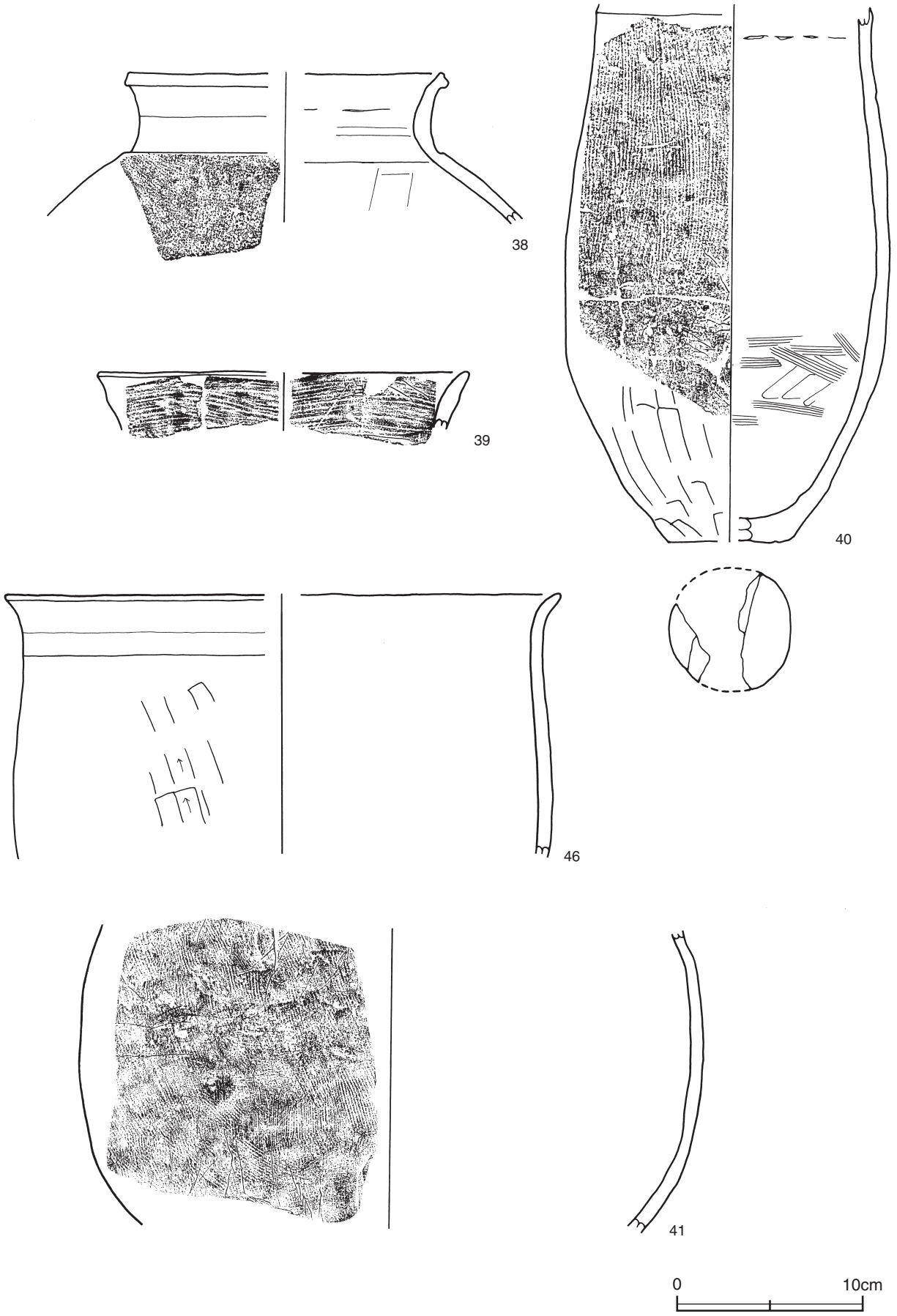
所見　時期は，出土土器から7世紀前半と考えられる。



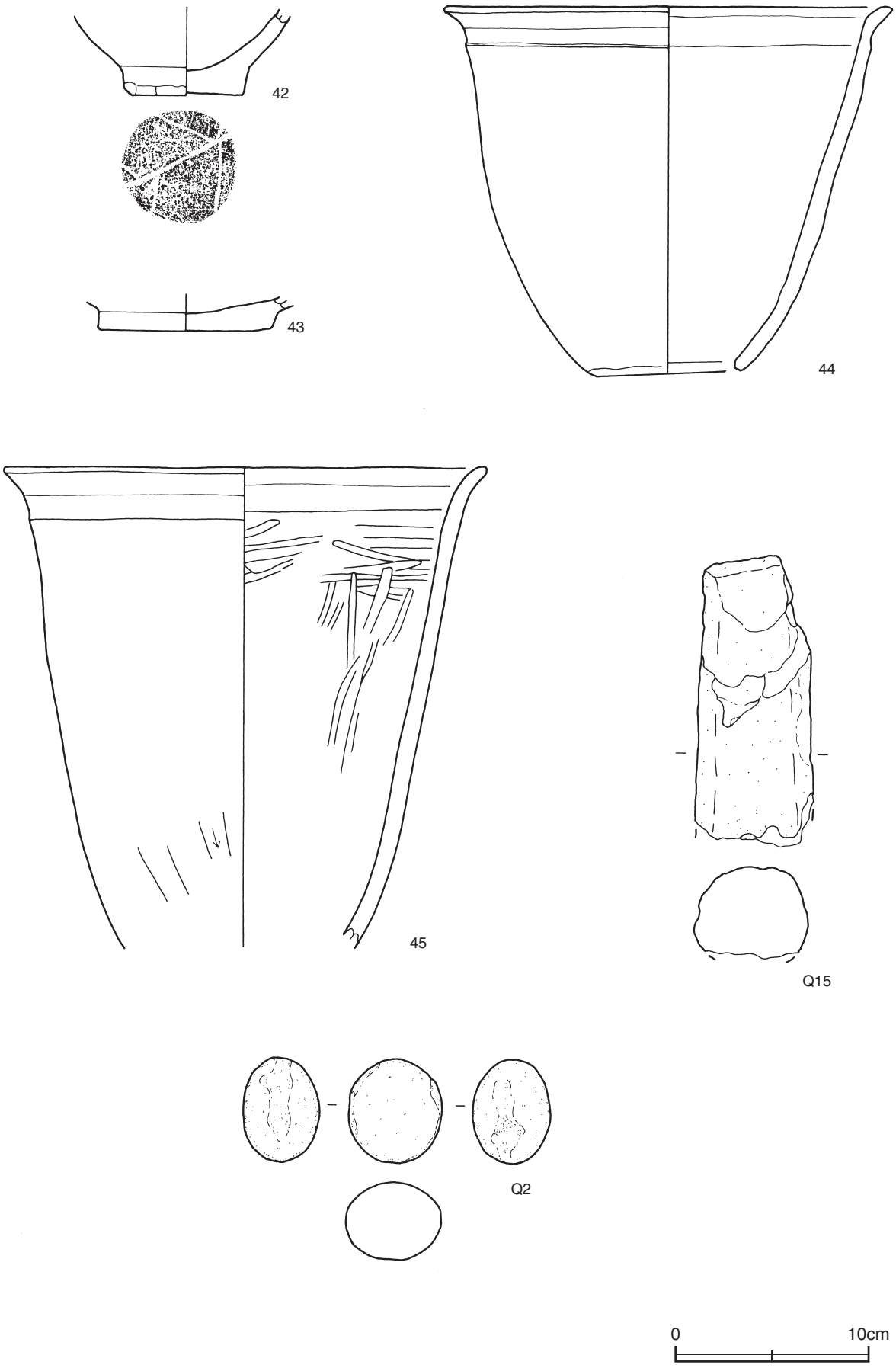
第16図　第13号住居跡出土遺物実測図(1)



第17図　第13号住居跡出土遺物実測図(2)



第18図　第13号住居跡出土遺物実測図(3)



第19図　第13号住居跡出土遺物実測図(4)

第13号住居跡出土遺物観察表（第16～19図）

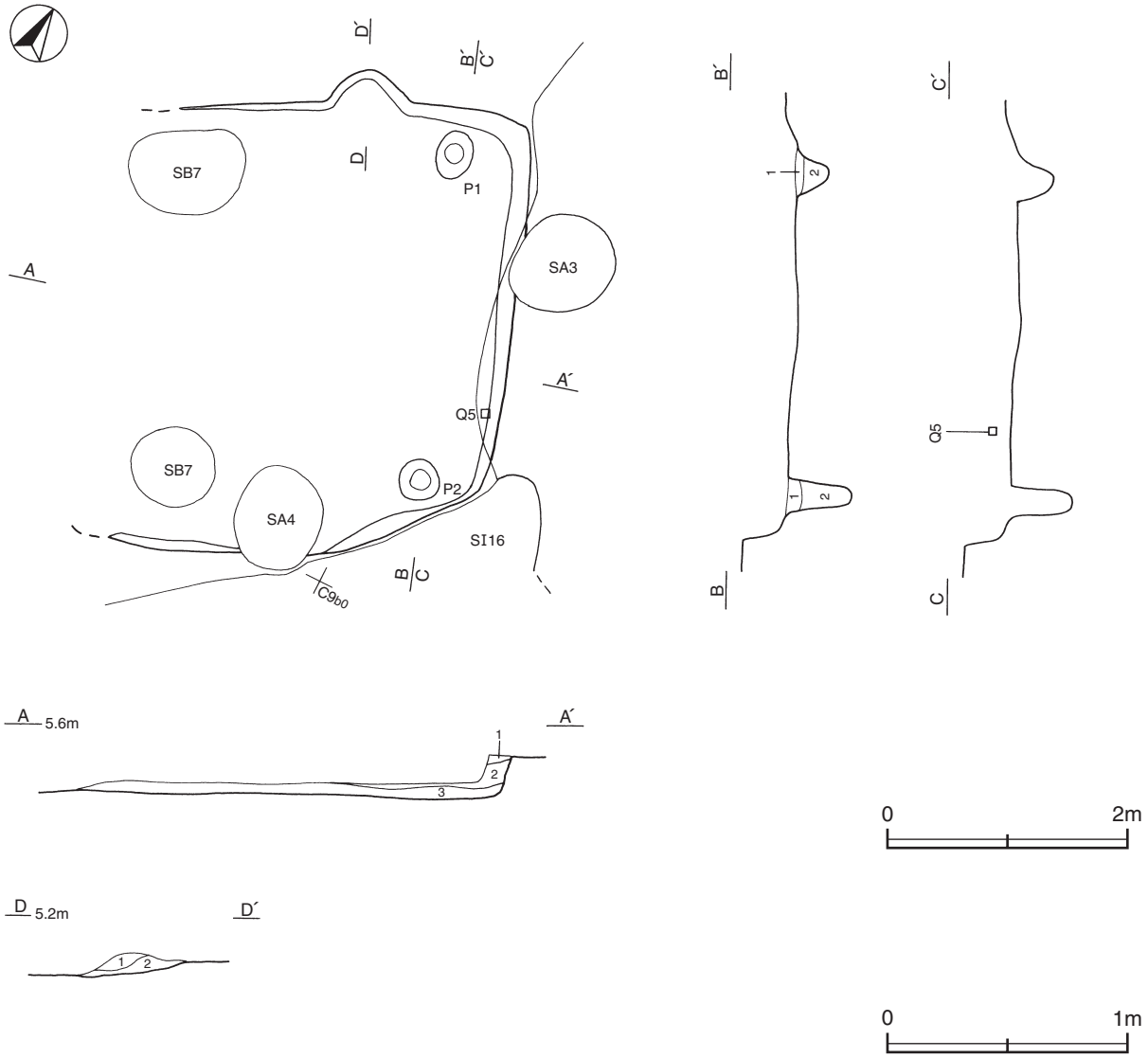
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
16	土師器	坏	13.8	5.5	－	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層	95% PL20
17	土師器	坏	13.2	4.6	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面剥落の為調整不明　底部木葉痕	覆土上層	80%
18	土師器	坏	13.8	3.7	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土上層	70% PL20
19	土師器	坏	14.5	4.4	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	60% PL20
20	土師器	坏	[13.0]	(4.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ナデ 内面ヘラ磨き	覆土上層	30%
21	土師器	坏	[14.6]	3.0	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面剥落の為調整不明	覆土中層	30%
22	土師器	坏	[13.8]	(3.7)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	灰褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土中層	20%
23	須恵器	坏	－	(0.7)	[8.0]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土上層 混入	20%
24	土師器	椀	[14.0]	9.0	4.0	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	床面	70% 二次火熱痕
25	土師器	椀	[14.4]	(6.6)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	覆土下層	20%
26	土師器	椀ヵ	[13.6]	(6.3)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	覆土中層	10% 二次火熱痕
27	土師器	高坏	[14.1]	8.8	[10.3]	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい黄橙	普通	坏部外面上半横ナデ　輪積み痕残存　下半ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ削り　内面ヘラ削り後ナデ　裾部内・外面横ナデ	覆土中層	70% PL20
28	土師器	高坏	[13.0]	10.5	11.0	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい褐	普通	坏部外面上半横ナデ　下半ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ削り　内面ナデ　裾部内・外面横ナデ	覆土中層	70%
29	土師器	高坏	－	(5.9)	11.7	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　裾部内・外面横ナデ	覆土中層	60%
30	土師器	高坏	－	(5.9)	[11.2]	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　裾部内･外面横ナデ	覆土中層	30%
31	土師器	高坏	[14.8]	(4.9)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部外面上半横ナデ　下半ヘラ削り　内面ヘラ磨き	覆土上層	20%
32	土師器	高坏	[13.8]	(3.6)	－	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい橙	普通	坏部外面上半横ナデ　下半ヘラ削り　内面ナデ	覆土上層	15%
33	土師器	高坏	[14.8]	(4.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部外面上半横ナデ　下半ヘラ削り　内面ヘラ磨き	覆土上層	15%
34	土師器	高坏	－	(4.3)	[11.8]	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	褐	普通	脚部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　裾部内･外面横ナデ	覆土上層	15%
35	土師器	甕	21.5	18.8	5.8	黒雲母･海綿骨針･白色粒子･透明粒子･赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ　底部木葉痕	竈掛け口	100%
36	土師器	甕	[27.0]	(26.7)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	覆土中層	20%
37	土師器	甕	[16.6]	(15.4)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ・ナデ	覆土上層	15%
38	土師器	甕	[16.8]	(8.1)	－	黒雲母･海綿骨針･白色粒子･透明粒子･赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ハケ目　内面ナデ	覆土上層	10%
39	土師器	甕	[19.8]	(3.2)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目	覆土上層	５％
40	土師器	甕	－	(29.0)	6.7	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	体部外面上半ハケ目　下半ヘラ削リ　内面ヘラナデ･ナデ　下半の一部にハケ目	竈掛け口	90% PL21
41	土師器	甕	－	(16.2)	－	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目　内面ヘラナデ・ナデ	覆土中層	10%
42	土師器	甕	－	(4.6)	5.8	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい褐	普通	底部木葉痕　底部周縁ナデ	覆土上層	10%
43	土師器	甕	－	(1.9)	9.0	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	赤褐	普通	底部一方向のヘラ削り	覆土上層	10%
44	土師器	甑	22.8	19.3	7.2	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	覆土中層	70%
45	土師器	甑	24.8	(25.0)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ・ヘラ磨き	覆土中層	80% PL21
46	土師器	甕	[29.6]	(14.1)	－	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面剥落の為調整不明	覆土中層	５％

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q２	磨石	5.4	4.9	4.0	148.0	黒雲母花崗岩	側縁に使用痕	覆土中層	PL22
Q15	支脚	(15.0)	6.2	(4.8)	(573.0)	凝灰岩	円柱状に整形　内部まで赤変	竈火床部	

第15号住居跡（第20・21図）

位置　Ｃ９a9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第16号住居，第７号掘立柱建物，第３・４号柵に掘り込まれている。



第20図　第15号住居跡実測図

規模と形状　西側部分が調査区域外に延びており，東西軸3.1mのみ，南北軸3.8mが確認されている。平面形は方形または長方形と推測され,主軸方向はN－20°－Wである。壁高は35～40㎝で,外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁に付設されている。遺存状態が悪く，煙道部と火床部のみが確認されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に30㎝掘り込まれ，立ち上がりは不明瞭である。

竈土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・黄色砂少量　　2　黒　　色　焼土粒子多量

ピット　２か所。Ｐ１・Ｐ２は深さ28～55㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。

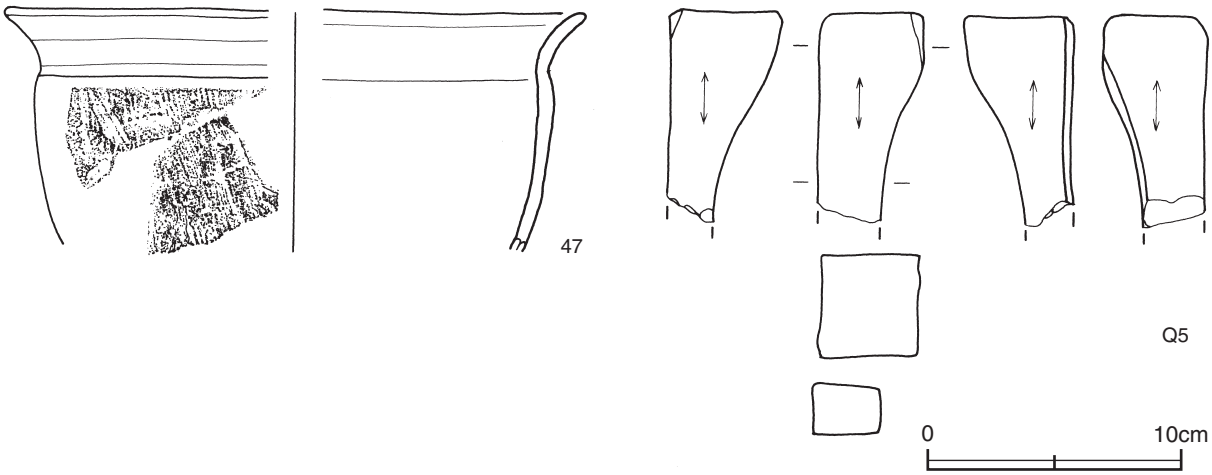
土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂少量，黄色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂少量

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片136点（坏・高坏10，甕・甑126），石器１点（砥石）が出土している。また，混入した陶器片１点も出土している。覆土中層から下層を中心に細片が多く出土している。47は北東・北西部の覆土下層に散在している破片が接合したものである。Ｑ５は東壁際の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から古墳時代後期後半と考えられる。



第21図　第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
47	土師器	甕	[23.0]	(9.4)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ハケ目　内面ナデ	覆土下層	５％

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ５	砥石	(8.4)	4.2	4.4	(184.4)	珪質片石	４面に使用痕	覆土下層	PL22

第20号住居跡（第22図）

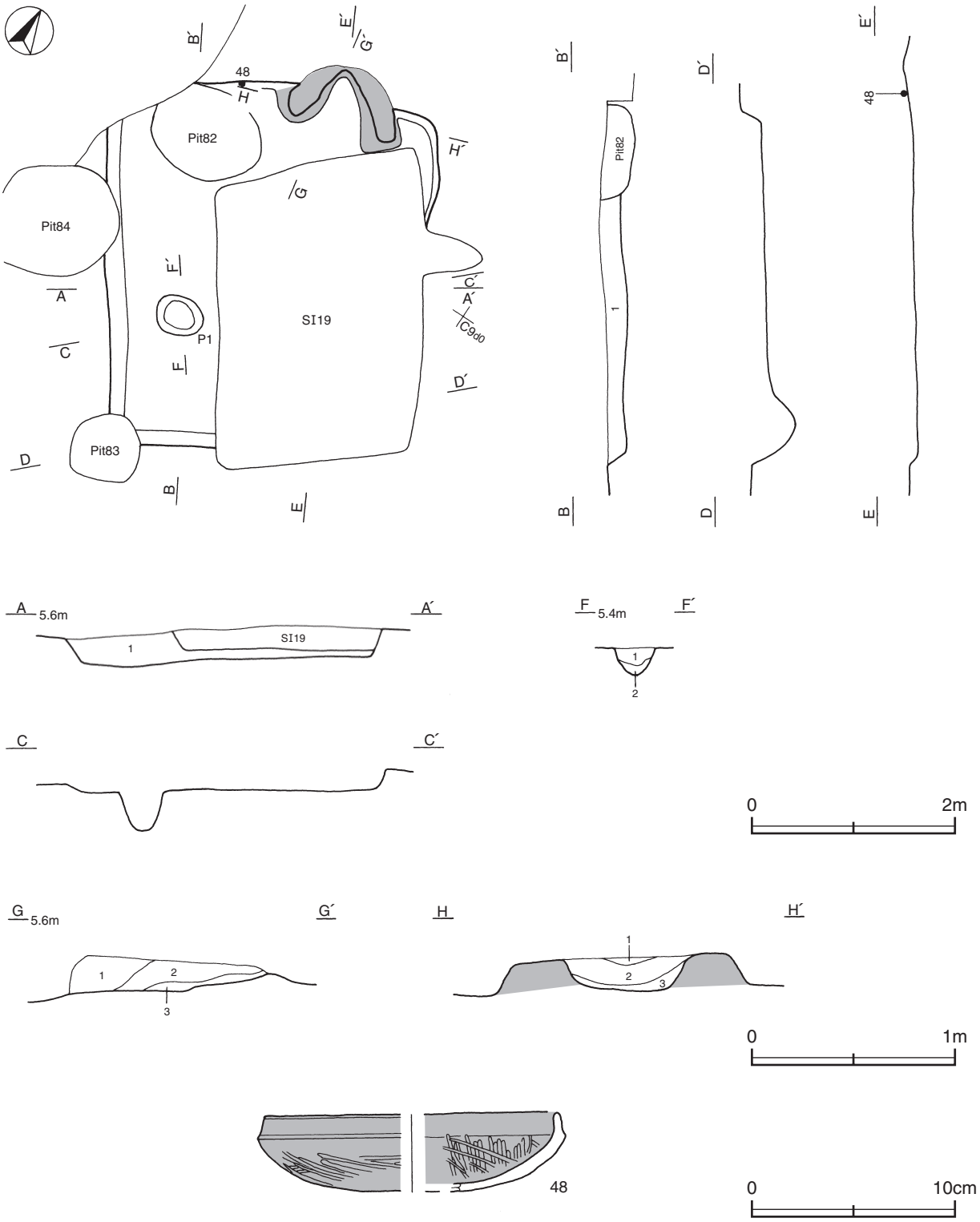
位置　Ｃ９d9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第19号住居，第82・83・84号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.6m，短軸3.3mの方形で，主軸方向はＮ－28°－Ｗである。壁高は10～20㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁東寄りに付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで80㎝，袖部幅120㎝である。袖部は床面と同じ高さの地山面を基部とし，ロームブロックと凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に29㎝掘り込まれ，立ち上がりは不明瞭である。



第22図　第20号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1　黒　　色　焼土ブロック・炭化物微量
2　黒　　色　焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量
3　黒　　色　焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット　深さ27㎝で，性格は不明である。

土層解説

1　黒　　色　炭化物・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量

覆土　単一層である。均一な砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量，焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片41点（坏・高坏４，甕・甑37），また，混入した須恵器片１点も出土している。覆土中を中心に破片がまばらに出土している。48は竈左脇の床面から出土している。

所見　時期は，床面出土の土器から７世紀前半と考えられる。

第20号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
48	土師器	坏	[14.2]	3.8	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部～底部外面ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	床面	10%

第21号住居跡（第23・24図）

位置　Ｃ９d9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第20・22号住居，第37号土坑，第83・84号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　西側部分が削平されていることや重複のため，わずかにしか遺存しておらず，規模・形状・主軸方向は不明である。遺存する壁高は11㎝で，立ち上がりは不明瞭である。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

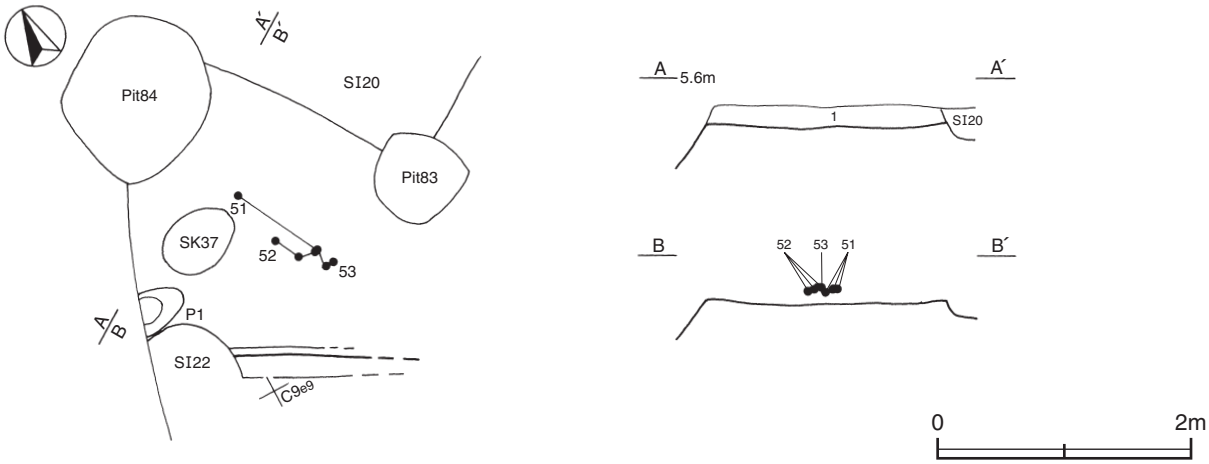
ピット　深さ10㎝で，性格は不明である。

覆土　単一層である。部分的に残っているだけであり，堆積状況は不明である。

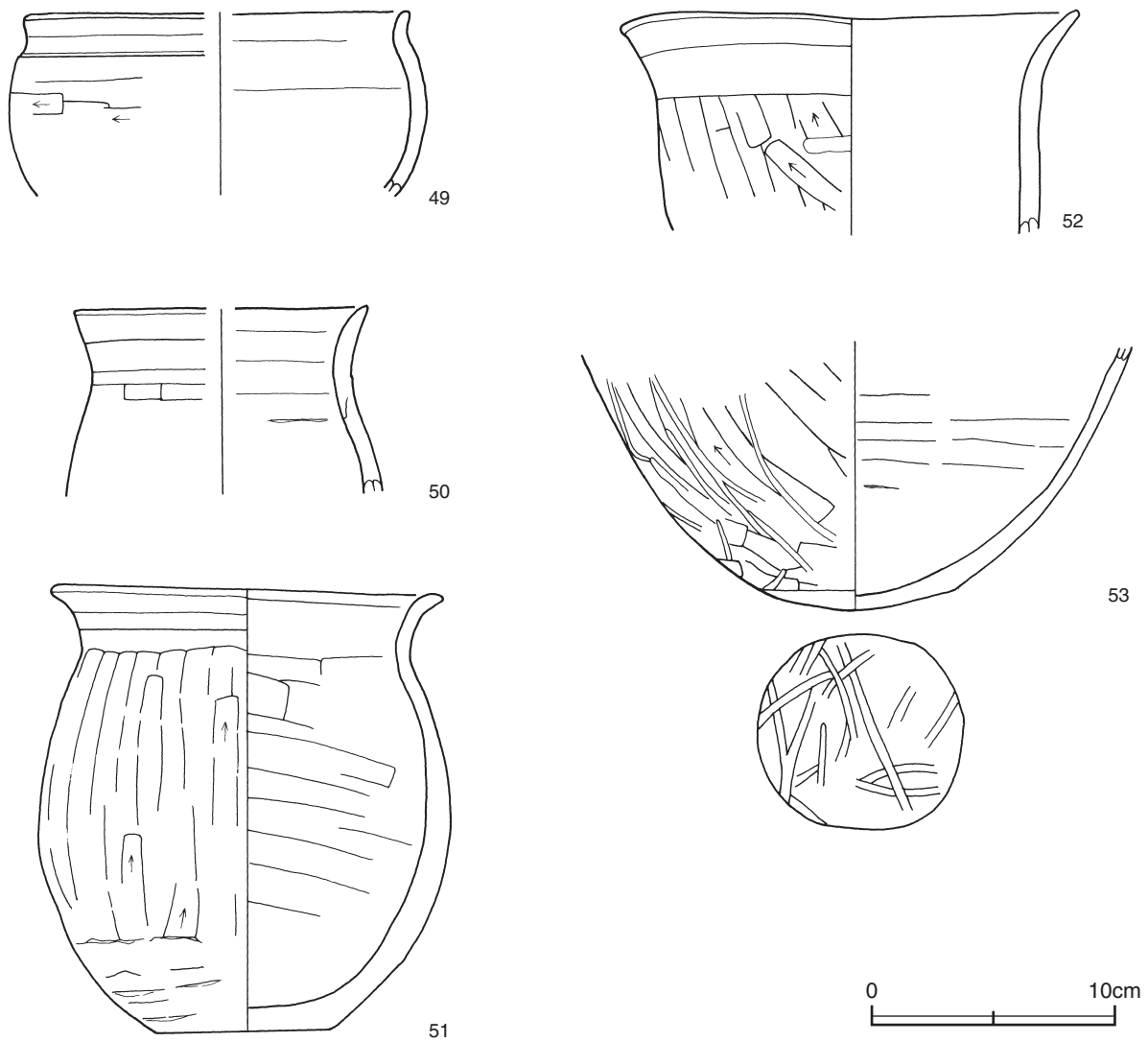
土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片30点（坏・高坏２，椀２，甕・甑26），または，流れ込んだ弥生土器片１点も出土している。破片が覆土中からまばらに出土している。51～53は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器と重複関係から６世紀後半と考えられる。



第23図　第21号住居跡実測図



第24図　第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
49	土師器	椀	[15.8]	(7.5)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	覆土中	5％
50	土師器	甕	[12.0]	(7.6)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ナデ　内面ナデ 輪積み痕残存	覆土下層	10%
51	土師器	甕	15.5	18.5	7.2	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面上半ヘラ削り 下半ナデ　内面ヘラナデ・ナデ	覆土下層	50%
52	土師器	甕	18.5	(9.2)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り一部ヘラナデ 内面剥落のため調整不明	覆土下層	40%
53	土師器	甕	－	(10.8)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ 底部外面ヘラ削り後ヘラ磨き	覆土下層	30%

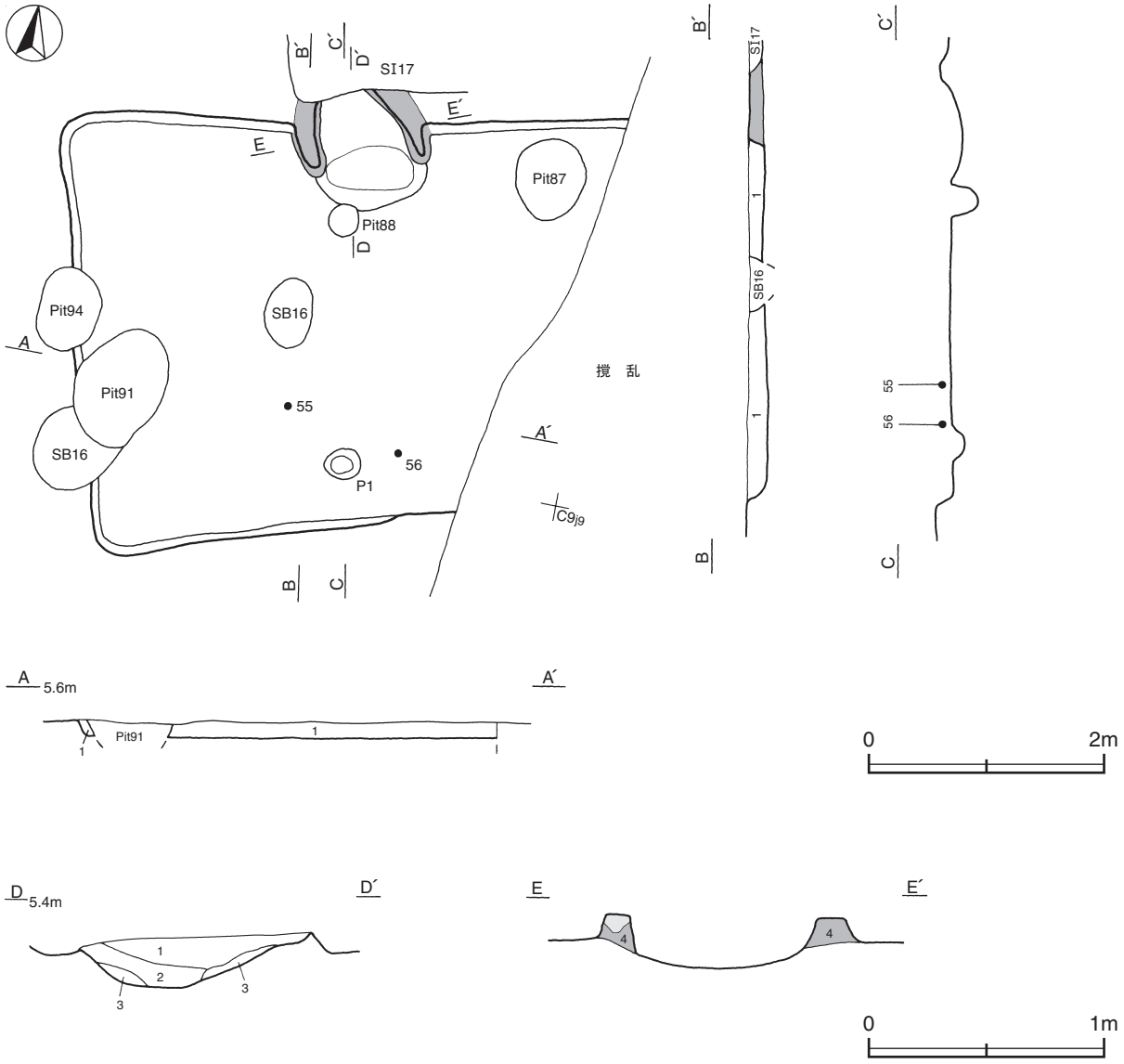
第23号住居跡（第25・26図）

位置　Ｃ９i8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第17号住居，第16号掘立柱建物，第87・88・91・94号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　東側部分が撹乱を受けており，東西軸4.5mのみ，南北軸3.7mが確認されている。平面形は長方形と推測され，主軸方向はＮ－14°－Ｗである。壁高は11～15cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。



第25図　第23号住居跡実測図

竈　北壁に付設されている。遺存状態が悪く，袖部と火床部のみが確認されている。袖部幅105㎝で，床面と同じ高さの砂層を基部として，ロームブロックと凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。左袖部は，凝灰岩を芯材としている。火床部は床面から10㎝ほど円形に掘りくぼめられており，火熱により弱く赤変している。

竈土層解説
1　黒　　色　粘土ブロック・凝灰岩ブロック中量，炭化粒子少量，灰白色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子微量
3　黒　　色　灰白色砂多量，焼土ブロック少量
4　灰 黄 褐 色　砂多量，ロームブロック・凝灰岩ブロック中量

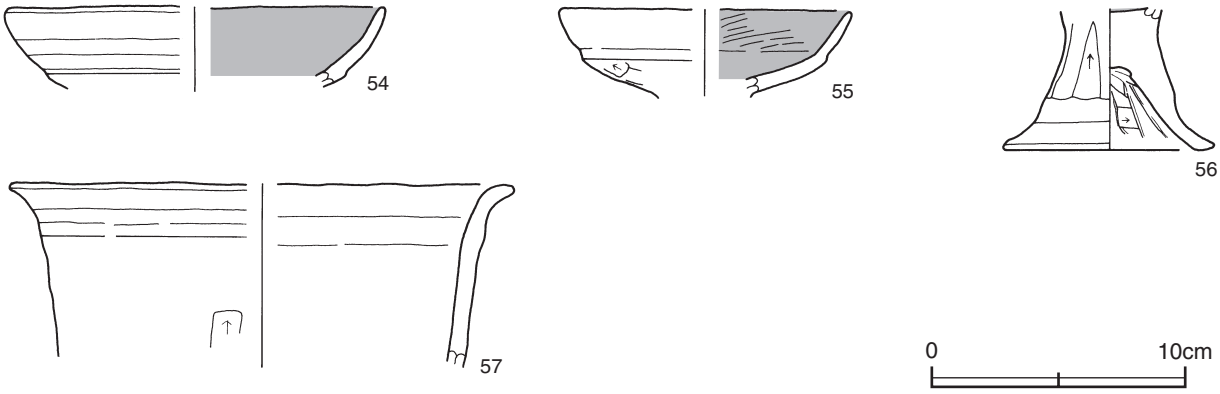
ピット　深さ10㎝で，南壁寄りにあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　単一層である。層厚が薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片130点（坏・高坏19，甕・甑111）が出土している。また，混入した須恵器片７点も出土している。破片がまばらに覆土中から出土している。54は竈覆土中，55は中央部，56は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から７世紀前半と考えられる。



第26図　第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
54	土師器	坏	[14.8]	(3.1)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	体部上半内・外面横ナデ　内面ヘラ磨きヵ	竈覆土中	10%
55	土師器	高坏	[11.4]	(3.5)	－	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面下半ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	10%
56	土師器	高坏	－	(5.6)	8.4	白色粒子・透明粒子	橙	普通	脚部外面ヘラ削り　内面ヘラ削り後ナデ	覆土下層	40%
57	土師器	甕	[20.0]	(7.2)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	覆土下層	10%

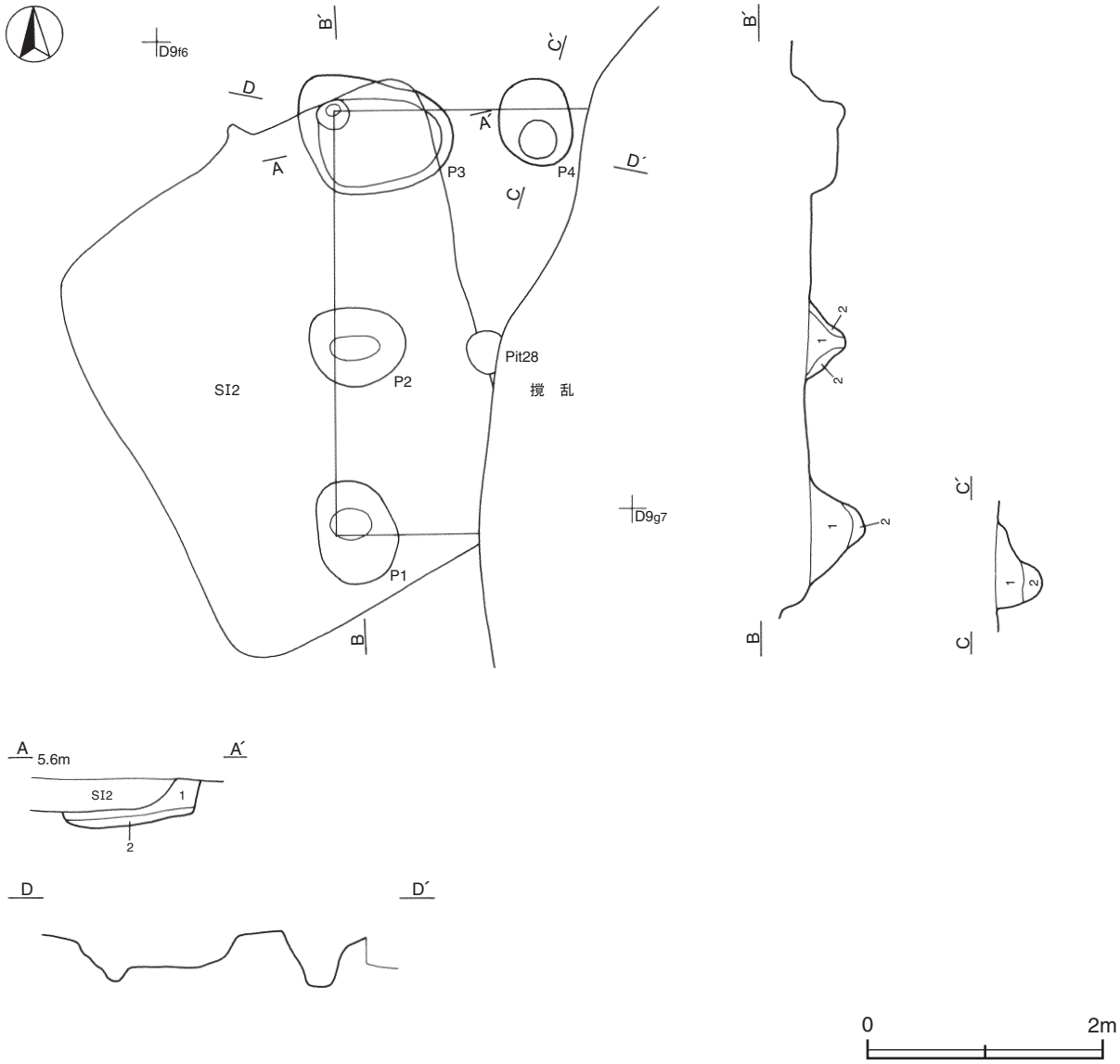
表２　古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長(東西)軸× 短(南北)軸	壁高 (cm)	床面	壁溝	内　部　施　設				覆土	主な出土遺物	時期	備　考 新旧関係(旧→新)
								主柱穴	出入口ピット	ピット	竈				
2	D６f6	N－26°－W	長方形	3.9×3.5	15～20	平坦	－	4	－	－	北	自然	土師器　須恵器　陶器 (軟質土器)　石製支脚	７世紀 後半	SB6→本跡→SB4, Pit27・28
4	D９e4	N－７°－E	[長方形]	(3.9)×(4.1)	４～６	平坦	－	4	－	1	北	不明	土師器	後期後半	本跡→SB8・17→ SI6→SI5
8	D９i5	N－10°－W	[方形]	(3.3)×3.6	23～32	平坦	－	－	－	－	北	自然	土師器　敲石　不明 鉄製品	７世紀 後半	本跡→SB1，SK1･5･ 35，Pit1・77・78
10	D９e5	不明	[方 形・ 長方形]	(3.5)×(1.6)	４～７	平坦	－	－	－	－	－	不明	－	後期後半	本跡→SD6，SK23→ SB8→SI7
11	B９j9	[N－25°－W]	[方 形・ 長方形]	(3.0)×(2.9)	９～15	平坦	－	1	1	－	－	自然	土師器	７世紀 前半	本跡→Pit10
13	D９c7	N－20°－W	長方形	4.1×3.5	16～28	平坦	－	－	－	1	北	自然	土師器　磨石　石製 支脚	７世紀 前半	本跡→SK21・22, Pit39・100
15	C９a9	N－20°－W	[方 形・ 長方形]	(3.1)×3.8	35～40	平坦	－	2	－	－	北	自然	土師器　砥石	後期後半	本跡→SI16→SB7, SA3・4
20	C９d9	N－28°－W	方形	3.6×3.3	10～20	平坦	－	－	－	1	北	自然	土師器	７世紀 前半	本跡→SI19, Pit82～84
21	C９d9	不明	不明	不明	11	平坦	－	－	－	1	－	不明	土師器	６世紀 後半	本跡→SI20・22, SK37，Pit83・84
23	C９i8	N－14°－W	[長方形]	(4.5)×3.7	11～15	平坦	－	－	1	－	北	不明	土師器	７世紀 前半	本跡→SI17，SB16, Pit87・88・91・94

（2）掘立柱建物跡

第６号掘立柱建物跡（第27図）

位置　Ｄ９f6区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第27図　第６号掘立柱建物跡実測図

重複関係　第２号住居に掘り込まれている。

規模と構造　東側が撹乱を受けているため，南北２間，東西１間が確認されただけである。桁行２×梁行１の南北棟と違い，柱間寸法が揃っていることから，桁行方向Ｎ－90°の側柱建物跡で東西棟と推測される。確認された規模は桁行が1.8m（６尺），梁行が3.6m（12尺）で，柱間寸法はともに1.8m（６尺）である。

柱穴　４か所。平面形は楕円形を呈しており，深さ32～46㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片65点（坏・椀13，甕・甑52）が出土している。いずれも細片のため，図示することができない。

所見　時期は，第２号住居跡との重複関係から７世紀前半と考えられる。

(3) 方形竪穴遺構

第１号方形竪穴遺構（SX3）（第28図）

位置　Ｃ９j7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第２号方形竪穴遺構を掘り込み，第14・25号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.5m，短軸1.9mのやや不整な隅丸長方形で，主軸方向はＮ－12°－Ｗである。壁高は50～55cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用しており，全面にわずかに焼土粒子・炭化粒子が広がっている。

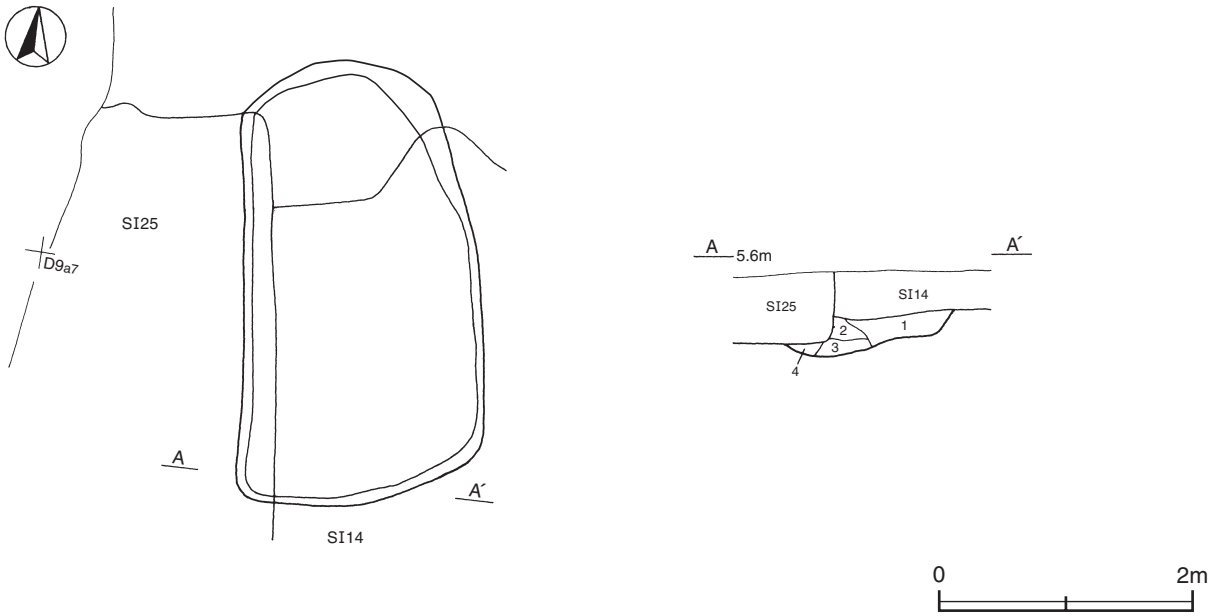
覆土　４層に分層される。焼土ブロック・凝灰岩ブロックを含んでおり，灰白色砂が不規則に混じった堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒	色	灰白色砂多量，凝灰岩ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	3	黒	色	焼土ブロック・凝灰岩ブロック中量，炭化粒子少量，灰白色砂微量
2	黒	色	灰白色砂少量，焼土ブロック・凝灰岩ブロック微量	4	黒	色	灰白色砂多量，凝灰岩ブロック微量

遺物出土状況　土師器片20点（甕・甑）が出土している。細片のみが覆土中から出土しているため，図示することができない。

所見　第２号方形竪穴遺構と覆土の様相及び堆積状況が同じである。時期は，重複関係から７世紀前半以前と考えられるが，時期差はそれほどないものと推測され，７世紀前半の範疇に入るものと考えられる。

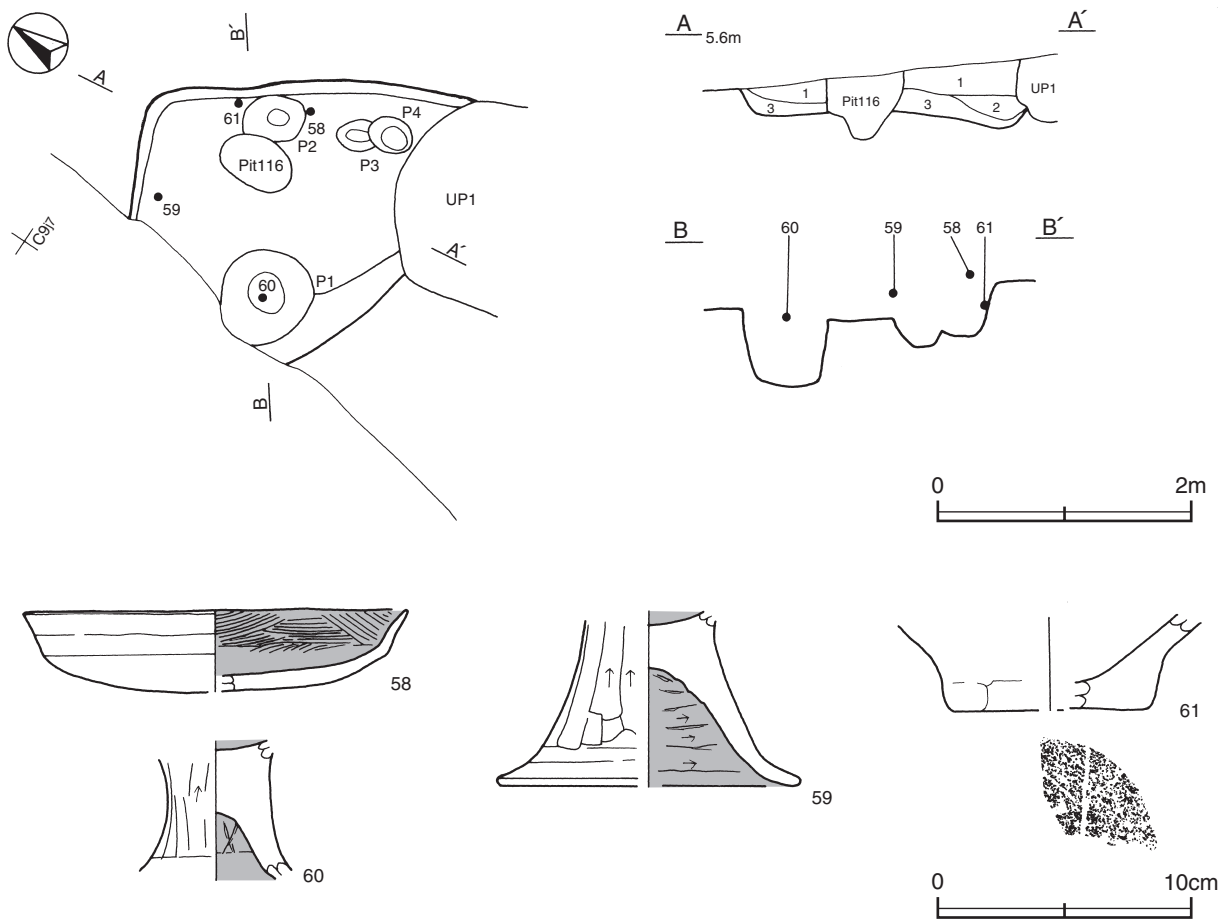


第28図　第１号方形竪穴遺構実測図

第２号方形竪穴遺構（SX4）（第29図）

位置　Ｃ９j7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号方形竪穴遺構，第116号ピットに掘り込まれている。



第29図　第２号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

規模と形状　西側部分が削平されていることや重複のため，わずかにしか遺存しておらず，長軸2.5mのみ，短軸1.7mのみが確認されており，平面形は不整形と推測される。主軸方向はN－33°－Wで，壁高は20～50㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用しており，全面にわずかに焼土粒子・炭化粒子が広がっている。

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ15～60㎝で，性格は不明である。

覆土　３層に分層される。焼土ブロック・凝灰岩ブロックを含んでおり，灰白色砂が不規則に混じった堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　　色　焼土ブロック・粘土ブロック・凝灰岩ブロック多量，炭化物微量

2　黒　　色　焼土ブロック多量，凝灰岩ブロック・炭化物少量

3　黒　　色　焼土ブロック・粘土ブロック・灰白色砂中量，凝灰岩ブロック少量

遺物出土状況　土師器片82点（坏・高坏18，甕・甑64）が覆土中からまばらに出土している。また，混入した須恵器片４点も出土している。58・59・61は北東コーナー部際の覆土上層から覆土中層にかけて出土している。60はＰ１の覆土上層から出土している。

所見　時期は，埋め戻す際に廃棄されたと考えられる出土土器から７世紀前半と考えられる。

第２号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
58	土師器	坏	15.0	3.2	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部～底部外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き	覆土上層	60%
59	土師器	高坏	－	(6.9)	[11.8]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	坏部内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ削り　内面ヘラ削り 裾部内・外面横ナデ	覆土上層	30%
60	土師器	高坏	－	(5.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	橙	普通	坏部内面ヘラ磨きヵ　脚部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ削り後ナデ	Ｐ１ 覆土上層	20%
61	土師器	甕	－	(3.7)	[7.8]	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	橙	普通	底部周縁ナデ　底部木葉痕	覆土中層	10%

表３　古墳時代方形竪穴遺構一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模（m） （長軸×短軸）	壁高 （cm）	壁面	底 面	覆土	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係 （旧→新）
1	Ｃ９j7	Ｎ－12°－Ｗ	不整隅丸 長方形	3.5×1.9	50～55	直立	平坦 焼土粒子・炭化粒子散布	人為	土師器	７世紀前半	UP2→本跡→SI14 →SI25
2	Ｃ９j7	Ｎ－33°－Ｗ	不整形	(2.5)×(1.7)	20～50	外傾	平坦 焼土粒子・炭化粒子散布	人為	土師器	７世紀前半	本跡→UP1, Pit116

（4）道路跡

第１号道路跡（付図・第30～34図）

調査区域の両端が撹乱を受けているため最大長22mで，直線に延びており走行方向はＮ－50°－Ｅである。遺構確認時に幅が異なる溝が並行していることを確認し，両側に側溝を有する道路跡と考え調査を進めたが，その後の調査の進展により北側の溝状の掘削は，道路幅を拡幅した際の痕跡であることが判明した。以下，拡幅前を第１期路面，拡幅後を第２期路面と仮称し，路面の南側に並行する溝を南側側溝，位置を推測される北側の側溝を，北側側溝として記述する。なお，現在の土地改良のため削平を受けており，確認された側溝の深さ及び覆土・路面構築土などの厚さは遺存したものであり，本来の姿でないことを強調しておく。

位置　Ａ10j4～Ｂ９g9区，標高5.0mほどの砂丘上にあり，Ａ10f3～Ｂ10b1区に広がる第１号泥炭層のそばに位置している。

重複関係　第16号土坑を掘り込み，第10号掘立柱建物，第11号溝，第２号ピット群に掘り込まれている。

㈠　第１期道路跡

側溝の規模　南側側溝は，上幅55～100cm，下幅20～50cm，深さ10～22cmで，断面形は浅いＵ字状及び逆台形状を呈しており，場所により断面形状がやや異なる。削平のため掘り込みがほとんど残っていないＢ10f1区付近では途切れているが，本来は繋がって延びていたものと推測される。北側側溝は拡幅時に壊されており，土層断面図Ａ－Ａ′にわずかな痕跡を留めているのみで幅は不明である。

路面の規模　南側側溝と，土層断面図Ａ－Ａ′に残る痕跡から推測される北側側溝の芯々距離は7.6mで，側溝と側溝の内側の距離は6.9mと推定される。

㈡　第２期道路跡

側溝の規模　南側側溝は，第１期路面と共有しており，北側側溝は撹乱のため壊されており不明である。

路面の規模　南側側溝と，連続しているピットのすぐ外側に北側側溝を推測すると，側溝の芯々距離は９m，側溝と側溝の内側の距離は8.2mと推定される。

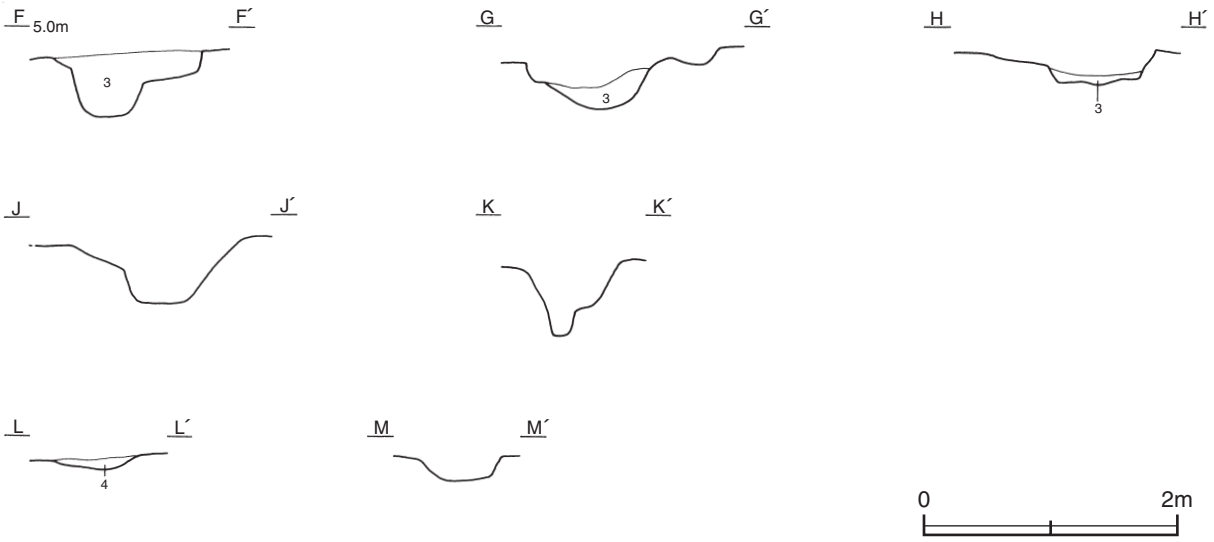
㈼　第１・２期道路跡の構築状況

路面の構築土　第１期の路面は，地山の灰白色砂を部分的に残しつつ掘削し，粘土を含んでいる灰色砂を10～30㎝の厚さで突き固めながら構築している。第２期の路面は，第１期の路面の北側を凹凸に掘り返しながら広げて，拡幅部に粘土を含んでいる黒色砂と黄褐色砂を20㎝の厚さで突き固めながら構築している。また，拡幅部の底面からは，路面と軸方向を同じくして連続して並んでいる，大きさ４～10㎝ほど，深さ16～60㎝のピットが10基確認されている。これらは拡幅に伴う路面構築の際に掘り込まれたピットと考えられる。

側溝　南側側溝は，土坑状の掘り込みが連結したものではなく，溝状に直線的に構築されている。堆積状況は，路面構築土のように突き固められたようなものではなく，自然な状態の砂が均一に堆積していることから自然堆積と考えられる。北側側溝は第１・２期路面ともに確認されていないが，南側側溝と同じ幅・形状と推測される。

土層解説（付図参照）

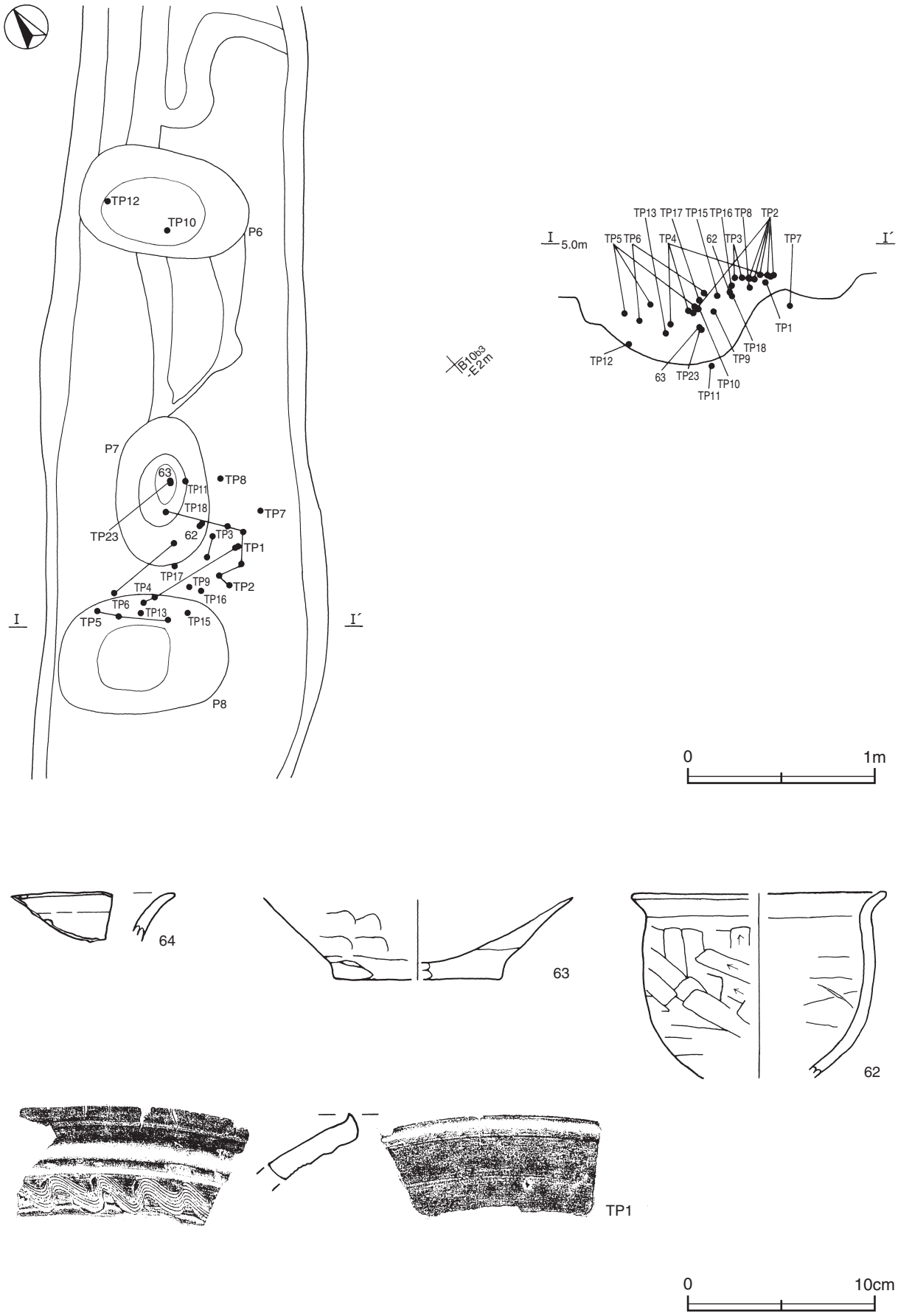
1　灰　　色　粘土ブロック多量，灰白色砂中量(路面構築土)
2　黒　　色　粘土ブロック多量，灰白色砂少量(路面構築土)
3　黄　褐　色　粘土ブロック多量，灰白色砂中量(路面構築土)
4　黒　　色　灰白色砂少量(南側側溝覆土)
5　灰　白　色　黒色砂微量(地山)



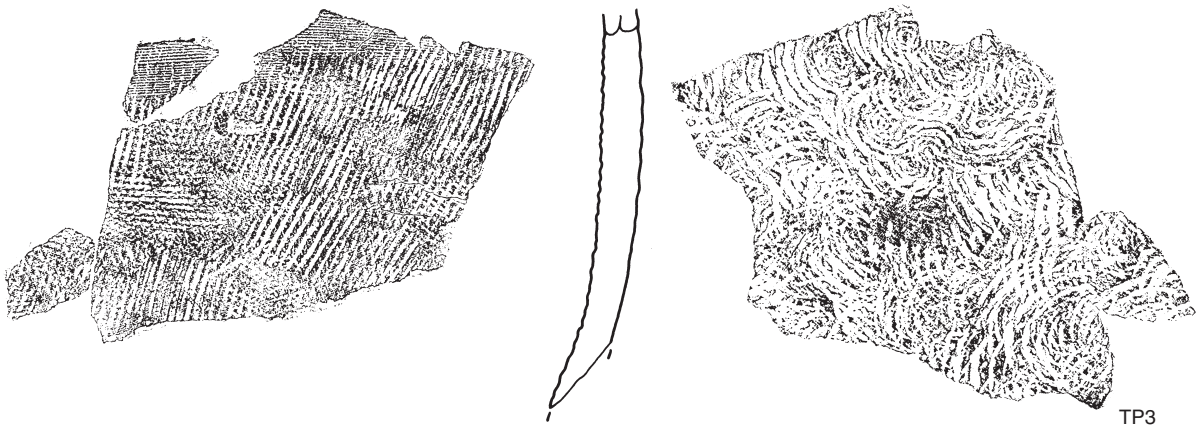
第30図　第１号道路跡実測図

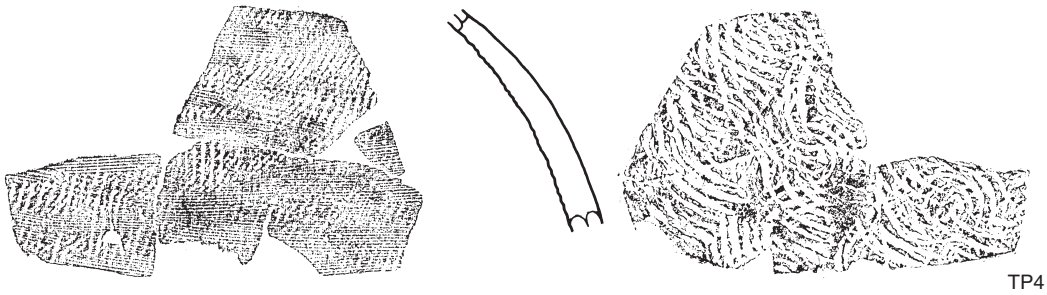
遺物出土状況　土師器片589点，須恵器片64点が路面拡幅部の構築土中から出土している。南側側溝の覆土中からは土師器片76点，須恵器片２点が出土している。土師器片のほとんどと須恵器片の一部は，器種分別も不可能なほど摩滅している。これらは側溝の埋没時の流れ込みや，拡幅時の埋土中の混入と考えられる。その中で特徴的な出土状況を呈しているのは，須恵器の大甕片である。磨滅していない大きな破片が，北側拡幅部のＰ７・Ｐ８を中心とした80㎝ほどの範囲の構築土中に集中しており，ピットの内・外から出土した破片の接合も見られる。

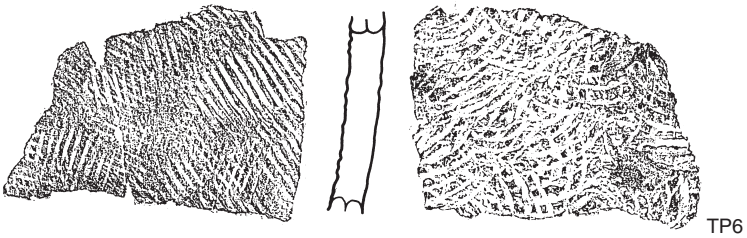
所見　まとまって出土した須恵器大甕片は，大きな破片の他に器面から剥がれた薄片も出土しており，割れ方や出土状況から，偶然的に混じり込んだものではなく，拡幅時における土木事業の際に故意に埋土に入れたと考えられる。本跡は，７世紀後半には構築されていた側溝を有する直線的な官道と考えられる。

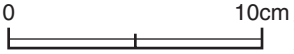


第31図　第１号道路跡・出土遺物実測図

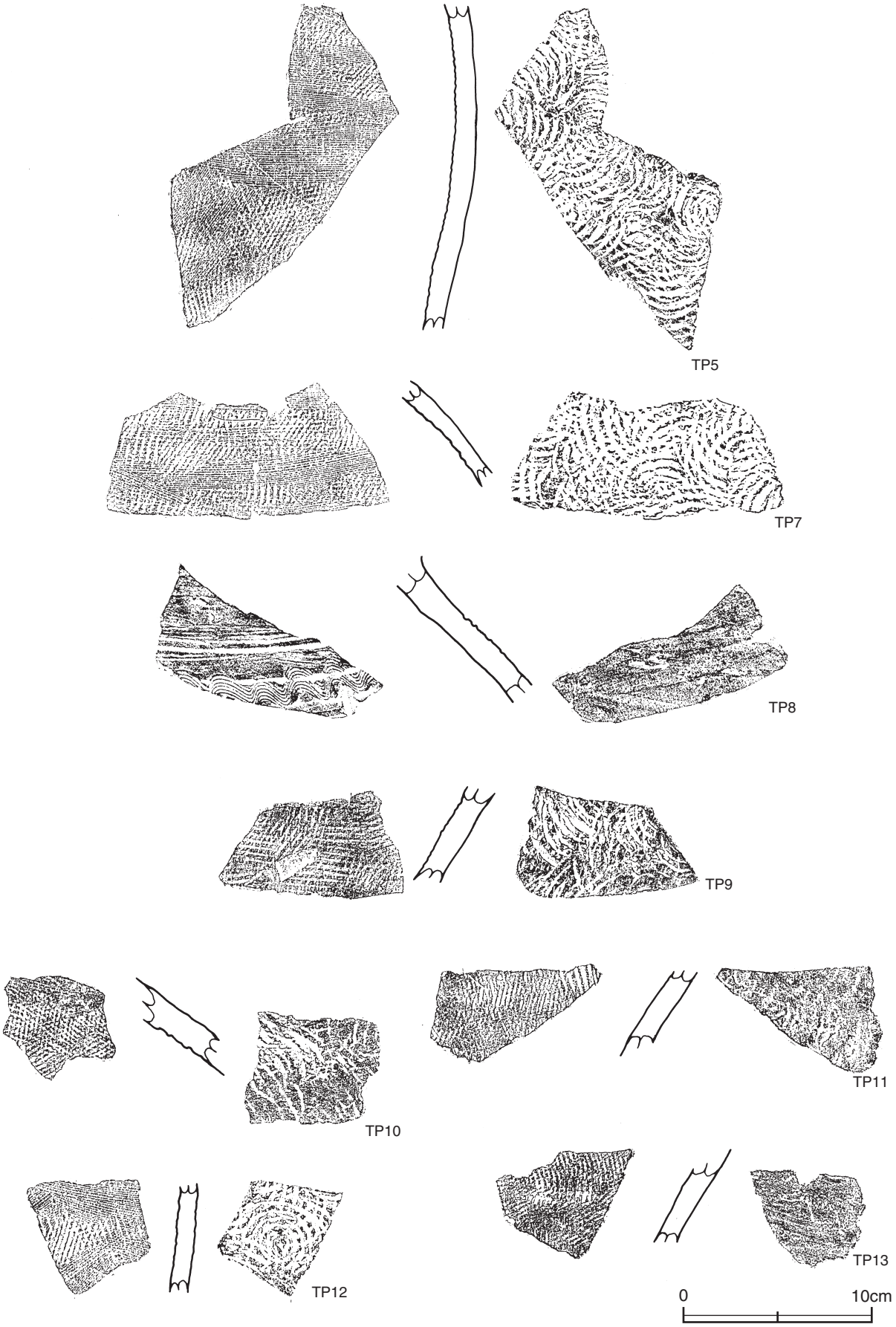




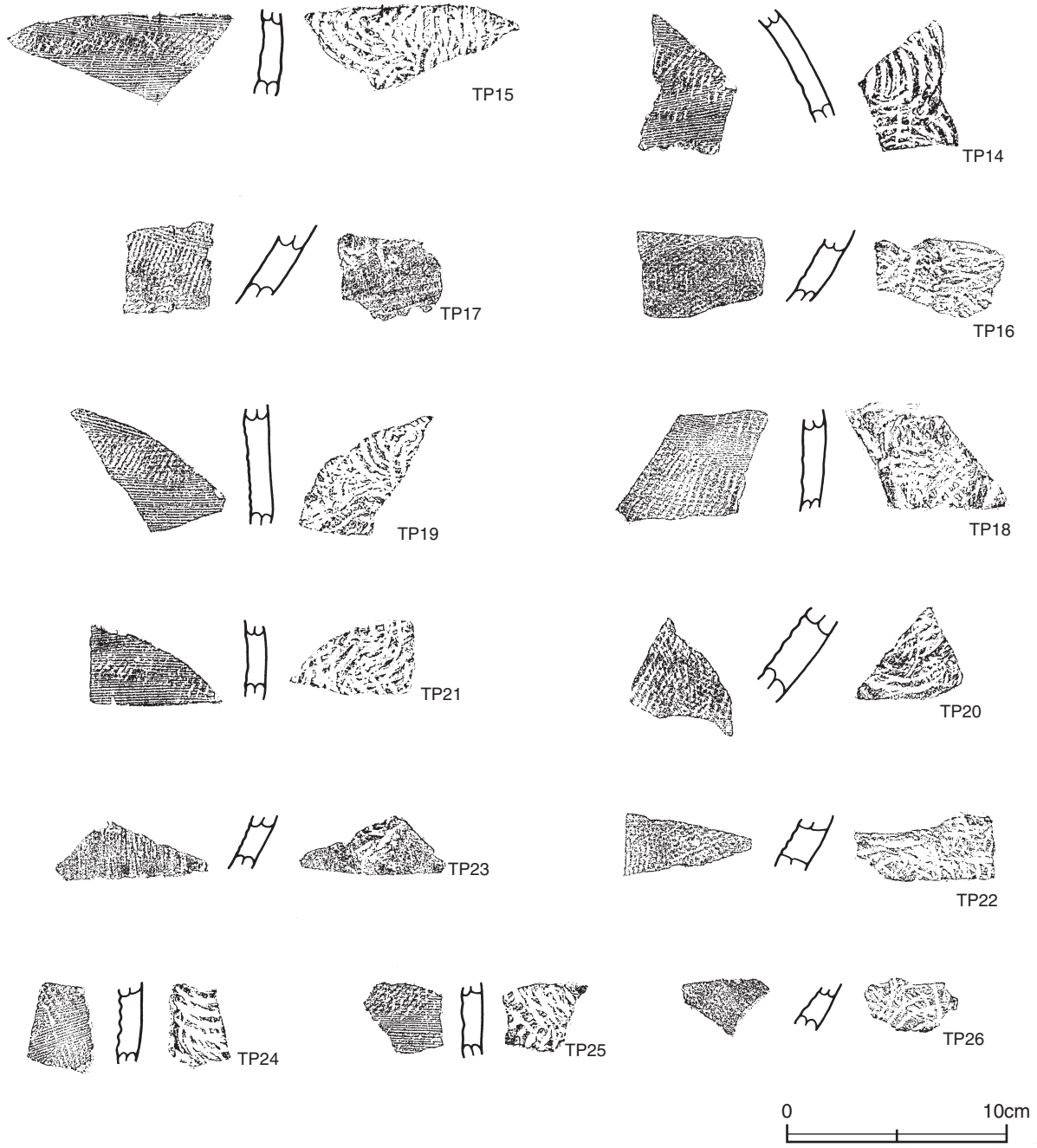




第32図　第１号道路跡出土遺物実測図(1)



第33図　第１号道路跡出土遺物実測図(2)



第34図　第１号道路跡出土遺物実測図(3)

第１号道路跡出土遺物観察表（第31～34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
62	土師器	甕	[13.6]	(10.0)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ・ナデ	路面拡幅時 構築土	30%
63	土師器	甕	－	(4.4)	[9.0]	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい黄橙	普通	体部～底部周縁指頭押圧ぎみのナデ　底部ナデ	路面拡幅時 構築土	10%
64	須恵器	坏ヵ	－	(2.4)	－	白色粒子・透明粒子	灰白	普通	ロクロナデ	路面拡幅時 構築土	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP１	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	内・外面横方向のナデ　口唇部はナデにより平滑　外面凸部を貼り付け後接合部ナデ　凸部下位に櫛描波状文（７本櫛歯）	路面拡幅時 構築土	
TP２	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目後斜位のカキ目後一部斜位の平行叩き 内面青海波文	路面拡幅時 構築土	

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP３	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目後斜位のカキ目後一部斜位の平行叩き 内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP４	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP５	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後斜位のカキ目後横位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP６	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き　一部斜位の平行叩き　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP７	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目後斜位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP８	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面ナデ　一部横位の平行叩き痕残存　平行する横位の３条の沈線後櫛描波状文（７本櫛歯）内面横ナデ	路面拡幅時 構築土	
TP９	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後一部ナデ　内面青海波文後ナデ	路面拡幅時 構築土	
TP10	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面擬格子目叩き　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP11	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	叩き締め後内・外面ナデ　外面擬格子目叩きヵ　一部縦位の平行叩き痕残存 内面青海波文ヵ	路面拡幅時 構築土	
TP12	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後交互に斜位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP13	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	叩き締め後内・外面ナデ　外面擬格子目叩きヵ　一部縦位の平行叩き痕残存 内面当て具痕不明	路面拡幅時 構築土	
TP14	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP15	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP16	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	叩き締め後外面ナデ　外面格子目叩きヵ　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP17	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面格子目叩き後平行叩き　内面ナデにより当て具痕不明	路面拡幅時 構築土	
TP18	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目後斜位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP19	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後斜位・横位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP20	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP21	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	叩き締め後横位のカキ目　カキ目により不明瞭である　外面擬格子目叩きヵ　内面青海波文	路面拡幅時の 埋土	
TP22	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面格子目叩き　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP23	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面縦位の平行叩き　叩き後内・外面ナデ	路面拡幅時 構築土	
TP24	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面擬格子目叩き後斜位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP25	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後横位のカキ目　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	
TP26	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	叩き締め後外面ナデ　外面格子目叩きヵ　内面青海波文	路面拡幅時 構築土	

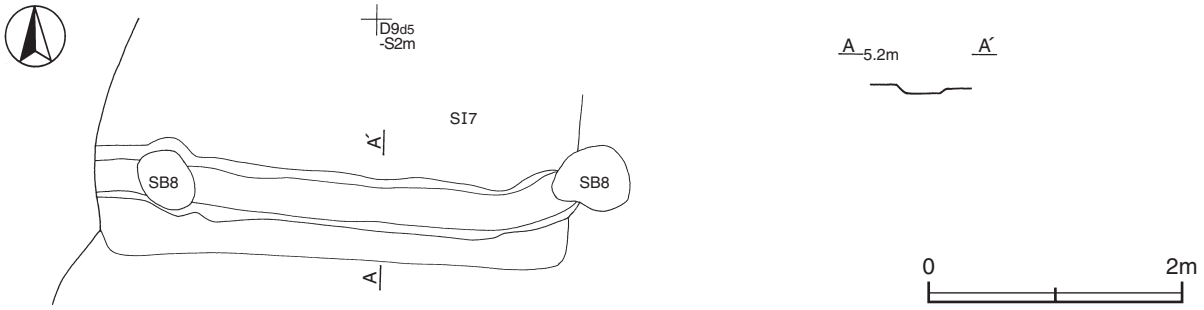
（5）溝跡

第６号溝跡（第35図）

位置　Ｄ９d4～Ｄ９d5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第10号住居跡を掘り込み，第７号住居，第８号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　Ｄ９d5区から西方向（Ｎ－88°－Ｗ）に直線的に延びており，西側がさらに調査区域外に続いている。確認された長さは3.8mで，上幅33～50cm，下幅24～32cm，深さ４cmである。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面に高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。



第35図　第６号溝跡実測図

遺物出土状況　土師器片３点（甕・甑）が出土している。また，混入した須恵器片１点も出土している。細片のみが覆土中から出土しているため，図示することができない。

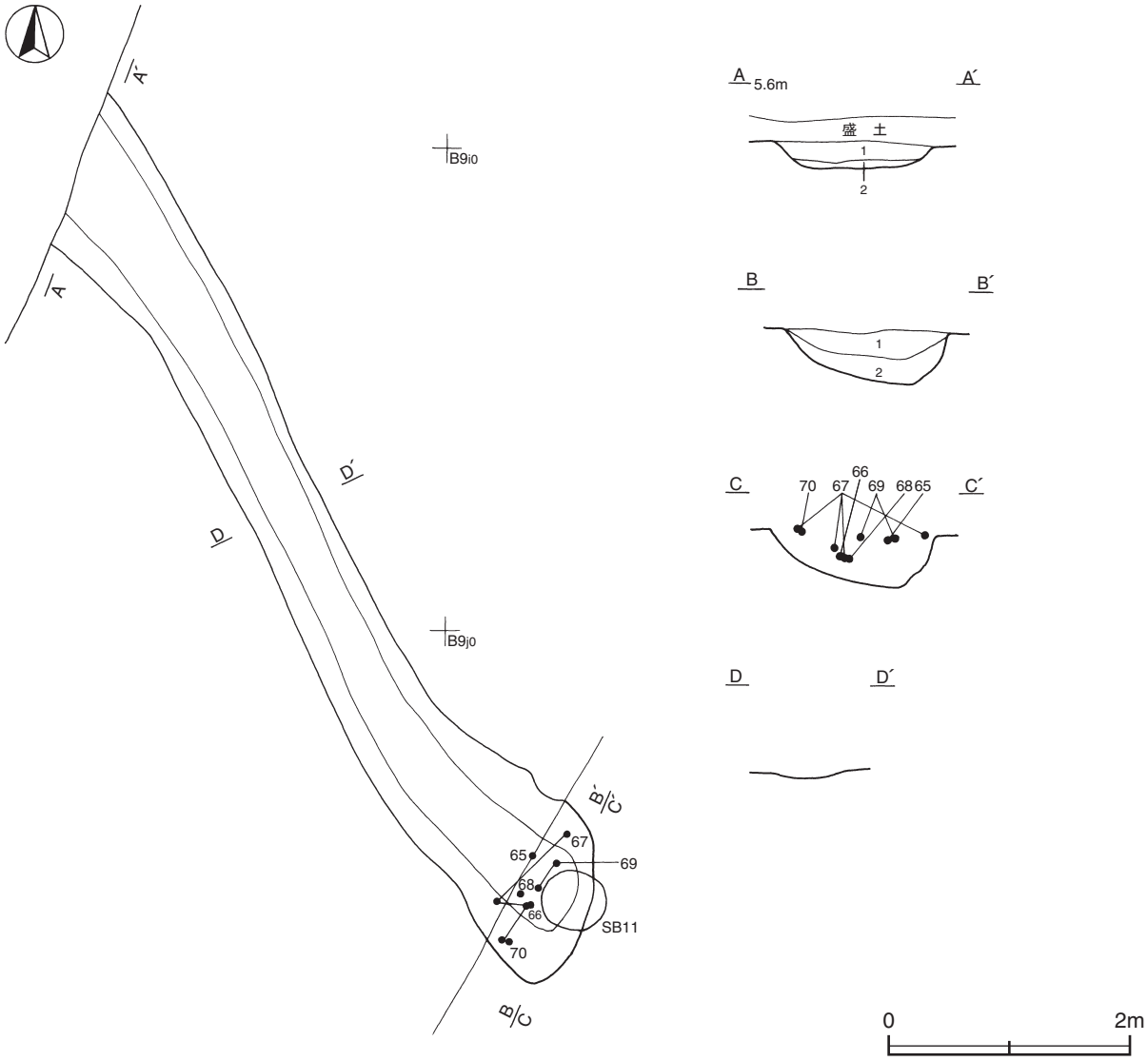
所見　時期は，重複関係から８世紀前葉以前で第10号住居跡より新しく，古墳時代後期後半の範疇と考えられる。

第13号溝跡（第36～38図）

位置　Ｂ９i9～Ｂ９j0区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第11号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　Ｂ９j0区から北西方向（Ｎ－28°－Ｗ）に，長さ8.1ｍでほぼ直線的に延びており，さらに北西方向の調査区域外に続いている。規模は大部分の上面が削平されており，上幅62～130㎝，下幅35～80㎝，深さ５㎝が確認されただけである。両端部の土層断面図と削平されていない部分では，上幅135㎝，下幅65～80㎝，深さ25～45㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。



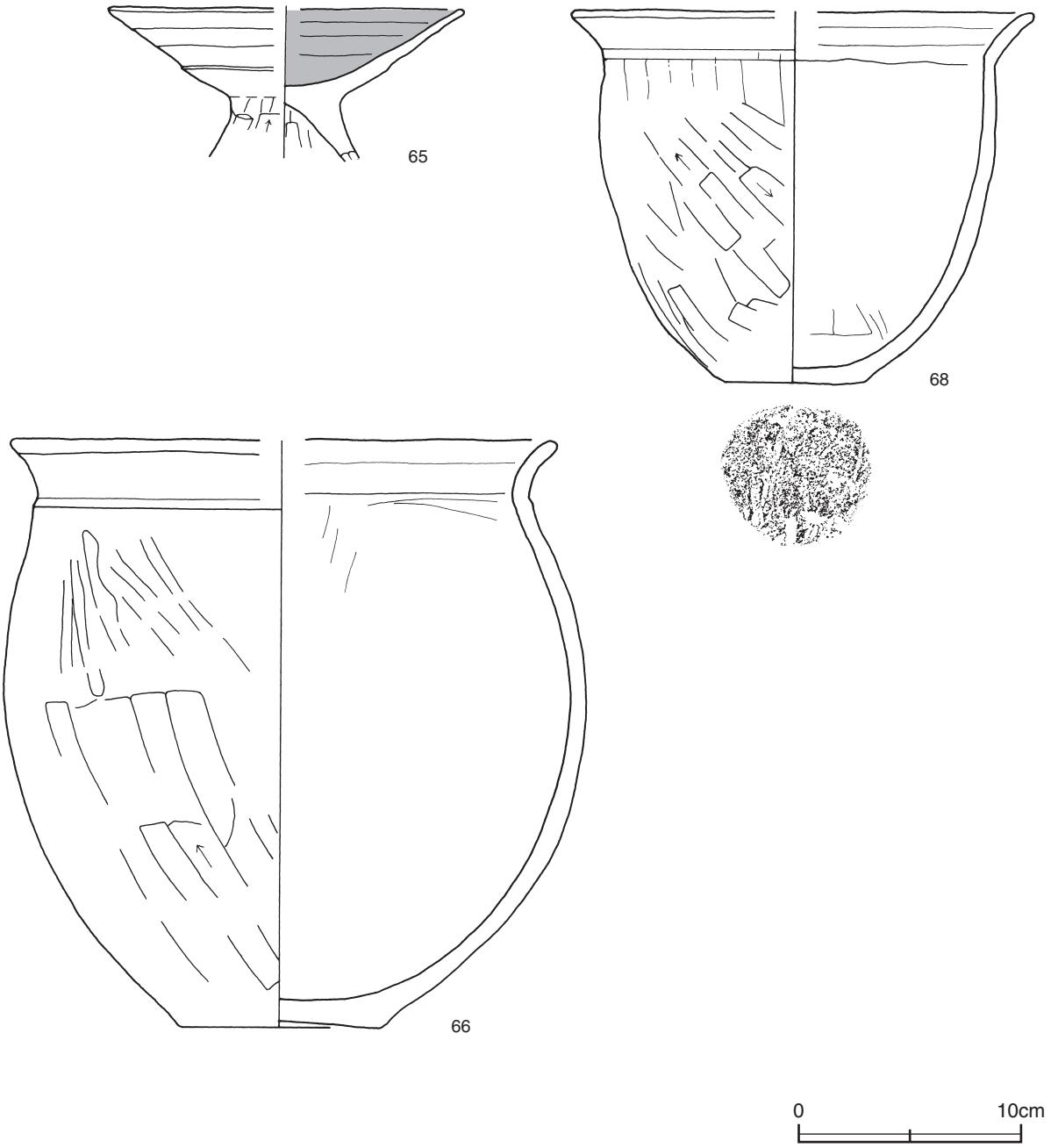
第36図　第13号溝跡実測図

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

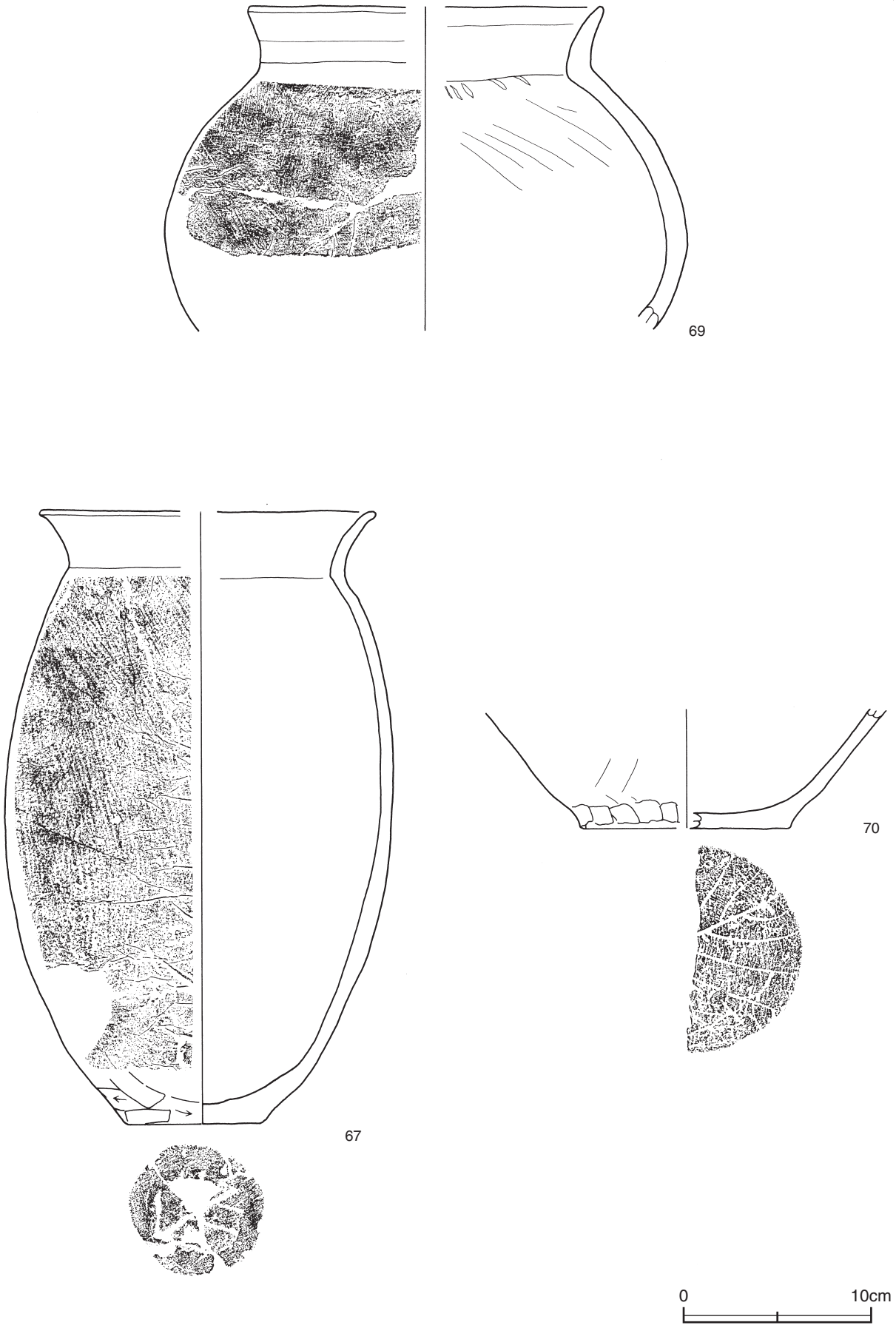
土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片265点（坏・高坏６，甕・甑259）が出土している。また，流れ込んだ弥生土器片３点も出土している。土器は南東端部付近の覆土上層から覆土中層に集中している。65～69のような破損品及び大形の破片が横位や斜位で出土している。

所見　65～69は廃棄された状態であり，７世紀前半までには埋没してくぼ地化していたものと考えられる。



第37図　第13号溝跡出土遺物実測図(1)



第38図　第13号溝跡出土遺物実測図(2)

第13号溝跡出土遺物観察表（第37・38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
65	土師器	高坏	[15.8]	(6.8)	－	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい黄橙	普通	坏部上半内・外面横ナデ　下半内・外面ナデヵ 脚部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	覆土上層	50% PL20
66	土師器	甕	[24.3]	26.5	9.1	黒雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面上半ヘラ磨き状のナデ 下半ヘラ削り後ナデ　内面ナデ	覆土中層	80%
67	土師器	甕	[17.7]	32.9	7.1	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ハケ目　下半ナデ 内面ナデ　底部周縁ヘラ削り	覆土中層	70% PL21
68	土師器	甕	[20.6]	16.7	6.1	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ一部磨き状のナデ　内面ナデ	覆土中層	90% PL21
69	土師器	甕	[18.6]	(17.2)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ハケ目後ナデ 内面ヘラナデ・ナデ	覆土上層	30%
70	土師器	甕	－	(6.3)	[11.0]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　底部周縁押圧ぎみのナデ 内面ナデ　底部木葉痕	覆土上層	10%

表４　古墳時代溝跡一覧表

番号	位 置	走行方向	形状	規　模				覆土	底面	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
				長さ（m）	上幅（cm）	下幅（cm）	深さ（cm）					
6	Ｄ９d4～Ｄ９d5	Ｎ－88°－Ｗ	直線	(3.8)	33～50	24～32	4	－	平坦	土師器	後期後半	SI10→本跡→SB8→SI7
13	Ｂ９i9～Ｂ９j0	Ｎ－28°－Ｗ	直線	(8.1)	62～135	35～80	25～45	自然	平坦	土師器	７世紀前半	本跡→SB11

２　奈良・平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡９軒，掘立柱建物跡11棟，柵跡２条，火葬墓１基，ピット群１か所，溝跡２条，土坑５基が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第１号住居跡（第39～42図）

位置　Ｅ９a4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１～３号掘立柱建物に掘り込まれている。

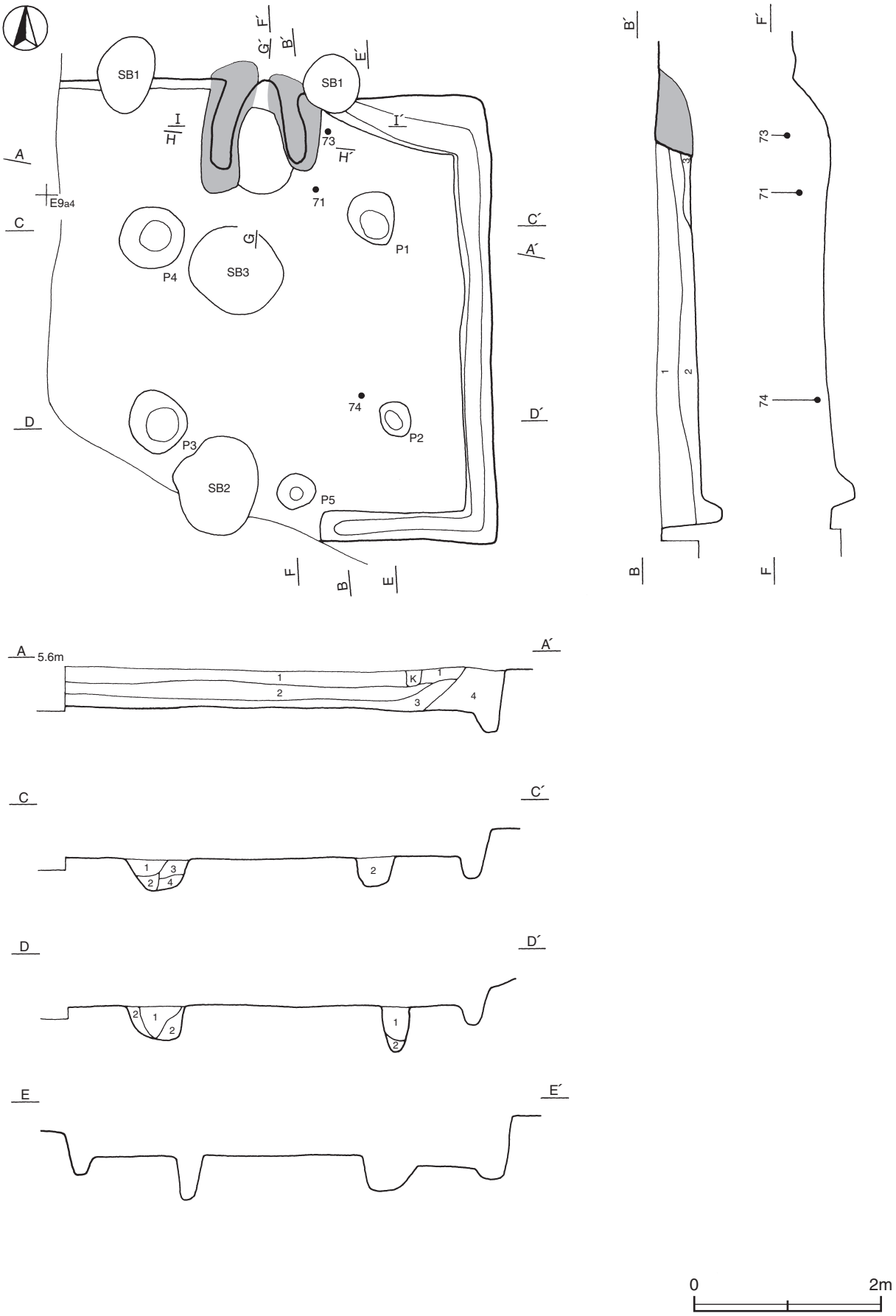
規模と形状　西側部分が削平されているため，東西軸4.8mのみ，南北軸4.8mが確認されている。平面形は北壁が竈を挟んで若干ずれている方形と推測され，主軸方向はＮ－０°である。壁高は25～48cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。 壁溝が東・南北壁下に確認されている。

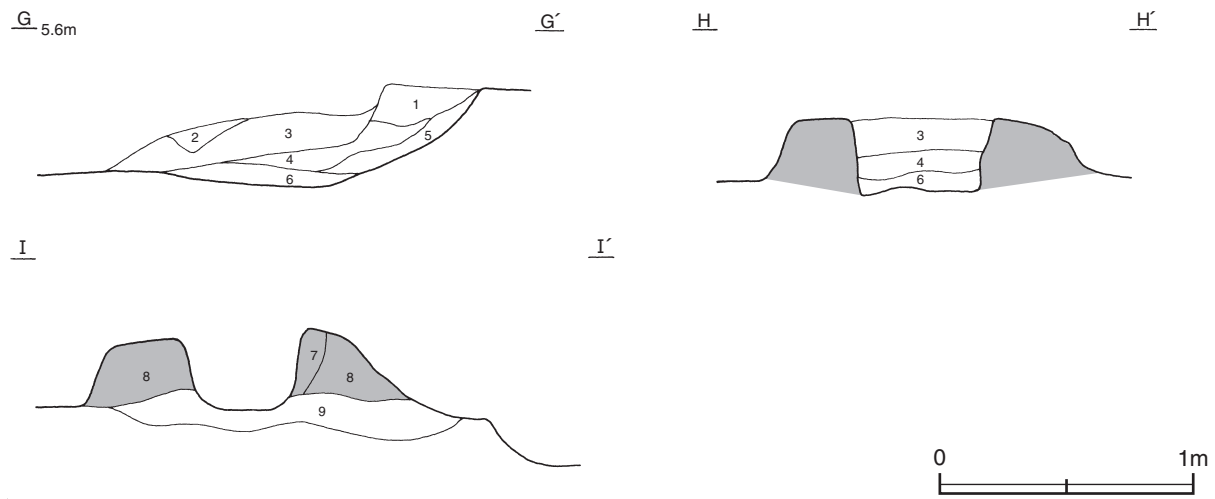
竈　北壁の中央部に付設されていると推測される。規模は，焚口部から煙道部まで122cm，袖部幅120cmである。袖部はロームブロック・焼土化した粘土ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は地山面を凹凸に掘り込んで，粘土と凝灰岩ブロックを含んだ黒色砂・灰白色砂の混合砂で埋土しており，煙道部寄りの位置が火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に20cm掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。第３・４層は，竈構築材の崩落土である。

竈土層解説

1　黒　　色　粘土粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
2　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・黄色砂微量
3　灰黄褐色　焼土ブロック・凝灰岩ブロック微量
4　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック多量
5　黒　　色　焼土粒子中量
6　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子微量
7　暗赤褐色　焼土ブロック多量，凝灰岩ブロック中量
8　灰黄褐色　ロームブロック・凝灰岩ブロック多量
9　黒　　色　粘土ブロック・凝灰岩ブロック・灰白色砂多量



第39図　第１号住居跡実測図(1)



第40図　第１号住居跡実測図(2)

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ30～50㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。第１・２層は柱を抜き取った後の覆土で，第３・４層は焼土を混ぜ込んだ地山の砂を充填した埋土と考えられる。Ｐ５は深さ21㎝で，南壁際に位置することから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

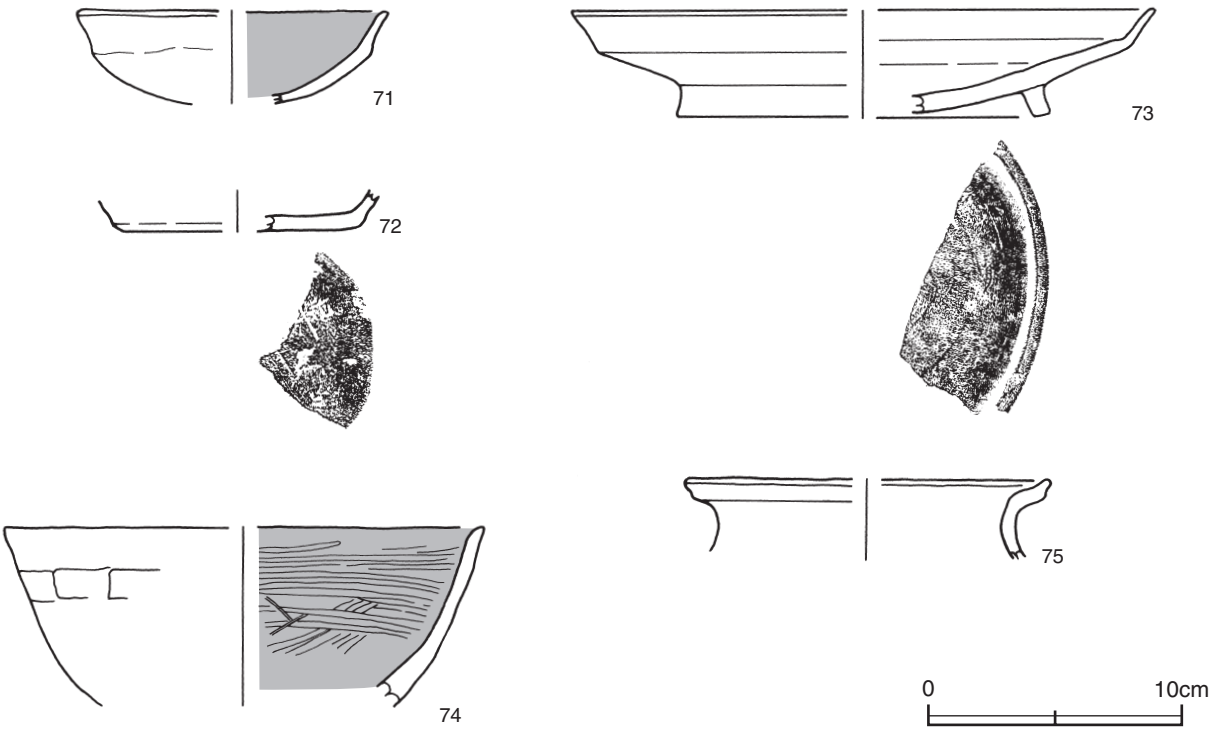
土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	黄色砂微量	
2	黒　色	黄色砂少量，焼土粒子微量	
3	黄　色	黒色砂・灰白色砂多量，焼土粒子少量	
4	黄　色	焼土粒子多量，黒色砂中量	

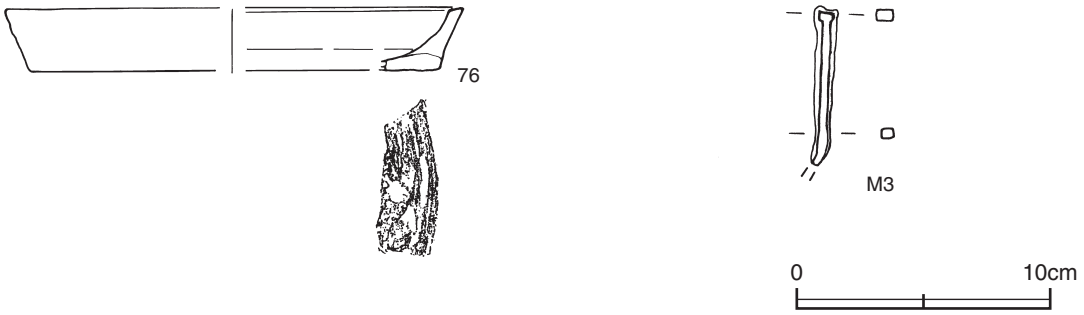
覆土　４層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。第３層は竈付近にのみ竈構築材を含んでいる。

土層解説

1	黒　色	焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量
2	黒　色	灰白色砂少量
3	灰白色	炭化粒子・黒色砂少量
4	灰黄褐色	焼土ブロック・凝灰岩ブロック中量



第41図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物出土状況　土師器片706点（坏・椀・鉢86，甕・甑620），須恵器片114点（坏・高台付坏55，盤２，蓋13，鉢１，甕43），鉄製品１点（釘）が出土している。また，流れ込んだ弥生土器片１点と石鏃１点，混入した陶器片15点も出土している。遺物は，覆土上層から中層を中心に散在した状態で出土している。71・73は竈前方及び竈右脇の覆土上層・中層からそれぞれ出土している。74は中央部の覆土下層から出土している。72・76・Ｍ３は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉と考えられる。

第１号住居跡出土遺物観察表（第41・42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
71	土師器	坏	[12.0]	(3.7)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	覆土中層	10%
72	須恵器	坏	－	(1.6)	[10.0]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	底部ヘラナデ調整　底部周縁ナデ	覆土中	5% PL25 箆書き「是」ヵ
73	須恵器	盤	[22.8]	4.2	[14.2]	白色粒子・透明粒子 黒色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土上層	30%
74	土師器	鉢	[19.0]	(7.0)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	10%
75	土師器	甕	[14.2]	(3.1)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　端部つまみ上げ	覆土中	5%
76	須恵器	浅鉢	[18.0]	2.5	[16.4]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	底部ヘラ削り調整	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｍ３	釘	(6.0)	0.7	0.4	(7.2)	鉄	先端湾曲　欠損	覆土中	PL22

第５号住居跡（第43～45図）

位置　Ｄ９f3区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第４・６号住居跡，第17号掘立柱建物跡を掘り込み，第101・102号ピットに掘り込まれている。

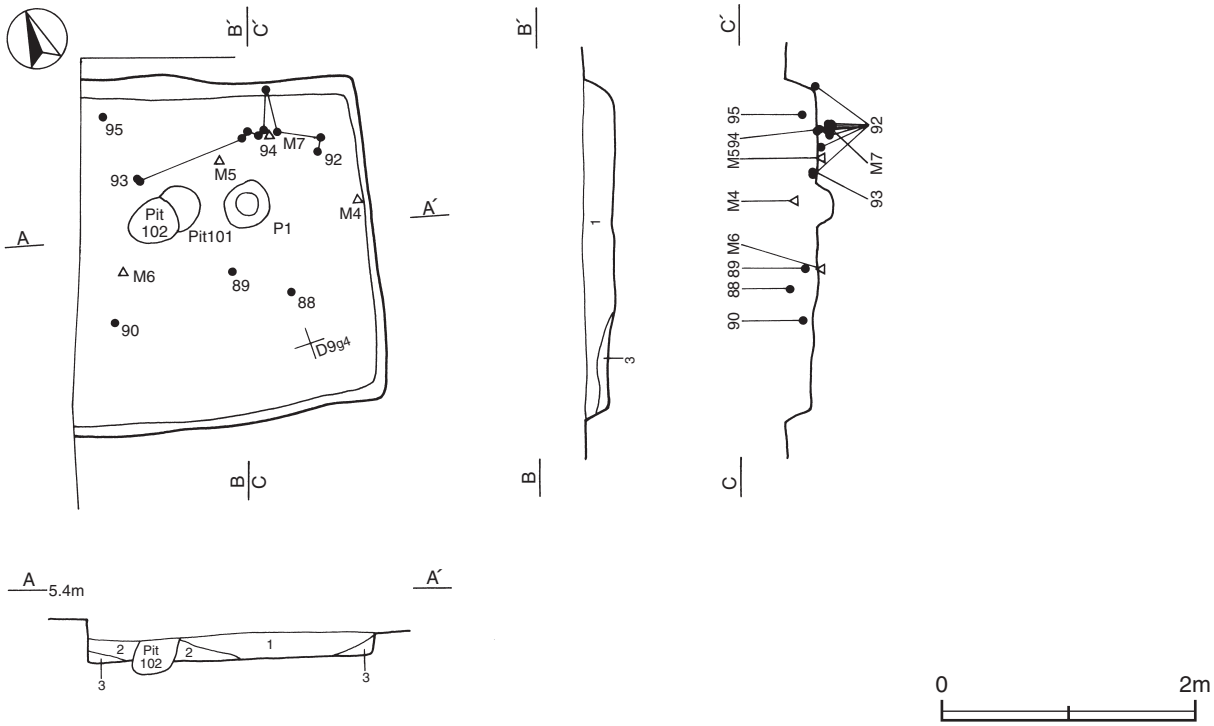
規模と形状　西側部分が調査区域外に延びているため，東西軸2.5mのみ確認され，南北軸2.8mである。平面形は長方形と推測され，主軸方向は不明である。壁高は19～21cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

ピット　深さ10cmで，性格は不明である。

覆土　３層に分層される。１層は焼土ブロック・凝灰岩ブロックが投棄された人為堆積で，第２・３層は周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

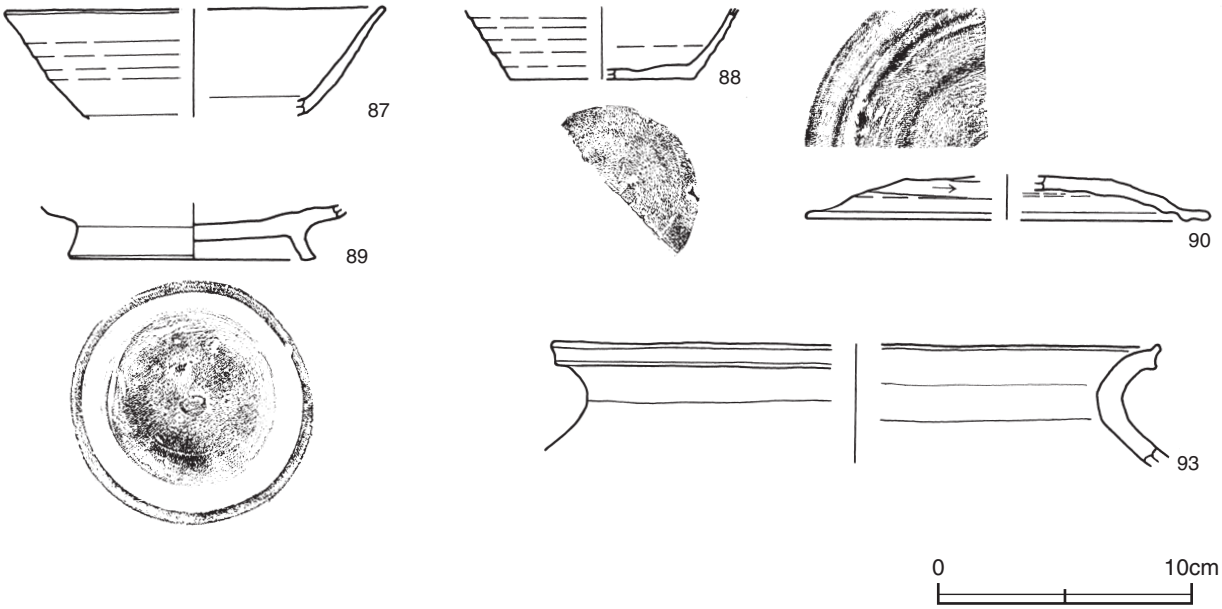
土層解説
1　黒　　色　焼土ブロック・凝灰岩ブロック多量
2　黒　　色　炭化物少量，焼土粒子微量
3　黒　　色　灰白色砂中量



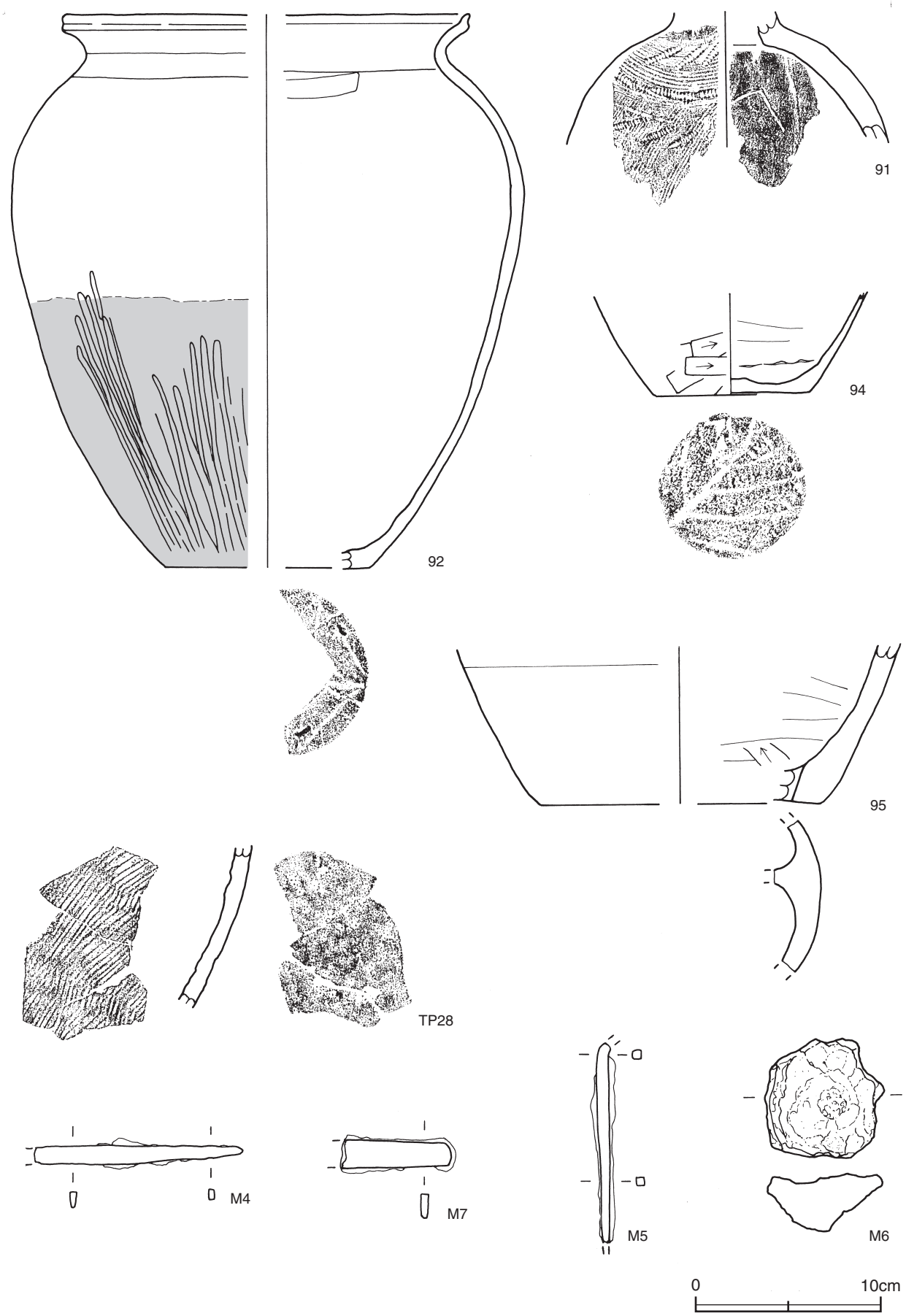
第43図　第５号住居跡実測

遺物出土状況　土師器片430点（坏・椀・鉢88，甕・甑342），須恵器片117点（坏・高台付坏62，蓋27，甕28），鉄製品３点（刀子，釘，不明），椀状滓１点が出土している。遺物は，覆土下層を中心に散在した状態で出土している。88は東部，Ｍ４は東壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。90は中央部の覆土下層から出土している。92は北東コーナー部から北壁際の床面に散在している破片が接合したものである。93・94・Ｍ５・Ｍ７は北部，Ｍ６は中央部の床面からそれぞれ出土している。また，91は流れ込んだものである。

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉と考えられる。



第44図　第５号住居跡出土遺物実測図(1)



第45図　第５号住居跡出土遺物実測図(2)

第５号住居跡出土遺物観察表（第44・45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
87	須恵器	坏	[14.8]	(4.2)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%
88	須恵器	坏	－	(2.8)	[7.2]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	覆土中層	30%
89	須恵器	高台付坏	－	(2.2)	9.3	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰白	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土下層	40%
90	須恵器	蓋	[15.8]	(1.8)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子・黒色粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	20%
91	須恵器	瓶	－	(7.2)	－	白色粒子・透明粒子	灰	普通	体部外面縦･横方向のカキ目後斜め方向の連続刺突文 内面ナデ	覆土中	5% 箆記号「□」
92	土師器	甕	[21.8]	30.0	[11.0]	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　端部つまみ上げ　体部外面上半ヘラ削り後ナデ　下半ヘラ磨き　内面ナデ	床面	60% PL21
93	土師器	甕	[24.0]	(4.7)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	浅黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　端部つまみ上げ	床面	5%
94	土師器	甕	－	(5.4)	8.2	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ･ナデ　底部木葉痕	床面	10%
95	須恵器	甑	－	(8.6)	[15.0]	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ　底部内面周縁ヘラ削り	覆土下層	10%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP28	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面斜位の平行叩き　内面当て具による無文痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M４	刀子	(11.3)	1.0	0.4	(16.6)	鉄	刃部欠損	覆土中層	PL22
M５	釘	(10.8)	0.6	0.6	(17.0)	鉄	両端欠損　上端湾曲	床面	PL22
M６	椀状滓	6.4	6.4	3.1	142.1	鉄	－	床面	PL22
M７	刀子	(5.9)	1.6	0.4	(16.3)	鉄	切っ先側欠損	床面	PL22

第６号住居跡（第46・47図）

位置　Ｄ９f4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

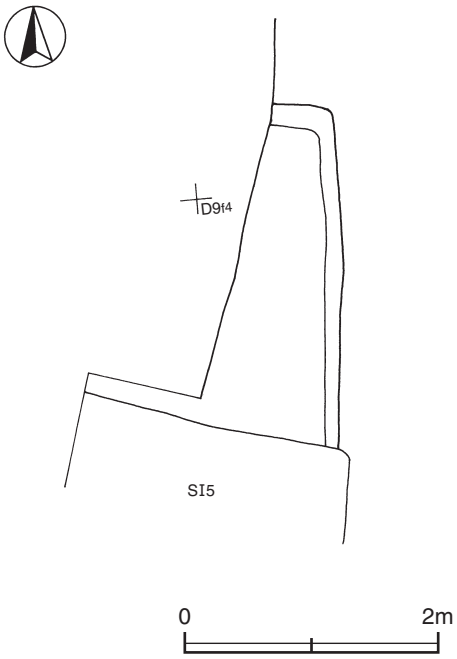
重複関係　第４号住居跡を掘り込み，第５号住居に掘り込まれている。

規模と形状　西側部分が調査区域外に延びていることや，南側が重複しているため，東西軸2.0mのみ，南北軸2.7mのみ確認されている。平面形は方形または長方形と推測され，主軸方向は不明である。

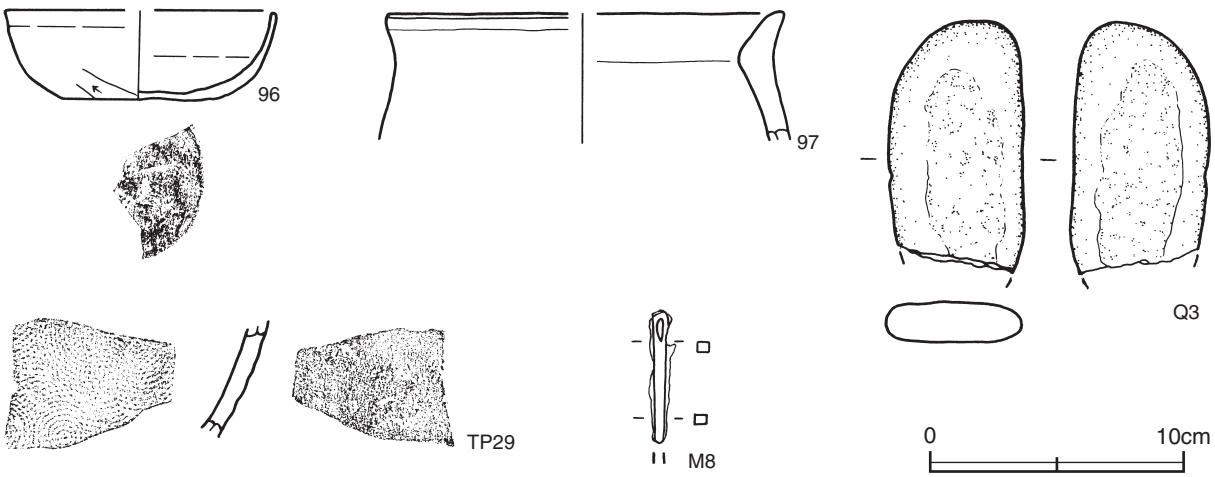
床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

遺物出土状況　土師器片183点（坏・椀・鉢34，甕149），須恵器片59点（坏・高台付坏40，蓋13，甕６），石器１点（敲石），鉄製品１点（不明）が出土している。96・97・Ｍ８は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，重複関係及び出土土器から８世紀前葉と考えられる。



第46図　第６号住居跡実測図



第47図　第６号住居跡出土遺物実測図

第６号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
96	須恵器	坏	[10.6]	3.5	5.4	白色粒子・透明粒子 灰色粒子・黒色粒子	黄灰	普通	底部ヘラ削り調整　体部下端のヘラ削りは底部調整の一連のもの	覆土中	20%
97	土師器	甕	[15.5]	(5.2)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	覆土中	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP29	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	橙	普通	外面同心円文叩き　内面当て具による無文痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q３	敲石	(10.0)	5.5	1.9	(178.0)	斑レイ岩	２面に使用痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M８	釘	(5.3)	0.6	0.5	(5.5)	鉄	上端湾曲　下端欠損	覆土中	PL22

第７号住居跡（第48図）

位置　Ｄ９d4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第10号住居跡，第８号掘立柱建物跡，第６号溝跡を掘り込み，第18･19号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　西側が調査区域外に延びているため東西軸3.6mのみ，また，削平のため遺存状態が悪く，遺存する部分で南北軸3.3mが確認されている。平面形は方形と推測され，主軸方向は不明である。遺存する壁高は４～10㎝で，立ち上がりは不明瞭である。

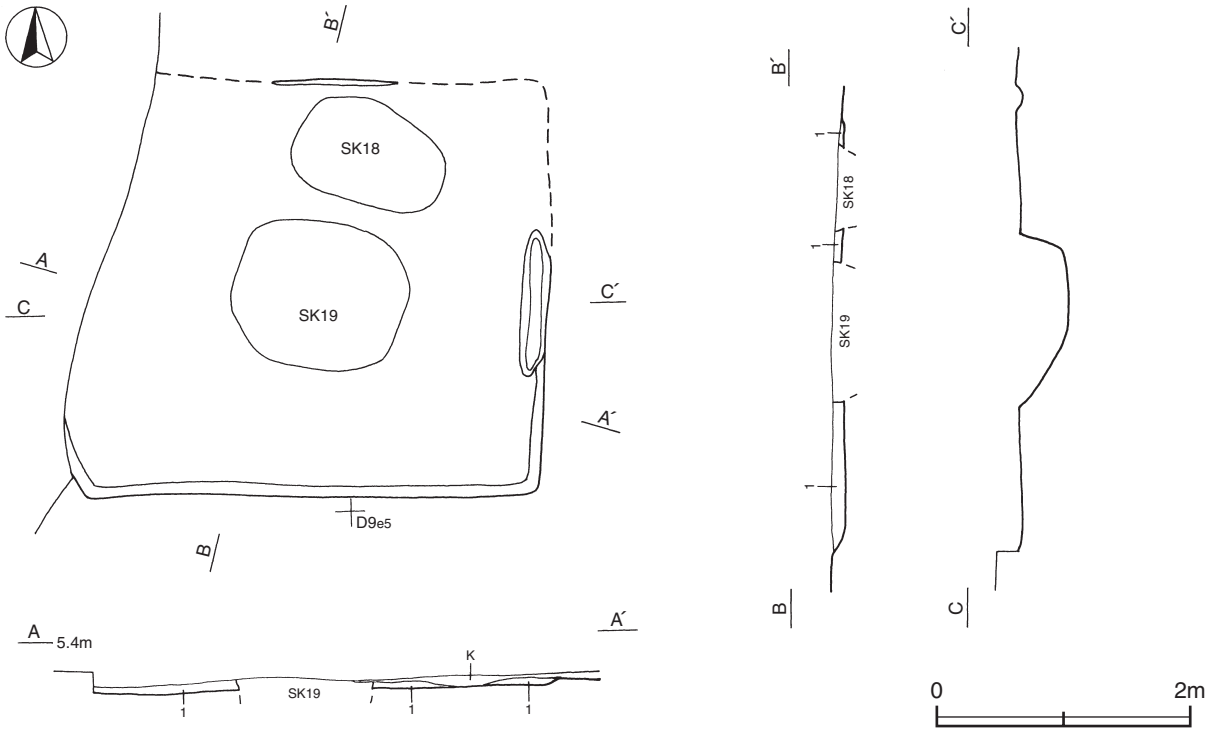
床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。壁溝が東壁下と考えられる位置の一部に確認されている。

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

土層解説
１　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片172点（坏30，甕･甑142）が出土している。細片のみが覆土中から出土しているため，図示することができない。

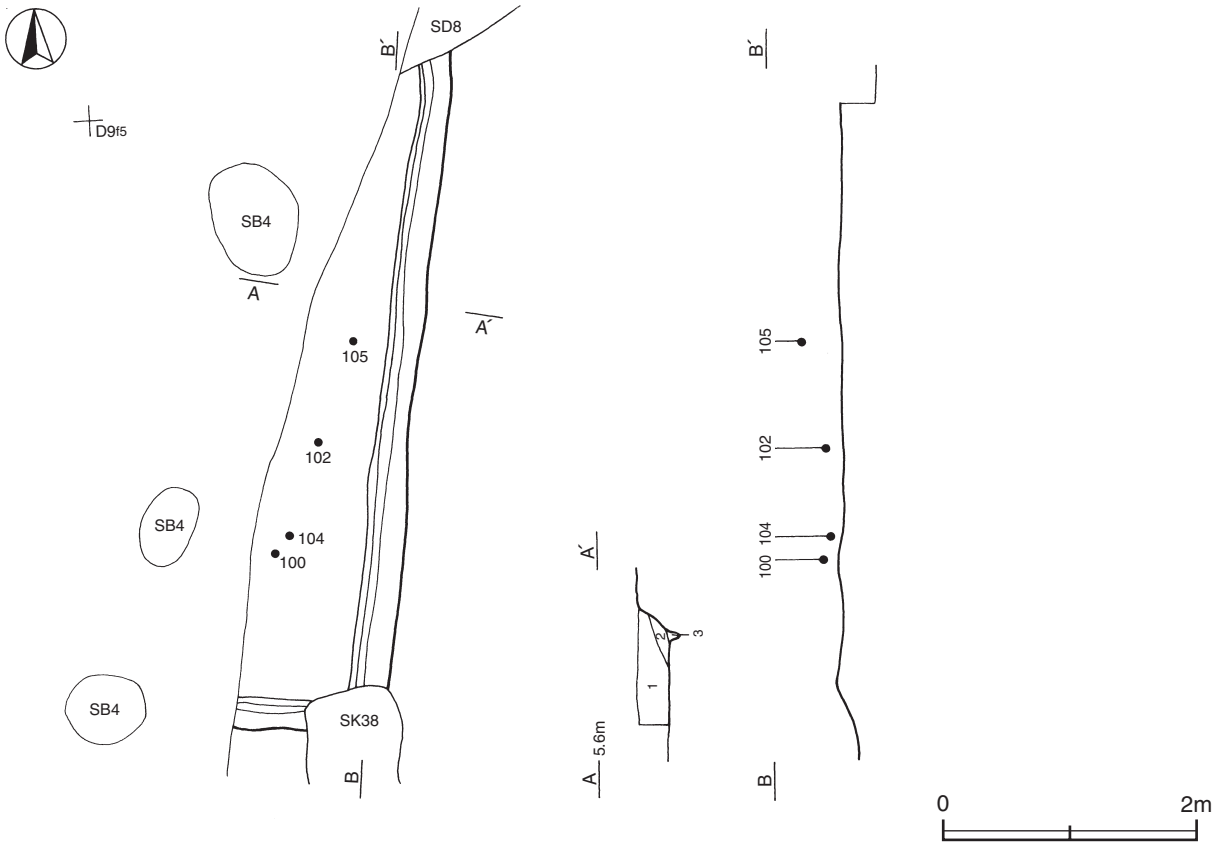
所見　時期は，重複関係から８世紀中葉と考えられる。



第48図　第７号住居跡実測図

第９号住居跡（第49・50図）

位置　Ｄ９f5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第49図　第９号住居跡実測図

重複関係　第４号掘立柱建物，第８号溝，第38号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　西側部分のほとんどが削平されており，東西軸1.2ｍのみ，南北軸5.2ｍのみが確認されている。平面形は方形または長方形と推測され，主軸方向は不明である。壁高は25㎝で，外傾して立ち上がっている。

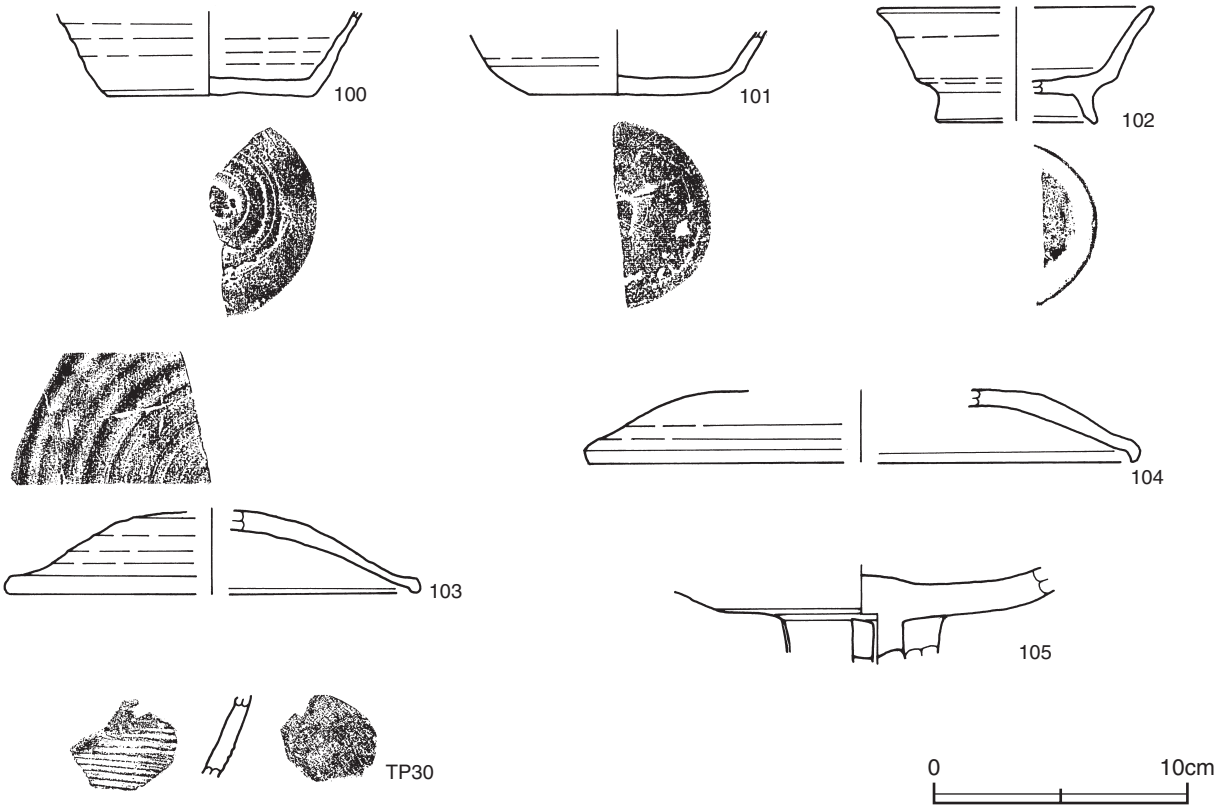
床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。壁溝が遺存する壁下に確認されている。

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片281点（坏・鉢38，甕243），須恵器片131点(坏・高台付坏72，蓋44，高盤２，甕13)が出土している。遺物は，覆土下層を中心にまばらに出土している。100・102・104は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。105は覆土上層，101・103は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第50図　第９号住居跡出土遺物実測図

第９号住居跡出土遺物観察表（第50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
100	須恵器	坏	－	(3.4)	8.2	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	覆土下層	25%
101	須恵器	坏	－	(2.5)	10.0	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰白	普通	底部ナデ調整	覆土中	25%
102	須恵器	高台付坏	[10.6]	4.6	[6.1]	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土下層	40%
103	須恵器	蓋	[16.0]	(3.3)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り調整	覆土中	30%
104	須恵器	蓋	[21.4]	(2.9)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	天井部ロクロナデ調整	覆土下層	20%
105	須恵器	高盤	－	(3.9)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ　四方透かし	覆土上層	15%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP30	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白	普通	外面横位の平行叩き　内面ナデにより当て具痕不明	覆土中	

第14号住居跡（第51・52図）

位置　Ｄ９a7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

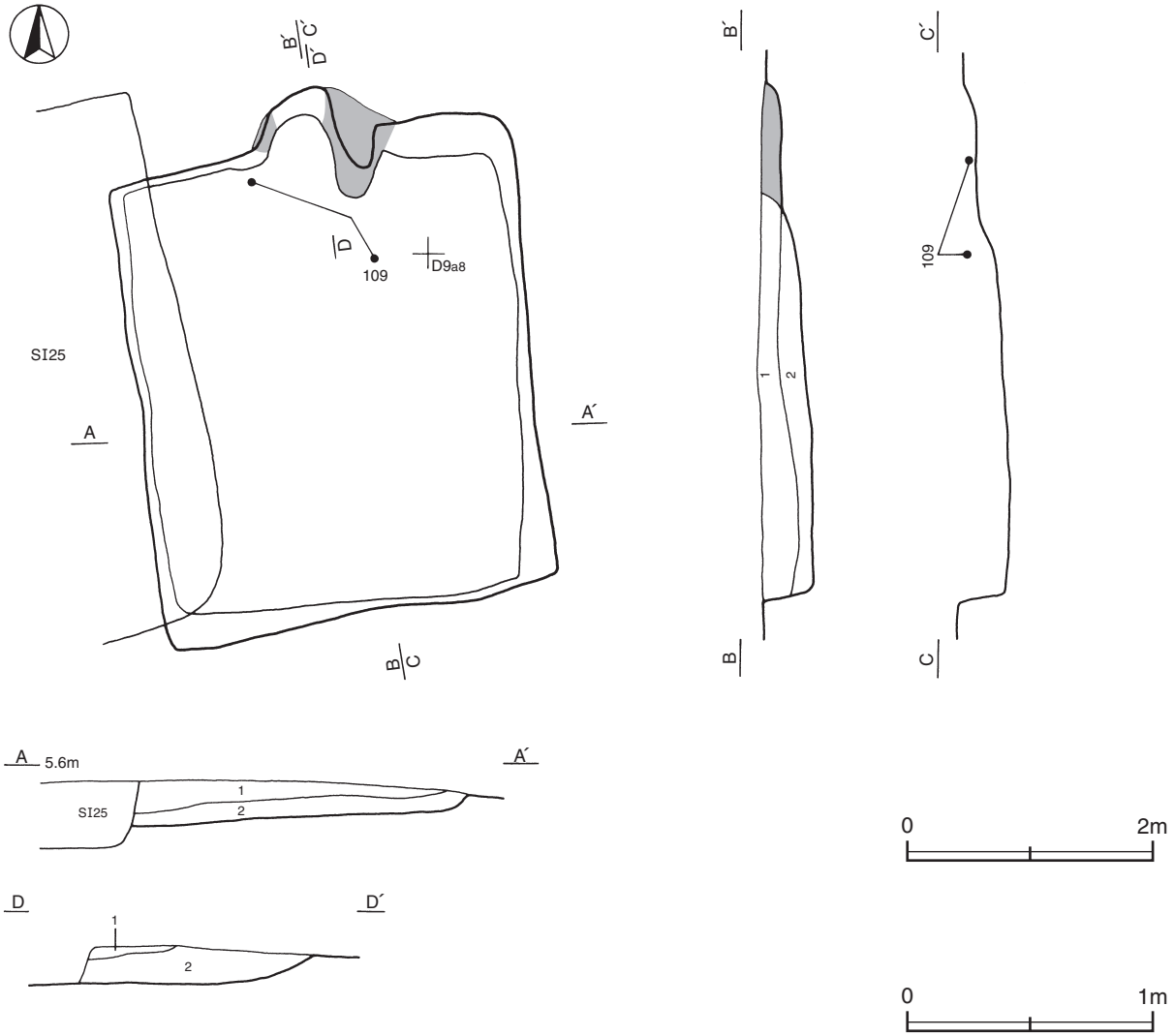
重複関係　第１号方形竪穴遺構，第45号土坑を掘り込み，第25号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.9m，短軸3.3mの長方形で，主軸方向はＮ－７°－Ｗである。壁高は15～40㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁の中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで105㎝，右袖部しか遺存しておらず，袖部幅は不明である。火床部は床面と同じ高さの砂層をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に50㎝掘り込まれ，火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量　　2　灰　白　色　焼土粒子・炭化粒子微量



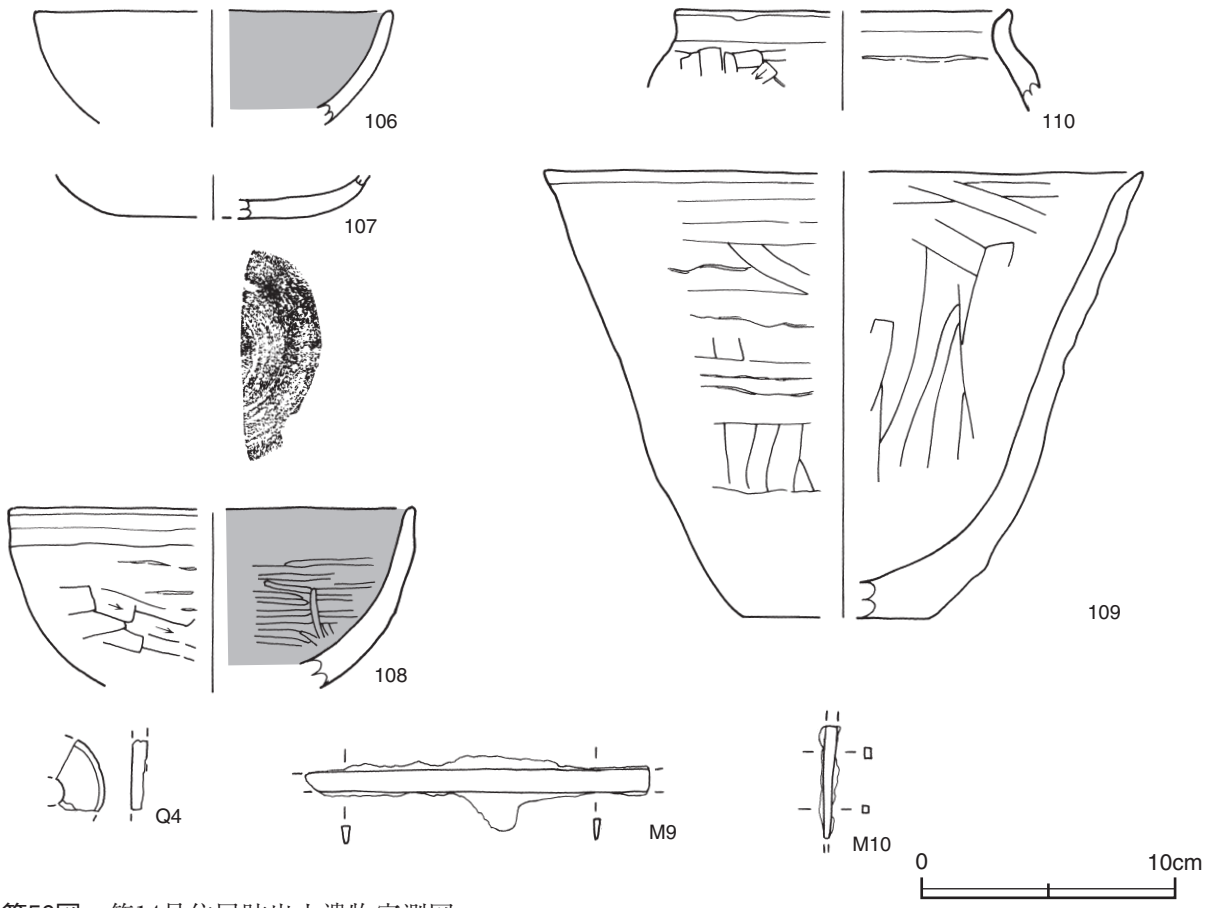
第51図　第14号住居跡実測図

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　灰　白　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片422点（坏・椀・鉢59，甕・甑363），須恵器片21点（坏・高台付坏17，蓋１，甕３），石製品１点（紡錘車），鉄製品２点（刀子・釘）が出土している。また，混入した陶器片１点も出土している。遺物は，覆土下層を中心に散在した状態で出土している。109は竈前方の覆土下層に散在している破片が接合したものである。106・108は南西部，107は南東部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀代と考えられる。



第52図　第14号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
106	土師器	坏	[13.8]	(4.5)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き	覆土中	15%
107	須恵器	坏	－	(1.8)	[7.0]	白雲母・白色粒子 透明粒子	浅黄	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土中	30%
108	土師器	鉢	[15.8]	(7.0)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面上半ナデ　輪積み痕残存　下半ヘラ削り　内面ヘラ磨き	覆土中	20%
109	土師器	甕	[23.6]	17.6	[7.2]	黒雲母・白色粒子 透明粒子	褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ヘラナデ・ナデ　内面ヘラナデ	覆土下層	30%
110	土師器	短頸壺	[13.0]	(4.1)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ナデ	覆土下層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q４	紡錘車	[4.4]	(0.7)	[0.9]	(3.7)	頁岩ヵ	丁寧な研磨　裏面剥離	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M９	刀子	(13.6)	0.9	0.3	(29.6)	鉄	両端欠損	覆土下層	PL22
M10	釘	(5.7)	0.8	0.4	(4.2)	鉄	両端欠損	覆土下層	PL22

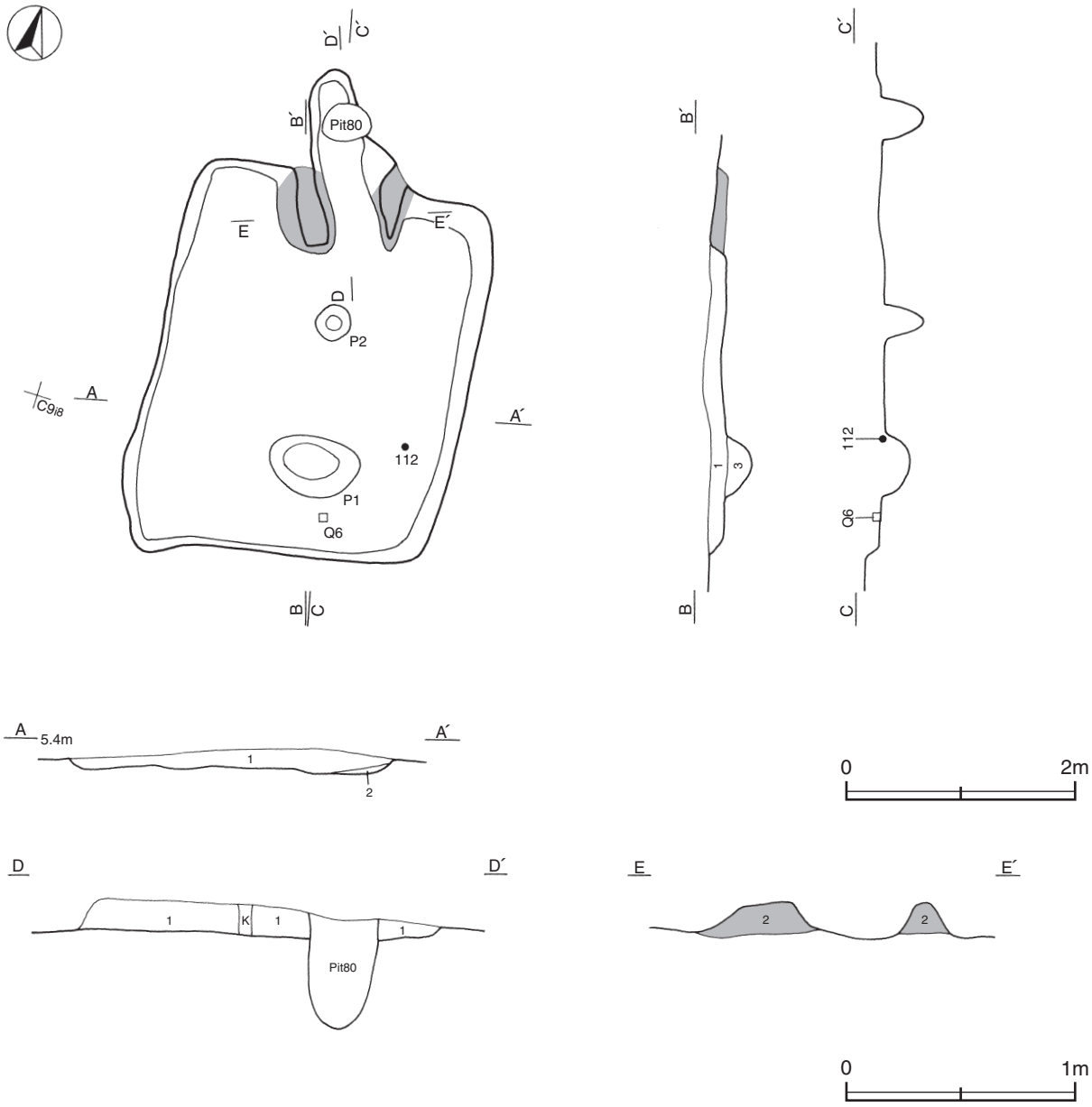
第17号住居跡（第53・54図）

位置　Ｃ９h8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第23号住居跡を掘り込み，第80号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.4m，短軸2.8mの長方形で，主軸方向がN－０°－Wである。壁高は10～14cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。



第53図　第17号住居跡実測図

竈　北壁の中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで158㎝，袖部幅120㎝である。袖部は床面と同じ高さの地山面を基部として，ロームブロックと凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に100㎝掘り込まれ，立ち上がりは不明瞭である。

竈土層解説
1　黒　　色　焼土ブロック・粘土ブロック少量
2　灰 黄 褐 色　ロームブロック・凝灰岩ブロック中量

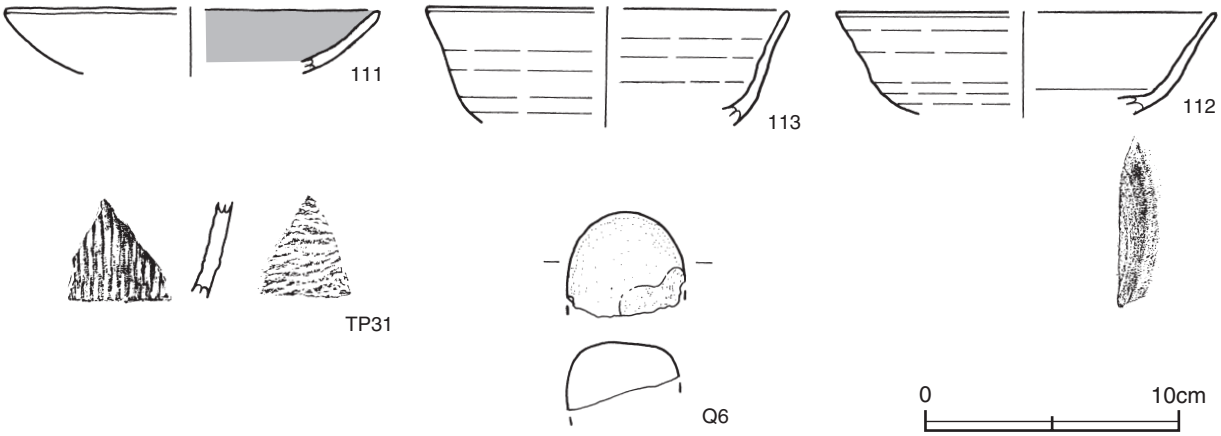
ピット　２か所。Ｐ１は深さ34㎝で，南壁際にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ２は深さ37㎝で，性格は不明である。

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・凝灰岩微量
2　灰　白　色　黒色砂多量
3　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片115点（坏・椀・鉢30，蓋１，甕・甑84），須恵器片５点（坏・高台付坏４，甕１），石器１点（敲石）が出土している。遺物は，覆土中を中心にまばらに出土している。112・Ｑ６は東壁際及び南壁際の床面からそれぞれ出土している。111・113は北東・南西部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉と考えられる。



第54図　第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
111	土師器	坏	[14.8]	(2.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ナデ　内面ヘラ磨き	覆土中	10%
112	須恵器	坏	[14.8]	(4.0)	[10.3]	白雲母・白色粒子 透明粒子	黒褐	普通	底部回転ヘラ削り調整	床面	10%
113	須恵器	坏	[14.2]	(4.5)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	５％

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP31	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	暗灰 にぶい黄	普通	外面縦位の平行叩き　内面青海波文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ６	磨石	(4.1)	4.7	(2.7)	(52.7)	砂岩ヵ	１面使用痕　裏面割れ	床面	

第19号住居跡（第55・56図）

位置　Ｃ９d9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第20号住居跡を掘り込み，第34号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.0m，短軸2.0mの長方形で，主軸方向がＮ－51°－Ｅである。壁高は15～24㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　東壁の北寄りに付設されている。遺存状態が悪く，煙道部と火床部のみが確認されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に55㎝掘り込まれ，立ち上がりは不明瞭である。

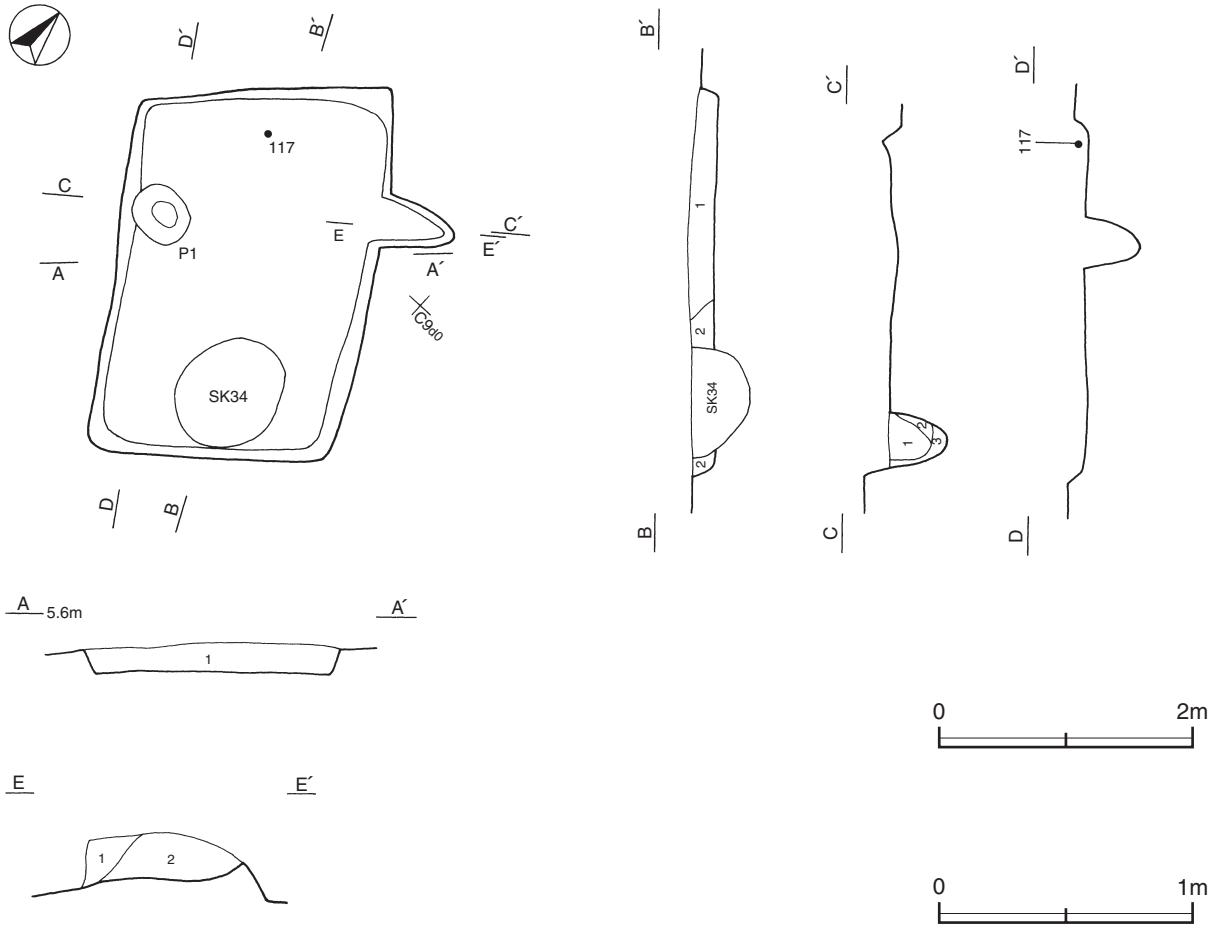
竈土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量

ピット　深さ45㎝で，西壁際にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量，黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂中量，炭化粒子微量

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

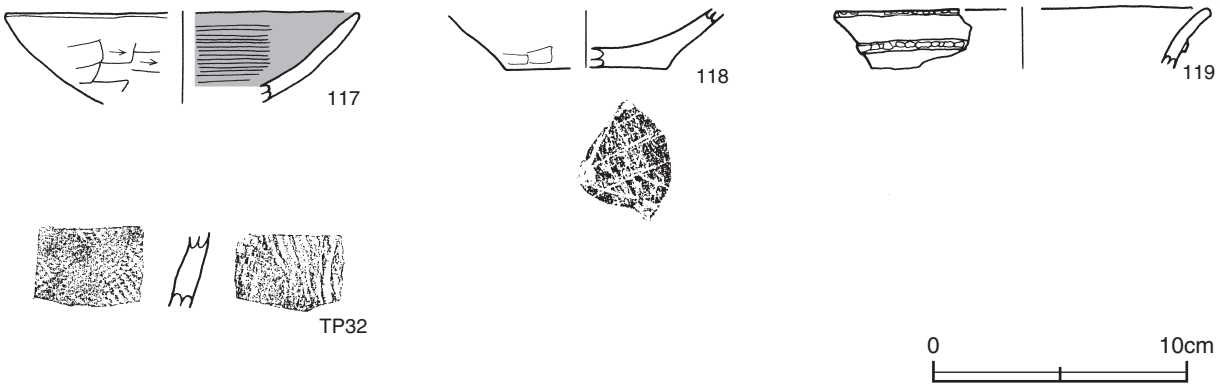
土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子少量，灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂少量



第55図　第19号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片184点（坏・高坏46，甕・甑138），須恵器片６点（坏・高台付坏４，蓋１，甕１）が出土している。また，混入した陶器片１点と流れ込んだ弥生土器片１点も出土している。遺物は覆土中からまばらに出土している。117は北壁部際の覆土下層，TP32は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，重複関係及び出土土器から８世紀代と考えられる。



第56図　第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
117	土師器	坏	[13.8]	(3.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き	覆土下層	10%
118	土師器	甕	－	(2.3)	[6.4]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部外面周縁ナデ　底部木葉痕	覆土中	5%
119	弥生土器	壺	[14.8]	(2.4)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい橙	普通	口唇部縄文施文　隆帯に縄文原体押圧	覆土中	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP32	須恵器	甕	白色粒子･透明粒子	灰	普通	外面格子目叩き　内面青海波文　内・外面叩き後ナデ	覆土中層	

第25号住居跡（第57～59図）

位置　Ｄ９a7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第14号住居跡，第１号方形竪穴遺構を掘り込んでいる。

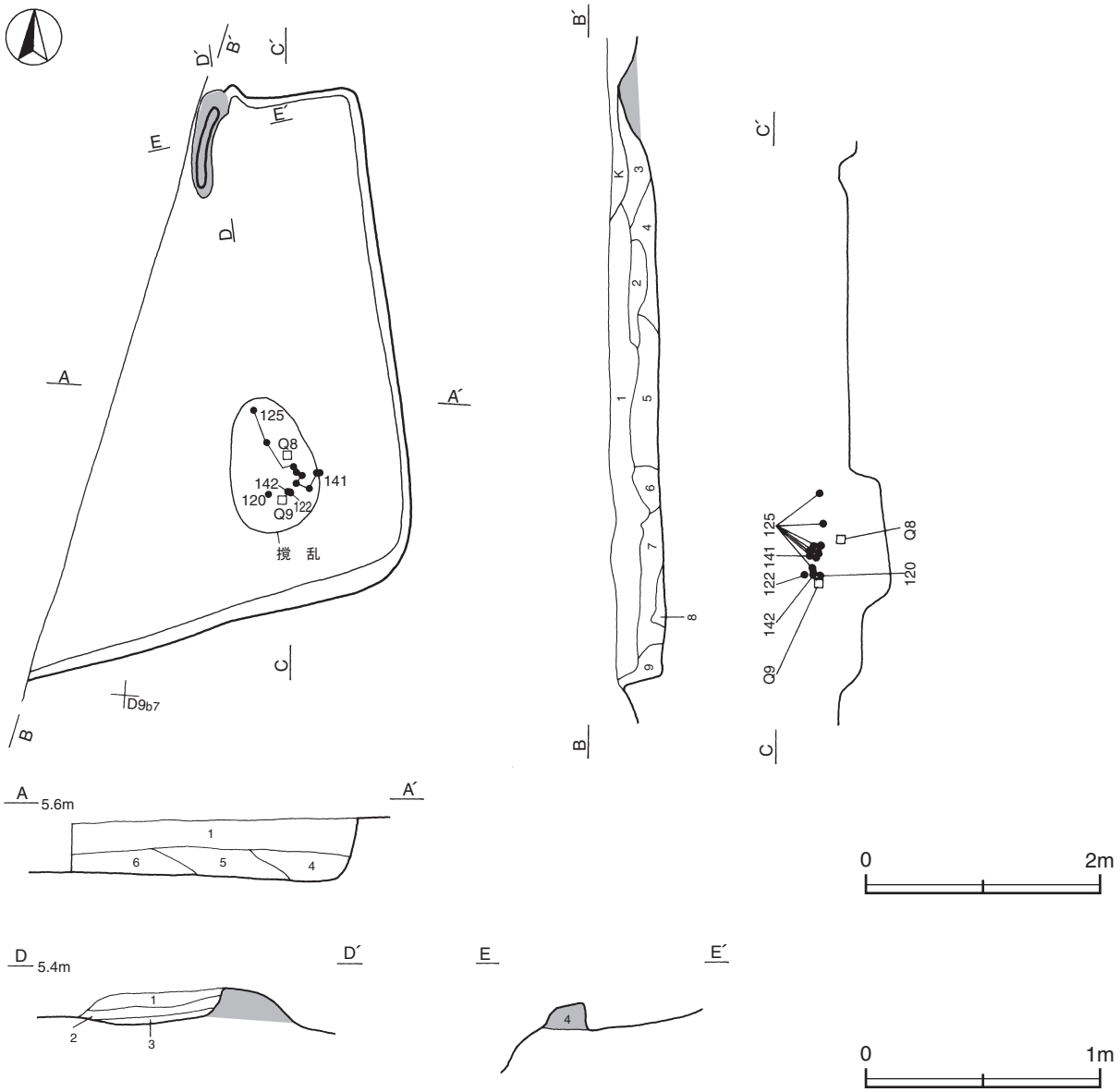
規模と形状　西側部分が削平されているため，東西軸3.3mのみ，南北軸4.3mである。平面形は方形もしくは長方形と推測され，主軸方向はＮ－10°－Ｗである。壁高は35～40cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで98cm，右袖部は遺存しておらず，袖部幅は不明である。左袖部は床面と同じ高さの地山面を基部として，ロームブロックと凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に20cm掘り込まれ，立ち上がりは不明瞭である。

竈土層解説

1　黒　　色　灰白色砂多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子少量，灰白色砂微量
3　黒　　色　焼土ブロック・炭化物・黄色砂微量
4　灰 黄 褐 色　ロームブロック・凝灰岩ブロック・砂中量



第57図　第25号住居跡実測図

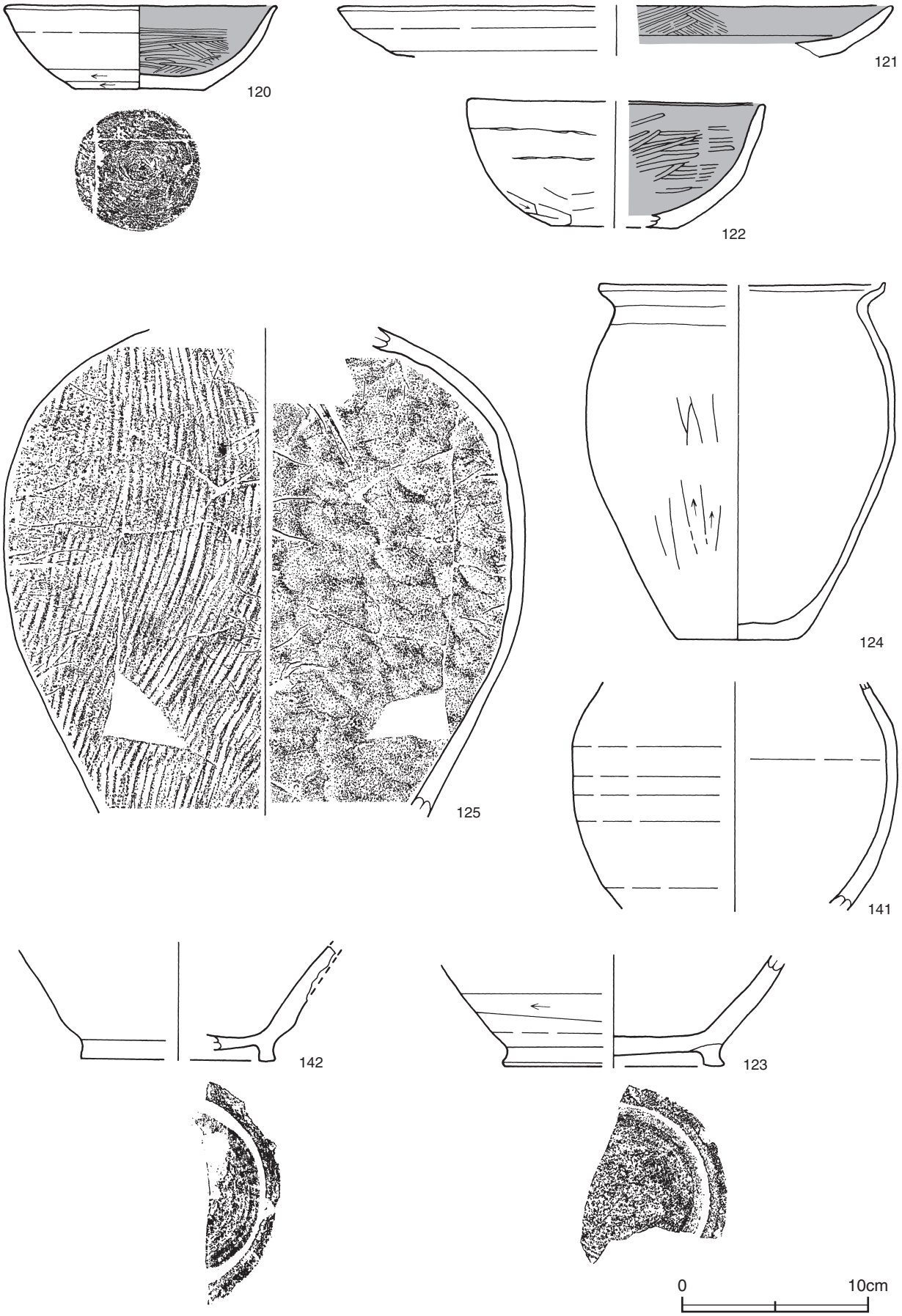
覆土　9層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

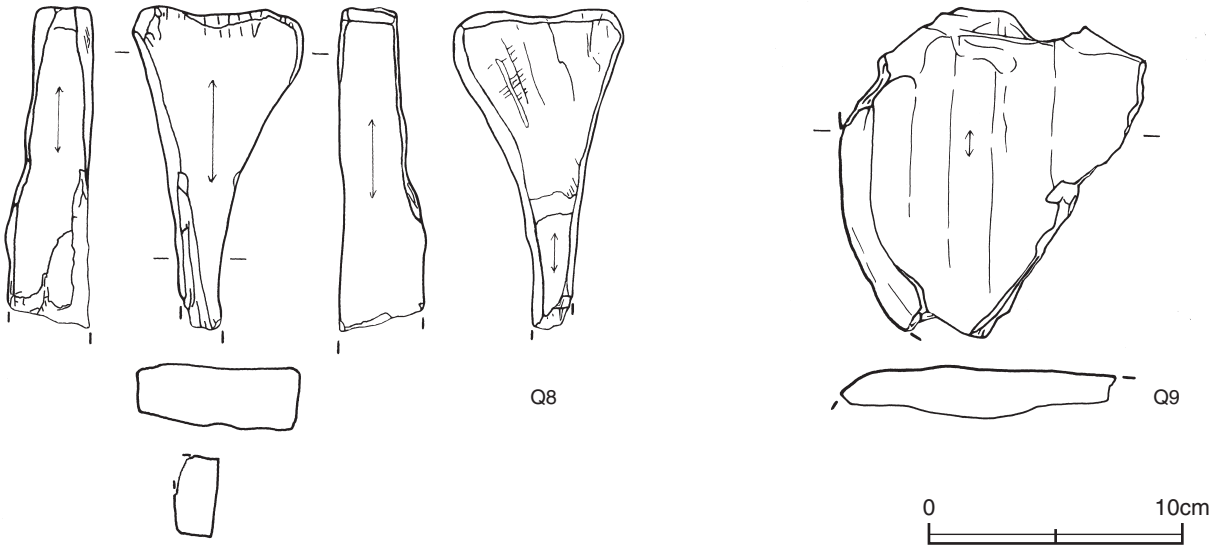
1	黄	色	灰白色砂中量
2	黒	色	灰白色砂・黄色砂少量
3	灰白	色	黒色砂中量
4	黒	色	灰白色砂・黄色砂多量
5	黄	色	灰白色砂・黄色砂少量
6	黄	色	黒色砂・灰白色砂・黄色砂中量
7	黒	色	焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂少量
8	灰白	色	黒色砂・黄色砂多量
9	灰白	色	焼土粒子・黒色砂多量

遺物出土状況　土師器片300点（坏・椀・鉢55，甕245），須恵器片71点（坏・高台付坏32，蓋３，瓶25，甕11），石器２点（砥石，砥石ヵ）が出土している。遺物は南壁寄りの覆土中から多く出土しており，特に南東コーナー部に集中している。121は竈の覆土中，123・124は覆土中からそれぞれ出土している。120・122・125・141・142・Ｑ８・Ｑ９は南東コーナー部の覆土上層に集中してそれぞれ出土しており，撹乱により掘り起こされ，再埋没したものと考えられる。

所見　時期は，重複関係と出土土器から９世紀中葉と考えられる。また，125と第42号土坑から出土しているTP36は接合関係にあることから，廃棄された時期が同じものと推測される。



第58図　第25号住居跡出土遺物実測図(1)



第59図　第25号住居跡出土遺物実測図(2)

第25号住居跡出土遺物観察表（第58・59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
120	土師器	坏	14.6	4.6	6.8	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　体部下端回転ヘラ削り調整 底部回転ヘラ削り調整	覆土上層	95%
121	土師器	盤	[29.8]	(2.7)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　体部内面ヘラ磨き	竈覆土中	10%
122	土師器	鉢	[15.8]	6.7	[6.8]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 輪積み痕残存　内面ヘラ磨き	覆土上層	20%
123	須恵器	長頸瓶	－	(6.0)	[11.2]	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ　体部下端回転ヘラ削り調整　底部回転ヘラ削り調整	覆土中	10%
124	土師器	甕	[15.4]	19.2	6.3	白色粒子・透明粒子	赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土中	40%
125	須恵器	甕	－	(26.3)	－	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	外面縦位の平行叩き　内面当て具無文痕	覆土上層	40% ＳＫ42のＴＰ36と接合
141	須恵器	瓶	－	(12.3)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黒褐	普通	ロクロナデ	覆土上層	10%
142	須恵器	瓶	－	(6.3)	[10.4]	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ　底部回転ヘラ削り調整	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ８	砥石	(12.7)	6.7	3.2	(235.0)	珪質片岩	４面使用により平滑で，中央部湾曲	覆土上層	
Ｑ９	砥石	(13.1)	(11.9)	(2.0)	(466.0)	結晶片岩	１面使用　研磨によって使用面に稜が出来ている	覆土上層	

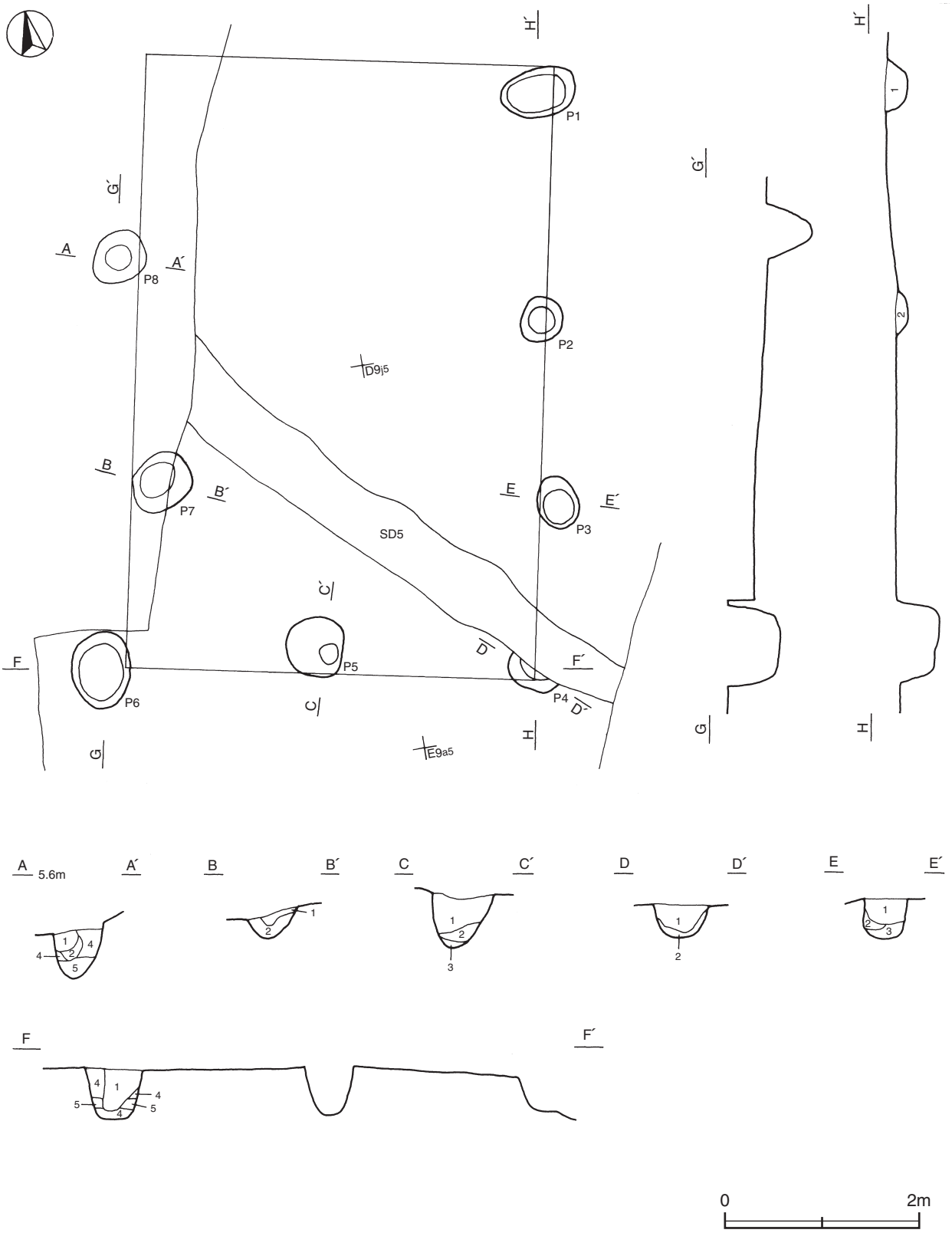
表５　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長(東西)軸×短(南北)軸	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新)
								主柱穴	出入口ピット	ピット	竈				
1	Ｅ９a4	Ｎ－０°	［方形］	(4.8)×4.8	25～48	平坦	一部	4	1	－	北	自然	土師器　須恵器　釘	８世紀中葉	本跡→SB1～3
5	Ｄ９f3	不明	［長方形］	(2.5)×2.8	19～21	平坦	－	－	－	1	－	自・人	土師器　須恵器 刀子　釘　不明鉄製品	８世紀中葉	SI4→SI6，SB17→本跡→Pit101・102
6	Ｄ９f4	不明	［方形・長方形］	(2.0)×(2.7)	不明	平坦	－	－	－	－	－	－	土師器　須恵器 敲石　不明鉄製品	８世紀前葉	SI4→本跡→SI5
7	Ｄ９d4	不明	［方形］	(3.6)×3.3	4～10	平坦	一部	－	－	－	－	不明	土師器	８世紀中葉	ＳＩ10→ＳＤ6→ＳＢ8→本跡→SK18・19
9	Ｄ９f5	不明	［方形・長方形］	(1.2)×(5.2)	25	平坦	一部	－	－	－	－	自然	土師器　須恵器	８世紀後葉	本跡→SB4，SD8，SK38
14	Ｄ９a7	Ｎ－７°－Ｗ	長方形	3.9×3.3	15～40	平坦	－	－	－	－	北	自然	土師器　須恵器 石製紡錘車　刀子　釘	８世紀代	UP1，SK45→本跡→SI25
17	Ｃ９h8	Ｎ－２°－Ｗ	長方形	3.4×2.8	10～14	平坦	－	－	1	1	北	自然	土師器　須恵器　敲石	８世紀中葉	SI23→本跡→Pit80
19	Ｃ９d9	Ｎ－51°－Ｅ	長方形	3.0×2.0	15～24	平坦	－	－	1	－	東	自然	土師器　須恵器	８世紀代	SI20→本跡→SK34
25	Ｄ９a7	Ｎ－10°－Ｗ	［方形・長方形］	(3.3)×4.3	35～40	平坦	－	－	－	－	北	人為	土師器　須恵器　砥石	９世紀中葉	SI14，UP1→本跡

(2) 掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第60図）

位置　Ｄ９i4～Ｄ９j5区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。



第60図　第１号掘立柱建物跡実測図

重複関係　第１・８・26号住居跡，第13・14号土坑を掘り込み，第５号溝に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－12°－Ｅの南北棟である。規模は，桁行6.3m（21尺），梁行4.2m（14尺）で，柱間寸法は，東側桁行が北から2.7m（９尺），1.8m（６尺），1.8m（６尺），西側桁行及び梁行は2.1m（７尺）を基調としている。

柱穴　８か所。西側桁行の北隅の柱穴が確認されていない。平面形は円形・楕円形で，深さ11～65㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	灰白色砂多量	
2	黒　色	灰白色砂少量	
3	黒　色	灰白色砂微量	
4	灰白色	黒色砂中量，炭化粒子微量	
5	黒　色	灰白色砂多量	

遺物出土状況　土師器片62点（坏・鉢32，甕30），須恵器片22点（坏・高台付坏３，蓋５，甕14）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，第１号住居跡，第14号土坑，第５号溝跡との重複関係から，８世紀後葉と考えられる。

第２号掘立柱建物跡（第61・62図）

位置　Ｅ９a3～Ｅ９c4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号住居跡，第３号掘立柱建物跡，第１号柵跡を掘り込み，第２～４号溝に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－15°－Ｅの南北棟である。規模は，桁行7.2m（24尺），梁行4.8m（16尺）で，柱間寸法は，桁行・梁行ともに2.4m（８尺）を基調としている。

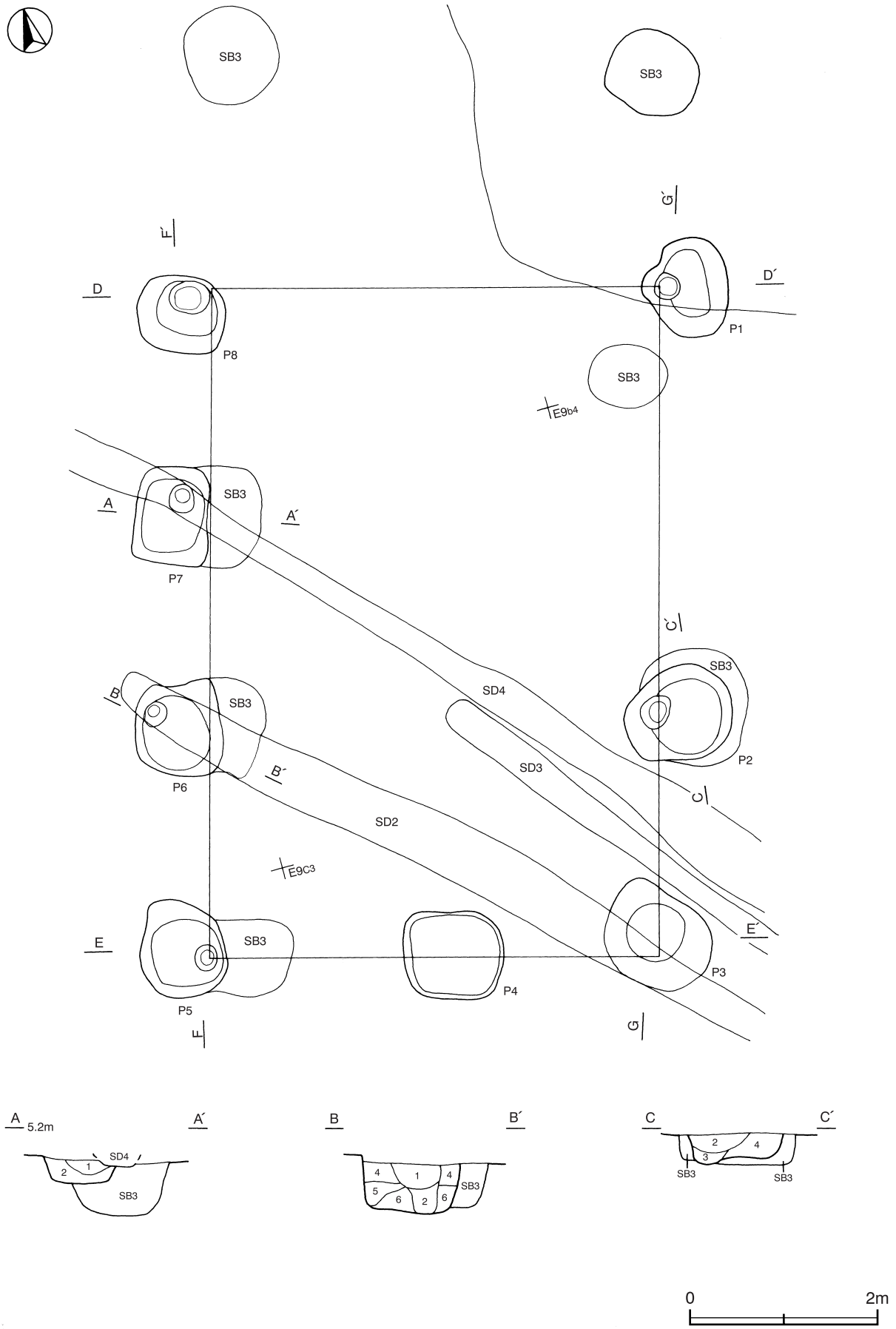
柱穴　８か所。北側梁行の中央柱の柱穴が確認されていない。平面形は楕円形・隅丸長方形を呈しており，深さは24～74㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は地山の砂と黒色砂を充填した埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

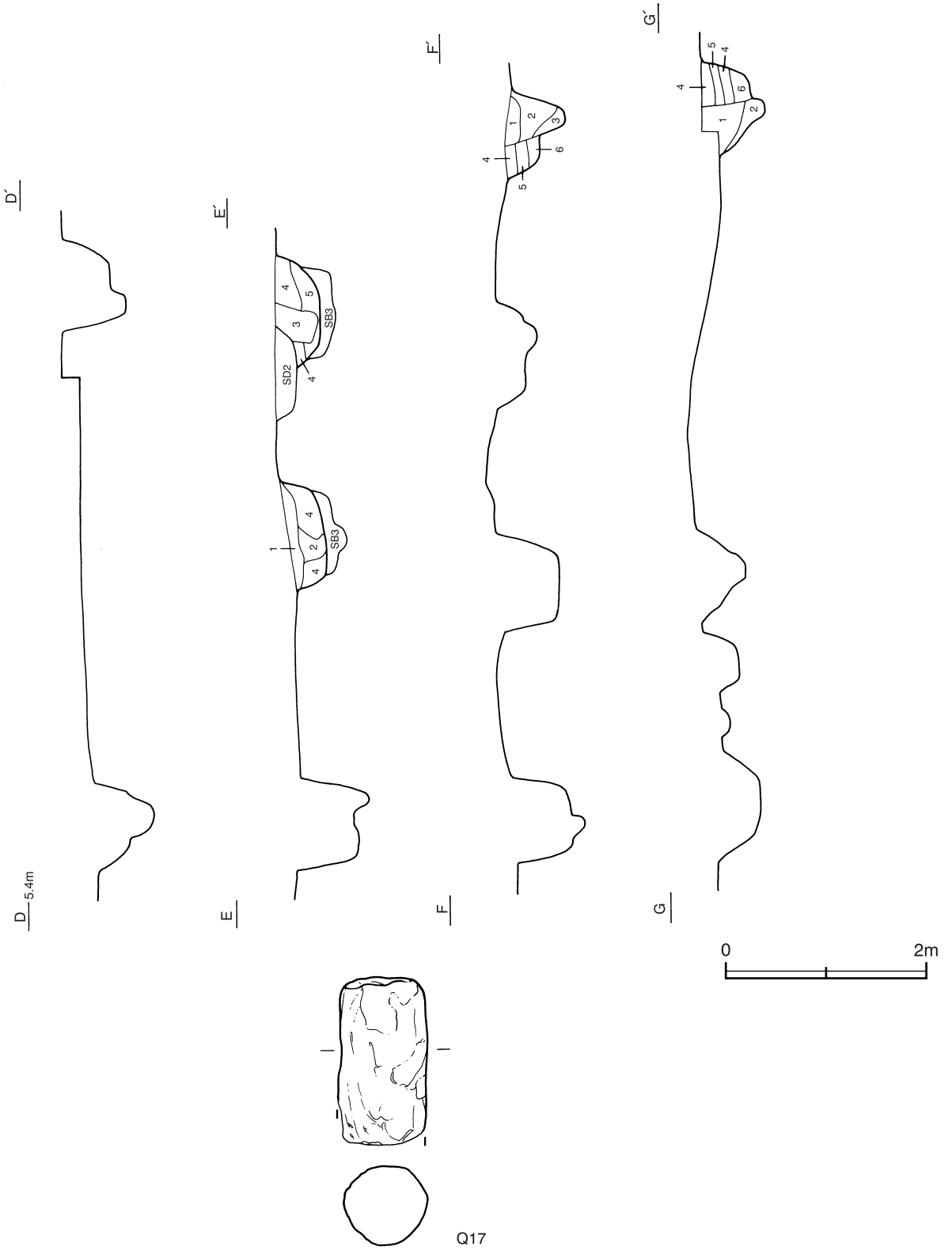
1	黒　色	灰白色砂微量	
2	黒　色	灰白色砂少量	
3	黒　色	灰白色砂・黄色砂微量	
4	灰白色	黒色砂・黄色砂多量	
5	黒　色	炭化粒子・灰白色砂微量	
6	黄　色	黒色砂少量	

遺物出土状況　土師器片62点（坏・椀・鉢32，甕・甑30），須恵器片39点（坏・高台付坏20，蓋５，甕14），石器１点（支脚）が出土している。Q17はＰ１の埋土から出土している。土器はいずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，第１号住居跡との重複関係及び第１号掘立柱建物跡とほぼ同じ桁行方向であり，南北に並んでいることから８世紀後葉と考えられる。各柱穴が第３号掘立柱建物跡の各柱穴とほぼ重複し，位置と桁行方向も同じであることから第３号掘立柱建物から本建物への建て替えが行われたと考えられる。



第61図　第２号掘立柱建物跡実測図



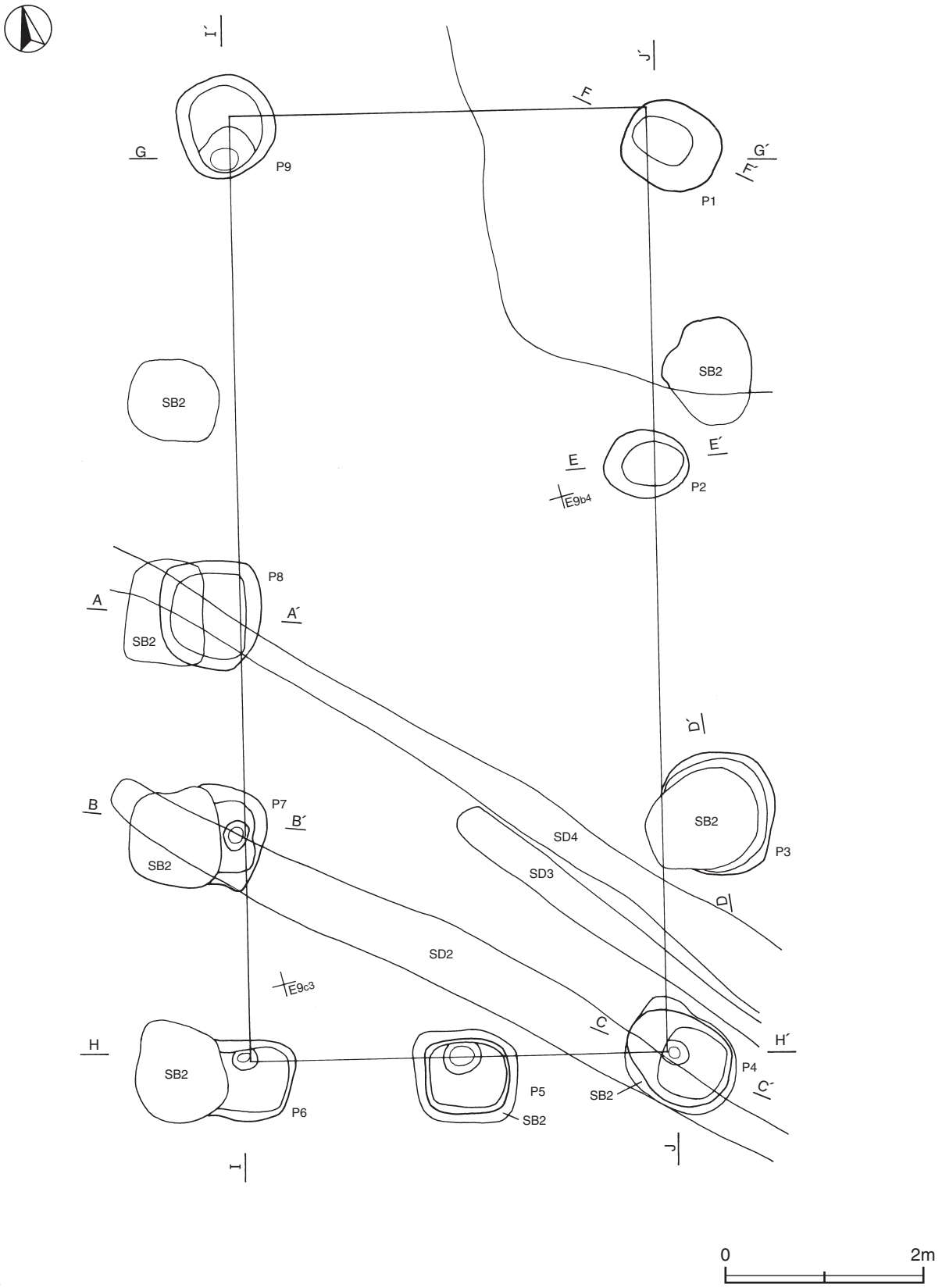
第62図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第62図）

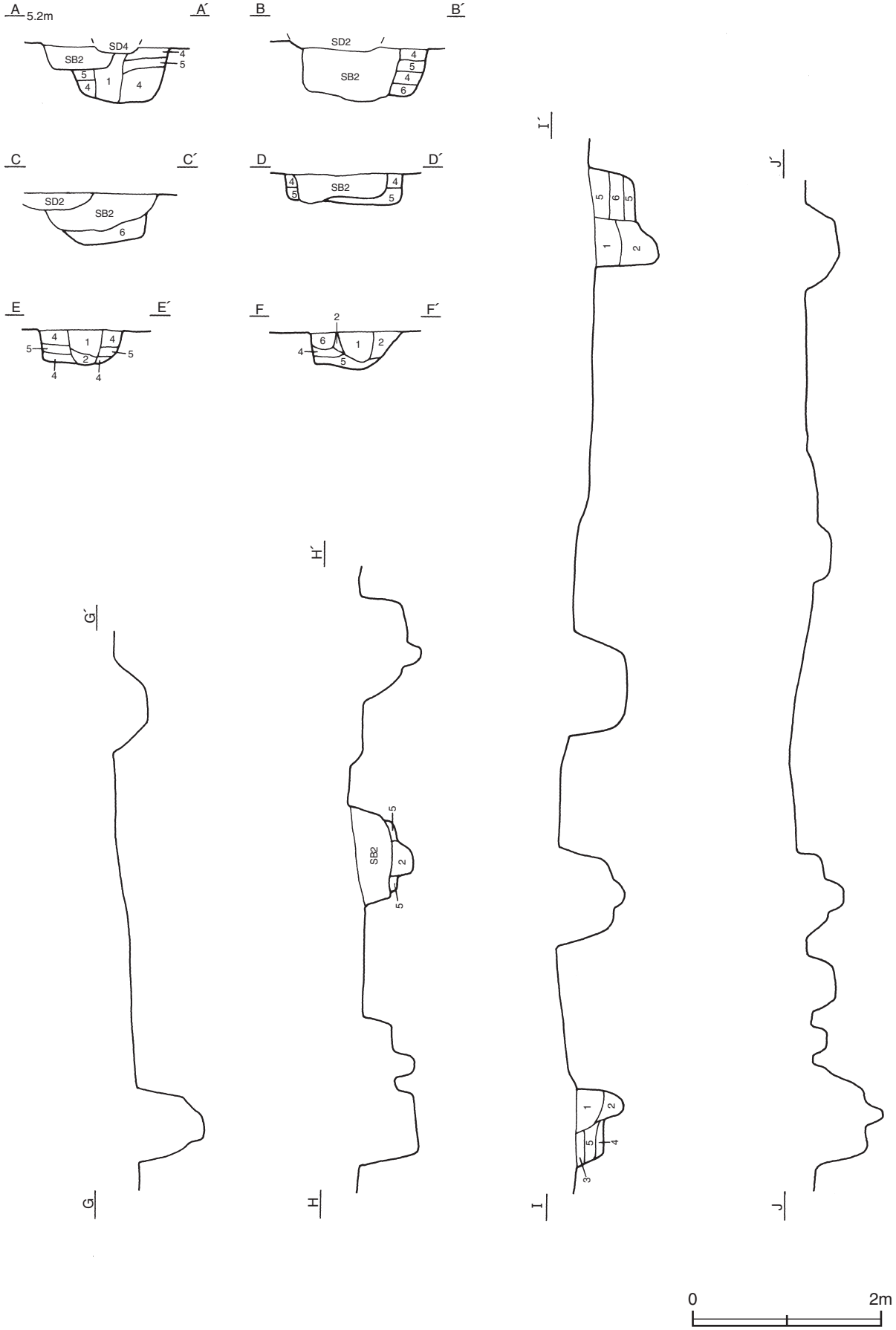
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q17	支脚	(8.4)	4.3	4	(102.6)	凝灰岩	円柱状に整形　内部まで赤変	Ｐ１埋土	

第３号掘立柱建物跡（第63・64図）

位置　Ｄ９j3～Ｅ９c4区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。



第63図　第３号掘立柱建物跡実測図(1)



第64図　第３号掘立柱建物跡実測図(2)

重複関係　第１号住居跡を掘り込み，第２号掘立柱建物，第２～４号溝に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－15°－Ｅの南北棟である。規模は，桁行9.6m（32尺），梁行4.2m（14尺）で，柱間寸法は，東側桁行が北側から3.6m（12尺），3.6m（12尺），2.4m（８尺），西側桁行が北側より4.8m（16尺），2.4m（８尺），2.4m（８尺）で，梁行は2.1m（７尺）を基調としている。

柱穴　９か所。北側梁行の中央柱の柱穴が確認されていない。平面形は楕円形・隅丸長方形を呈しており，深さは24～74㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	灰白色砂微量	
2	黒　色	灰白色砂・黄色砂中量	
3	黒　色	灰白色砂・黄色砂少量	
4	黄　色	黒色砂・灰白色砂多量	
5	灰白色	黒色砂・黄色砂中量，炭化粒子微量	
6	黒　色	灰白色砂・黄色砂多量，炭化粒子少量	

遺物出土状況　土師器片42点（坏・椀・鉢９，甕・甑33），須恵器片９点（坏・高台付坏５，蓋１，甕３）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　建て替え後の第２号掘立柱建物跡とは，位置と桁行方向が変わらないことからほとんど時期差がないものと推測され，時期は８世紀後葉と考えられる。

第４号掘立柱建物跡（第65・66図）

位置　Ｄ９f5～Ｄ９g6区で，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第２・９号住居跡を掘り込み，第41号土坑に掘り込まれている。

規模と構造　桁行２間，梁行１間の身舎の東側に庇が付属する一面庇の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－18°－Ｅの南北棟である。規模は，身舎が桁行4.5m（15尺），梁行2.4m（８尺）で，庇の出は1.2m（４尺）である。柱間寸法は，東側・西側桁行が北側より2.7m（９尺），1.8m（６尺）で，Ｐ５・Ｐ６が南側にずれている。梁行は2.4m（８尺）を基調としている。

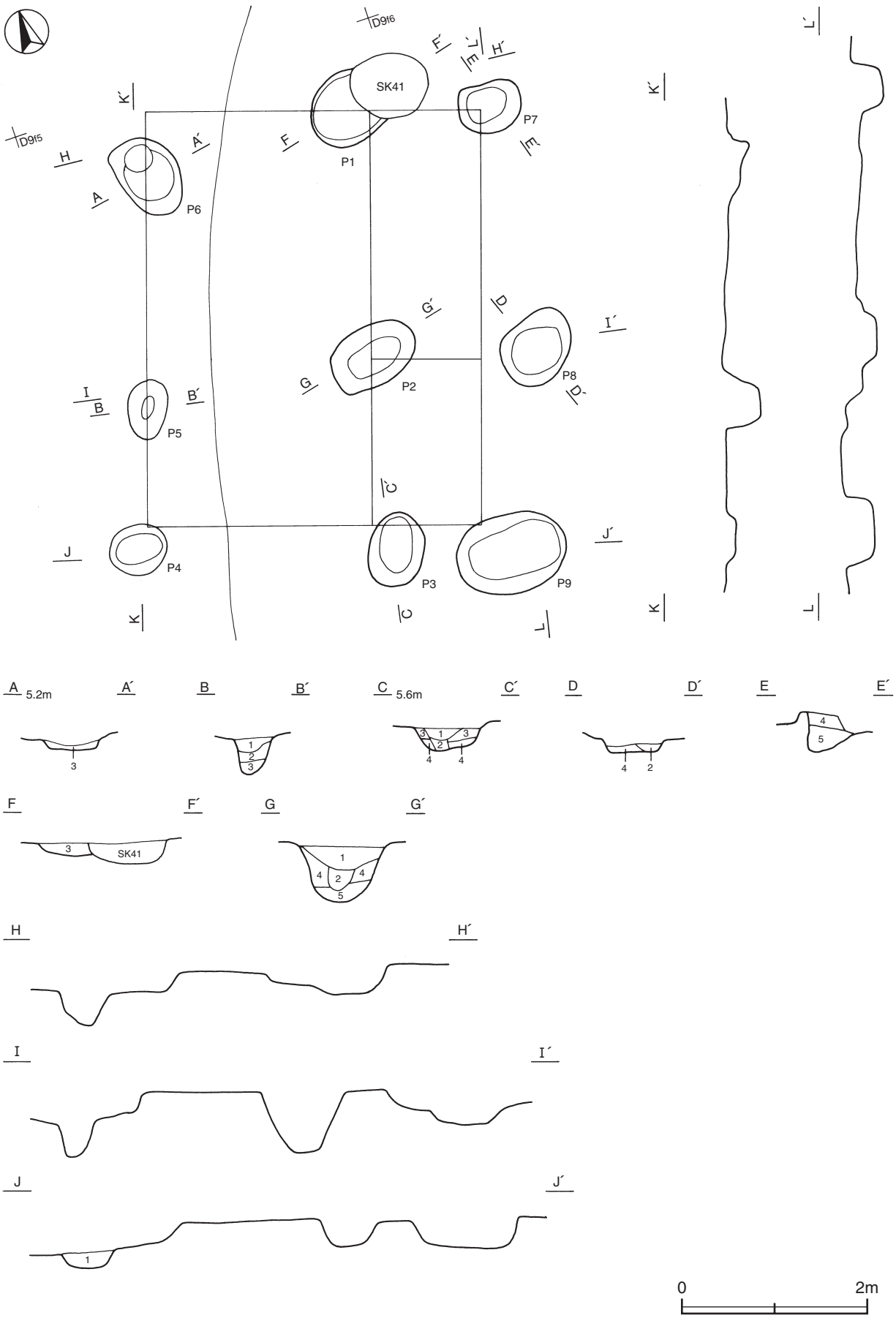
柱穴　９か所。平面形は楕円形で，深さは12～60㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は地山の砂と黒色砂を充填した埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

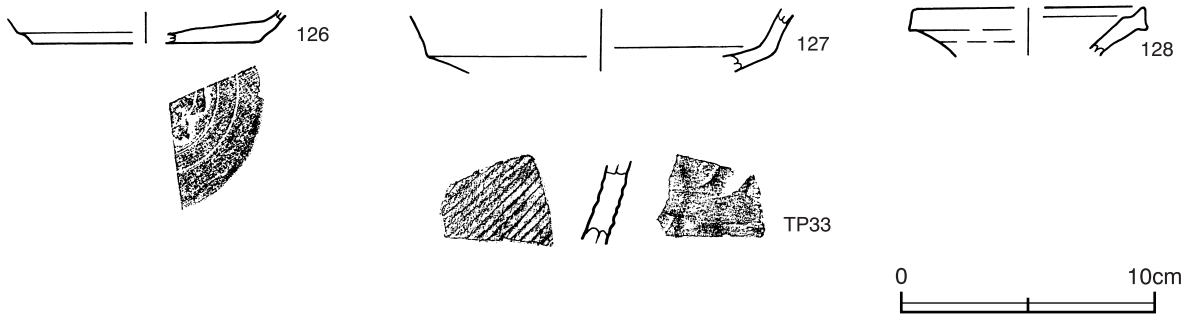
1	黒　色	灰白色砂微量
2	黒　色	灰白色砂多量
3	黒　色	炭化粒子・灰白色砂微量
4	灰白色	黒色砂多量
5	黒　色	炭化粒子・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片93点（坏・椀・鉢37，甕・甑56），須恵器片14点（坏・高台付坏11，蓋１，瓶１，甕１）が出土している。また，混入した陶器片１点も出土している。126・128はＰ３・Ｐ８の覆土中からそれぞれ出土している。127はＰ５の埋土から出土している。

所見　時期は，重複関係及び第１～３・５号掘立柱建物跡と桁行方向をほぼ同じくして配置されていることから，８世紀後葉と考えられる。



第65図　第４号掘立柱建物跡実測図



第66図　第４号掘立柱建物跡出土遺物実測図

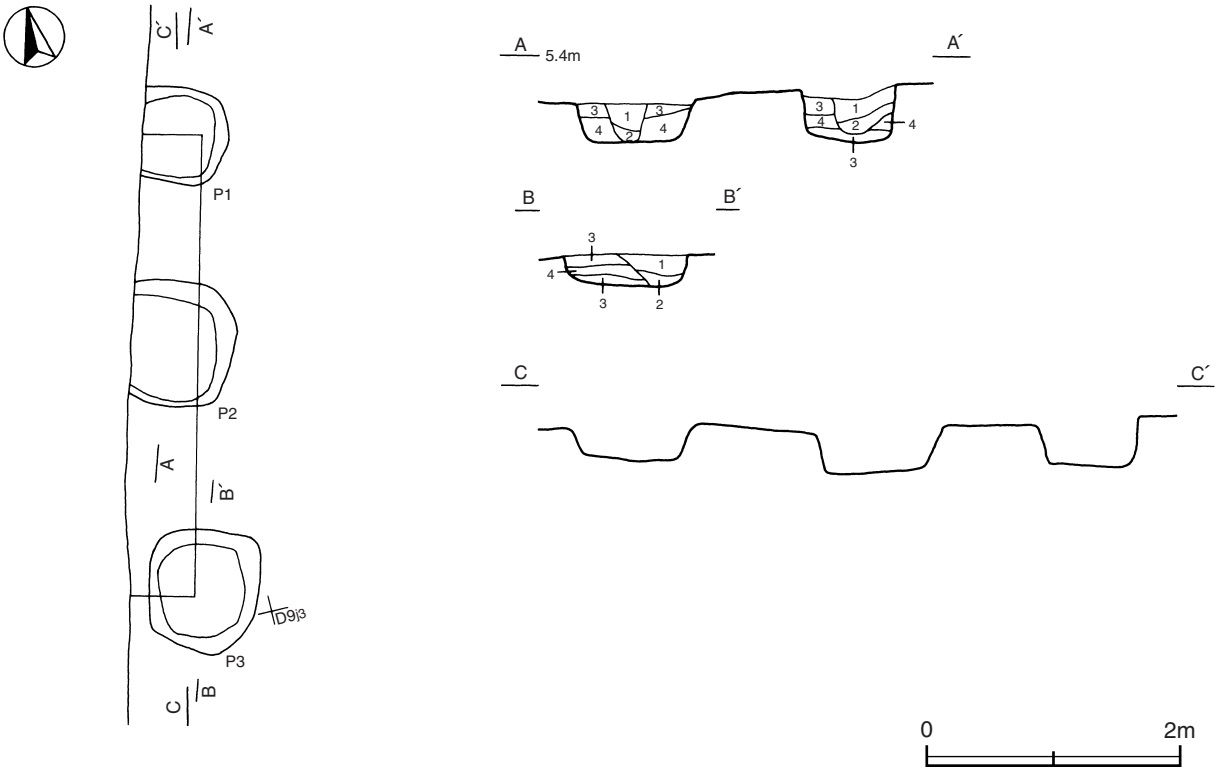
第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第66図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
126	須恵器	坏	－	(1.2)	[8.8]	海綿骨針・白色粒子 灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	Ｐ３ 覆土中	10%
127	須恵器	坏	－	(2.5)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	Ｐ５埋土	5%
128	須恵器	瓶	[9.0]	(2.0)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰オ リーブ	普通	ロクロナデ	Ｐ８ 覆土中	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP33	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	外面斜位の平行叩き　内面当て具による無文痕	Ｐ５埋土	

第５号掘立柱建物跡（第67図）

位置　Ｄ９h2～Ｄ９j2区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第67図　第５号掘立柱建物跡実測図

規模と構造　西側のほとんどが調査区域外に延びているため，南北２間のみ確認されている。南北に柱穴が延びず，柱穴の掘り方の形状から２間×１間の南北棟ではなく，梁行２間で桁行方向Ｎ－80°－Ｗの側柱建物跡で，東西棟と推測される。確認された規模は，梁行3.6m(12尺)で，柱間寸法は1.8m(６尺)である。

柱穴　３か所。平面形は隅丸方形で，深さは30～45㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂・黄色砂多量
4　灰　白　色　黒色砂多量，黄色砂中量

遺物出土状況　土師器片65点（坏・鉢13，甕52），須恵器片６点（坏・高台付坏４，甕２）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，柱穴の規模･形状が類似する第１～３号掘立柱建物跡との配置から，８世紀後葉と考えられる。

第７号掘立柱建物跡（第68図）

位置　Ｃ９a8～Ｃ９c9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第15・16号住居跡，第15号溝跡を掘り込み，第８号ピットに掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－25°－Ｗの南北棟である。規模は，桁行6.3m(21尺)，梁行4.2m（14尺）で，柱間寸法は桁行・梁行ともに2.1m（７尺）を基調としている。

柱穴　10か所。平面形は楕円形で，深さは17～52㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土で，Ｐ５・Ｐ６には柱抜き取り穴が確認されている。その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂多量，焼土粒子中量
4　灰　白　色　黒色砂多量，焼土粒子・炭化粒子中量

遺物出土状況　土師器片128点（坏・鉢４，甕124），須恵器片１点（坏・高台付坏）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

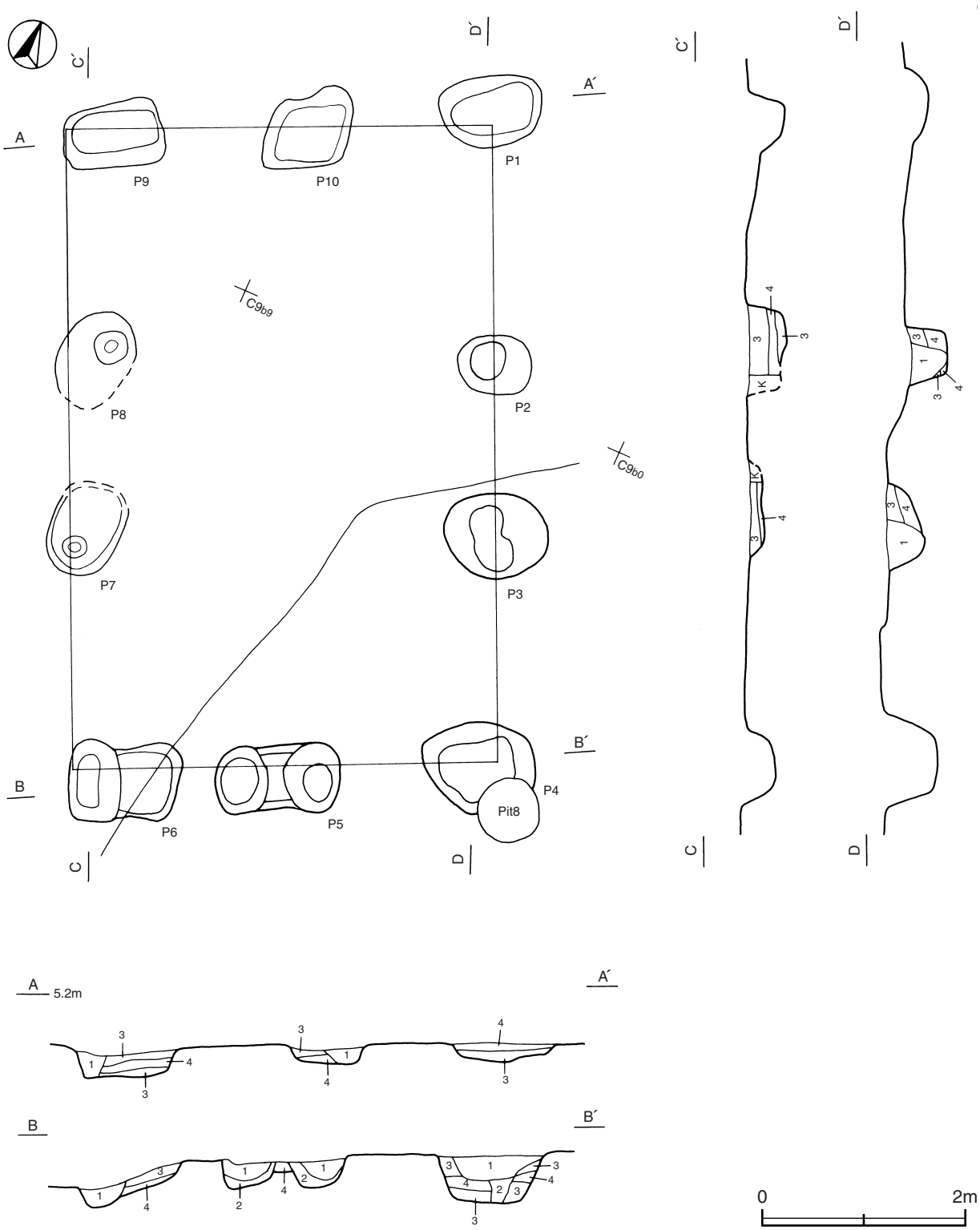
所見　時期は，重複関係から古墳時代後期以降であり，８世紀以降の住居跡及び建物跡との主軸方向の比較及び配置関係から９世紀中葉と考えられる。

第８号掘立柱建物跡（第69図）

位置　Ｄ９d4～Ｄ９e5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第４・10号住居跡，第６号溝跡，第23号土坑を掘り込み，第７号住居，第19号土坑に掘り込まれている。

規模と構造　桁行・梁行ともに２間の総柱建物跡で，桁行方向Ｎ－90°の東西棟である。規模は，桁行3.0m(10尺)，梁行2.4m（８尺）で，柱間寸法は，桁行が1.5m（５尺）で，梁行が1.2m（４尺）を基調としている。



第68図　第７号掘立柱建物跡実測図

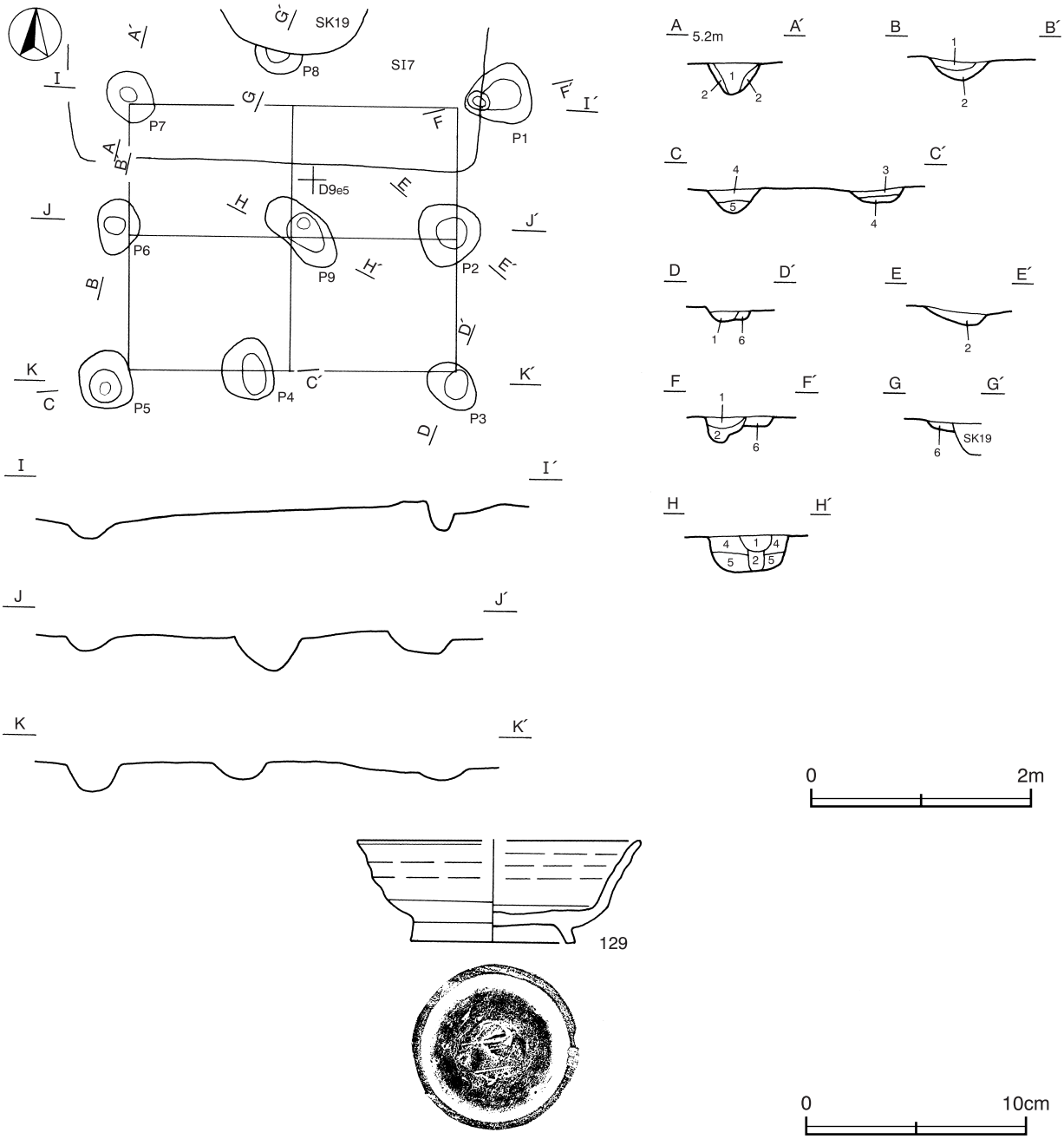
柱穴　９か所。平面形は円形・楕円形で，深さは９～30㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は地山の砂と黒色砂及び粘土の埋土である。第６層は粘土である。突き固められていると考えられるが，第６層以外は自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1　黒　　色　焼土粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量
3　灰　白　色　凝灰岩ブロック・焼土粒子中量，黒色砂少量
4　黒　　色　灰白色砂中量，凝灰岩ブロック・黄色砂少量
5　灰　白　色　黒色砂多量，炭化粒子微量
6　灰 黄 褐 色　凝灰岩ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片56点（坏・椀・鉢11，甕・甑45），須恵器片13点（坏・高台付坏８，蓋５）が出土している。129はＰ８の埋土から斜位で出土している。

所見　時期は，出土土器及び重複関係から８世紀前葉と考えられる。



第69図　第８号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第８号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
129	須恵器	高台付坏	[12.7]	4.7	7.6	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	Ｐ８埋土	60%

第９号掘立柱建物跡（第70図）

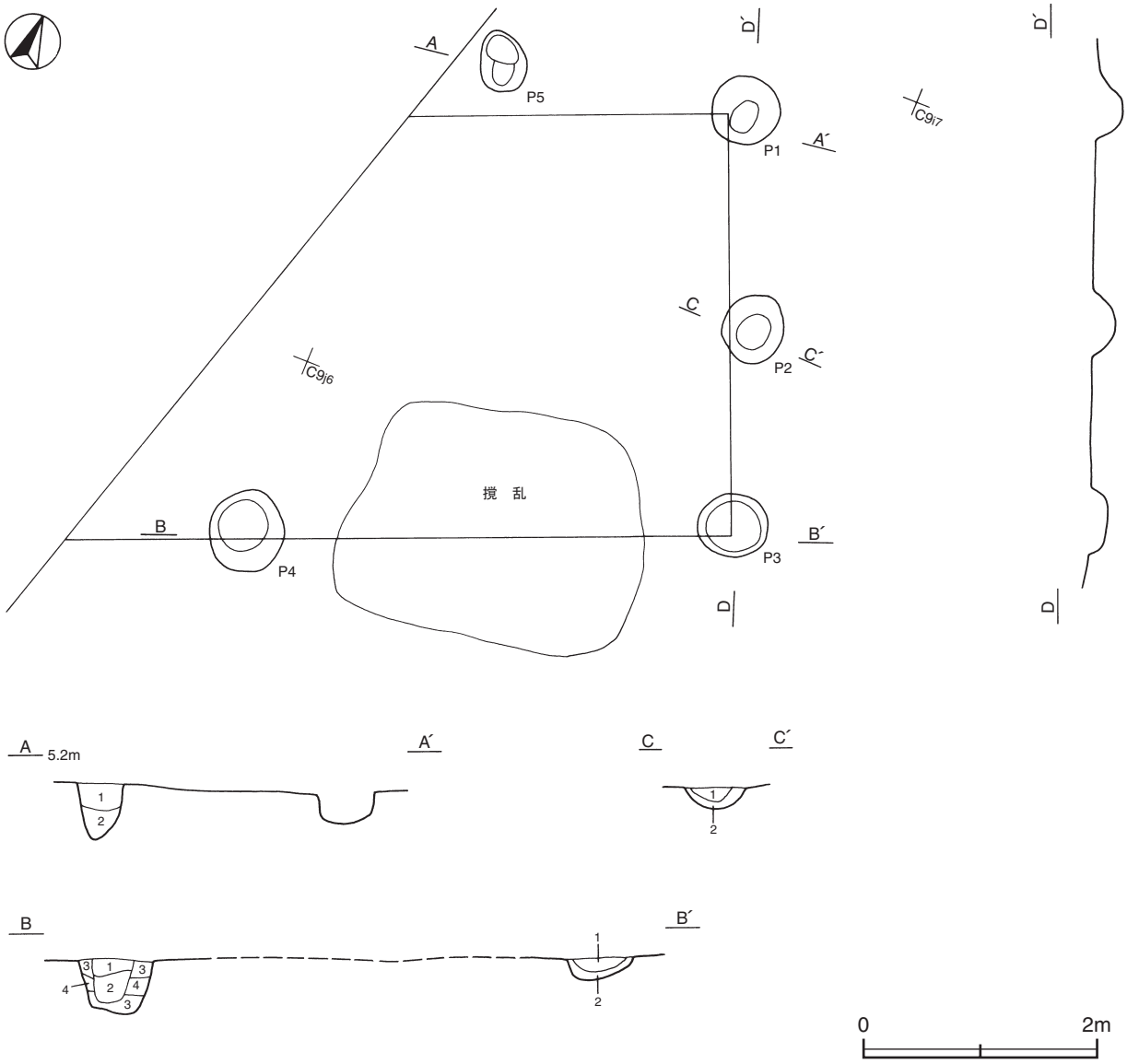
位置　Ｃ９i6～Ｃ９j7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と構造　西側が調査区域外に延びていることや撹乱を受けているため，南北２間，東西１間が確認されただけである。東・南北に柱穴が延びないことから，梁行２間で桁行方向Ｎ－68°－Ｅの側柱建物跡で，東西棟と推測される。確認された規模は桁行4.2m（14尺），梁行3.6m（12尺）で，柱間寸法は桁行が2.1m（７尺）である。この柱間寸法から，撹乱されている箇所に柱穴が想定され，桁行３間以上の建物跡と推測される。梁行は1.8m（６尺）である。

柱穴　５か所。平面形は円形・楕円形で，深さは15～50㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色　炭化粒子・灰白色砂微量	3	黒　色　灰白色砂多量，炭化物微量
2	黒　色　灰白色砂中量	4	灰　白　色　黄色砂多量，炭化粒子・黒色砂中量



第70図　第９号掘立柱建物跡実測図

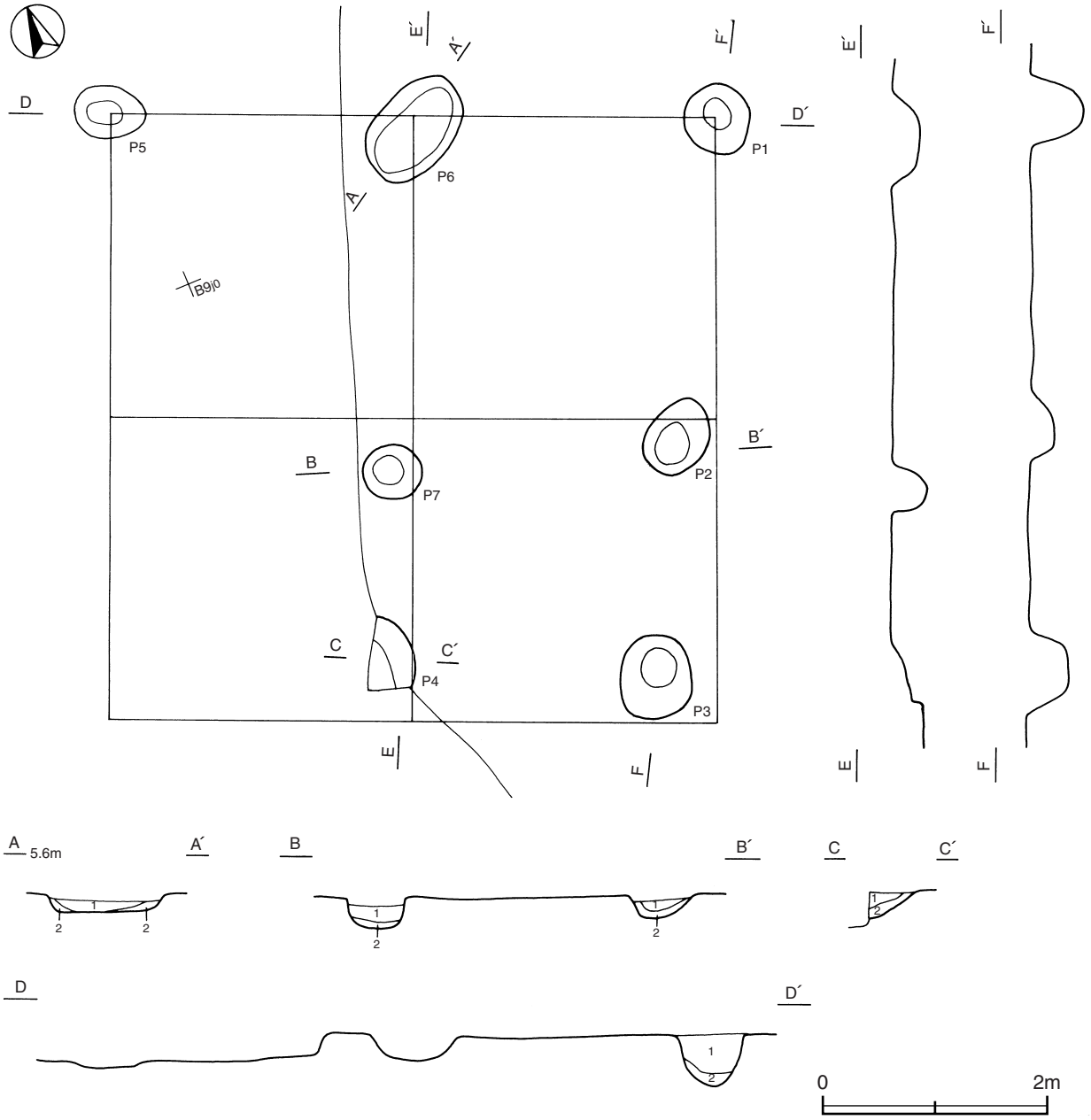
所見　配置関係から，第16号掘立柱建物跡と同時期に機能していたものと推測される。第16号掘立柱建物跡が第23号住居跡より新しいことから７世紀後葉以降であり，８世紀以降の住居跡及び建物跡との主軸方向の比較及び配置関係から９世紀中葉と考えられる。

第11号掘立柱建物跡（第71図）

位置　Ｂ９i9～Ｃ９a0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第13号溝跡を掘り込んでいる。

規模と構造　西側半分が削平されているため柱穴が２か所確認されていないが，桁行・梁行ともに２間の総柱建物跡と考えられる。１辺5.4m（18尺）の方形で，桁行と梁行の区別は困難である。南北軸はＮ－20°－Ｅであり，柱間寸法は2.7m（９尺）を基調としている。



第71図　第11号掘立柱建物跡実測図

柱穴　７か所。平面形は円形・楕円形で，深さは15～50㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土である。

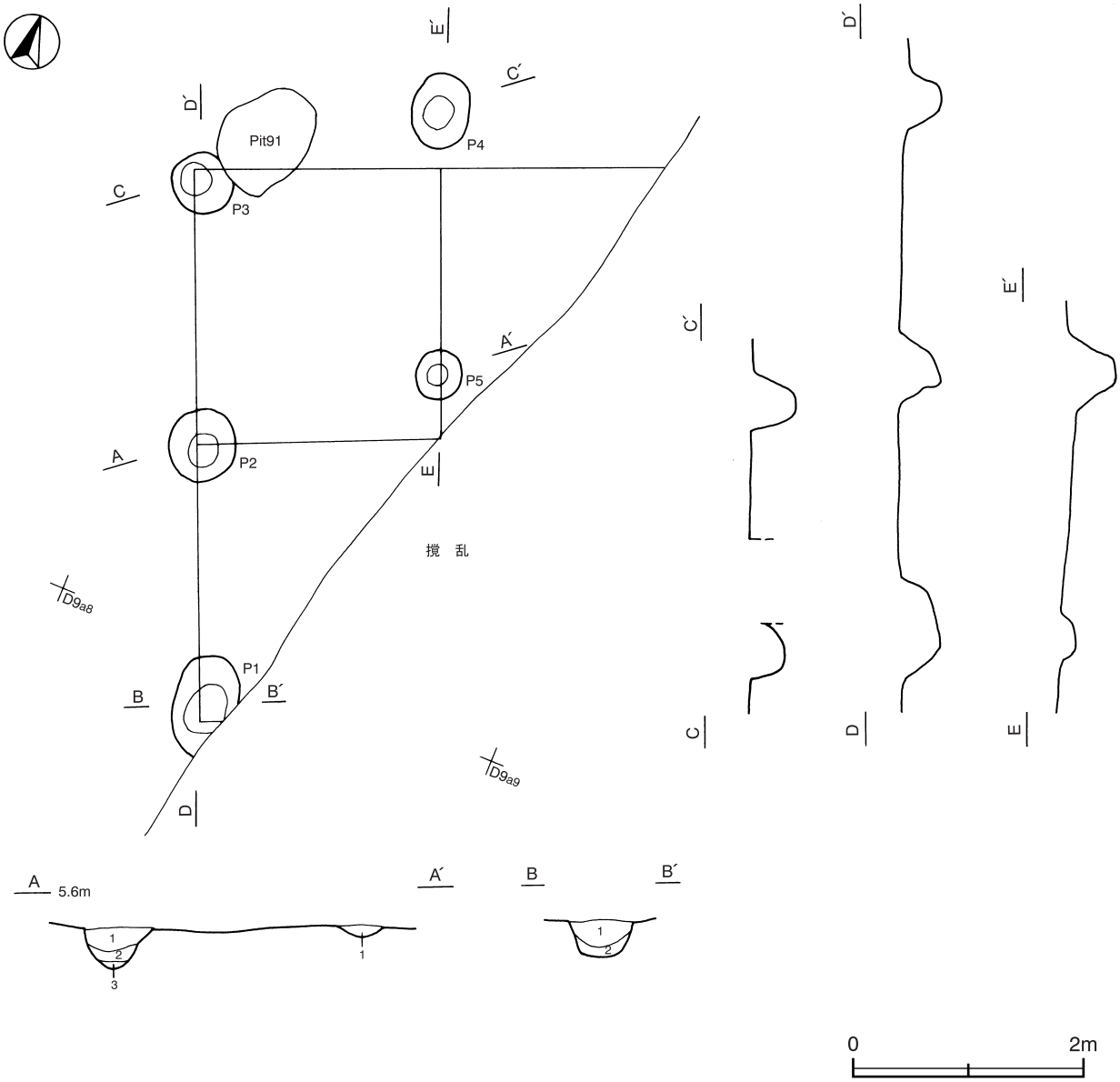
土層解説（各ピット共通）
１　黒　　色　灰白色砂中量　　２　黒　　色　灰白色砂少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片15点（坏・椀・鉢），須恵器片１点（蓋）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　重複関係から７世紀前葉以降であり，主軸方向が８世紀中葉の第４号掘立柱建物跡とほぼ同じことから，それらと同じ時期に機能していたものと考えられる。

第16号掘立柱建物跡（第72図）

位置　Ｃ９i8～Ｄ９a8区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。



第72図　第16号掘立柱建物跡実測図

重複関係　第23号住居跡を掘り込み，第91号ピットに掘り込まれている。

規模と構造　東・南側が撹乱を受けているため，南北２間，東西１間のみ確認されている。小ぶりで浅い屋内の柱穴があることから，２間×２間の総柱建物跡で，桁行方向Ｎ－22°－Ｗの南北棟と推測される。確認された規模は桁行4.8m（16尺），梁行2.1m（７尺）で，柱間寸法は桁行が2.4m（８尺）で，梁行が2.1m（７尺）である。

柱穴　５か所。平面形は円形・楕円形で，深さは10～40㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土である。

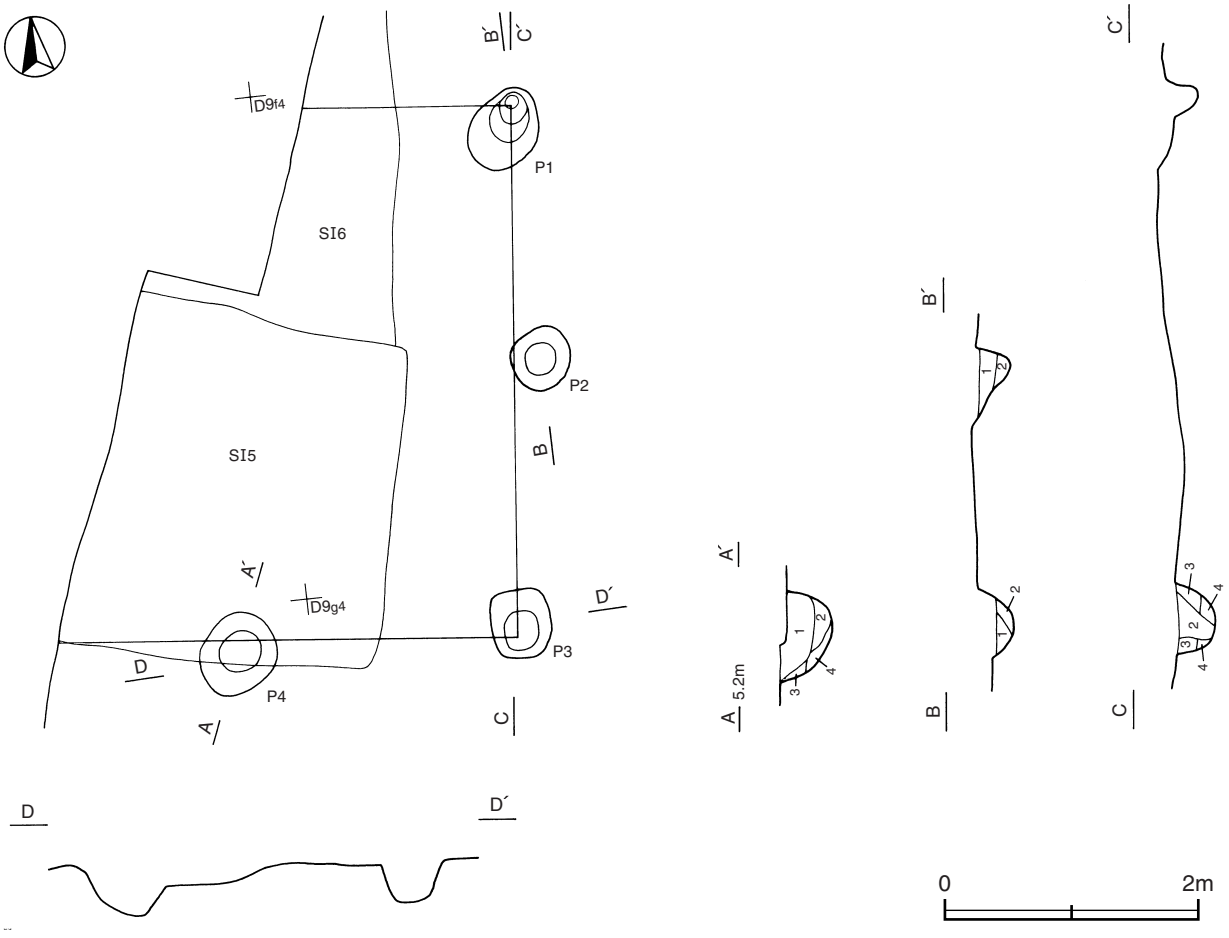
土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　焼土粒子・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片20点（甕）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　第23号住居跡との重複関係から７世紀後半以降で，第25号住居跡，第９号掘立柱建物跡との配置関係から同時期の建物跡と推測され，９世紀中葉と考えられる。

第17号掘立柱建物跡（第73図）

位置　Ｄ９f4～Ｄ９g4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第73図　第17号掘立柱建物跡実測図

重複関係　第４号住居跡を掘り込み，第５・６号住居に掘り込まれている。

規模と構造　西側が調査区域外に延びているために，南北２間，東西１間のみ確認されている。柱間寸法が揃っていることが２間×１間の南北棟と違うことから，梁行２間で桁行方向Ｎ－87°－Ｗの側柱建物跡で，東西棟と推測される。確認された規模は桁行2.1m（７尺），梁行4.2m（14尺）で，柱間寸法は2.1m（７尺）である。

柱穴　４か所。平面形は円形・楕円形を呈しており，深さ18～34㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は地山の砂と黒色砂を充填した埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1　黒　　色　灰白色砂少量，炭化粒子微量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂多量
4　黄　　色　黒色砂多量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片15点（坏・鉢），須恵器片11点（坏・高台付坏４，蓋１，甕６）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，重複関係及び第８号掘立柱建物跡との配置から，同じ８世紀前葉と考えられる。

表６　奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行(南北)方向	柱間数 桁行×梁行(間)	構造	柱穴			主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
					柱穴数	平面形	深さ(㎝)			
1	Ｄ９i4～Ｄ９j5	Ｎ－12°－Ｅ	３×２	側柱　南北棟	8	円形・楕円形	11～65	土師器　須恵器	８世紀後葉	SI1・8・26，SK13・14→本跡→SD5
2	Ｅ９a3～Ｅ９c4	Ｎ－15°－Ｅ	３×２	側柱　南北棟	8	楕円形 隅丸長方形	24～74	土師器　須恵器　石製支脚	８世紀後葉	SI1，SB3，SA1→本跡→SD2・3・4
3	Ｄ９j3～Ｅ９c4	Ｎ－15°－Ｅ	３×２	側柱　南北棟	9	楕円形 隅丸長方形	24～74	土師器　須恵器	８世紀後葉	SI1→本跡→SB2，SD2～4
4	Ｄ９f5～Ｄ９g6	Ｎ－18°－Ｅ	２×１ (身舎)庇付	側柱　南北棟	9	楕円形	12～60	土師器　須恵器	８世紀後葉	SI2・9→本跡→SK41
5	Ｄ９h2～Ｄ９j2	Ｎ－80°－Ｗ	不明×２	[側柱][東西棟]	3	隅丸方形	30～45	土師器　須恵器	８世紀後葉	
7	Ｃ９a8～Ｃ９c9	Ｎ－25°－Ｗ	３×２	側柱　南北棟	10	楕円形	17～52	土師器　須恵器	９世紀中葉	SI15・16，SD15→本跡→Pit8
8	Ｄ９d4～Ｄ９e5	Ｎ－90°	２×２	総柱　東西棟	9	円形・楕円形	９～30	土師器　須恵器	８世紀前葉	SI4・10，SD6，SK23→本跡→SI7→SK19
9	Ｃ９i6～Ｃ９j7	Ｎ－68°－Ｅ	不明×２	[側柱][東西棟]	5	円形・楕円形	15～50	－	９世紀中葉	
11	Ｂ９i9～Ｃ９a0	Ｎ－20°－Ｅ	［２×２］	総柱	7	円形・楕円形	15～50	土師器　須恵器	８世紀中葉	SD13→本跡
16	Ｃ９i8～Ｄ９a8	Ｎ－22°－Ｗ	［２×２］	[総柱][南北棟]	5	円形・楕円形	10～40	土師器	９世紀中葉	SI23→本跡→Pit91
17	Ｄ９f4～Ｄ９g4	Ｎ－87°－Ｗ	不明×２	[側柱][東西棟]	4	円形・楕円形	18～34	土師器　須恵器	８世紀前葉	SI4→本跡→SI5・6

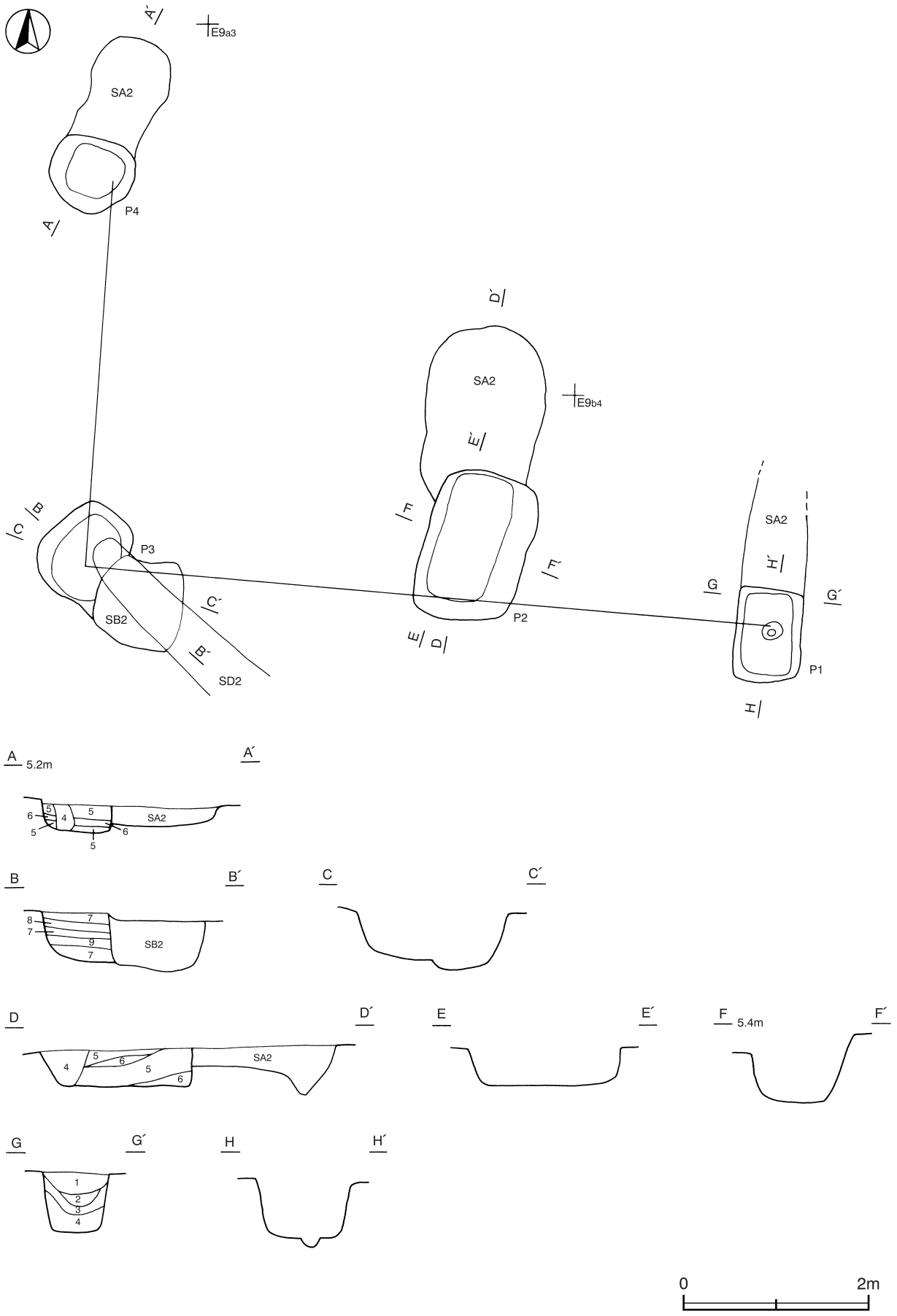
(3) 柵跡

第１号柵跡（第74図）

位置　Ｅ９a2～Ｅ９b4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第２号柵跡を掘り込み，第２号掘立柱建物，第２号溝に掘り込まれている。

規模と構造　「Ｌ」形に柱穴が並んでおり，南北軸Ｎ－５°－Ｅである。柱間寸法にばらつきがあり，Ｐ１・Ｐ２間が3.6m(12尺)，Ｐ２・Ｐ３間が3.9m(13尺)，Ｐ３・Ｐ４間が4.2m(14尺）である。



第74図　第１号柵跡実測図

柱穴　４か所。平面形は楕円形・隅丸長方形で，深さは30～65㎝である。土層は第１～４層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

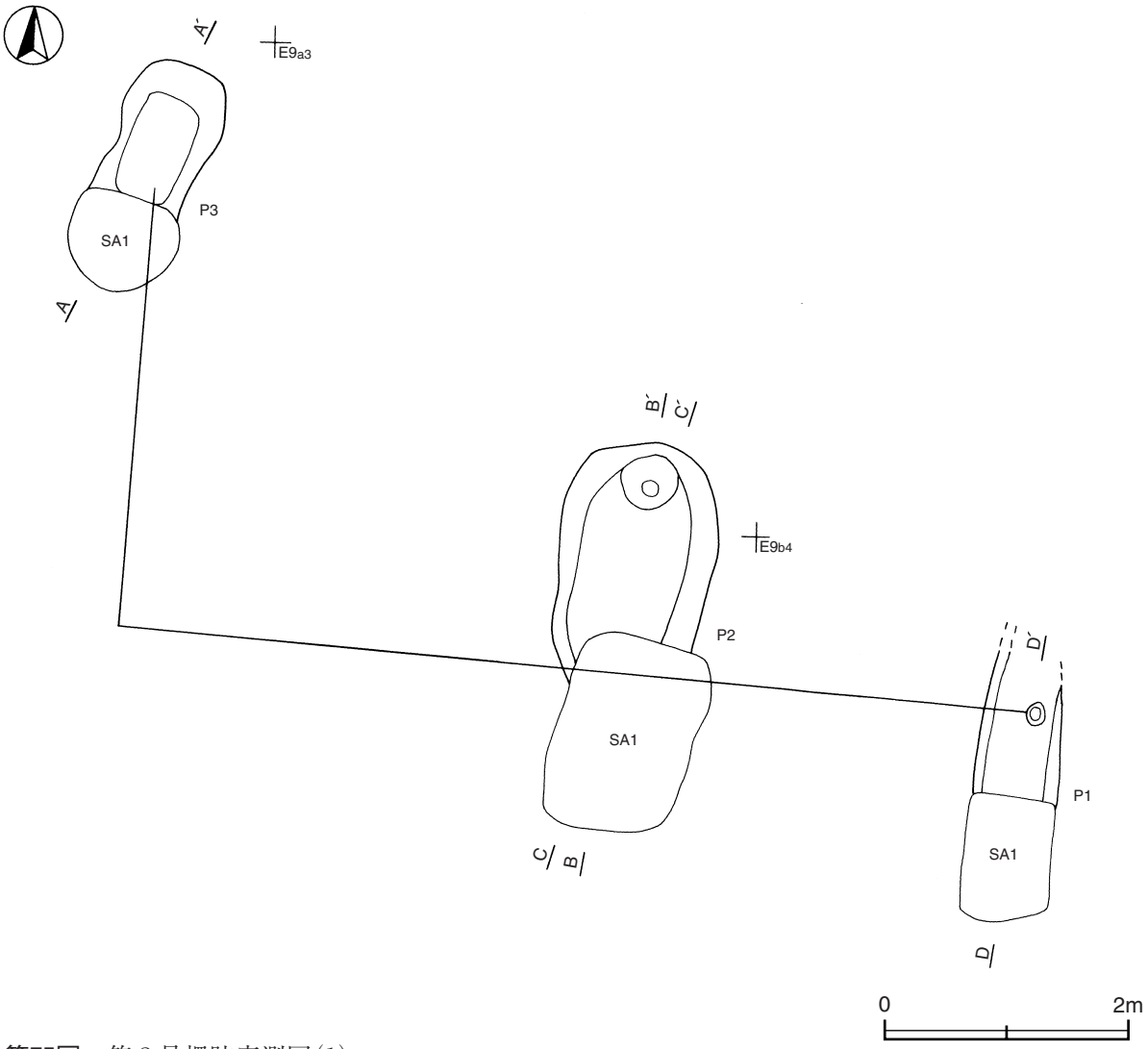
土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	焼土粒子・炭化粒子・黄色砂微量	
2	黒　色	炭化粒子・黄色砂微量	
3	黒　色	炭化粒子・黄色砂少量	
4	黒　色	黄色砂少量，焼土ブロック微量	
5	黒　色	焼土ブロック・炭化粒子・黄色砂多量	
6	黒　色	黄色砂少量	
7	黒　色	灰白色砂多量	
8	黒　色	灰白色砂・黄色砂多量	
9	黒　色	黄色砂多量，灰白色砂中量，焼土粒子少量	

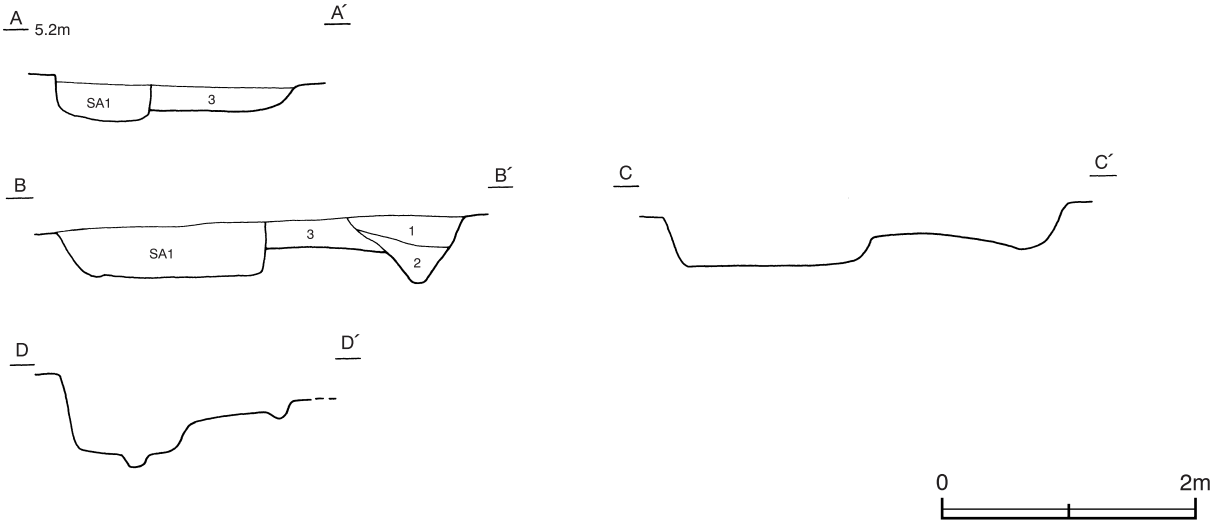
所見　第１号住居跡の南西方向の位置に「Ｌ」形に柱穴が配置されており，第１号住居跡に伴う施設であり８世紀中葉と考えられる。また，本柵と第２号柵跡は位置を変えず柱穴を重複させ，軸も同一で柱穴の規模柱間寸法もほぼ同じであることから，第２号柵跡から本柵への建て替えが行われたことが想定される。

第２号柵跡（第75・76図）

位置　Ｅ９a2～Ｅ９b4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第75図　第２号柵跡実測図(1)



第76図　第２号柵跡実測図(2)

重複関係　第１号柵に掘り込まれている。

規模と構造　柱穴が１か所確認されていないが,「L」形に柱穴が並ぶと推測され，南北軸N－５°－Eである。柱間寸法は，Ｐ１・Ｐ２間が3.6m（12尺）である。確認されていない箇所に柱穴を想定すると，Ｐ２との柱間寸法は13尺（3.9m），Ｐ３とは3.6m（12尺）である。

柱穴　３か所。平面形は楕円形・隅丸長方形で，深さは20～54㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は地山の砂を充填した埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黄　　色　灰白色砂中量

所見　第１号住居跡に伴う施設で，時期は８世紀中葉の範疇で第１号柵跡に建て替えられたものと考えられる。

表７　奈良時代の柵跡一覧表

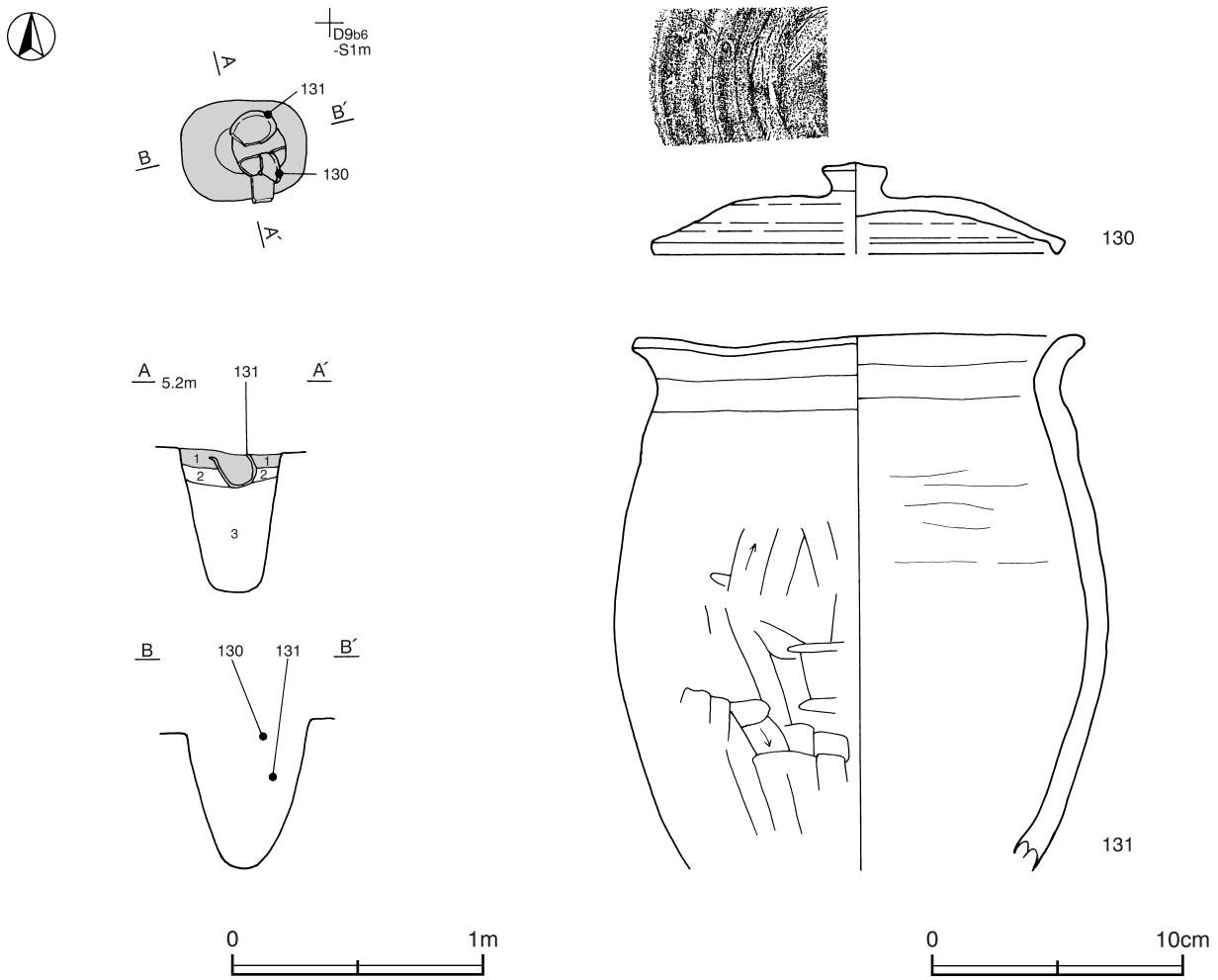
番号	位 置	南北軸方向	柱間寸法（m）	付属施設	柱穴			主な出土遺物	時 期	備 考 新旧関係（旧→新）
					柱穴数	平面形	深さ(㎝)			
1	E９a2～E９b4	N－５°－E	P１･P２　3.6 P２･P３　3.9 P３･P４　4.2	SI1	4	楕円形 隅丸長方形	30～65	－	８世紀中葉	SA2→本跡→SB2→SD2
2	E９a2～E９b4	N－５°－E	P１･P２　3.6	SI1	3	楕円形 隅丸長方形	20～54	－	８世紀中葉	本跡→SA1

(4) 火葬墓

第１号火葬墓（SK40）（第77図）

位置　Ｄ９b5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　長径0.5m，短径0.4mの楕円形で，長径方向はN－72°－Eである。深さは56㎝で，底面は平坦であり，壁はほぼ直立している。



第77図　第１号火葬墓・出土遺物実測図

覆土　３層に分層される。第１層は粘土層であり，火熱により赤変している凝灰岩や中礫が混じっている。第２・３層は砂の埋土であり，第２層は灰白色砂の純層で，第３層は黒色砂と灰白色砂の混合砂である。

土層解説
1　灰黄褐色　凝灰岩ブロック・炭化物・礫中量
2　灰　白　色
3　黒　　色　灰白色砂多量，炭化物中量

遺物出土状況　土師器片46点（甕），須恵器片２点（蓋）が出土している。130・131は粘土に覆われており，130は逆位で，131はやや傾いた正位で出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後半と考えられる。本跡は第３号ピット群内に位置し，掘り方の形状が他のピットに似ており，蔵骨器の埋納にピットを転用したものと考えられる。

第１号火葬墓遺物出土遺物観察表（第77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
130	須恵器	蓋	[16.0]	3.6	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	天井部ナデ調整	粘土層内	40% PL20
131	土師器	甕	17.8	(21.3)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラナデ・ナデ	粘土層内	65%

(5) ピット群

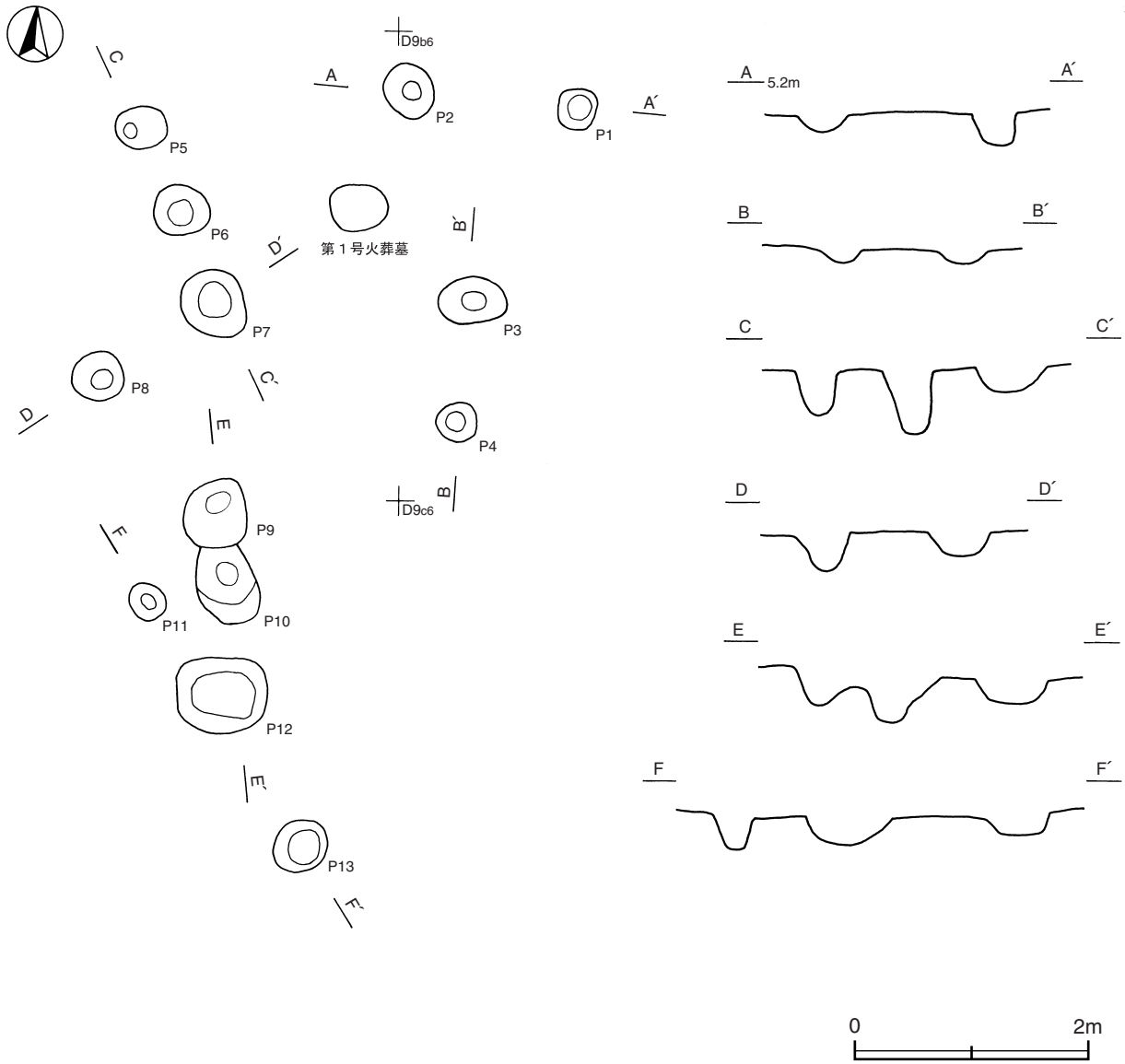
第１号ピット群（Pit66・103～105・107～115）（第78図）

位置　Ｄ９b5～Ｄ９c5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　南北７m，東西５mほどの範囲から，ピットが13基確認されている。ピットの平面形は円形もしくは楕円形で，深さは11～55cmである。

遺物出土状況　土師器片28点（坏５，甕23），須恵器片３点（坏･高台付坏，蓋，甑）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　ピットに重複がみられることから，13基のピットがすべて同時期のものではなく，時期差を持つ可能性もある。群の中に第１号火葬墓があり，蔵骨器の埋納に本跡のピットを再利用したものと考えられる。よって時期は，９世紀前葉の第１号火葬墓より古く８世紀代の範疇に収まるものと考えられる。



第78図　第１号ピット群実測図

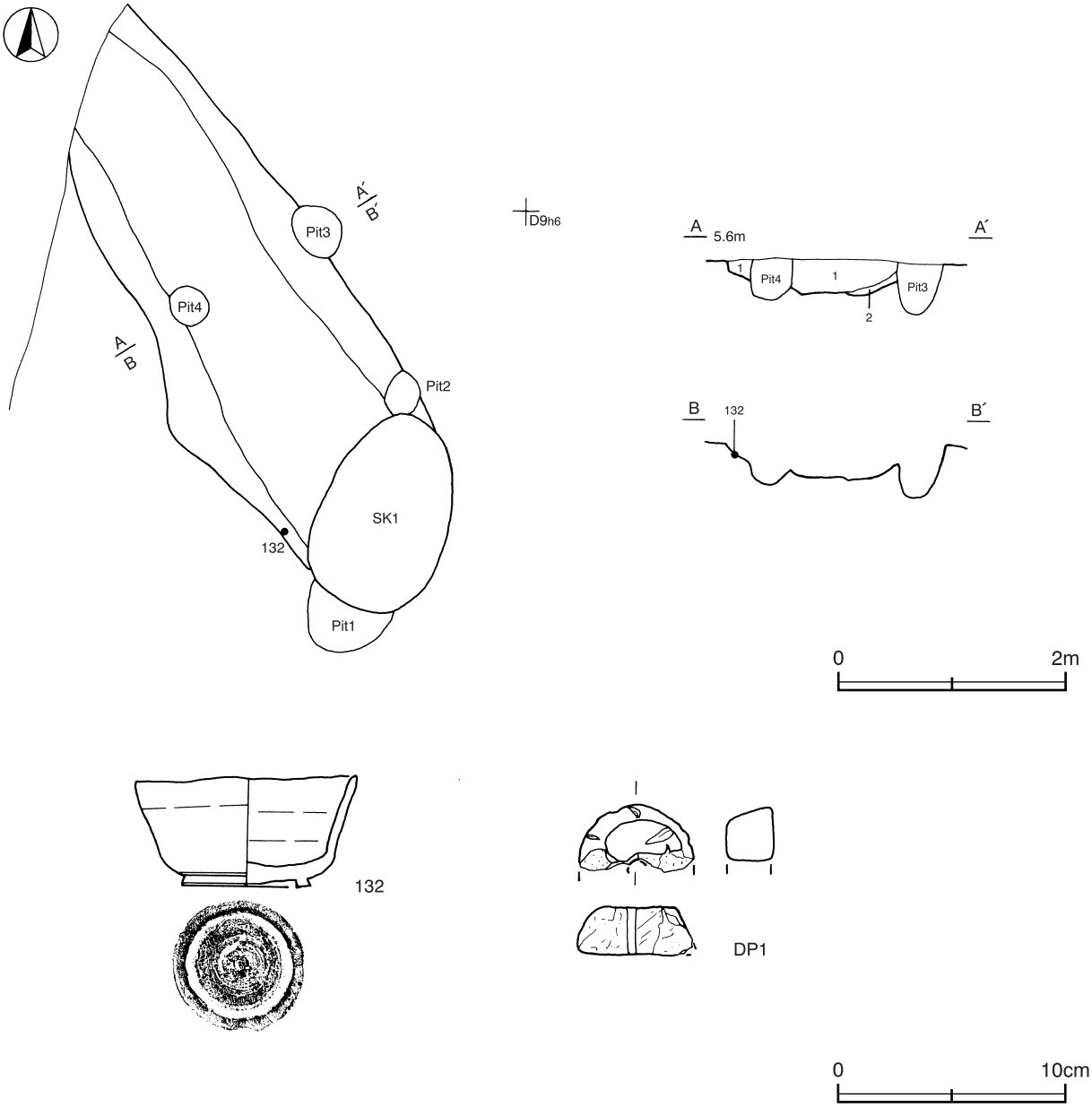
第１号ピット群計測表（第78図）

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P１	38	37	29	P６	48	45	55	P11	35	31	29
P２	49	41	15	P７	63	51	20	P12	78	66	24
P３	60	40	11	P８	45	42	32	P13	47	45	16
P４	36	34	11	P９	57	55	31				
P５	45	35	39	P10	(75)	51	42				

（6）溝跡

第１号溝跡（第79図）

位置　Ｄ９g5・Ｄ９h5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第79図　第１号溝跡・出土遺物実測図

重複関係　第１土坑，第１～４号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　両端が削平または第１号土坑と重複しているため，長さ4.0mのみ北西方向（N－34°－W）に直線的に確認されている。上幅140～200cm，下幅90～130cm，深さ32cmである。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量　　2　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片293点（坏・高坏８，甕・甑285），須恵器片９点（坏・高台付坏８，蓋１）が出土している。ほぼ完形の132が，南西端の壁際の覆土上層から出土している。DP１や高坏片は表面の摩滅が著しいことから，流れ込んだものと考えられる。

所見　第１号土坑が重複しているため明確ではないが，７世紀後葉の第２号住居跡を掘り込んでいる可能性がある。132は廃棄された状態であり，７世紀後葉以降に掘られ８世紀前葉にはくぼ地化していたものと考えられる。

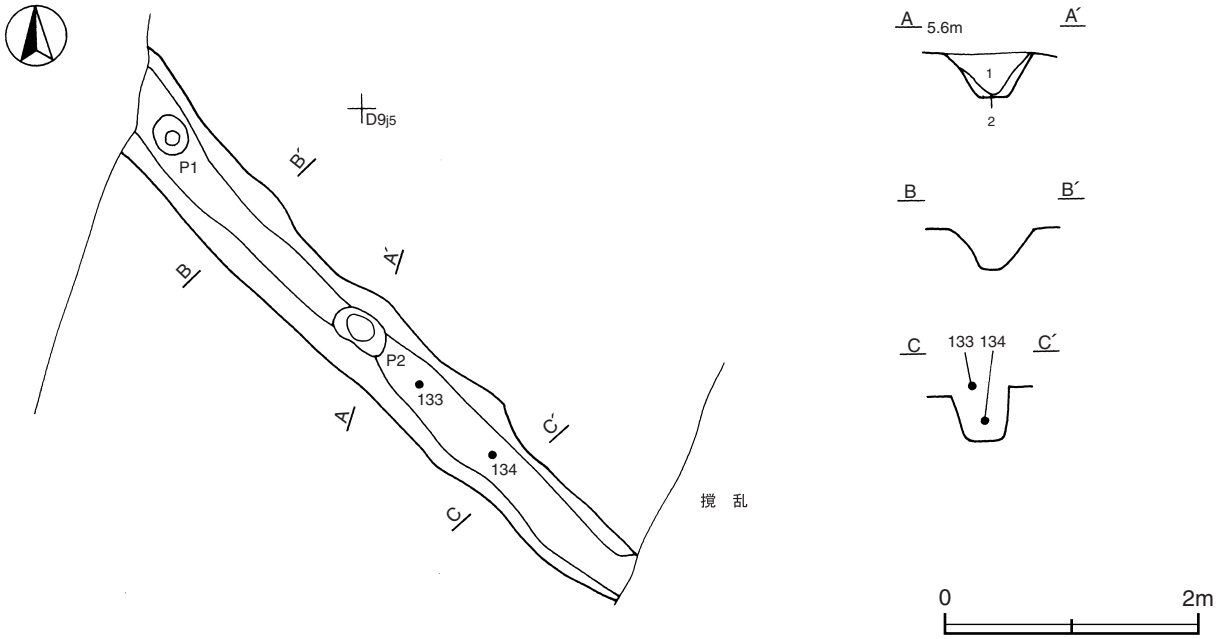
第１号溝跡出土遺物観察表（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
132	須恵器	高台付坏	9.5	4.9	5.5	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土上層	70% PL20 内面窯体付着

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
DP１	紡錘車	5.0	2.1	－	(31.7)	粘土	ヘラナデ・ナデ調整	覆土上層	

第５号溝跡（第80・81図）

位置　Ｄ９i4～Ｄ９j5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第80図　第５号溝跡実測図

重複関係　第１号掘立柱建物跡，第14土坑を掘り込んでいる。

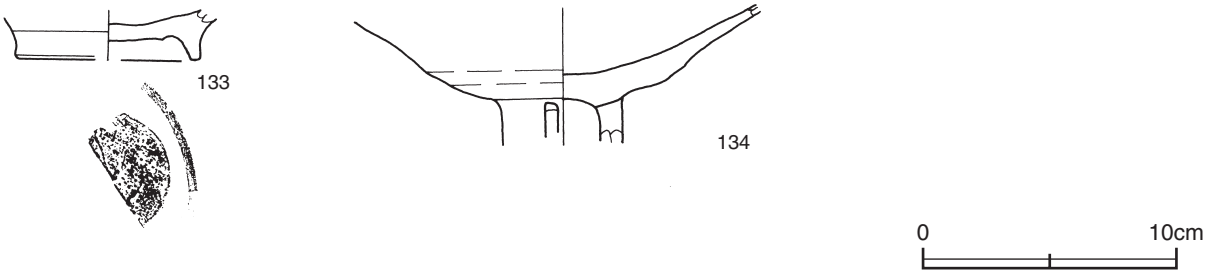
規模と形状　両端が削平及び撹乱を受けているため，長さ5.4ｍのみ北西方向（Ｎ－40°－Ｗ）に直線的に確認されている。上幅40～70㎝，下幅20～40㎝，深さ33～44㎝で，底面は南東方向に向かって若干傾斜している。壁はほぼ直立している箇所及び外傾している箇所がある。外傾しているのは壁が崩落したものであり，元来は直立していたものと推測される。

覆土　２層に分層される。周囲から堆積した状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量，炭化粒子微量　　2　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片198点（坏・高坏９，甕・甑189），須恵器片45点（坏・高台付坏29，蓋２，高盤２，甕12），鉄製品１点（不明），鉄滓１点が出土している。高坏片は磨滅が著しいことから，流れ込んだものと考えられる。また，混入した陶器片も出土している。133は覆土上層，134は底面からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器及び重複関係から９世紀前葉と考えられる。



第81図　第５号溝跡出土遺物実測図

第５号溝跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
133	須恵器	高台付坏	－	(1.9)	[7.0]	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	暗灰黄	普通	底部ナデ調整	覆土上層	5%
134	須恵器	盤	－	(5.4)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ　脚部三方透かし	底面	30%

表８　奈良・平安時代溝跡一覧表

番号	位 置	方向	形状	規　模				覆土	底面	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
				長さ (m)	上幅 (㎝)	下幅 (㎝)	深さ (㎝)					
1	Ｄ９g5・Ｄ９h5	Ｎ－34°－Ｗ	直線	(4.0)	140～200	90～130	32	自然	平坦	土師器　須恵器	７世紀後葉～ ８世紀前葉	本跡→SK1，Pit1～4
5	Ｄ９i4～Ｄ９j5	Ｎ－40°－Ｗ	直線	(5.4)	40～70	20～40	33～44	自然	平坦	土師器　須恵器 不明鉄製品　鉄滓	９世紀前葉	SK14→SB1→本跡

（7）土坑

第14号土坑（第82図）

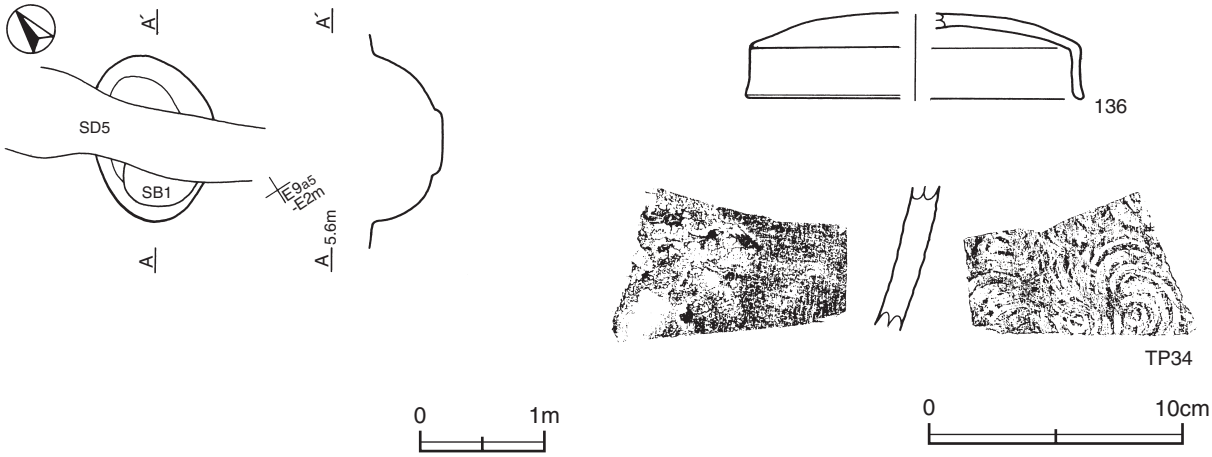
位置　Ｄ９j5区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号掘立柱建物，第５号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長径1.3m，短径1.0mの楕円形で，長径方向はN－13°－Eである。深さは40㎝で，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況　須恵器片２点（蓋，甕）が出土している。136・TP34は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，重複関係と出土土器から８世紀中葉と考えられる。



第82図　第14号土坑・出土遺物実測図

第14号土坑出土遺物観察表（第82図）

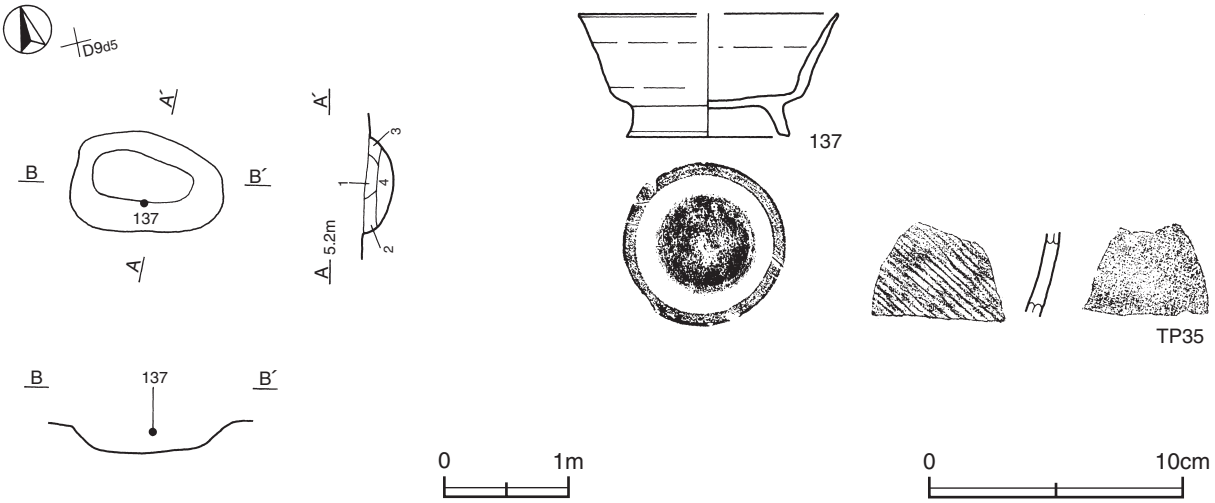
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
136	須恵器	蓋	[13.2]	3.3	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	覆土中層	20%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP34	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	赤橙・灰	普通	外面ナデ　内面青海波文	覆土中層	

第18号土坑（第83図）

位置　Ｄ９d5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第７号住居跡を掘り込んでいる。



第83図　第18号土坑・出土遺物実測図

規模と形状　長径1.2m，短径0.8mの楕円形で，長径方向はＮ－68°－Ｗである。深さは21cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　４層に分層される。第１層は粘土，第２層は黒色砂と灰白色砂の混合砂，第４層は第１号泥炭層の堆積土のシルトが堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　灰黄褐色　焼土粒子・炭化粒子多量
2　黒　　色　灰白色砂多量
3　黒　　色　灰白色砂少量
4　黒　　色　植物遺体少量

遺物出土状況　土師器片９点（坏・椀・鉢３，甕６），須恵器片７点（坏・高台付坏３，蓋１，甕３）が出土している。137は中央部の覆土上層，TP35は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。

第18号土坑出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
137	須恵器	高台付坏	[10.2]	4.9	6.2	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土上層	70% PL20

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP35	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	灰	普通	外面斜位の平行叩き　内面ナデにより当て具痕不明瞭	覆土中	

第19号土坑（第84・85図）

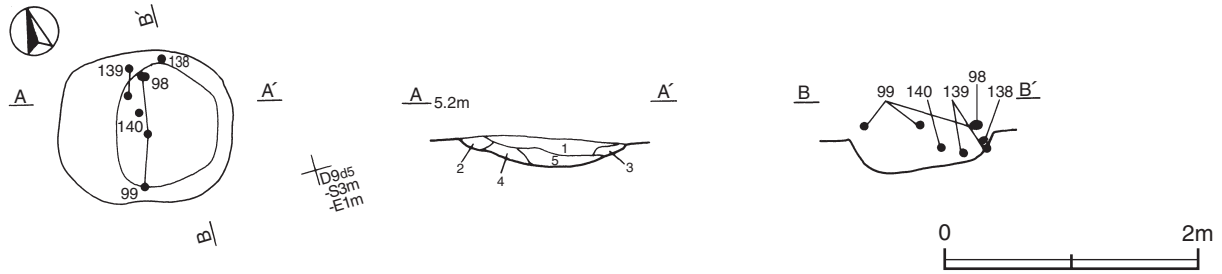
位置　Ｄ９d5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第７号住居跡，第８号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長径1.4m，短径1.2mの楕円形で，長径方向はＮ－74°－Ｗである。深さは30cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　５層に分層される。第１層は凝灰岩が混じった粘土，第２・３層は黒色砂と灰白色砂の混合砂に凝灰岩が混じっている。第５層は第１号泥炭層の堆積土と同様なシルト層である。人為堆積と考えられる。

土層解説
1　灰黄褐色　凝灰岩ブロック・焼土粒子多量
2　黒　　色　凝灰岩ブロック・灰白色砂多量
3　黒　　色　灰白色砂中量，凝灰岩ブロック微量
4　灰　白　色
5　黒　　色　植物遺体少量

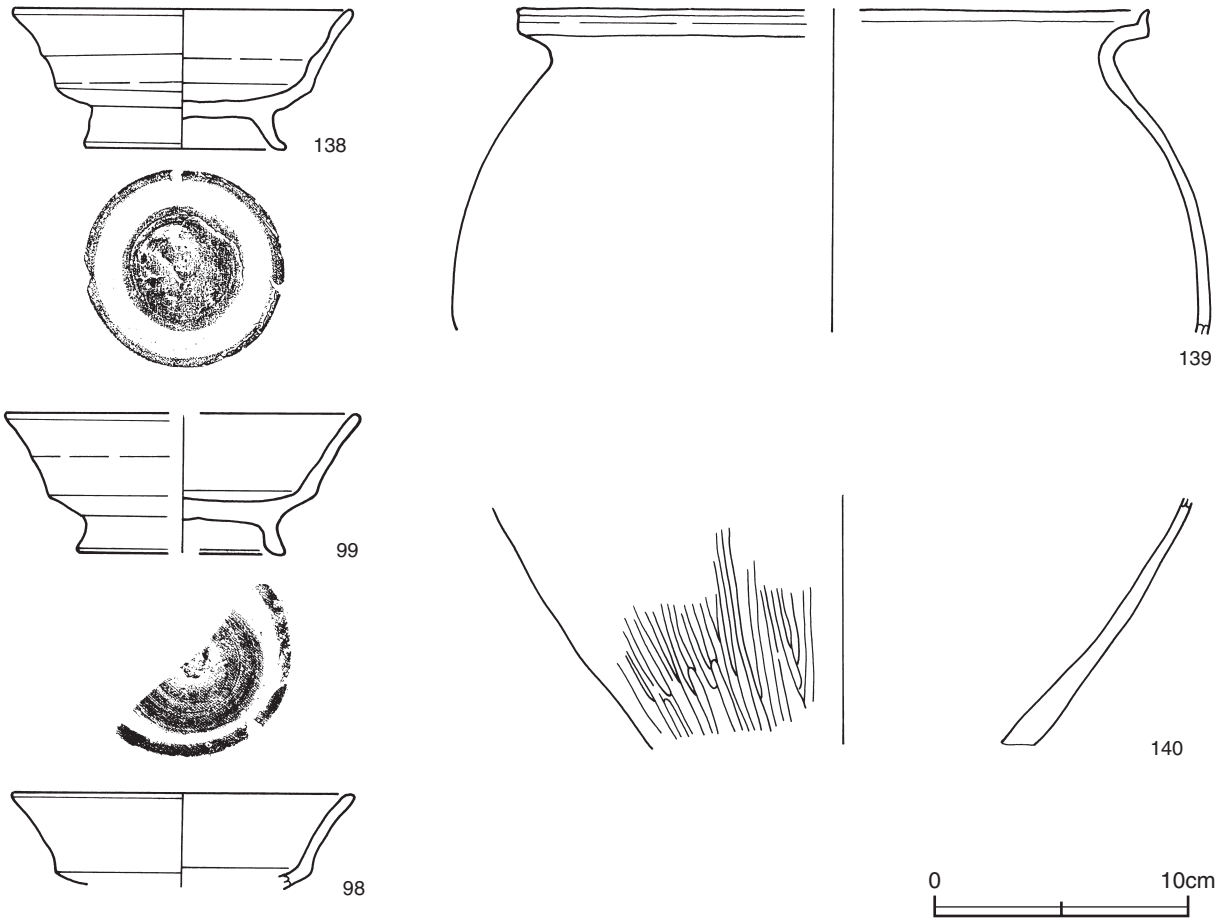


第84図　第19号土坑実測図

遺物出土状況　土師器片70点（坏・椀・鉢５，甕65），須恵器片84点（坏・高台付坏70，甕14）が出土している。全体に散在しており，覆土上層から下層にわたって出土している。98は覆土上層，99は覆土上層に散在し

ている破片が接合したものである。138･140は覆土中層，139は覆土下層に散在している破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。第18号土坑とは形状が類似し，南北に並列していることや覆土の堆積状況も同様なことから，同時期と推測される。



第85図　第19号土坑出土遺物実測図

第19号土坑出土遺物観察表（第85図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
98	須恵器	高台付坏	13.4	(3.8)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰白	普通	ロクロナデ	覆土上層	60%
99	須恵器	高台付坏	[13.8]	5.6	[7.7]	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土上層	30%
138	須恵器	高台付坏	13.2	5.6	7.6	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	覆土中層	90% PL20
139	土師器	甕	[25.0]	(12.7)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	褐	普通	口縁部内･外面横ナデ　端部つまみ上げ　体部外面上半ヘラ削り後ナデ　内面ナデ	覆土下層	20%
140	土師器	甕	－	(9.7)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	褐	普通	体部外面下半ヘラ磨き　内面ナデ	覆土中層	10%

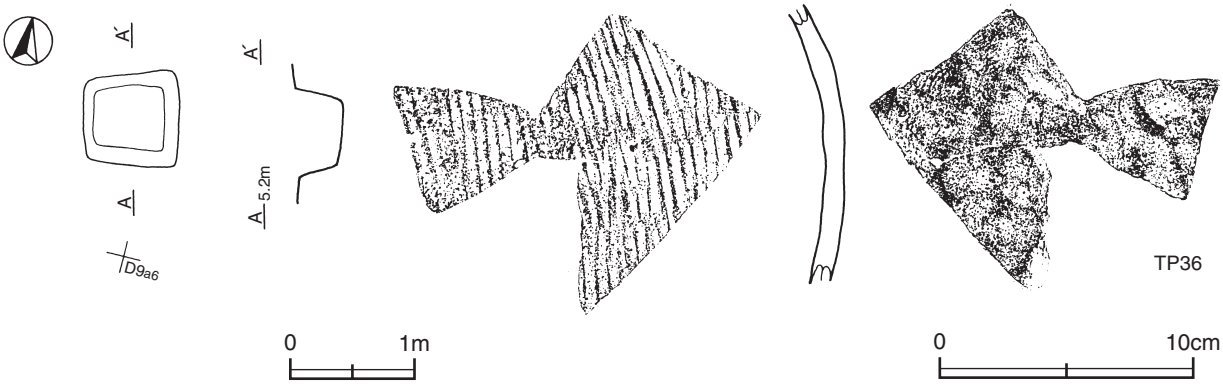
第42号土坑（第86図）

位置　Ｃ９j5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　一辺0.7mの方形で，南北軸はＮ－10°－Ｗである。深さは37cmで，底面はほぼ平坦で，壁はほぼ直立している。

遺物出土状況　土師器片８点（坏・椀・鉢２，甕６），須恵器片４点（甕）が出土している。TP36は覆土中から出土している。

所見　TP36は第25号住居跡から出土している125と接合することから廃棄時期がほぼ同時であり，９世紀中葉と考えられる。また，形状から掘立柱建物跡の柱穴の可能性も想定される。



第86図　第42号土坑・出土遺物実測図

第42号土坑出土遺物観察表（第86図）

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP36	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	暗青灰	普通	外面縦位の平行叩き　内面当て具無文痕	覆土中	SI25の125と接合

第44号土坑（第87図）

位置　Ｄ９a7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

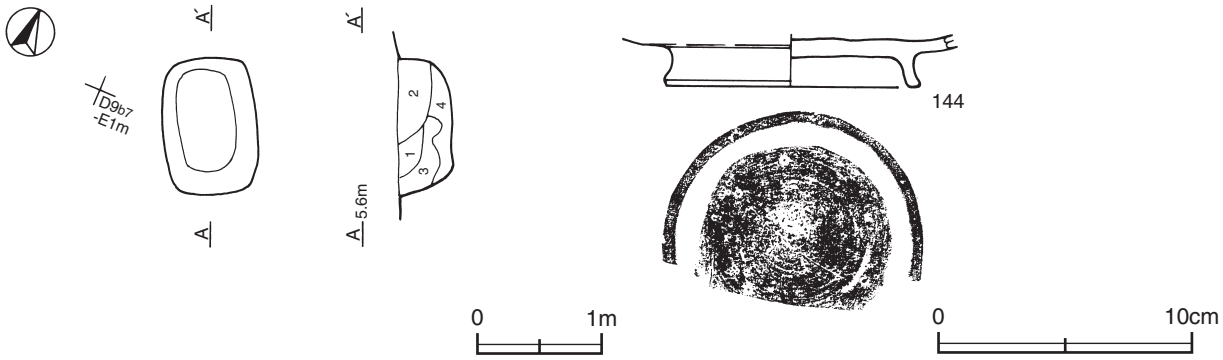
規模と形状　長軸1.1m，短軸0.8mの長方形で，長軸方向はＮ－44°－Ｗである。深さは42cmで，底面はほぼ平坦で，壁はほぼ直立している。

覆土　４層に分層される。黒色砂と灰白色砂の混合砂が堆積している状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子多量，灰白色砂少量
2　灰　白　色　黒色砂多量
3　黒　　色　灰白色砂多量
4　灰　白　色　黒色砂中量

遺物出土状況　須恵器片１点（盤）が出土している。144は覆土中から出土している。

所見　時期は，隣接する第14号住居跡との位置関係から８世紀後葉と考えられる。



第87図　第44号土坑・出土遺物実測図

第44号土坑出土遺物観察表（第87図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
144	須恵器	盤	－	(2.1)	9.7	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土中	30% 底部篦記号

表９　奈良・平安時代の土坑一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模（m） 長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時 代	備　考 新旧関係 (旧→新)
14	D９j5	N－13°－E	楕円形	1.3×1.0	40	外傾	平坦	－	須恵器	８世紀中葉	本跡→SB1, SD5
18	D９d5	N－68°－W	楕円形	1.2×0.8	21	外傾	平坦	人為	土師器　須恵器	８世紀後葉	SI7→本跡
19	D９d5	N－74°－W	楕円形	1.4×1.2	30	外傾	平坦	人為	土師器　須恵器	８世紀後葉	SI7，SB8→ 本跡
42	C９j5	N－10°－W	方形	0.7×0.7	37	直立	平坦	－	土師器　須恵器	９世紀中葉	
44	D９a7	N－44°－W	長方形	1.1×0.8	42	直立	平坦	人為	須恵器	８世紀後葉	

３　その他の遺構と遺物

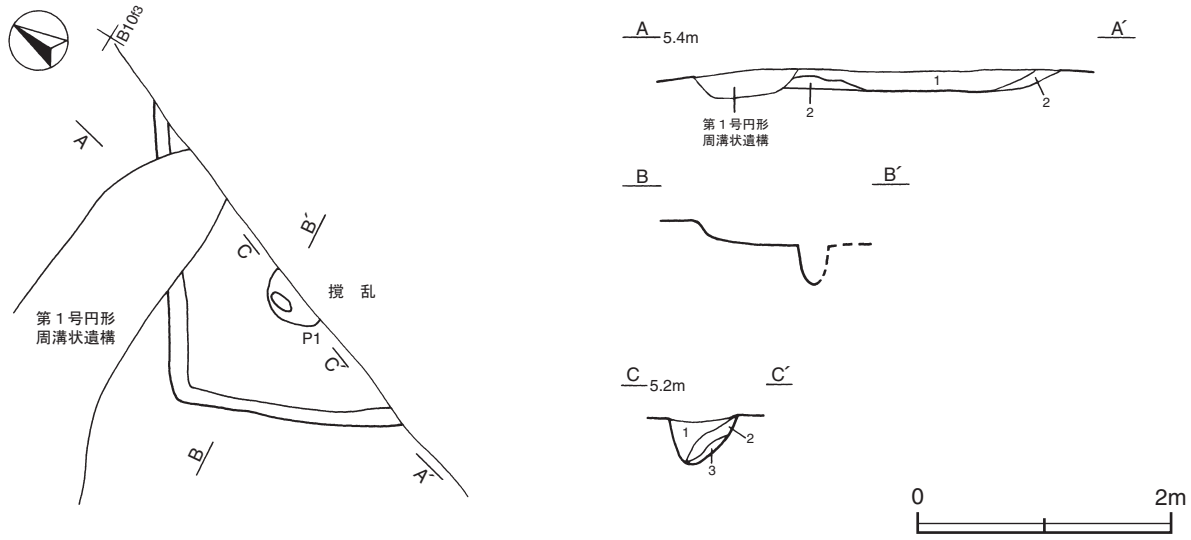
時期及び性格が不明な竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡３棟，方形竪穴遺構１基，柵跡２条，ピット群１か所，溝跡12条，土坑38基，ピット71基，円形周溝状遺構１基，不明遺構１基，その他泥炭層１か所が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第12号住居跡（第88図）

位置　Ｂ10f2区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号円形周溝状遺構に掘り込まれている。



第88図　第12号住居跡実測図

規模と形状　ほとんどが撹乱を受けているため，東西軸1.6mのみ，南北軸1.8mのみが確認されている。平面形及び主軸方向は不明である。壁高は17cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

ピット　深さ40cmで，規模と位置から主柱穴と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
3　灰　白　色　黒色砂少量

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片17点（甕・甑）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，不明である。

第16号住居跡（第89図）

位置　Ｃ９b0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第15号住居跡，第３号方形竪穴遺構を掘り込み，第７号掘立柱建物，第４号柵，第12号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　削平されているため，竈及び南壁の一部のみ確認されている。南北軸は3.8mと推測され，東西軸・形状は不明である。主軸方向はＮ－30°－Ｅで，遺存している壁高は18cmで，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで85cm，袖部幅は不明である。袖部は床面と同じ高さの地山面を基部として，ロームブロックと凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外へ45cm掘り込まれていたと推定され，袖部と同じ粘土で補強されている。

竈土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　焼土ブロック・灰白色砂微量
3　灰　黄　褐　ロームブロック・凝灰岩ブロック多量

ピット　３か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ22～25cmで，性格は不明である。

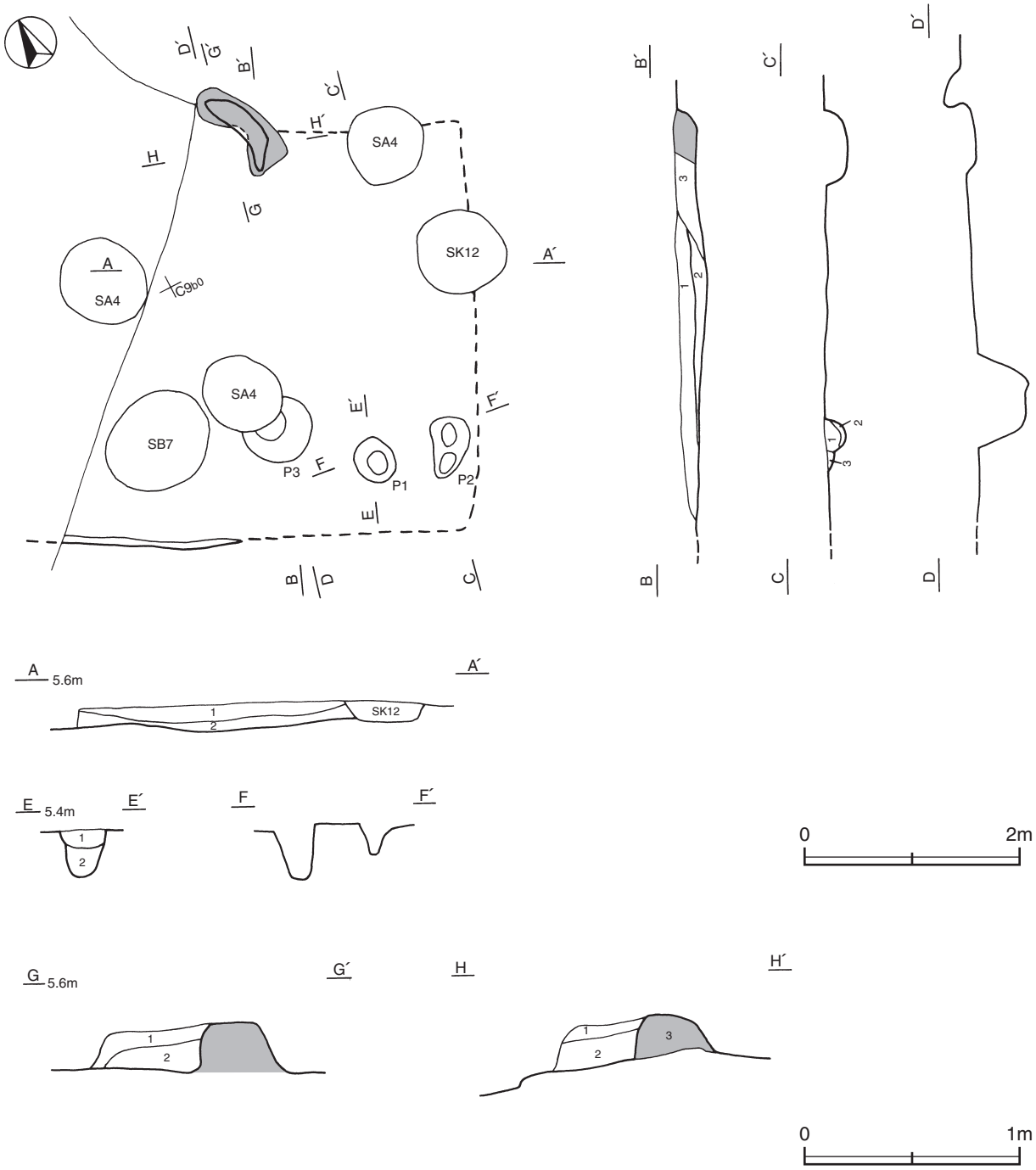
土層解説
1　黒　　色　炭化粒子微量
2　黒　　色　黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量
3　黒　　色　黄色砂中量

遺物出土状況　土師器片94点（坏・椀・鉢６，甕88），須恵器片４点（蓋１，甕３）が出土している。また，流れ込んだ弥生土器片１点も出土している。いずれも覆土中からの出土で，細片で図示することができない。

所見　時期は，重複関係から古墳時代後期以降９世紀前葉以前と考えられるが明確でない。



第89図　第16号住居跡実測図

第18号住居跡（第90・91図）

位置　Ｃ９e9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第25・26号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　削平されているため，遺存部分が少なく東西軸3.9mのみ，南北軸1.6mのみ確認されている。形状は不明で，主軸方向はＮ－24°－Ｗである。壁高は４～９㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

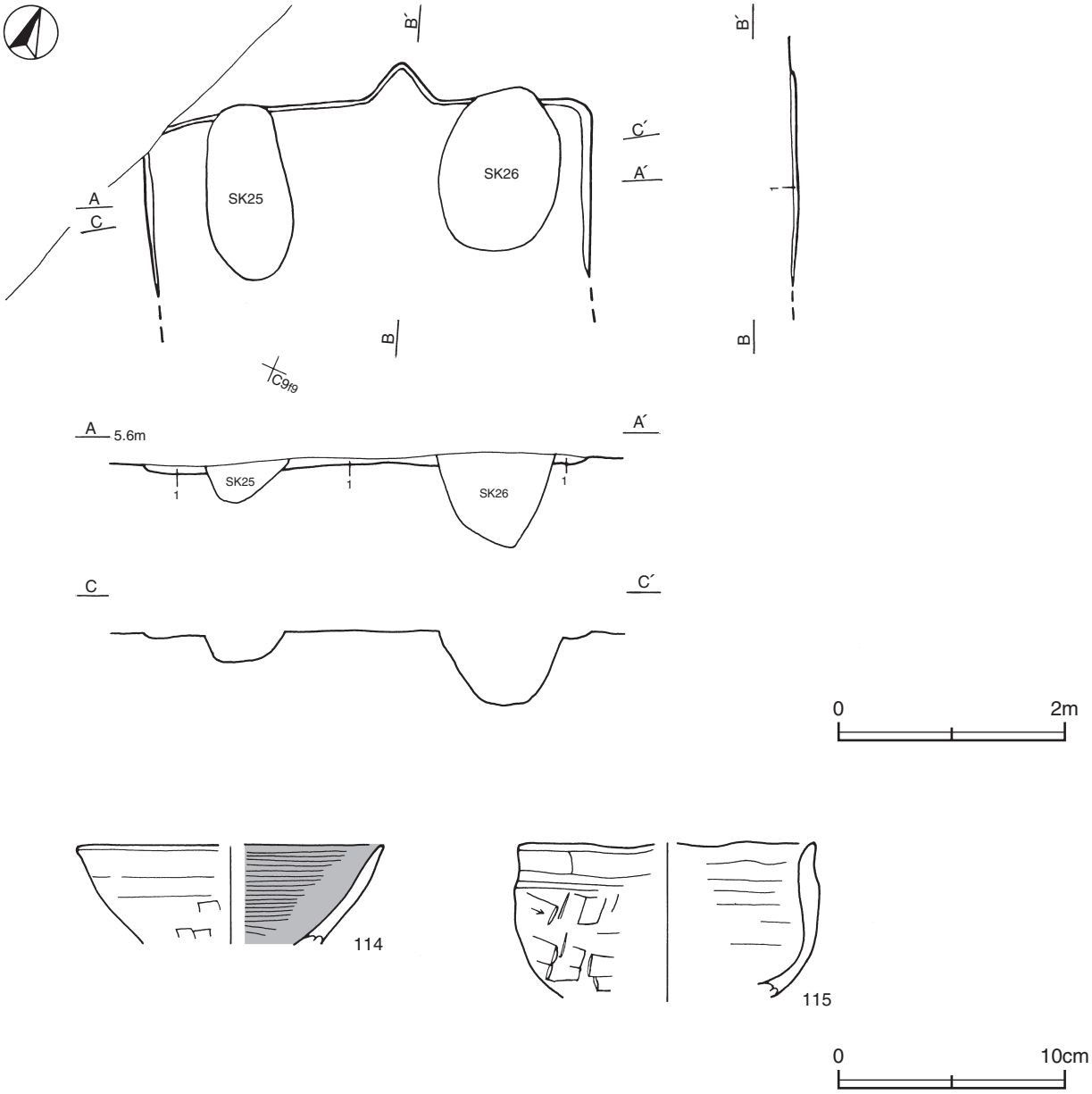
竈　北壁の中央部に付設されている。遺存状態が悪く，煙道部と火床部のみが確認されただけである。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外に32㎝掘り込まれ，立ち上がりは不明瞭である。

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

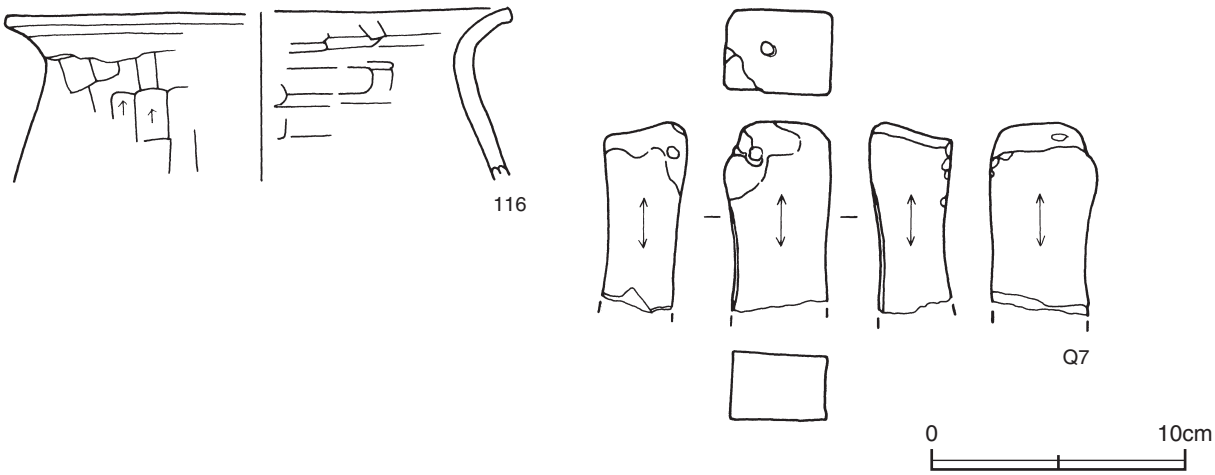
土層解説
1　黒　　色　黄色砂中量

遺物出土状況　土師器片55点（坏・高坏10，甕・甑45），須恵器片５点（坏・高台付坏４，甕１），石器１点（砥石）が出土している。また，混入した須恵器片３点も出土している。遺物は，覆土中からまばらに出土している。114～116・Ｑ７は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器が少なくほとんどが細片であり，図示できたものからも明確にできない。



第90図　第18号住居跡・出土遺物実測図



第91図　第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表（第90・91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
114	土師器	坏	[13.6]	(4.5)	－	黒雲母・海綿骨針 白色粒子・透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	10%
115	土師器	椀	[13.0]	(6.8)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面横ナデ	覆土下層	40%
116	土師器	甕	[19.8]	(6.7)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横ナデ　内面横ナデ後ヘラナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ・ナデ	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q7	砥石	(7.5)	4.2	3.3	(150.3)	流紋岩または石英安山岩ヵ	4面使用により平滑で，中央部湾曲　端部に紐孔	覆土下層	PL22

第22号住居跡（第92図）

位置　C 9 e8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第21号住居跡を掘り込み，第18号住居に掘り込まれている。

規模と形状　ほとんどが削平されていることや重複のため，一部しか遺存しておらず，東西軸1.3mのみ，南北軸3.2mのみ確認されており，平面形及び主軸は不明である。遺存する壁高は21～25cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁に付設されている。遺存状態が悪く，煙道部と火床部のみが確認されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱により弱く赤変している。煙道部は壁外へ30cm掘り込まれ，ロームブロックと凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で補強されている。

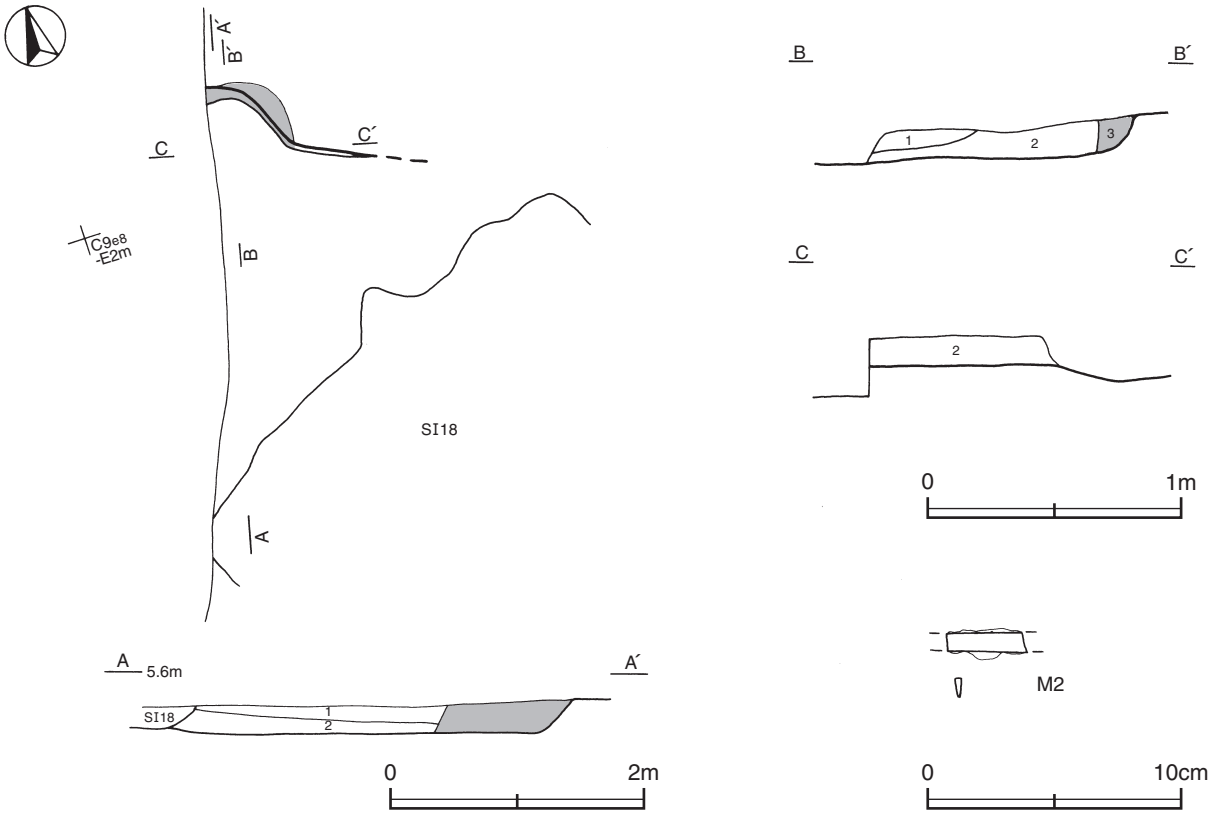
竈土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3　灰 黄 褐 色　ロームブロック・凝灰岩ブロック中量

覆土　2層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂・粘土粒子微量
2　黒　　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片152点（甕・甑），鉄製品１点（刀子ヵ），また，混入した須恵器片３点も出土している。Ｍ２は北東部の覆土中から出土している。

所見　時期は，重複関係から６世紀後半以降であるが，時期を明確にできる土器がないため不明である。



第92図　第22号住居跡・出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表（第92図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｍ２	刀子	(3.2)	0.8	0.2	(3.3)	鉄	両端欠損	覆土中	

第26号住居跡（第93図）

位置　Ｄ９j5区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第13号土坑を掘り込み，第１号掘立柱建物に掘り込まれている。

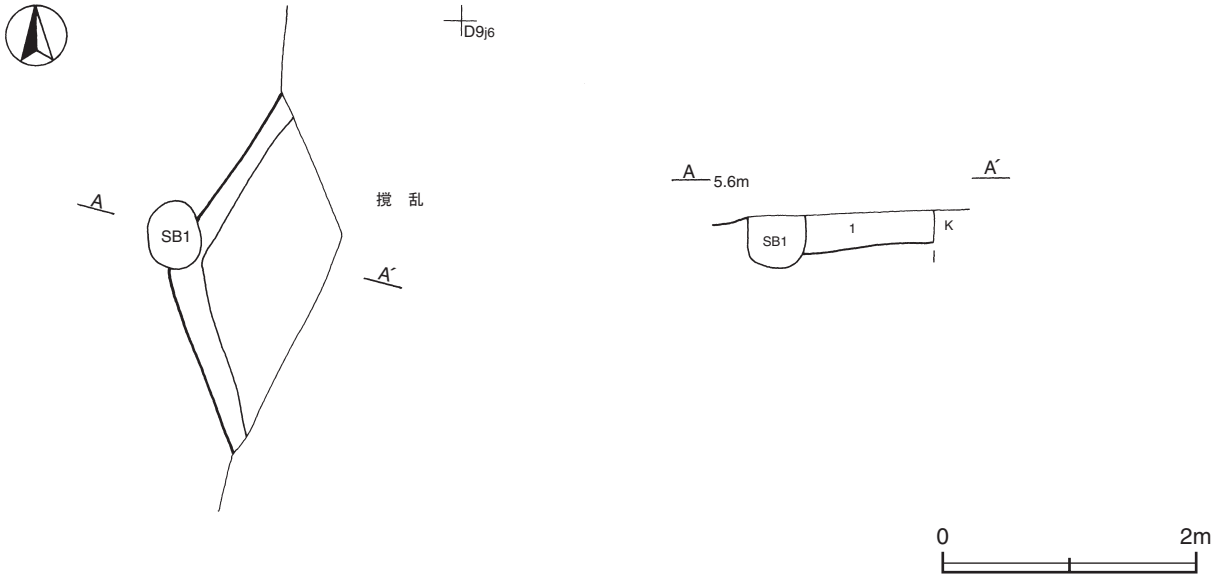
規模と形状　ほとんどが撹乱を受けているため，東西軸1.4ｍのみ，南北軸1.3ｍのみが確認されている。平面形及び主軸方向は不明である。壁高は24～31㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

覆土　単一層である。部分的に残っているだけであり，堆積状況は不明である。

土層解説
１　黒　　色　灰白色砂微量

所見　時期は，重複関係から８世紀後葉以降であるが，出土土器がないため不明である。



第93図　第26号住居跡実測図

表10　その他の竪穴住居跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長(東西)軸×短(南北)軸	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設 主柱穴	内部施設 出入口ピット	内部施設 ピット	内部施設 竈	覆土	主な出土遺物	時 期	備 考 新旧関係(旧→新)
12	B10f2	不明	不明	(1.6)×(1.8)	17	平坦	－	1	－	－	－	自然	土師器	不明	本跡→第1号円形周溝状遺構
16	C 9 b0	N－30°－E	不明	不明×[3.8]	18	平坦	－	－	－	3	北	自然	土師器　須恵器	不明	SI15，UP3→本跡→SB7，SA4，SK12
18	C 9 e9	N－24°－W	不明	(3.9)×(1.6)	4 ～ 9	平坦	－	－	－	－	北	不明	土師器　須恵器　砥石	不明	本跡→SK25・26
22	C 9 e8	不明	不明	(1.3)×(3.2)	21～25	平坦	－	－	－	－	北	自然	土師器　刀子カ	不明	SI21→本跡→SI18
26	D 9 j5	不明	不明	(1.4)×(1.3)	24～31	平坦	－	－	－	－	－	不明	－	不明	SK13→本跡→SB1

(2) 掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡（第94図）

位置　B10e1区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号道路跡を掘り込んでいる。

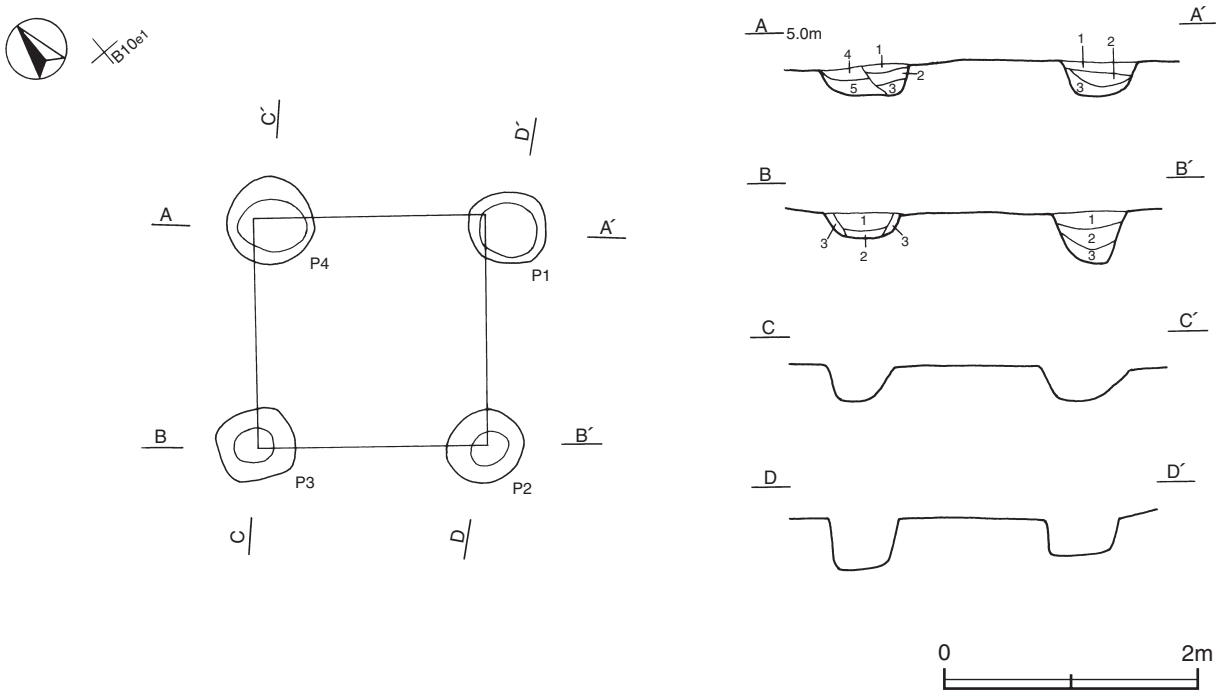
規模と構造　桁行･梁行ともに１間の側柱建物跡で，１辺1.8m（６尺）の方形で，桁行と梁行の区別は困難である。南北軸はN－39°－Eである。

柱穴　４か所。平面形は円形で，深さは20～40cmである。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は粘土を含んでいる砂の埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　黄色砂少量
2　黒　　色　黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量，黄色砂微量
4　黄　　色　粘土ブロック少量
5　黒　　色　粘土ブロック微量

遺物出土状況　土師器片16点（坏２，甕･甑14）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，重複関係から第１号道路跡以降であるが，明確でない。

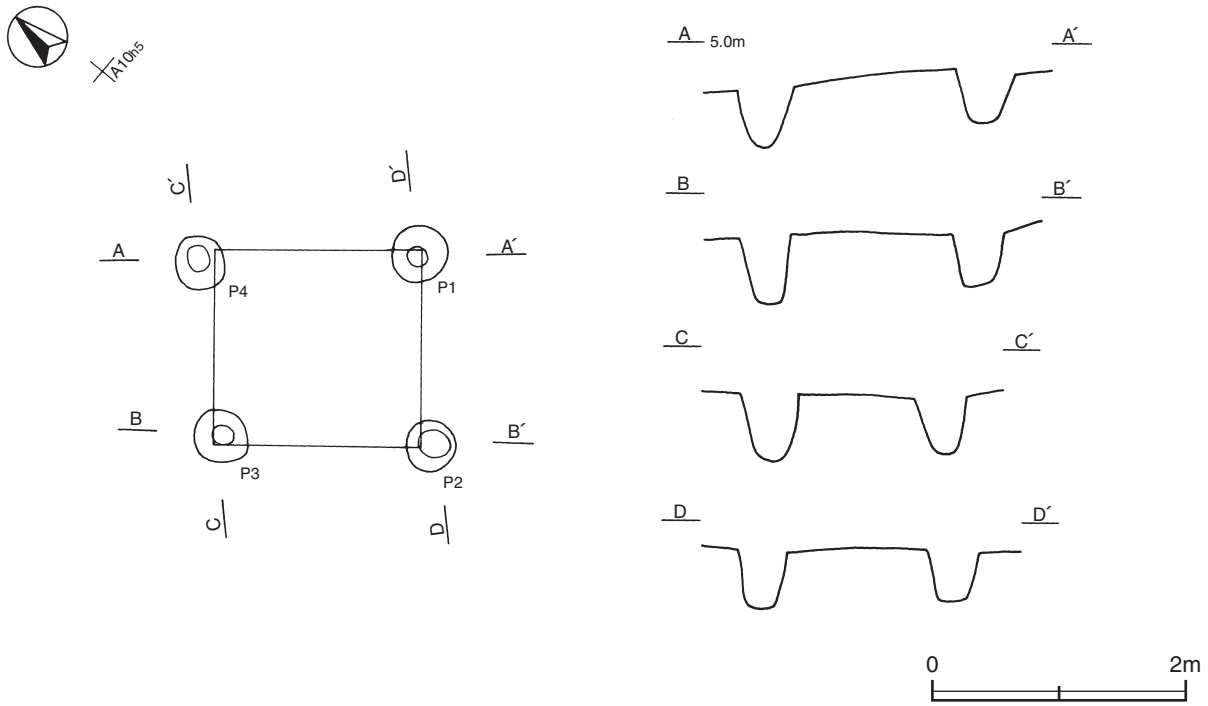


第94図　第10号掘立柱建物跡実測図

第13号掘立柱建物跡（第95図）

位置　A10h4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と構造　桁行・梁行ともに１間の側柱建物跡で，１辺1.65m（5.5尺）の方形で，桁行と梁行の区別は困難である。南北軸はN－50°－Eである。



第95図　第13号掘立柱建物跡実測図

柱穴　４か所。平面形は円形で，深さは40～50㎝である。

遺物出土状況　土師器片６点（甕・甑）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，不明である。

第14号掘立柱建物跡（第96図）

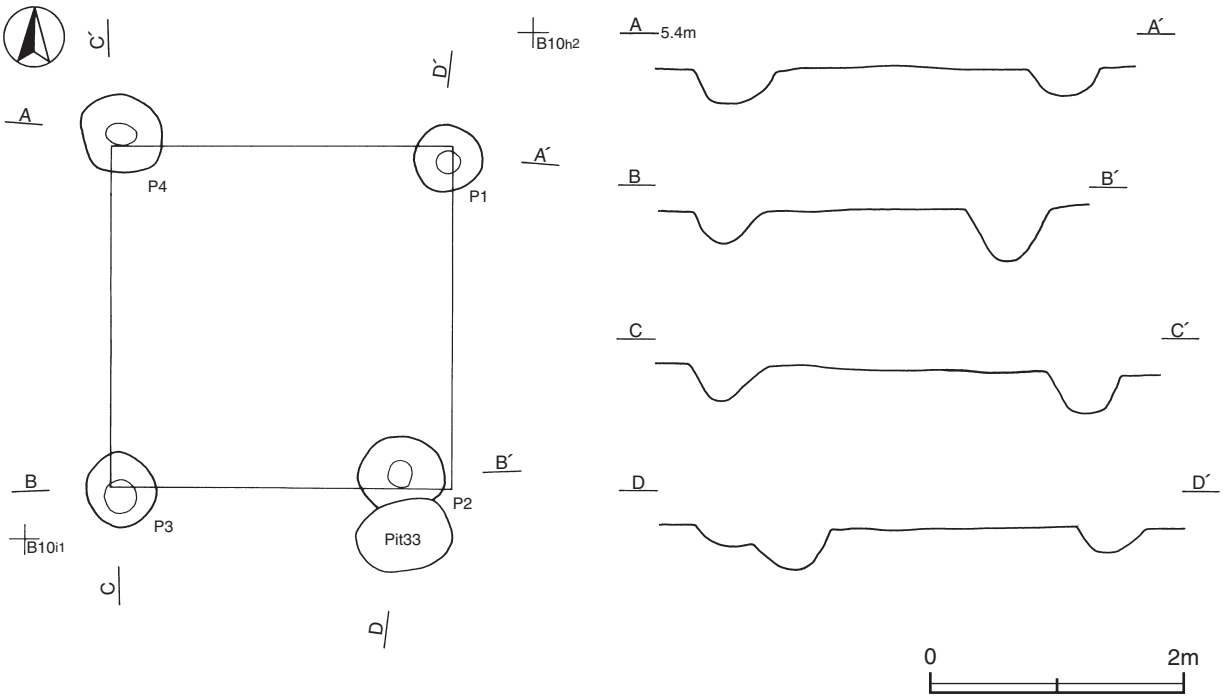
位置　Ｂ10h1区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第33号ピットに掘り込まれている。

規模と構造　桁行･梁行ともに１間の側柱建物跡で，平面形は１辺2.7ｍ（９尺）の方形で，桁行と梁行の区別は困難である。南北軸はＮ－０°である。

柱穴　４か所。平面形は円形で，深さは22～48㎝である。

所見　時期は，不明である。



第96図　第14号掘立柱建物跡実測図

表11　その他の掘立柱建物跡一覧表

番号	位 置	桁行(南北)方向	柱間数 桁行×梁行(間)	構 造	柱　穴			主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
					柱穴数	平面形	深さ(㎝)			
10	B10e1	N－39°－E	1×1	側柱	4	円形	20～40	土師器	不明	SF1→本跡
13	A10h4	N－50°－E	1×1	側柱	4	円形	40～50	土師器	不明	
14	B10h1	N－0°	1×1	側柱	4	円形	22～48	－	不明	本跡→Pit33

(3) 方形竪穴遺構

第３号方形竪穴遺構（SI24）（第97図）

位置　Ｃ９a0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第16号住居，第４号柵，第12号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.1m，短軸2.9mのやや不整な方形で，主軸方向はＮ－55°－Ｅである。壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で砂層をそのまま使用しており，全面に焼土粒子・炭化粒子が広がっている。

ピット　３か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ10～55cmで，Ｐ２をＰ３が掘り込んでいる。性格は不明である。

土層解説

1	黒	色　灰白色砂多量	3	黒	色　灰白色砂微量
2	黒	色　灰白色砂少量	4	黒	色　炭化粒子・灰白色砂微量

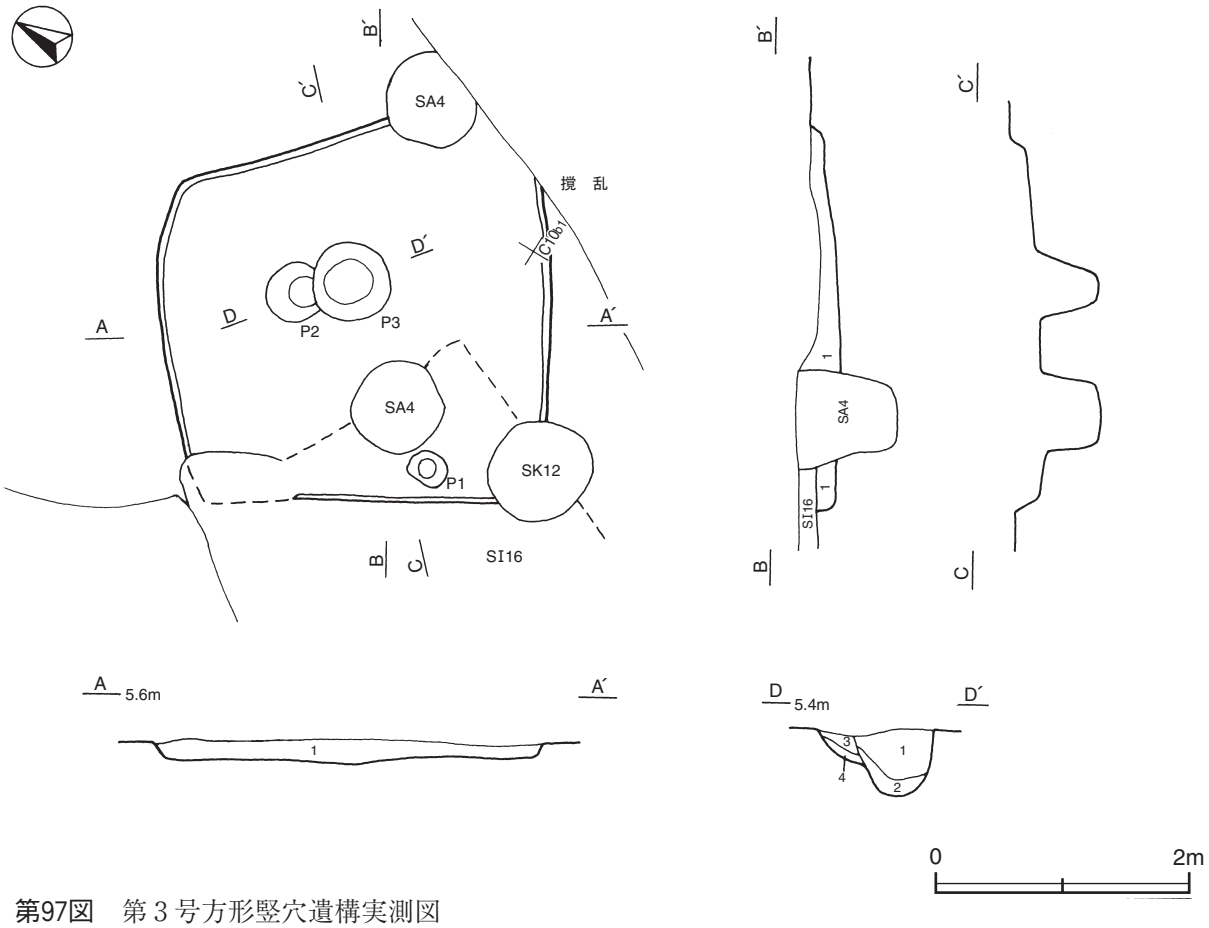
覆土　単一層である。焼土ブロック・凝灰岩ブロックを含んでおり，灰白色砂が不規則に混じった堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒	色　凝灰岩ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量

遺物出土状況　土師器片40点（坏・高坏３，甕・甑37），また，混入した須恵器片１点と陶器片１点も出土している。磨滅した細片が覆土中からまばらな状態で出土しているだけで，図示することができない。

所見　時期は，不明である。



第97図　第３号方形竪穴遺構実測図

(4) 柵跡

第３号柵跡（SB12）（第98図）

位置　Ｂ９j0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第15号住居跡を掘り込んでいる。

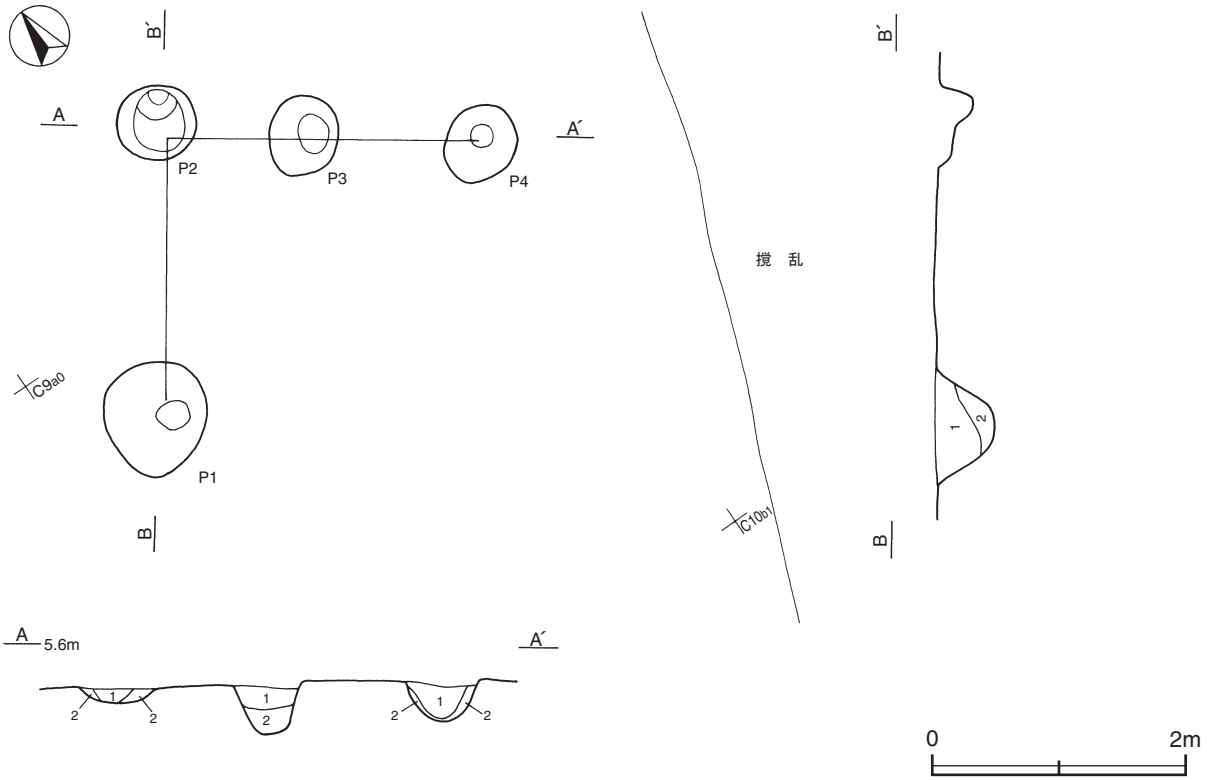
規模と構造　東西２間，南北１間に柱穴が並んでおり，南北軸はＮ－35°－Ｅである。柱間寸法は，Ｐ１・Ｐ２間が2.1m（７尺），Ｐ２・Ｐ３間，Ｐ３・Ｐ４間は1.2m（４尺）である。

柱穴　４か所。平面形は円形で，深さは11～50㎝である。土層は第１・２層が柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
１　黒　　色　灰白色砂微量　　２　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片18点（坏１，甕・甑17），須恵器片３点（坏・高台付坏１，甕２）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，重複関係から古墳時代後期以降であるが，不明である。また，本柵と付属する建物跡も調査区域内には確認されていない。



第98図　第３号柵跡実測図

第４号柵跡（SB15）（第99図）

位置　Ｃ９a0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第15・16号住居跡，第３号方形竪穴遺構，第17号土坑を掘り込んでいる。

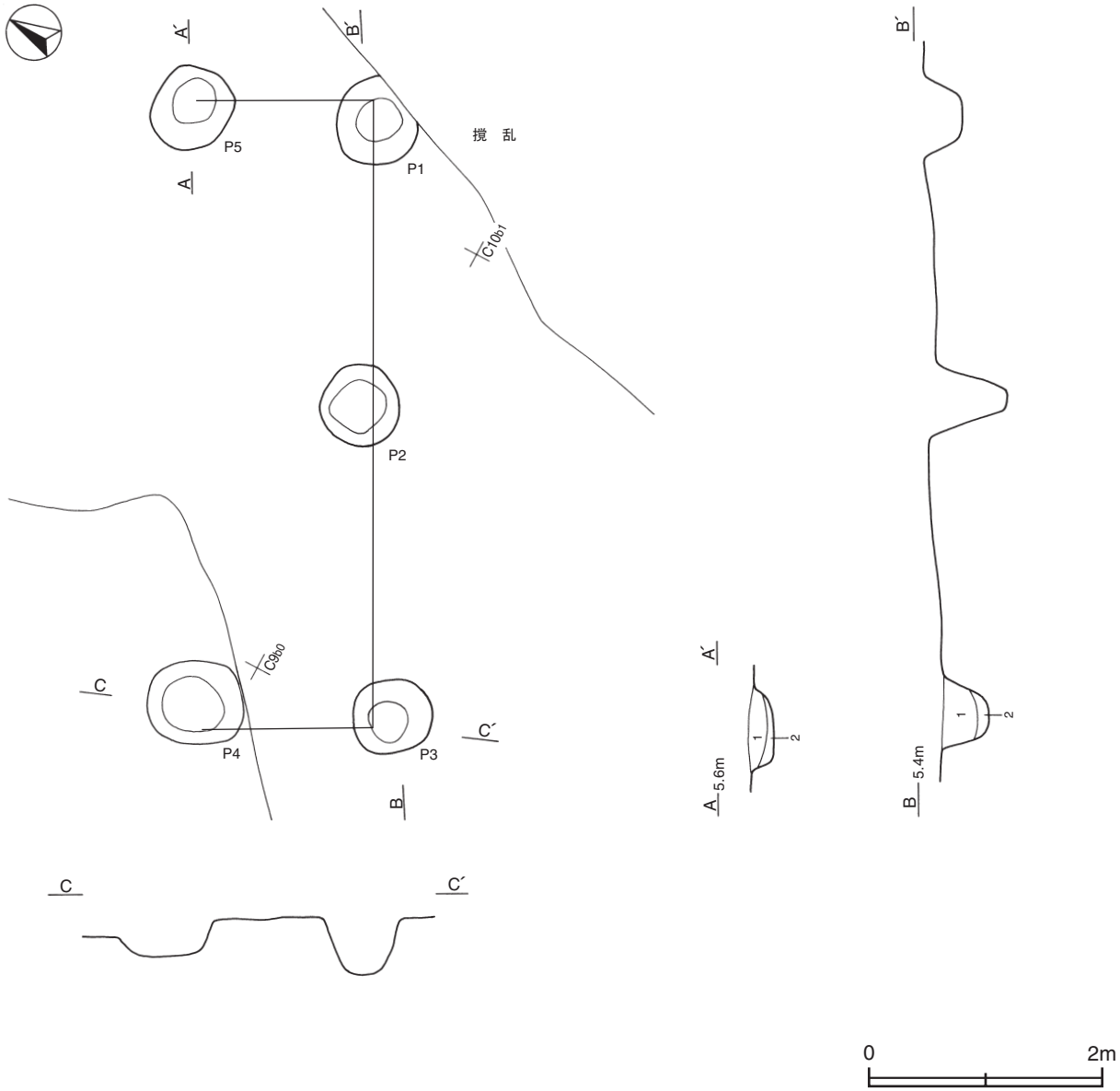
規模と構造　「コ」字形に柱穴が並んでおり，南北軸はＮ－63°－Ｅである。柱間寸法は，Ｐ１・Ｐ５間，Ｐ３・Ｐ４間が1.5m（５尺）で，Ｐ１・Ｐ２間，Ｐ２・Ｐ３間は2.7m（９尺）である。

柱穴　５か所。平面形は円形で，深さは24～60㎝である。第１・２層は柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　炭化粒子少量，灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片40点（坏５，甕・甑35）が出土している。また，流れ込んだ弥生土器片も出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，重複関係から古墳時代後期以降であるが，不明である。また，本柵と付属する建物跡も調査区域内には確認されていない。



第99図　第４号柵跡実測図

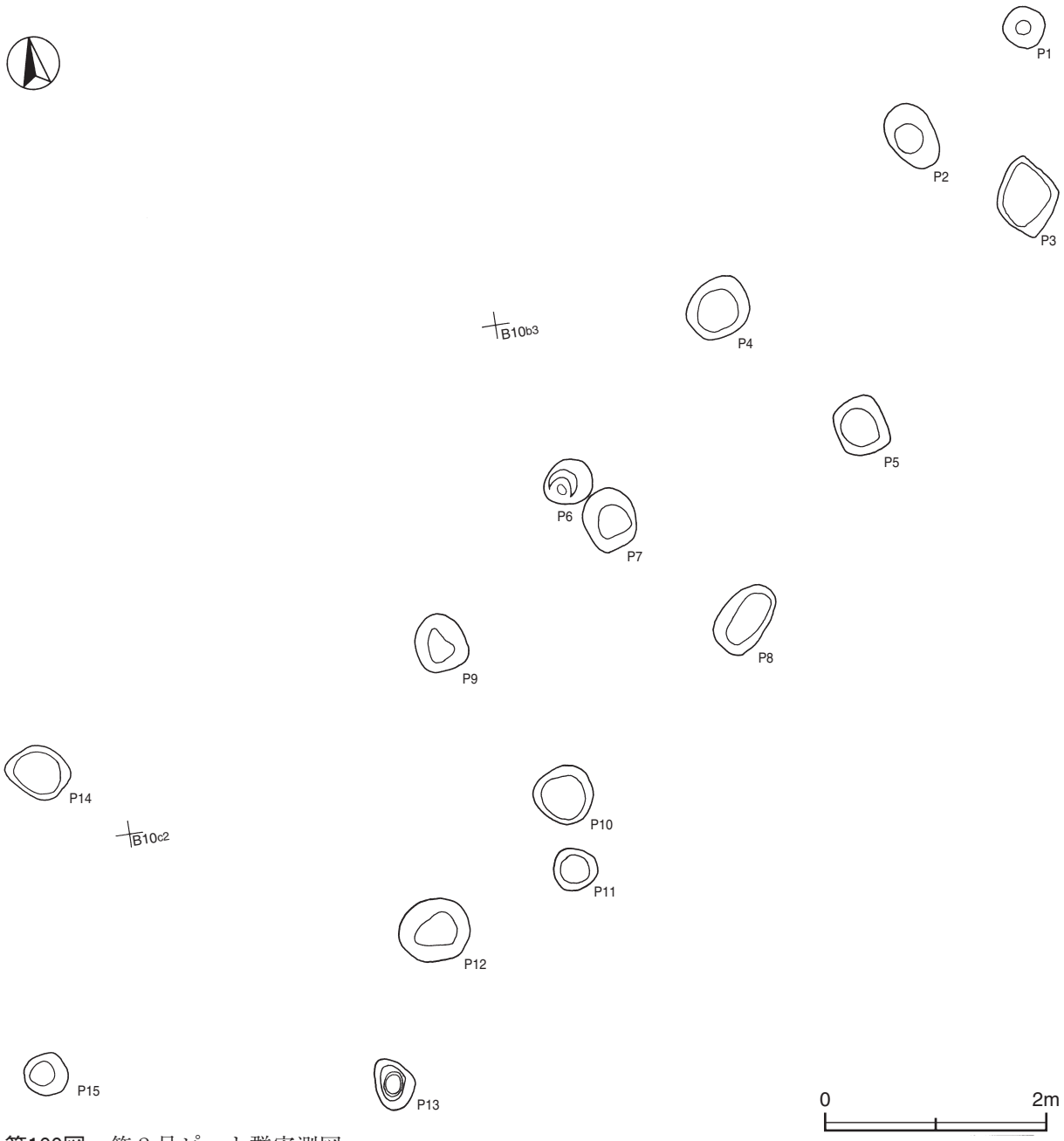
表12　その他の柵跡一覧表

番号	位 置	南北軸方向	柱間寸法（m）	付属施設	柱　穴			主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
					柱穴数	平面形	深さ(cm)			
3	B 9 j0	N－35°－E	P1・P2　2.1 P2・P3　1.2 P3・P4　1.2	不明	4	円形	11～50	土師器　須恵器	不明	SI15→本跡
4	C 9 a0	N－63°－E	P1・P2　2.7 P2・P3　2.7 P3・P4　1.5 P1・P5　1.5	不明	5	円形	24～60	土師器	不明	SI15→SI16，UP3，SK17 →本跡

（5）ピット群

第２号ピット群（第100図）

位置　B 10a3～B 10c1区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第100図　第２号ピット群実測図

重複関係　第１号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状　南北10m，東西11mほどの範囲から，15基のピットが南北軸Ｎ－48°－Ｅの方向で二列に並んで確認されている。ピットの平面形は円形もしくは楕円形で，深さは３～45㎝である。

遺物出土状況　土師器片20点（坏・高坏２，甕・甑18）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，重複関係から第１号道路跡以降であるが，不明である。また，ピット同士の重複がなく，すべてが一時期の可能性もあり，列状を呈していることから柵跡の可能性も想定される。

第２号ピット群計測表（第100図）

番号	長径(㎝)	短径(㎝)	深さ(㎝)	番号	長径(㎝)	短径(㎝)	深さ(㎝)	番号	長径(㎝)	短径(㎝)	深さ(㎝)
P１	40	33	－	P６	46	40	－	P11	41	39	21
P２	60	43	3	P７	58	47	－	P12	65	56	12
P３	72	55	－	P８	68	42	－	P13	46	35	45
P４	59	50	－	P９	54	47	24	P14	60	46	27
P５	53	44	－	P10	55	53	23	P15	42	39	38

（6）溝跡

第２号溝跡（第４・101図）

位置　Ｅ９b2～Ｅ９c4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第２・３号掘立柱建物跡，第１号柵跡を掘り込んでいる。

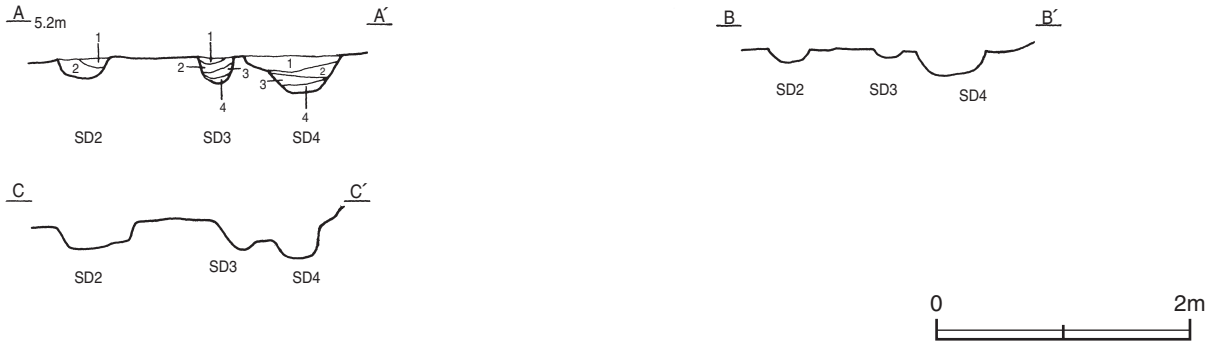
規模と形状　全長8.0m，上幅35～61㎝，下幅12～48㎝，深さ10～19㎝で，北西方向（Ｎ－47°－Ｗ）に直線的に延びている。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面に高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。粘土を含んでいる砂であることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　粘土粒子少量，黄色砂微量　　2　黒　　色　粘土粒子・黄色砂少量

遺物出土状況　土師器片14点（甕・甑），須恵器片３点（坏・高台付坏１，甕２）が出土している。摩滅した細片で，図示することができない。

所見　時期は，不明である。



第101図　第２～４号溝跡実測図

第３号溝跡（第４・101図）

位置　Ｅ９b3～Ｅ９c4区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　全長5.1ｍ，上幅20～38㎝，下幅７～19㎝，深さ３～11㎝で，北西方向（Ｎ－38°－Ｗ）に，直線的に延びている。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　４層に分層される。粘土を含んでいる砂であることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

１	黒	色　粘土粒子・黄色砂・鉄分微量	３	黄	色　粘土粒子・鉄分微量
２	黒	色　鉄分少量，粘土ブロック・黄色砂微量	４	黒	色　粘土ブロック微量

遺物出土状況　土師器片２点（坏，甕･甑）が出土している。摩滅した細片であり，図示することができない。

所見　時期は，不明である。

第４号溝跡（第４・101図）

位置　Ｅ９a2～Ｅ９c4区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第２・３号掘立柱建物跡，第１号柵跡を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｅ９c4区から，北西方向（Ｎ－39°－Ｗ）に直線的に延びており，西側がさらに調査区域外に続いている。確認された長さは13.1ｍで，上幅25～65㎝，下幅10～40㎝，深さ20～28㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面に高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　４層に分層される。粘土を含んでいる砂であることから，人為的堆積と考えられる。

土層解説

１	黒	色　粘土ブロック・焼土粒子・灰白色砂微量	３	黒	色　粘土ブロック・灰白色砂微量
２	黒	色　灰白色砂中量，粘土ブロック微量	４	黒	色　粘土ブロック・灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片25点（坏５，甕・甑20），須恵器片11点（坏・高台付坏10，蓋１）が出土している。摩滅した細片で，図示することができない。

所見　時期は，不明である。本溝は，第２・３号溝跡と走行方向をほぼ同じくし並列していること及び覆土の土質及び堆積状況も同じことから，これらの溝跡はほぼ同時期と推測される。

第７号溝跡（第102図）

位置　Ｂ10e2～Ｂ10g1区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第14号溝跡を掘り込み，第11号溝，第25号ピットに掘りこまれている。

規模と形状　長さは9.1ｍのみ確認されており，上幅53～80㎝，下幅37～50㎝，深さ36～45㎝で，北東方向（Ｎ－31°－Ｅ）にやや湾曲して延びている。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面に高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

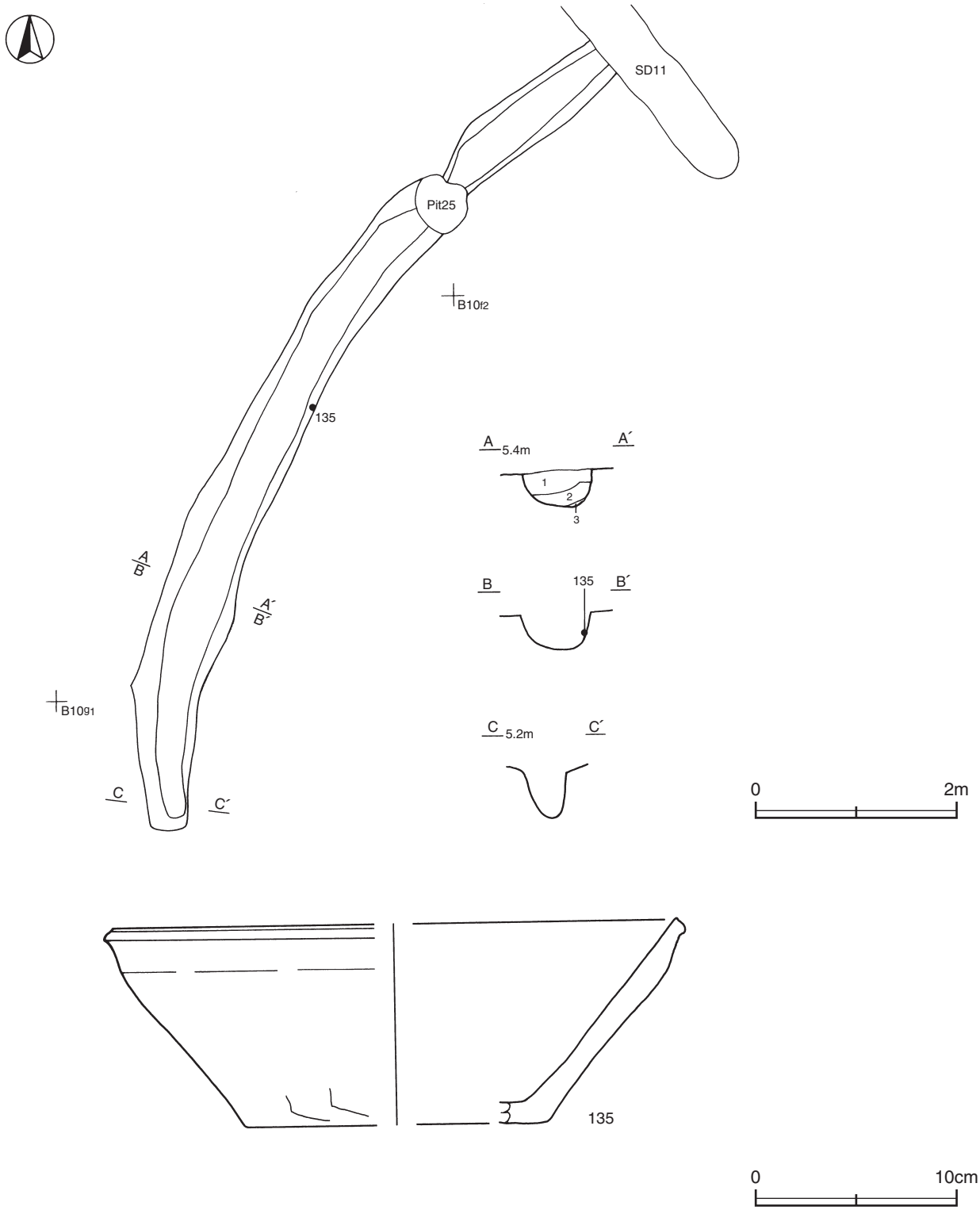
覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

１	黒	色　灰白色砂微量	３	黒	色　炭化粒子・灰白色砂微量
２	黒	色　灰白色砂少量			

遺物出土状況　土師器片171点（坏・高坏４，甕・甑167），須恵器片１点（鉢）が出土している。135は壁際の覆土中層から出土しているが，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，不明である。



第102図　第７号溝跡・出土遺物実測図

第７号溝跡出土遺物観察表（第102図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
135	須恵器	鉢	[28.0]	10.0	[15.0]	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	灰	普通	ロクロナデ　体部下端手持ちヘラ削り後ナデ	覆土中層	10%

第８号溝跡（第４・103図）

位置　Ｄ９d7～Ｄ９e5区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第４号土坑に掘り込まれている。

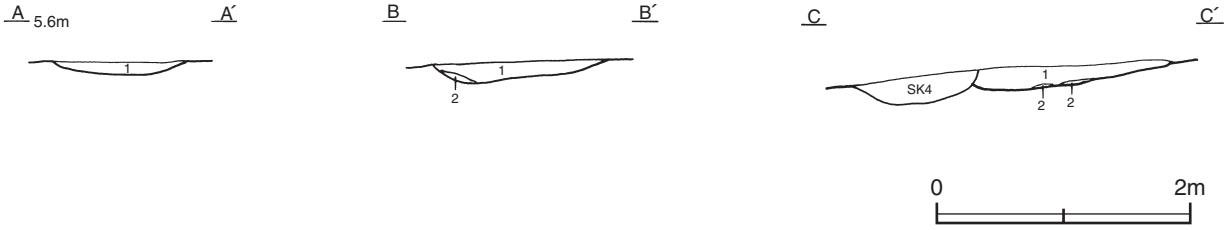
規模と形状　両端が削平及び撹乱を受けていることから，長さ8.3mのみ北東方向（Ｎ－54°－Ｅ）に直線的に延びている。上幅90～145㎝，下幅48～84㎝，深さ10～20㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から堆積した状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片280点（甕・甑），須恵器片31点（坏・高台付坏）が出土している。また，混入した陶器片８点も出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，不明である。



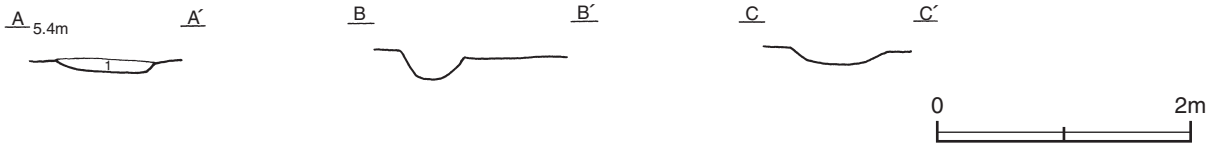
第103図　第８号溝跡実測図

第９号溝跡（第４・104図）

位置　Ｃ９g8～Ｃ９h9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第56号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　両端が削平及び撹乱を受けていることから，長さ7.0mのみ北西方向（Ｎ－56°－Ｗ）に直線的に延びている。上幅60～100㎝，下幅40～70㎝，深さ８～18㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面に高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。



第104図　第９号溝跡実測図

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

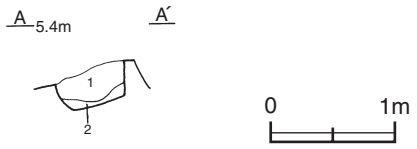
土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

所見　時期は，不明である。

第10号溝跡（第４・105図）

位置　Ｂ10f1区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　全長1.6ｍ，上幅40～50㎝，下幅20～30㎝，深さ27㎝で，北東方向（Ｎ－33°－Ｅ）に直線的に延びている。底面はほぼ平坦で，底面に高低差はない。壁はほぼ直立している。



第105図　第10号溝跡実測図

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

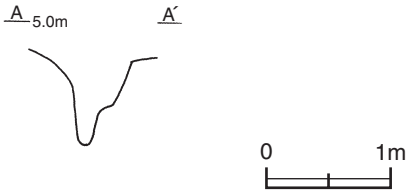
土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　黄色砂微量

所見　時期は，不明である。

第11号溝跡（第４・106図）

位置　Ｂ10e2区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号道路跡，第７号溝跡を掘り込んでいる。



第106図　第11号溝跡実測図

規模と形状　全長2.9ｍ，上幅50～57㎝，下幅24～36㎝，深さ35㎝で，北西方向（Ｎ－42°－Ｗ）で，直線的に延びている。底面はほぼ平坦で，底面に高低差はなく，南東端部にはピットが１か所確認されている。壁はほぼ直立しており，壁の中段に平坦面を有する箇所もある。

遺物出土状況　土師器片22点（甕・甑）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，不明である。

第12号溝跡（第４・107図）

位置　Ｂ９j0～Ｂ10j1区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第50号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　両端が削平及び撹乱を受けていることから，長さ4.2ｍのみ北西方向（Ｎ－71°－Ｗ）に直線的に延びている。上幅30～48㎝，下幅15～25㎝，深さ５㎝である。底面はほぼ平坦で，壁の立ち上がりは不明瞭である。

第107図　第12号溝跡実測図

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

所見　時期は，不明である。

第14号溝跡（第４・108図）

位置　Ｂ10g1～Ｂ８h9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第７号溝に掘り込まれている。

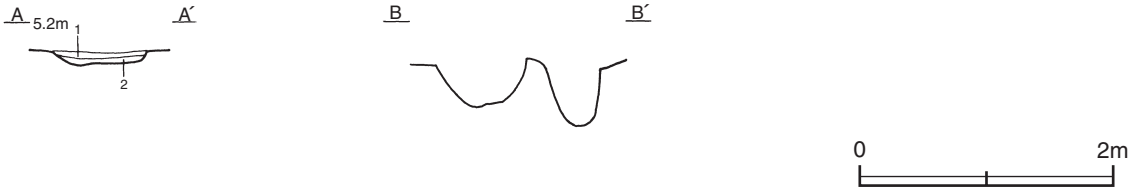
規模と形状　長さは7.7mのみ北東方向（Ｎ－56°－Ｅ）に直線的に延びており，Ｂ10g1区が端部と推測され，南西側はさらに調査区域外に続いている。上幅30～60㎝，下幅20～30㎝，深さ10～35㎝で，底面は北東方向に向かってやや傾斜している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量

遺物出土状況　須恵器片１点（甕）が出土している。細片で，図示することができない。

所見　時期は，不明である。



第108図　第14号溝跡実測図

第15号溝跡（第４・109図）

位置　Ｃ９a８～Ｃ９d0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第７号掘立柱建物，ピット95に掘り込まれている。

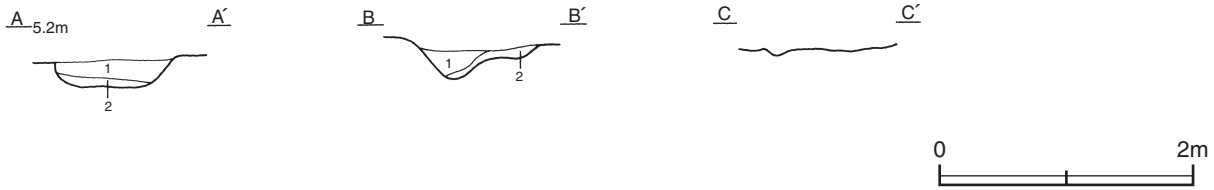
規模と形状　削平されていることから，遺存状態が悪い。遺存する箇所から推測される長さは13.0mで，北西方向(Ｎ－25°－W)に直線的で，北西･南東側にさらに続くものと考えられる。遺存する箇所で，上幅80～95㎝，下幅60～75㎝，深さ８～22㎝である。底面はほぼ平坦で，底面に高低差はないものと推測される。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が堆積した状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片30点（坏・高坏６，甕・甑24）が出土している。細片で，図示できるものはない。

所見　重複関係から９世紀中葉以前であるが，時期は明確にできない。北に走行方向をほぼ同じくする第13号溝跡と関連する可能性がある。



第109図　第15号溝跡実測図

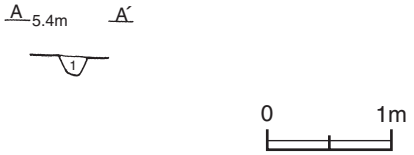
第16号溝跡（第４・110図）

位置　Ｂ10f1・Ｂ10f2区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号円形周溝状遺構に掘り込まれている。

規模と形状　重複のため，長さ2.2ｍのみ北西方向（Ｎ－７°－Ｗ）に直線的に確認されている。上幅20～30㎝，下幅14～18㎝，深さ14㎝である。底面はほぼ平坦で，底面の高低差はない。壁はほぼ直立している。

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。



土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

所見　時期は，不明である。

第110図　第16号溝跡実測図

表13　その他の溝跡一覧表

番号	位置	走行方向	形状	規模				覆土	底面	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
				長さ(m)	上幅(㎝)	下幅(㎝)	深さ(㎝)					
2	Ｅ９b2～Ｅ９c4	Ｎ－47°－Ｗ	直線	8.0	35～61	12～48	10～19	人為	平坦	土師器　須恵器	不明	SB3→SB2，SA1→本跡
3	Ｅ９b3～Ｅ９c4	Ｎ－38°－Ｗ	直線	5.1	20～38	7～19	3～11	人為	平坦	土師器	不明	
4	Ｅ９a2～Ｅ９c4	Ｎ－39°－Ｗ	直線	13.1	25～65	10～40	20～28	人為	平坦	土師器　須恵器	不明	SB3→SB2，SA1→本跡
7	B10e2～B10g1	Ｎ－31°－Ｅ	直線	(9.1)	53～80	37～50	36～45	自然	平坦	土師器　須恵器	不明	SD14→本跡→SD11，Pit25
8	Ｄ９d7～Ｄ９e5	Ｎ－54°－Ｅ	直線	(8.3)	90～145	48～84	10～20	自然	平坦	土師器　須恵器	不明	本跡→SK4
9	Ｃ９g8～Ｃ９h9	Ｎ－56°－Ｗ	直線	(7.0)	60～100	40～70	8～18	不明	平坦	－	不明	本跡→Pit56
10	B10f1	Ｎ－33°－Ｅ	直線	1.6	40～50	20～30	27	自然	平坦	－	不明	
11	B10e2	Ｎ－42°－Ｗ	直線	2.9	50～57	24～36	35	－	平坦	土師器	不明	SF1，SD7→本跡
12	Ｂ９j0～B10j1	Ｎ－71°－Ｗ	直線	(4.2)	30～48	15～25	5	不明	平坦	－	不明	本跡→Pit50
14	B10g1～Ｂ８h9	Ｎ－56°－Ｅ	直線	(7.7)	30～60	20～30	10～35	自然	平坦	須恵器	不明	本跡→SD7
15	Ｃ９a8～Ｃ９d0	Ｎ－25°－Ｗ	直線	(13.0)	80～95	60～75	8～22	自然	平坦	土師器	不明	本跡→SB7，Pit95
16	B10f1・B10f2	Ｎ－７°－Ｗ	直線	(2.2)	20～30	14～18	14	不明	平坦	－	不明	本跡→第1号円形周溝状遺構

（7）土坑

時期が分かる古墳時代及び奈良時代の遺構との重複関係が，それらより古いものを４基抽出し記述する。その他については実測図（第115～118図）と土層解説を掲載する。

第13号土坑（第111図）

位置　Ｄ９j5区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第26号住居，第１号掘立柱建物に掘り込まれている。

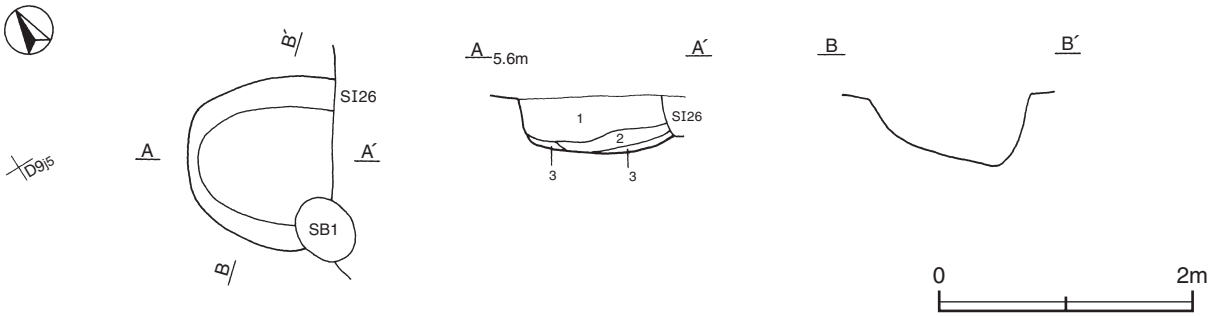
規模と形状　径1.1ｍのみが確認されており，形状･長径方向は不明である。深さは47㎝で，底面はほぼ平坦で，壁はほぼ直立している。

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子微量
2　黄　　色　炭化粒子少量
3　灰　白　色　黒色砂中量

遺物出土状況　土師器片27点（坏３，甕24），須恵器片１点（蓋）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，重複関係から８世紀後葉以前であるが，明確でない。



第111図　第13号土坑実測図

第16号土坑（第112図）

位置　Ｂ10a3区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号道路に掘り込まれている。

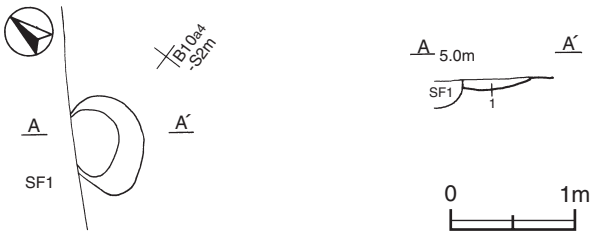
規模と形状　長径0.8ｍ，短径0.5ｍのみが確認され，楕円形と考えられる。長径方向はＮ－41°－Ｅである。深さは８㎝で，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　単一層である。層厚が薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説
１　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片８点（坏１，甕・甑７），須恵器片１点（坏・高台付坏）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，第１号道路以前のものであるが，明確でない。



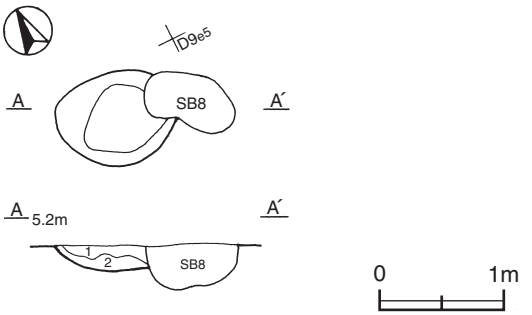
第112図　第16号土坑実測図

第23号土坑（第113図）

位置　Ｄ９e4区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第８号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　長径0.9ｍ，短径0.7ｍの楕円形で，長径方向はＮ－63°－Ｗである。深さは20㎝で，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。



第113図　第23号土坑実測図

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂少量

所見　時期は，重複関係から８世紀前葉以前であるが，明確でない。

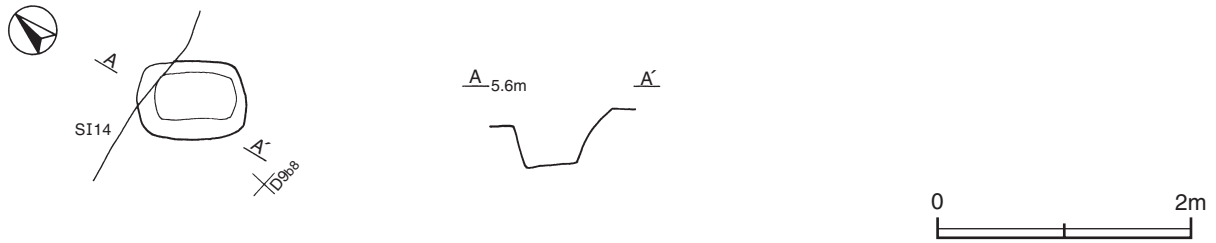
第45号土坑（第114図）

位置　Ｄ９a8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

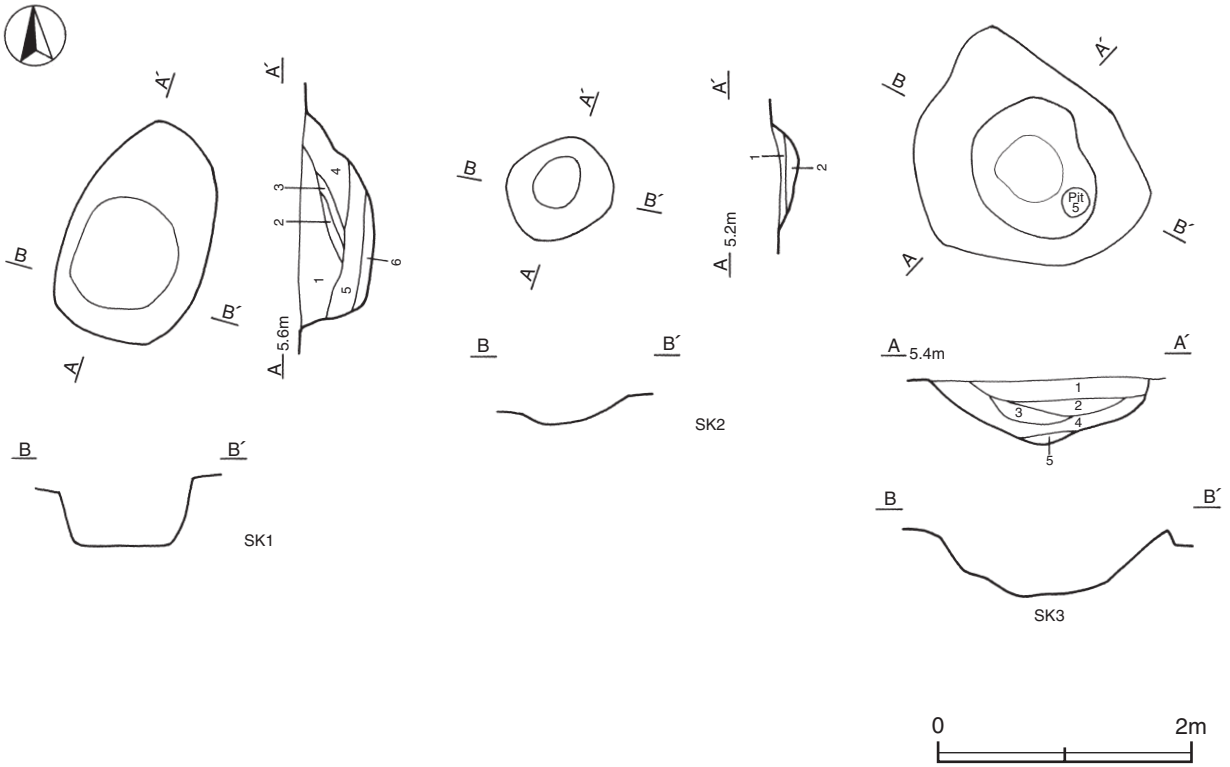
重複関係　第14号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸0.９m，短軸0.6mの長方形で，長軸方向はＮ－43°－Ｗである。深さは44㎝で，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

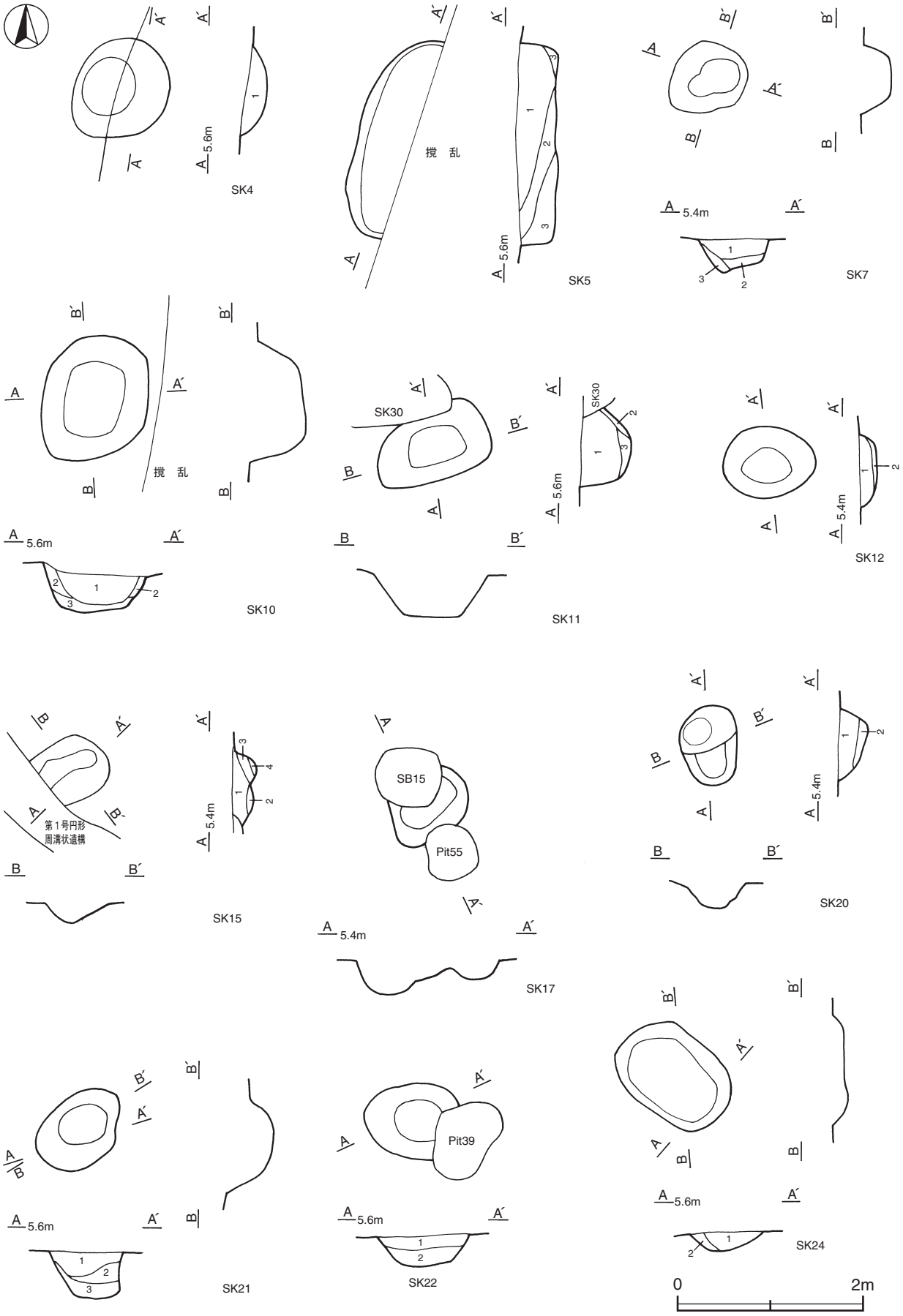
所見　時期は，重複関係から８世紀後葉以前であるが，明確にできない。



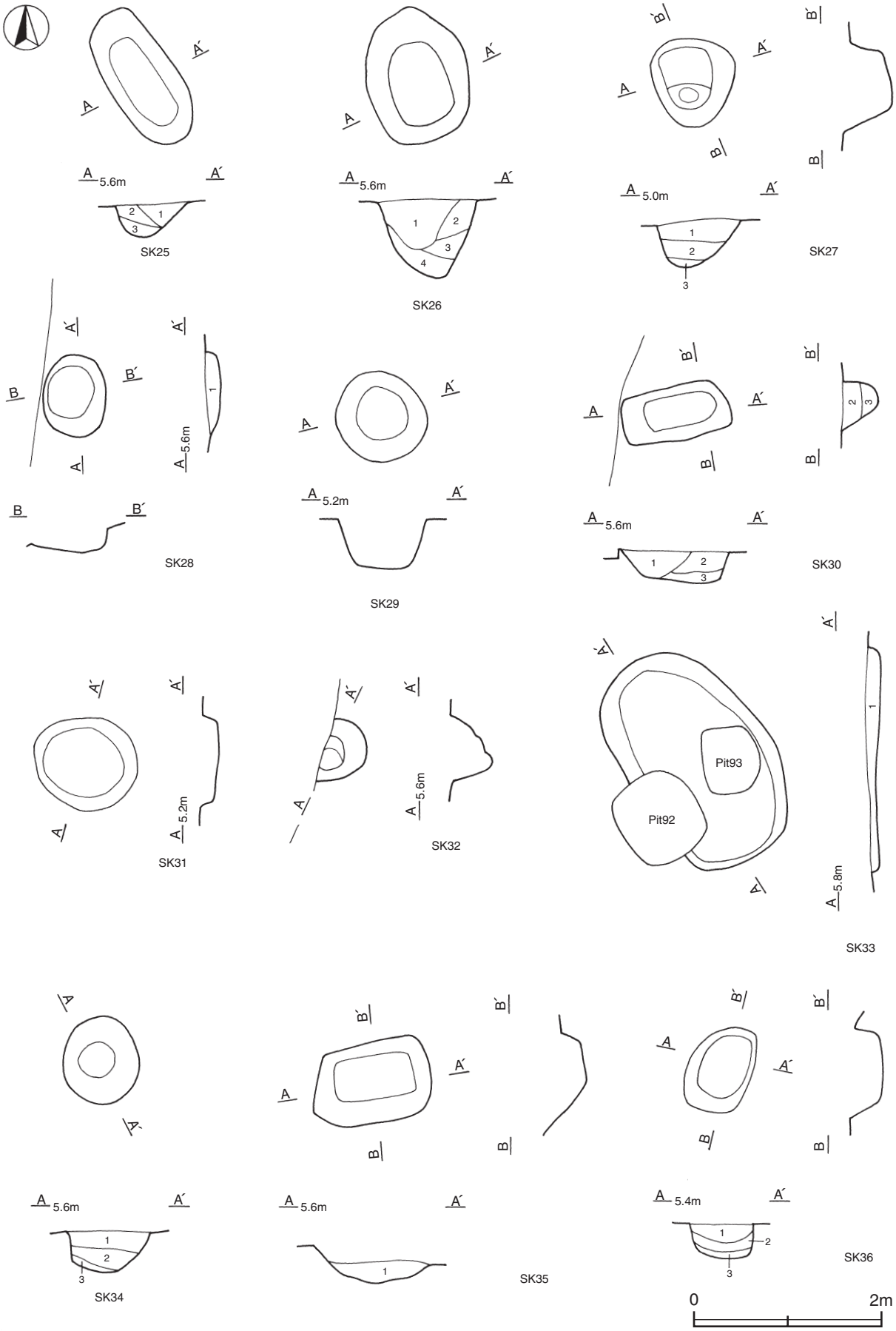
第114図　第45号土坑実測図



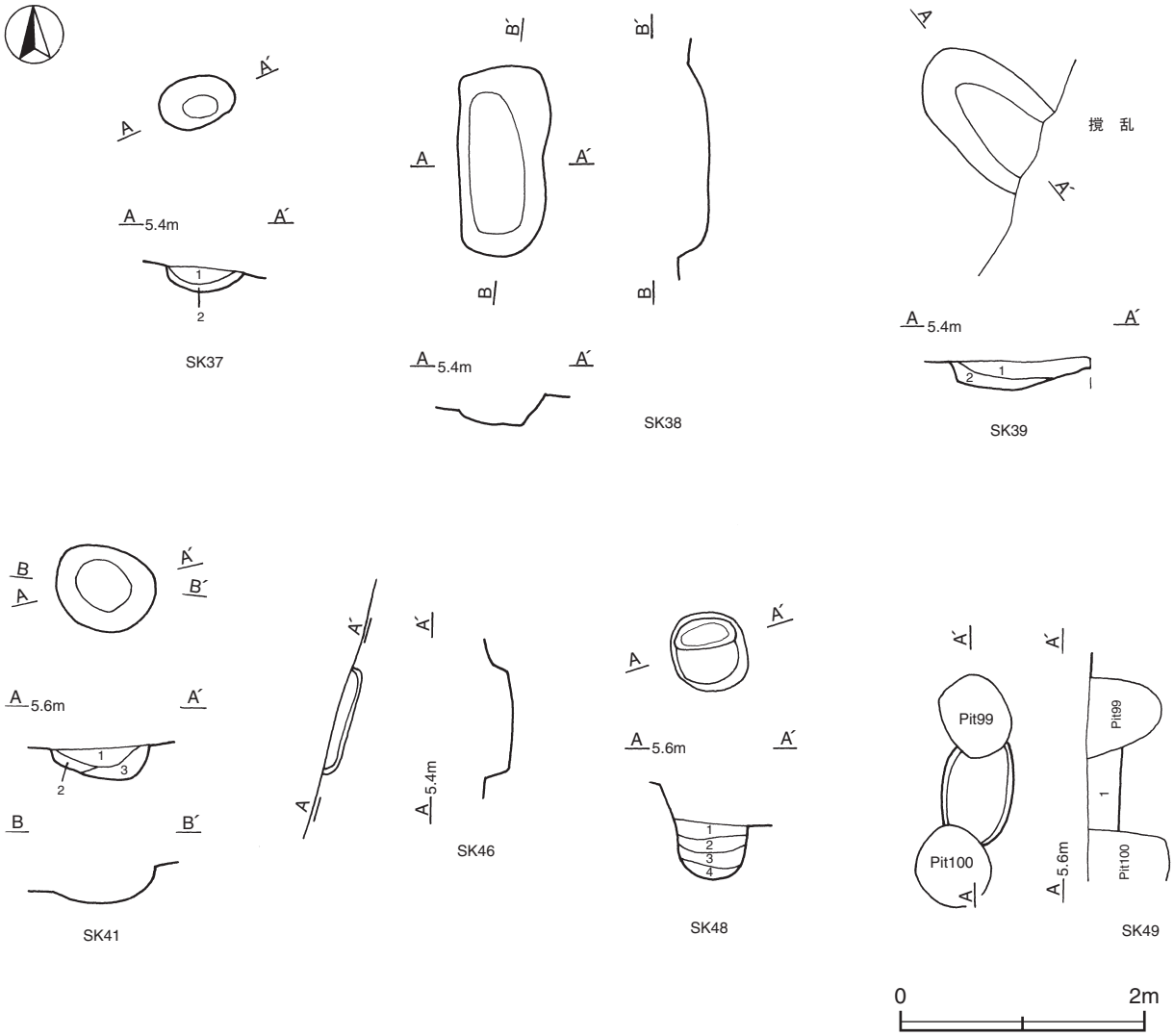
第115図　その他の土坑実測図(1)



第116図　その他の土坑実測図(2)



第117図　その他の土坑実測図(3)



第118図　その他の土坑実測図(4)

第１号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂少量，炭化粒子微量
4　黒　　色　灰白色砂中量
5　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量
6　黒　　色　灰白色砂多量，炭化粒子微量

第２号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量

第３号土坑土層解説
1　黒　　色　焼土ブロック・炭化物・灰白色砂微量
2　黒　　色　炭化物少量，灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量
4　黒　　色　灰白色砂少量，焼土ブロック微量
5　黒　　色　灰白色砂微量

第４号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第５号土坑土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第７号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂多量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量

第10号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量
3　灰　白　色　黒色砂微量

第11号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂少量

第12号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　黄色砂微量

第15号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　黄色砂少量
4　黒　　色　灰白色砂少量

第20号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量

第21号土坑土層解説
1　黒　　色　凝灰岩ブロック・焼土粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第22号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量

第24号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量

第25号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂少量，炭化物・焼土粒子微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂中量

第26号土坑土層解説
1　黒　　色　焼土ブロック・炭化物・灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量，炭化粒子微量
3　黒　　色　灰白色砂微量
4　黒　　色　灰白色砂少量

第27号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂微量

第28号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第30号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第33号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第34号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量
3　灰　白　色　黒色砂多量

第35号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂多量

第36号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第37号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量

第39号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　灰白色砂微量

第41号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂少量

第48号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂多量
4　灰　白　色　黒色砂中量

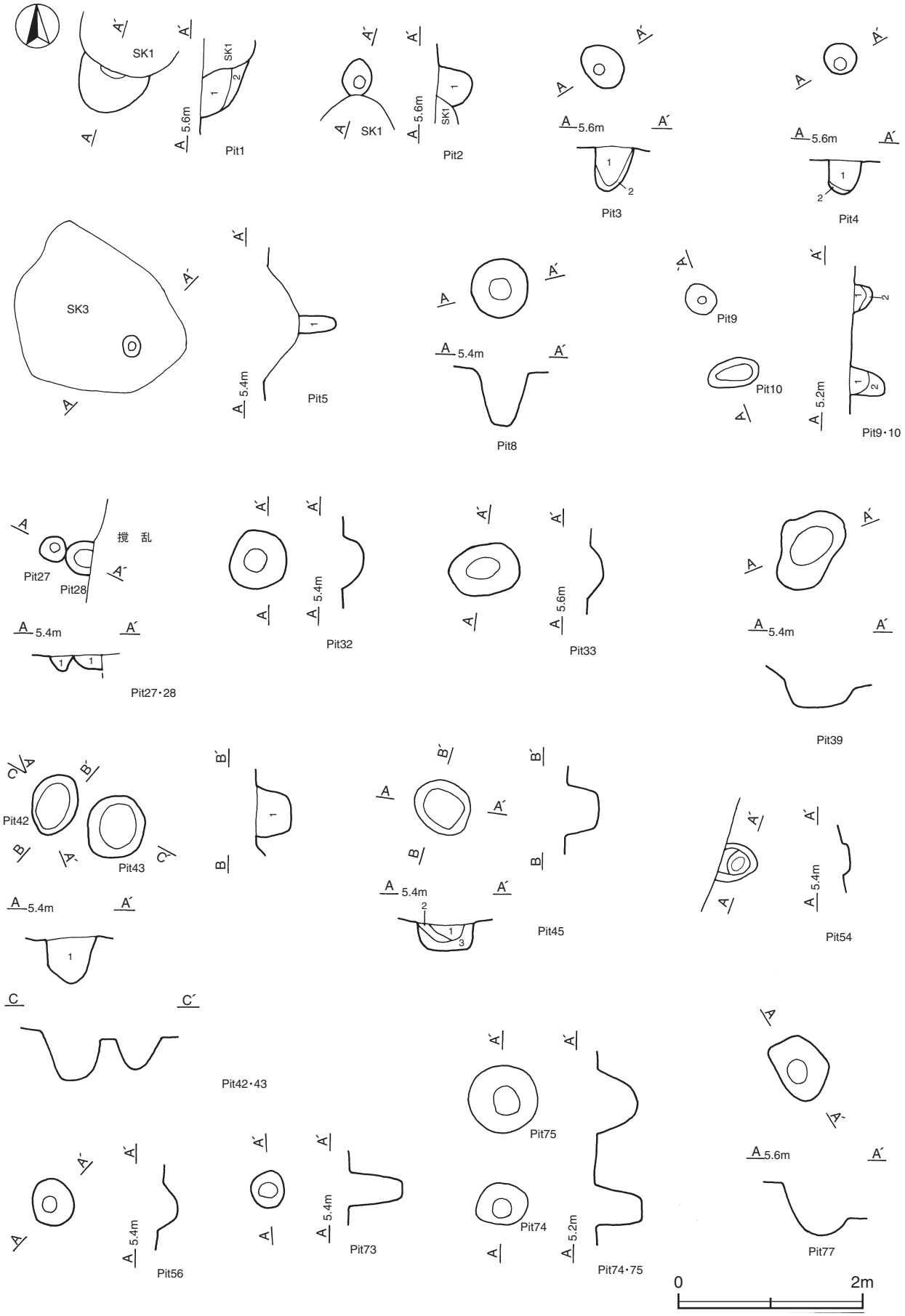
第49号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

表14　その他の土坑一覧表

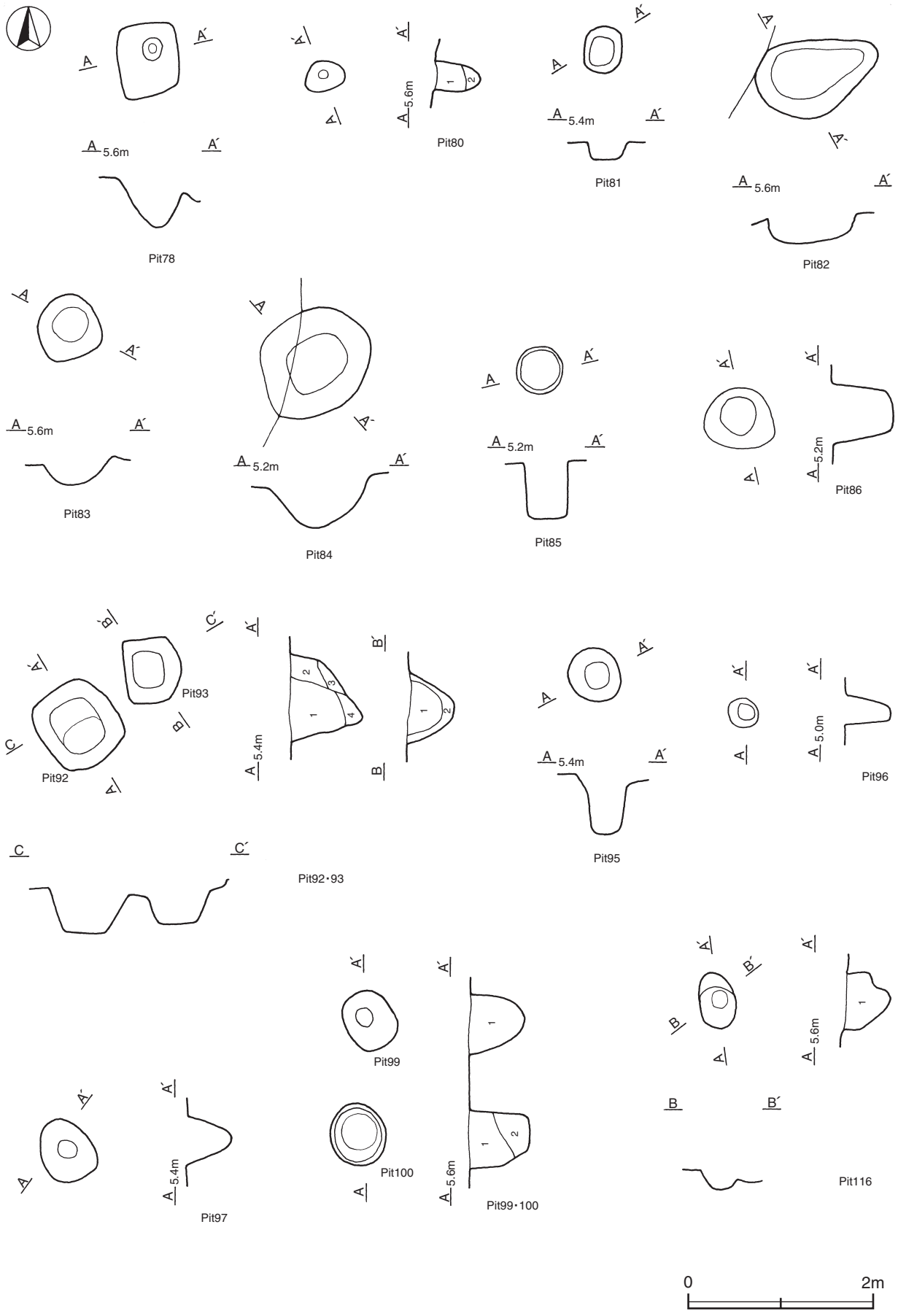
番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時 代	備　考 新旧関係(旧→新)
1	D 9 h5	N－17°－E	楕円形	1.8×1.1	56	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SD1→Pit1・2→SI8→本跡
2	E 9 c3	N－51°－E	円形	0.8×0.8	18	緩斜	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
3	E 9 b4	N－25°－W	不整形	2.0×(1.7)	52	緩斜	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	本跡→Pit5
4	D 9 e5	N－40°－E	楕円形	1.2×1.0	20	外傾	平坦	自然	－	不明	SD8→本跡
5	D 9 h6	N－19°－E	[楕円形]	2.2×(0.6)	41	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SI8→本跡
7	E 9 c4	N－61°－E	不整楕円形	0.9×0.8	36	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
10	D 9 g6	N－ 8°－E	楕円形	1.4×1.1	56	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
11	D 9 i4	N－73°－E	楕円形	1.3×0.7	53	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	本跡→SK30
12	C 9 b0	N－77°－E	楕円形	1.0×0.8	19	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SI16→本跡
13	D 9 j5	不明	不明	(1.1)×(1.1)	47	直立	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	本跡→SI26, SB1
15	B10g1	N－61°－E	不明	(0.7)×0.5	20	緩斜	平坦	自然	土師器	不明	本跡→第1号円形周溝状遺構
16	B10a3	N－41°－E	楕円形	0.8×(0.5)	8	外傾	平坦	不明	土師器　須恵器	不明	本跡→SF1
17	C10a1	N－44°－E	不明	0.8×(0.6)	20	外傾	平坦	－	土師器　須恵器	不明	本跡→SB15, Pit55
20	B10h1	N－ 5°－W	楕円形	0.9×0.6	32	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
21	D 9 c6	N－58°－E	楕円形	1.0×0.8	50	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SI13→本跡
22	D 9 c6	N－85°－W	[楕円形]	(0.8)×0.8	30	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SI13→本跡→Pit39
23	D 9 e4	N－63°－W	楕円形	0.9×0.7	20	外傾	平坦	自然	－	不明	本跡→SB8
24	C 9 f9	N－42°－W	楕円形	1.3×1.0	13	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
25	C 9 e8	N－28°－W	楕円形	1.5×0.7	35	緩斜	平坦	自然	土師器	不明	SI18→本跡
26	C 9 e9	N－14°－W	楕円形	1.4×1.1	85	緩斜	平坦	自然	土師器	不明	SI18→本跡
27	A10h5	N－11°－W	円形	1.0×0.9	56	外傾	段状	自然	土師器	不明	
28	D 9 b6	N－ 8°－W	楕円形	0.9×0.7	20	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
29	C 9 e7	N－30°－W	円形	1.0×0.9	53	外傾	平坦	－	土師器	不明	
30	D 9 i4	N－67°－E	隅丸長方形	1.2×0.6	36	外傾	平坦	自然	－	不明	SK11→本跡
31	C 9 e7	N－64°－W	楕円形	1.2×1.0	16	外傾	平坦	－	－	不明	
32	C 9 f8	N－25°－E	[楕円形]	0.7×(0.5)	45	外傾	平坦	－	土師器	不明	
33	C 9 d9	N－32°－W	楕円形	2.4×1.5	14	外傾	平坦	自然	土師器　鉄滓	不明	本跡→Pit92・93
34	C 9 d9	N－ 2°－W	楕円形	1.0×0.8	45	緩斜	平坦	自然	土師器	不明	SI19→本跡
35	D 9 i5	N－82°－E	隅丸長方形	1.1×0.8	54	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SI8→本跡
36	E 9 b4	N－30°－E	楕円形	1.0×0.7	37	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
37	C 9 d9	N－86°－E	楕円形	0.8×0.5	19	緩斜	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SI21→本跡
38	D 9 g5	N－ 6°－W	隅丸長方形	1.6×0.8	18	外傾	平坦	－	土師器　須恵器	不明	SI9→本跡
39	E 9 c4	N－32°－W	[楕円形]	(1.2)×0.8	23	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
41	D 9 f5	N－55°－W	楕円形	0.8×0.7	25	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SB4→本跡
45	D 9 a8	N－43°－W	長方形	0.9×0.6	44	外傾	平坦	－	－	不明	本跡→SI14
46	D 9 i2	不明	不明	0.9×(0.2)	18	外傾	平坦	－	－	不明	
48	C 9 j5	N－12°－W	楕円形	0.7×0.6	45	外傾	平坦	自然	－	不明	
49	D 9 b6	N－ 8°－E	[楕円形]	(0.6)×0.6	24	不明	平坦	不明	－	不明	本跡→Pit99・100

(8) ピット（第119～121図）

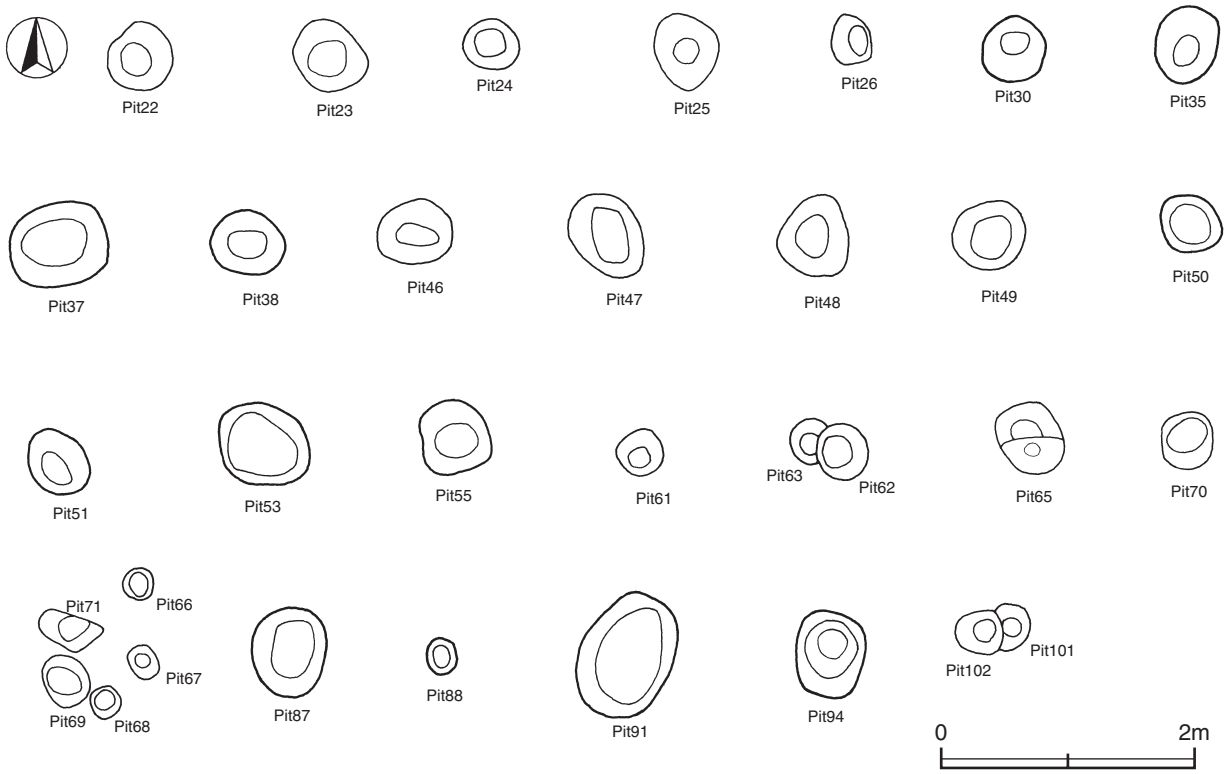
市の調査で，「柱穴状遺構」と報告されているものと形状が類似しているものを，今回「ピット」と呼称して実測図と土層解説を掲載する。



第119図　ピット実測図(1)



第120図　ピット実測図(2)



第121図　ピット実測図(3)

第１号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量

第２号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

第３号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量，炭化粒子微量
2　黒　　色　灰白色砂多量

第４号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量

第５号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂少量，灰白色砂微量

第９号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂微量

第10号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　黄色砂微量

第27号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

第28号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第42号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第45号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第80号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂多量

第92号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　灰　白　色　黒色砂多量
4　黒　　色　灰白色砂中量

第93号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂微量

第99号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂多量

第100号ピット土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量

第116号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

表15　ピット一覧表

番号	位 置	形 状	規　模(cm) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
1	D 9 h5	楕円形	76 ×(45)	50	－	不明	本跡→SK1
2	D 9 h5	楕円形	(38)× 32	37	－	不明	SD1→本跡→SK1
3	D 9 h5	楕円形	52 × 41	46	－	不明	SD1→本跡
4	D 9 h5	円形	35 × 34	36	－	不明	SD1→本跡
5	E 9 b4	円形	20 × 20	75	－	不明	SK3→本跡
8	C 9 b0	円形	62 × 62	60	－	不明	SB7→本跡
9	B 9 i9	円形	35 × 32	21	－	不明	
10	B 9 i9	楕円形	66 × 30	38	－	不明	SI11→本跡
22	B10e2	円形	55 × 51	28	土師器	不明	
23	B10f2	楕円形	60 × 50	40	－	不明	
24	B10e2	楕円形	45 × 39	21	－	不明	
25	B10e1	楕円形	60 × 53	30	－	不明	SD9→本跡
26	B10f1	楕円形	40 × 30	38	－	不明	
27	D 9 f6	円形	28 × 27	17	－	不明	SI2→本跡
28	D 9 f6	不明	35 ×(27)	14	土師器	不明	SI2→本跡
30	B10h1	円形	53 × 50	32	－	不明	
32	B10h1	円形	63 × 63	22	土師器	不明	
33	B10h1	楕円形	75 × 55	16	－	不明	
35	B10h1	楕円形	61 × 50	40	土師器	不明	
37	B 9 i0	楕円形	77 × 67	35	－	不明	
38	B10h1	楕円形	59 × 51	32	－	不明	
39	D 9 c6	楕円形	92 × 63	25	土師器	不明	SI13→SK22→本跡
42	C 9 f9	楕円形	67 × 50	50	－	不明	
43	C 9 f9	楕円形	70 × 62	34	－	不明	
45	E 9 b4	楕円形	64 × 56	30	－	不明	
46	B 9 g0	楕円形	61 × 51	23	土師器	不明	
47	B 9 h0	楕円形	72 × 56	26	土師器	不明	
48	B 9 h9	楕円形	64 × 57	26	－	不明	
49	B 9 h9	円形	58 × 54	－	土師器	不明	
50	B 9 j0	楕円形	52 × 45	19	－	不明	SD12→本跡
51	B 9 j0	楕円形	56 × 45	31	土師器	不明	
53	C 9 a0	楕円形	78 × 68	21	土師器	不明	
54	D 9 i2	楕円形	(41)× 40	8	－	不明	
55	C10a1	楕円形	62 × 53	20	－	不明	SK17→本跡
56	C 9 g8	円形	49 × 45	18	－	不明	SD9→本跡
61	A10i4	円形	38 × 37	－	－	不明	
62	A10i4	円形	43 × 40	－	－	不明	Pit63→本跡
63	A10i3	円形	35 ×(22)	－	－	不明	本跡→Pit62

番号	位 置	形 状	規　　模(cm) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	主な出土遺物	時 期	備　　考 新旧関係（旧→新）
65	A10h4	楕円形	58×47	－	土師器	不明	
66	E 9 c4	円形	26×24	6	－	不明	
67	E 9 c4	楕円形	29×23	34	－	不明	
68	E 9 d4	楕円形	28×25	11	－	不明	
69	E 9 d4	楕円形	45×34	23	－	不明	
70	E 9 c3	楕円形	46×41	29	－	不明	
71	E 9 c4	不整楕円形	48×29	28	－	不明	
73	C 9 f9	円形	42×38	58	土師器	不明	
74	C 9 f7	楕円形	58×47	50	土師器	不明	
75	C 9 f7	円形	76×70	45	－	不明	
77	D 9 h5	不整楕円形	71×52	53	土師器	不明	SI8→本跡
78	D 9 i5	隅丸長方形	76×66	52	土師器	不明	SI8→本跡
80	C 9 h8	楕円形	42×36	50	－	不明	SI17→本跡
81	C 9 d0	楕円形	53×41	19	－	不明	
82	C 9 c9	楕円形	135×84	25	土師器	不明	SI20→本跡
83	C 9 d9	円形	68×67	25	－	不明	SI20→本跡
84	C 9 d9	円形	120×110	49	土師器	不明	SI20，21→本跡
85	C 9 e8	円形	52×52	60	土師器	不明	
86	C 9 e8	不整楕円形	75×65	66	－	不明	
87	C 9 i8	楕円形	71×58	－	－	不明	SI23→本跡
88	C 9 i8	楕円形	27×22	－	－	不明	SI23→本跡
91	C 9 i8	楕円形	100×74	－	－	不明	SI23→SB16→SK33→本跡
92	C 9 e9	楕円形	90×86	51	土師器	不明	SK33→本跡
93	C 9 d9	楕円形	70×61	35	－	不明	SK33→本跡
94	C 9 i7	楕円形	71×53	－	土師器	不明	SI23→本跡
95	C 9 d0	楕円形	60×56	60	－	不明	SD15→本跡
96	C 9 d8	楕円形	33×32	46	－	不明	
97	B 9 j0	楕円形	71×57	48	土師器	不明	
99	D 9 b6	楕円形	64×53	58	－	不明	SK49→本跡
100	D 9 b6	楕円形	67×62	66	－	不明	SI13→SK49→本跡
101	D 9 f3	楕円形	37×(22)	－	－	不明	SI5→本跡→Pit102
102	D 9 f3	楕円形	37×35	29	－	不明	SI5→Pit101→本跡
116	C 9 j7	楕円形	62×39	48	土師器　須恵器	不明	UP2→本跡

(9) 円形周溝状遺構

第１号円形周溝状遺構（SX１）（第122図）

位置　B10f1・B10g2区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第12号住居跡，第６号溝跡，第15号土坑を掘り込んでいる。

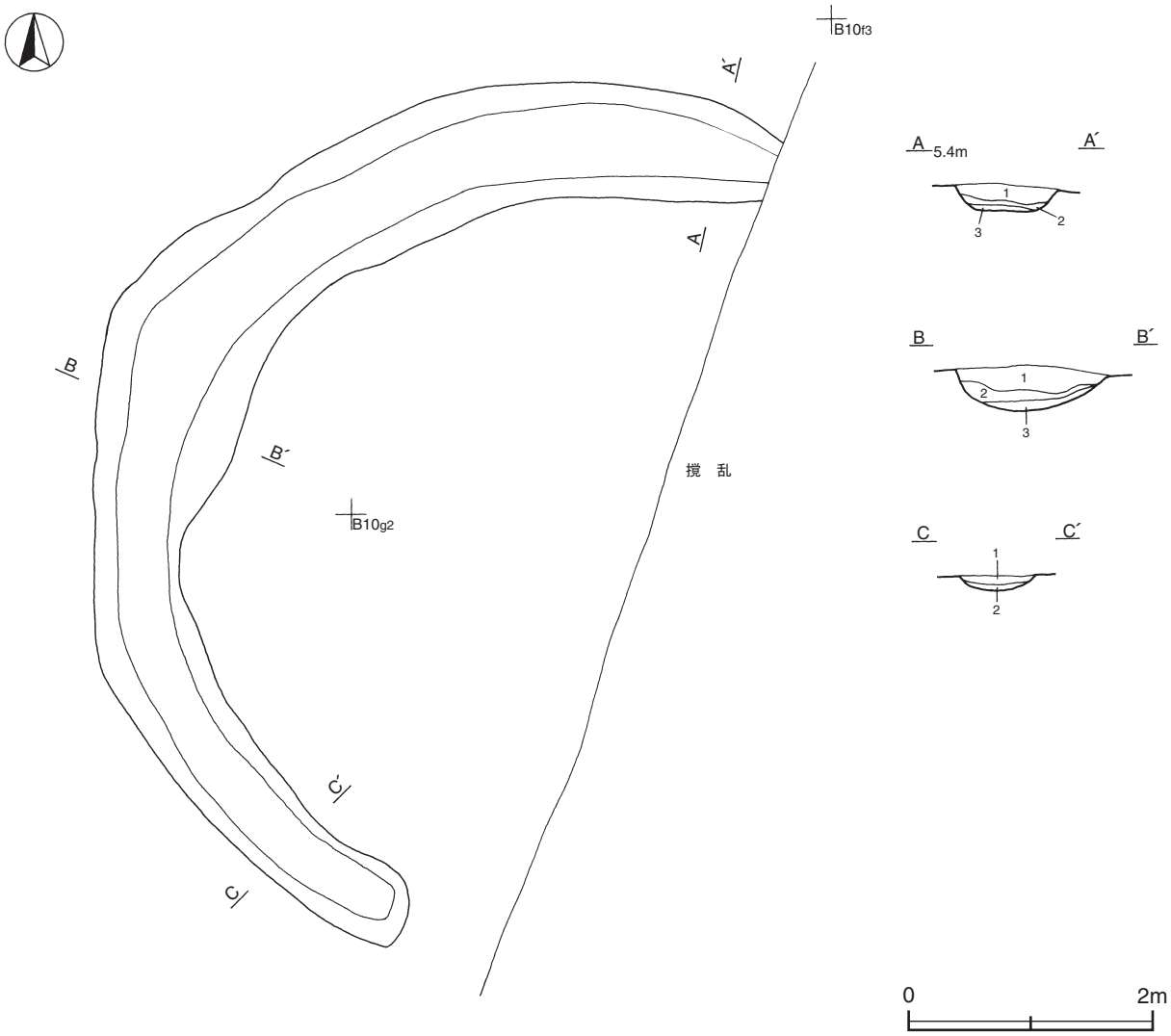
規模と形状　南北径7.4mで，東側は撹乱を受けているため東西径は不明である。溝は弧状を呈しており，南側が途切れるものと考えられる。溝は上幅60～120cm，下幅40～80cm，深さは11～32cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　黄色砂少量・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片76点（坏３，甕・甑73），須恵器片１点（坏）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期及び性格は，不明である。



第122図　第１号円形周溝状遺構実測図

⑽ 不明遺構

第１号不明遺構（SX2）（第123図）

位置　Ｄ９j4区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　削平のため長径1.8mのみ，短径1.0mだけが確認され，平面形は楕円形と推測される。長径方向はN－87°－Eである。深さは42cmで，底面はほぼ平坦で，壁の一部と底面に粘土と弱く赤変した焼土範囲が確認されている。壁は外傾して立ち上がっている。

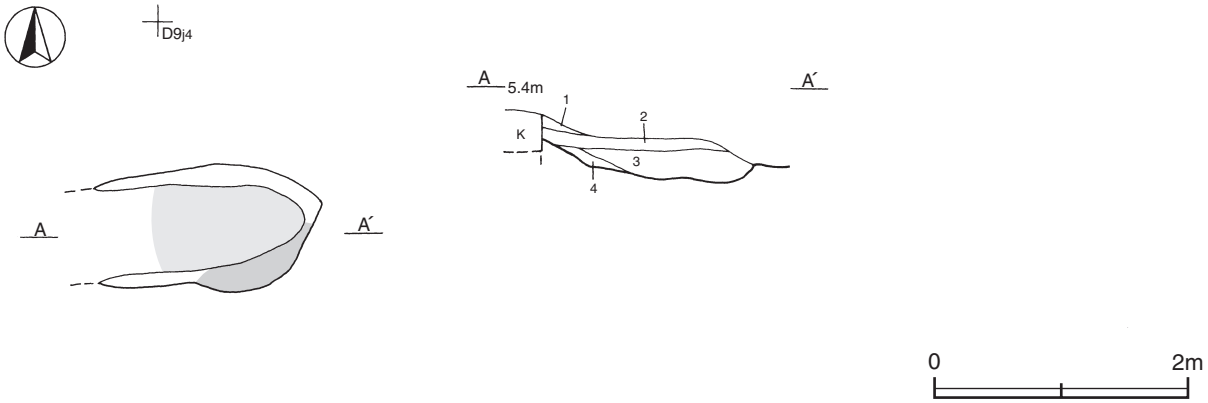
覆土　4層に分層される。第1・2層は粘土を含んでおり人為堆積で，第3・4層は周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒　色	粘土ブロック・黄色砂少量，焼土粒子微量	3	黒　色	黄色砂少量
2	黒　色	粘土少量，焼土粒子・黄色砂微量	4	黒　色	黄色砂少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片4点（甕・甑）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期及び性格は，不明である。



第123図　第1号不明遺構実測図

⑾ 泥炭層

第1号泥炭層（付図・第124図）

位置　A10f3～B10b1区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　最大長は南北26m，最大幅は東西8mの範囲で確認されている。

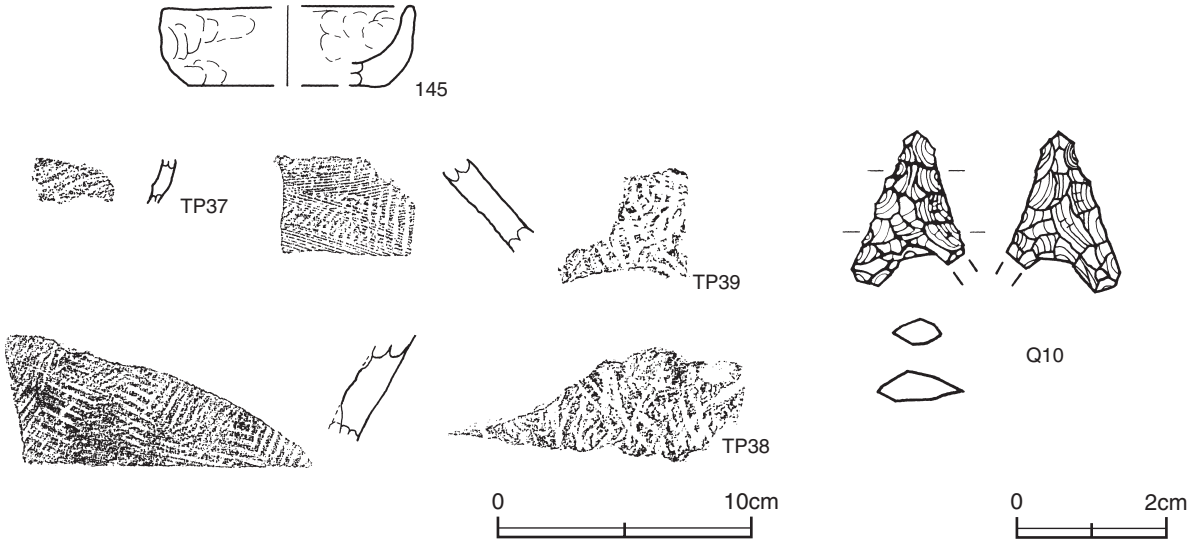
土層　最大厚72cmの現在の盛土層直下に，最大厚40cmの灰白色砂層があり，その下に最大厚39cmの泥炭層がある。灰白色砂は自然堆積と考えられる。泥炭層の下は地山の砂層になる。

土層解説

1	黒　褐　色	ロームブロック・礫・砂多量（盛土層）	3	黒　色	植物遺体多量（泥炭層）
2	灰　白　色	黒色砂少量（自然堆積層）			

遺物出土状況　弥生土器片5点（壺），須恵器片45点（坏・高台付坏43，甕2），石器1点（鏃）が出土している。Q10は第3層中，その他が第2層中からの出土である。

所見　第3層の泥炭層は，神岡上遺跡で分析した草本質植物遺体を多量に含んでいる黒色腐植質シルトと考えられる。泥炭層の上層の灰白色砂層からは，古代の須恵器片が出土しており，泥炭層は古代には砂に覆われていたものと考えられる。なお，泥炭層の分析結果は，付章を参照されたい。



第124図　第１号泥炭層出土遺物実測図

第１号泥炭層出土遺物観察表（第124図）

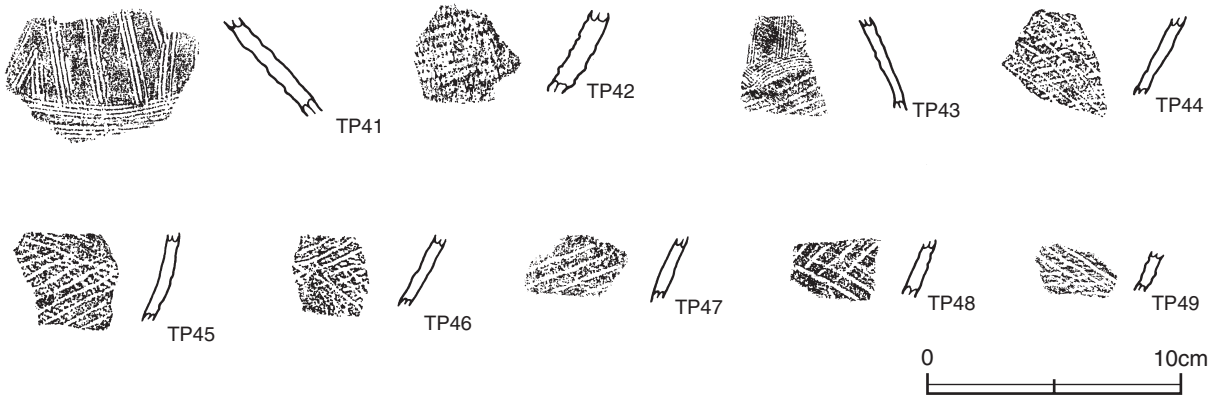
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
145	手捏土器	－	[9.8]	3.2	[7.8]	雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい褐	普通	指頭による整形	第２層中	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP37	弥生土器	壺	白色粒子・透明粒子	黄橙	普通	付加条二種（軸縄不明）縄文施文	第２層中	
TP38	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き　内面青海波文	第２層中	SF1出土甕と同類の甕
TP39	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後斜位のカキ目　一部縦位の平行叩き　内面青海波文	第２層中	SF1出土甕と同類の甕

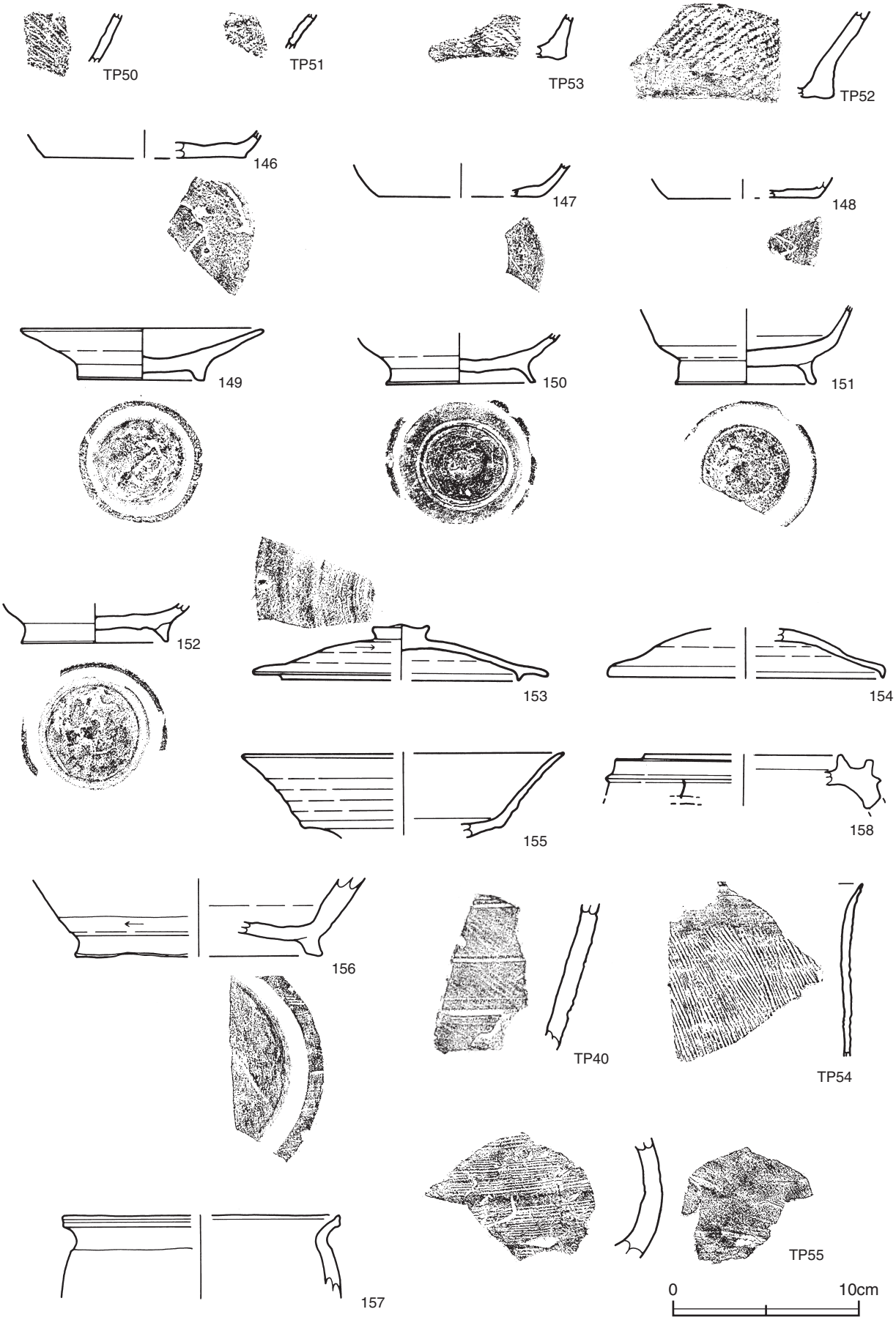
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q10	石鏃	2.0	(1.5)	0.4	(0.7)	瑪瑙	凹基無茎式　両面押圧剥離	第３層中	PL22

⑿ 遺構外出土遺物（第125～128図）

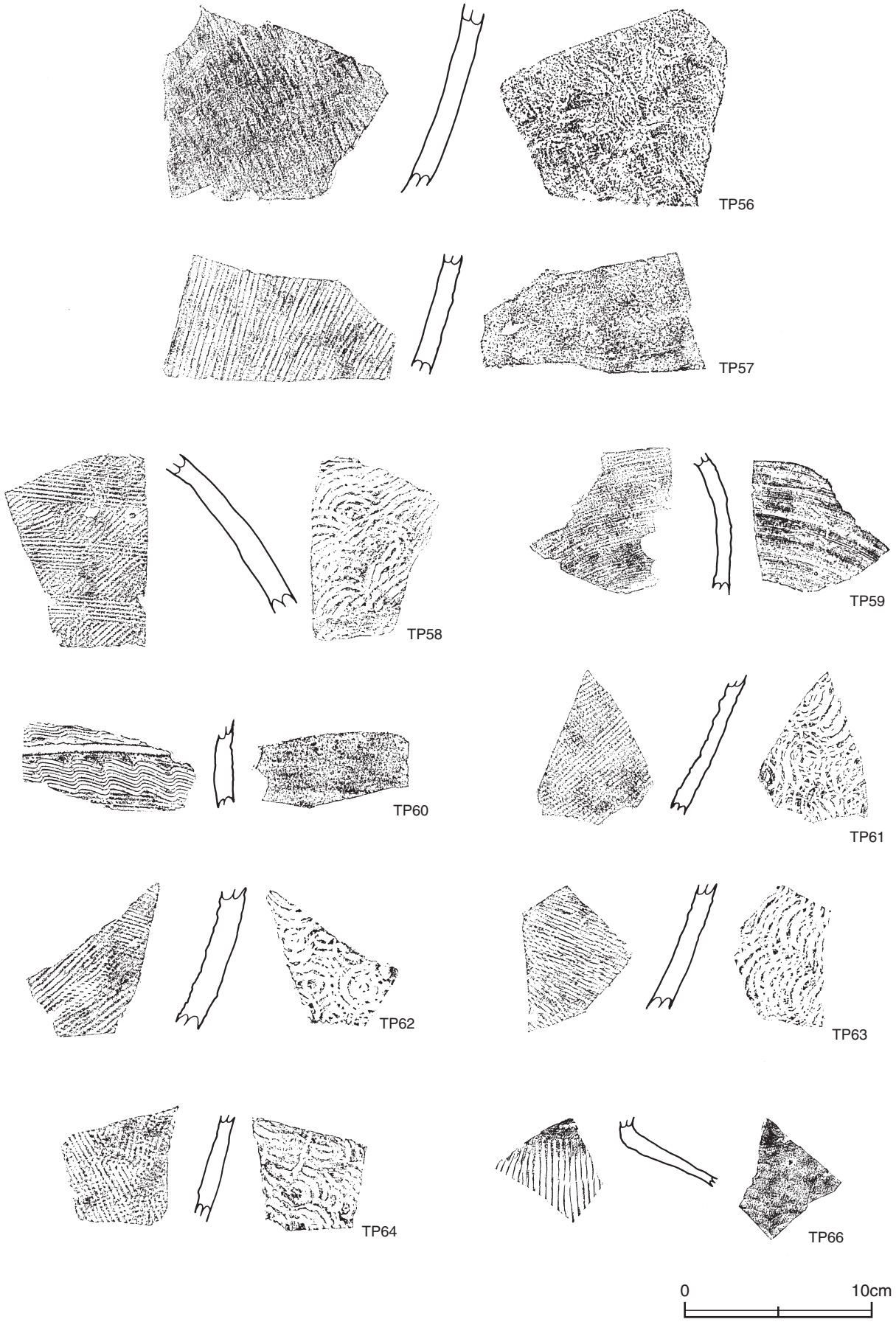
遺構に伴わない主な遺物について，実測図と観察表を掲載する。



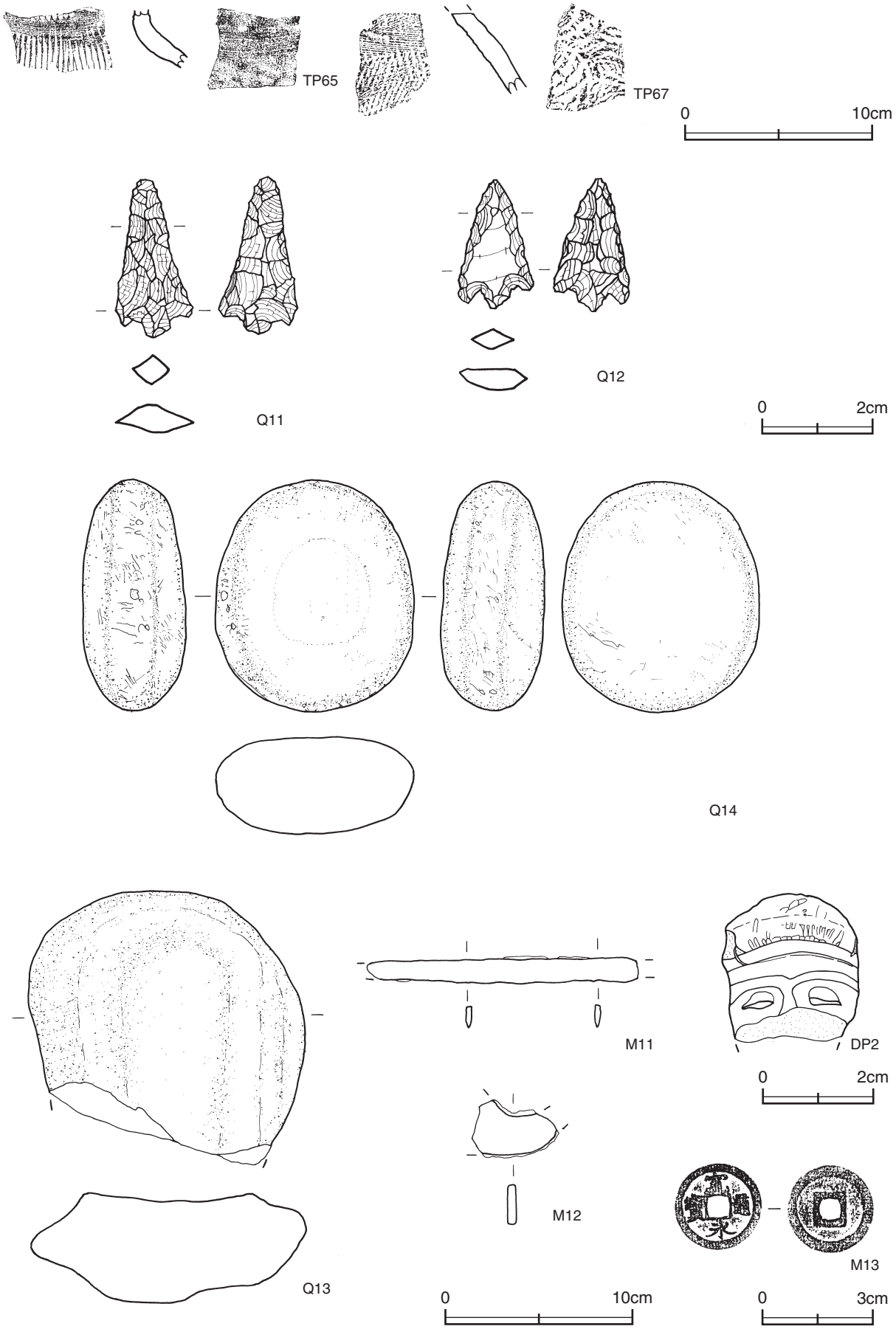
第125図　遺構外出土遺物実測図(1)



第126図　遺構外出土遺物実測図(2)



第127図　遺構外出土遺物実測図(3)



第128図　遺構外出土遺物実測図（4）

遺構外出土遺物観察表（第125～128図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
146	須恵器	坏	－	(1.5)	[10.8]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	確認面	5% 底部篦記号
147	須恵器	坏	－	(1.8)	[8.6]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰黄	普通	底部ナデ調整	確認面	10% 底部篦記号
148	須恵器	坏	－	(1.0)	[8.0]	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰白	普通	底部ナデ調整	確認面	5% 底部篦記号
149	須恵器	高台付皿	12.9	2.8	6.5	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	黄灰	普通	底部ナデ調整	確認面	90%
150	須恵器	高台付坏	－	(2.7)	7.8	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰黄	普通	底部ナデ調整	確認面	50%
151	須恵器	高台付坏	－	(4.2)	7.3	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	確認面	40%
152	須恵器	高台付坏	－	(2.2)	7.8	白色粒子・透明粒子 灰色粒子・赤色粒子	褐灰	普通	底部ナデ調整	SD４ 覆土中	50%
153	須恵器	蓋	[15.8]	2.9	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り調整	確認面	30%
154	須恵器	蓋	[14.8]	(2.7)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	黄灰	普通	天井部ナデ調整	確認面	10%
155	須恵器	高盤	[17.4]	(4.5)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	暗灰黄	普通	ロクロナデ	確認面	10%
156	須恵器	瓶	－	(4.3)	[13.2]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ　体部下端回転ヘラ削り調整　底部ナデ調整	確認面	10%
157	土師器	甕	[14.8]	(4.5)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　端部つまみ上げ　体部内・外面ナデ	確認面	10%
158	須恵器	円面硯	[13.8]	(2.8)	－	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	縁・内堤一部残存　脚台部に焼成前の縦位の刻み	確認面	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP40	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	外面斜位の平行叩き後ナデ　３段の沈線　内面ナデ　当て具痕残存	SI８ 覆土中	
TP41	弥生土器	壺	白色粒子・透明粒子	明黄褐	普通	頸部山形文ヵ　頸部－胴部区画横走文	SI16 覆土中	
TP42	弥生土器	壺	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	浅黄橙	普通	単節LR縄文施文	SF１南側側溝 覆土中	
TP43	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	橙	普通	頸部スリット手法による縦区画充填波状文　頸部～胴部区画上向きの連弧文　胴部付加条二種（付加２条）縄文施文	第４号柵跡 柱穴覆土中	
TP44	弥生土器	壺	白色粒子・透明粒子	明黄褐	普通	付加条二種（付加２条）縄文施文　羽状構成	SD13 覆土中	
TP45	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	付加条二種（付加２条）縄文施文　羽状構成	確認面	
TP46	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	橙	普通	付加条二種（付加３条）縄文施文　羽状構成	SD18 覆土中	
TP47	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	橙	普通	付加条二種（付加４条）縄文施文	確認面	
TP48	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	橙	普通	付加条二種（付加２条）縄文施文　羽状構成	SI２ 覆土中	
TP49	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	付加条二種（付加２条）縄文施文　羽状構成	確認面	
TP50	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	付加条二種（付加２条）縄文施文	Pit49	
TP51	弥生土器	壺	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	付加条二種（付加２条）縄文施文	SF１南側側 溝覆土中	
TP52	弥生土器	壺	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	浅黄橙	普通	単節LR縄文施文　底部無文	SD18 覆土中	
TP53	弥生土器	壺	白色粒子・透明粒子	にぶい褐	普通	付加条二種（付加２条）縄文施文　底部無文	SD13 覆土中	
TP54	土師器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	橙	普通	外面ハケ目後横ナデ　内面ヘラナデ・磨き状のナデ	確認面	
TP55	須恵器	瓶	白色粒子・透明粒子	灰	普通	内・外面ロクロナデ後外面横位のカキ目	確認面	
TP56	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	暗青灰	普通	外面斜位の平行叩き　内面青海波文　内・外面叩き後ナデ	確認面	
TP57	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	灰白	普通	外面斜位の平行叩き　内面ナデにより当て具痕不明	確認面	
TP58	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	灰	普通	外面斜位の平行叩き後３段の横位のカキ目（７本櫛歯）　内面青海波文	確認面	
TP59	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	にぶい橙	普通	内・外面ロクロナデ　外面横位のカキ目	確認面	
TP60	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	暗灰	普通	沈線の区画内に櫛描波状文（10本櫛歯）	確認面	
TP61	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面格子目叩き　内面青海波文	確認面	
TP62	須恵器	壺	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰・明黄褐	普通	外面擬格子目叩き　内面青海波文	確認面	
TP63	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	褐・黄褐	普通	外面斜位の平行叩き　内面青海波文	確認面	
TP64	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	外面格子目叩き　内面青海波文	確認面	
TP65	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰・暗灰	普通	外面縦位の平行叩き　内面青海波文　内・外面叩き後ナデ	確認面	TP66と 同一個体
TP66	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	灰・暗灰	普通	外面縦位の平行叩き　内面青海波文　内・外面叩き後ナデ	確認面	TP65と 同一個体
TP67	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子目叩き後斜位のカキ目　内面青海波文	文化課試掘	SF1出土甕 と同類の甕

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　　考
DP 2	泥面子	(2.6)	(2.4)	0.9	(4.9)	粘土	面摸	確認面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　　質	特　　徴	出土位置	備　　考
Q11	石鏃	2.8	1.4	0.5	1.4	瑪瑙	凸基有茎式　両面押圧剥離	SI 1 覆土中	PL22
Q12	石鏃	2.3	1.4	0.4	1.0	瑪瑙	凸基有茎式　両面押圧剥離	確認面	PL22
Q13	台石	(14.7)	14.7	5.8	(1,790.0)	片麻岩	表面が浅くくぼんで，断面皿状を呈する	確認面	
Q14	磨石	12.4	10.5	5.3	1,050.0	溶結凝灰岩	4 面使用	確認面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　　考
M11	刀子	(14.4)	1.4	0.2	(33.6)	鉄	両端欠損	確認面	PL22
M12	火打金	(4.3)	(2.8)	0.4	(30.9)	鉄	山形ヵ	確認面	PL22

番号	銭名	材質	径	孔幅	厚さ	重　　量	特　　徴	出土位置	備　　考
M13	寛永通宝	銅	2.9	0.6	0.1	2.9	古寛永銭	確認面	PL22

第4章　神 岡 上 遺 跡

第1節　遺 跡 の 概 要

神岡上遺跡は，南北に延びる標高4.6～5.2mの砂丘上に立地している。調査区は遺跡の西縁部を縦断するように設定され，調査面積は4,220㎡で，調査前の現況は更地である。

今回の調査によって，奈良時代，中世，近世を中心とした遺構と遺物が確認された。確認された遺構は，掘立柱建物跡２棟（中世），溝跡11条（奈良時代１，近世３，時期不明７），土坑21基（奈良時代２，時期不明19基），その他泥炭層１か所（時期不明）である。

遺物は，遺物コンテナ（60×40×20㎝）に２箱出土している。主な遺物は縄文土器（深鉢），土師器（坏・椀・鉢・短頸壺・甕・甑），須恵器（坏・高台付坏・蓋・甕），陶器（碗・擂鉢・皿），石器（敲石・砥石）などである。

第2節　基 本 層 序

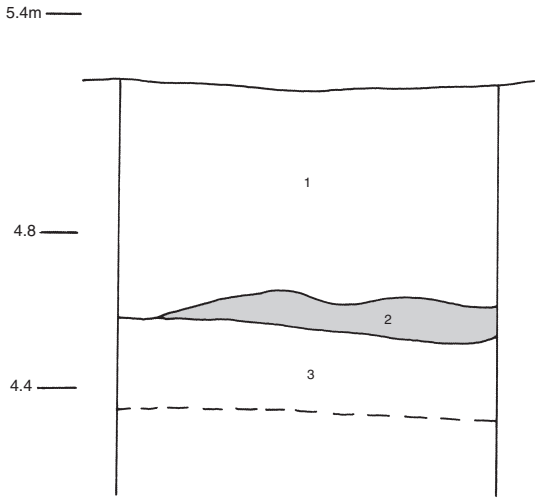
Ｕ３c6区にテストピットを設定し，基本土層（第129図）の堆積状況の観察を行った。観察結果は，以下の通りである。

第１層は，黒褐色を呈し，現在の水田の盛土層で，層厚は80～115㎝である。

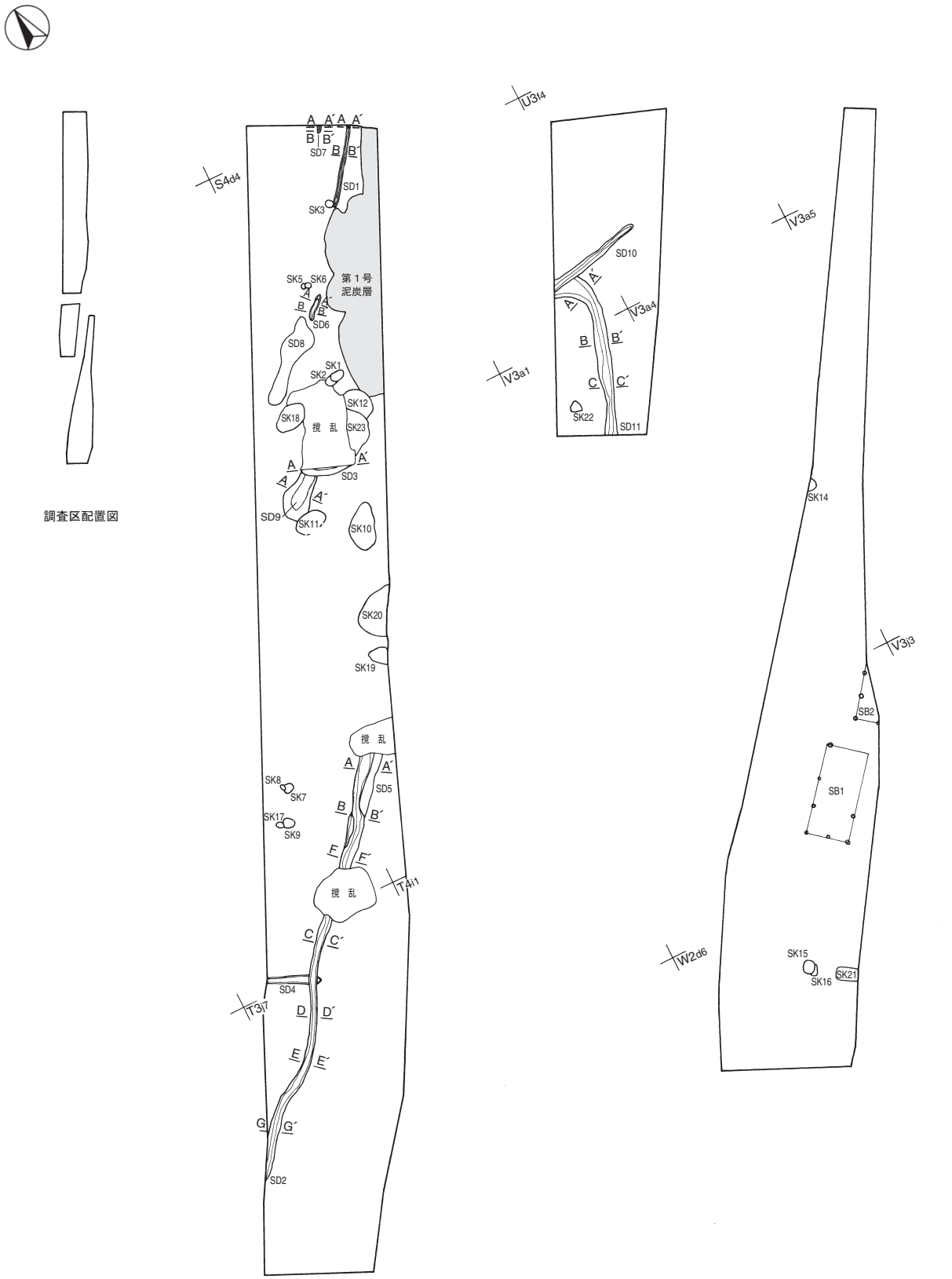
第２層は，黒色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，旧地表と考えられる。層厚は５～15㎝である。

第３層は，灰白色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，層厚は不明である。

遺構は，第３層上面で確認されている。



第129図　神岡上遺跡基本土層図



第130図　神岡上遺跡全体図

第３節　遺 構 と 遺 物

１　奈良時代の遺構と遺物

溝跡１条，土坑２基が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

第８号溝跡（第131～134図）

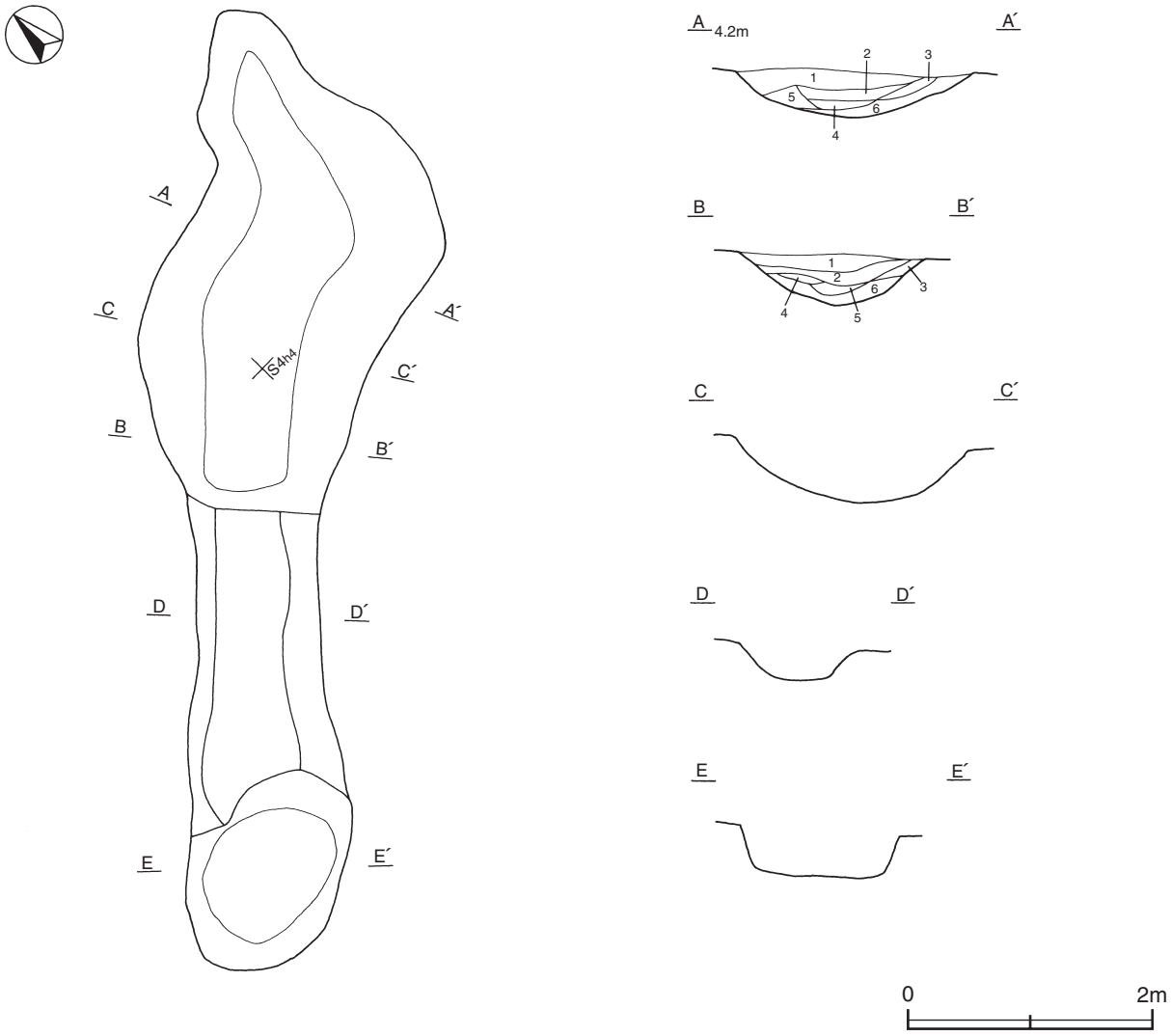
位置　Ｓ４g4～Ｓ４h3区，標高4.0mほどの低地に位置している。

規模と形状　全長7.9m，上幅100～200㎝，下幅50～80㎝，深さ18～44㎝で，北東方向（Ｎ－46°－Ｅ）に延びている。平面形は不整形で深さも一律ではなく，南端部は土坑状に掘り込まれているなど大きく凹凸しており，壁は外傾して立ち上がっている。

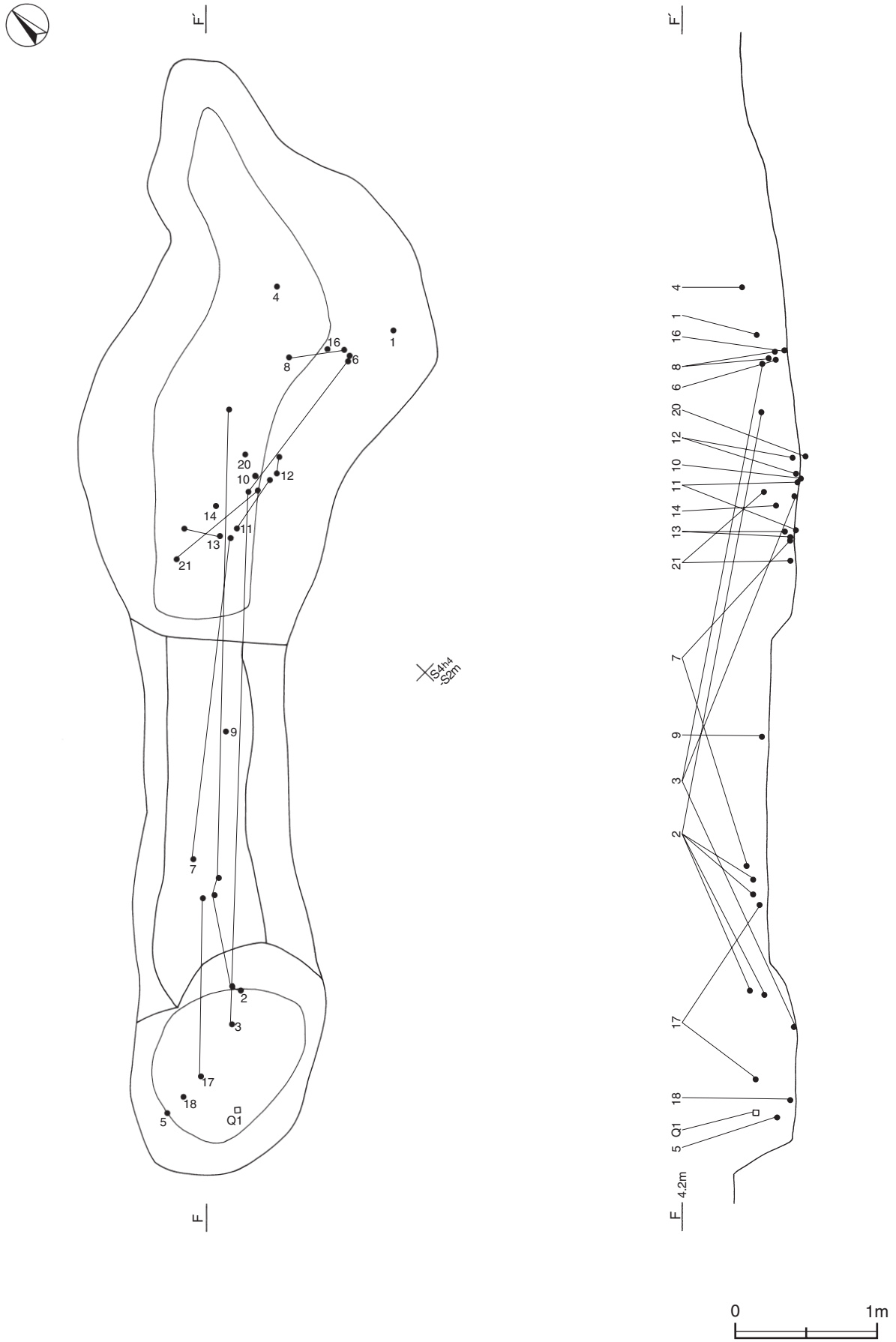
覆土　６層に分層される。砂で埋土した人為堆積と考えられる。

土層解説

1	黒　色　灰白色砂微量	4	黒　色　灰白色砂少量
2	黒　色　黄色砂少量，灰白色砂微量	5	黒　色　灰白色砂少量，黄色砂微量
3	黒　色　灰白色砂・黄色砂少量	6	黒　色　黄色砂微量



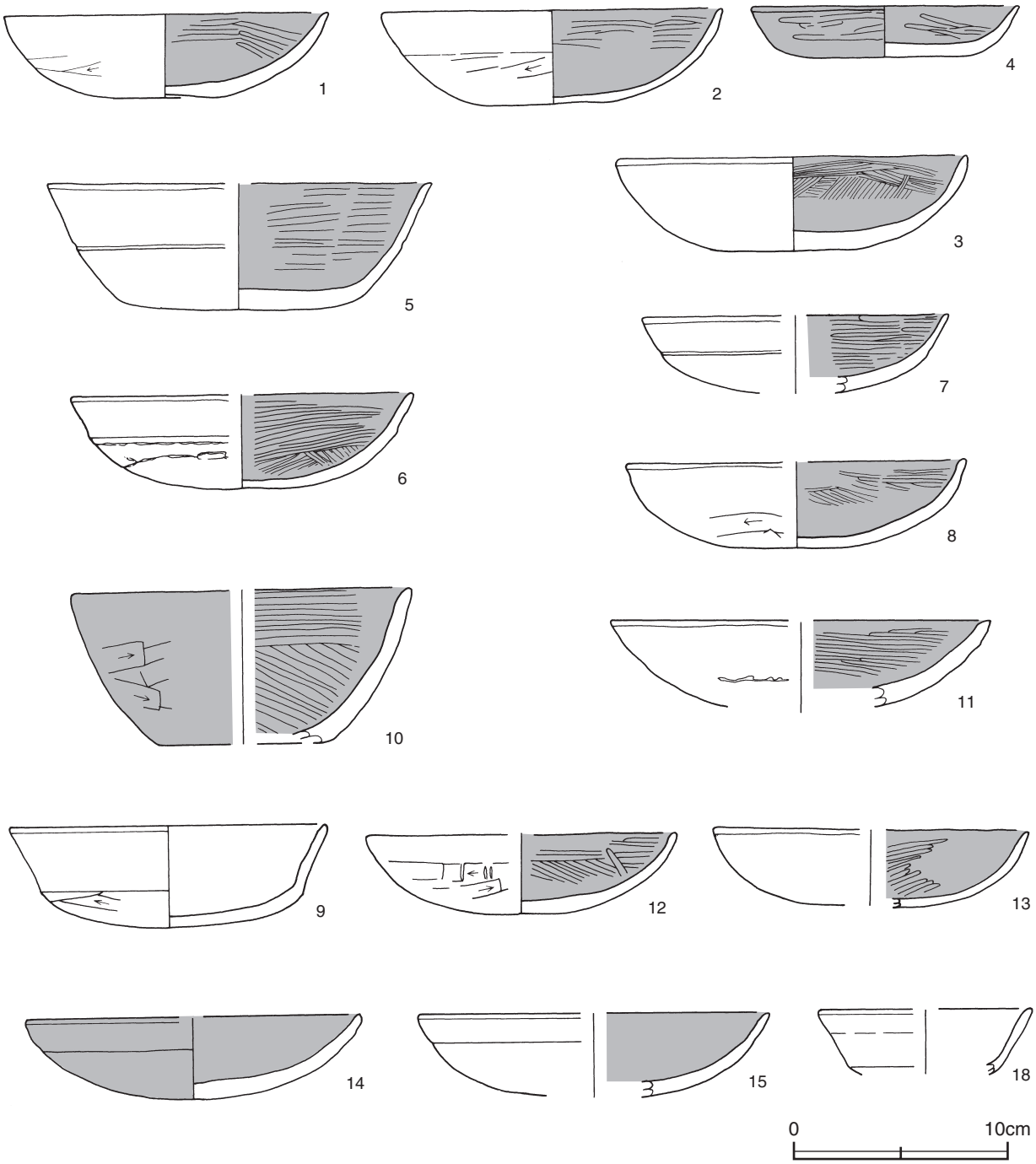
第131図　第８号溝跡実測図(1)



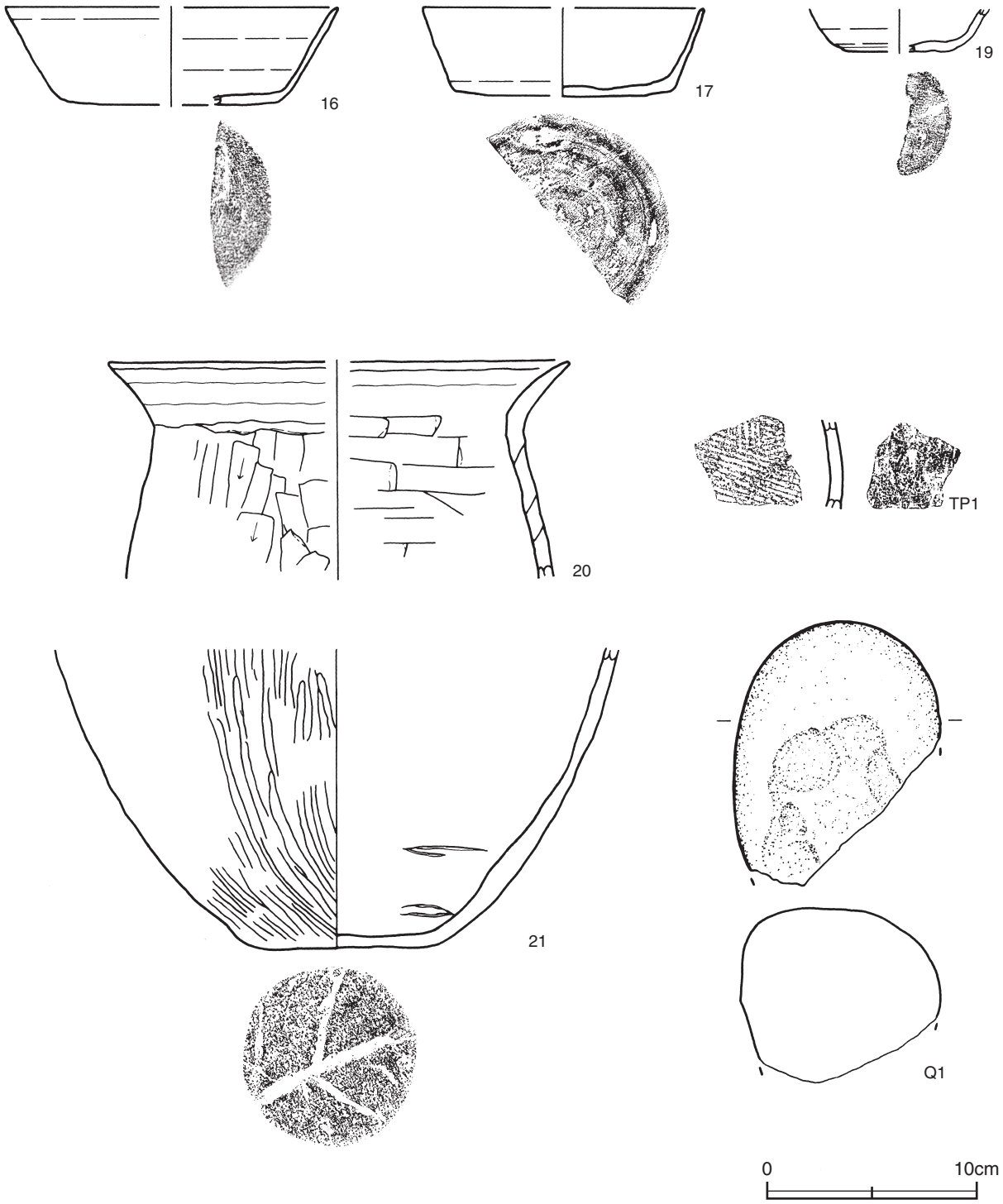
第132図　第８号溝跡実測図(2)

遺物出土状況　土師器片391点（坏・椀・鉢333，甕・甑58），須恵器片22点（坏・高台坏19，蓋２，甕１），石器１点（敲石）が出土している。また，混入した陶器片１点も出土している。遺物は，全域の覆土上層から底面にかけて出土しているが，特にＳ４h3区に集中している。２・３・７・17などのように離れた位置で，なおかつ出土層位が異なる破片同士が接合しているものもある。16は北東部の底面，17は土坑状に掘り込まれている箇所の覆土中層と中央部の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合している。

所見　出土土器は古い要素と新しい要素を持つものが混在して出土している。古い土器の使用時期に新しい要素を持つ土器が加えられ，廃棄の段階が同時になったものと推測される。よって16・17などから，８世紀前葉には埋められたものと考えられる。



第133図　第８号溝跡出土遺物実測図(1)



第134図　第８号溝跡出土遺物実測図(2)

第８号溝跡出土遺物観察表（第133・134図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
1	土師器	坏	15.2	4.0	5.9	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土上層	95% PL23
2	土師器	坏	15.8	4.3	6.0	黒雲母・白色粒子 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層 覆土下層	90% PL23
3	土師器	坏	16.3	4.4	6.5	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層 底面	90% PL23

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
4	土師器	坏	12.4	2.4	7.2	白色粒子・灰色粒子	黒	普通	体部内・外面ナデ後ヘラ磨き　底部内・外面ヘラ磨き	覆土上層	90% PL23
5	土師器	坏	[18.0]	5.9	8.0	赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	85%
6	土師器	坏	[15.8]	4.4	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子・灰色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 輪積み痕残存　内面ヘラ磨き	覆土中層	70%
7	土師器	坏	[14.2]	(3.6)	－	白色粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層 覆土下層	60%
8	土師器	坏	[15.8]	4.0	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層	60%
9	土師器	坏	14.7	4.6	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子・灰色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	覆土下層	70%
10	土師器	坏	[15.8]	7.2	[7.6]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	底面	40%
11	土師器	坏	[17.7]	(4.1)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	底面	40%
12	土師器	坏	[14.4]	3.7	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	30%
13	土師器	坏	[14.7]	3.6	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	30%
14	土師器	坏	[15.6]	3.9	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層	20%
15	土師器	坏	[16.4]	(3.9)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	20%
16	須恵器	坏	[15.8]	4.7	[9.8]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	底面	40% 底部外面 窯体付着
17	須恵器	坏	[13.4]	4.2	[10.4]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土中層 覆土下層	50%
18	須恵器	坏	[10.0]	(3.0)	－	白色粒子・透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	覆土下層	15%
19	須恵器	坏	－	(2.0)	[6.3]	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	底部ナデ調整　底部板状の粘土を重ねている	覆土中	15%
20	土師器	甕	[22.0]	(10.3)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ・ナデ	底面	15%
21	土師器	甕	－	(14.2)	8.2	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ磨き　内面ナデ　輪積み痕残存 底部木葉痕	覆土下層	40%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
TP 1	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	明黄褐	普通	外面斜位の平行叩き　内面当て具無文痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 1	敲石	(12.6)	9.9	(9.0)	(1,200.0)	砂岩	1面に使用痕	覆土中層	

(2) 土坑

第12号土坑（第135図）

位置　S 4 i4区，標高4.0mほどの低地に位置している。

重複関係　第23号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　西側が撹乱を受けており，東西径2.1mのみ，南北径2.8mが確認されただけである。平面形は不明であり，南北径方向はN－22°－Wである。深さは54cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

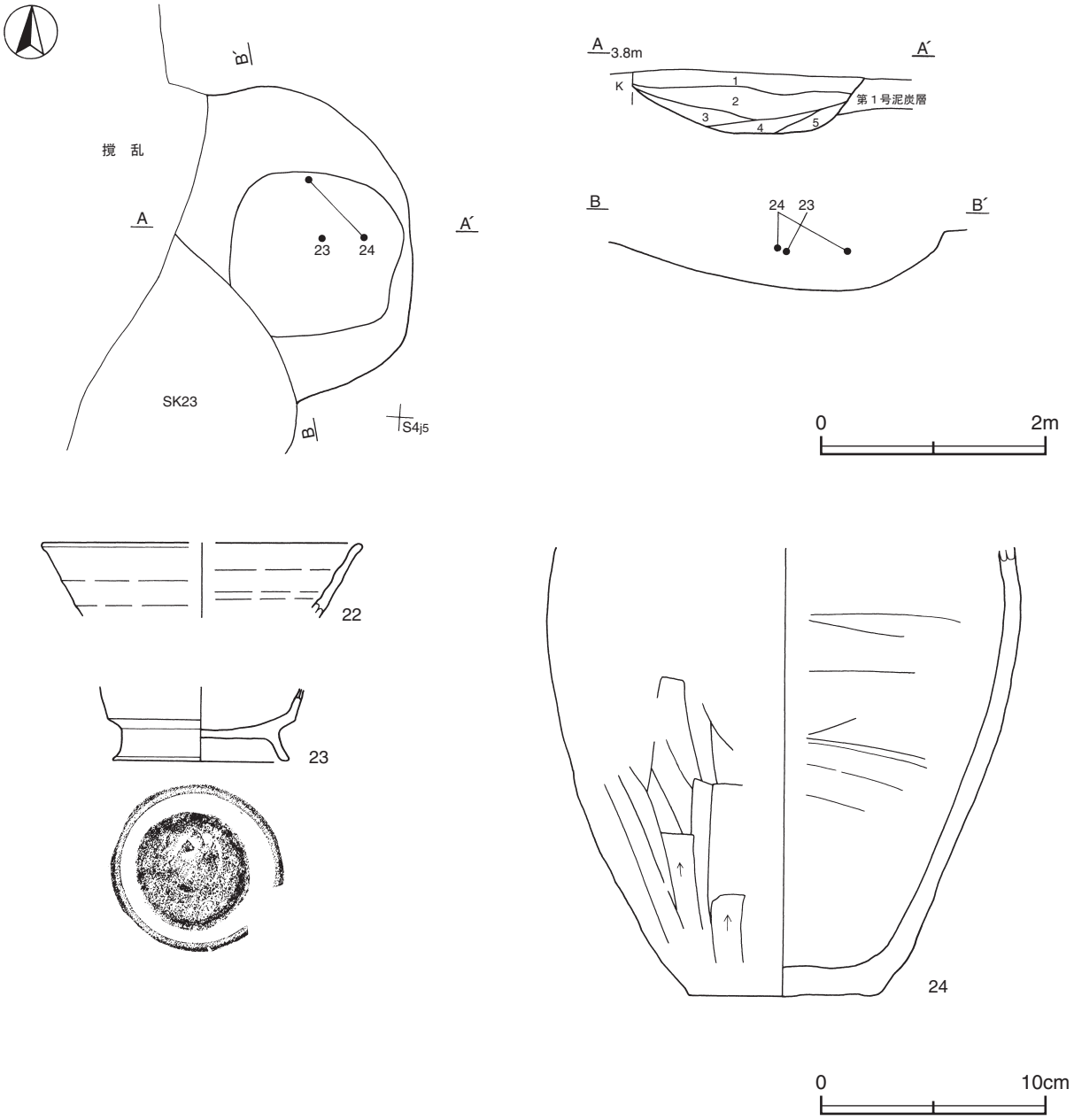
覆土　5層に分層される。第3～5層までは，周囲から砂が流入している堆積状況から自然堆積で，第2層は水分を多く含んでいる第1号泥炭層の堆積土と同一で，人為堆積である。その後第1層が自然堆積したものと考えられる。

土層解説

1　黄　　色　黒色砂少量，灰白色砂微量
2　黒　褐　色　腐植質シルト・植物遺体少量
3　黄　　色　黒色砂微量
4　黄　　色　灰白色砂少量，黒色砂微量
5　黒　　色　黄色砂少量，灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片45点（坏・鉢12，甕33），須恵器片15点（坏・高台付坏）が出土している。23・24はともに中央部の第２層中からそれぞれ出土している。23は逆位で，24は離れた位置から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器及び重複関係から８世紀代と考えられる。



第135図　第12号土坑・出土遺物実測図

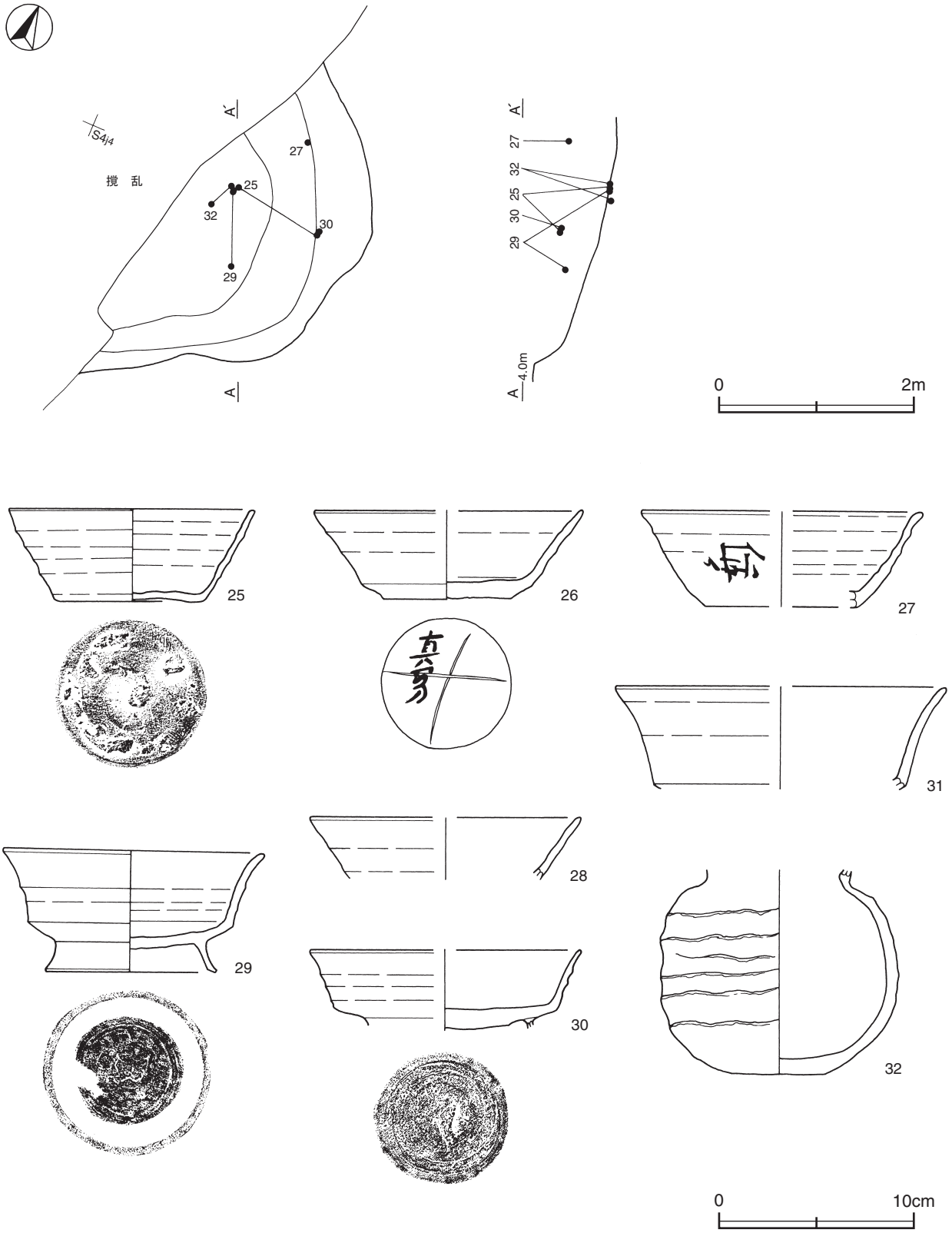
第12号土坑出土遺物観察表（第135図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
22	須恵器	坏	[14.2]	(3.3)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰白	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
23	須恵器	高台付坏	－	(3.3)	7.8	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	覆土中層	50%
24	土師器	甕	－	(20.0)	8.0	白色粒子・透明粒子	褐灰	普通	体部上半ナデ　下半ヘラ削り　体部内面横ナデ	覆土中層	40%

第23号土坑（第136図）

位置　Ｓ４j4区，標高4.0mほどの低地に位置している。

重複関係　第12号土坑を掘り込んでいる。



第136図　第23号土坑・出土遺物実測図

規模と形状　西側が撹乱を受けており，東西径1.8mのみ，南北径4.1mが確認されただけである。平面形は不明であるが，不整形と推測される。南北径方向はN－15°－Eである。深さは82cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況　土師器片32点（坏・鉢18，甕14），須恵器片18点（坏・高台付坏）が出土している。覆土中層から底面にかけて散在した状態で出土している。32は底面から出土した破片が，25・29は底面と覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。また，29には第１号泥炭層から出土した破片も接合している。27は覆土中層からそれぞれ出土している。30は覆土中層，28は覆土中からそれぞれ出土しており，第１号泥炭層から出土した37・38とそれぞれ同一個体である。

所見　時期は，出土土器及び重複関係から９世紀前葉と考えられる。

第23号土坑出土遺物観察表（第136図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
25	須恵器	坏	12.5	4.7	7.3	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	底部無調整	覆土中層 底面	80% PL23
26	須恵器	坏	[13.7]	4.6	6.4	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	底部ナデ調整	覆土中	60% PL23 箆記号後 墨書「真家」
27	須恵器	坏	[14.4]	4.9	[7.9]	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰白	普通	底部ナデ調整ヵ	覆土中層	25%PL25 墨書「□」
28	須恵器	坏	[13.8]	(3.2)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	20% 第1号泥炭層出土の38と同一個体
29	須恵器	高台付坏	13.3	6.1	8.8	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土中層 底面	90% PL23 第1号泥炭層出土の破片と接合
30	須恵器	高台付坏	[13.8]	(4.1)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ　底部ナデ調整	覆土中層	50% 第1号泥炭層出土の37と同一個体
31	須恵器	高台付坏	[17.0]	(5.2)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	20%
32	土師器	短頸壺	－	(10.5)	4.8	白色粒子・透明粒子 赤色粒子・黒色粒子	浅黄	普通	外面輪積み痕を残すナデ　内面ナデ	底面	80% PL23 外面二次火熱痕

表16　奈良時代の土坑一覧表

番号	位　置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時　期	備　考 新旧関係 (旧→新)
12	S4i4	N－22°－W	不明	2.8×(2.1)	54	外傾	平坦	人為・自然	土師器　須恵器	8世紀代	本跡→SK23
23	S4j4	N－15°－E	不明	4.1×(1.8)	82	外傾	平坦	－	土師器　須恵器	9世紀前葉	SK12→本跡

2　中世の遺構と遺物

掘立柱建物跡２棟が確認されている。以下，遺構について記述する。

掘立柱建物跡

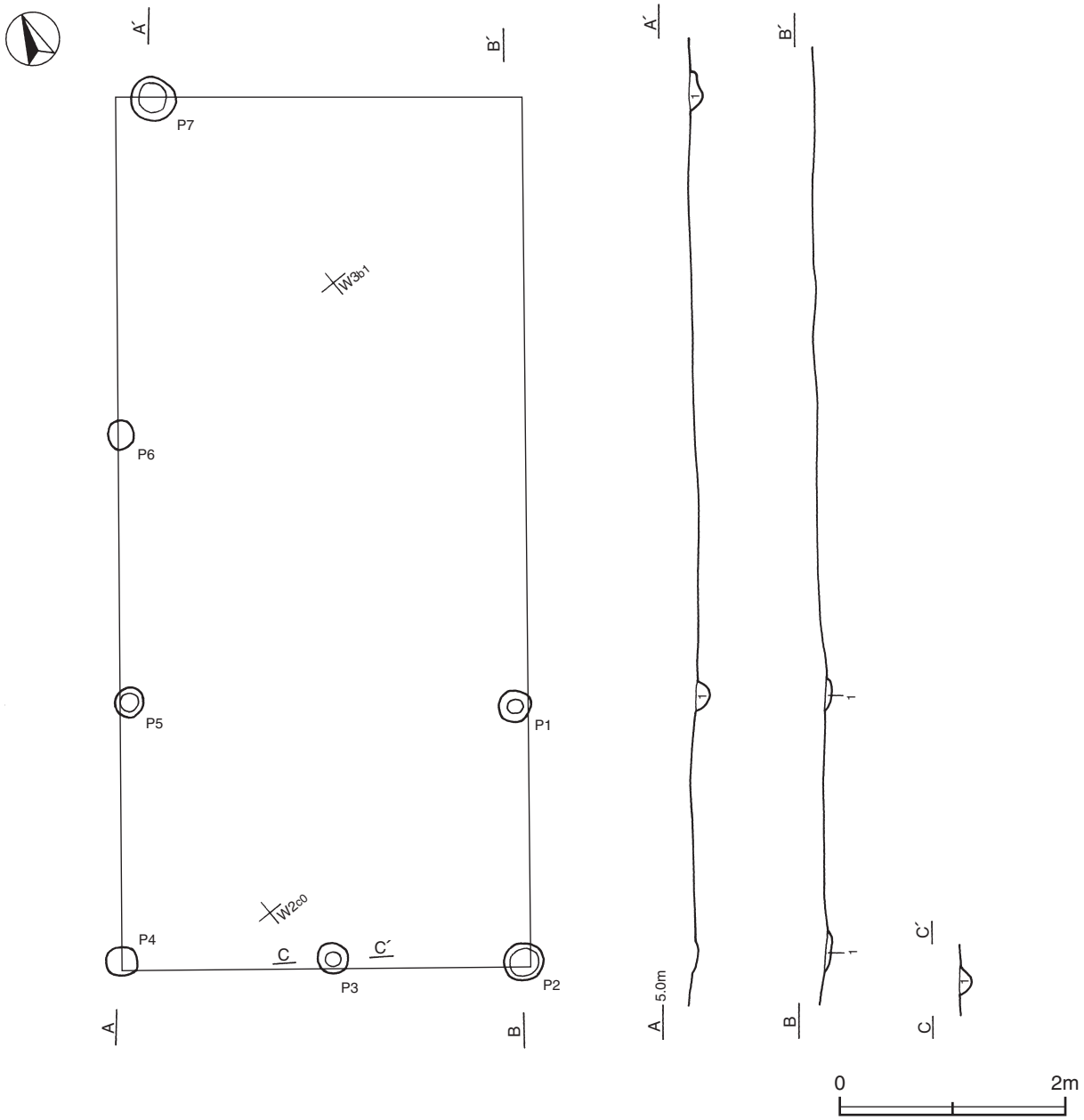
第１号掘立柱建物跡（第137図）

位置　Ｗ２a0～Ｗ２c0区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－40°－Ｅの南北棟である。規模は，桁行7.8ｍ（26尺），梁行3.6ｍ（12尺）で，柱間寸法は，西側桁行が北側より3.0ｍ（10尺），2.4ｍ（８尺），2.4ｍ（８尺）で，東側桁行のＰ１・Ｐ２間も2.4ｍ（８尺）である。梁行は1.8ｍ（６尺）を基調としている。

柱穴　７か所。東側桁行の２か所と北側梁行の中央柱が確認されていない。平面形は円形で，深さは５～12㎝である。遺存状態が悪いため全体的に浅く，くぼみがわずかに確認されただけのものもある。土層は第１層が柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
１　黒　　色　灰白色砂少量



第137図　第１号掘立柱建物跡実測図

所見　出土遺物がないため，時期は明確にできないが，本建物の東側からは，北茨城市教育委員会の調査で中世の墓域が多数確認されており，この時代の建物跡と推測される。また，第２号掘立柱建物跡とは南北に並んでおり，同時期に機能していたものと推測される。

第２号掘立柱建物跡（第138図）

位置　Ｖ３j2～Ｗ３a2区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

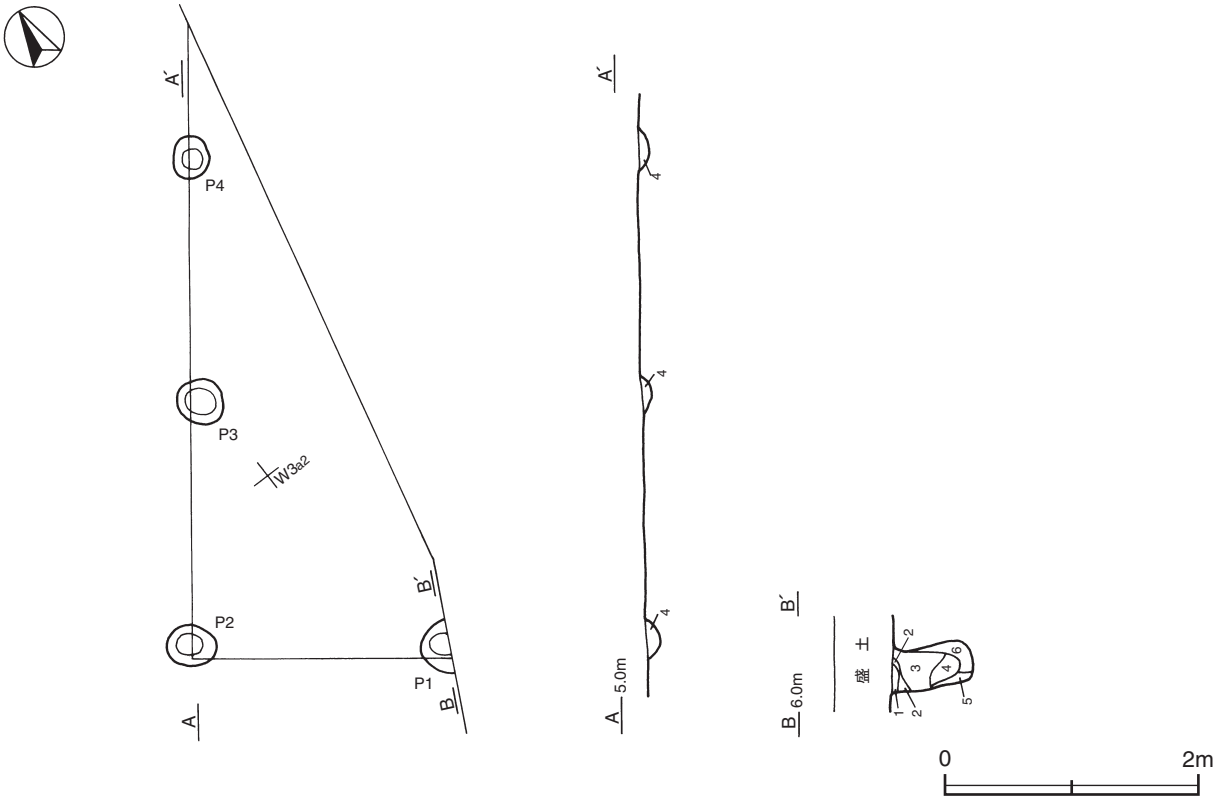
規模と構造　東･北側の大部分が調査区域外に延びているため，南北２間のみ，東西１間のみ確認されている。南北軸Ｎ－35°－Ｅで，構造は不明である。確認された規模は，南北軸3.9m（13尺），東西軸2.1m（７尺）で，柱間寸法は，南北軸が北側から1.8m（６尺），2.1m（７尺）で，東西軸が1.8m（６尺）である。

柱穴　４か所。平面形は円形で，深さは８～10cmである。遺存状態が悪いため全体的に浅いが，Ｐ１の調査区域際での土層断面図では深さ68cmである。土層は第１～４層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は地山の灰白色砂と黒色砂の混合砂の埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	灰白色砂微量	4	黒　色	
2	灰　色	黒色砂微量	5	黒　色	灰白色砂中量
3	黒　色	灰白色砂少量	6	黒　色	灰白色砂多量

所見　時期は，第１号掘立柱建物跡と同じ中世と考えられる。



第138図　第２号掘立柱建物跡実測図

表17　中世掘立柱建物跡一覧表

番号	位 置	桁行(南北)方向	柱間数 桁行×梁行(間)	構 造	柱　穴			主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
					柱穴本数	平面形	深さ(cm)			
1	W 2 a0～W 2 c0	N－40°－E	3×2	側柱　南北棟	7	円形	5～12	－	中世	
2	V 3 j2～W 3 a2	N－35°－E	不明	不明	4	円形	8～10	－	中世	

3　近世の遺構と遺物

溝跡３条が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

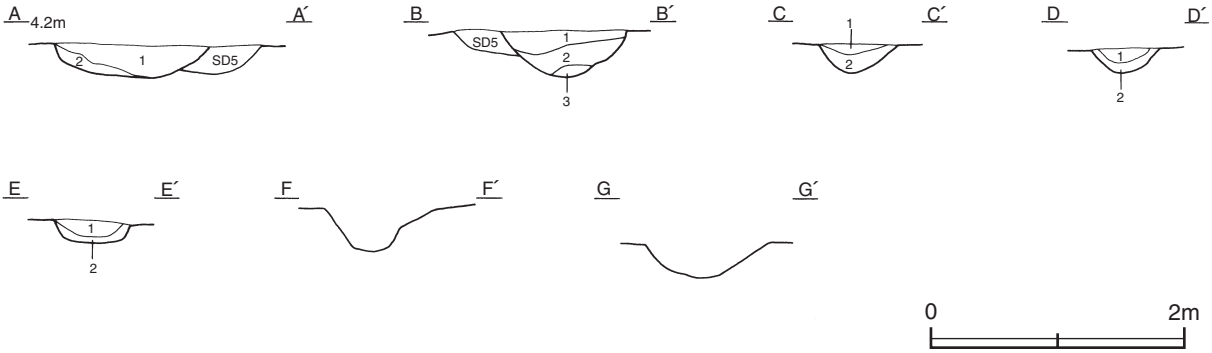
溝跡

第２号溝跡（第130・139・140図）

位置　Ｔ４f1～Ｕ３c5区，標高4.0ｍほどの低地に位置している。

重複関係　第４・５号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状　北東方向（Ｎ－40°－Ｅ）にほぼ直線的に延びており，Ｔ３j8・Ｕ３a7区でやや蛇行している。撹乱を受けているＴ４f1・Ｔ４f2区で立ち上がっているものと推測され，南東側は調査区域外にさらに続いている。確認された長さは37.9ｍで，上幅58～112cm，下幅18～58cm，深さ18～34cmである。確認面からの深さには多少のばらつきがあるが，底面は平坦な部分が多く，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。



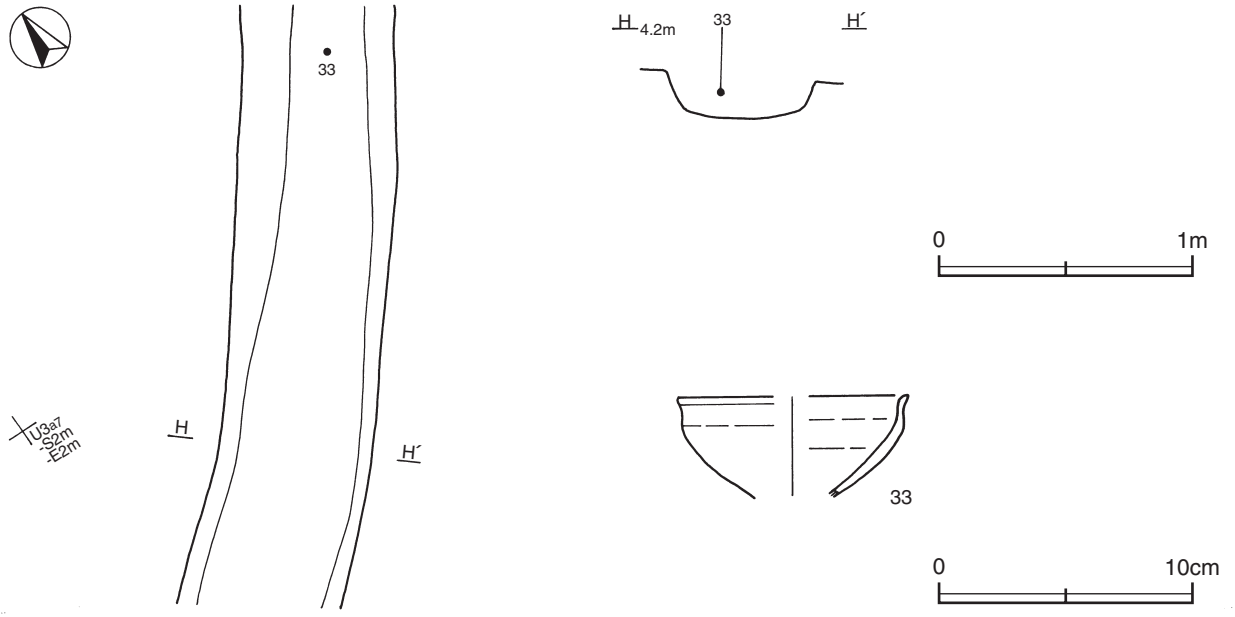
第139図　第２号溝跡実測図

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黄　　色　黒色砂・灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　陶器片11点（碗５，擂鉢１，皿５）が出土している。また，流れ込んだ土師器片12点，須恵器片７点も出土している。33は覆土中層から出土している。

所見　時期は出土遺物が少なく明確にできないが，近世と考えられる。



第140図　第２号溝跡・出土遺物実測図

第２号溝跡出土遺物観察表（第140図）

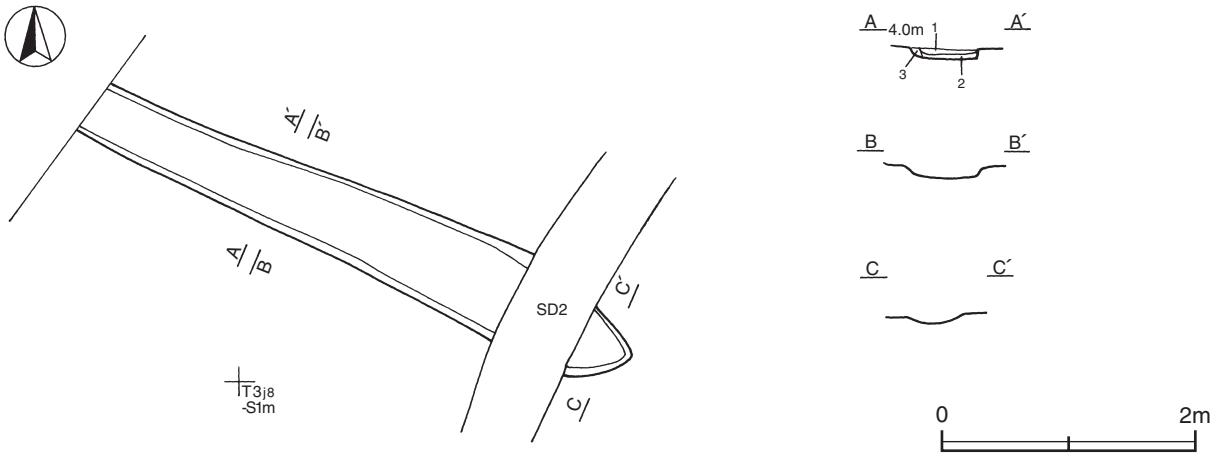
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土 色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
33	陶器	天目茶碗	[9.2]	(4.0)	－	緻密 白	良好	内・外面鉄釉	覆土中層	30%

第４号溝跡（第141・142図）

位置　Ｔ３i7・Ｔ３j8区，標高4.0mほどの低地に位置している。

重複関係　第２号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｔ３j8区から，北西方向（Ｎ－67°－Ｗ）に直線的に延びており，北西側がさらに調査区域外に続いている。確認された長さは4.7mで，上幅44～75㎝，下幅39～60㎝，深さ７～12㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。



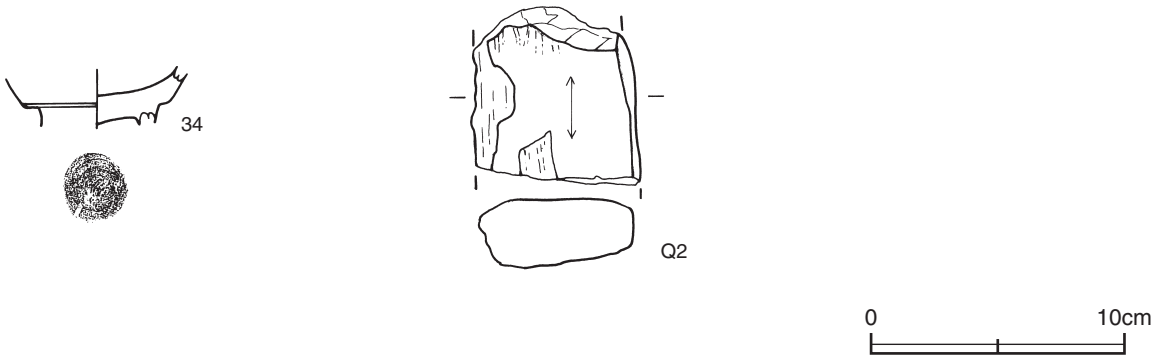
第141図　第４号溝跡実測図

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　陶器片１点（碗），石器１点（砥石）が出土している。Ｑ２は覆土上層，34は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は出土遺物が少なく明確にできないが，中世末から近世と考えられる。



第142図　第４号溝跡出土遺物実測図

第４号溝跡出土遺物観察表（第142図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土 色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
34	陶器	天目茶碗	－	(2.4)	－	緻密 白	良好	削り出し輪台　高台付近露胎　内面鉄釉	覆土中	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Ｑ２	砥石	(6.7)	6.5	2.6	(179.2)	結晶片岩	１面に使用痕　使用頻度が少ない	覆土上層	

第10号溝跡（第143図）

位置　Ｕ３i4～Ｕ３i2区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第11号溝跡を掘り込んでいる。

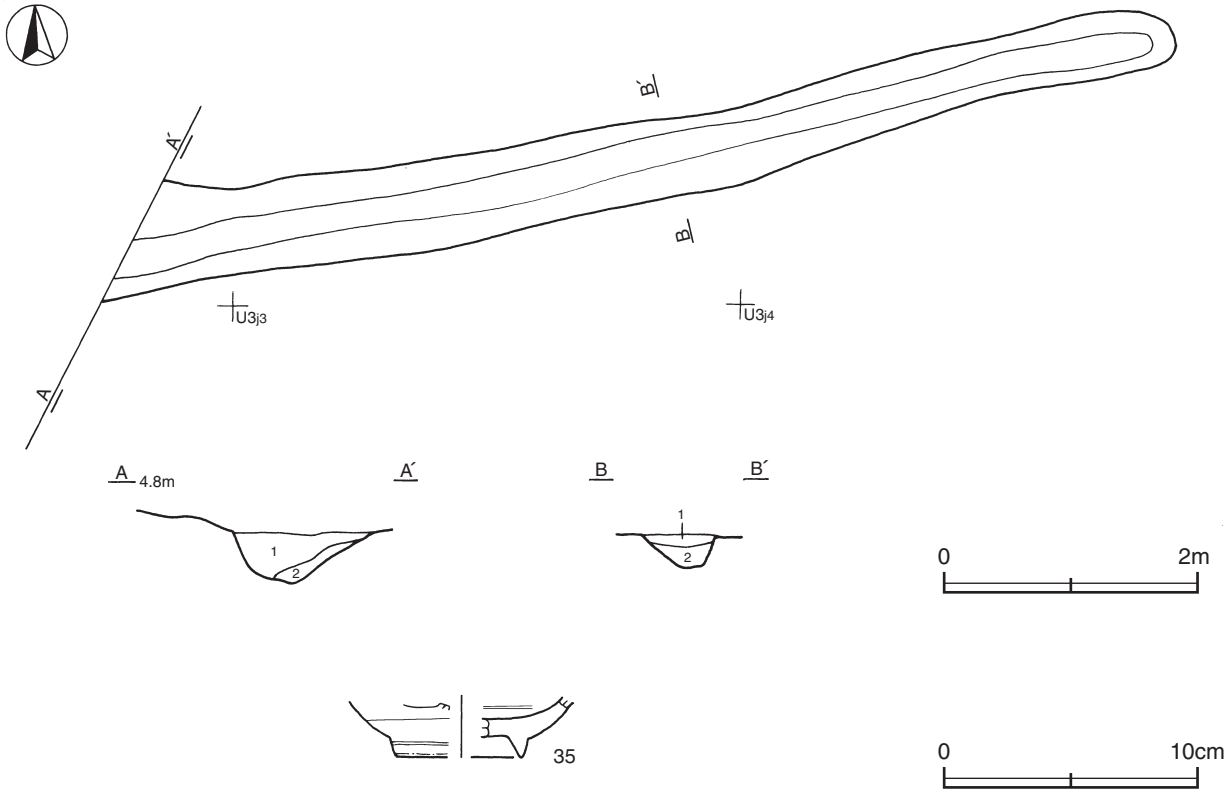
規模と形状　北東方向（Ｎ－78°－Ｅ）に直線的に延びており，Ｕ３i4区で立ち上がっており，南西側がさらに調査区域外に続いている。確認された長さは8.5mで，上幅45～81㎝，下幅14～26㎝，深さ25～39㎝である。底面は南西方向にむかって若干傾斜しており，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　灰　色　灰白色砂微量
2　褐　灰　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　陶器片１点（碗）が出土している。35は覆土上層から出土している。

所見　時期は出土遺物が少なく明確にできないが，近世と考えられる。



第143図　第10号溝跡・出土遺物実測図

第10号溝跡出土遺物観察表（第143図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土 色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
35	磁器	碗	－	(2.4)	[5.2]	緻密 白	良好	みこみ２条の圏線　上絵は青	覆土上層	15%

表18　近世溝跡一覧表

番号	位置	走行方向	形状	規模				覆土	底面	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
2	T４f1～U３c5	N－40°－E	直線	(37.9)	58～112	18～58	18～34	自然	平坦	陶器	近世	SD4・5→本跡
4	T３i7・T３j8	N－67°－W	直線	(4.7)	44～75	39～60	7～12	自然	平坦	陶器　砥石	中世末～近世	本跡→SD2
10	U３i4～U３i2	N－78°－E	直線	(8.5)	45～81	14～26	25～39	自然	平坦	磁器	近世	SD11→本跡

4　その他の遺構と遺物

時期が不明な溝跡７条，土坑19基，その他泥炭層１か所が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

第１号溝跡（第130・144図）

位置　Ｓ４d7～Ｓ４e6区，標高4.0mほどの低地に位置している。

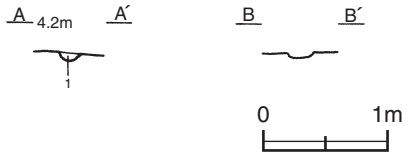
重複関係　第３号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　Ｓ４e6区から，北東方向（Ｎ－37°－Ｅ）に直線的に延びており，北東側はさらに調査区域外に続いている。確認された長さは7.0ｍで，上幅16～35㎝，下幅９～21㎝，深さ４～７㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁の立ち上がりは不明瞭である。

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

所見　時期は，不明である。



第144図　第１号溝跡実測図

第３号溝跡（第130・145図）

位置　Ｓ４j3・Ｓ４j4区，標高4.0ｍほどの低地に位置している。

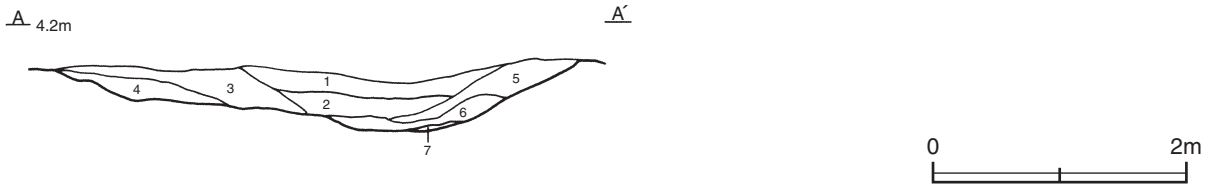
重複関係　第９号溝を掘り込んでいる。

規模と形状　北側のほとんどが撹乱を受けており明確でないが，両端までの長さがＳ４j3・Ｓ４j4区の中で収まる短い溝跡と推測される。北西方向（Ｎ－70°－Ｗ）に直線的で，長さ4.3ｍ，深さ54㎝で，幅は不明である。土層断面図で確認される底面はやや凹凸があり，北西方向にわずかに傾斜している。確認された壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　７層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。第４層中には，図示できないが，層厚５㎜ほどの黒色砂層がレンズ状に堆積している。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黄　　色　層中に黒色砂層が薄く堆積
3　黒　　色　灰白色砂微量
4　灰　白　色　黒色砂微量
5　黄　　色　黒色砂少量
6　灰　白　色　黒色砂中量
7　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，不明である。



第145図　第３号溝跡実測図

第５号溝跡（第130・146図）

位置　Ｔ４f1～Ｔ３g0区，標高4.0ｍほどの低地に位置している。

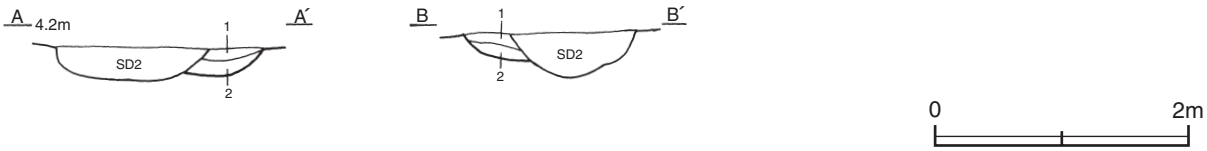
重複関係　第２号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｔ３g0区から北東方向（Ｎ－45°－Ｅ）に直線的に延びており，Ｔ４f1区付近が端部と推測される。確認された長さは8.4ｍで，上幅45～87㎝，下幅18～70㎝，深さ14～22㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。砂が周囲から流入している堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量　　2　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は重複関係から近世以前であるが，明確にできない。

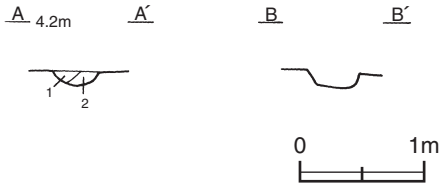


第146図　第５号溝跡実測図

第６号溝跡（第130・147図）

位置　Ｓ４g4・Ｓ４g5区，標高4.0mほどの低地に位置している。

規模と形状　全長2.3m，上幅34～41㎝，下幅28～34㎝，深さは10～13㎝で，北東方向（Ｎ－47°－Ｅ）にやや蛇行ぎみに延びている。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。



第147図　第６号溝跡実測図

覆土　２層に分層される。砂が周囲から流入している堆積状況から，自然堆積と考えられる。

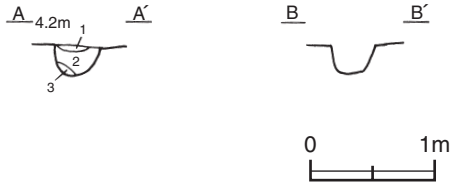
土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量

所見　時期は，不明である。

第７号溝跡（第130・148図）

位置　Ｓ４c6・Ｓ４d6区，標高4.0mほどの低地に位置している。

規模と形状　確認された範囲はごくわずかで，Ｓ４d6区から，北東方向（Ｎ－28°－Ｅ）に延びており，さらに調査区域外に続いている。確認された長さは0.7mで，上幅23～36㎝，下幅10～16㎝，深さ22～25㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。



第148図　第７号溝跡実測図

覆土　３層に分層される。砂が周囲から流入している堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂多量

所見　時期は，不明である。

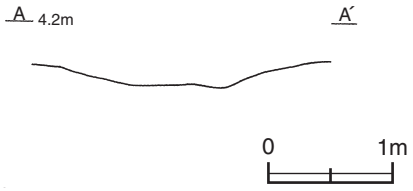
第９号溝跡（第130・149図）

位置　Ｓ４j3～Ｔ４a2区，標高4.0mほどの低地に位置している。

重複関係　第11号土坑，第３号溝に掘り込まれている。

規模と形状　北側のほとんどが撹乱を受けており明確でないが，Ｔ４a2区から，北東方向（Ｎ－52°－Ｅ）に直線的に延びているものと推測される。確認された長さは4.1mで，上幅150～240㎝，下幅80～108㎝，深さ18㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

所見　時期は，不明である。



第149図　第９号溝跡実測図

第11号溝跡（第130・150図）

位置　Ｕ３i2～Ｖ３c2区，標高4.0mほどの低地に位置している。

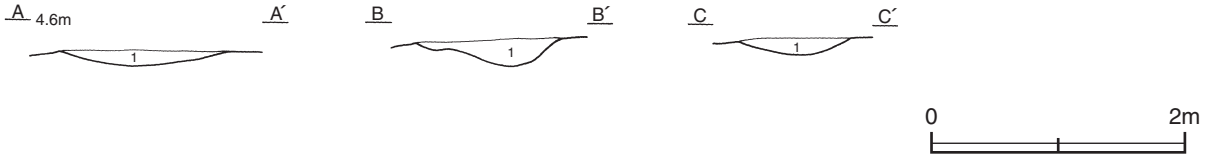
重複関係　第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状　北東方向（Ｎ－18°－Ｅ）に直線的に延び，Ｕ３j3区で北西方向に湾曲しており，両端ともさらに調査区域外に続いている。確認された長さは14.9mで，上幅67～183㎝，下幅14～132㎝，深さ13～21㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では底面の高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　単一層である。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

土層解説
1　褐　灰　色　灰白色砂少量

所見　時期は，重複関係から近世以前であるが明確ではない。



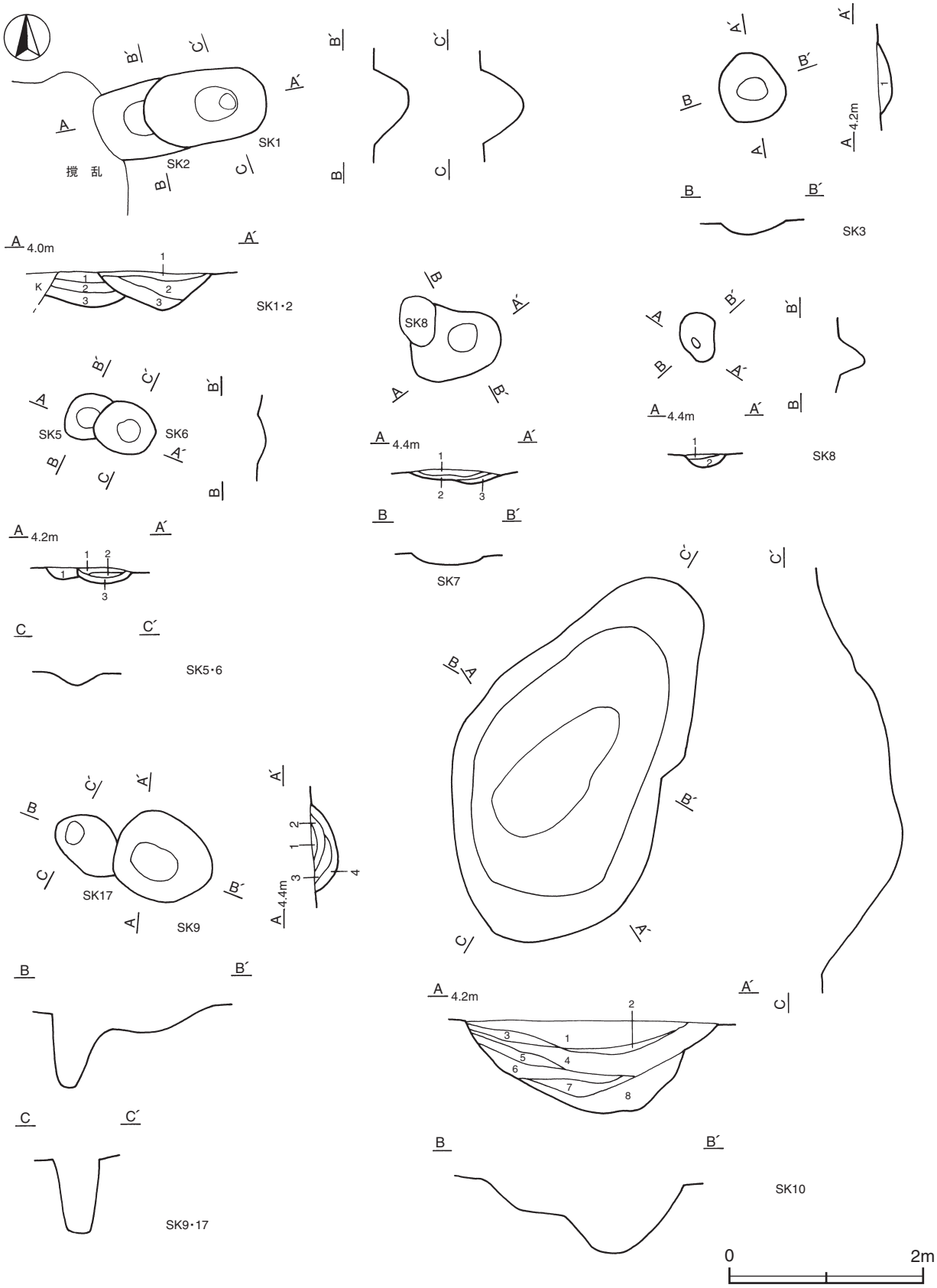
第150図　第11号溝跡実測図

表19　その他の溝跡一覧表

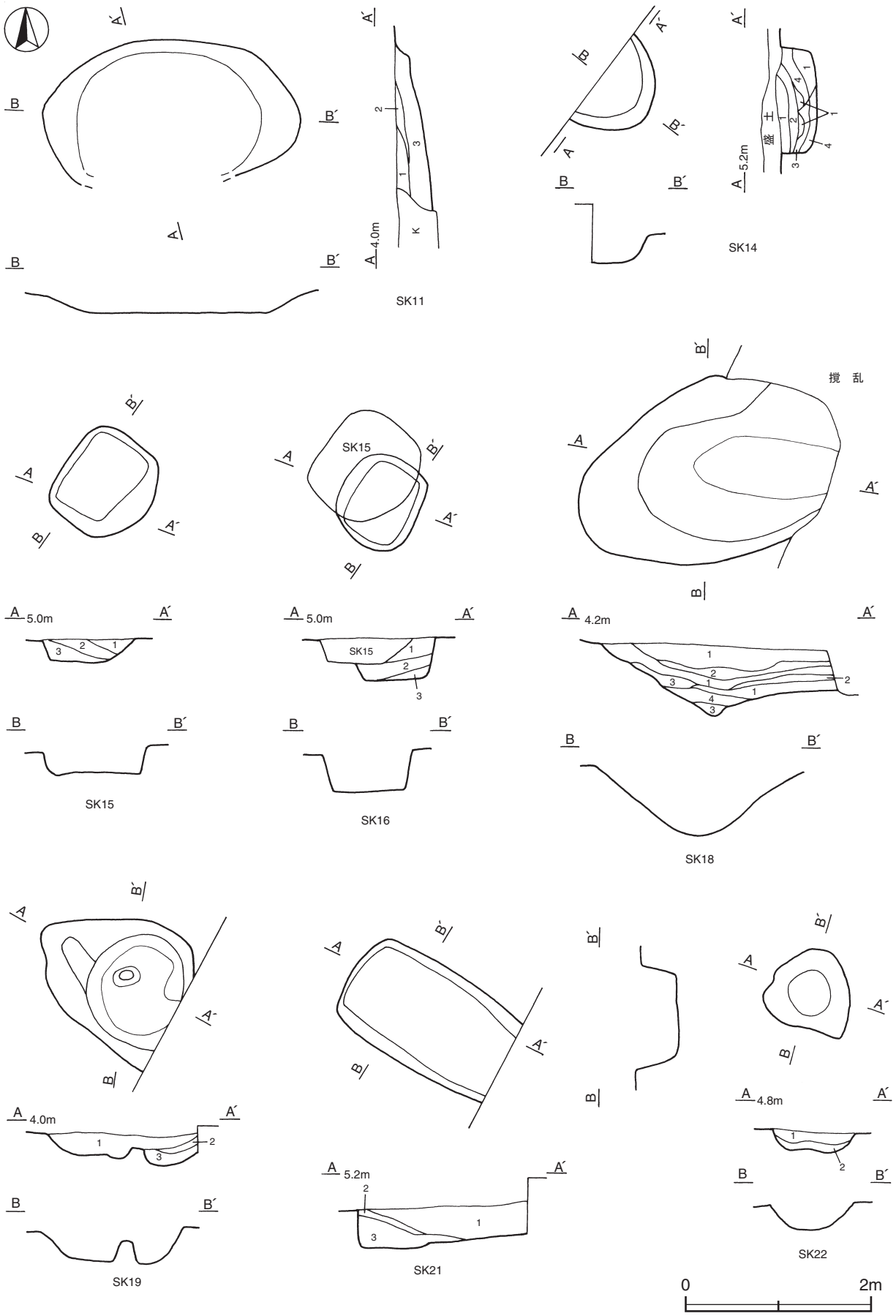
番号	位 置	走行方向	形状	規　模				覆土	底面	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
				長さ(m)	上幅(㎝)	下幅(㎝)	深さ(㎝)					
1	Ｓ４d７～Ｓ４e6	Ｎ－37°－Ｅ	直線	(7.0)	16～35	９～21	４～７	不明	平坦	－	不明	本跡→SK3
3	Ｓ４j３・Ｓ４j4	Ｎ－70°－Ｗ	直線	4.3	－	－	54	自然	凹凸	－	不明	SD9→本跡
5	Ｔ４f1～Ｔ３g0	Ｎ－45°－Ｅ	直線	(8.4)	45～87	18～70	14～22	自然	平坦	－	不明	本跡→SD2
6	Ｓ４g4・Ｓ４g5	Ｎ－47°－Ｅ	蛇行	(2.3)	34～41	28～34	10～13	自然	平坦	－	不明	
7	Ｓ４c6・Ｓ４d6	Ｎ－28°－Ｅ	直線	0.7	23～36	10～16	22～25	自然	平坦	－	不明	
9	Ｓ４j3～Ｔ４a2	Ｎ－52°－Ｅ	直線	(4.1)	150～240	80～108	18	－	平坦	－	不明	本跡→SK11，SD3
11	Ｕ３i2～Ｖ３c2	Ｎ－18°－Ｅ	直線	14.9	67～183	14～132	13～21	不明	平坦	－	不明	本跡→SD10

(2) 土坑（第151～153図）

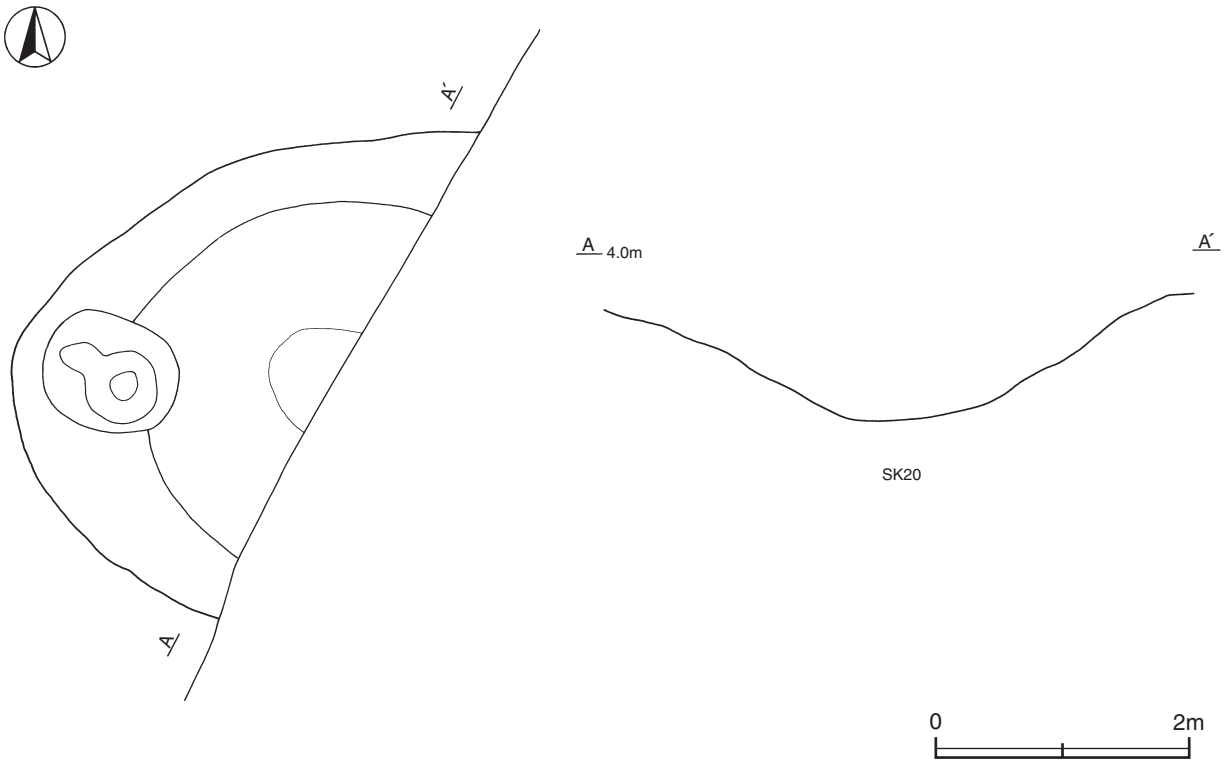
ここでは，時期が不明な土坑について，実測図と土層解説を掲載する。



第151図　その他の土坑実測図(1)



第152図　その他の土坑実測図(2)



第153図　その他の土坑実測図(3)

第１号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第２号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　灰　白　色　黒色砂微量
3　黄　　色　黒色砂少量

第３号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第５号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量

第６号土坑土層解説
1　黄　　色　黒色砂微量
2　黒　　色　黄色砂中量
3　黒　　色　黄色砂少量

第７号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂中量

第８号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　黄色砂少量，灰白色砂微量

第９号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂微量
4　黒　　色　黄色砂少量，灰白色砂微量

第10号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂微量
4　黒　　色　黄色砂微量
5　黒　　色　黄色砂中量
6　黒　　色　黄色砂多量
7　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
8　黒　　色　灰白色砂・黄色砂中量

第11号土坑土層解説
1　黄　　色　層中に黒色砂が厚さ５㎜ほどの層を形成
2　灰オリーブ色　粘質土
3　黄　　色　層中に黒色砂が厚さ５㎜ほどの層を形成

第14号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　灰　白　色　黒色砂微量
4　灰　白　色　黒色砂多量

第15号土坑土層解説
1　灰　白　色　黒色砂少量
2　灰　白　色　黒色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂微量

第16号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂少量
3　灰　白　色　黒色砂中量

第18号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂微量
3　黒　　色　層中に灰白色砂が厚さ５㎜ほどの層を形成
4　黒　　色　第１号泥炭層の堆積土　植物遺体微量

第19号土坑土層解説
1　灰オリーブ色　粘質土
2　灰オリーブ色　粘質土，黄色砂中量
3　黄　　色　黒色砂少量

第21号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　灰　白　色　黒色砂多量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第22号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量

表20　その他の土坑一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(㎝)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係(旧→新)
1	S４h4	N－78°－E	楕円形	1.3×0.8	38	外傾	平坦	自然	－	不明	SK2→本跡
2	S４h4	N－78°－E	［楕円形］	(0.5)×0.8	35	外傾	平坦	自然	－	不明	本跡→SK1
3	S４e6	N－22°－W	円形	0.7×0.7	14	外傾	平坦	自然	－	不明	SD1→本跡
5	S４f4	N－79°－E	［楕円形］	0.5×(0.4)	12	外傾	平坦	自然	土師器	不明	本跡→SK6
6	S４f4	N－89°－W	楕円形	0.7×0.5	13	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SK5→本跡
7	T３f9	N－67°－E	不整楕円形	1.0×0.8	14	外傾	平坦	自然	－	不明	本跡→SK8
8	T３f9	N－29°－W	楕円形	0.5×0.4	28	外傾	平坦	自然	－	不明	SK7→本跡
9	T３f9	N－67°－W	楕円形	1.0×0.9	25	外傾	平坦	自然	－	不明	SK17→本跡
10	T４a3	N－30°－E	不整楕円形	4.1×2.3	94	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
11	T４a2	N－88°－E	［楕円形］	2.8×(1.5)	38	外傾	平坦	人・自	土師器　須恵器	不明	SD9→本跡
14	V３f3	N－54°－W	［楕円形］	1.1×(0.7)	39	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
15	W２e8	N－35°－E	長方形	1.1×1.0	25	外傾	平坦	自然	－	不明	SK16→本跡
16	W２e8	N－30°－E	［長方形］	(1.0)×(0.9)	45	外傾	平坦	自然	－	不明	本跡→SK15
17	T３f9	N－43°－W	［楕円形］	(0.8)×0.5	75	外傾	平坦	－	－	不明	本跡→SK9
18	S４i3	N－61°－E	［楕円形］	(2.9)×2.0	78	外傾	平坦	自然	－	不明	
19	T４d2	N－63°－W	［楕円形］	(1.7)×1.4	38	外傾	凹凸	人為	須恵器	不明	
20	T４c3	N－29°－E	楕円形	4.3×(2.3)	85	外傾	平坦	自然	－	不明	
21	W２e9	N－60°－W	長方形	(1.9)×1.1	43	外傾	平坦	自然	－	不明	
22	V３b2	N－35°－W	不整楕円形	1.0×0.9	23	外傾	平坦	自然	－	不明	

(3) 泥炭層

第１号泥炭層（第154・155図）

位置　Ｓ４d7～Ｓ４i5区で，標高4.0mほどの低地に位置している。

重複関係　第12号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　最大長は南北23m，最大幅は東西4.7mの範囲で確認されている。

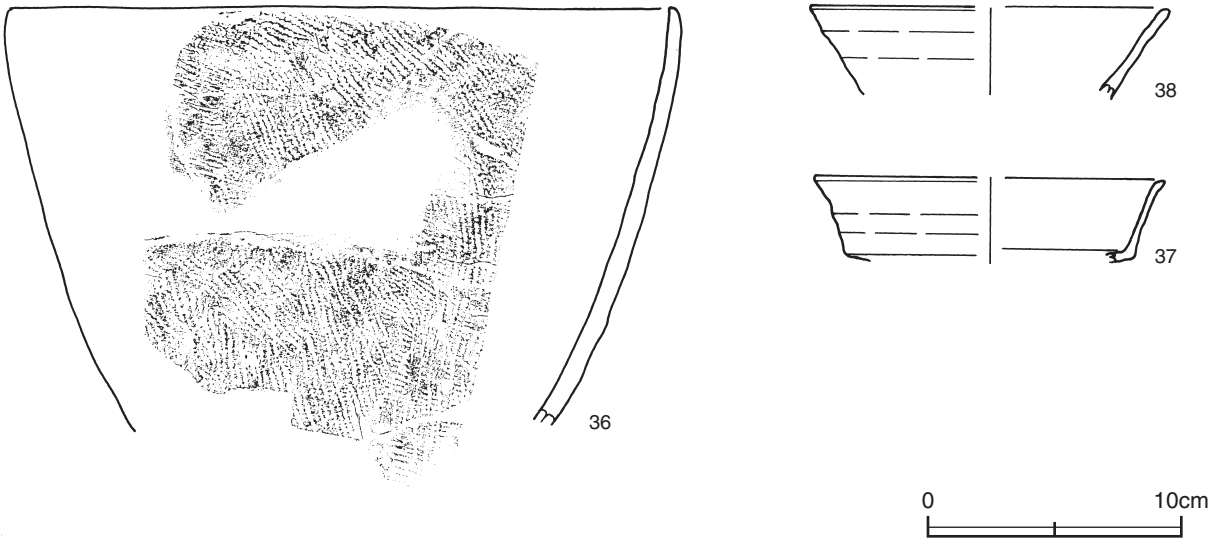
土層　最大厚180㎝の現在の盛土層直下に全５層が確認されている。第１層は植物遺体などをほとんど含まない粘土層，第２層は黒色砂と灰白色砂が混じって形成された層，第３層は草本質植物遺体を多量に含んでいる黒色腐植質シルト，第４層は灰白色砂の純層，第５層は樹木・種子などの植物遺体を多量に含んでいる黒褐色腐食質シルト層で，その下が地山の灰白色砂層である。第３・５層は多量の地下水を含んでいる層で，掘削時にも湧水が認められた。第２・４層の砂の間層は，周囲の砂が流入したものと考えられる。

土層解説

1　黒　　色　粘土層（付章断面図柱状図第２層上位　試料採取位置１）
2　灰　白　色　黒色砂多量（付章断面柱状図第３層　試料採取位置２）
3　黒　　色　黒色腐植質シルト　草本質植物遺体多量（付章断面柱状図第２層下位　試料採取位置３）
4　灰　白　色　（付章断面柱状図第３層　試料採取位置４）
5　黒　　色　黒褐色腐植質シルト　樹木・種子等の植物遺体多量（付章断面柱状図第３層　試料採取位置５・６）

遺物出土状況　縄文土器片12点（深鉢），土師器19点（甕），須恵器８点（坏・高台付坏）が出土している。土師器片・須恵器片は第４層中からで，第12号土坑出土の24と接合する破片も出土している。36は第５層上位から出土している。また，37・38は第23号土坑の28・30と同一個体である。

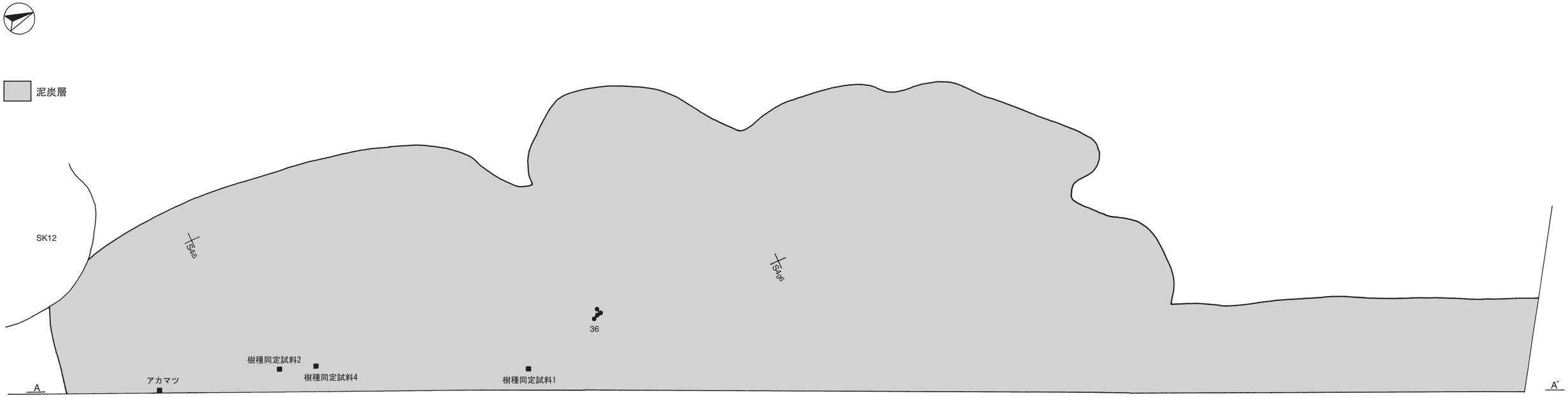
所見　36は縄文土器後期後半の粗製土器であり，それ以前には形成されていた湖沼と考えられる。周囲から自然に流入して形成された第４層から古代の土器が出土していることや，８世紀代の第12号土坑が掘り込んでいることから，この時期には一度砂に覆われ，湿地になっていた可能性がある。なお，詳細な分析の結果は，付章を参照されたい。

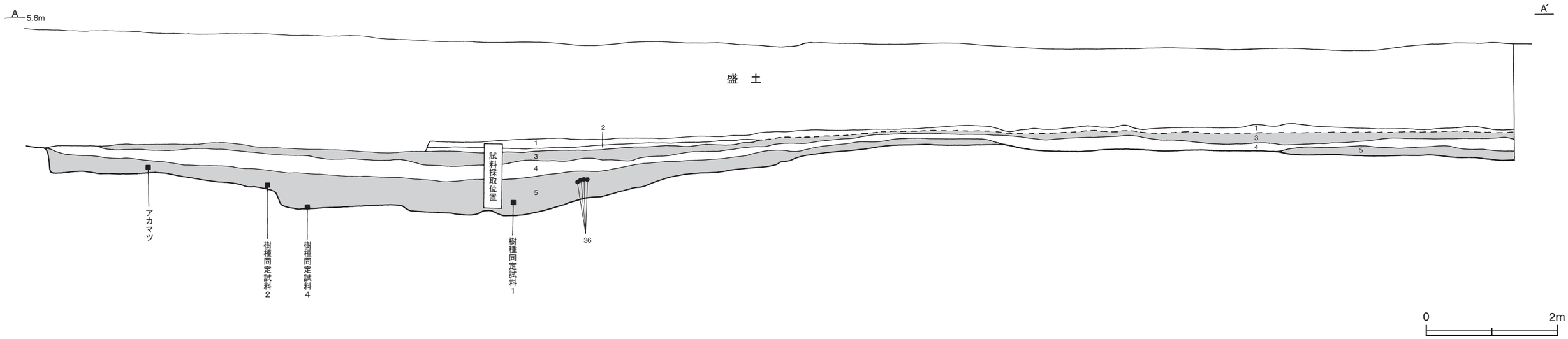


第154図　第１号泥炭層出土遺物実測図

第１号泥炭層出土遺物観察表（第154図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
36	縄文土器	深鉢	[26.0]	(16.5)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	褐灰	普通	縦・横方向の単節LR縄文　一部附加条縄文施文	第５層上位	20%
37	須恵器	高台付坏	[13.8]	(3.4)	－	白色粒子・透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	第４層中	10% SK23と 同一個体
38	須恵器	坏	[14.0]	(3.7)	－	白色粒子・透明粒子 黒色粒子	灰	普通	ロクロナデ	第４層中	10% SK23と 同一個体

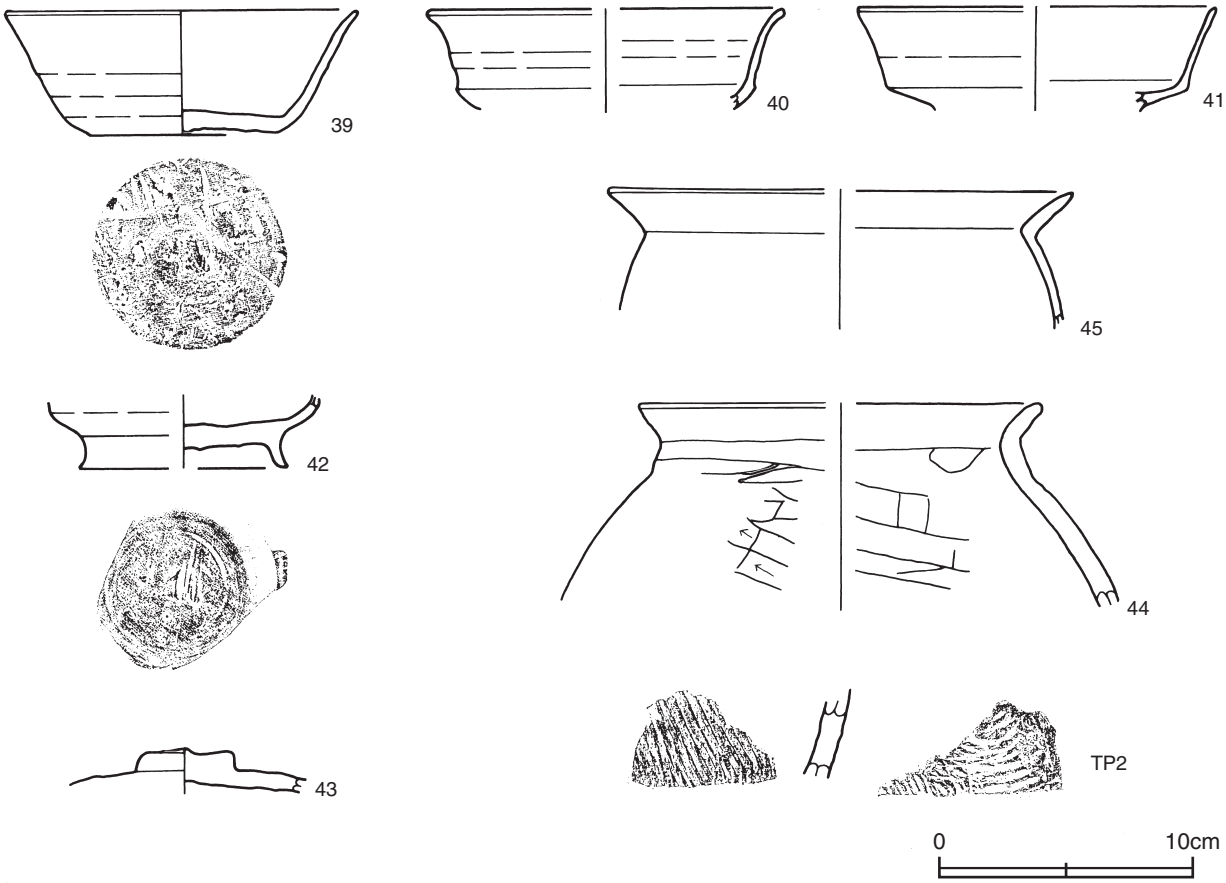




第155図　第１号泥炭層実測図

(4) 遺構外出土遺物（第156図）

遺構に伴わない主な遺物について，実測図と観察表を掲載する。



第156図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第156図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備　考
39	須恵器	坏	13.7	4.9	7.3	白色粒子・透明粒子	灰	普通	底部ナデ調整	確認面	70%
40	須恵器	高台付坏	[14.0]	(4.0)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ	確認面	10%
41	須恵器	高台付坏	[14.0]	(4.0)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	確認面	15%
42	須恵器	高台付坏	－	(2.9)	[8.0]	海綿骨針・白色粒子・ 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	確認面	40%
43	須恵器	蓋	－	(1.9)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	確認面	10%
44	土師器	甕	[15.8]	(8.1)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	確認面	10%
45	土師器	甕	[18.2]	(5.4)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	褐灰	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	確認面	10%

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	手 法 及 び 文 様 の 特 徴	出土位置	備　考
TP 2	須恵器	甕	白色粒子･透明粒子	暗青灰	普通	外面斜位の平行叩き　内面青海波文	確認面	

第5章　古 屋 敷 遺 跡

第1節　遺 跡 の 概 要

古屋敷遺跡は，南北に延びる標高4.9～5.8mの砂丘上に立地している。調査区は遺跡のほぼ中央部を縦断するように設定され，調査面積は2,018㎡で，調査前の現況は道路及び更地である。

今回の調査によって，古墳時代，奈良時代，近世を中心とした遺構と遺物が確認された。確認された遺構は，竪穴住居跡４軒（古墳時代２，奈良時代２），掘立柱建物跡５棟（奈良時代４，時期不明１），柵跡２条（奈良時代），溝跡５条（近世３，時期不明２），土坑29基（奈良時代２，時期不明27基），ピット17基（時期不明），整地面１か所（時期不明）である。

遺物は，遺物コンテナ（60×40×20㎝）に５箱出土している。主な遺物は，弥生土器（壺形土器），土師器（坏・皿・坩・器台・鉢・壺・甕），須恵器（坏・高台付坏・蓋・瓶・長頸瓶・甕），陶器（碗・皿・猪口・擂鉢），磁器（碗），ミニチュア土器，製塩土器，土製品（泥面子），石器（敲石・砥石），鉄製品（刀子・釘・鉄滓・不明）などである。

第2節　基　本　層　序

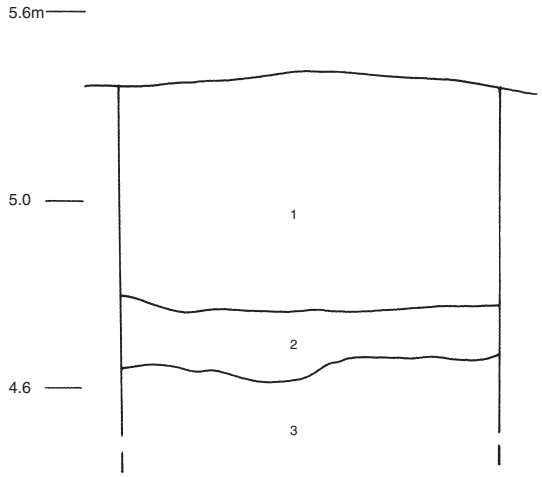
Ｊ７g0区にテストピットを設定し，基本土層（第157図）の堆積状況の観察を行った。観察結果は，以下の通りである。

第１層は，黒褐色を呈し，現在の畑の盛土層で，層厚は55～65㎝である。

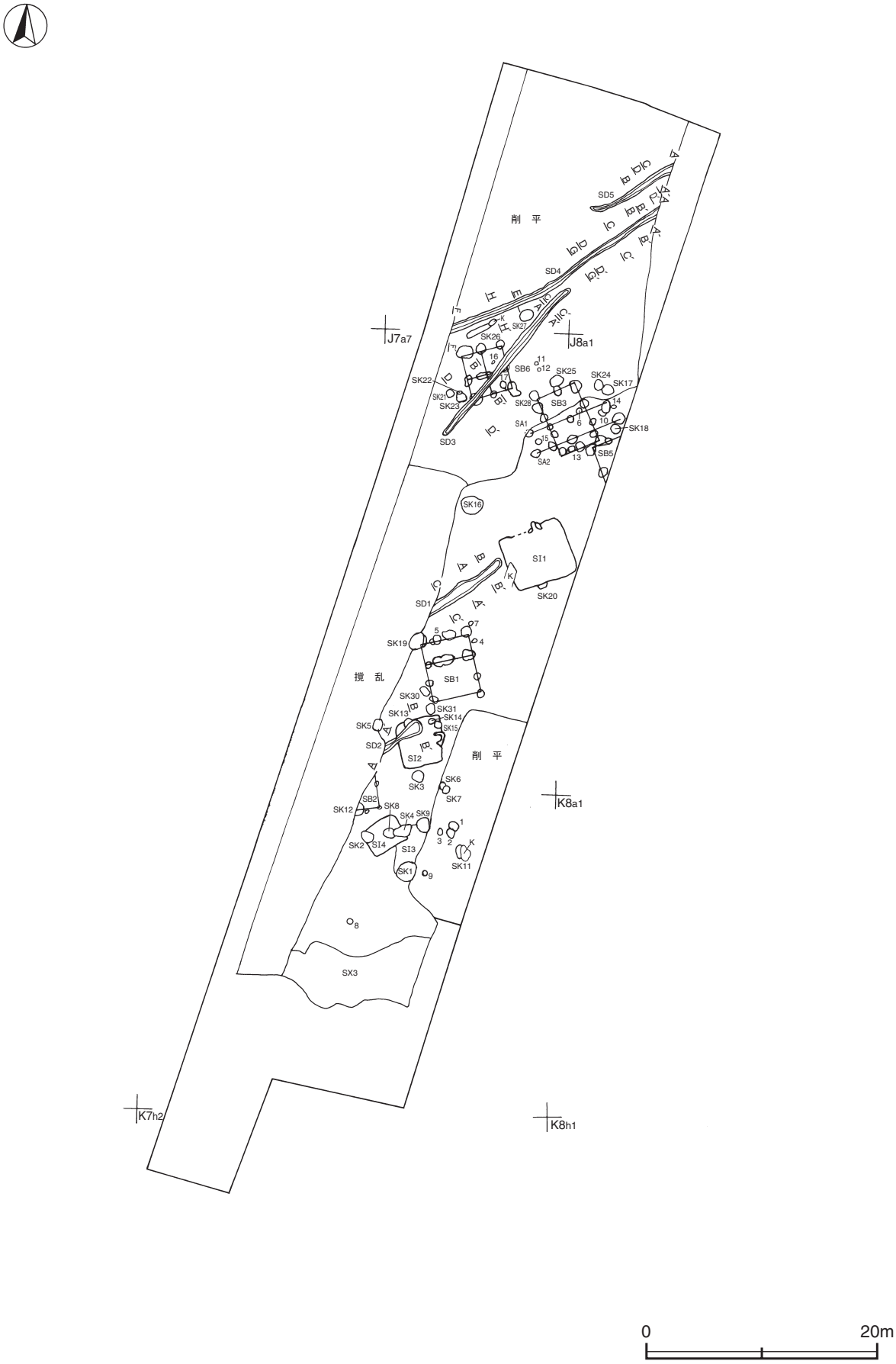
第２層は，灰白色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，層厚は22～27㎝である。

第３層は，黄色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，層厚は不明である。

遺構は，第２層上面で確認されている。



第157図　古屋敷遺跡基本土層図



第158図　古屋敷遺跡全体図

第３節　遺 構 と 遺 物

１　古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡２軒が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第３号住居跡（SX1）（第159図）

位置　Ｋ７b7区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第４号住居，第１・４・９号土坑に掘り込まれている。

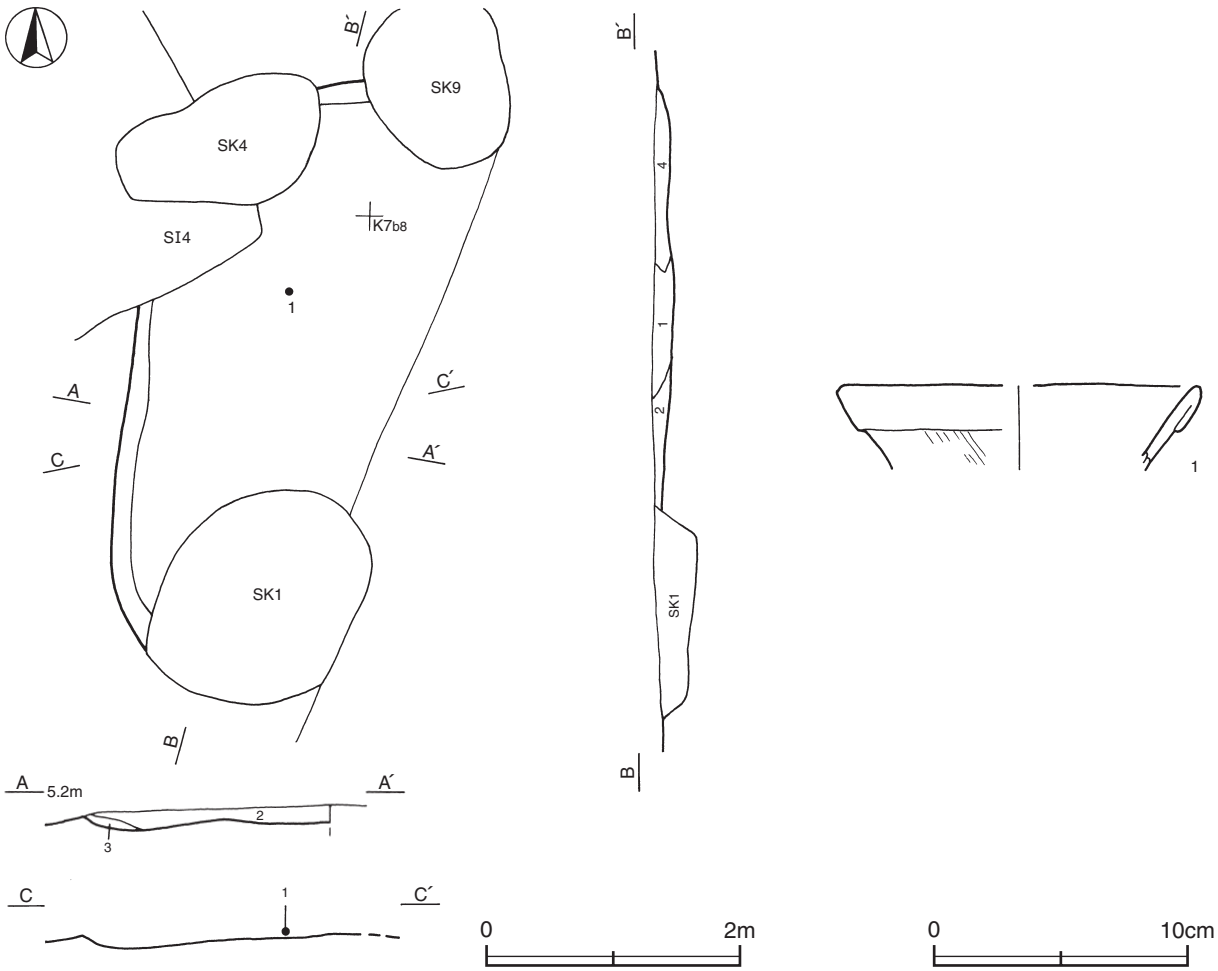
規模と形状　東側が削平されていることや重複のため，東西軸2.2ｍのみ，南北軸3.2ｍのみが確認されている。平面形は第４号住居跡と同じ長方形と推測され，南北軸はＮ－５°－Ｅである。遺存状態が悪いため掘り込みがわずかにしか確認されず，壁の立ち上がりも不明瞭である。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

覆土　４層に分層される。不規則な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説

１　灰　白　色		３　黒　　色	灰白色砂少量
２　黒　　色	灰白色砂中量	４　黒　　色	灰白色砂多量



第159図　第３号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片139点（壺１，甕138）が出土している。また，混入した須恵器片４点も出土している。１は中央部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，土師器片がすべて前期と考えられる土器であることや，重複関係から古墳時代前期と考えられる。本住居を埋め戻して，第４号住居が構築されたものと推測され，それほど時間差がないと考えられる。なお，炉の痕跡は確認されていない。

第３号住居跡出土遺物観察表（第159図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
1	土師器	壺	[13.9]	(3.4)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい橙	普通	折り返し口縁　外面ハケ目　内面ナデ	覆土下層	5%

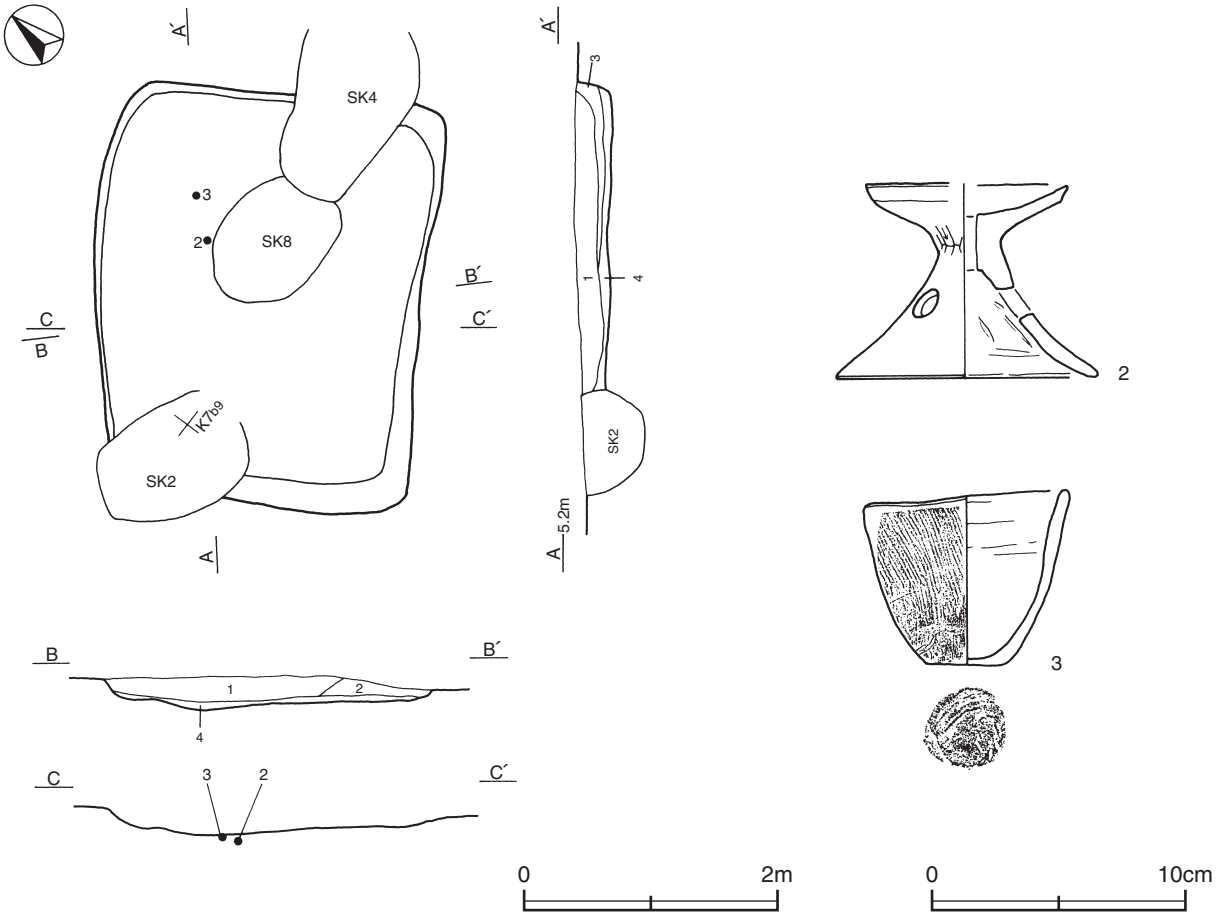
第４号住居跡（SX2）（第160図）

位置　Ｋ７a9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第３号住居跡を掘り込み，第２・４・８号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.3m，短軸2.6mの長方形で，長軸方向はＮ－56°－Ｅである。壁高は12～28㎝で，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。



第160図　第４号住居跡・出土遺物実測図

覆土　４層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　灰　白　色　黒色砂中量
4　灰　白　色　黒色砂少量

遺物出土状況　土師器片163点（坩４，器台２，壺１，甕156），ミニチュア土器１点が出土している。また，混入した須恵器片２点も出土している。２・３は中央部の床面から出土している。

所見　時期は，出土土器から古墳時代前期後半と考えられる。なお，炉の痕跡は確認されていない。

第４号住居跡出土遺物観察表（第160図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
2	土師器	器台	[8.0]	7.6	10.2	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	橙	普通	受け部内・外面ヨコナデ・ナデ　孔有り　脚部３孔 外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラナデ・ナデ　裾部折り返し後横ナデ	床面	80% PL24
3	ミニチュア土器	－	7.8	7.0	3.1	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ハケ目後下半のみナデ　内面横ナデ	床面	95% PL24

表21　古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長(東西)軸×短(南北)軸	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係(旧→新)
								主柱穴	出入口ピット	ピット	炉				
3	K７b7	N－５°－E	[長方形]	2.2×3.2	不明	平坦	－	－	－	－	－	人為	土師器	古墳時代前期	本跡→SI4，SK1･4･9
4	K７a9	N－56°－E	長方形	3.3×2.6	12～28	平坦	－	－	－	－	－	自然	土師器 ミニチュア土器	古墳時代前期後半	SI3→本跡→SK2･4･8

２　奈良時代の遺構と遺物

竪穴住居跡２軒，掘立柱建物跡４棟，柵跡２条，土坑２基が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第１号住居跡（第161～165図）

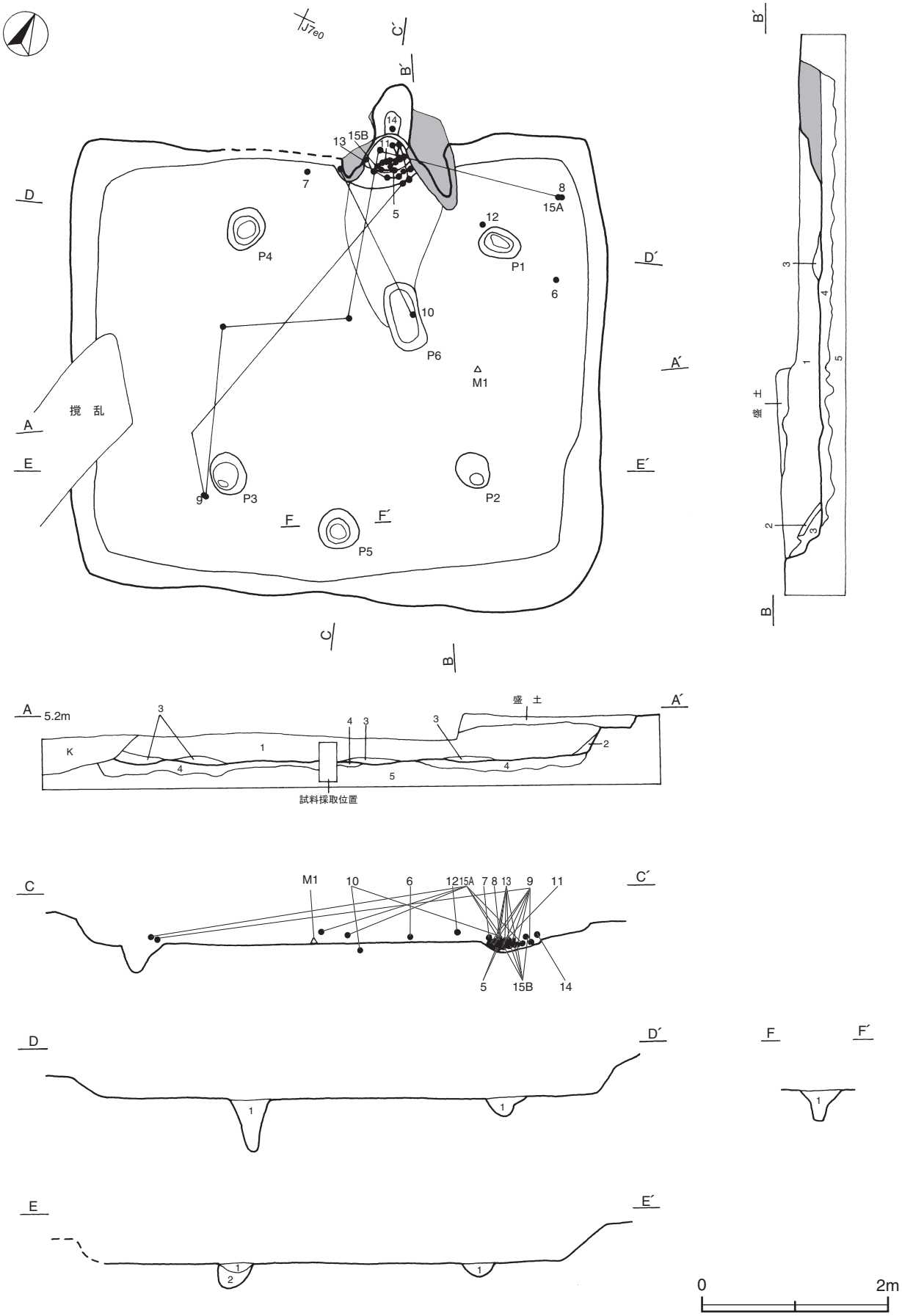
位置　Ｊ７e0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第20号土坑を掘り込んでいる。

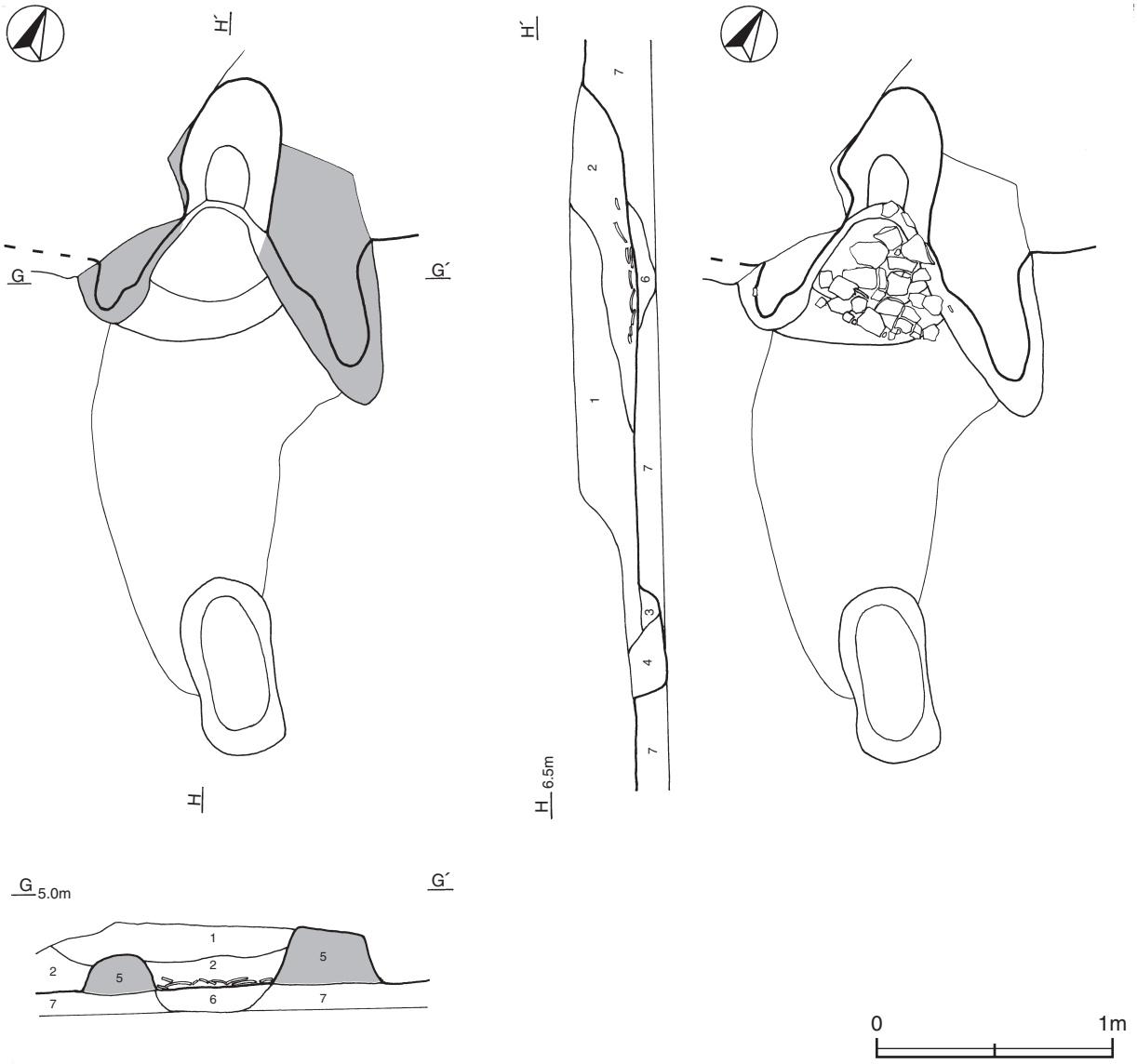
規模と形状　長軸5.8m，短軸5.2mの長方形で，主軸方向はＮ－26°－Ｗである。壁高は23～43cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

竈　北壁やや東寄りに付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで140cm，袖部幅は130cmである。袖部は壁外に掘り込んで粘土を充填し，床面と同じ高さの地山面を基部として，ロームブロック・焼土化した粘土ブロック・凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。右袖部からは比較的大きな凝灰岩が確認され，芯材としていたものと考えられる。火床部は床面から10cmほど掘り込んで，焼土ブロックと粘土を混ぜ込んだ砂を埋土しており，弱く赤変している。焚口部の前方に焼土粒子・炭化粒子が1.2mほどの範囲で広がっており，焚口部に近い床面は弱く赤変している。範囲の先端にはＰ６があり，焼土粒子・炭化粒子・灰が堆積している。煙道部は壁外に80cm掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。



第161図　第１号住居跡実測図(1)



第162図　第１号住居跡実測図

竈土層解説

1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　焼土ブロック少量，灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量
4　黒　　色　焼土ブロック・炭化粒子・灰多量
5　灰黄褐色　ロームブロック・焼土ブロック・凝灰岩ブロック多量
6　黒　　色　焼土ブロック・粘土ブロック多量
7　灰　白　色　（地山）

ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ18～54㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ38㎝で，南壁寄りの中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

土層解説（各ピット共通）

1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量

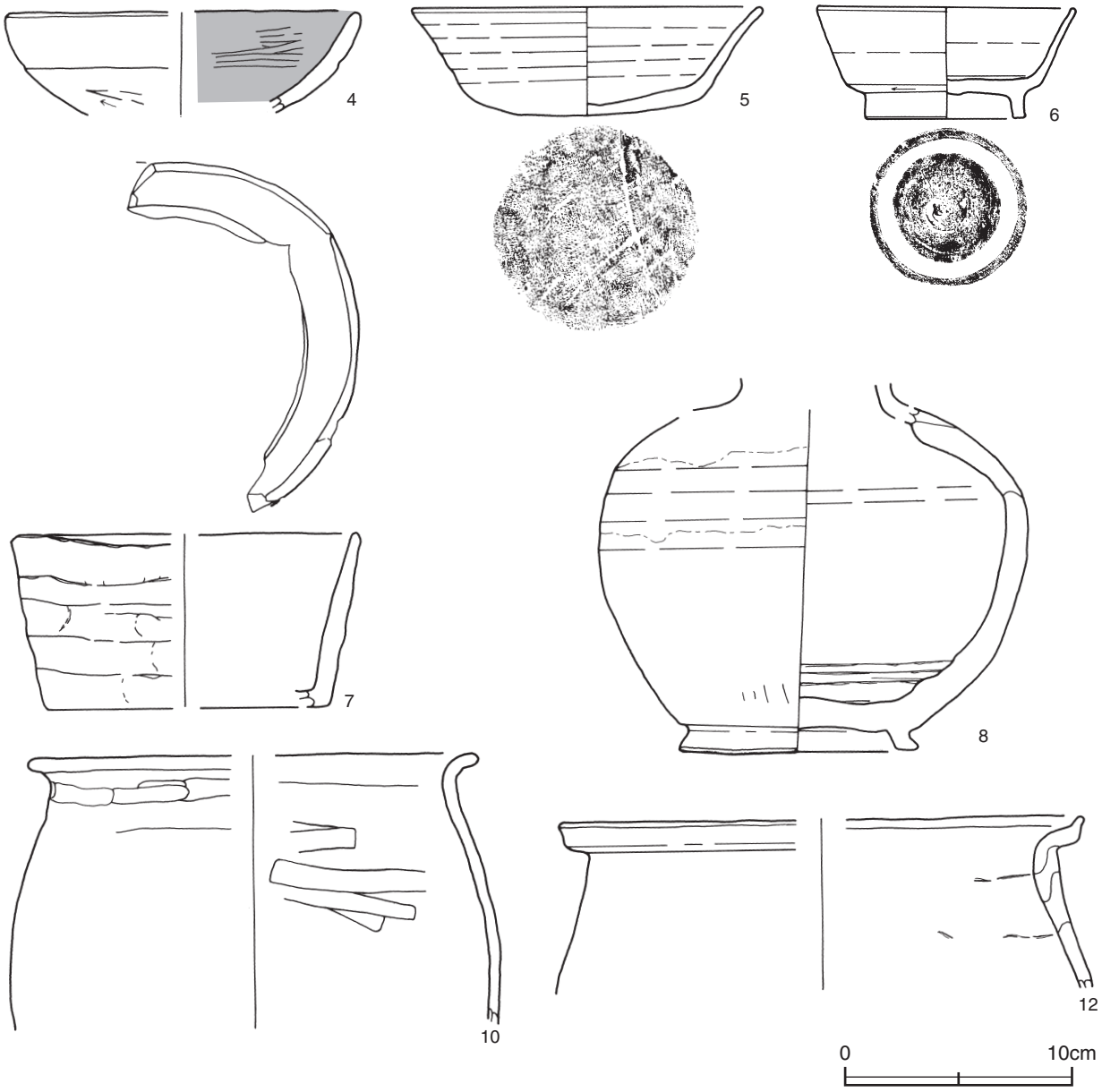
覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況であるが，遺物出土状況も考慮すると人為堆積の可能性が高い。なお，第４・５層は，地山の砂層であり，第４層は植物の根の撹乱を受けて覆土の黒色砂が入り込んでいる。

土層解説

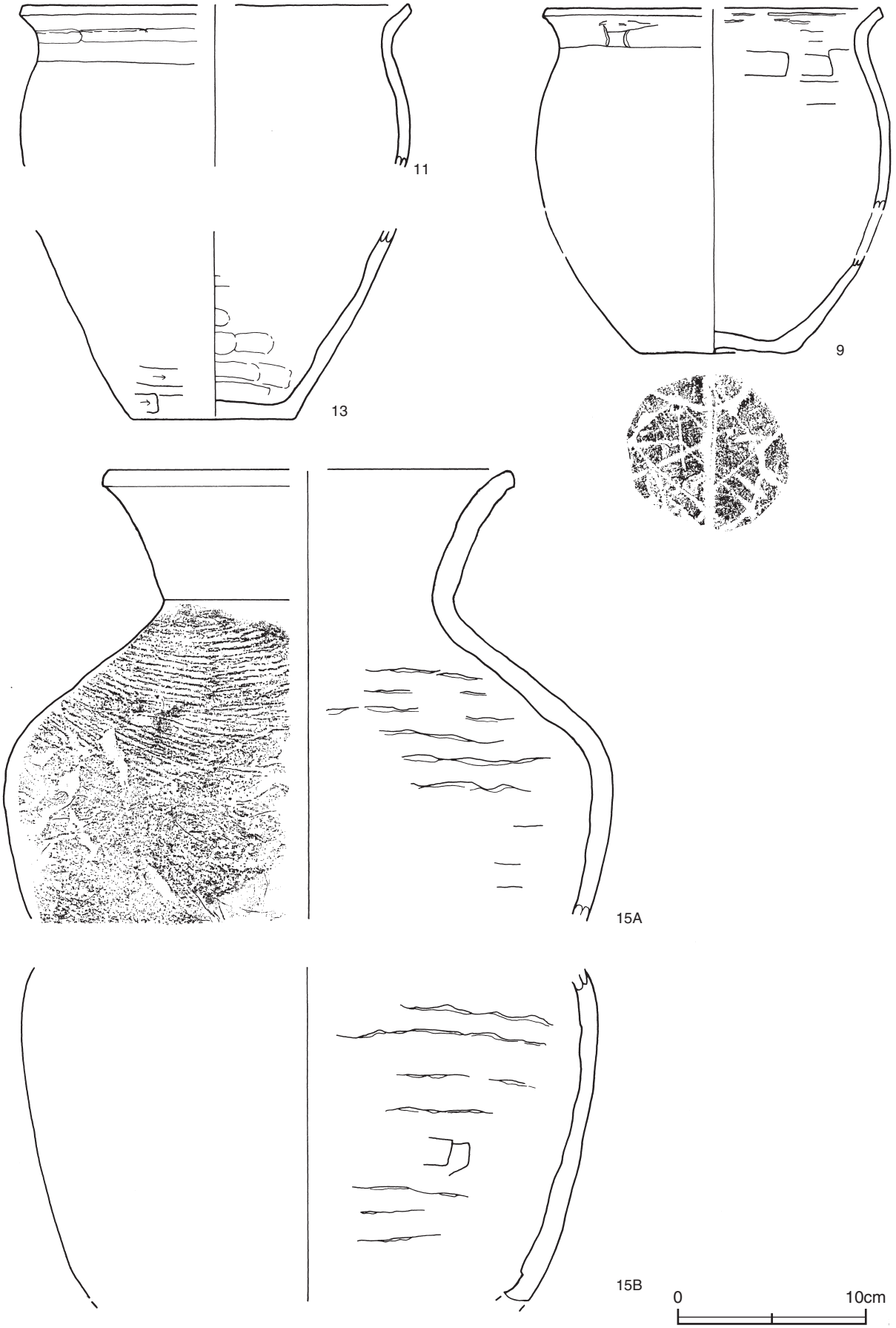
1　黒　　色　焼土粒子・粘土粒子・灰白色砂微量（上部・試料番号１　下部・試料番号２）
2　黒　　色　灰白色砂多量
3　黒　　色　灰白色砂少量
4　灰　白　色　黒色砂多量（地山　試料番号３）
5　灰　白　色　地山（試料番号４）

遺物出土状況　土師器片399点（坏44，甕355），須恵器片86点（坏・高台付坏31，蓋２，瓶１，甕52），製塩土器，鉄製品４点（刀子１，釘１，不明２），鉄滓２点が出土している。また，混入した陶磁器片18点も出土している。中央部から竈前方にかけての覆土下層から多く出土している。特に５・11・13・14・15Ｂなど竈火床部に接して多量の土器片が出土している。９・10・15Ａは竈火床部と南西コーナー部の覆土下層，竈火床部と竈前方の床面，竈火床部と中央部・南西コーナー部・北東コーナー部の覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。６・８は北東コーナー部の覆土下層から横位・逆位でそれぞれ出土している。７は竈左脇の床面，12は竈前方の覆土下層からそれぞれ出土している。Ｍ１は中央部の床面，ＴＰ１・Ｍ２は覆土中からそれぞれ出土している。

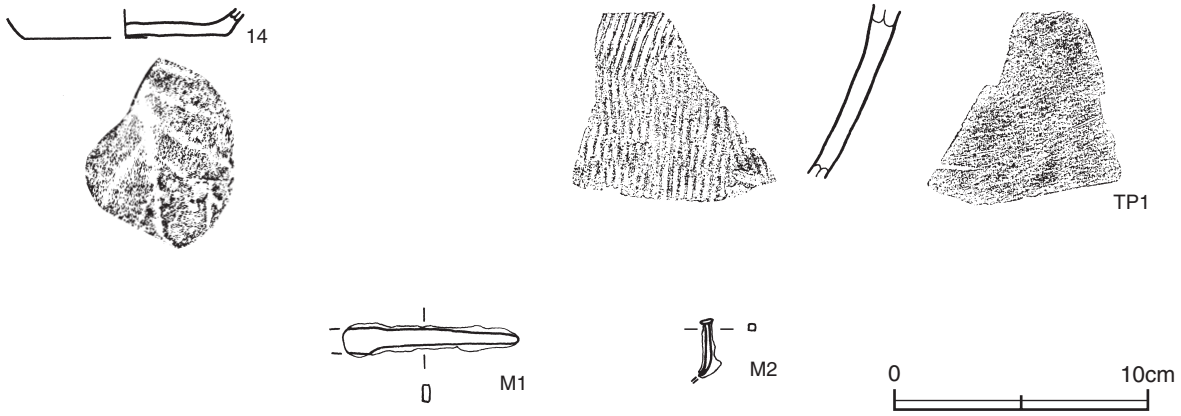
所見　時期は，出土土器から８世紀前葉と考えられる。住居の構築の際に，砂以外の構築土を使用しているのかを調べるため，覆土及び床面の土壌分析を行っている。その結果，構築土の使用は認められず，床も砂層をそのまま使用していることが判明した。なお，分析の結果は付章を参照されたい。



第163図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)



第164図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)



第165図　第１号住居跡出土遺物実測図(3)

第１号住居跡出土遺物観察表（第163～165図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
4	土師器	坏	[15.4]	(4.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	10%
5	須恵器	坏	15.3	4.8	9.1	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白	普通	底部不定方向のヘラ削り調整	竈火床部	60% PL24
6	須恵器	高台付坏	11.2	5.0	6.6	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り　底部回転ヘラ削り調整	覆土下層	75% PL24
7	製塩土器	鉢	[14.7]	7.7	[12.7]	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁端部外削ぎで平坦　体部外面輪積み痕を有し，凹凸が顕著　内面はナデにより平滑	床面	25%PL24 外面二次火熱痕
8	須恵器	長頸瓶	－	(15.2)	10.4	白色粒子・細礫	暗灰黄	普通	ロクロナデ　体部内面下端ヘラ当て具痕　体部～高台接合部に強いナデ　底部ナデ調整底部内面ナデ 肩部自然釉	覆土下層	50% PL24
9	土師器	甕	[17.8]	[18.5]	8.5	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ 底部木葉痕	竈火床部 覆土下層	50%
10	土師器	甕	[19.1]	(12.0)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラナデ・ナデ	竈火床部 床面	15%
11	土師器	甕	[20.4]	(8.6)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	竈火床部	5％
12	土師器	甕	[23.0]	(7.7)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部内･外面横ナデ　端部つまみ上げ　体部ナデ 内面ナデ　内面輪積み痕残存	覆土下層	5％
13	土師器	甕	－	(10.1)	8.7	白雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ	竈火床部	20%
14	土師器	甕	－	(1.1)	[8.1]	白雲母・白色粒子 透明粒子	明赤褐	普通	底部木葉痕	竈火床部	5％
15A	須恵器	甕	[21.2]	(24.1)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰黄	普通	口縁部内・外面ナデ　体部外面斜位の平行叩き 内面ナデにより当て具痕不明瞭　輪積み痕顕著	竈火床部 覆土下層	30% PL24
15B	須恵器	甕	－	(17.8)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰黄	普通	体部外面ナデにより叩き具痕不明瞭 内面ナデにより当て具痕不明瞭　輪積み痕顕著	竈火床部	20%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP１	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面縦位の平行叩き　内面ナデにより当て具痕不明瞭	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M１	刀子	(7.0)	(1.1)	0.3	(9.1)	鉄	両関　欠損	床面	
M２	釘	(2.3)	0.6	0.4	(1.0)	鉄	先端欠損	覆土中	

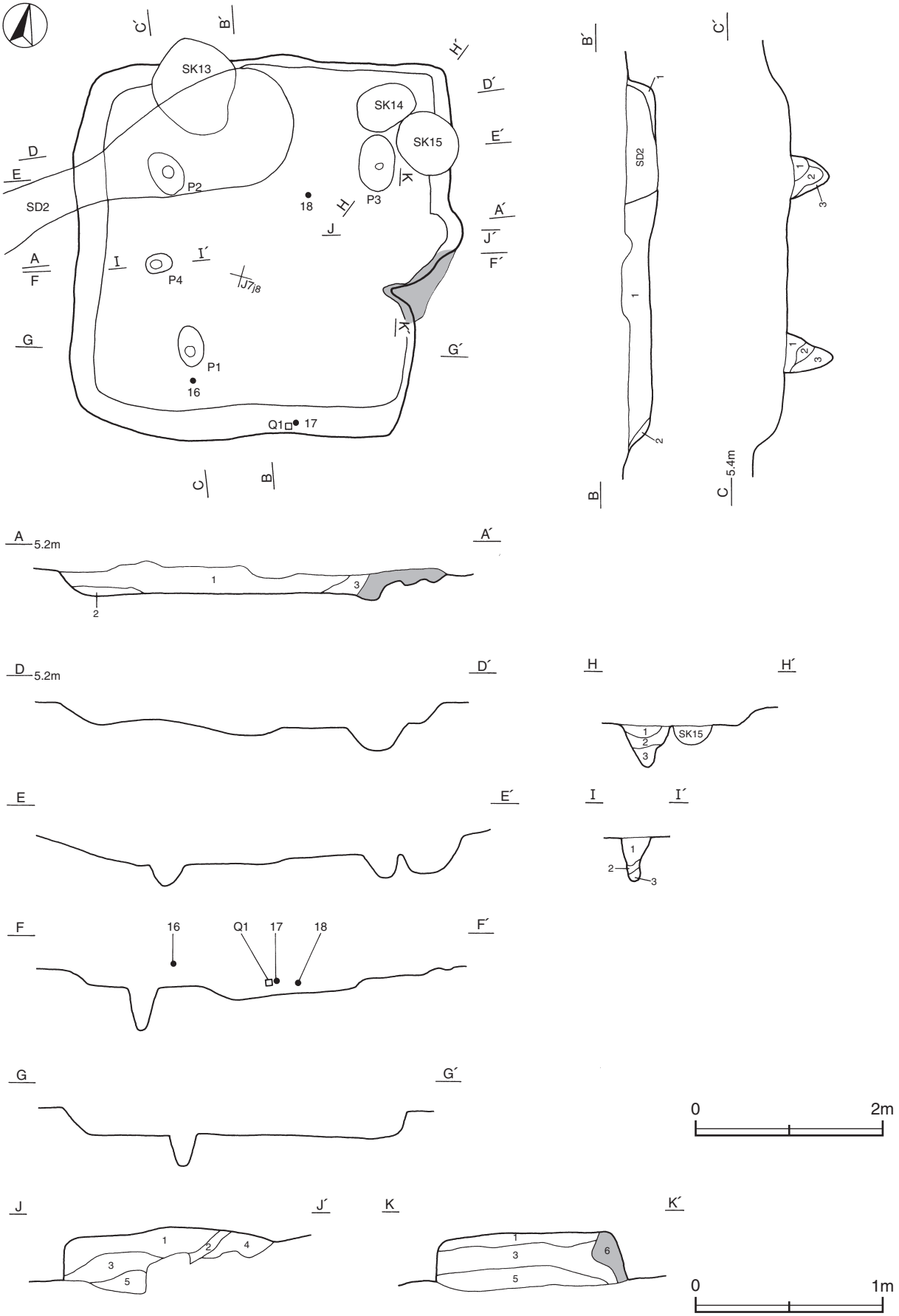
第２号住居跡（第166・167図）

位置　Ｊ７i8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第２号溝，第13～15号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.1m，短軸4.0mの竈を挟んで壁が食い違っている長方形で，主軸方向はＮ－79°－Ｅである。壁高は20～28㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。



第166図　第２号住居跡実測図

竈　東壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで91㎝で，右袖部しか遺存しておらず袖部幅は不明である。右袖部は壁外に掘り込んで粘土を充填し，床面と同じ高さの地山面を基部として，ロームブロック・凝灰岩ブロックを混ぜ込んだ粘土で構築している。火床部から煙道部の立ち上がりは地山を掘り残すように凹凸があり，火床部は弱く赤変している。煙道部は壁外に20～55㎝掘り込まれ，外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒　色	炭化物微量	
2	黒　色	焼土ブロック・灰白色砂微量	
3	黒　色	焼土粒子少量，炭化粒子微量	
4	黒　色	焼土粒子・灰白色砂微量	
5	黒　色	炭化粒子・灰白色砂微量	
6	灰　褐　色	ロームブロック・凝灰岩ブロック少量	

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ30～50㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ４は深さ50㎝で，西壁寄りの中央部に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	灰白色砂微量
2	黒　色	灰白色砂・黄色砂微量
3	黒　色	灰白色砂多量

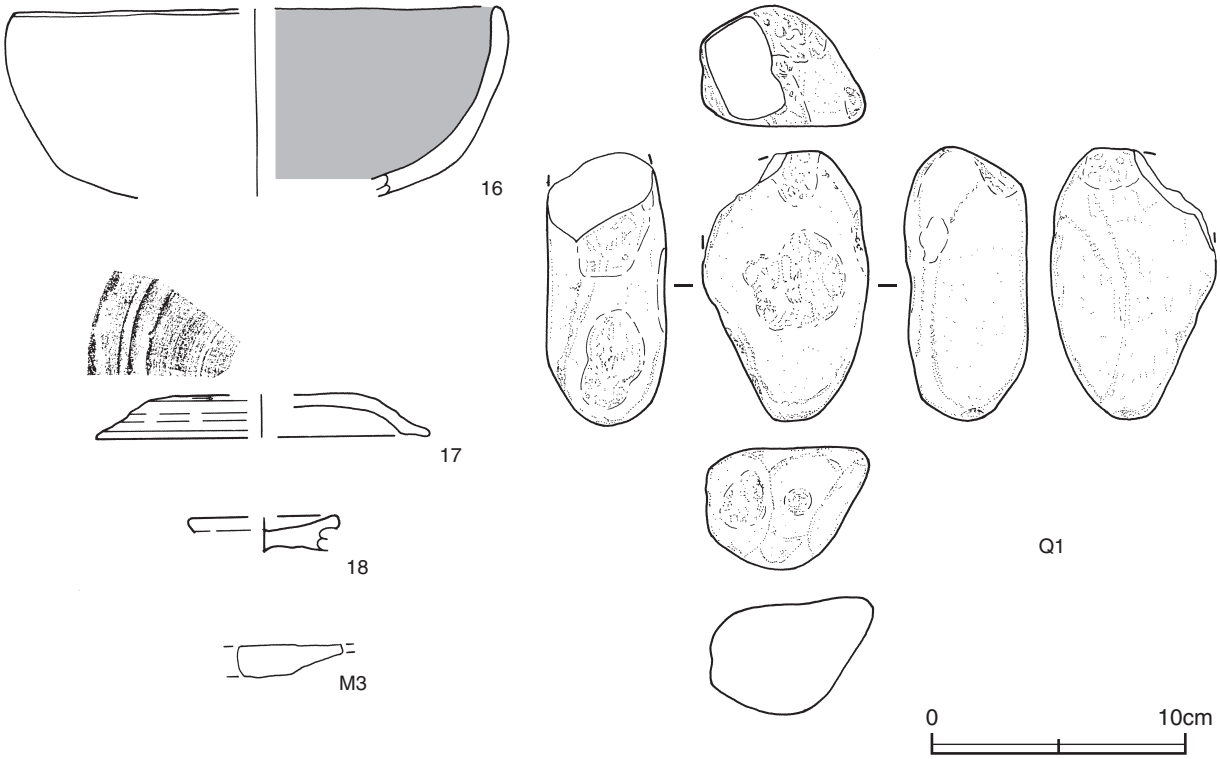
覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒　色	灰白色砂微量
2	黒　色	灰白砂・黄色砂微量
3	黒　色	焼土ブロック・炭化粒子・灰白色砂微量

遺物出土状況　土師器片394点（坏・鉢59，甕335），須恵器片15点（坏・高台付坏７，蓋３，甕５），石器１点（敲石），鉄製品２点（刀子，不明）が出土している。また，混入した陶磁器片18点も出土している。ほぼ全域の覆土中からまばらに出土している。16は南壁寄りの覆土上層，17・Ｑ１は南壁際の覆土下層から，近接して出土している。18は竈前方の覆土下層，Ｍ３は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器が破片であり時期を明確にするのは困難であるが，８世紀前半と考えられる。



第167図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第167図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
16	土師器	鉢	[19.0]	(7.4)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き	覆土上層	10%
17	須恵器	蓋	[13.2]	(1.6)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	暗灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り調整	覆土下層	5%
18	須恵器	蓋	－	(1.4)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白	普通	ロクロナデ	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q１	敲石	10.8	6.5	4.8	(473.0)	安山岩	６面使用	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M３	刀子	(4.2)	1.2	0.2	(2.2)	鉄	片関　両端欠損	覆土中	

表22　奈良時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長(東西)軸× 短(南北)軸	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備　考 新旧関係(旧→新)
								主柱穴	出入口ピット	ピット	竈				
1	J７e0	N－26°－W	長方形	5.8×5.2	23～43	平坦	－	4	1	1	北	人為ヵ	土師器　須恵器 製塩土器　刀子　釘 不明鉄製品	８世紀 前葉	SK20→本跡
2	J７i8	N－79°－E	長方形	4.1×4.0	20～28	平坦	－	3	1	－	東	自然	土師器　須恵器　敲石 刀子　不明鉄製品	８世紀 前半	本跡→SD2，SK13～15

（2）掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第168図）

位置　Ｊ７g8～Ｊ７h9区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第19号土坑に掘り込まれている。

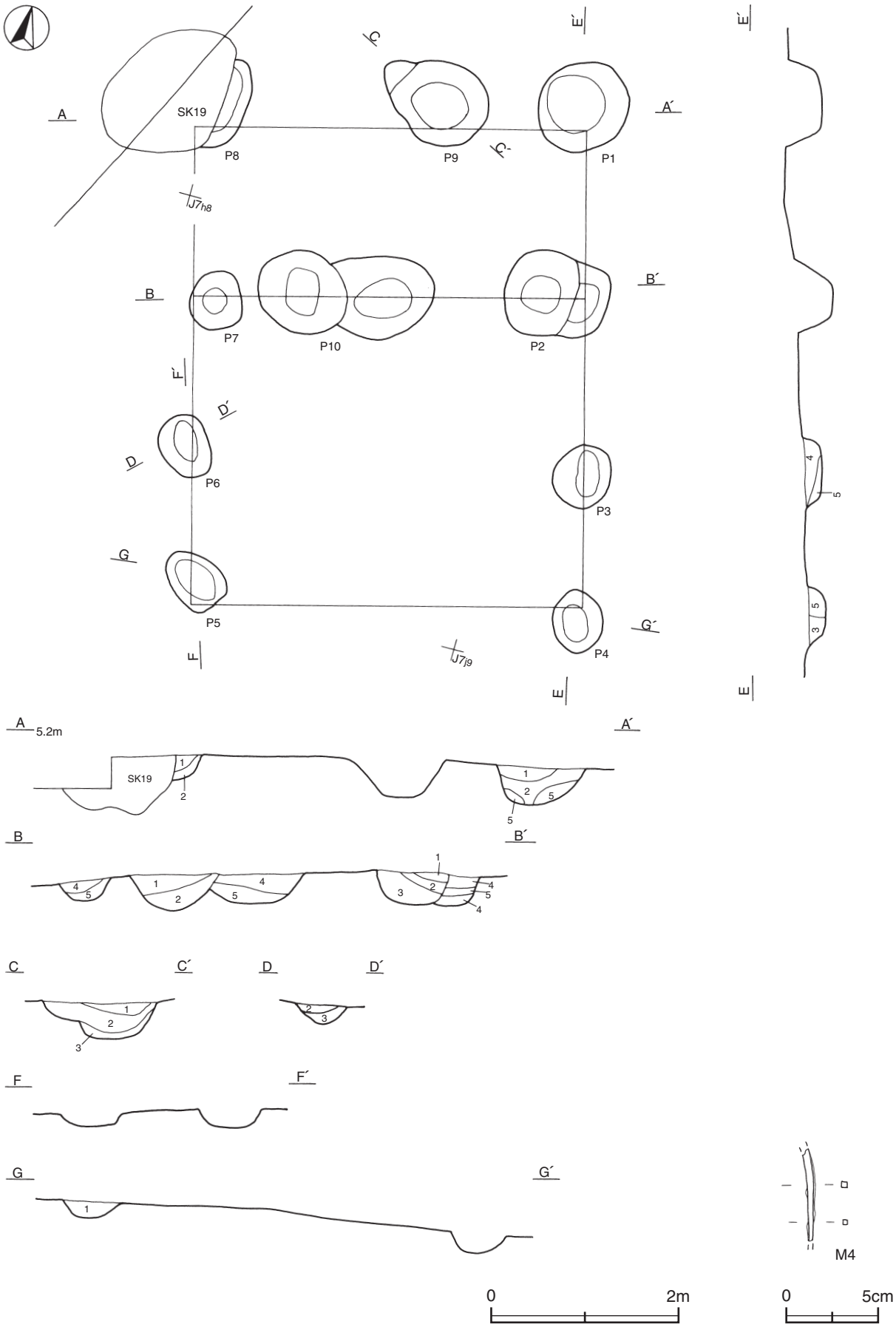
規模と構造　桁行３間，梁行２間の間仕切りを有する側柱建物跡で，桁行方向N－13°－Wの南北棟である。規模は，桁行5.1m（17尺），梁行4.2m（14尺）で，柱間寸法は，桁行が北から1.8m（６尺），1.8m（６尺），1.5m（５尺）で，梁行は2.1m（７尺）を基調としている。

柱穴　10か所。南側桁行の中央の柱穴が確認されていない。Ｐ10はＰ２・Ｐ７の間にあり，間仕切り柱を据える柱穴と考えられる。平面形は円形・楕円形で，深さは18～45cmである。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土で，Ｐ２・Ｐ９・Ｐ10には柱の抜き取り穴が確認されている。その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）
１　黒　　色　灰白色砂微量
２　黒　　色　灰白色砂少量
３　黒　　色　灰白色砂中量
４　灰　白　色　黒色砂多量，炭化粒子微量
５　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片76点（坏・鉢12，甕64），須恵器片３点（甕），鉄製品１点（釘）が出土している。Ｍ４はＰ７の覆土中から出土している。土器はいずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，主軸方向及び配置から第１号住居跡と同じ８世紀前葉と考えられる。



第168図　第１号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第168図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
M４	釘	(4.9)	0.4	0.4	(2.4)	鉄	両端欠損	Ｐ７ 覆土中	

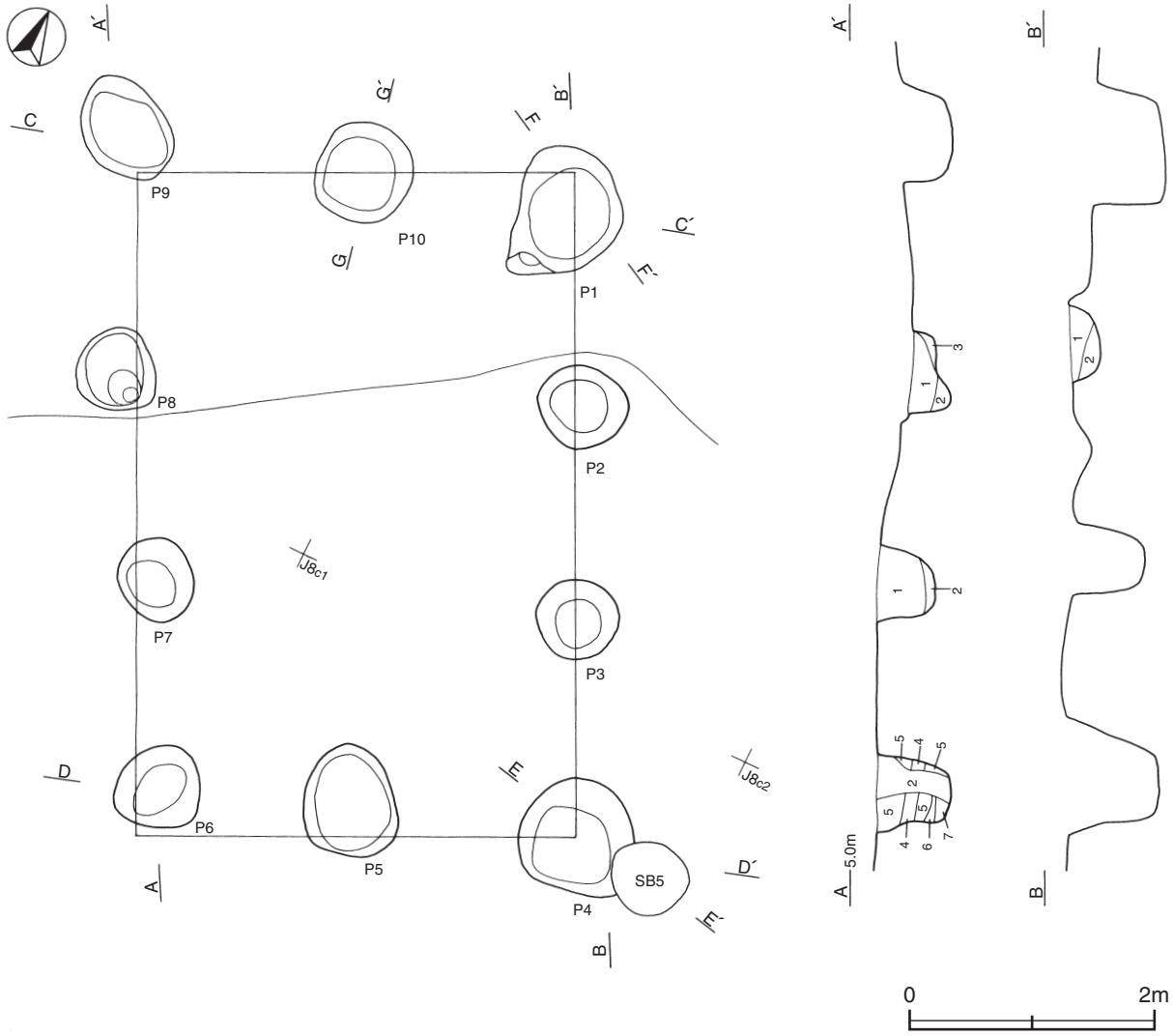
第３号掘立柱建物跡（第169～171図）

位置　Ｊ７b0～Ｊ８c1区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

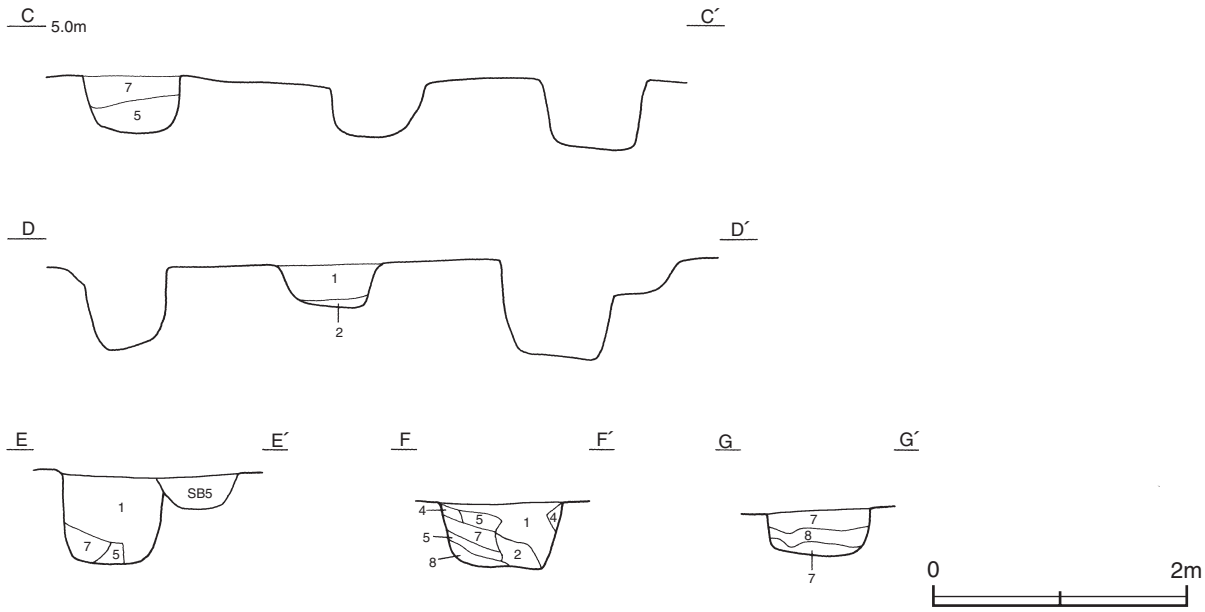
重複関係　第25号土坑を掘り込み，第５号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－25°－Ｗの南北棟である。規模は，桁行5.4m（18尺），梁行3.6m（12尺）で，柱間寸法は，桁行・梁行ともに1.8m（６尺）を基調としている。

柱穴　10か所。平面形は円形・楕円形で，深さは25～72㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。



第169図　第３号掘立柱建物跡実測図(1)



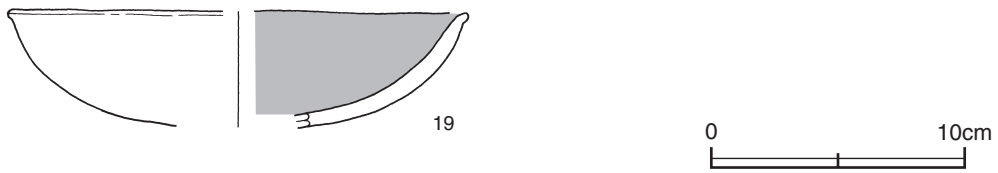
第170図　第３号掘立柱建物跡実測図(2)

土層解説（各ピット共通）

1	黒		色		5	黒	色　灰白色砂多量
2	灰	白	色	黒色砂少量	6	灰	白　色
3	灰	白	色	黒色砂微量	7	黒	色　灰白色砂中量
4	黒		色	灰白色砂少量	8	灰	白　色　黒色砂多量

遺物出土状況　土師器片15点（坏・鉢３，甕12），須恵器片３点（坏・高台付坏）が出土している。19はＰ２の埋土中から出土している。

所見　時期は，主軸方向及び配置から第１号住居跡と同じ８世紀前葉と考えられる。



第171図　第３号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第３号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第171図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
19	土師器	坏	[18.0]	(4.6)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	黄橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ナデ　内面ヘラ磨き	Ｐ２ 埋土中	25%

第５号掘立柱建物跡（第172図）

位置　Ｊ８c1・Ｊ８d1区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第３号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造　ほとんどが調査区域外に延びているため，東西南北ともに１間が確認されただけである。南北軸Ｎ－25°－Ｗであり，構造は不明である。確認された柱間寸法は，1.8m（６尺）である。

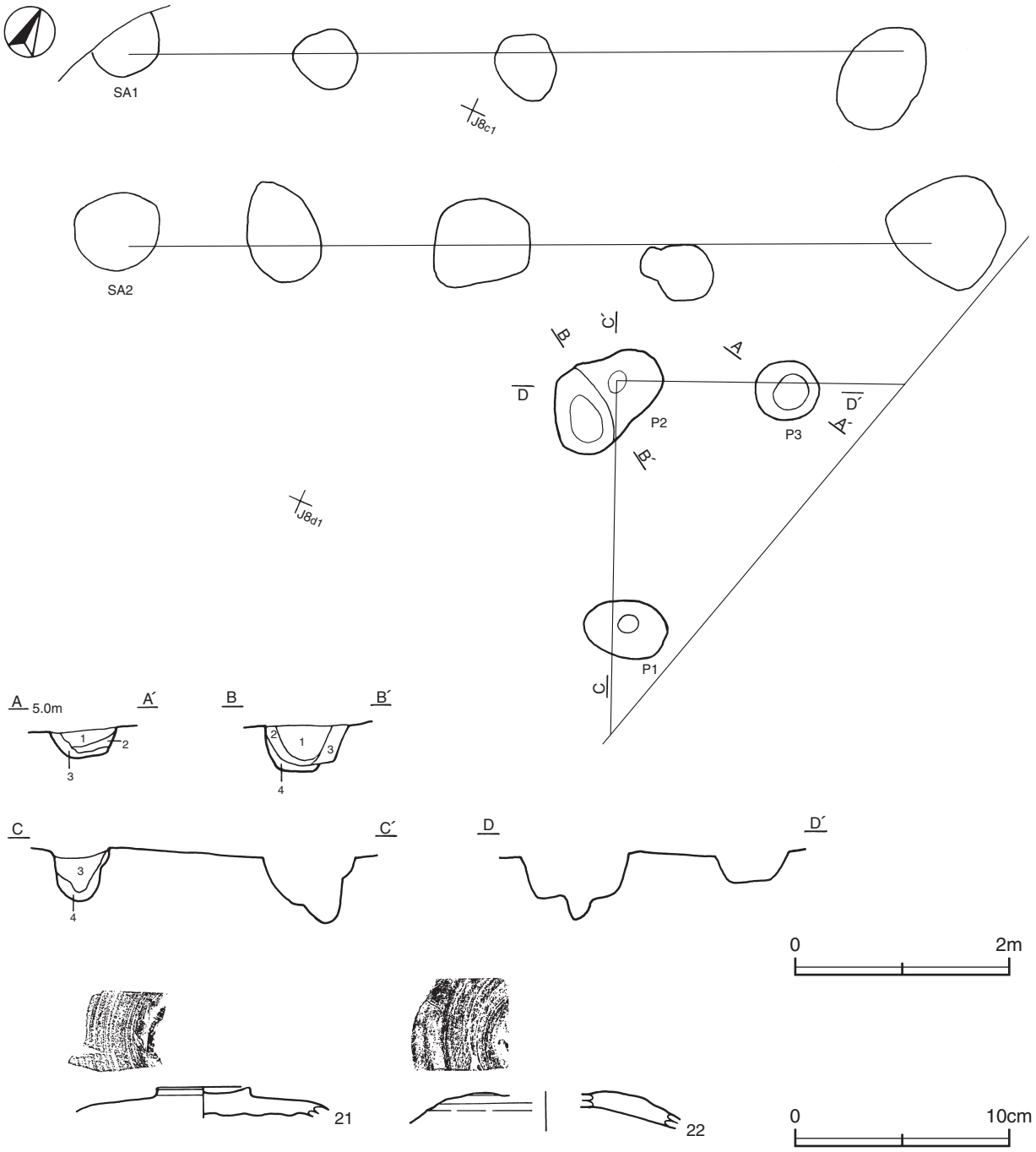
柱穴　３か所。平面形は円形・楕円形で，深さは22～60㎝である。Ｐ２には柱の抜き取り穴が確認されている。土層の第１～４層は柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）

1	黒	色	3	黒	色　灰白色砂多量
2	灰　白	色　黒色砂中量	4	黒	色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片５点（甕），須恵器片１点（蓋）が出土している。21はＰ2，22はＰ１の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，重複関係から第３号掘立柱建物跡以降であるが，主軸方向が同じことや近接して南北に並んでいる配置から，比較的短い時期差と推測される。また，第１・２号柵跡は，本建物に付属するものと考えられる。



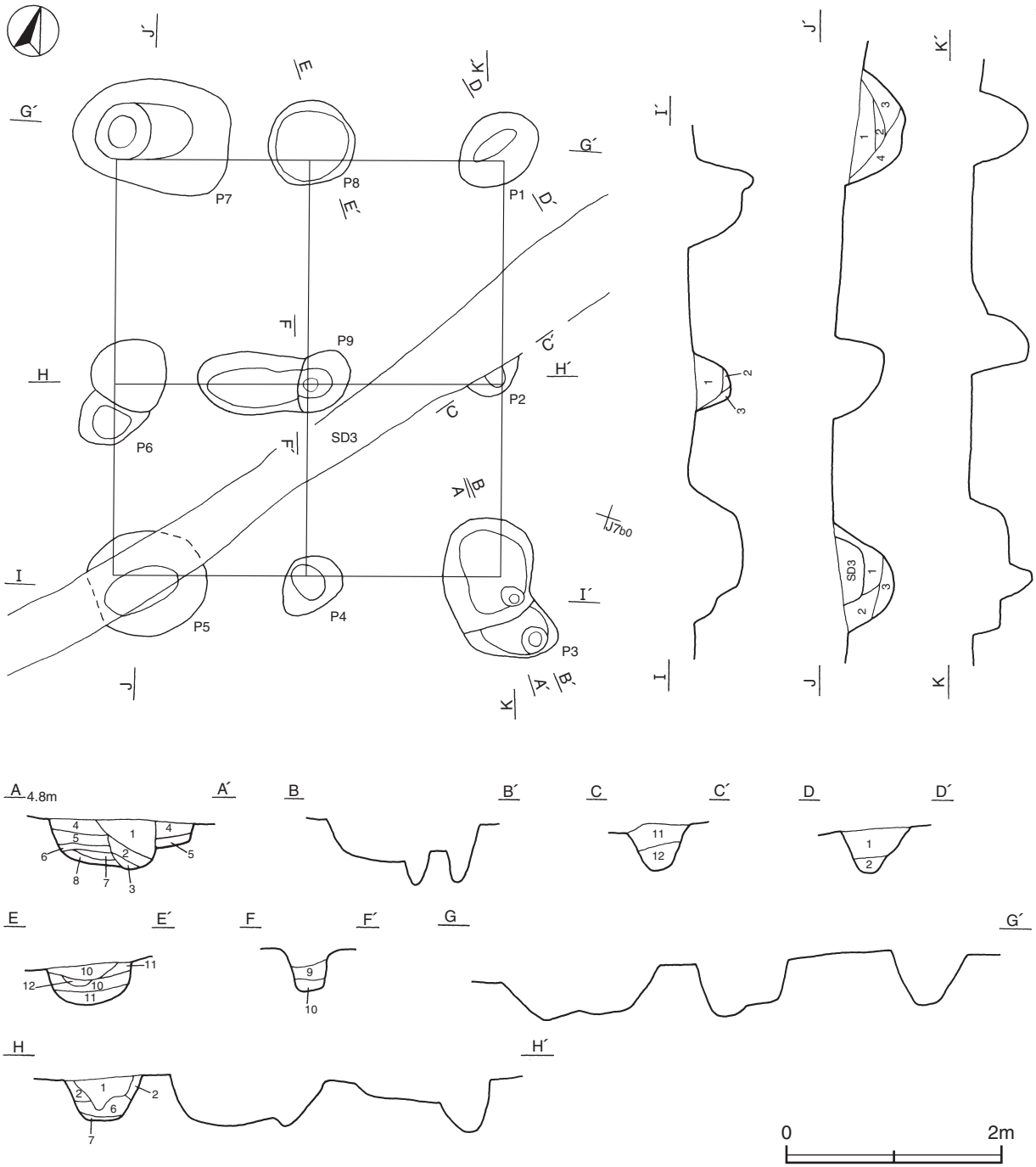
第172図　第５号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第５号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第172図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
21	須恵器	蓋	－	(1.4)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	暗灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り調整	Ｐ２ 覆土中	5%
22	須恵器	蓋	－	(1.8)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り調整	Ｐ１ 覆土中	10%

第６号掘立柱建物跡（第173図）

位置　Ｊ７a8～Ｊ７b9区，標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。



第173図　第６号掘立柱建物跡実測図

重複関係　第３号溝に掘り込まれている。

規模と構造　桁行･梁行ともに２間の総柱建物跡で，桁行方向Ｎ－18°－Ｗの南北棟である。規模は,桁行4.2m（14尺），3.6m（12尺）で，柱間寸法は，桁行が2.1m（７尺），梁行は1.8m（６尺）を基調としている。

柱穴　９か所。平面形は円形・楕円形を基調とし，Ｐ９は溝状で，深さは32～50㎝である。土層は第１～４層が柱を抜き取った後の覆土で，Ｐ６・Ｐ７には柱の抜き取り穴が確認されている。Ｐ３は土層から柱の据え直しが考えられる。その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1　黒　　色
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂中量
4　黒　　色　灰白色砂少量
5　灰　白　色　黒色砂多量，炭化粒子微量
6　黒　　色　灰白色砂多量
7　灰　白　色　黒色砂多量
8　灰　白　色
9　褐　白　色　焼土ブロック微量
10　褐　白　色　焼土ブロック少量
11　褐　白　色　黒色砂・灰白色砂多量
12　褐　白　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片77点（坏12，甕65），須恵器片６点（坏･高台付坏４，甕２）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　時期は，主軸方向及び配置から第１号住居跡と同じ８世紀前葉と考えられる。

表23　奈良時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行(南北)方向	柱間数 桁行×梁行(間)	構造	柱穴			主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
					柱穴数	平面形	深さ(㎝)			
1	Ｊ7ｇ8～Ｊ7ｈ9	Ｎ－13°－Ｗ	３×２	側柱　南北棟	10	円形・楕円形	18～45	土師器　須恵器　釘	８世紀前葉	本跡→SK19
3	Ｊ7ｂ0～Ｊ8ｃ1	Ｎ－25°－Ｗ	３×２	側柱　南北棟	10	円形・楕円形	25～72	土師器　須恵器	８世紀前葉	SK25→本跡→SB5
5	Ｊ8ｃ1・Ｊ8ｄ1	Ｎ－25°－Ｗ	（１）×（１）	不明	3	円形・楕円形	22～60	土師器　須恵器	８世紀前葉以降	SB3→本跡
6	Ｊ7ａ8～Ｊ7ｂ9	Ｎ－18°－Ｗ	２×２	総柱　南北棟	9	円形・楕円形	32～50	土師器　須恵器	８世紀前葉	本跡→SD3

（3）柵跡

第１号柵跡（SB4）（第174図）

位置　Ｊ７c0～Ｊ８b1区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第10号ピットを掘り込んでいる。

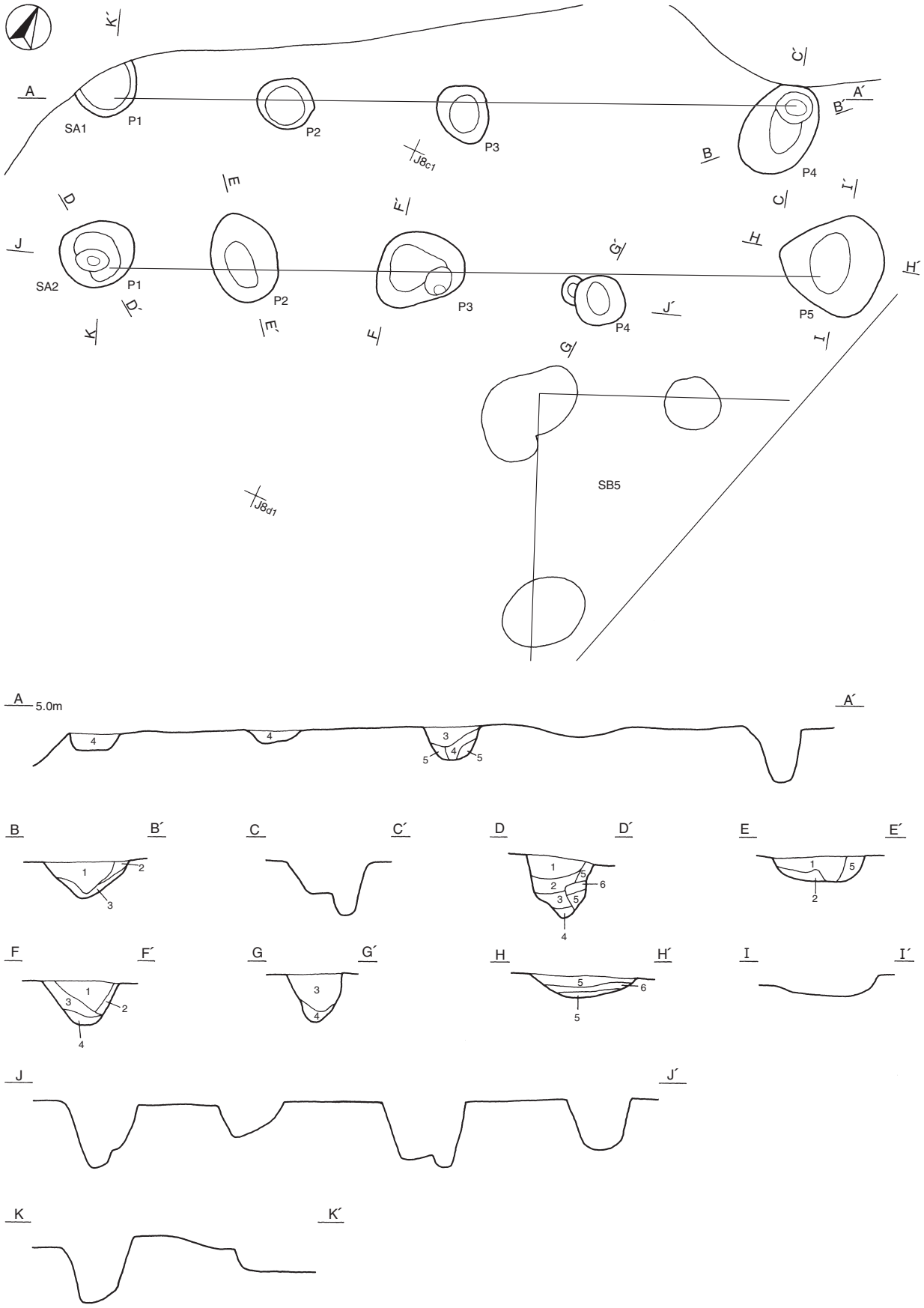
規模と構造　柱穴が直線的に北東方向（Ｎ－66°－Ｅ）に並んでおり，全長7.2m（24尺）である。柱間寸法は，1.8m（６尺）を基調とし，Ｐ３･Ｐ４間は柱穴が確認されておらず，これらの柱穴間は3.6m（12尺）である。

柱穴　４か所。平面形は楕円形・隅丸長方形で，深さは11～60㎝である。土層は第１～４層が柱を抜き取った後の覆土で，Ｐ４には柱の抜き取り穴が確認されている。その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1　黒　　色
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　灰　白　色　黒色砂少量
4　黒　　色　黄色砂少量，焼土ブロック微量
5　灰　白　色　黒色砂多量

所見　配置から第５号掘立柱建物に付属するものと考えられ，第１号住居跡及び第３号掘立柱建物跡より新しいが，比較的短い時期差と推測される。



第174図　第１・２号柵跡実測図

第２号柵跡（SB4）（第174図）

位置　Ｊ７c0～Ｊ８b2区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と構造　柱穴が直線的に北東方向（Ｎ－66°－Ｅ）に並んでおり，全長7.5m（25尺）である。柱間寸法は西端から1.5m（５尺），2.1m（７尺），1.5m（５尺），2.4m（８尺）である。

柱穴　５か所。平面形は楕円形で，深さは23～70㎝である。土層は第１～４層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　灰　白　色　黒色砂少量
4　黒　　色　黄色砂少量
5　黒　　色　灰白色砂多量
6　灰　白　色　黒色砂多量

所見　第１号柵跡と同じ配置から，第５号掘立柱建物に付属するものと考えられる。第１号柵跡と二列に構築されていたものか，あるいは柱間寸法の違いから，多少の時期差があるものか両方の可能性が考えられる。

表24　奈良時代の柵跡一覧表

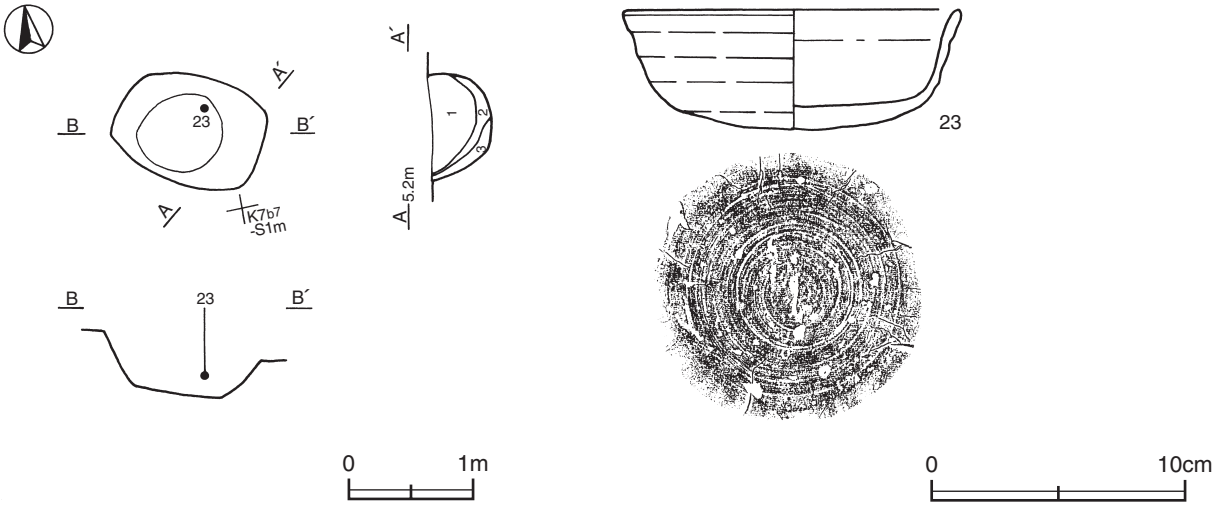
番号	位 置	南北軸方向	柱間寸法（m）	付属施設	柱穴			主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
					柱穴数	平面形	深さ(㎝)			
1	Ｊ7c0～Ｊ8b1	Ｎ－66°－Ｅ	1.8(Ｐ3・Ｐ4間のみ3.6)	SB5	4	楕円形 隅丸長方形	11～60	－	8世紀前葉以降	Pit10→本跡
2	Ｊ7c0～Ｊ8b2	Ｎ－66°－Ｅ	Ｐ1・Ｐ2　1.5 Ｐ2・Ｐ3　2.1 Ｐ3・Ｐ4　1.5 Ｐ4・Ｐ5　2.4	SB5	5	楕円形	23～70	－	8世紀前葉以降	

(4) 土坑

第２号土坑（第175図）

位置　Ｋ７b6区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第４号住居跡を掘り込んでいる。



第175図　第２号土坑・出土遺物実測図

規模と形状　長径1.2m，短径0.9mの楕円形で，長径方向はN－57°－Wである。深さは55cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片４点（甕），須恵器片３点（坏）が出土している。23は壁際の覆土下層から斜位で出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀前葉と考えられる。

第２号土坑出土遺物観察表（第175図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
23	須恵器	坏	13.2	4.7	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	淡黄	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土下層	60% PL24

第27号土坑（第176図）

位置　Ⅰ７j0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

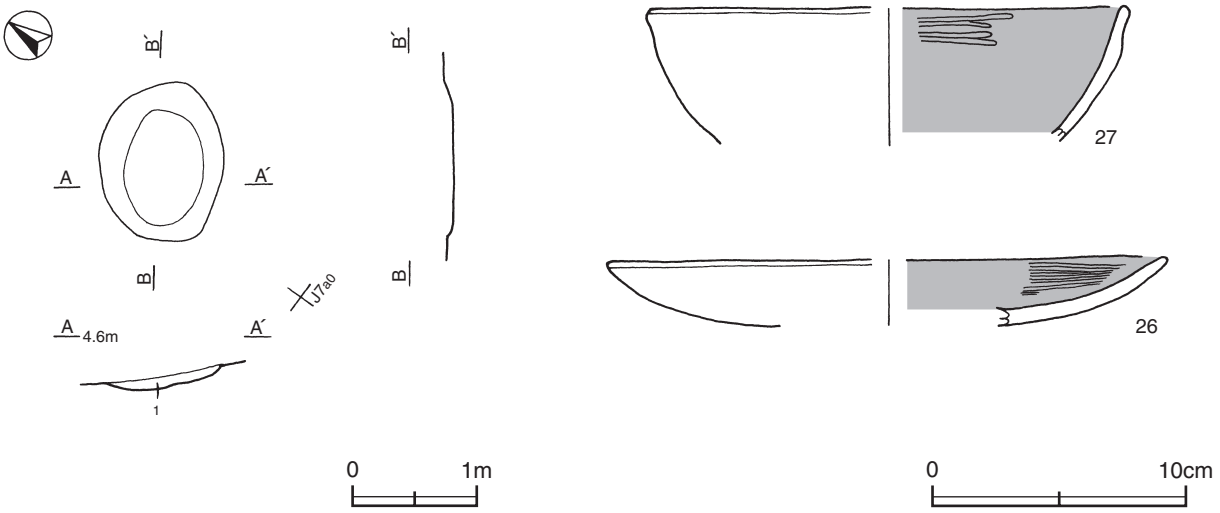
規模と形状　長径1.3m，短径1.0mの楕円形で，長径方向はN－56°－Eである。深さは７cmで，底面はほぼ平坦で，壁の立ち上がりは不明瞭である。

覆土　単一層である。層厚が薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片14点（坏・鉢13，皿１）が出土している。26・27は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀代と考えられる。



第176図　第27号土坑・出土遺物実測図

第27号土坑出土遺物観察表（第176図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
26	土師器	Ⅲ	[22.1]	(2.5)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ナデ　内面ヘラ磨き	覆土中	20%
27	土師器	鉢	[18.8]	(5.7)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	5%

表25　奈良時代の土坑一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係 (旧→新)
2	K 7 b6	N－57°－W	楕円形	1.2×0.9	55	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	8 世紀前葉	SI4→本跡
27	I 7 j0	N－56°－E	楕円形	1.3×1.0	7	不明瞭	平坦	不明	土師器	8 世紀代	

3　近世の遺構と遺物

溝跡３条が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

溝跡

第３号溝跡（第158・177図）

位置　Ⅰ７j0～Ｊ７c8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第６号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

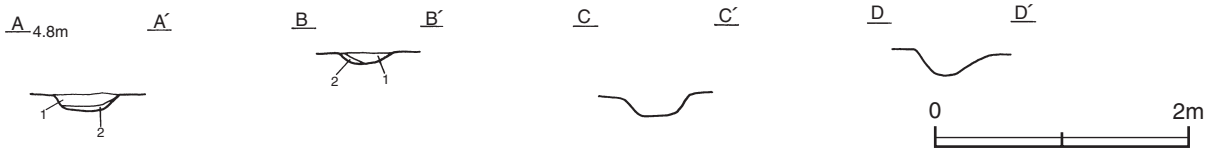
規模と形状　全長16.8m，上幅42～83cm，下幅21～34cm，深さ８～19cmで，北東方向（N－39°－E）に直線的に延びている。底面はほぼ平坦で，高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量　　2　黒　　色　黄色砂少量

遺物出土状況　土師器片32点（坏４，甕28），須恵器片３点（坏･高台付坏）が出土している。いずれも摩滅していることから，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，第５号溝跡と形状が類似し，走行方向も同じであることから近世と考えられる。



第177図　第３号溝跡実測図

第４号溝跡（第158・178図）

位置　Ⅰ８h2～Ｊ７a8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

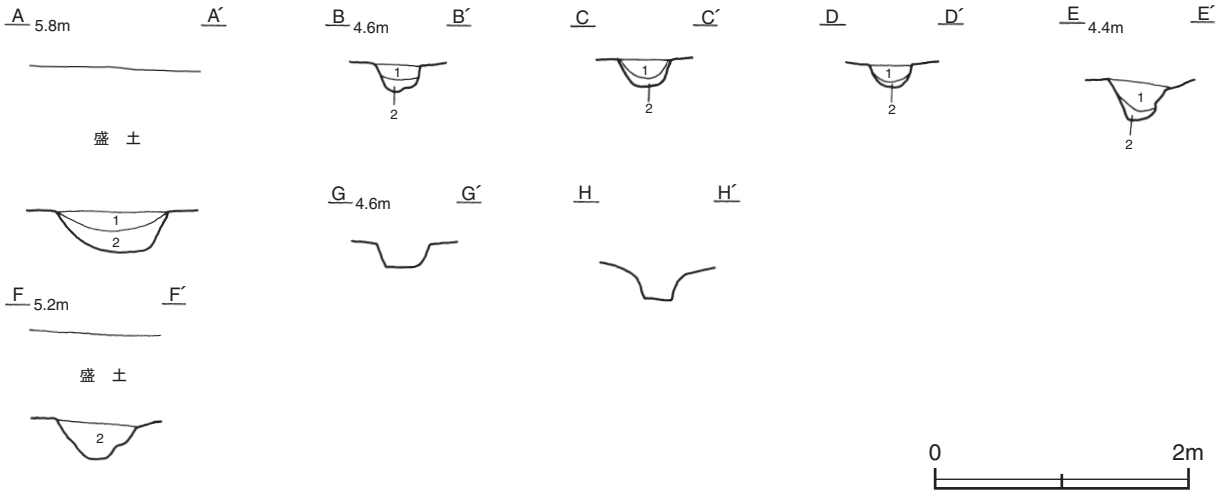
規模と形状　北東方向（N－59°－E）に直線的に延びており，両端が調査区域外にさらに続いている。確認された長さは20.1mで，上幅40～78㎝，下幅15～30㎝，深さ17～30㎝である。底面はほぼ平坦で，高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量　　2　黒　　色　黄色砂多量

遺物出土状況　土師器片291点（坏24，甕267），須恵器片３点（坏･高台付坏ヵ）が出土している。これらは摩滅していることから，流れ込んだものと考えられる。

所見　第５号溝跡と形状がほぼ同じで，走行方向もほぼ一致していることから，近世と考えられる。



第178図　第４号溝跡実測図

第５号溝跡（第158・179・180図）

位置　Ⅰ８g3～Ⅰ８h1区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

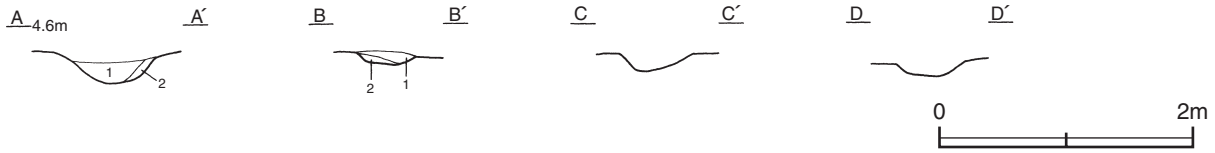
規模と形状　全長8.0m，上幅28～65㎝，下幅13～41㎝，深さ９～18㎝で，北東方向（N－57°－E）に直線的に延びている。底面はほぼ平坦で，高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

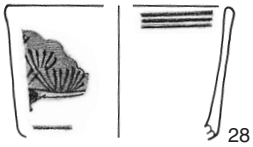
土層解説
1　黒　　色　炭化物・黄色砂微量　　2　黒　　色　黄色砂微量

遺物出土状況　陶器片６点（碗），磁器片２点（碗）が出土している。また，磨滅しており流れ込んだものと考えられる土師器片14点，須恵器片２点が出土している。28は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から近世と考えられる。



第179図　第５号溝跡実測図



第180図　第５号溝跡出土遺物実測図

第５号溝跡出土遺物観察表（第180図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土 色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	陶器	猪口	[8.6]	(5.2)	－	緻密 白	良好	染め付け青	覆土中	5%

表26　近世溝跡一覧表

番号	位置	走行方向	形状	規模				覆土	底面	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
3	Ｉ７j0～Ｊ７c8	Ｎ－39°－Ｅ	直線	16.8	42～83	21～34	8～19	自然	平坦	土師器　須恵器	近世	SB6→本跡
4	Ｉ８h2～Ｊ７a8	Ｎ－59°－Ｅ	直線	(20.1)	40～78	15～30	17～30	自然	平坦	土師器　須恵器	近世	
5	Ｉ８g3～Ｉ８h１	Ｎ－57°－Ｅ	直線	(8.0)	28～65	13～41	9～18	自然	平坦	陶器　磁器	近世	

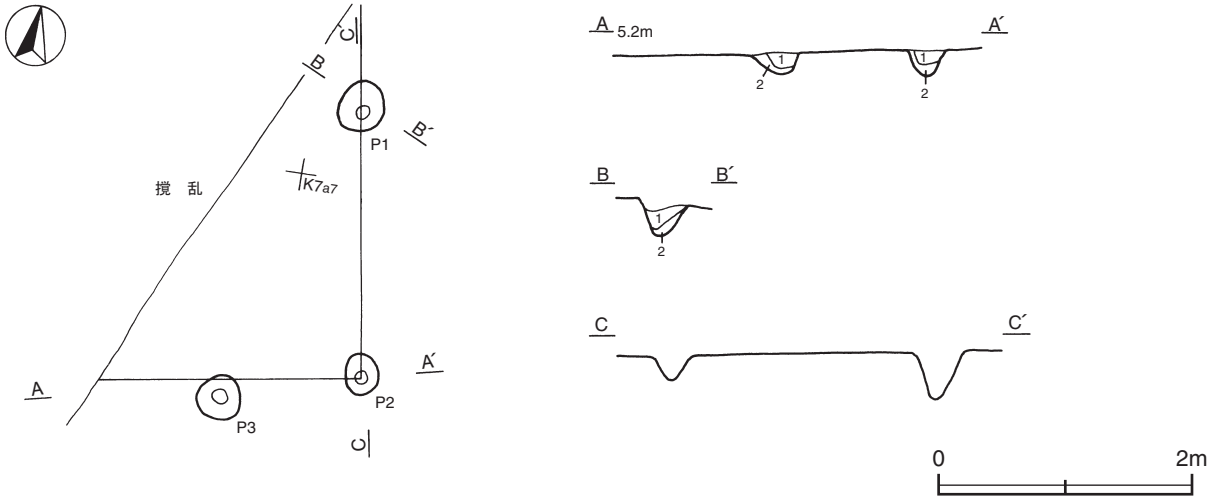
4　その他の遺構と遺物

掘立柱建物跡１棟，溝跡２条，土坑27基，ピット17基，整地面１か所が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡（第181図）

位置　Ｊ７j7～Ｋ７a7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。



第181図　第２号掘立柱建物跡実測図

規模と構造　ほとんどが削平されているため，東西南北ともに１間が確認されただけである。南北軸Ｎ－８°－Ｗで，構造は不明である。確認された柱間寸法は，Ｐ１・Ｐ２間が2.1m（７尺），Ｐ２・Ｐ３間は1.2m（４尺）である。

柱穴　３か所。平面形は円形で，深さは16～20㎝である。土層の第１・２層は柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
１　黒　　色　灰白色砂少量　　２　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，柱穴の掘り方の規模などから中世以降と推測されるが，出土土器及び重複がないため明確でない。

（2）溝跡

第１号溝跡（第158・182図）

位置　Ｊ７e9～Ｊ７g8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

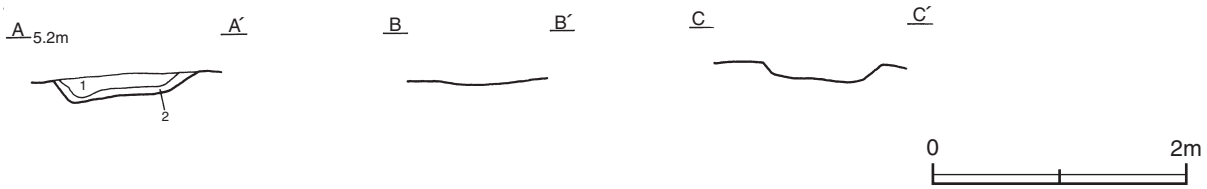
規模と形状　西側が削平されているため，長さ7.5mのみ北東方向（Ｎ－54°－Ｅ）に直線的に確認されている。上幅67～123㎝，下幅35～78㎝，深さ３～16㎝で，底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
１　黒　　色　灰白色砂少量　　２　灰　白　色　黒色砂中量

遺物出土状況　土師器片12点（甕）が出土している。いずれも摩滅していることから，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，不明である。



第182図　第１号溝跡実測図

第２号溝跡（第158・183図）

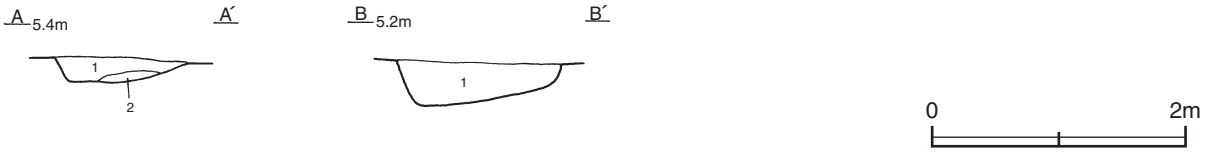
位置　Ｊ７i8～Ｊ７j7区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　西側が削平されているため，長さ3.8mのみ北東方向（Ｎ－52°－Ｅ）に直線的に確認されている。上幅40～125㎝，下幅10～85㎝，深さ20～34㎝で，底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　　2　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，不明である。



第183図　第２号溝跡実測図

表27　その他の溝跡一覧表

番号	位 置	方向	形状	規　模				覆土	底面	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
1	J７e9～J７g8	N－54°－E	直線	(7.5)	67～123	35～78	３～16	自然	平坦	土師器	不明	
2	J７i8～J７j7	N－52°－E	直線	(3.8)	40～125	10～85	20～34	自然	平坦	－	不明	

(3) 土坑

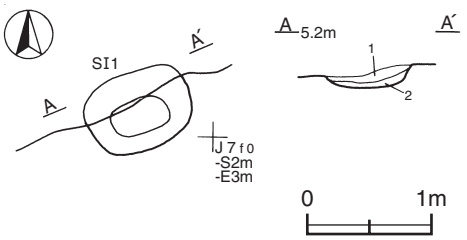
奈良時代の遺構との重複関係がそれらより古いもの及び時期を明確にできないものの，古代の範疇に入る土坑３基について記述する。その他については実測図（第187・188図）と土層解説を掲載する。

第20号土坑（第184図）

位置　Ｊ７f0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第１号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長径0.8m，短径0.6mの楕円形で，長径方向はＮ－65°－Ｅである。深さは13cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。



第184図　第20号土坑実測図

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入している堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色
2　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，重複関係から８世紀前葉以前であるが明確でない。

第23号土坑（第185図）

位置　Ｊ７b8区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第22号土坑に掘り込まれている。

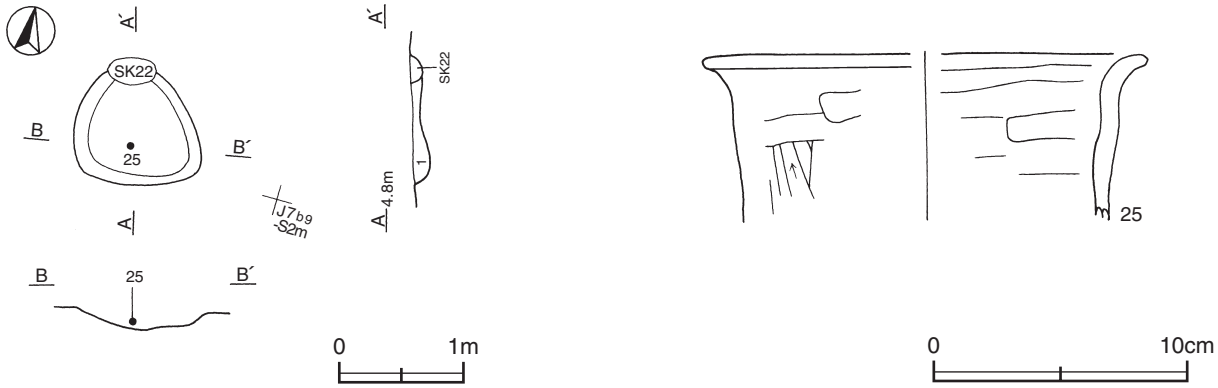
規模と形状　長径1.1m，短径1.0mの楕円形で，長径方向はN－15°－Wである。深さは13cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　単一層である。周囲にない粒径の大きい砂が堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　灰　色　黒色砂多量

遺物出土状況　土師器片12点（坏２，甕10）が出土している。坏は細片で，図示することができない。25は底面からわずかに浮いた位置から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀代と考えられるが明確でない。



第185図　第23号土坑・出土遺物実測図

第23号土坑出土遺物観察表（第185図）

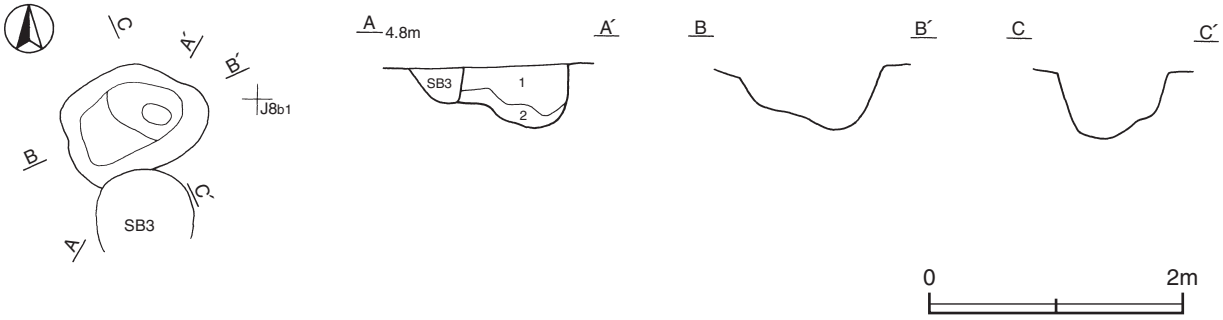
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
25	土師器	甕	[17.0]	(6.6)	－	白色粒子・透明粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ・ナデ	覆土下層	5%

第25号土坑（第186図）

位置　Ｊ７b0区，標高5.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第３号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　長径1.2m，短径0.8mの楕円形で，長径方向はN－66°－Eである。深さは52cmで，底面はほぼ平坦で，壁はほぼ直立している。

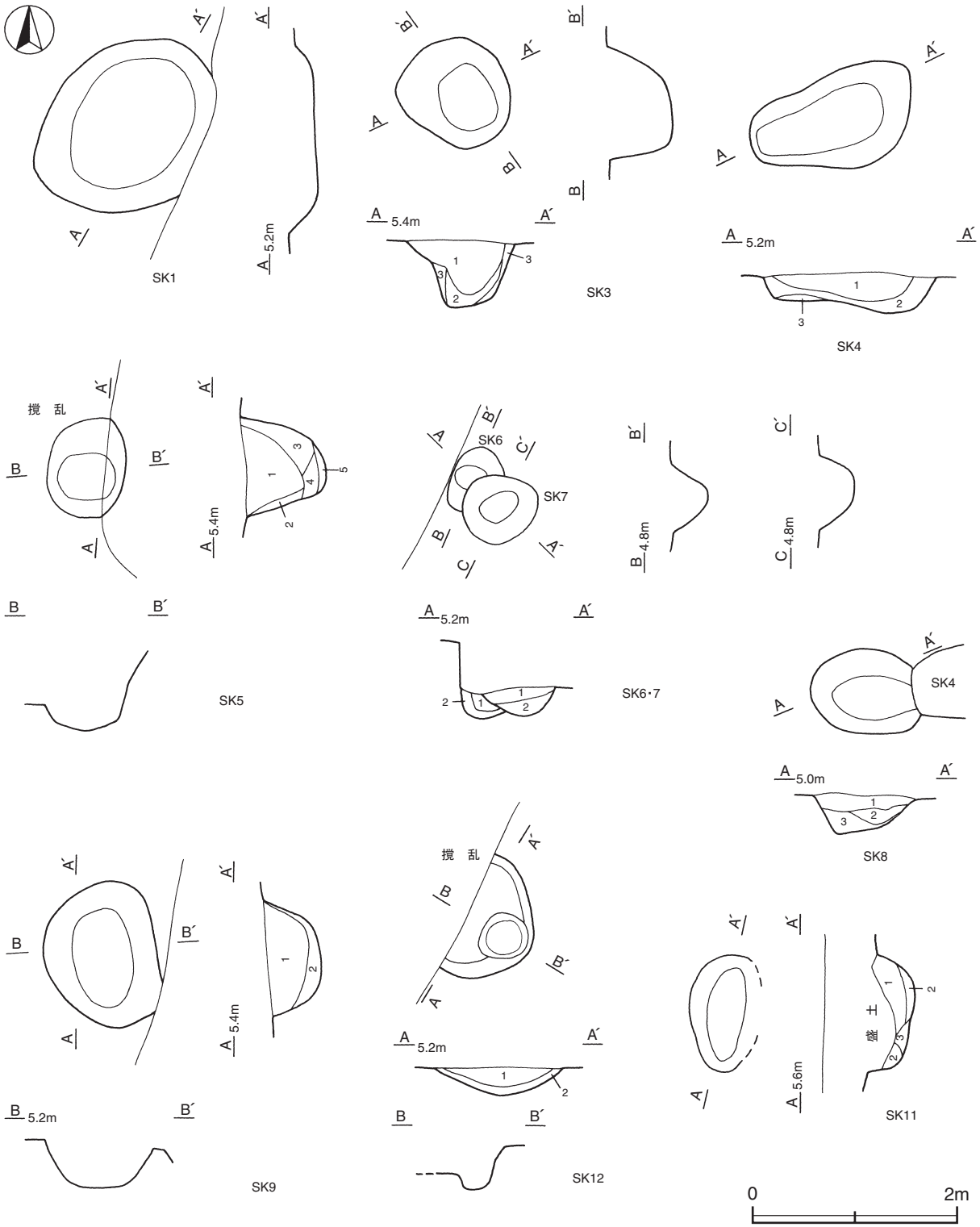


第186図　第25号土坑実測図

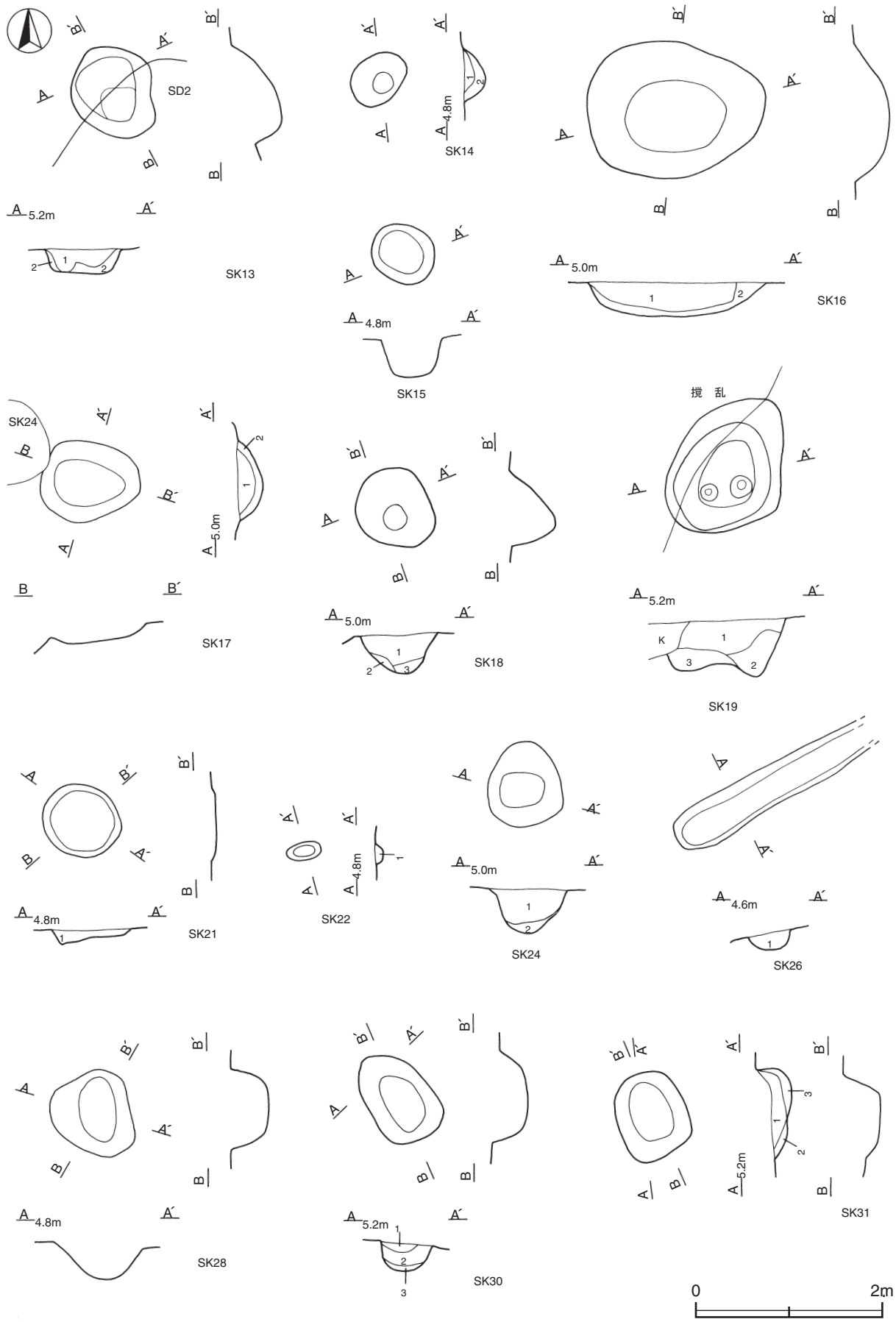
覆土　2層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量　　2　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，重複関係から8世紀前葉以前であるが明確でない。



第187図　その他の土坑実測図(1)



第188図　その他の土坑実測図(2)

第３号土坑土層解説
1　黒　　色
2　黒　　色　灰白砂少量
3　黒　　色　灰白砂多量

第４号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂中量
3　灰　白　色　黒色砂少量

第５号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂少量
3　灰　白　色　黒色砂多量
4　黒　　色
5　灰　白　色　黒色砂微量

第６号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量

第７号土坑土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂微量

第８号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　灰　白　色　黒色砂中量

第９号土坑土層解説
1　黒　　色
2　灰　白　色　黒色砂中量

第11号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子微量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　灰　白　色　黒色砂少量

第12号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　灰　白　色　黒色砂中量

第13号土坑
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量

第14号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量

第16号土坑土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂微量

第17号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量

第18号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第19号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　灰　白　色　黒色砂少量

第21号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

第22号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第24号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　灰　白　色　黒色砂少量

第26号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第30号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第31号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量
2　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂多量

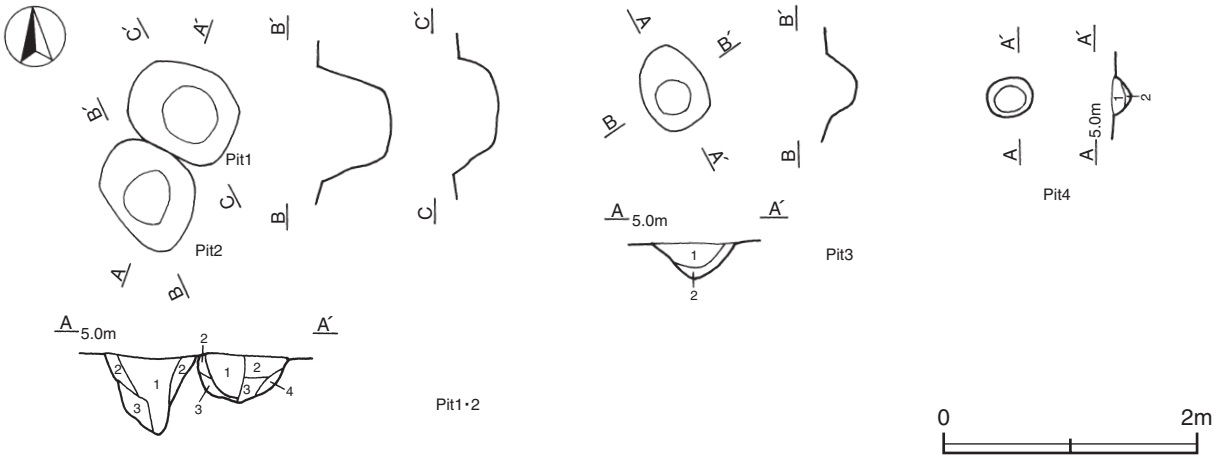
表28　その他の土坑一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係(旧→新)
1	K７b7	N－45°－E	楕円形	1.9×(1.6)	22	外傾	平坦	－	土師器　須恵器	不明	SI3→本跡
3	J７j7	N－53°－W	楕円形	1.1×1.0	65	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	

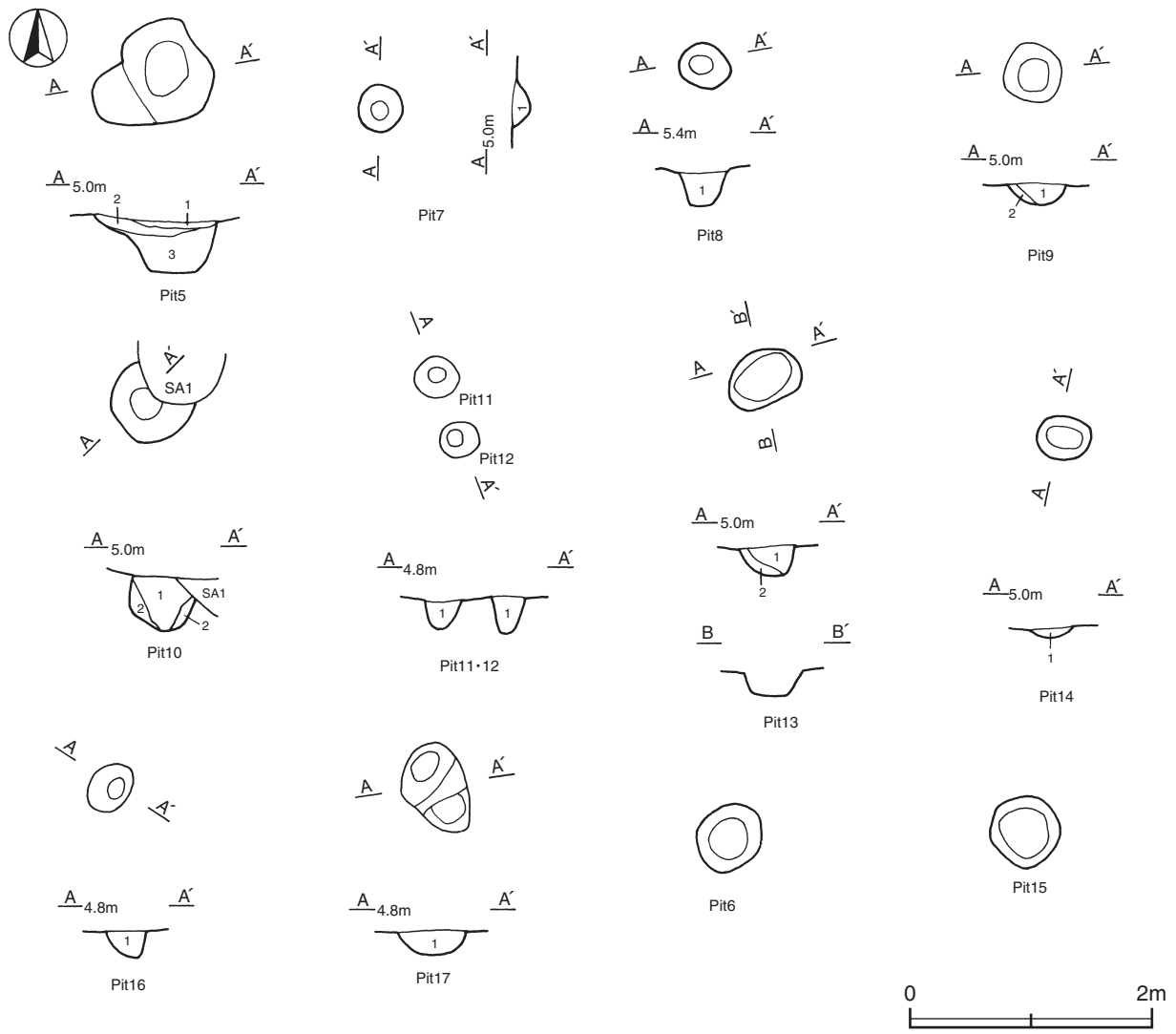
番号	位 置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時 期	備 考 新旧関係(旧→新)
4	K 7 a7	N－72°－E	楕円形	1.7×1.0	40	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SI3・4, SK8→本跡
5	J 7 i7	N－4°－E	[楕円形]	1.0×0.7	77	外傾	平坦	自然	－	不明	
6	J 7 j8	N－46°－W	[楕円形]	(2.2)×(0.6)	23	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	本跡→SK7
7	J 7 j8	N－55°－E	楕円形	0.8×0.7	29	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SK6→本跡
8	K 7 a7	N－75°－W	[楕円形]	(1.0)×0.8	38	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SI4→本跡→SK4
9	K 7 a8	N－4°－W	楕円形	1.4×1.1	52	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SI3→本跡
11	K 7 b9	N－12°－E	[楕円形]	1.1×(0.6)	41	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
12	K 7 a6	N－14°－E	不明	1.2×(0.7)	28	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	
13	J 7 i7	N－35°－W	[楕円形]	1.1×0.9	24	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SI2→本跡→SD2
14	J 7 i8	N－40°－E	楕円形	0.7×0.5	24	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SI2→本跡
15	J 7 i8	N－70°－W	楕円形	0.7×0.6	40	外傾	平坦	－	土師器　須恵器	不明	SI2→本跡
16	J 7 d8	N－79°－E	楕円形	1.9×1.5	37	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
17	J 8 b1	N－50°－W	楕円形	1.1×0.9	26	外傾	平坦	自然	土師器	不明	本跡→SK24
18	J 8 c2	N－70°－W	楕円形	0.9×0.8	42	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
19	J 7 g7	N－27°－E	楕円形	1.7×1.3	60	外傾	平坦	自然	－	不明	SB1→本跡
20	J 7 f0	N－65°－E	隅丸長方形	1.3×1.0	13	外傾	平坦	自然	土師器	8世紀前葉以前	本跡→SI1
21	J 7 b8	N－54°－W	楕円形	0.9×0.8	17	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
22	J 7 b8	N－77°－E	楕円形	0.4×0.2	8	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SK23→本跡
23	J 7 b8	N－15°－W	楕円形	1.1×1.0	13	外傾	平坦	人為	土師器	8世紀代	本跡→SK22
24	J 8 b1	N－4°－E	楕円形	0.9×0.7	48	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	SK17→本跡
25	J 7 b0	N－66°－E	楕円形	1.2×0.8	52	外傾	凹凸	自然	土師器	8世紀前葉以前	本跡→SB3
26	I 7 j9	N－60°－E	[楕円形]	(2.2)×0.5	18	外傾	平坦	自然	－	不明	
28	J 7 b0	N－58°－W	楕円形	1.0×0.9	40	外傾	平坦	－	－	不明	
30	J 7 h8	N－35°－W	楕円形	0.7×0.5	28	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
31	J 7 i8	N－19°－W	楕円形	0.9×0.8	34	直立	平坦	自然	－	不明	

(4) ピット（第189・190図）

市の調査で,「柱穴状遺構」と報告されているものと形状が類似しているものを，今回「ピット」と呼称して実測図と土層解説を掲載する。



第189図　ピット実測図(1)



第190図　ピット実測図(2)

第１号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂中量
4　灰　白　色　黒色砂多量

第２号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂多量
3　灰　白　色　黒色砂多量

第３号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂中量

第４号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂微量

第５号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂少量，灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　灰　白　色　黒色砂少量

第７号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

第８号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第９号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂多量

第10号ピット土層解説
1　黒　　色
2　黒　　色　灰白色砂中量

第11号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第12号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量

第13号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂中量

第14号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量

第16号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂多量

第17号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量

表29　ピット一覧表

番号	位 置	平面形	規　模 長径(㎝)×短径(㎝)	深さ（㎝）	主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
1	K 7 a8	楕円形	89×70	35	－	不明	
2	K 7 a8	楕円形	92×72	59	－	不明	
3	K 7 a8	楕円形	65×50	27	－	不明	
4	J 7 g9	楕円形	36×30	14	－	不明	
5	J 8 g8	不整楕円形	103×83	42	土師器	不明	
6	J 8 b1	楕円形	56×50	－	－	不明	
7	J 7 g9	円形	38×35	14	－	不明	
8	K 7 c6	楕円形	44×38	27	－	不明	
9	K 7 b8	円形	51×49	16	－	不明	
10	J 8 b1	[楕円形]	65×(33)	44	－	不明	本跡→SA1
11	J 7 a0	楕円形	35×31	22	土師器	不明	
12	J 7 a0	楕円形	32×28	32	土師器	不明	
13	J 8 c1	楕円形	63×49	24	－	不明	
14	J 8 b2	楕円形	43×35	8	土師器　須恵器	不明	
15	J 7 c0	円形	59×57	－	土師器	不明	
16	J 7 a9	楕円形	42×33	22	－	不明	
17	J 7 b9	不整楕円形	78×54	20	－	不明	

(5) 整地面

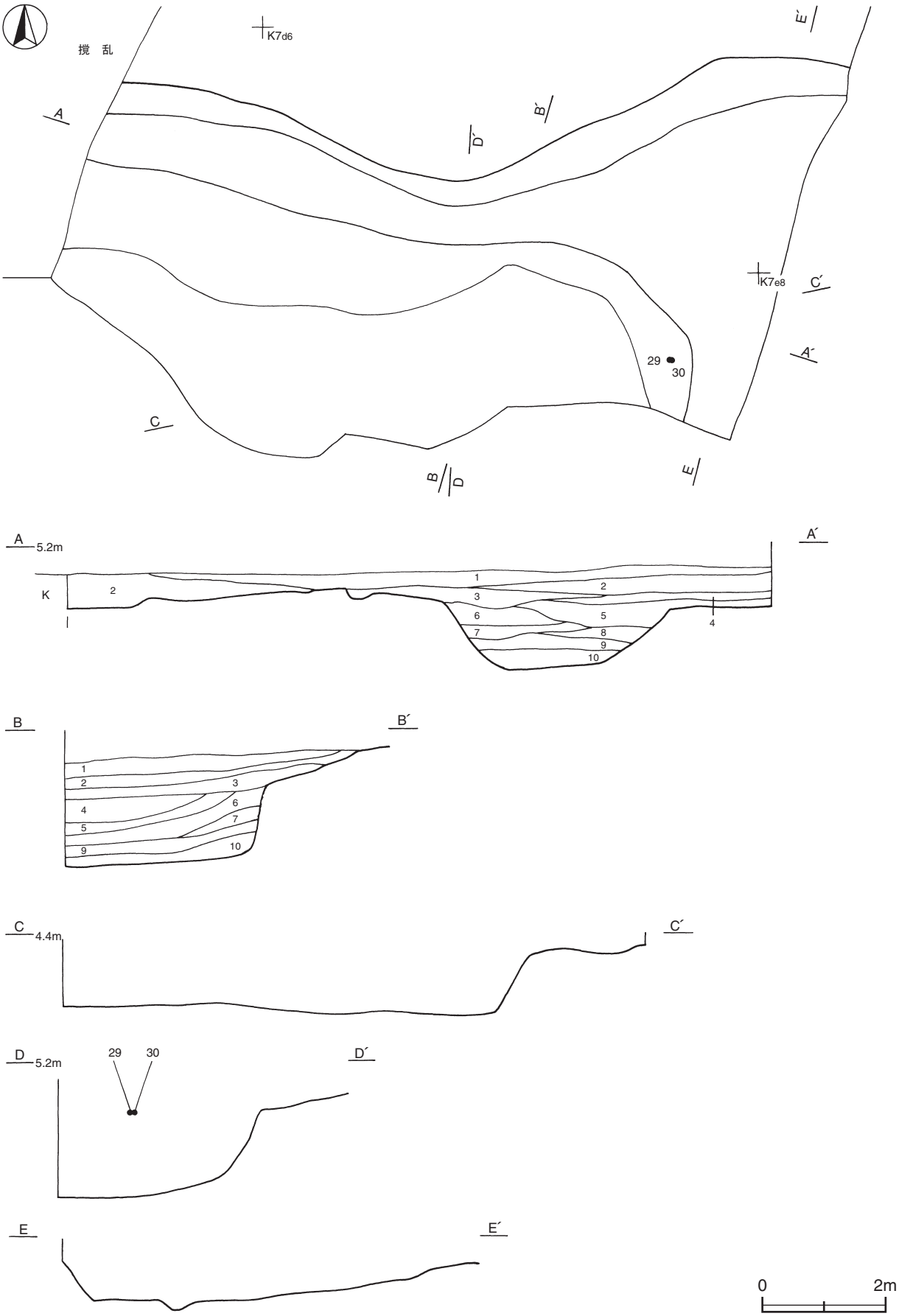
第１号整地面（SX3）（第191・192図）

位置　Ｋ７d5～Ｋ７e8区，　標高5.0ｍほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　東西・南は調査区域外に延び，西側が撹乱を受けているため最大長は11.3ｍ，幅3.9～6.5ｍのみ確認されている。不整形に掘り込まれており，深さは20～170㎝である。北側には幅0.6～4.2ｍの南に向かって緩やかに傾斜している平坦部があり，平坦部から急激に落ち込んで底面に至っている。

覆土　10層に分層される。第４層～10層までは粘土が混じった砂が堆積していることから，人為堆積と考えられ，第１～３層は周囲からくぼ地に流入した堆積状況であり，自然堆積と考えられる。

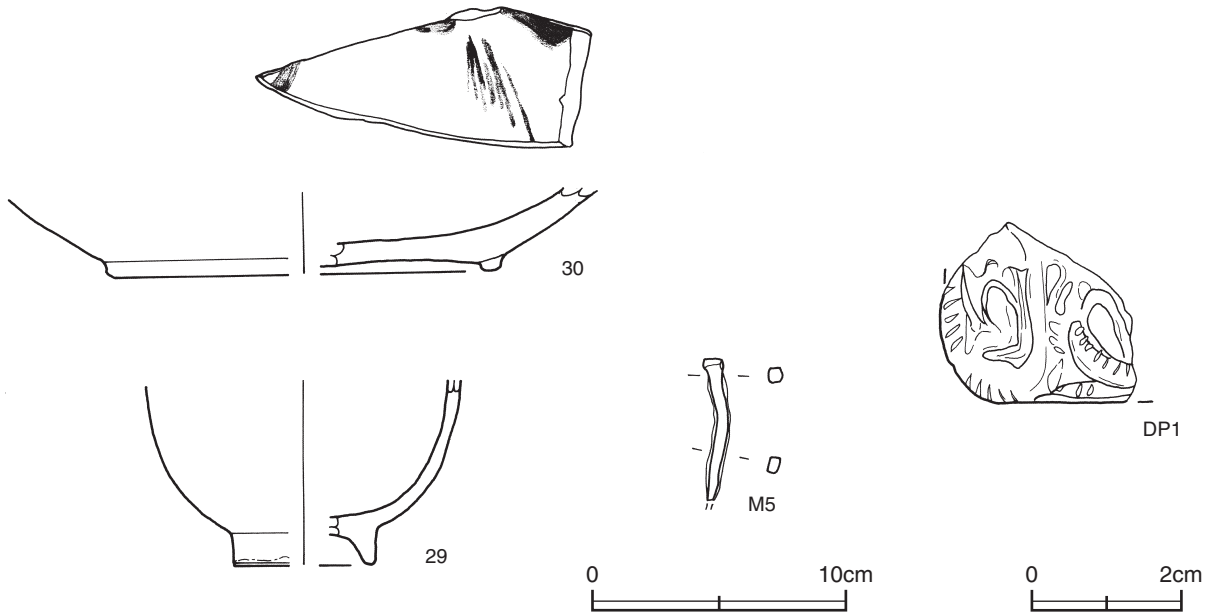
土層解説
1　暗　褐　色　黄色砂微量
2　暗　褐　色　黒色砂少量，黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量
4　黒　　色　粘土ブロック多量，灰白色砂中量
5　暗　褐　色　粘土ブロック・黄色砂多量
6　黒　　色　粘土ブロック多量，黒色砂・灰白色砂中量
7　黄　　色　粘土ブロック・黒色砂・灰白色砂多量
8　黒　　色　粘土ブロック多量，黒色砂・灰白色砂中量
9　黒　　色　粘土ブロック多量，黒色砂・黄色砂中量
10　黒　　色　粘土ブロック・灰白色砂多量



第191図　第１号整地面実測図

遺物出土状況　陶器片15点（碗14，皿１），土製品１点（泥面子），鉄製品２点（釘）が出土している。その他，土師器片235点，須恵器片28点，瓦片１点，剥片１点，鉄滓15点も出土している。29・30のように自然堆積層からの出土量の方が圧倒的で，くぼ地に流れ込んだものと考えられる。

所見　砂丘を掘削し，自然地形を改変したものと考えられる。時期は出土土器から近世以降であり，地形を改変した理由は不明である。



第192図　第１号整地面出土遺物実測図

第１号整地面出土遺物観察表（第192図）

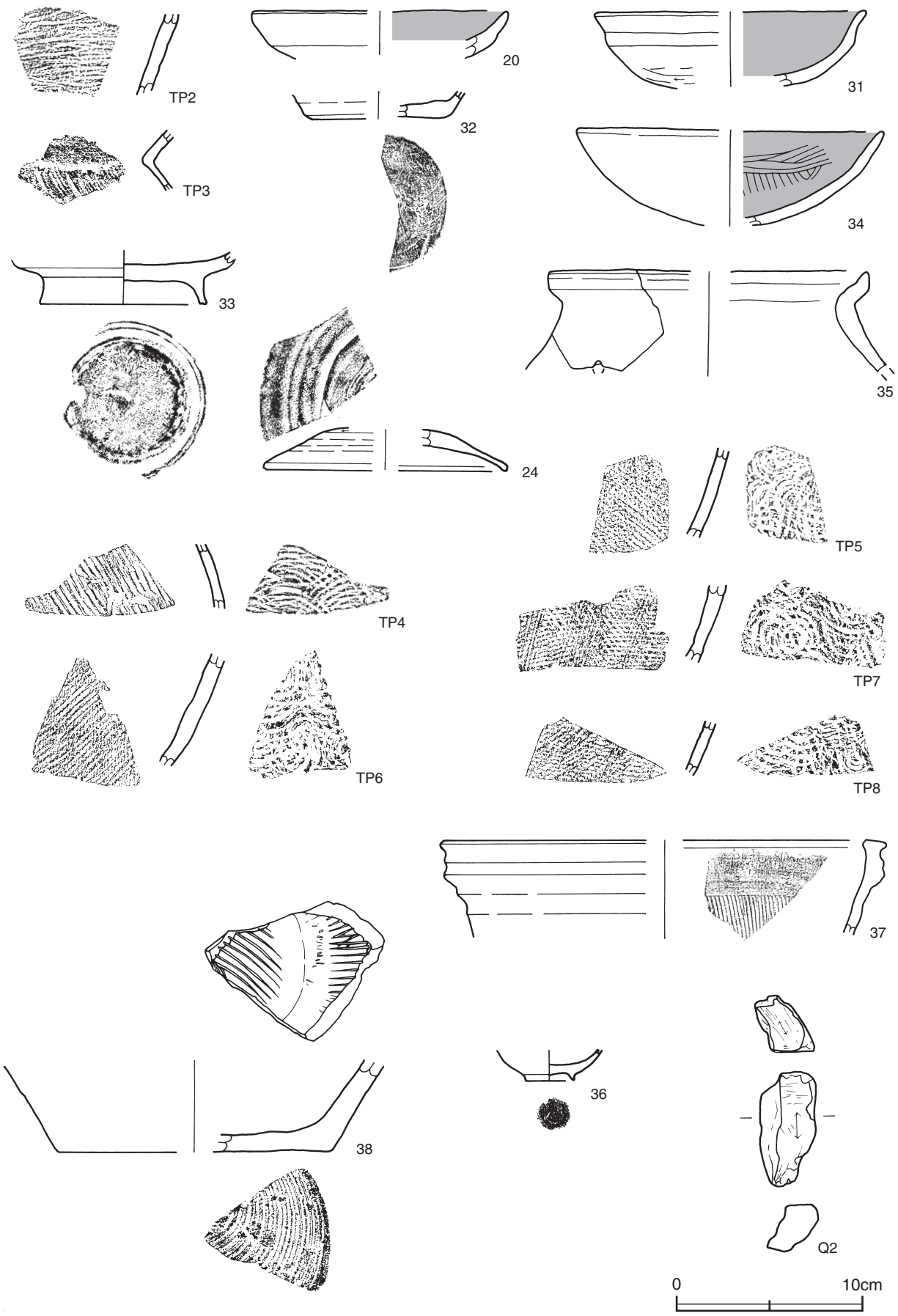
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土 色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	陶器	碗	－	(7.3)	[5.4]	緻密 白	良好	ロクロナデ　高台貼り付け	自然堆積層	20%
30	陶器	皿	－	(3.3)	[15.5]	緻密 白	良好	ロクロナデ　底部回転ヘラ削り後高台貼り付け 鉄釉絵付け	自然堆積層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP１	泥面子	(2.3)	(2.5)	0.7	(2.9)	粘土	面摸	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M５	釘	(5.7)	0.9	0.6	(8.8)	鉄	先端欠損	覆土中	

(6) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない主な遺物について，実測図（第193図）と観察表を掲載する。



第193図　遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第193図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
20	土師器	坏	[13.8]	(2.3)	－	黒雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部内･外面横ナデ　体部外面ナデ　内面ヘラ磨き	SK18 覆土中	5%
24	須恵器	蓋	[13.0]	(2.2)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り調整	SK17 覆土中	10%
31	土師器	坏	[14.6]	(4.1)	－	黒雲母・白色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ 内面ヘラ磨き	確認面	20%
32	須恵器	坏	－	(1.5)	[7.7]	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	底部ナデ調整	第１号 整地面	10% 箆記号
33	須恵器	高台付 坏	－	(2.9)	9.0	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	底部ヘラ削り調整	文化課試掘	30%
34	土師器	坏	[16.5]	(5.2)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ヘラ削り後ナデ　内面ヘラ磨き	確認面	20%
35	土師器	甕	[17.2]	(5.7)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内･外面横ナデ　端部つまみ上げ　体部内･外面ナデ　小孔有り	確認面	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土 色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
36	陶器	壺	－	(1.7)	2.7	緻密 灰	良好	ロクロナデ　高台貼り付け	確認面	10%
37	陶器	擂鉢	[24.0]	(5.3)	－	緻密 灰	良好	内面擂目	確認面	5%
38	陶器	擂鉢	－	(5.0)	[14.8]	緻密 浅黄	良好	内面擂目	確認面	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP２	弥生土器	壺	白色粒子・透明粒子	橙	普通	胴部附加条二種（附加2条）縄文施文	SK31 覆土中	
TP３	土師器	甕	白色粒子・透明粒子	橙	普通	外面ハケ目　内面ナデ	第１号整 地面	
TP４	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白　黄橙	普通	外面斜位の平行叩き　内面青海波文	SK31 覆土中	
TP５	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	灰	普通	外面斜位の縄目文　内面青海波文	確認面	
TP６	須恵器	甕	白色粒子・透明粒子	暗灰	普通	外面斜位の縄目文　内面青海波文	確認面	
TP７	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面擬格子文　内面青海波文	確認面	
TP８	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白　灰	普通	外面斜位の縄目文　内面青海波文	確認面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q２	砥石	6.2	3.2	3.1	51.6	凝灰岩	２面使用	確認面	

第6章　叶南前Ａ遺跡

第１節　遺跡の概要

叶南前Ａ遺跡は，南北に延びる標高約4.5～5.7ｍの砂丘上に立地している。調査区は遺跡のほぼ中央部を縦断するように設定され，調査面積は3,301㎡で，調査前の現況は更地である。

今回の調査によって，奈良・平安時代，中世を中心とした遺構と遺物が確認された。確認された遺構は，竪穴住居跡２軒（奈良時代，平安時代），掘立柱建物跡６棟（奈良時代２，奈良～平安時代３，平安時代１），柵跡１条（時期不明），井戸跡２基（奈良時代，中世），溝跡５条（時期不明），土坑35基（奈良時代２，平安時代３，時期不明30基），ピット17基（時期不明），その他泥炭層１か所（時期不明）である。

遺物は，遺物コンテナ（60×40×20㎝）に３箱出土している。主な遺物は，土師器（坏・鉢・甕），須恵器（坏・高台付坏・盤・蓋・瓶・甕），陶器（碗・甕），磁器（碗），石器（鏃），鉄製品（釘・不明），井戸枠部材などである。

第２節　基本層序

Ｏ６b1･Ｏ６c1区にかけてテストピットを設定し，基本土層（第194図）の堆積状況の観察を行った。観察結果は，以下の通りである。

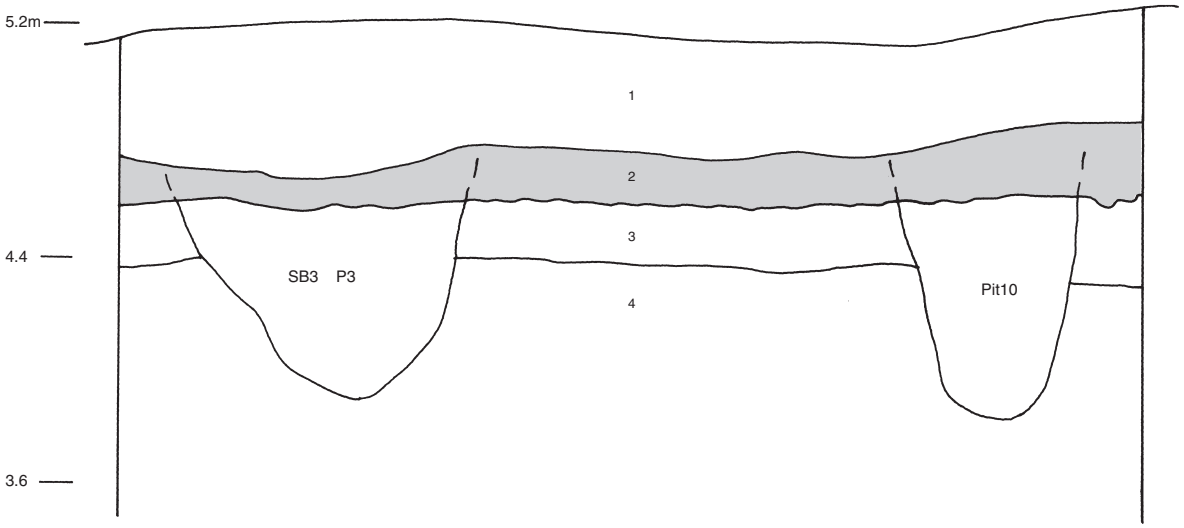
第１層は，黒褐色を呈し，現在の畑の盛土層で，層厚は35～55㎝である。

第２層は，黒色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，旧地表と考えられる。層厚は15～25㎝である。

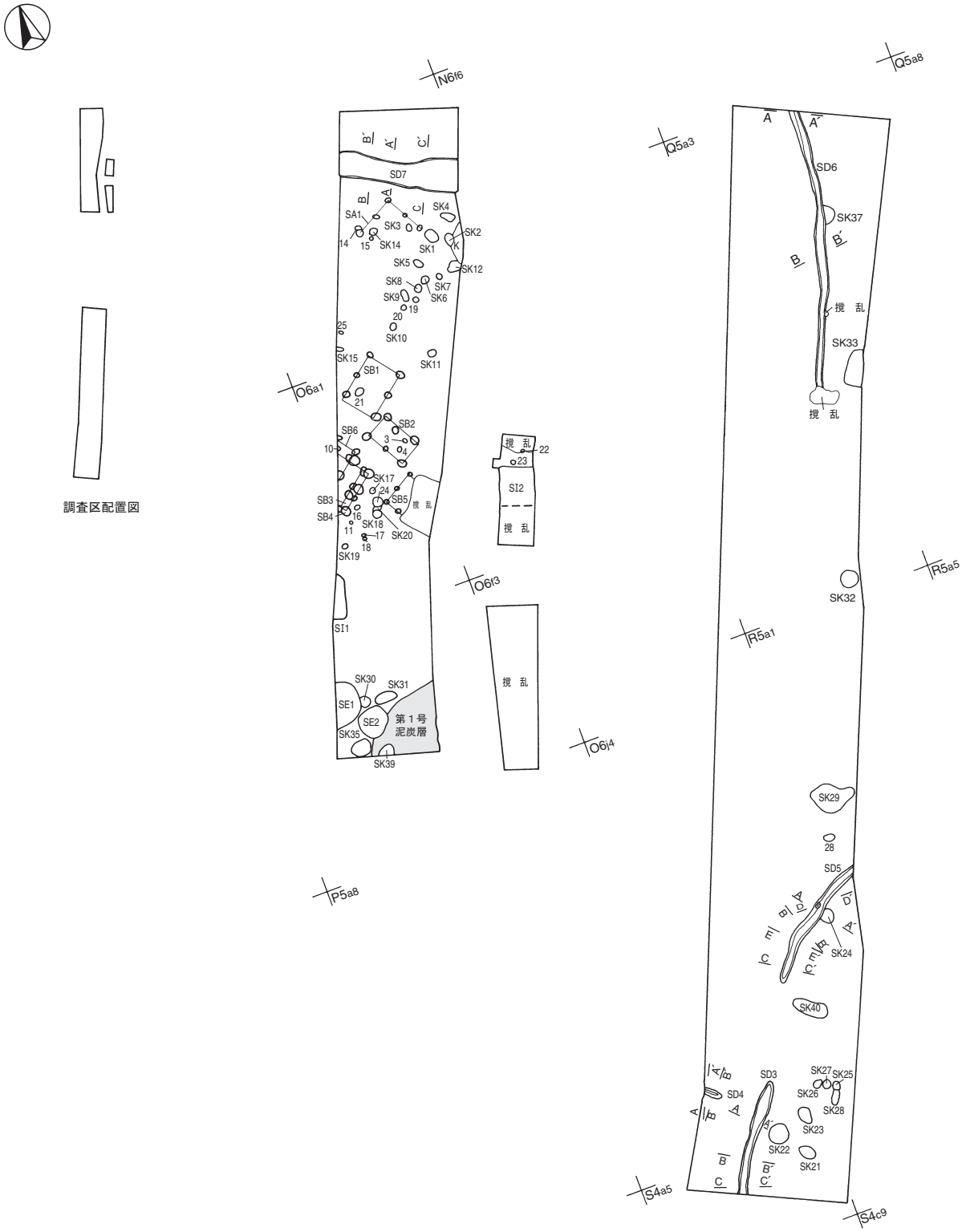
第３層は，灰白色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，層厚は30～55㎝である。

第４層は，黄色を呈する粒子のきめ細かい砂層で，層厚は不明である。

遺構は，第３層上面で確認されている。



第194図　叶南前Ａ遺跡基本土層図



第195図　叶南前Ａ遺跡全体図

第３節　遺 構 と 遺 物

１　奈良・平安時代の遺構と遺物

竪穴住居跡２軒，掘立柱建物跡６棟，井戸跡１基，土坑５基が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第１号住居跡（第196図）

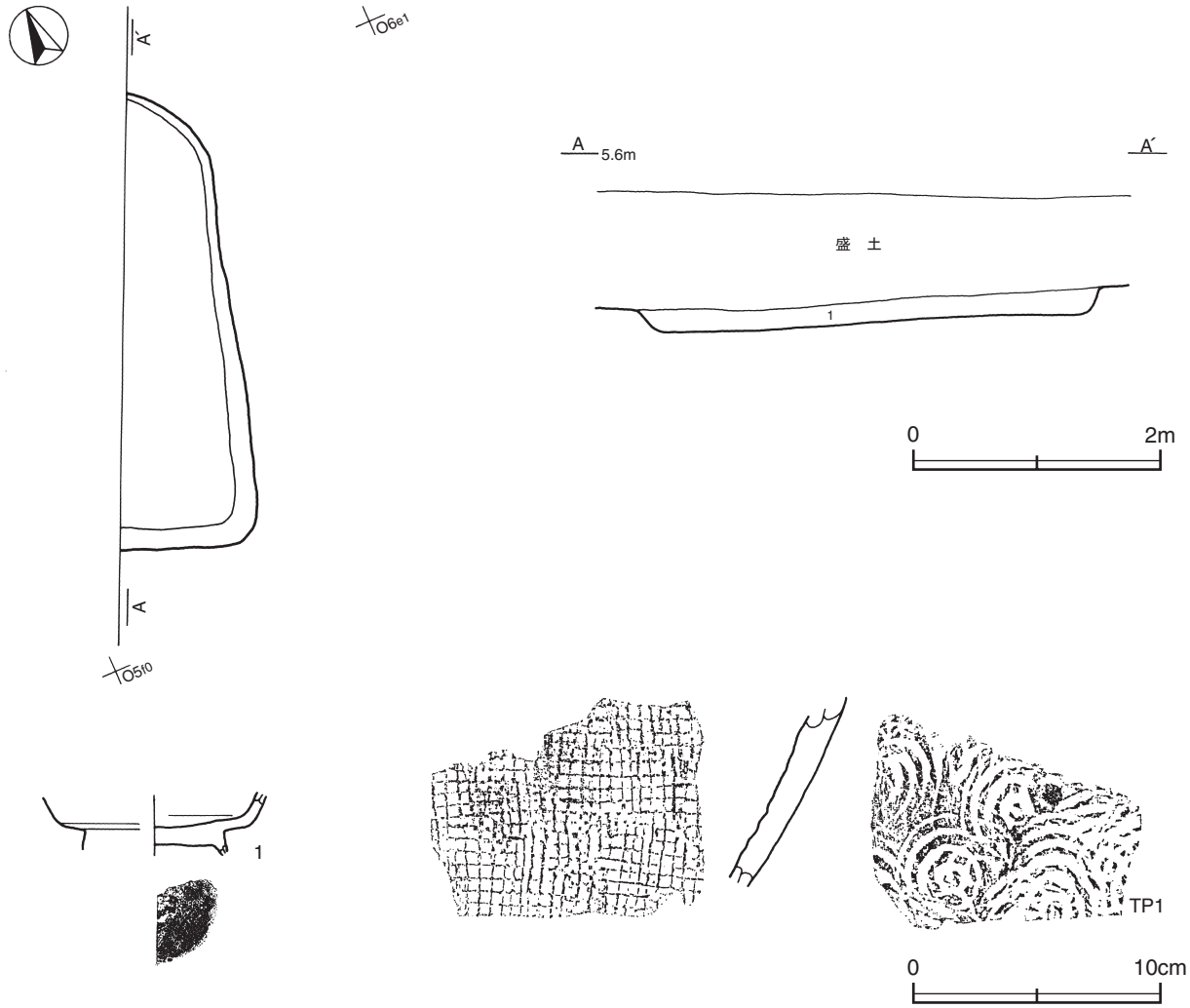
位置　Ｏ５e0区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　ほとんどが調査区域外に延びており，東西軸1.1mのみ，南北軸3.7mのみ確認されている。平面形及び主軸方向は不明である。壁高は18～23㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，砂層をそのまま使用している。

覆土　単一層である。均一な砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量



第196図　第１号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片１点（甕），須恵器片２点（坏・高台付坏，甕）が出土している。１・TP1は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。

第１号住居跡出土遺物観察表（第196図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
1	須恵器	高台付坏	－	(2.5)	－	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土中	5%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP１	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	外面格子目文叩き　内面青海波文	覆土中	PL25

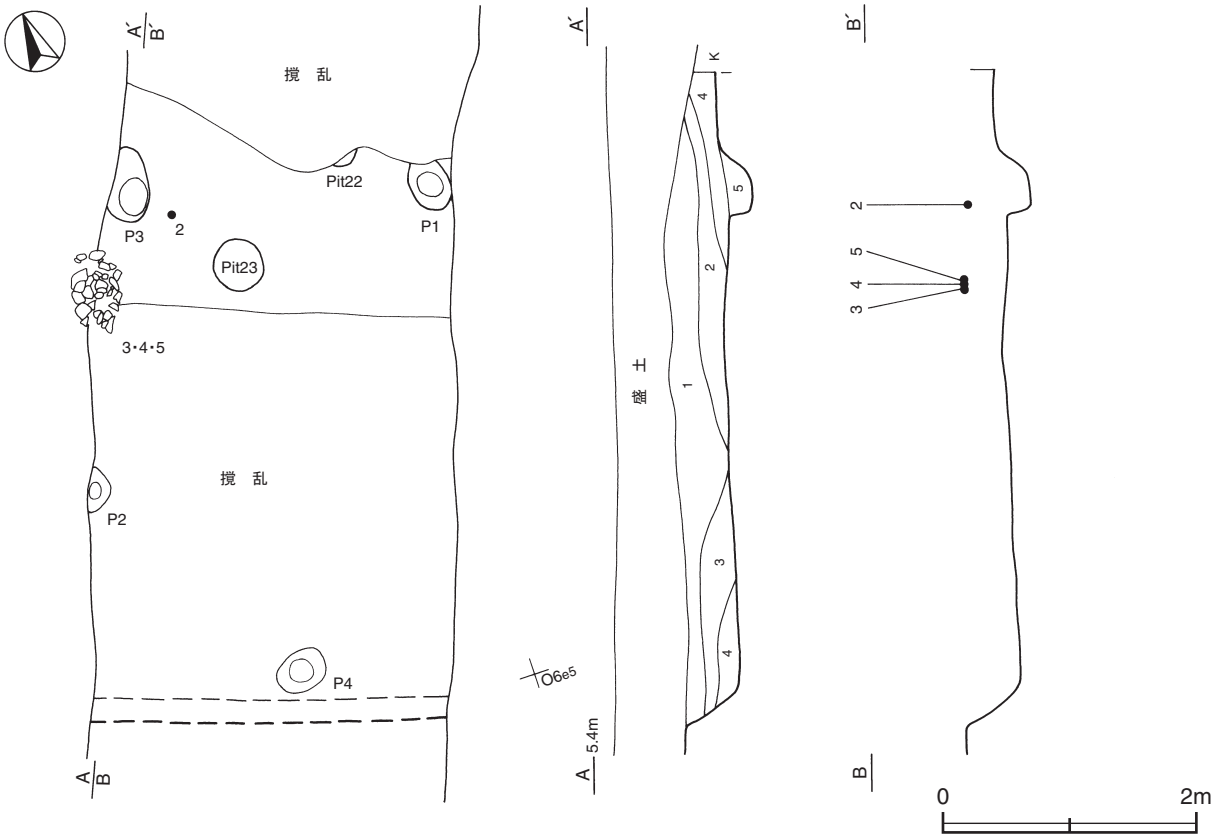
第２号住居跡（第197～199図）

位置　Ｏ６d4区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第22・23号ピットに掘り込まれている。

規模と形状　調査範囲が狭く，また撹乱を受けているため遺存状態も悪く，東西軸2.8mのみ，南北軸5.0mのみ確認されている。平面形は不明で，Ｐ１・Ｐ３間の中心とＰ４を通るラインを主軸方向と推定すると，Ｎ－17°－Ｅである。土層断面図から壁高を測ると36㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦と推測され，砂層をそのまま使用している。



第197図　第２号住居跡実測図

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ５～10㎝で，規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ４は深さ10㎝で，規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

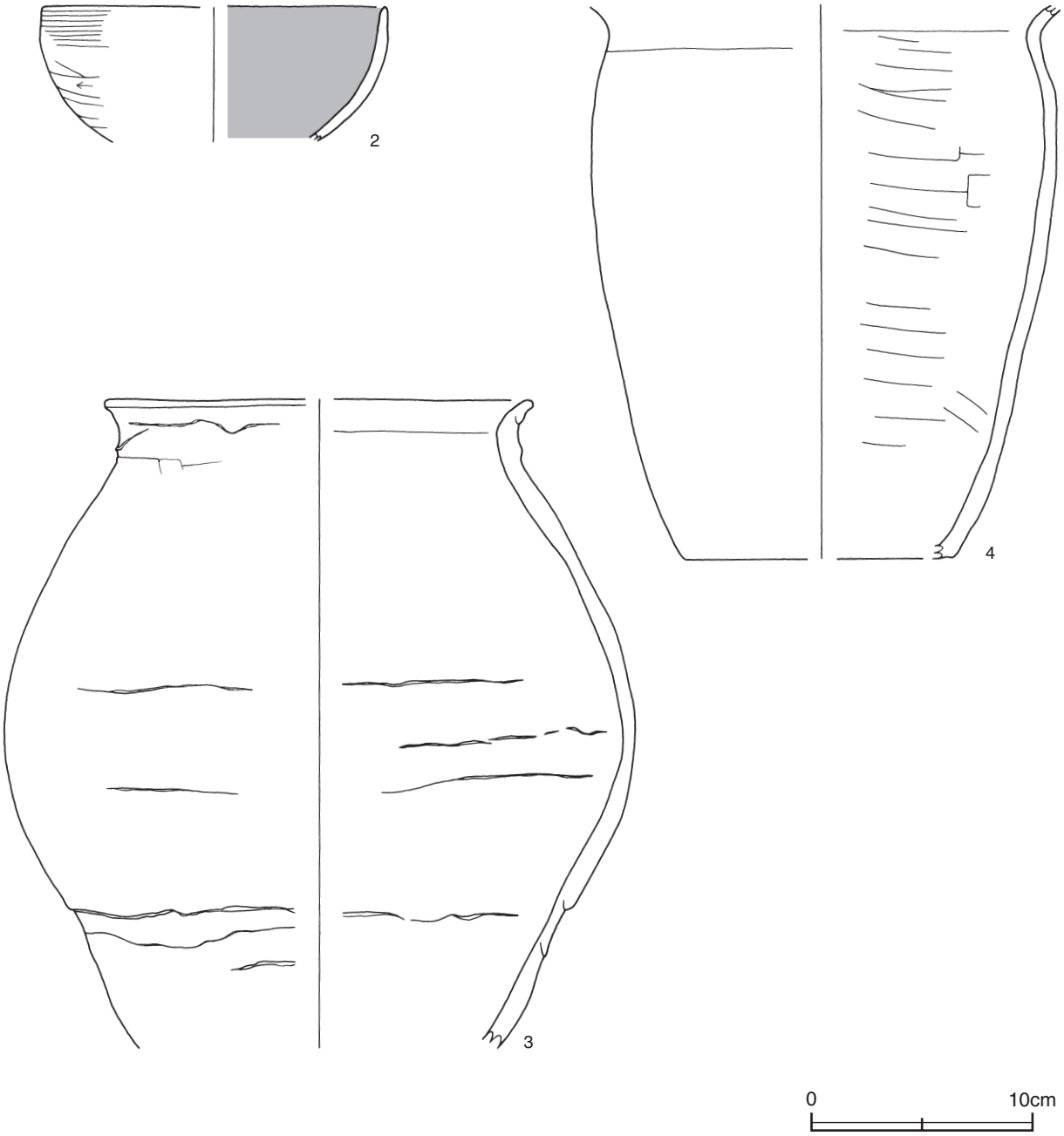
覆土　５層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

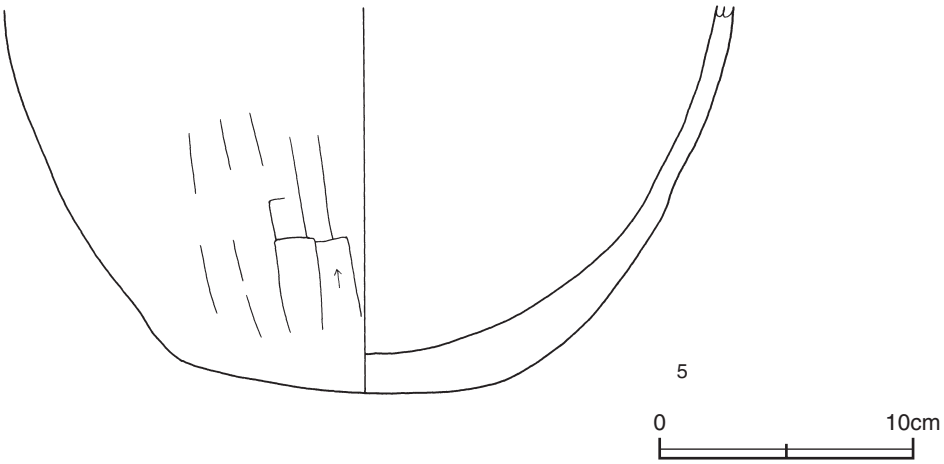
1	黒　色	焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂微量	4	黒　色	灰白色砂・黄色砂中量
2	黒　色	灰白色砂中量	5	黒　色	炭化粒子・灰白色砂少量
3	黒　色	灰白色砂・黄色砂少量			

遺物出土状況　土師器片133点（坏・鉢８，甕125），須恵器片２点（甕）が出土している。２～５は覆土上層からそれぞれ出土しており，3～５はつぶれた状態で集中して出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第198図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)



第199図　第２号住居跡出土遺物実測図(2)

第２号住居跡出土遺物観察表（第198・199図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
2	土師器	坏	[15.6]	(6.1)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ削り後ナデ　口縁部外面にヘラ磨き 内面ナデ	覆土上層	20%
3	土師器	甕	[19.2]	(29.3)	－	白色粒子・透明粒子 赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　輪積み痕残存　内面ナデ	覆土上層	40%
4	土師器	甕	－	(25.2)	[12.2]	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ナデ　内面ヘラナデ・ナデ	覆土上層	20%
5	土師器	甕	－	(15.3)	13.0	黒雲母・白色粒子 透明粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ　丸底ぎみの平底	覆土上層	20%

表30　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長(東西)軸× 短(南北)軸	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備　考 新旧関係(旧→新)
								主柱穴	出入口ピット	ピット	竈				
1	O５e0	不明	不明	(1.1)×(3.7)	18～23	平坦	－	－	－	－	－	自然	土師器　須恵器	９世紀前葉	
2	O６d4	[N-17°-E]	不明	(2.8)×(5.0)	36	平坦	－	3	1	－	－	自然	土師器　須恵器	８世紀後葉	本跡→Pit22・23

(2) 掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第200図）

位置　Ｎ６j2～Ｏ６b2区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

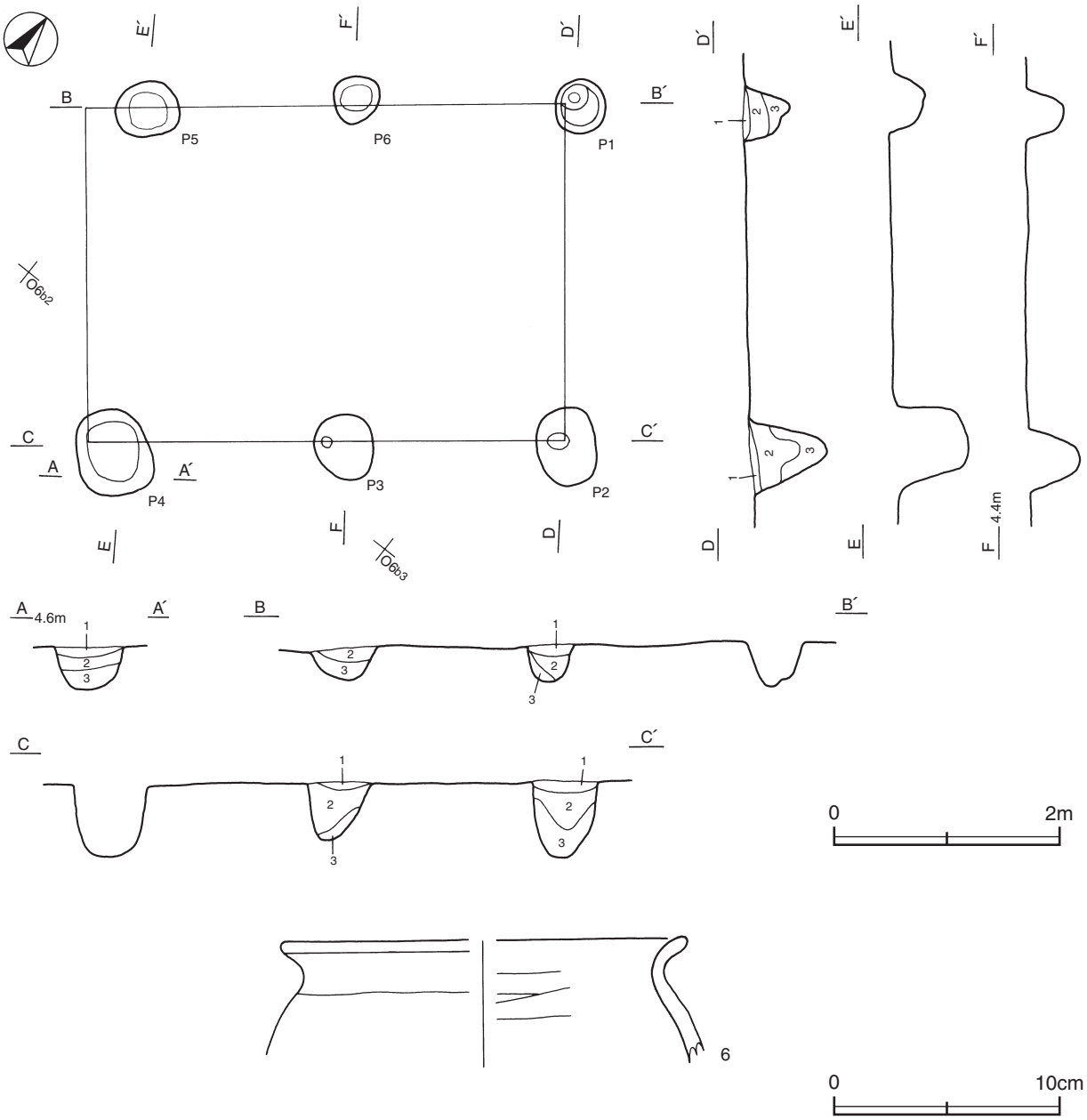
規模と構造　桁行２間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－52°－Ｅの東西棟である。規模は，桁行4.2m（14尺），梁行3.0m（10尺）で，柱間寸法は，東側桁行が2.1m（７尺），西側桁行が1.8m（６尺）で，梁行は3.0m（10尺）を基調としている。

柱穴　６か所。平面形は円形・楕円形で，深さ26～70cmである。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂少量，黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂中量，黄色砂微量

遺物出土状況　土師器片５点（甕）が出土している。６はＰ６の覆土中から出土している。

所見　本建物は，建て替えの繰り返しである第３・４・６号掘立柱建物跡と桁行方向が同一であり，これらのいずれかと同じ時期に機能していたと推測される。時期は，周囲の住居跡の時期も考慮し，８世紀後葉～９世紀前半と考えられる。



第200図　第１号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第200図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
6	土師器	甕	[17.8]	(5.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部内・外面ナデ	P６ 覆土中	5%

第２号掘立柱建物跡（第201図）

位置　Ｏ６b1～Ｏ６c2区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

規模と構造　桁行２間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向Ｎ－29°－Ｗの南北棟である。規模は，桁行3.6m（12尺），梁行2.1m（７尺）で，柱間寸法は，東側桁行が1.5m（５尺），西側桁行1.8m（６尺）で，梁行は2.1m（７尺）を基調としている。

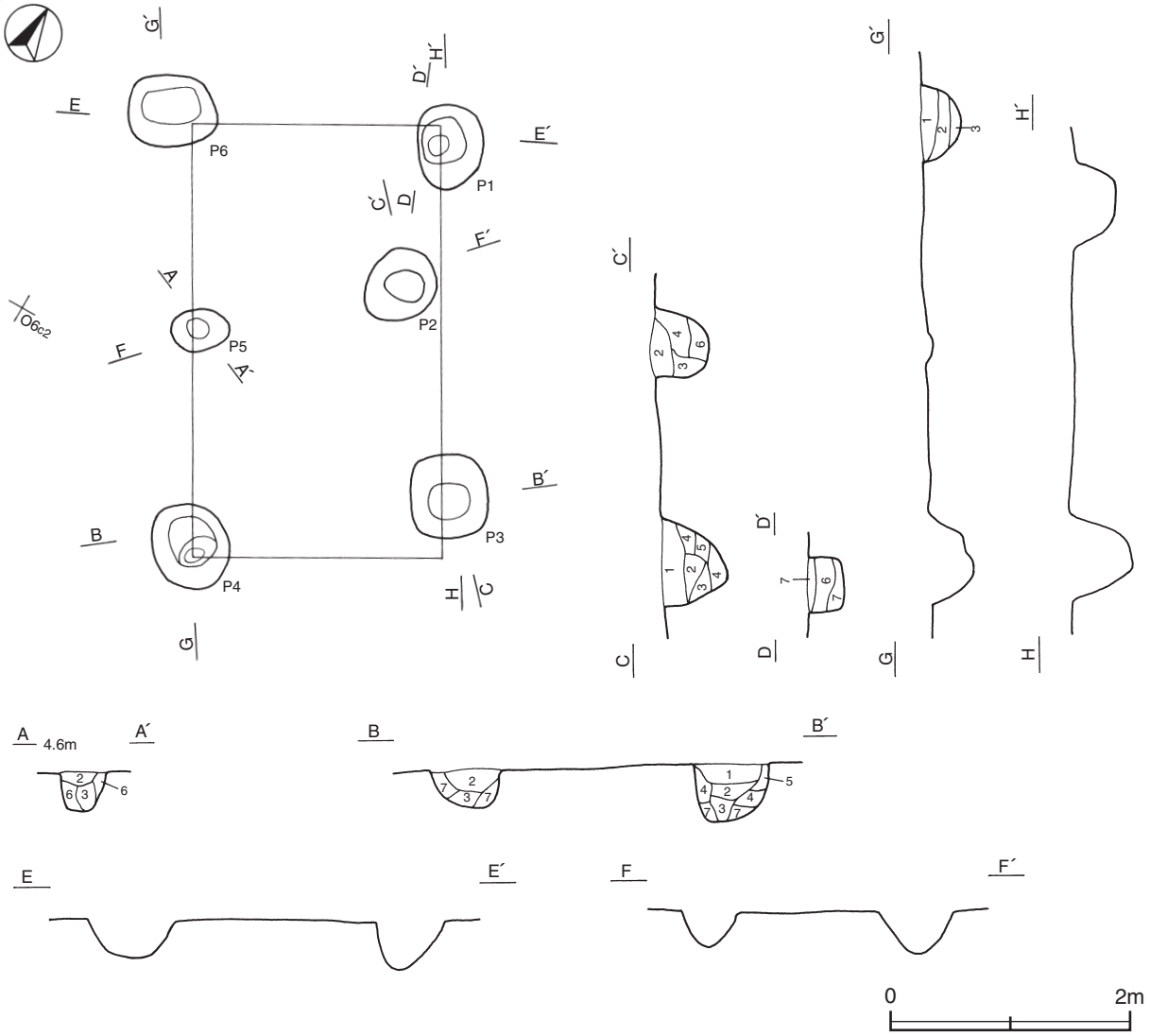
柱穴　6か所。平面形は円形・楕円形で，深さは30～55㎝である。土層は第1～3層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1	黒	色	炭化粒子・灰白色砂微量	5	黒	色	灰白色砂中量
2	黒	色	炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量	6	黒	色	灰白色砂・黄色砂多量
3	黒	色	灰白色砂微量	7	黒	色	灰白色砂多量
4	灰白	色	黒色砂多量				

遺物出土状況　土師器片9点（坏5，甕4），須恵器片1点（坏）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　第1号掘立柱建物跡とは，接近しすぎていることから同時期に機能していたとは認められない。第3・4・6号掘立柱建物跡のいずれかとほぼ直交して配置されていたものと推測され，時期は，周囲の住居跡の時期も考慮し，8世紀後葉～9世紀前葉と考えられる。



第201図　第2号掘立柱建物跡実測図

第３号掘立柱建物跡（第202図）

位置　Ｏ６b1～Ｏ５c0区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第４号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造　ほとんどが調査区域外に延びているため，東西軸３間，南北軸１間のみ確認されており，南北軸Ｎ－52°－Ｅの東西棟と推測される。柱間寸法は，桁行が東側から1.8m（６尺），0.6m（２尺），1.2m（４尺）で，Ｐ３・Ｐ４の柱間寸法が短い。梁行は1.2m（４尺）である。

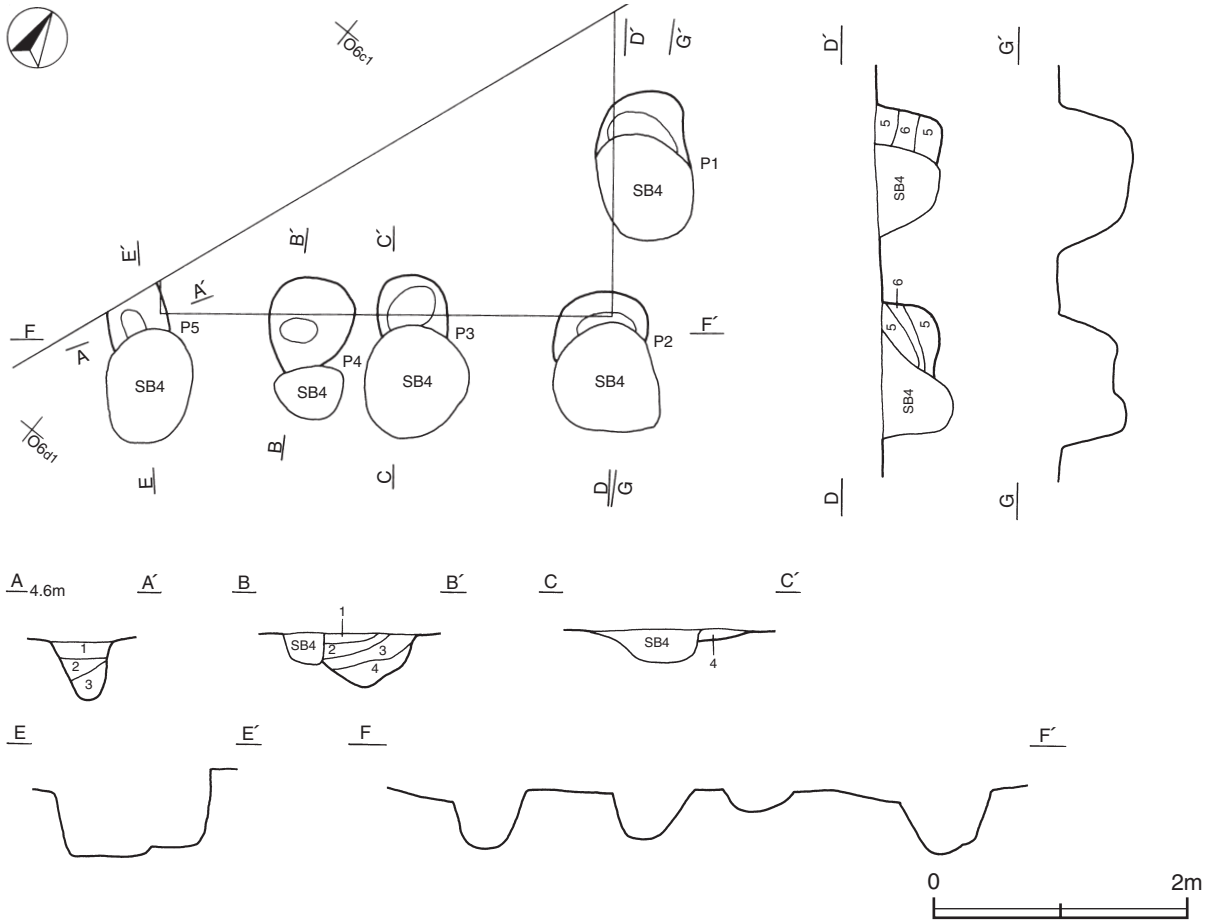
柱穴　５か所。平面形は楕円形と推測され，深さは10～54㎝である。土層は第１～４層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色	黄色砂微量	4	黒　色	灰白色砂・黄色砂微量
2	黒　色	灰白色砂微量	5	黒　色	灰白色砂・黄色砂多量
3	黒　色	灰白色砂少量	6	黄　色	黒色砂多量

遺物出土状況　土師器片１点（坏），鉄製品１点（不明）が出土している。いずれも細片のため，図示することができない。

所見　時期は，周囲の住居跡の時期も考慮し，８世紀後葉と考えられる。本建物は，第４号掘立柱建物跡と柱穴が重複し，ほとんど位置を変えていないことから，第４号掘立柱建物への建て替えが想定される。



第202図　第３号掘立柱建物跡実測図

第４号掘立柱建物跡（第203図）

位置　Ｏ６b1・Ｏ６c1区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

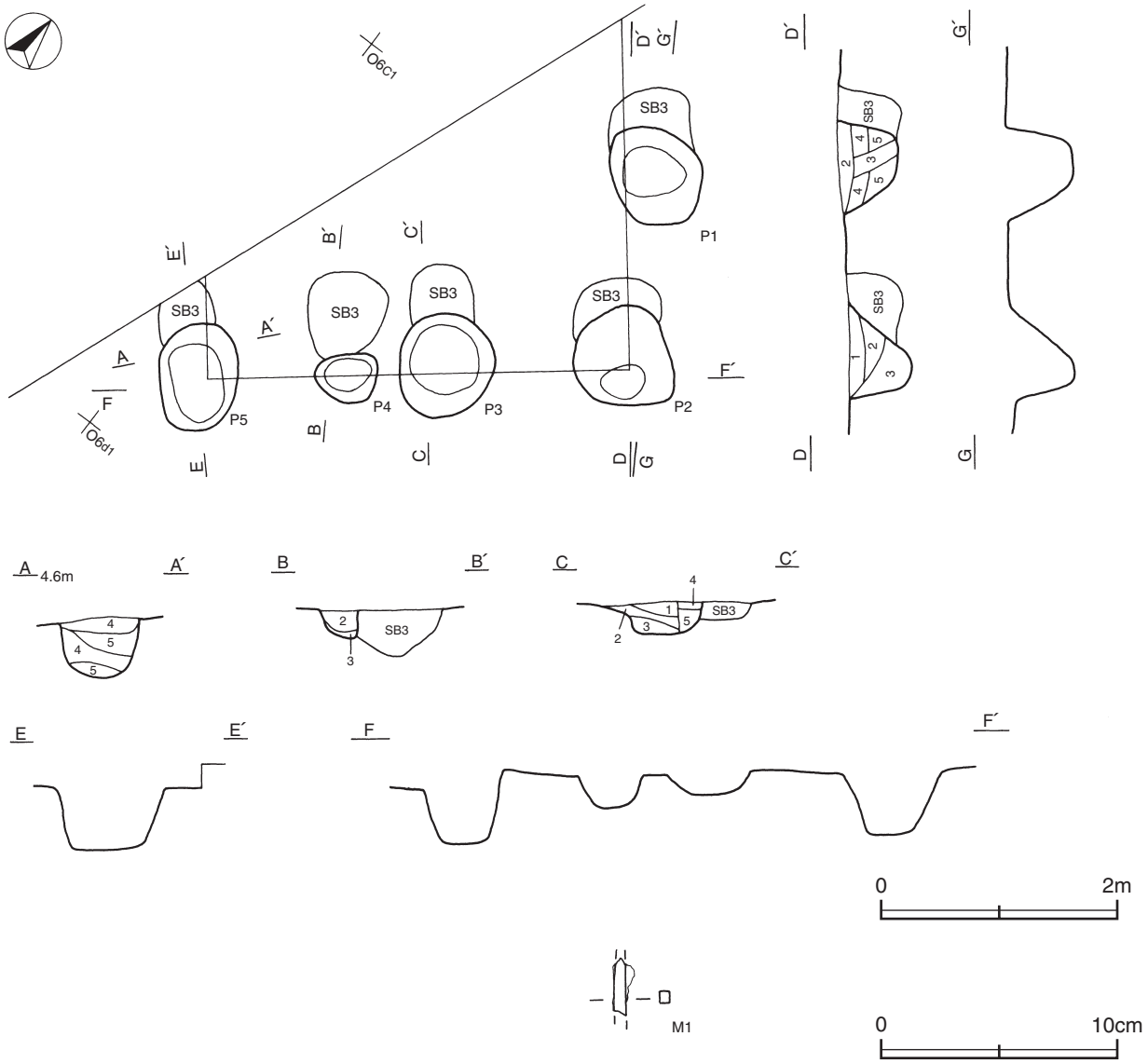
重複関係　第３号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と構造　ほとんどが調査区域外に延びているため，東西軸３間，南北軸１間のみ確認されており，南北軸Ｎ－52°－Ｅの東西棟と推測される。柱間寸法は，桁行が東側から1.8m（６尺），0.6m（２尺），1.2m（４尺）で，Ｐ３・Ｐ４の柱間寸法が短い。梁行は1.8m（６尺）である。

柱穴　５か所。平面形は楕円形で，深さは28～54㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土で，その他の層は砂が互層をなす埋土である。突き固められていると考えられるが，自然堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説（各ピット共通）

1	黒　色　黄色砂微量	4	黒　色　灰白色砂多量
2	黒　色　灰白色砂微量	5	黒　色　灰白色砂・黄色砂多量
3	黒　色　灰白色砂中量		



第203図　第４号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片３点（坏２，甕１），鉄製品１点（釘ヵ）が出土している。Ｍ１はＰ２の埋土から出土している。

所見　本建物は，第３号掘立柱建物跡を掘り込む形でその外側に柱穴を配置し，建物自体の位置はほとんど変えていないことから，第３号掘立柱建物からの建て替えが想定され，第６号掘立柱建物跡の時期も考慮し，８世紀後葉以降９世紀前葉までの範疇と考えられる。

第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第203図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｍ１	釘	(2.2)	0.6	0.5	(2.7)	鉄	両端欠損	Ｐ２埋土	

第５号掘立柱建物跡（第204図）

位置　Ｏ６c1・Ｏ６d2区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

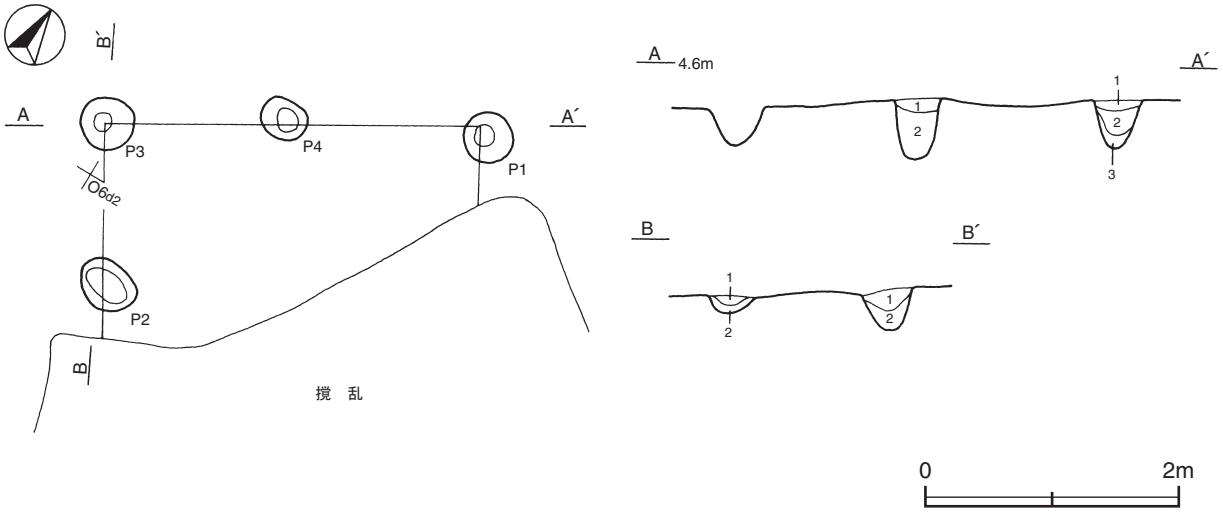
規模と構造　ほとんどが撹乱されているため，東西軸１間，南北軸２間のみ確認されただけであり，南北軸Ｎ－30°－Ｗの南北棟と推測される。柱間寸法は，桁行及び梁行ともに1.5m（５尺）である。

柱穴　４か所。平面形は円形・楕円形で，深さは18～48㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片４点（甕）が出土している。いずれも細片で，図示することができない。

所見　第３・４・６号掘立柱建物跡のいずれかとほぼ直交して配置されていたものと推測され，時期は，周囲の住居跡の時期も考慮し，８世紀後葉～９世紀前葉と考えられる。第２号掘立柱建物跡とは桁行方向がほぼ同一で隣接しており，同時期と考えられる。



第204図　第５号掘立柱建物跡実測図

第６号掘立柱建物跡（Pit9・28，SB3P5）（第205図）

位置　Ｏ６b1・Ｏ６c1区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

規模と構造　ほとんどが調査区域外に延びているため，東西軸２間，南北軸１間のみ確認されており，南北軸Ｎ－51°－Ｅの東西棟と推測される。柱間寸法は，桁行が2.1m（７尺），梁行は1.8m（６尺）と推測される。

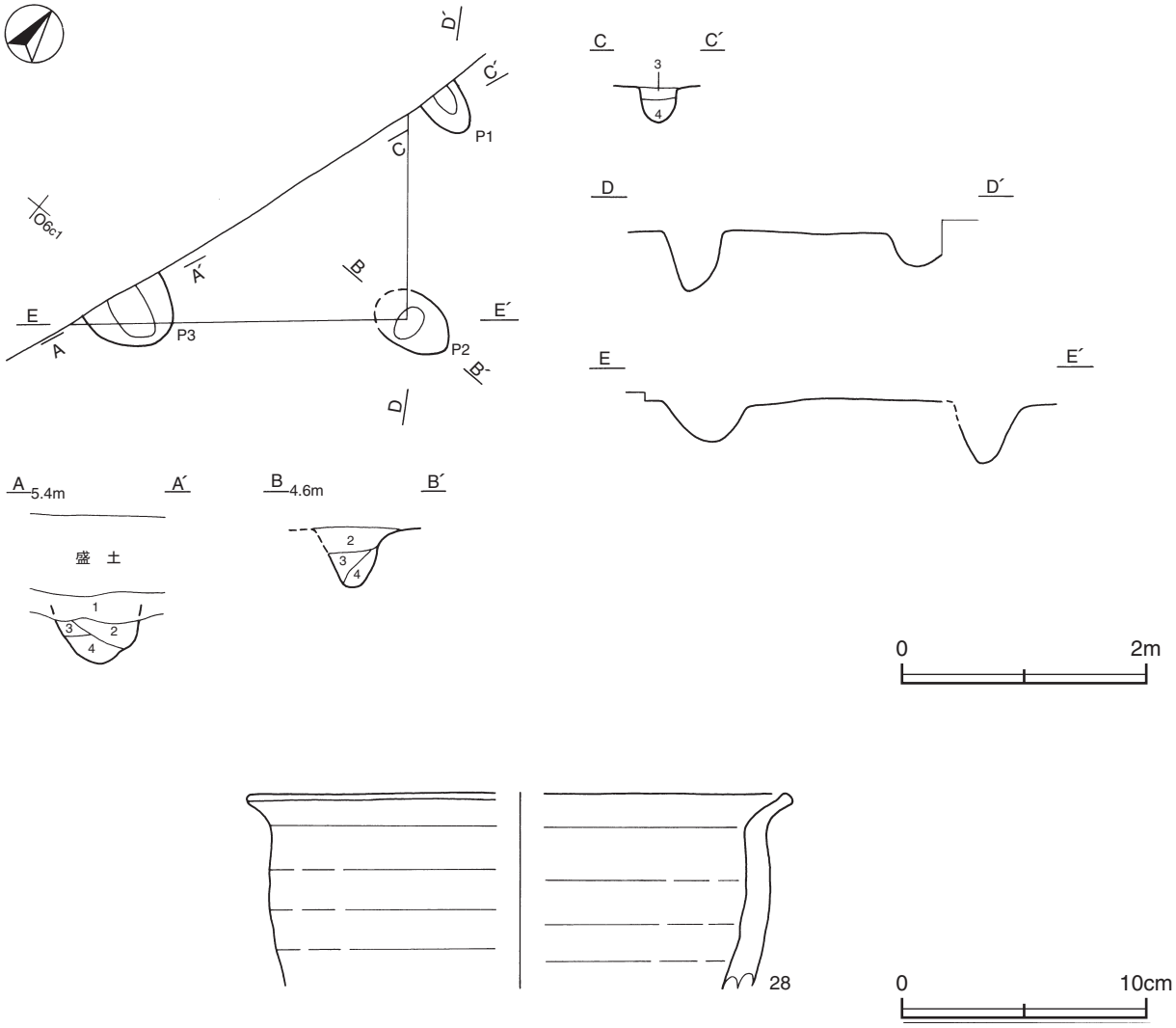
柱穴　３か所。平面形は楕円形で，深さは30～50㎝である。確認面の灰白色砂の上に堆積している第１層が旧地表と考えられる黒色砂であり，Ｐ３はこの層からの掘り込みが確認されている。第２～４層が柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）

1	黒	色（旧地表）	3	黒	色　灰白色砂多量
2	黒	色　灰白色砂微量	4	黒	色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片18点（坏１，甕17）が出土している。28はＰ２の覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器の年代及び出土状況及び周囲の住居跡の時期から，９世紀前葉と考えられる。また，第４号掘立柱建物の配置関係と時期を考慮すると，第４号掘立柱建物から本建物への変遷が推測される。



第205図　第６号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第６号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第205図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
28	土師器	甕	[21.8]	(8.0)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	灰黄褐	普通	ロクロナデ	P２覆土中	10%

表31　奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

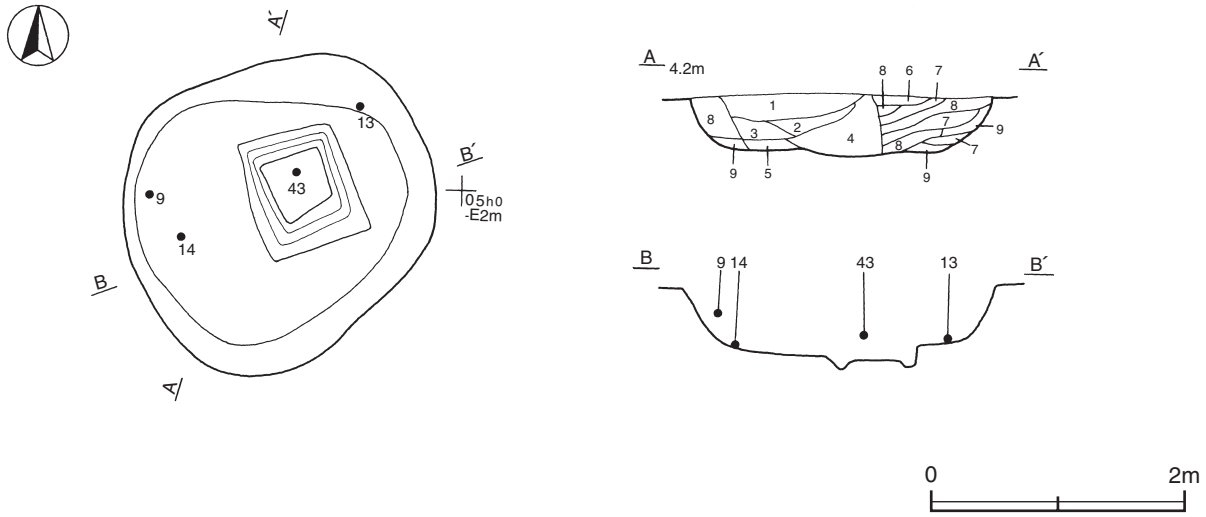
番号	位 置	桁行(南北)方向	柱間数 桁行×梁行 (間)	構 造	柱　穴			主な出土遺物	時 期	備　考 新旧関係（旧→新）
					柱穴数	平面形	深さ(㎝)			
1	N６j2～O６b2	N－52°－E	２×１	側柱　東西棟	6	円形・楕円形	26～70	土師器	８世紀後葉～ ９世紀前葉	
2	O６b1～O６c2	N－29°－W	２×１	側柱　南北棟	6	円形・楕円形	30～55	土師器　須恵器	８世紀後葉～ ９世紀前葉	
3	O６b1～O５c0	N－52°－E	(３)×(１)	［東西棟］	5	［楕円形］	10～54	土師器　不明鉄製品	８世紀後葉	本跡→SB4
4	O６b1・O６c1	N－52°－E	３×(１)	［東西棟］	5	楕円形	28～54	土師器　釘ヵ	８世紀後葉～ ９世紀前葉	SB3→本跡
5	O６c1・O６d2	N－30°－W	(１)×(２)	［南北棟］	4	円形・楕円形	18～48	土師器	８世紀後葉～ ９世紀前葉	
6	O６b1・O６c1	N－51°－E	(２)×(１)	［東西棟］	3	楕円形	30～50	土師器	９世紀前葉	

(3) 井戸跡

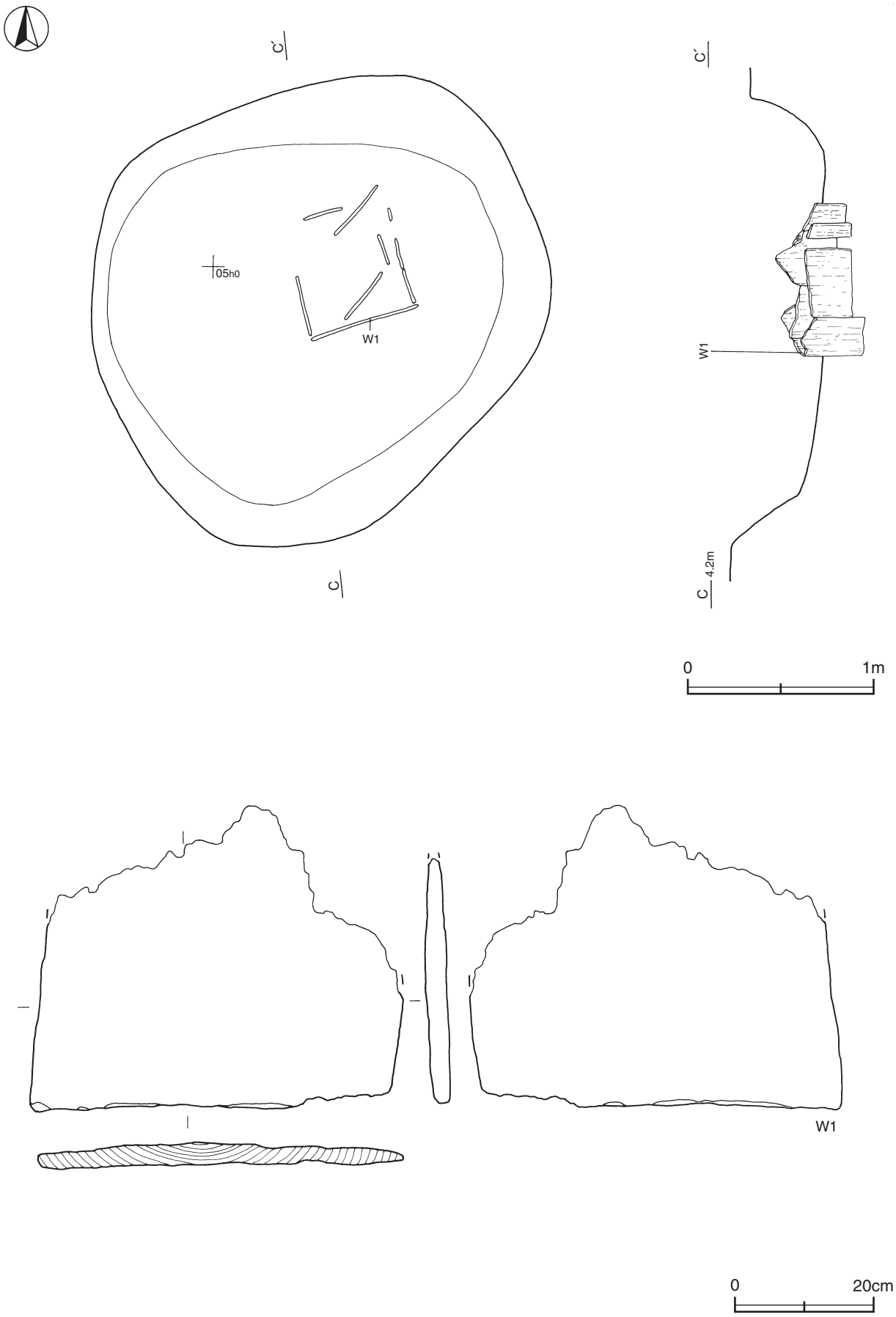
第２号井戸跡（第206～208図）

位置　Ｏ５h0区，標高4.0mほどの低地に位置している。

規模と形状　掘り方は長径2.7m，短径2.4mの楕円形で，長径方向はＮ－28°－Ｅである。深さは50㎝で地山の砂層に達するが，湧水は認められない。壁は外傾して立ち上がっている。底面やや東寄りの位置に，深さ10㎝ほどの溝を長軸1.0m，短軸0.8mの長方形に巡らしている。その溝の三方に，それより幅が薄い板材が組み込まれた状態で確認されている。掘り方を設け，底面に四角く巡らした溝に横板を組み込んで井戸枠を構築し，裏込めを埋土したたものと考えられる。なお，板材を固定する隅柱や横桟などや，砂層の底面に礫の敷き詰めなどの浄水施設は確認されていない。



第206図　第２号井戸跡実測図



第207図　第２号井戸跡・出土遺物実測図

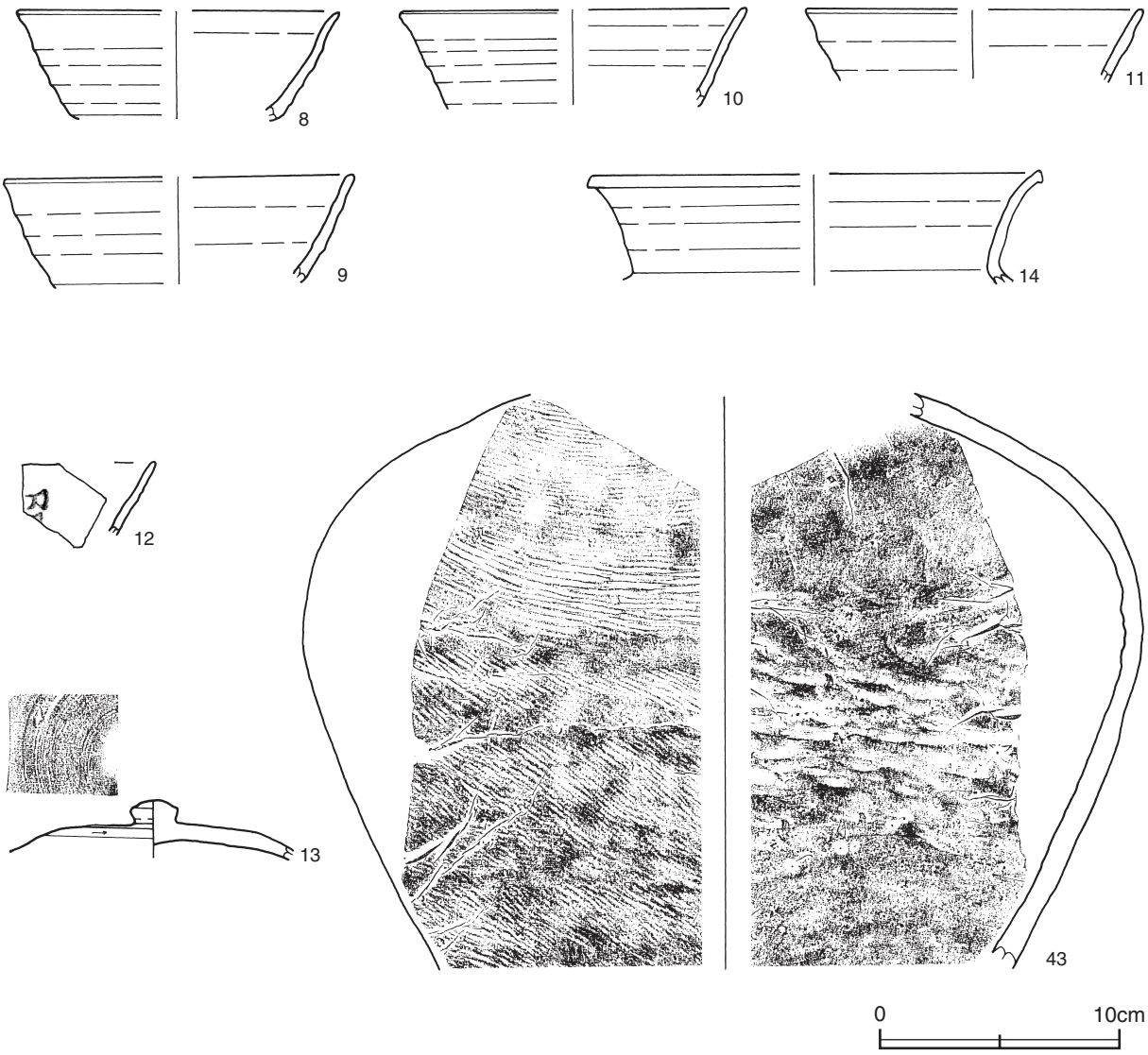
覆土　９層に分層される。第１～５層は周囲から砂が流入した堆積状況であるが，人為堆積の可能性も考えられる。第６～９層が互層をなす裏込めの埋土である。堆積層と比べて締まりに差はない。

土層解説

1	黒　色	黄色砂中量	
2	黒　色	灰白色砂・黄色砂微量	
3	黒　色	灰白色砂微量	
4	黒　色	黄色砂微量	
5	黒　色	黄色砂中量	
6	黒　色	黄色砂多量	
7	黒　色	灰白色砂・黄色砂多量	
8	灰白色	黒色砂・黄色砂多量	
9	黒　色	灰白色砂多量	

遺物出土状況　土師器片216点（坏・鉢75，甕141），須恵器片104点（坏・高台付坏94，蓋４，瓶３，甕３），板材７点が出土している。また，流れ込んだ石鏃１点も出土している。８・12・43のような堆積層から出土したものと，９・13・14のように埋土から出土したものに分かれる。また，13は隣接する第１号泥炭層を覆っている砂層から出土した破片と接合したものである。

所見　時期は，出土土器から８世紀中葉～後葉と考えられる。井戸枠Ｗ１を樹種同定した結果，針葉樹のモミ属マツ科であることが判明している。この樹木は保存性がやや低いが，割裂性が高く，板状の加工が容易なため井戸枠材に利用されたと考察されている。詳しい分析結果は，付章を参照されたい。



第208図　第２号井戸跡出土遺物実測図

第２号井戸跡出土遺物観察表（第207・208図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備　考
8	須恵器	坏	[13.4]	(4.5)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	堆積層	10%
9	須恵器	坏	[14.5]	(4.5)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	裏込め埋土	10%
10	須恵器	坏	[14.4]	(4.1)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	堆積層	10%
11	須恵器	坏	[14.0]	(3.0)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	堆積層	10%
12	須恵器	坏	－	(3.2)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	堆積層	10% 墨書「□」
13	須恵器	蓋	－	(2.4)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	裏込め埋土	30%
14	須恵器	瓶	[18.8]	(4.7)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ	裏込め埋土	10%
43	須恵器	甕	－	(24.0)	－	白色粒子・透明粒子	灰	普通	外面上位横位の平行叩き　中位斜方向の平行叩き 下位叩き後ナデ　内面当て具無文痕　ナデ	堆積層	10%

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重　量	特　徴	出土位置	備　考
W１	部材	井戸構築材	(43.7)	53.6	3.1	(4,000.0)	板目　推定径70㎝の木材	底面	

（4）土坑

第25号土坑（第209図）

位置　Ｒ４j9区，標高4.0ｍほどの低地に位置している。

重複関係　第28号土坑を掘り込んでいる。

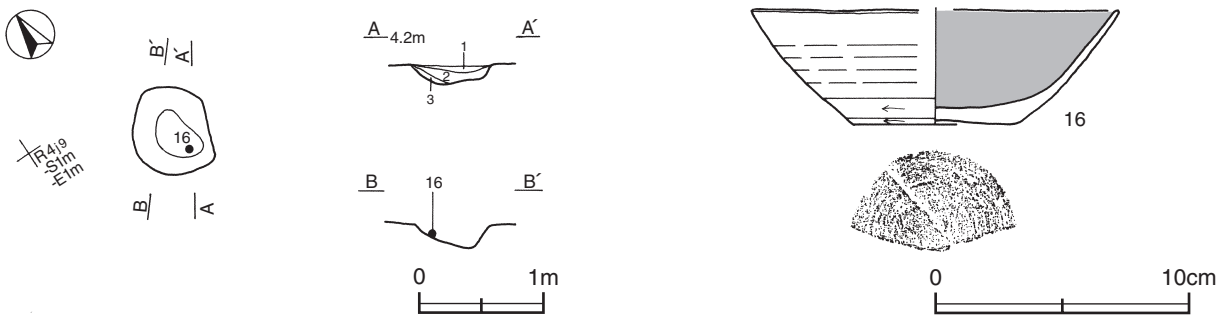
規模と形状　長径0.8ｍ，短径0.6ｍの楕円形で，長径方向はＮ－31°－Ｅである。深さは15㎝で，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片４点（坏）が出土している。16は底面から出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀中葉と考えられる。



第209図　第25号土坑・出土遺物実測図

第25号土坑出土遺物観察表（第209図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備　考
16	土師器	坏	[14.4]	4.5	6.4	黒雲母・白色粒子 透明粒子	橙	普通	ロクロナデ　体部下端回転ヘラ削り　内面ヘラ磨きヵ　底部回転ヘラ削り調整	底面	30%

第27号土坑（第210図）

位置　Ｒ４j9区，標高4.0mほどの低地に位置している。

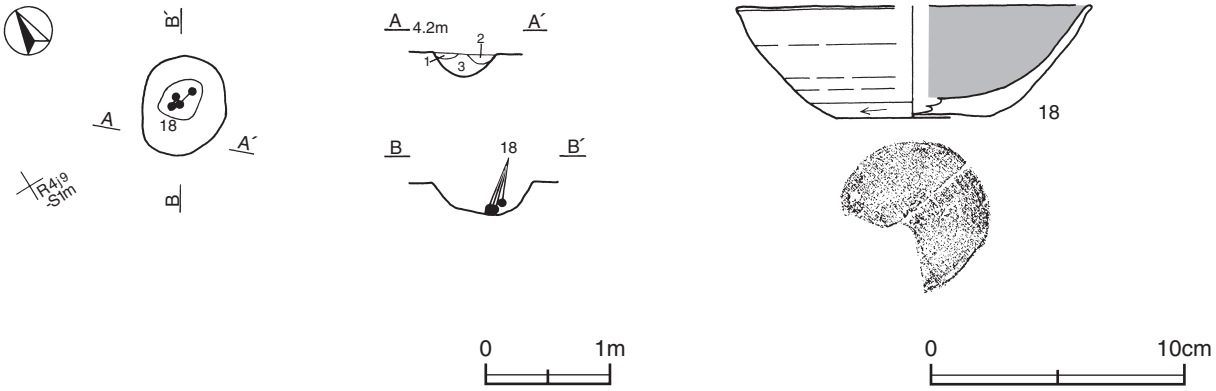
規模と形状　長径0.8m，短径0.6mの楕円形で，長径方向はＮ－31°－Ｅである。深さは18cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂中量

遺物出土状況　土師器片６点（坏），須恵器片10点（坏・高台付坏）が出土している。18は底面及び覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から９世紀中葉と考えられる。



第210図　第27号土坑・出土遺物実測図

第27号土坑出土遺物観察表（第210図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備　考
18	土師器	坏	[13.8]	4.4	6.0	黒雲母・白色粒子 透明粒子・赤色粒子	橙	普通	ロクロナデ　体部下端回転ヘラ削り　内面ヘラ磨きヵ　底部回転ヘラ削り調整	底面 覆土下層	40%

第29号土坑（第211図）

位置　Ｒ５d1区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

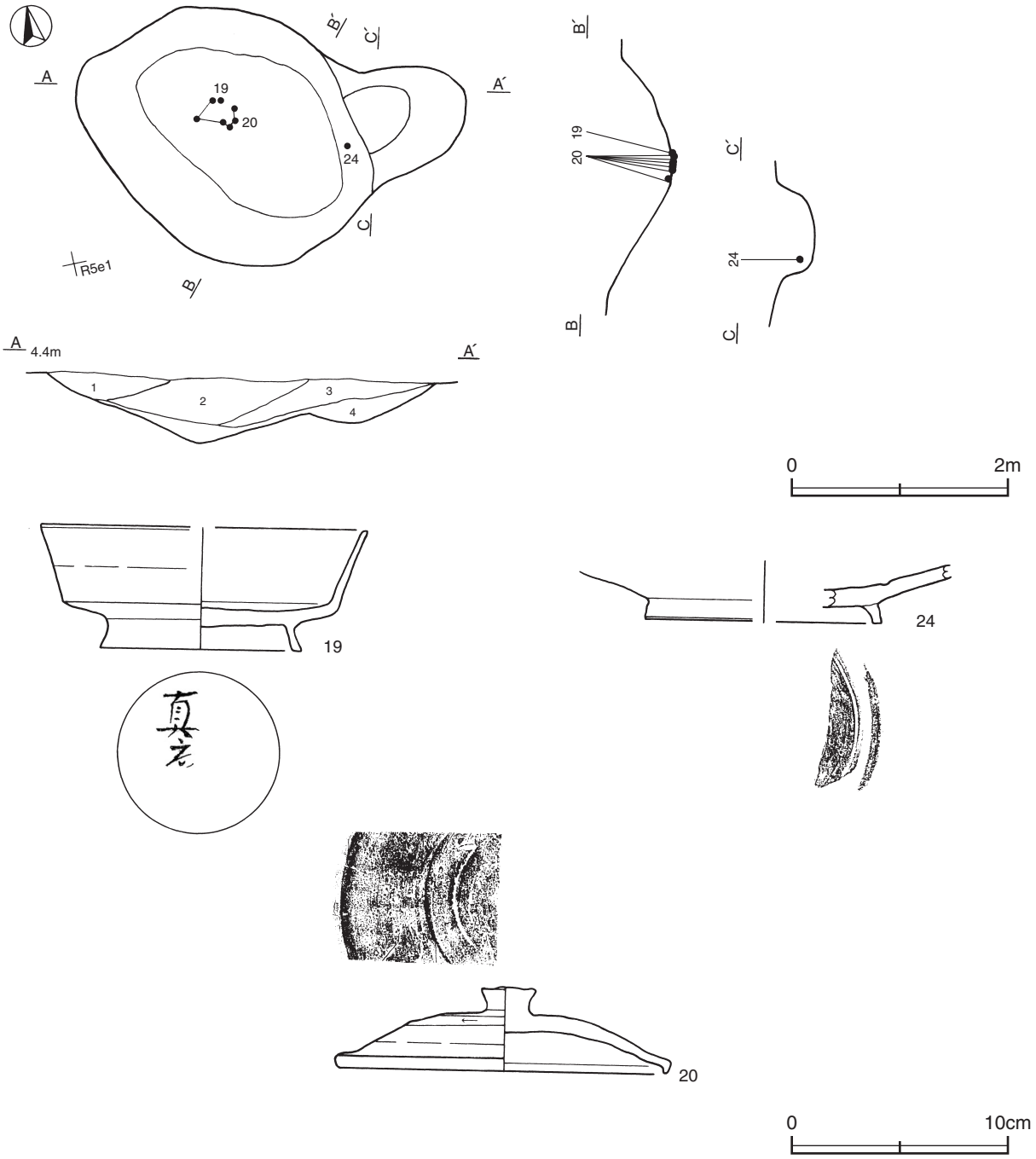
規模と形状　長径3.6m，短径2.3mの不整楕円形で，長径方向はＮ－77°－Ｗである。深さは57cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっており，突出した部分には平坦部を持っている。

覆土　４層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　灰白色砂中量
3　黒　　色　灰白色砂微量
4　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量

遺物出土状況　土師器片53点（坏・鉢17，甕36），須恵器片29点（坏・高台付坏21，蓋７，盤１）が出土している。19・20は底面からそれぞれ出土しており，19は逆位の状態である。24は覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第211図　第29号土坑・出土遺物実測図

第29号土坑出土遺物観察表（第211図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備　考
19	須恵器	高台付坏	[15.0]	5.7	9.2	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	底面	60% PL25 墨書「真家」
20	須恵器	蓋	15.4	3.9	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り調整	底面	70% PL25
24	須恵器	盤	－	(2.8)	[11.0]	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	覆土下層	10%

第30号土坑（第212図）

位置　Ｏ５g0区，標高4.0mほどの低地に位置している。

重複関係　第１号井戸に掘り込まれている。

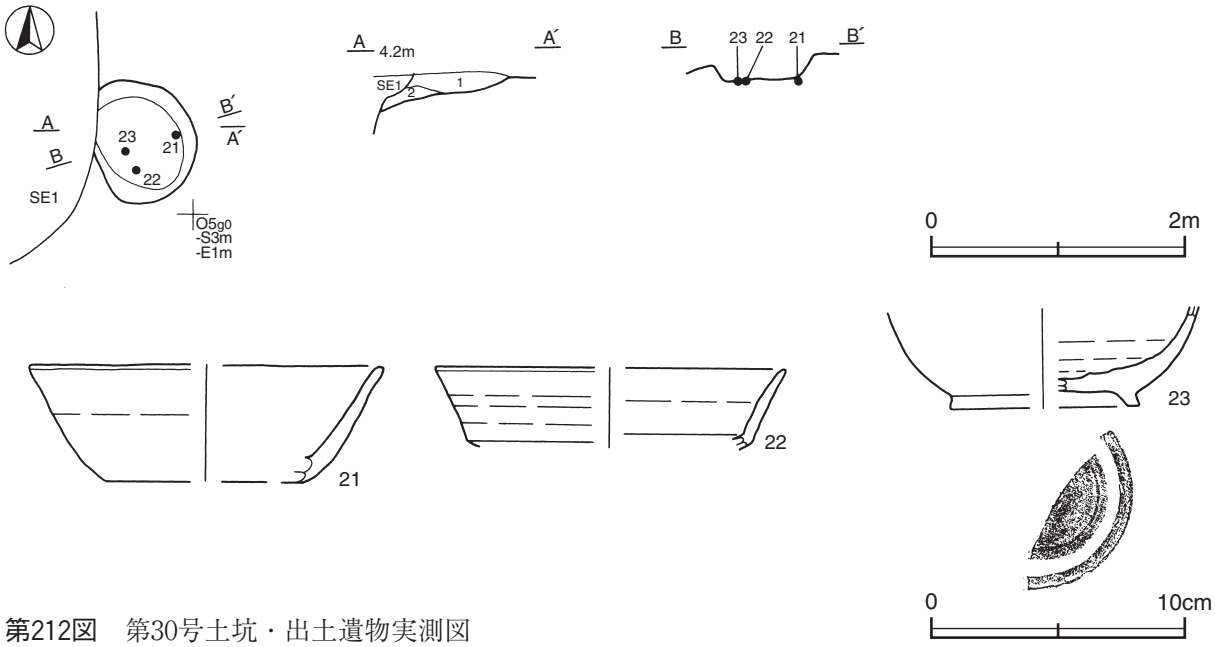
規模と形状　長径1.0m，短径0.8mの楕円形で，長径方向はＮ－32°－Ｗである。深さは22cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量　　2　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片33点（坏・鉢10，甕23），須恵器片18点（坏・高台付坏15，蓋１，瓶２）が出土している。21～23は底面からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から９世紀中葉と考えられる。



第212図　第30号土坑・出土遺物実測図

第30号土坑出土遺物観察表（第212図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
21	土師器	坏	[13.8]	4.6	[7.6]	黒雲母・白色粒子 透明粒子	灰白	普通	ロクロナデ　底部調整不明	底面	20%
22	須恵器	高台付坏	[13.8]	(3.1)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	底面	10%
23	須恵器	瓶	－	(3.9)	[7.6]	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白	普通	ロクロナデ	底面	20%

第35号土坑（第213図）

位置　Ｏ５h9区，標高4.0mほどの低地に位置している。

規模と形状　長径1.7m，短径1.5mの楕円形で，長径方向はＮ－74°－Ｅである。深さは70cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

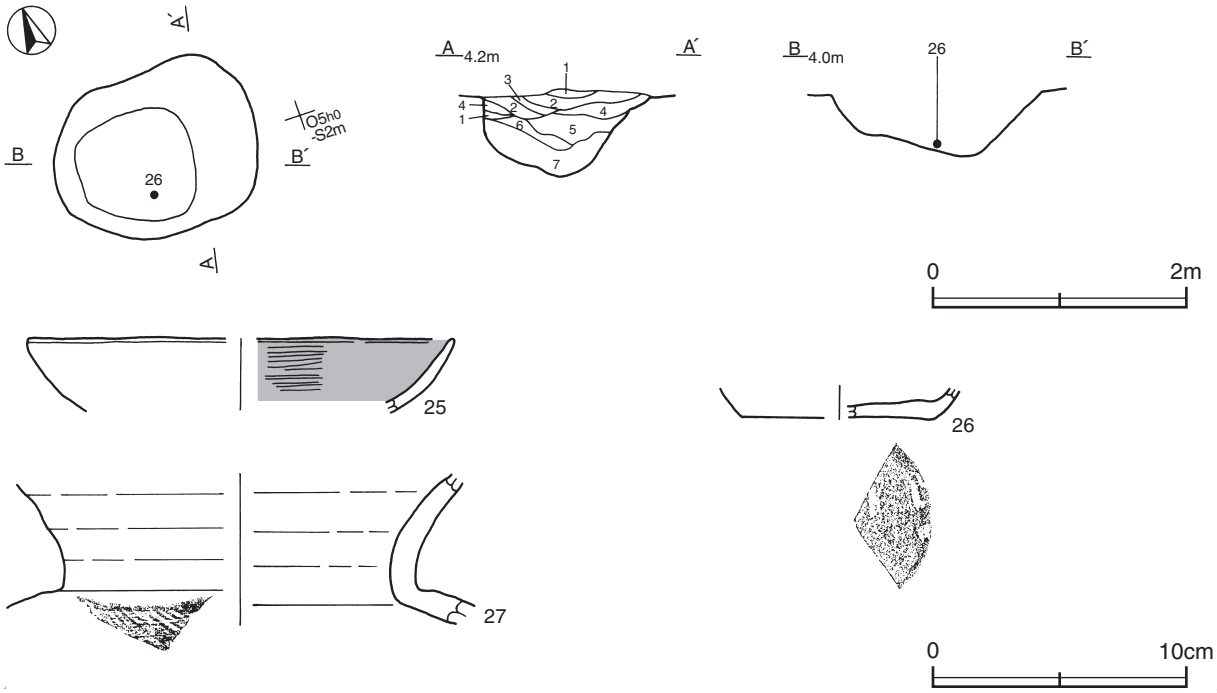
覆土　７層に分層される。６層のように泥炭層の水分の多い粘質土が堆積していることや，互層をなしていることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　灰　白　色
2　青　　灰　灰白色砂微量
3　黄　　色
4　黄　　色　黒色砂少量
5　黒　　色　黄色砂中量
6　黒　　色　鉄分多量（泥岩）
7　黒　　色　灰白色砂多量

遺物出土状況　土師器片58点（坏・鉢12，甕46），須恵器片16点（坏・高台付坏４，蓋２，甕10）が出土している。26は底面からわずかに浮いた位置から出土している。25・27は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から８世紀前葉と考えられる。



第213号　第35号土坑・出土遺物実測図

第35号土坑出土遺物観察表（第213図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備　考
25	土師器	坏	[17.0]	(2.9)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	褐	普通	外面ナデ　内面ヘラ磨き	覆土中	10%
26	須恵器	坏	－	(1.3)	[7.6]	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	底部ナデ調整	覆土下層	20%
27	須恵器	甕	－	(5.9)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	ロクロナデ　体部外面斜位の平行叩き	覆土中	5%

表32　奈良・平安時代の土坑一覧表

番号	位　置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時　代	備　考 新旧関係 (旧→新)
25	R４j9	N－31°－E	楕円形	0.8×0.6	15	外傾	平坦	自然	土師器	９世紀中葉	SK28→本跡
27	R４j9	N－31°－E	楕円形	0.8×0.6	18	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	９世紀中葉	
29	R５d1	N－77°－W	不整楕円形	3.6×2.3	57	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	８世紀後葉	
30	O５g0	N－32°－W	楕円形	1.0×0.8	22	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	９世紀中葉	本跡→SE1
35	O５h9	N－74°－E	楕円形	1.7×1.5	70	外傾	平坦	人為	土師器　須恵器	８世紀前葉	

2　中世の遺構と遺物

井戸跡１基が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

井戸跡

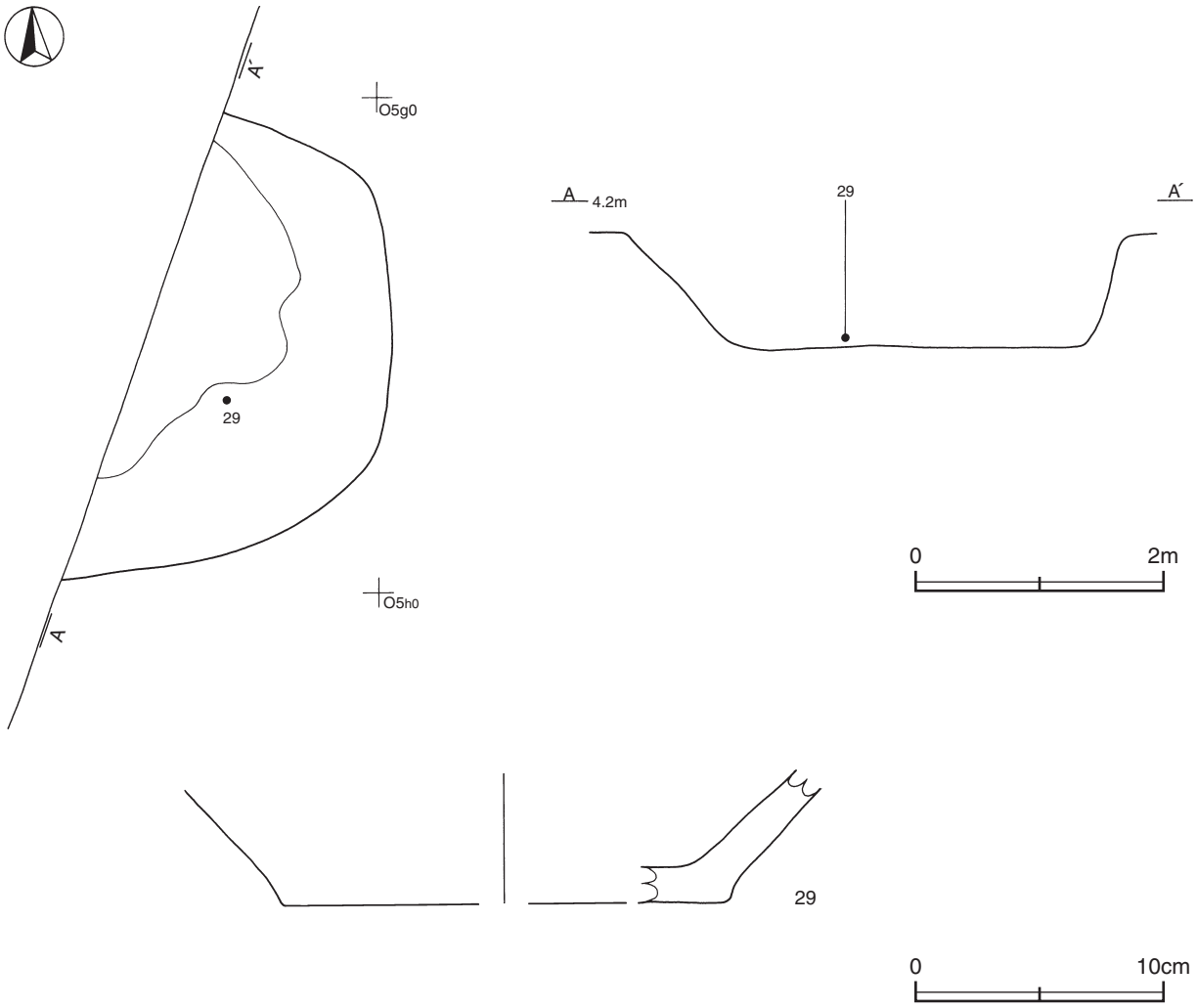
第１号井戸跡（第214図）

位置　Ｏ５g9区，標高4.0mほどの低地に位置している。

規模と形状　西側のほぼ半分は調査区域外であり，南北軸4.0m，東西軸2.0mのみ確認されている。平面形は楕円形と推測され，南北軸方向はＮ－18°－Ｅである。底面までの深さは90cmで，地山の砂層から湧水が確認されている。底面はほぼ平坦で，集水・浄水施設は確認されていない。壁は北壁がほぼ直立しており，その他の壁は外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況　陶器１点（甕）が出土している。また，流れ込んだ土師器片159点，須恵器片92点も出土している。29は底面からわずかに浮いた位置から出土している。

所見　時期は，出土土器から中世と考えられる。また，木片が覆土下層から底面にかけて出土しており，井戸枠等の施設の構築材か自然木かは不明である。



第214図　第１号井戸跡・出土遺物実測図

第１号井戸跡出土遺物観察表（第214図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備　考
29	陶器	甕	－	(5.4)	[18.0]	白色粒子・透明粒子	にぶい赤褐	普通	ナデ	覆土下層	10%

３　その他の遺構と遺物

柵跡１条，溝跡５条，土坑30基，ピット17基，その他泥炭層１か所が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

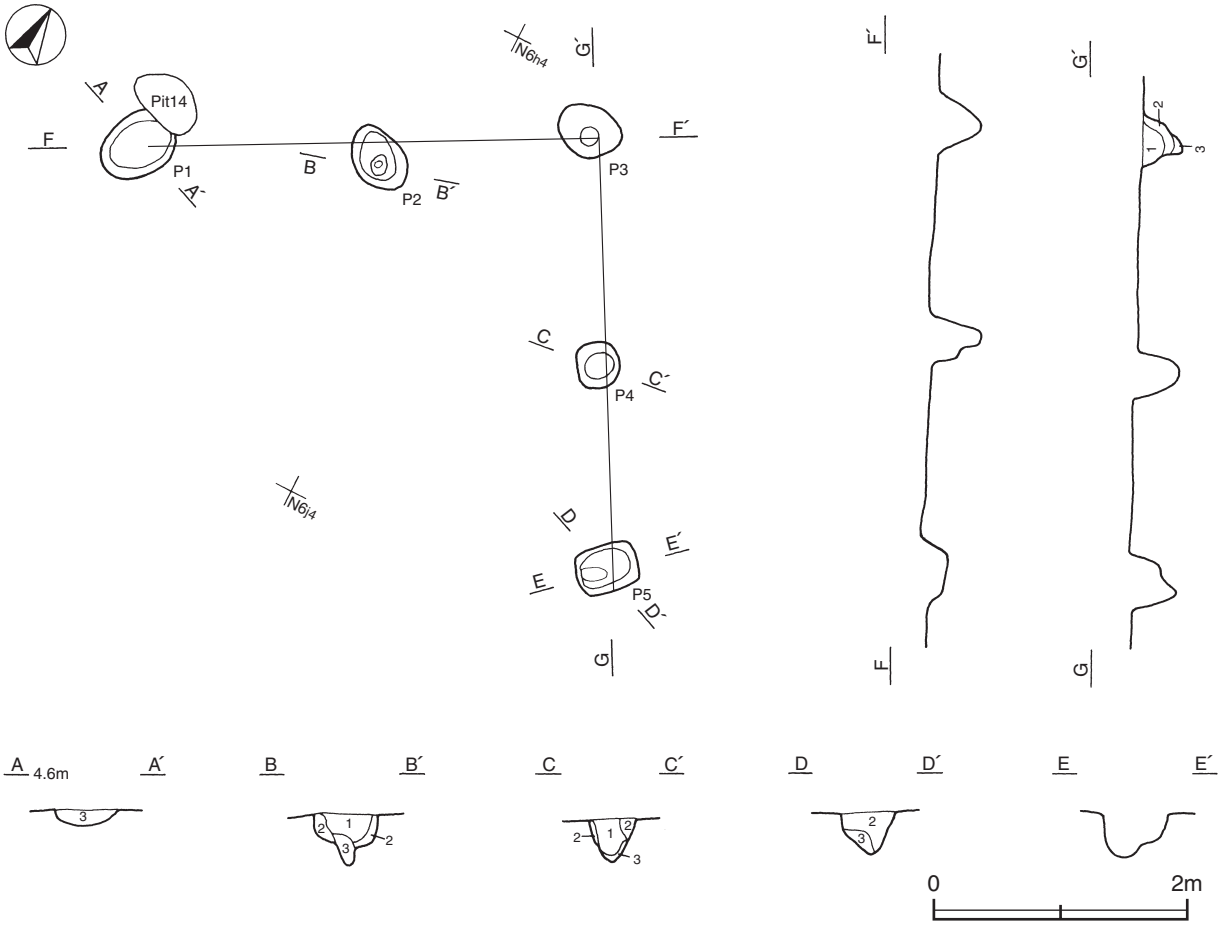
（1）柵跡

第１号柵跡（SK13，Pit1・２・12・13）（第215図）

位置　Ｎ６h3・Ｎ６h4区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第14号ピットに掘り込まれている。

規模と構造　東西２間，南北２間に柱穴が並んでおり，南北軸方向はＮ－28°－Ｗである。柱間寸法は,1.8m（６尺）を基調としている。



第215図　第１号柵跡実測図

柱穴　５か所。平面形は円形・楕円形で，深さは12～42㎝である。土層は第１～３層が柱を抜き取った後の覆土である。

土層解説（各ピット共通）
１　黒　　色　灰白色砂少量
２　黒　　色　灰白色砂多量
３　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，第１～６号掘立柱建物跡全て，もしくはそのいずれかに付属すると可能性も考えられるが，不明である。

（2）溝跡

第３号溝跡（第195・216図）

位置　Ｒ４i8～Ｓ４a6区，標高4.5ｍほどの砂丘上に位置している。

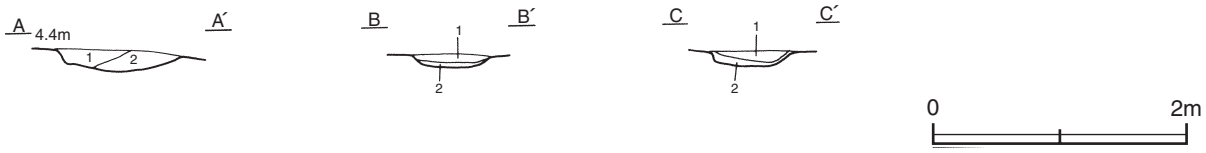
規模と形状　長さ9.6ｍのみ北東方向（Ｎ－32°－Ｅ）に直線的に確認されており，南西方向はさらに調査区域外に続いている。上幅68～113㎝，下幅30～85㎝，深さ８～16㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
１　黒　　色　灰白色砂微量
２　黒　　色　黒色砂中量

遺物出土状況　土師器片３点（坏１，甕２），須恵器２点（坏・高台付坏）が出土している。これらは摩滅していることから，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，不明である。



第216図　第３号溝跡実測図

第４号溝跡（第195・217図）

位置　Ｒ４i6・Ｒ４i7区，標高4.5ｍほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　1.4ｍのみ北西方向（Ｎ－44°－Ｗ）に直線的に確認されており，さらに調査区域外に続いている。上幅46～54㎝，下幅18㎝，深さ16～21㎝で，底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

第217図　第４号溝跡実測図

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，不明である。

第５号溝跡（第195・218図）

位置　Ｒ５f1～Ｒ４h9区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第24号土坑を掘り込んでいる。

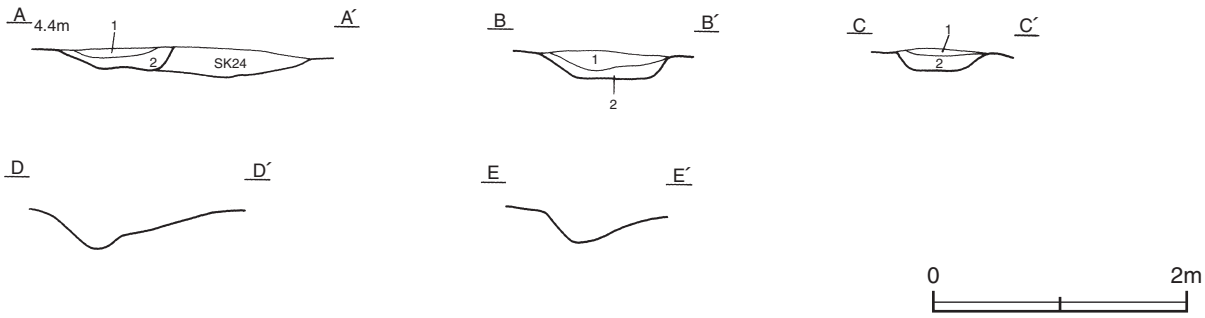
規模と形状　Ｒ４h9区の端部から北東方向（Ｎ－56°－Ｅ）にやや蛇行しながら延びており，さらに調査区域外に続いている。確認された長さは11.0mで，上幅60～100cm，下幅25～60cm，深さ16～22cmである。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片10点（坏ヵ８，甕２），須恵器５点（坏・高台付坏）が出土している。これらは摩滅していることから，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，不明である。



第218図　第５号溝跡実測図

第６号溝跡（第195・219図）

位置　Ｑ５a5～Ｑ５f4区，標高4.0mほどの砂丘上に位置している。

重複関係　第37号土坑を掘り込んでいる。

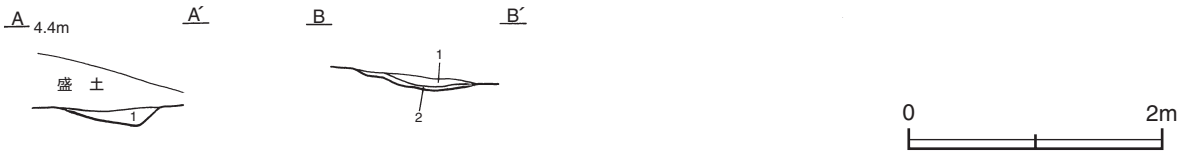
規模と形状　撹乱を受けているＱ５f4区付近が端部と推測され，そこから北東方向（Ｎ－17°－Ｅ）に湾曲しながら延びており，さらに調査区域外に続いている。確認された長さは23.0mで，上幅46～86cm，下幅25～65cm，深さ８～12cmである。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。周囲から砂が流入した堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂少量

遺物出土状況　土師器片１点（甕）が出土している。摩滅していることから，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，不明である。



第219図　第６号溝跡実測図

第７号溝跡（第195・220図）

位置　Ｎ６f3～Ｎ６h5区，標高4.5mほどの砂丘上に位置している。

規模と形状　北西方向（Ｎ－59°－Ｗ）に直線的に延びており，両端がさらに調査区域外に続いている。確認された長さは9.9mで，上幅180～280㎝，下幅160～260㎝，深さ４～10㎝である。底面はほぼ平坦で，確認された範囲では高低差はない。壁の立ち上がりは不明瞭である。

覆土　単一層である。層厚が薄いため，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂中量

所見　時期は，不明である。

第220図　第７号溝跡実測図

表33　その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				覆土	底面	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
				長さ(m)	上幅(㎝)	下幅(㎝)	深さ(㎝)					
3	R４i8～S４a6	N－32°－E	直線	(9.6)	68～113	30～85	８～16	自然	平坦	土師器　須恵器	不明	
4	R４i6・R４i7	N－44°－W	直線	(1.4)	46～54	18	16～21	自然	平坦	－	不明	
5	R５f1～R４h9	N－56°－E	蛇行	(11.0)	60～100	25～60	16～22	自然	平坦	土師器　須恵器	不明	SK24→本跡
6	Q５a5～Q５f4	N－17°－E	直線 湾曲	(23.0)	46～86	25～65	８～12	自然	平坦	土師器	不明	SK37→本跡
7	N６f3～N６h5	N－59°－W	直線	(9.9)	180～280	160～260	４～10	不明	平坦	－	不明	

(3) 土坑

時期が明確な遺構との重複関係がそれらより古い土坑１基を抽出し記述する。その他については実測図（第222～224図）と土層解説を掲載する。

第28号土坑（第221図）

位置　R 4 j9区，標高4.0mほどの低地に位置している。

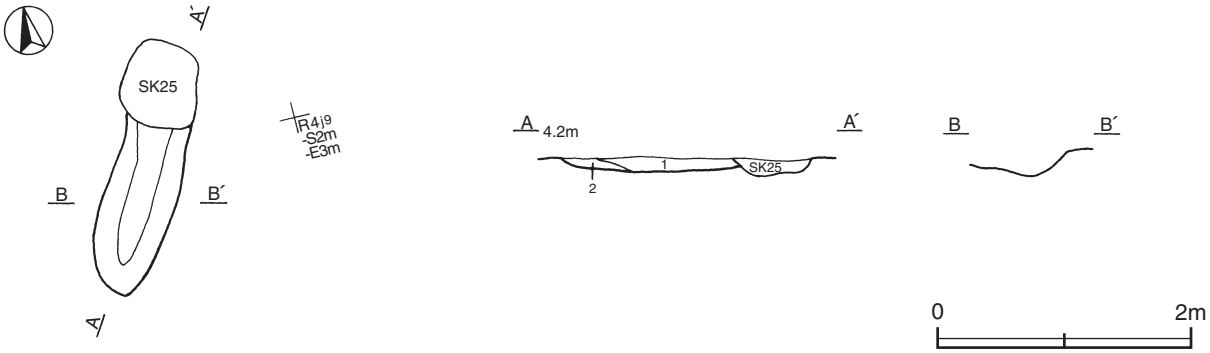
重複関係　第25号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長径1.3mのみ，短径0.6mの楕円形で，長径方向はN－31°－Eである。深さは13～20cmで，底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

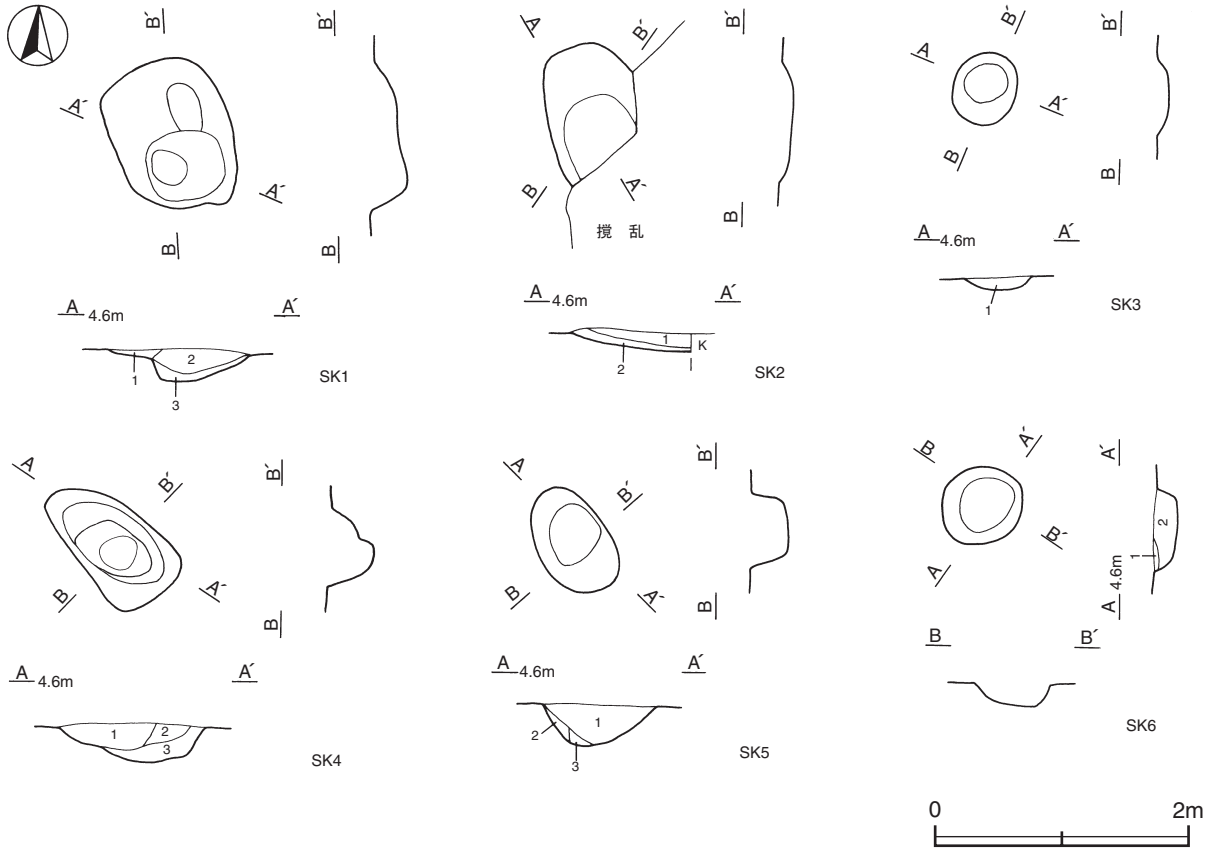
覆土　2層に分層される。周囲から砂が流入している堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量　　2　黒　　色　灰白色砂中量

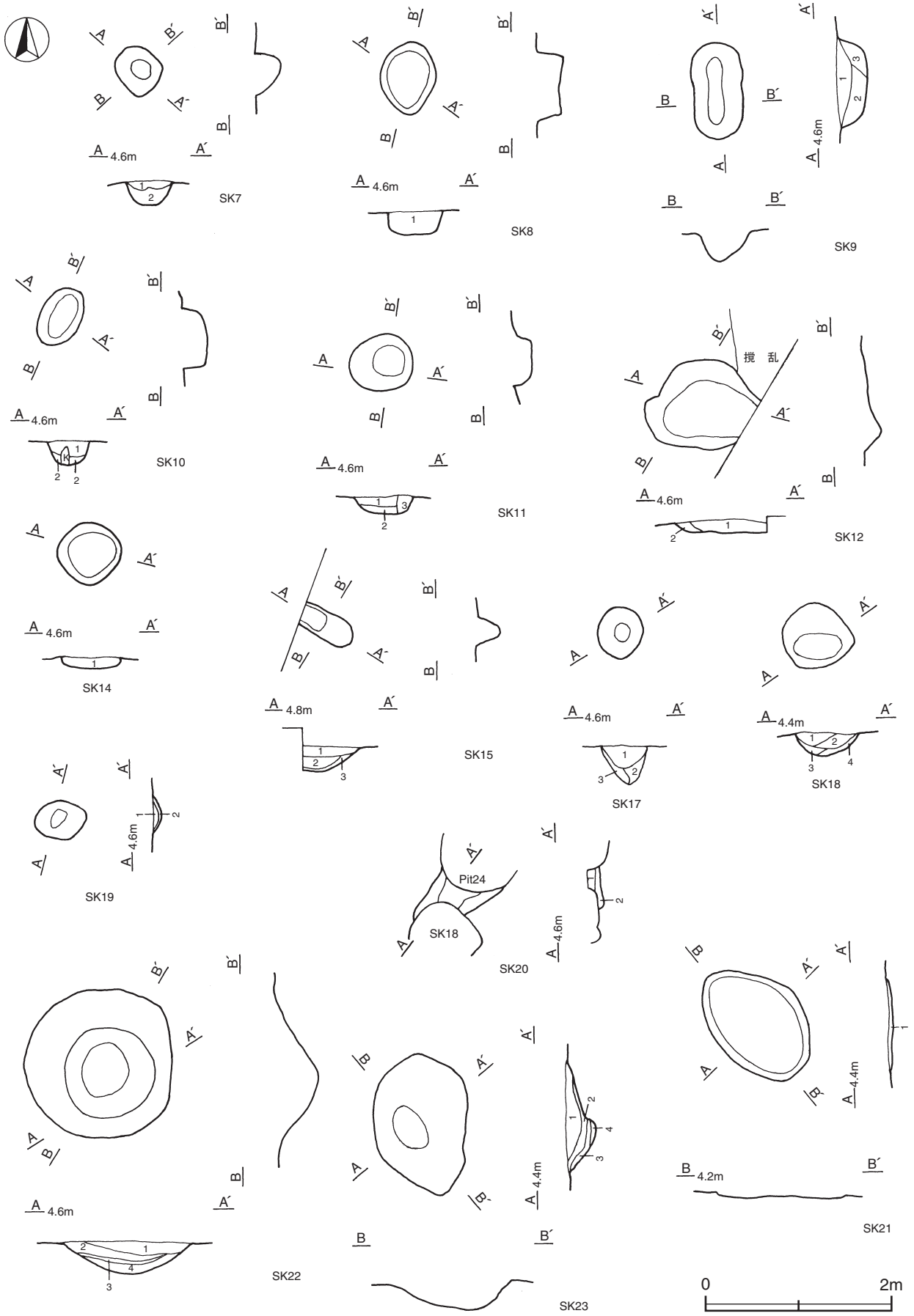
所見　時期は，重複関係から9世紀中葉以前であるが，明確でない。



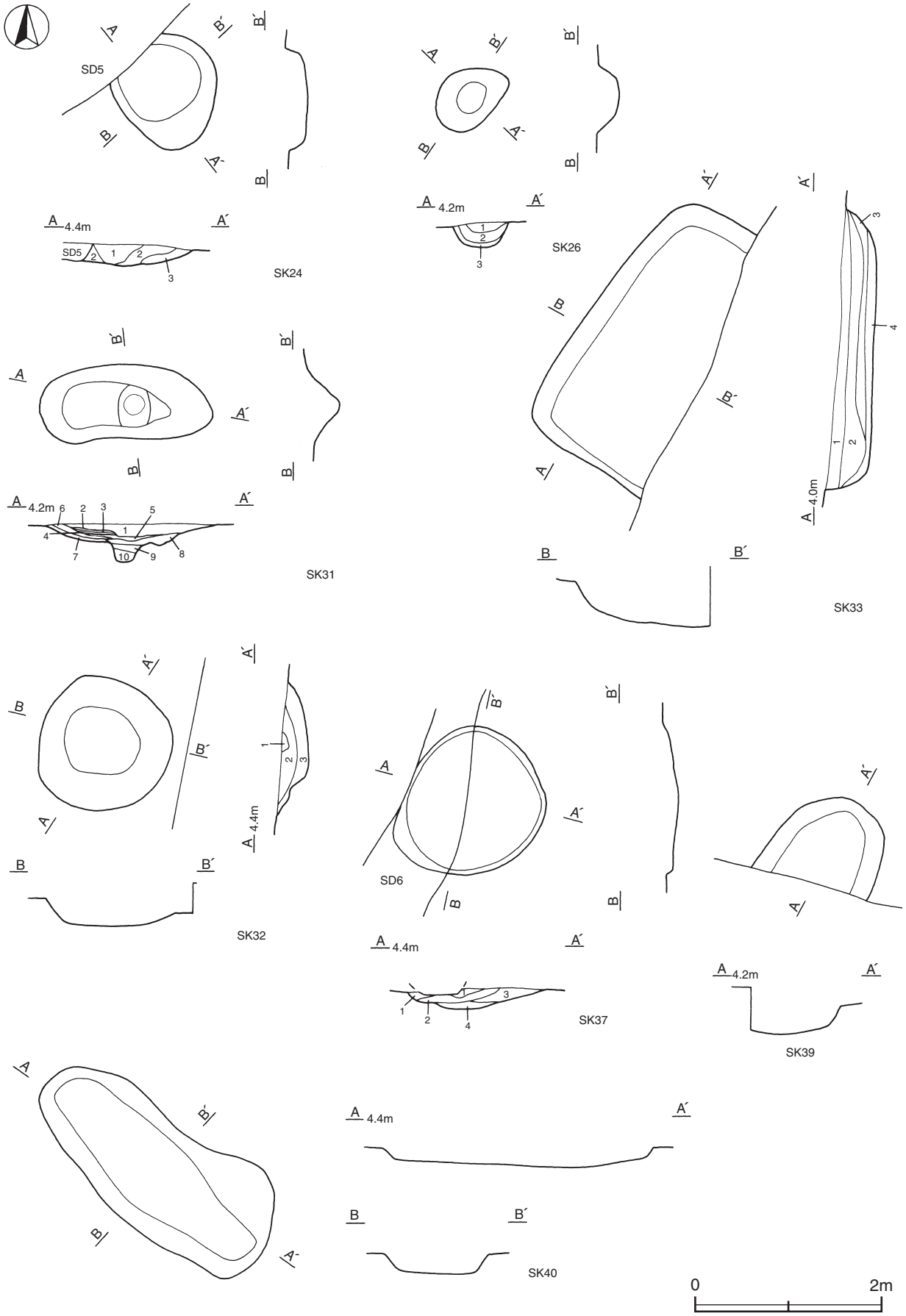
第221図　第28号土坑実測図



第222図　その他の土坑実測図(1)



第223図　その他の土坑実測図(2)



第224図　その他の土坑実測図(3)

第１号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色砂少量
2　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　炭化粒子・黄色砂少量

第２号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化物・灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量

第３号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂少量，炭化粒子・灰白色砂微量

第４号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子少量，黄色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子少量，灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量

第５号土坑土層解説
1　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂少量
3　黒　　色　黄色砂少量，炭化粒子微量

第６号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂少量，炭化粒子微量
2　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量

第７号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子少量，灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　焼土粒子・炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量

第８号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量

第９号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量
3　黒　　色　黄色砂少量

第10号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化物・黄色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量

第11号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量
2　灰　白　色　黒色砂多量
3　黒　　色　灰白色砂・黄色砂多量

第12号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量

第14号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂中量

第15号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量，炭化粒子微量
3　灰　白　色　灰白色砂・黄色砂少量

第17号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・黄色砂少量
3　黒　　色　黄色砂少量

第18号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂微量
3　黄　　色　黒色砂少量
4　黒　　色　黄色砂中量

第19号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量

第20号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色粒子微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量

第21号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量

第22号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　黄色砂微量
4　黒　　色　黄色砂中量

第23号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量
4　黒　　色　灰白色砂少量

第24号土坑土層解説
1　黒　　色　炭化物・灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂中量

第26号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂多量

第31号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　灰　白　色
3　黒　　色
4　灰　白　色
5　黒　　色
6　灰　白　色
7　黒　　色
8　黒　　色　厚さ５㎜ほどの灰白色砂が水平に堆積
9　黒　　色　灰白色砂少量
10　黒　　色　灰白色砂中量

第32号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂微量

第33号土坑土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂微量
3　黒　　色　黄色砂少量
4　黒　　色　黄色砂中量

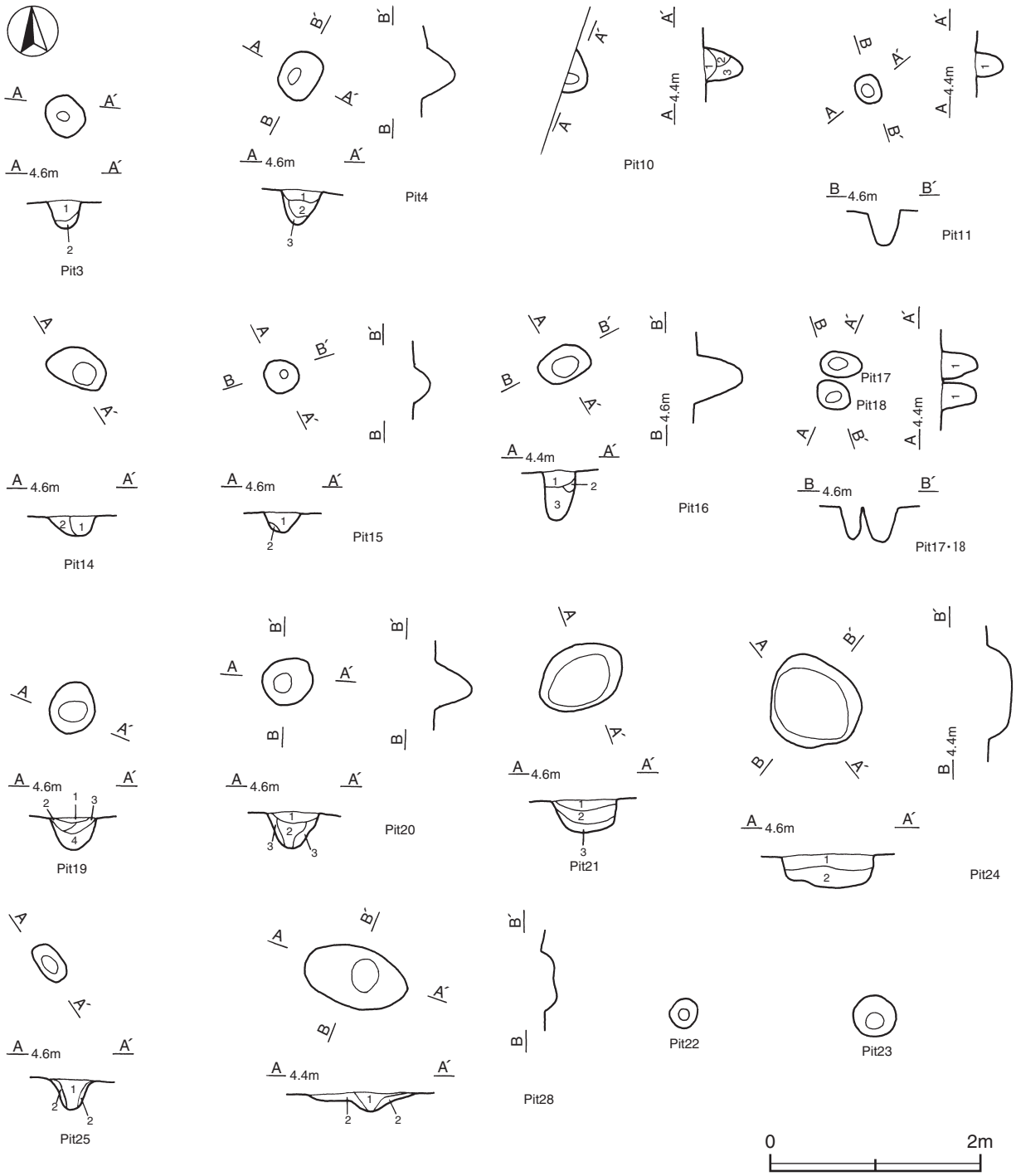
第37号土坑土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黄　　色　黒色砂微量
3　黒　　色　灰白色砂少量
4　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量

表34　その他の土坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新)
1	N 6 i 4	N−19°−W	不整楕円形	1.3×0.9	8～27	外傾	段状	自然	須恵器	不明	
2	N 6 i 5	N−34°−W	[楕円形]	(0.9)×0.8	14	外傾	平坦	自然	−	不明	
3	N 6 h 4	N−22°−E	楕円形	0.6×0.5	9	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
4	N 6 h 5	N−56°−W	不整楕円形	1.2×0.6	17～35	外傾	段状	自然	土師器	不明	
5	N 6 i 4	N−31°−W	楕円形	0.9×0.6	35	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
6	N 6 i 4	N−66°−E	楕円形	0.7×0.6	20	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
7	N 6 i 4	N−4°−E	楕円形	0.5×0.4	28	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
8	N 6 j 4	N−1°−E	楕円形	0.8×0.6	23	直立	平坦	自然	−	不明	
9	N 6 j 3	N−2°−W	楕円形	1.0×0.5	32	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
10	N 6 j 3	N−39°−E	楕円形	0.7×0.4	25	直立	平坦	自然	−	不明	
11	O 6 a 3	N−69°−E	楕円形	0.7×0.6	18	直立	平坦	自然	−	不明	
12	N 6 i 5	N−82°−W	[不整楕円形]	(1.2)×1.0	17	外傾	平坦	自然	−	不明	
14	N 6 h 3	−	円形	0.6×0.6	12	外傾	平坦	自然	−	不明	
15	N 6 j 2	N−58°−W	[楕円形]	(0.6)×0.3	27	外傾	平坦	自然	−	不明	
17	O 6 c 1	N−2°−W	楕円形	0.6×0.5	45	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
18	O 6 d 1	N−23°−W	不整楕円形	0.8×0.7	24	外傾	平坦	自然	土師器	不明	SK20→本跡
19	O 5 d 0	N−73°−E	楕円形	0.6×0.4	10	外傾	平坦	自然	−	不明	
20	O 6 c 1	N−38°−E	不明	(0.2)×0.6	32	不明	平坦	自然	−	不明	本跡→SK18, Pit24
21	S 4 a 8	N−37°−W	楕円形	1.4×1.0	3	不明	平坦	自然	須恵器	不明	
22	R 4 j 8	−	円形	1.7×1.7	35	外傾	平坦	自然	須恵器	不明	
23	R 4 j 8	N−8°−W	不整楕円形	1.5×1.0	32	外傾	段状	自然	土師器	不明	
24	R 4 g 0	N−19°−W	[楕円形]	(1.1)×1.1	22	外傾	平坦	自然	土師器　須恵器	不明	本跡→SD5
26	R 4 j 9	N−68°−E	楕円形	0.8×0.6	27	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
28	R 4 j 9	N−31°−E	[楕円形]	(1.3)×0.6	13～20	外傾	平坦	自然	−	9世紀中葉以前	本跡→SK25
31	O 5 g 0	N−85°−W	楕円形	1.9×0.8	42	外傾	段状	自然	土師器	不明	
32	Q 5 j 3	N−68°−E	楕円形	1.5×1.4	29	外傾	平坦	自然	土師器	不明	
33	Q 5 f 5	N−34°−E	[長方形]	3.0×(1.5)	42	外傾	平坦	自然	−	不明	
37	Q 5 c 5	N−31°−E	楕円形	1.7×1.5	21	緩斜	平坦	自然	−	不明	本跡→SD6
39	O 5 h 0	N−29°−E	[楕円形]	(1.0)×1.2	28	外傾	平坦	−	−	不明	
40	R 4 h 9	N−54°−W	不整楕円形	2.9×1.3	19	外傾	平坦	−	土師器　須恵器	不明	

(4) ピット（第225図）

市の調査で，「柱穴状遺構」と報告されているものと形状が類似しているものを，今回「ピット」と呼称して実測図と土層解説を掲載する。



第225図　ピット実測図

第３号ピット土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量
2　黒　　色　黄色砂少量

第４号ピット土層解説
1　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量
3　黒　　色　黄色砂微量

第10号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
3　黒　　色　黄色砂少量

第11号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量

第14号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量

第15号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・黄色砂少量

第16号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黄　　色　黒色砂中量
3　黒　　色　炭化粒子・黄色砂微量

第17号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量

第18号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂少量

第19号ピット土層解説
1　黒　　色　黄色砂微量
2　黒　　色　焼土粒子・黄色砂微量
3　黒　　色　炭化物・焼土粒子・灰白色砂・黄色砂微量
4　黒　　色　黄色砂少量

第20号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂少量
2　黒　　色　黄色砂少量
3　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量

第21号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂少量
3　黒　　色　炭化粒子・黄色粒子微量

第24号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量

第25号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂・黄色砂微量
2　黒　　色　灰白色砂・黄色砂少量

第28号ピット土層解説
1　黒　　色　灰白色砂微量
2　黒　　色　炭化粒子・灰白色砂微量

表35　ピット一覧表

番号	位置	平面形	規模 長径(cm)×短径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係（旧→新）
3	O 6 b2	楕円形	41×38	25	－	不明	
4	O 6 b2	楕円形	41×38	34	－	不明	
10	O 6 b1	［楕円形］	(21)×(39)	36	－	不明	
11	D 9 d1	楕円形	27×23	25	土師器　須恵器	不明	
14	N 6 h3	楕円形	57×35	20	－	不明	SA1→本跡
15	N 6 h3	円形	31×31	20	－	不明	
16	O 6 c1	楕円形	54×33	49	土師器	不明	
17	O 6 d1	楕円形	40×26	35	須恵器	不明	
18	O 6 d1	楕円形	36×27	33	－	不明	
19	N 6 j4	楕円形	51×43	33	土師器	不明	
20	N 6 j3	楕円形	51×45	36	－	不明	
21	O 6 a2	楕円形	88×62	31	－	不明	
22	O 6 c4	楕円形	29×27	22	－	不明	SI2→本跡
23	O 6 d4	楕円形	41×40	36	－	不明	SI2→本跡
24	O 6 c1	楕円形	94×86	33	－	不明	SK20→本跡
25	N 6 j2	楕円形	40×24	31	－	不明	
28	R 5 e1	楕円形	100×55	19	－	不明	

（5）泥炭層

第１号泥炭層（第226・227図）

位置　Ｏ５g0～Ｏ６i1区，標高4.0mほどの低地に位置している。

規模と形状　最大長は南北5.8mの扇形に硬化した青灰色の砂層が確認され，その下層から最大長が南北3.8mの扇形に泥炭層が確認されている。

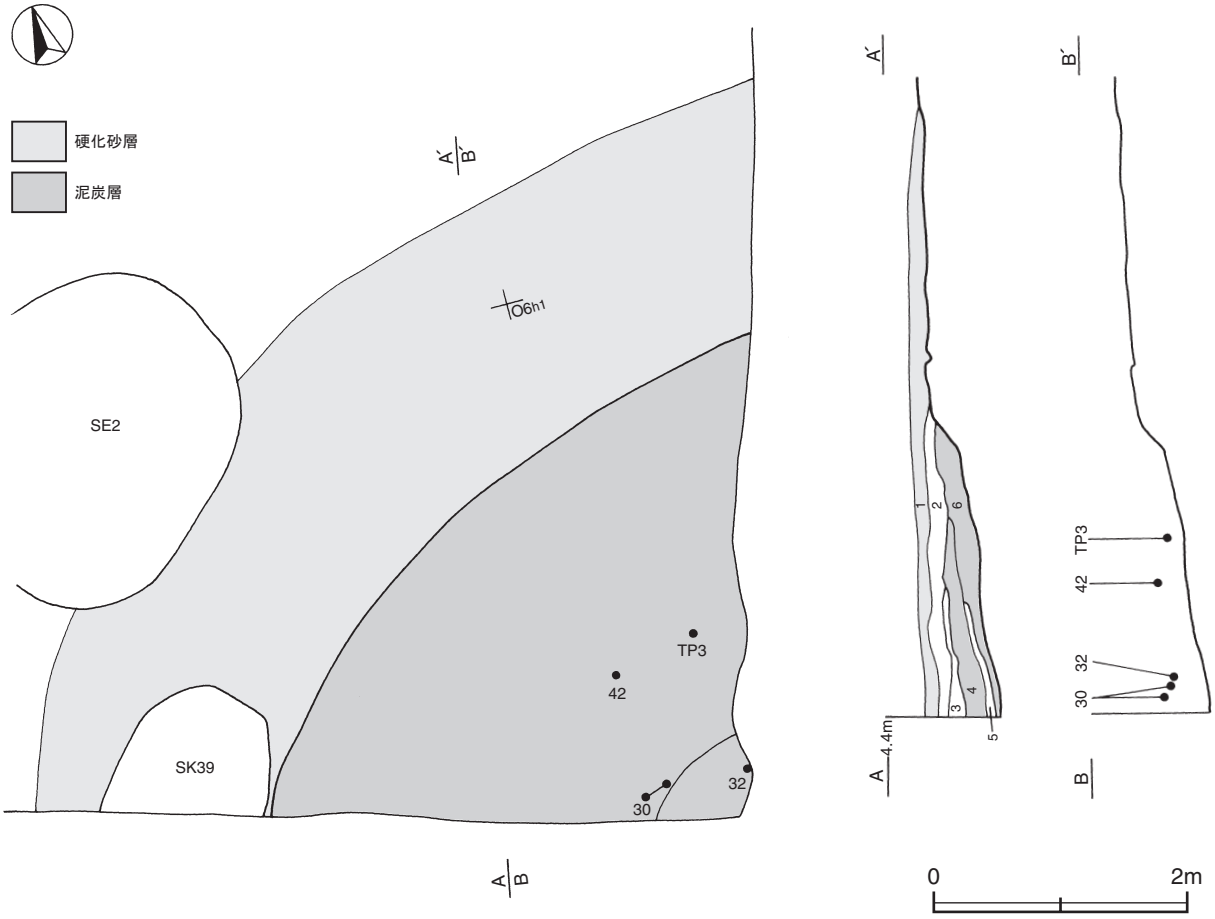
土層　最大厚150㎝の現在の盛土層直下に６層が確認されている。第１層は硬化した青灰色砂層，第２層が黒色砂層，第３層が灰白色砂層，第４層が植物遺体を多量に含んでいる黒色粘質土層，第５層が灰白色砂層，第６層が第４層と同様であり，第４層より樹木が多く出土する。その直下が地山の黄色砂である。地山まで達すると湧水が認められる。第２・３・５層の砂の間層は，周囲の砂が流入したものと考えられる

土層解説

1	青　灰　色　鉄分多量	4	黒　　色　植物遺体多量（泥炭層）
2	黒　　色　灰白色砂微量	5	灰　白　色
3	灰　白　色　黒色砂微量	6	黒　　色　植物遺体多量（泥炭層）

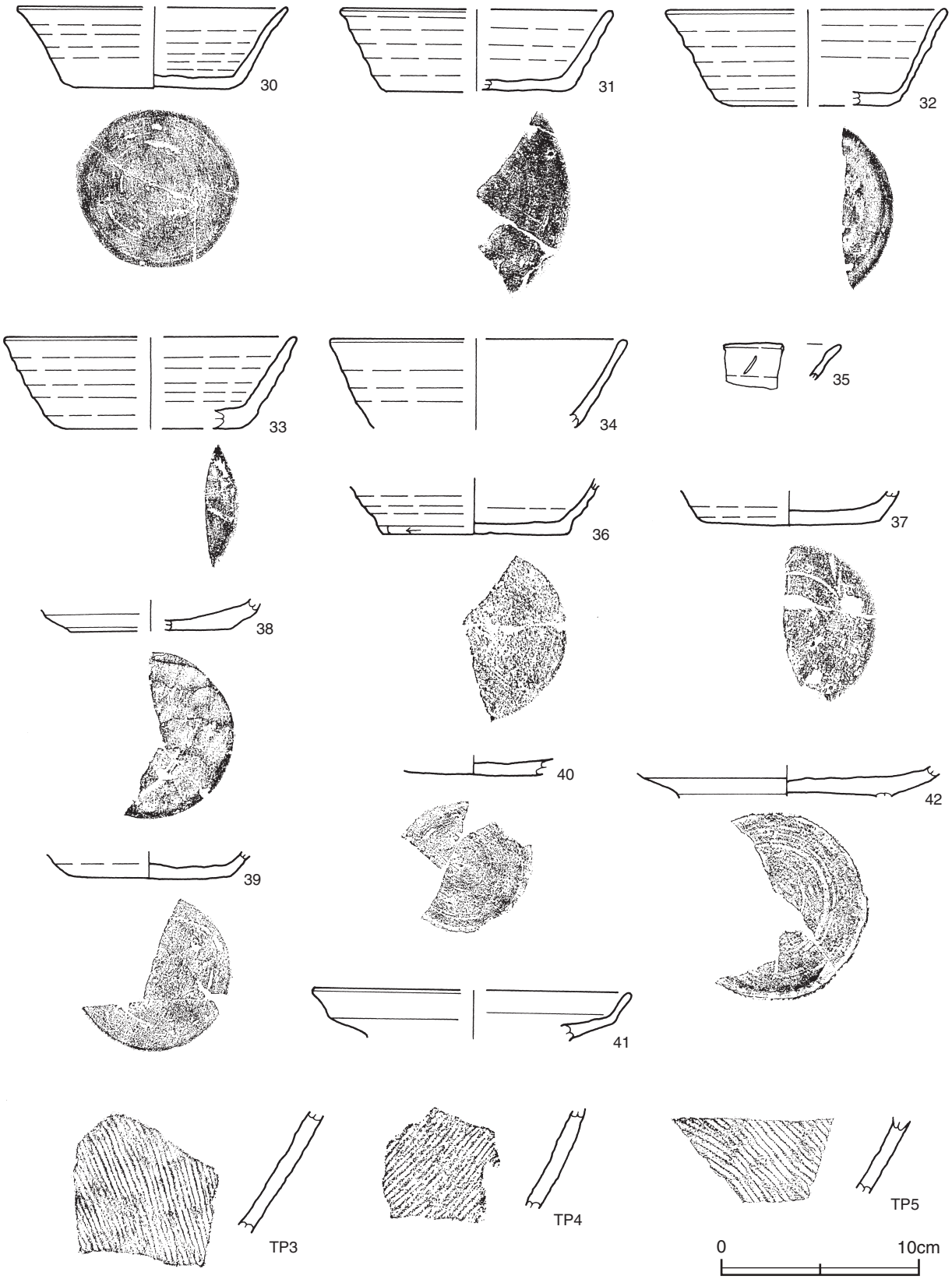
遺物出土状況　土師器447点（坏・鉢172，甕275），須恵器388点（坏・高台付坏353，蓋23，盤２，甕10）が出土している。土師器片・須恵器片は第１・第３層中から出土している。第１層から出土する土器片はほとんどが細片である。第３層から出土する土器片は比較的大きく，30・32・42・TP3も第３層中から出土している。37・39・40・42は第２号井戸跡から出土した破片とそれぞれ接合している。

所見　出土する植物遺体を比較すると，第４層が神岡上遺跡第３層，第６層が神岡上遺跡第５層と同様な泥炭層と考えられる。周囲から自然に流入して形成された第３層から出土した土器から，８世紀中葉から後葉には



第226図　第１号泥炭層実測図

砂に覆おわれ砂丘の一部になっていた可能性が想定される。第１層は硬く締まっており，須恵器の細片が多く出土するのが特徴的である。人為的な層の可能性が考えられるが，詳細は不明である。



第227図　第１号泥炭層出土遺物実測図(1)

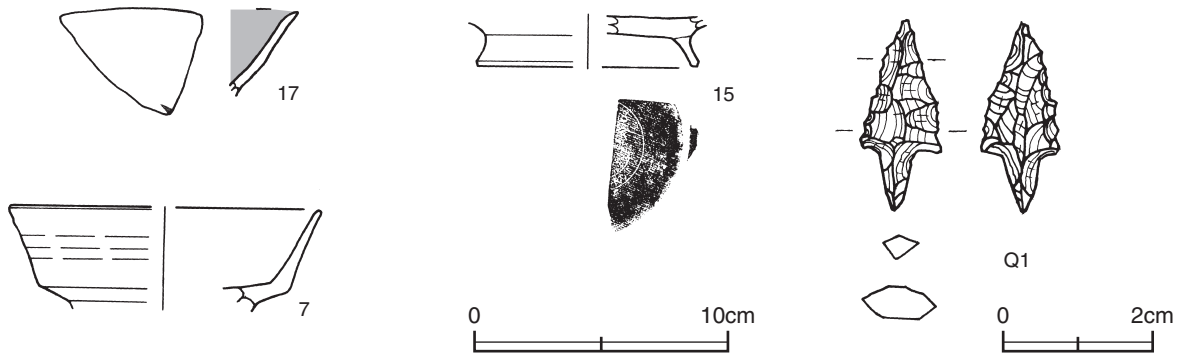
第１号泥炭層出土遺物観察表（第227図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
30	須恵器	坏	[13.6]	4.2	7.8	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	第３層中	60% PL25
31	須恵器	坏	[13.6]	4.2	[9.2]	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	第３層中	30%
32	須恵器	坏	[14.1]	4.9	[8.6]	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	底部ナデ調整	第３層中	20%
33	須恵器	坏	[14.6]	4.7	[9.3]	白色粒子・透明粒子	灰	普通	底部ナデ調整	第３層中	10%
34	須恵器	坏	[14.7]	(4.6)	－	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	第３層中	10%
35	須恵器	坏	－	(1.8)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰	普通	ロクロナデ	第３層中	5% 篦記号
36	須恵器	坏	－	(2.9)	9.4	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白	普通	底部一定方向の手持ちヘラ削り調整	第３層中	10%
37	須恵器	坏	－	(1.9)	9.0	白色粒子・透明粒子 灰色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	第３層中	30%
38	須恵器	坏	－	(1.6)	[8.3]	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰	普通	底部一定方向の手持ちヘラ削り調整	第３層中	30%
39	須恵器	坏	－	(1.4)	8.0	白色粒子・透明粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	第３層中	30%
40	須恵器	坏	－	(0.9)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子・灰色粒子	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ削り調整	第３層中	15% 篦記号
41	須恵器	盤	[15.9]	(2.5)	－	白色粒子・透明粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	第３層中	5%
42	須恵器	盤	－	(1.7)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り調整	第３層中	30%

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
TP３	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	黄灰･黄褐	普通	外面斜位の平行叩き　内面当て具無文痕	第３層中	
TP４	須恵器	甕	白雲母・白色粒子 透明粒子	暗灰黄･黄褐	普通	外面斜位の平行叩き　内面当て具無文痕	第３層中	
TP５	須恵器	甕	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	外面斜位の縄目の平行叩き　内面当て具無文痕	第３層中	

(6) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない主な遺物について，実測図（第228図）と観察表を掲載する。



第228図　遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第228図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
7	須恵器	高台付坏	[12.0]	(4.1)	－	海綿骨針・白色粒子 透明粒子	灰	普通	ロクロナデ	SD３ 覆土中	30%
15	須恵器	高台付坏	－	(2.1)	[8.7]	白雲母・白色粒子 透明粒子	灰白	普通	底部回転ヘラ削り調整	SK21 覆土中	20%
17	土師器	坏	－	(3.5)	－	黒雲母・白色粒子 透明粒子	明褐灰	普通	ロクロナデ　内面ヘラ磨き	SK26 覆土中	10% 墨書「□」

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	特　徴	出土位置	備　考
Q１	石鏃	2.5	1.1	0.4	0.8	チャート	凸基茎式　両面押圧剥離	SE２ 堆積層	

第7章　ま　と　め

国道６号線を北上し，ＪＲ常磐線磯原駅を過ぎた天妃山と大北川河口を右に望む付近は，丘陵が海近くまでせり出しており，南北に細長い低地になっている。この周辺に古代常陸国最北端の駅家である，棚島駅家が推定されている[1)]。そこからさらに3.5㎞ほど北上すると，左手に低地が広がりをみせ，現在は水田として利用されている。水田下の基盤は砂であり，その砂の上に仁井谷遺跡・神岡上遺跡・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡がある。

今回の調査は道路幅であり，面的な調査範囲ではない。それにも関わらず，いわゆる「一般集落」と呼ばれるものとは異なる集落群の様相をうかがうことができ，さらに古墳時代に遡る道路跡が確認できた。以下，この集落群が存在した時代背景を念頭に置きながら，第３～６章に詳述した遺構と遺物をもとに，この集落群の当時における性格・役割の一端に迫りたい。

１　遺跡群周辺の環境

調査時に，「砂丘上での竪穴住居の構築方法」「神岡上遺跡の黒色土層の性格」の２点を明らかにすることを目的に，パリノ･サーヴェイ株式会社に自然科学分析を依頼した。分析結果は，「Ⅰ古屋敷遺跡における住居跡覆土の分析」「Ⅱ神岡上遺跡における黒色土の分析」に詳述されている。分析は，上記の目的を明らかにするとともに，神岡上地区の当時の環境を復元する情報をも提供している。遺跡群周辺の地理的環境は，第２章第１節ですでに概略を述べている。ここでは分析成果を参考に，さらに踏み込んで当時の環境について少しでも迫りたい。

(1) 砂丘の形態と形成時期

遺跡群がある二ツ島から江戸上川の砂浜海岸に沿う地形は，海岸低地と呼ばれるものである。これは，浅く平坦な海底が，海面の低下や地盤の隆起運動により，海面上に生じた浜堤を基盤としている。この低地には，海岸線に並行した東西２列の海岸砂丘が形成されている。砂丘は，風によって運ばれた砂が堆積してできる小高い丘のことであり，卓越する風向きに対して，「平行する方向」に発達する「縦列砂丘」と，「直交する方向に」発達する「横列砂丘」がある。この地域の東側の砂丘は，その形態から，南南東から北北西の風によって海浜砂が吹き上げられて堆積したものである[2)]。ちなみに，1981年の最大風速の最多風向と，2006年の月別の最多風向は，西北西から東南東である[3)]。砂丘の形態から読み取れる風向きと，現代の最も多い風向きに違いがあるが，砂丘はほぼ北東－南西方向に延びていることから，いずれの風向きに対しても直交する「横列砂丘」と考えられる。砂丘の形成時期は，理科学的年代決定法と考古資料という，ふたつの異なる方法から得られた資料から推定する。海岸浸食で露出した，露頭下部の砂層から採取したタマキガイの炭素14年代測定によると，「4800±100ｙＢ．Ｐ」の測定値が得られている[4)]。露頭下部の砂層は，縄文時代前期の縄文海進最盛期に，「浅海底ないし砂浜において形成されたもので，その後，海水準の低下に伴って離水し，砂丘が発達した」と考えられている。西側の砂丘からは，神岡上遺跡の第１次調査で，縄文時代中期後半の加曽利Ｅ式の埋甕が確認されている[5)]。今回の調査も含めて，縄文時代中期後半より古い土器は，確認されていない。炭素14年代測定は，ひとつの試料のみの測定結果であり，確

実性が薄い。そのことも踏まえた砂丘の形成時期は，海退期以降，縄文時代中期後半以前と推測される。

(2) 旧地表と住居の構築について－古屋敷遺跡第１号住居跡の覆土分析から－

調査時には，遺構確認面が灰白色主体の砂にも関わらず，黒色主体の土壌が遺構に堆積していることが疑問視された。それは，この砂丘に黒色の土壌の存在を，想定していなかったためである。叶南前Ａ遺跡の第１・２号住居跡の調査時は，これを「貼床構築土」として捉えた。この黒色土壌の由来と竪穴住居の貼床構築土の有無は，古屋敷遺跡第１号住居跡の調査で明らかとなった。

古屋敷遺跡の第１号住居跡は，土層観察用のベルトの脇だけ地山の灰白色砂も掘り抜き，断面で床を確認する方法を取った（第161図）。観察の結果，第１層が覆土の主体であり，第１層下部と第５層を分析した結果，第１層は腐植しておらず，また，関東の代表的な黒ボク土の混在もほとんどない。特に土壌化も進んでおらず，「砂」という結果が得られた。覆土第１層と同じ黒色砂が，古屋敷遺跡Ｊ７h0区に１ｍほど掘り下げたテストピットの下部に堆積しており，基盤の浜堤を形成した自然堆積層との所見が得られている。この黒色砂の自然堆積層が，遺構確認面である灰白色砂の上にも部分的にも堆積しているのが，仁井谷遺跡の調査区中央部，神岡上遺跡Ｕ３c6区テストピット，叶南前Ａ遺跡Ｏ６b1・Ｏ６c1区テストピットで確認されている。叶南前Ａ遺跡の第６号掘立柱建物跡の柱穴は，この黒色砂層を掘り込んでいるのが確認されている。このことから，黒色砂が風によって運ばれ砂丘を形成し，旧地表（当時の生活面）となっていたと考えられる。旧地表であるならば，古墳時代から平安時代の遺構の覆土となっていること矛盾しない。

第１号住居跡の土壌分析から，砂以外の土壌が持ち込まれていないことが判明した。貼床を構築するのではなく，砂を直接床面としている。砂の床面の上に，有機質の敷物があったことも推測していたが，分析でも明らかにすることはできなかった[6)]。問題は竪穴住居を構築し，それが機能していた間の壁の維持にあると考えられる。実際，調査時でも覆土を取り除いた後の，壁の崩落は早い。当時，どのように竪穴住居を維持管理していたのかは，今回の調査では明らかにできなかった。砂丘の竪穴住居の構築から廃絶までの耐久年代は，集落の変遷にも大きく関わることであり，今後の検討が必要と考えられる。

(3) 神岡上遺跡のくぼ地に堆積した黒色土層について

神岡上遺跡のＳ４d7～Ｓ４i5区に広がる黒色土は，周囲の砂とは明らかに異質なものであり，木の実や自然木なども出土した。この土壌の正体とともに，多量に含まれている植物遺体から遺跡周辺の植生を調べるために分析を行った（第155図）。その結果，この黒色土は，池や沼などに分解されていない植物が堆積した「泥炭」であることが判明した。砂丘が２列以上配列すると，砂丘の間のくぼ地に「砂丘間湖」と呼ばれる池・沼・湖ができる。そこに植物が繁茂し，やがて枯れて水中に沈む。これを繰り返すうちに，枯れた植物が堆積していく。このようなサイクルで泥炭は形成される。長い年月が経つと湖沼は陸化していく。泥炭のテフラ分析では，年代の指標になるテフラを検出することができず，形成年代を明らかにすることはできなかった。しかし，第５層の泥炭層からは，縄文時代後期後半の粗製土器（第154図－36）が出土している。このことから，砂丘が形成されてから縄文時代後期後半以前までは湖沼であったと推測される。第５層の上には，古代の土器片を包含する第４層の灰白色砂が自然堆積している。泥炭層が除々に形成され陸地化が進み，古代には湿地となっていた可能性が高い。

検出された植物遺体からは，海岸沿いにマツ属などの針葉樹林，低地にはアカガシ亜属・シイノキ属などの照葉樹林，河畔沿いや低湿地にサワグルミ属・クマシデ属－アサダ属・ニレ属－ケヤキ属など，標高の高い後背の丘陵部にモミ属・ツガ属・ブナ属という，遺跡周辺の古植生が推定される[7)]。

調査の所見に自然科学分析の成果を加味して，遺跡群周辺の景観復元を試みてみた。海退後，縄文時代中期には砂丘が形成され，湖沼が存在していたものと考えられる。黒色砂の砂丘上で集落が営まれ始めた古墳時代には，砂丘間の低い場所には湿地があり，後背の丘陵からは幾筋もの小河川が流れており，砂丘を分断していたものと推測される。

2　仁井谷遺跡における古墳時代後期の住居跡の認定－第13号住居跡出土土器から－

仁井谷遺跡・神岡上遺跡・古屋敷遺跡・叶南前Ａ遺跡が位置する神岡上地区の砂丘上には，第２章第２節で述べたように遺跡が密集しており，「神岡上遺跡群」と呼ばれている。この遺跡群は平成10年から平成13年にかけて，北茨城市教育委員会がすでに前述の４遺跡も含め，南前遺跡・富士ノ腰遺跡・叶南前Ｂ遺跡の７遺跡，総面積約40,000㎡を調査し，その成果はすでに報告されている[8)]。それによると，古墳時代後期の集落は報告されておらず，古墳時代前期以降で，集落が形成されるのは奈良時代からとされている。しかし，仁井谷遺跡の第13号住居跡から，奈良時代以前と考えられる関東の土器とは異なる土師器が，まとまって出土している。ここでは，まずこの土器群の位置づけをし，古墳時代後期の集落の存在を明らかにしていくこととする。なお，遺構番号が北茨城市教育委員会と重複していることから，北茨城市教育委員会が調査した遺構については，番号の前に（市）と付けて記述する（例　仁井谷遺跡（市）第１号住居跡）。

(1) 仁井谷遺跡第13号住居跡出土の特徴的な土師器

出土した土師器の中では，坏と甕が最も特徴的である。坏は丸底で，体部と底部の境は，器高全体の中で，底部寄りにある。その境の外面には段があり，内面は弱く屈曲している。体部は段から外傾して立ち上がって，口縁部でやや内湾している。調整は，口縁部が内・外面とも横ナデで，はっきりとした段は，横ナデによって出来たものと考えられる。段より下は，底部まで方向を揃えたヘラ削りである。内面は，全面に方向を揃えたヘラ磨きが，密に施されている。内面の黒色処理は，「黒」という表現がまさにあてはまり，内面だけ見ると，県内の平安時代のロクロ土師器の坏と非常に似ている。甕は長胴で，体部下位に最大径があり，「下膨れ」である。口縁部は欠損しているため不明であるが，体部との境に段を持っている。調整は，外面は稜から体部最大径までがハケ目で，それより下がヘラ削りである。内面は，ヘラナデ・ナデで，一部ハケ目が観察できる。

番　号	器　種	器　形　と　調　整　の　特　徴	色調と胎土の特徴
第231図－19・22	土師器　坏	丸底　体部と底部の境の外面には段があり，内面は弱く屈曲する。段から外傾して立ち上がって，口縁部は内湾する。口縁部横ナデ，　稜より下の外面はヘラ削り，　内面は密なヘラ磨きと綺麗に黒く仕上げられた黒色処理。	19　7.5ＹＲ５/４にぶい褐色 黒雲母を含む 22　10ＹＲ３/２　黒褐色 黒雲母を含む
第231図－40	土師器　甕	長胴　口縁部と体部との境と考えられる所に段を持つ。体部下位に最大径を持ち，下膨れである。最大径上位は全面ハケ目，下位がヘラ削り，内面ヘラナデ・ナデ　一部ハケ目	7.5ＹＲ６/６橙色 黒雲母を含む

第13号住居跡出土の特徴的な土師器坏と甕

甕は，破片であるため器形の全体がうかがえないが，体部が球形と考えられるものが２点出土している。38は，口縁部から体部にかけての破片である。口縁部と体部との境の外面に段を持ち，口縁部は，その稜から「くの字」状に外反し，端部が横ナデにより平坦である。調整は口縁部内・外面横ナデで，体部外面のハケ目は，ナデによりその痕跡が薄くなっている。内面は，ヘラナデである。41は体部の破片で，調整は外面がハケ目で，内面はヘラナデ・ナデである。２点とも体部中央部に最大径があるものと推測され，同一個体の可能性も考えられる。また小片であるが，内・外面横方向のハケ目の破片が出土している。おそらく甕の口縁部片と推測される。坏・甕以外の器種は，高坏が出土している。坏部下位には，内・外面に段があり，そこから外傾して口縁部に至っている。脚部は柱状で，裾部は「ハの字」状に開き，横ナデ

により内・外面にはっきりとした稜が出来ている。坏部の調整は坏と同じで，内面黒色処理は，綺麗に黒く仕上げられている。脚部は外面がヘラ削りで，内面はヘラナデである。31・32・33は，破片であるため器形全体は不明であるが，27の坏部と類似していることから，高坏として扱っておく。これらの土器群の胎土の特徴として，含有量の多寡はあるが，「黒雲母」が含まれている。

以上の土器群は，関東に普遍的に見られるものではないため，他地域の土器との比較検討が必要と考えられる。

(2) 東北南部の古墳時代後期の土師器

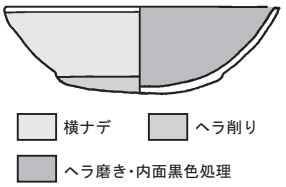
比較検討する地域は，当遺跡に近接し，『常陸国風土記』に，「久慈の境の助河を以ちて道前と為し（中略）陸奥の国の石城の郡の苦麻の村を，道後と為しき。」[9] とあるように，ひとつの地域としてまとまっていたと考えられる東北地方南部（宮城県・福島県）である。

東北地方南部の７世紀から８世紀前半の土師器の研究史については，佐藤敏幸氏がまとめている[10]。これを参考にして，この時期の土師器をもとに，第13号住居跡出土の土器，特に坏と甕についてその正体を明らかにしていく。

東北地方南部の土師器編年は，氏家和典氏によってその基礎が築かれ，今日の研究にも影響を及ぼしている。氏家氏は，土師器を器種構成と器形の特徴により，７型式に分類している[11]。その内の第５型式は，坏と甕においてその特徴が顕著であるとしている。坏については，「坏形にあっては，口縁部の割合に器高が小となり，口縁部と体部との接続部分において稜線もしくは括れの形成がみられるのをその特徴としている」。甕は，「所謂長胴の器形に外反せる口縁を有し，体部における最大径は，中央部乃至肩部にあり，口縁部と体部との接続部部分である頚部外側に段を形成している。更に底部にはこの類の土器には多くの場合，木葉文が附されている」。また，甕については第５型式から，「頚部に明確に段を形成するものが普遍的になるのである」と，その特徴を明確に指摘している[12]。宮城県仙台市栗遺跡[13]，宮城県名取市清水遺跡[14] では，この第５型式にあたる土器群を，器種ごとに形態分類し，細別している。細かい形態の違いはさておき，坏は，●丸底・底部と体部の境の内・外面に段がある。●口縁部は外反している。甕については，●口縁部と体部の境の外面に段を形成する。以上の点が，二つの遺跡から出土した坏と甕の，形態における共通した大きな特徴といえる。この土器群の坏の製作技法と器面調整技法については，阿部義平氏[15] と桑原滋郎氏[16] が検討している。阿部氏は，●巻き上げによる成形●底部はヘラ削り●内面は底部と体部の二段に分けたヘラ磨き●内面黒色処理と，以上の製作・器面調整技法の特徴を指摘している。桑原氏も，阿部氏と変わらない製作･器面調整技法を特徴として挙げており，体部については，「横ナデでととのえ（中略）体部と底部の境の段あるいは稜は，この横ナデ調整の時に生じたものである」と付け加えている。本土器群のヘラ磨き・黒色処理は，「丁寧」「丹念」と形容でき，清水遺跡においては，第５型式以前の土器群の黒色処理は，「淡い黒色」と表現されており，内面調整の入念さの違いがうかがえる。以上が，氏家氏が設定した第５型式の坏と甕における，形態及び製作・器面調整技法の特徴である。これらの土器群は，宮城県仙台市栗遺跡を標識遺跡とする「栗囲式土器」と呼ばれるものである（第230図）。

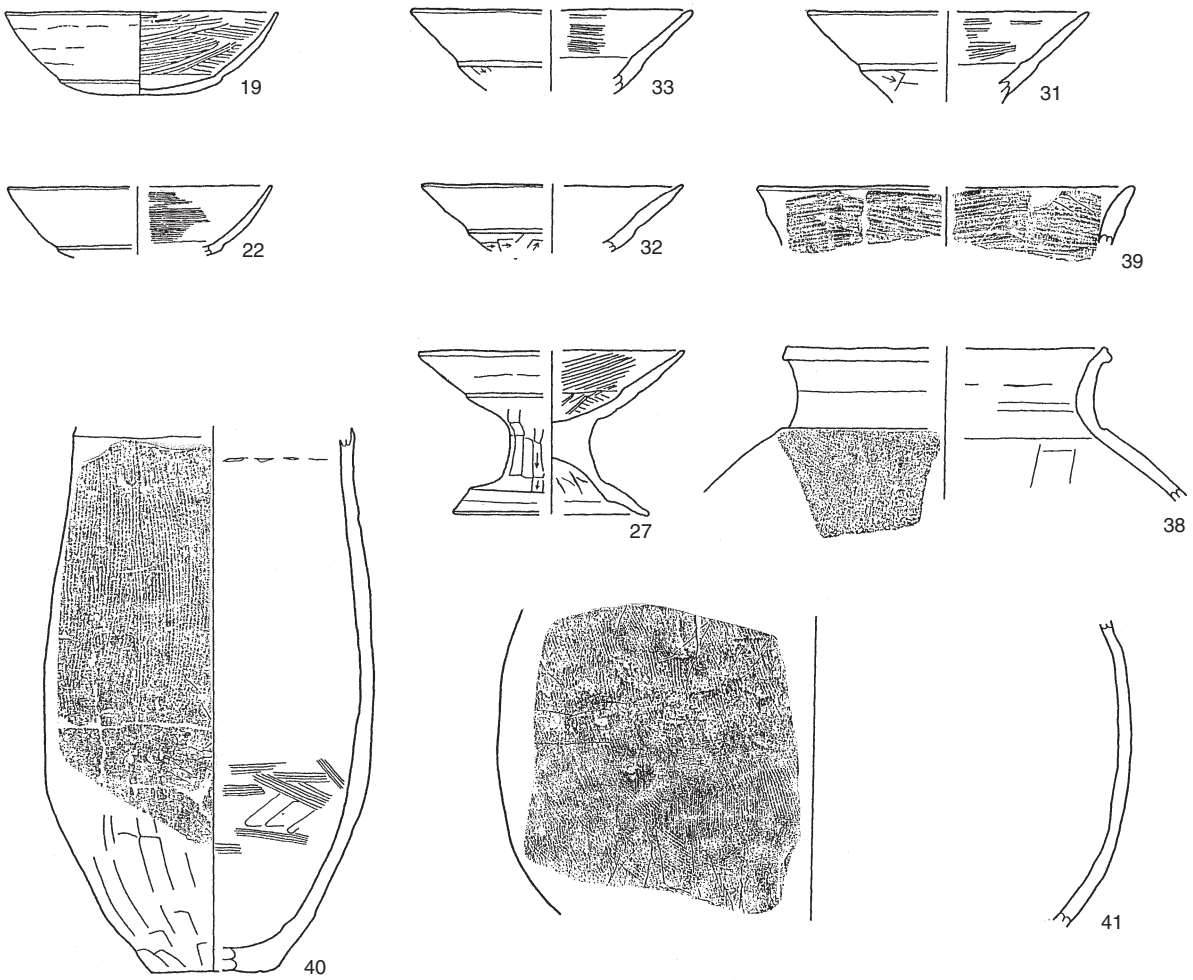
器種	形態及び器面調整の特徴
坏	丸底　口縁部の横ナデによって底部と体部の境に対応する段　口縁部は段から外反する。段より下位は，底部までヘラ削り　内面は口縁部から底部まで，丁寧で密なヘラ磨きと黒色処理
甕	口縁部と頚部の境の外面に段が定着する　口縁部は段から外傾　体部は長胴・球形の２種類があり，最大径は，口縁部，体部中央部・下部にあるものと違いがある　器面調整はハケ目

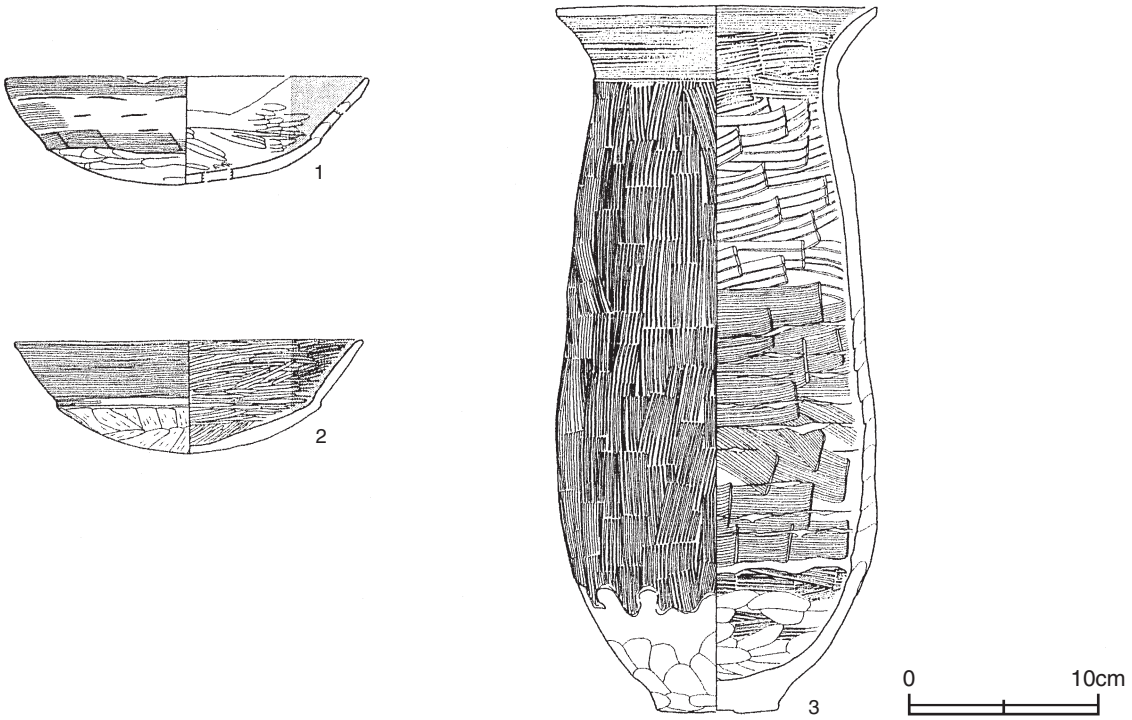
栗囲式土器の特徴



第230図　「栗囲式土器」の模式図

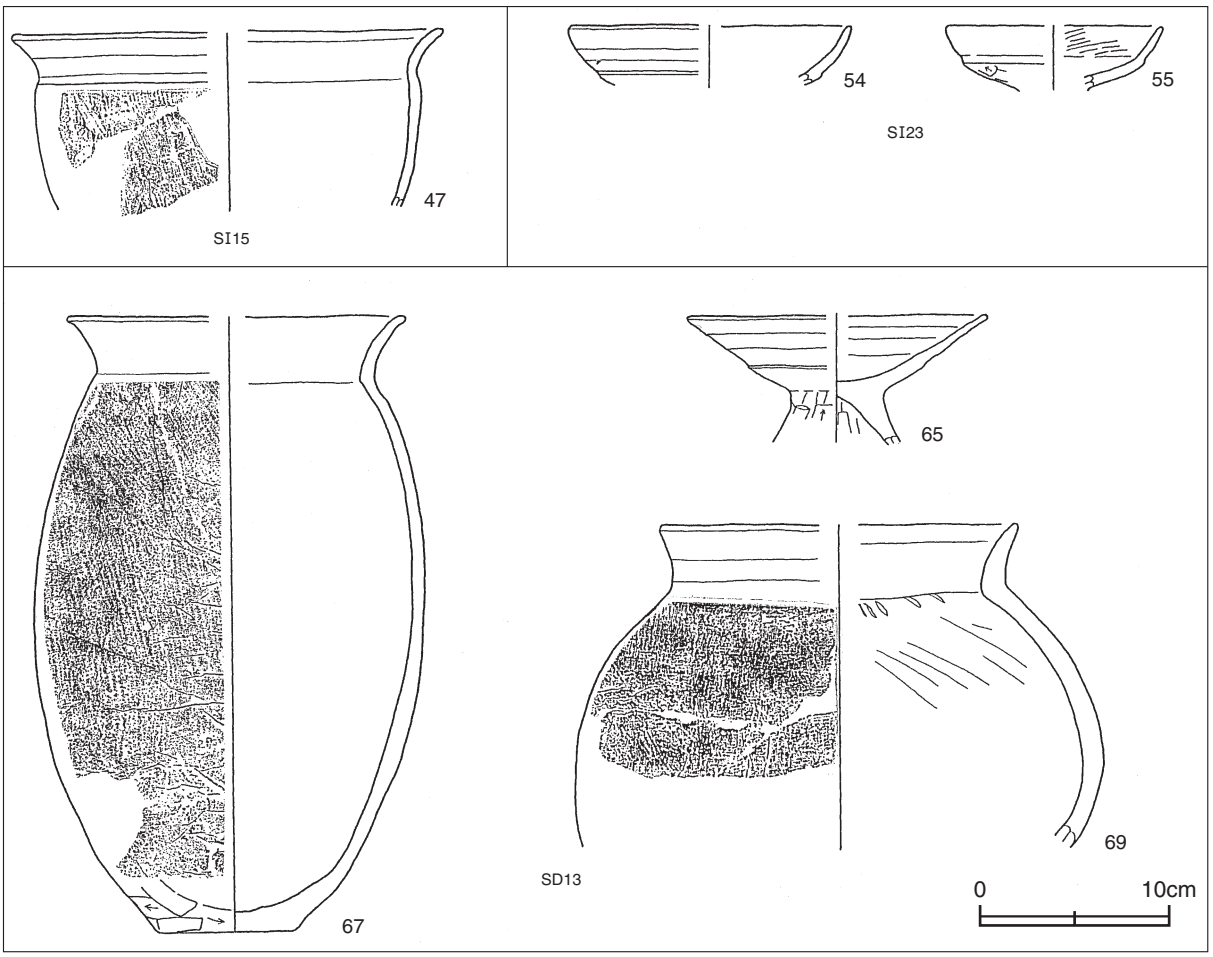
(3) 仁井谷遺跡第13号住居跡出土の栗囲式土器





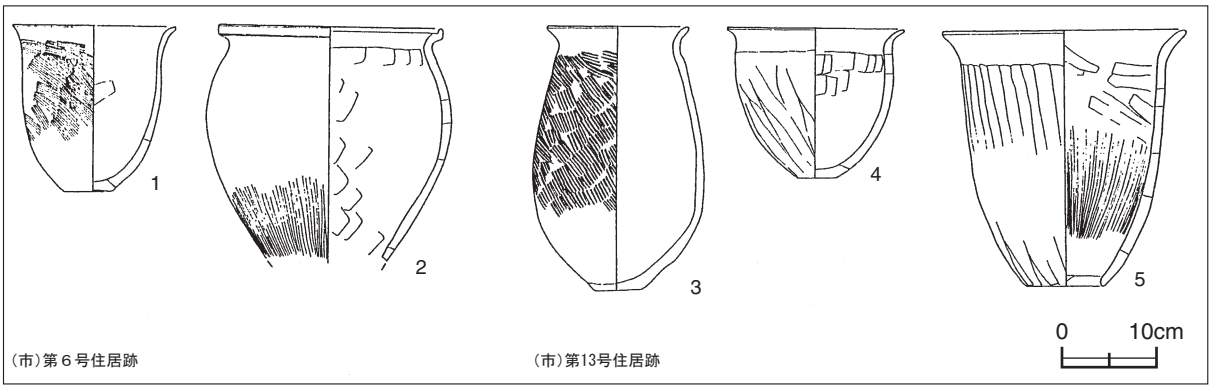
第231図　仁井谷遺跡第13号住居跡出土の栗囲式土器(上)と栗囲式土器の甕と坏の参考資料(下　工藤・成瀬1982年より)

以上の東北地方南部の土師器研究を振り返り，第13号住居跡出土の土器群を観察すると，19・22・40の形態及び器面調整の特徴が，氏家氏が設定した第５型式と同じであることから，栗囲式土器と考えられる。19・22の口縁部の内湾する形態は，特徴的な外反する形態ではないが，時期差ではなく地域性と考えられる[17]。また，27・31～33，38・39・41もその特徴から，栗囲式土器と考えられる（第231図）。第13号住居跡以外では，仁井谷遺跡第15号住居跡，第23号住居跡，第13号溝跡から，栗囲式土器が出土している（第232図）。



第232図　仁井谷遺跡栗囲式土器集成

また，古屋敷遺跡（市）第６・13号住居跡出土の甕[18]も，器形・器面調整の特徴から，栗囲式土器と考えられる（第233図）。



第233図　古屋敷遺跡（市）第６・13号住居跡出土の土器群（大渕・小川2004年より）

第232・233図		器　種	器　形　と　調　整　の　特　徴	色調と胎土の特徴
ＳＩ15	47	土師器　甕	・口縁部と体部の境の外面に稜があり，口縁部は稜から外反する ・口縁部に最大径を持つ ・口縁部は，内・外面横ナデ　体部の外面はハケ目，内面はナデ	7.5ＹＲ５/４にぶい褐色 黒雲母を含む
ＳＩ23	54	土師器　坏	・体部と底部の境の内・外面に対応するように段がある　段から外傾して立ち上がって，口縁部はやや内湾する ・口縁部内・外面横ナデ，　段から下の外面はヘラ削り ・内面はヘラ磨きと思われるが，反然としない。黒色処理は，雑で淡い黒色である。	10ＹＲ６/４にぶい橙色 黒雲母を含む
	55	土師器　高坏	・坏部の外面には段がある。口縁部は段から内湾ぎみに，立ち上がっている。 ・口縁部内・外面横ナデ，段から下の外面はヘラ削り　内面は，密なヘラ磨きと綺麗に黒く仕上げられた黒色処理	7.5ＹＲ６/６橙色 海綿骨針・黒雲母を含む
ＳＤ13	65	土師器　高坏	・坏部下位に，内・外面に対応する段があり，口縁部は段から外傾して立ち上がっている。脚部は，裾部に向かって「ハの字」状に開くものと思われる。 ・口縁部内・外面横ナデ，段から下位はヘラ削り，裾部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ内面のヘラ磨きは，不明瞭。密なヘラ磨きと綺麗に黒く仕上げられた黒色処理	10ＹＲ６/３にぶい黄橙色 海綿骨針・黒雲母を含む
	67	土師器　甕	・体部は長胴で，中位に最大径を持つ。 ・口縁部と体部の境には，段を持つ。口縁部は，段から外反する。 ・口縁部内・外面横ナデ，体部外面ハケ目後ナデ，内面ナデ ・底部木葉痕。	10ＹＲ６/４にぶい黄橙色 黒雲母を含む
	69	土師器　甕	・体部の中央部に最大径を持つ。球形ヵ。 ・口縁部と体部の境の段は，形成されておらず，口縁部は，「くの字」状に外反する。口縁端部は，ナデにより平滑にされ，押しつぶされて厚くなっている。 ・口縁部内・外面横ナデ，体部最大径の上位は，ハケ目，一部ナデ消されている。下位は，ナデ。内面は，ナデ。	10ＹＲ８/６黄橙色 黒雲母を含む。
古屋敷遺跡 (市)ＳＩ６	1	土師器　甕	・口縁部と体部の境の段は，形成されておらず，口縁部は外反する。 ・最大径は，口縁部にある。 ・口縁部内・外面横ナデ，体部外面上半ハケ目，下半ナデ，内面ナデ	
古屋敷遺跡 (市)ＳＩ13	3	土師器　甕	・長胴　口縁部と体部との境と考えられる所に段を持つ。体部下位に最大径を持ち，下膨れである。最大径上位は全面ハケ目，下位がナデ。内面ナデ	黒雲母を含む。

神岡上遺跡群（仁井谷遺跡・古屋敷遺跡）出土の栗囲式土器の器形・器面調整の特徴

栗囲式土器は後期後半に成立し，その下限は，８世紀前半と考えられている[19]。第13号住居跡は，高坏が器種構成に含まれていることから，古墳時代後期後半と考えられる。したがって，従来，神岡上遺跡群で空白だった古墳時代後期に属する住居跡が，初めて確認されたことになる。次に，古墳時代後期に集落がすでに形成されていたかを把握するために，今回の調査で出土したすべての土器群を検討し，古墳時代後期に属する土器群を抽出する。以上の作業を行うことによって，古墳時代後期の集落とその初現が把握できるものと考えられる。栗囲式土器には，基本的に東北地方南部の編年をあてはめていくが，茨城県北部の古墳時代後期の編年も併用していく。二つの時間軸をもとに，神岡上遺跡群の古墳時代後期の相対編年を提示する。

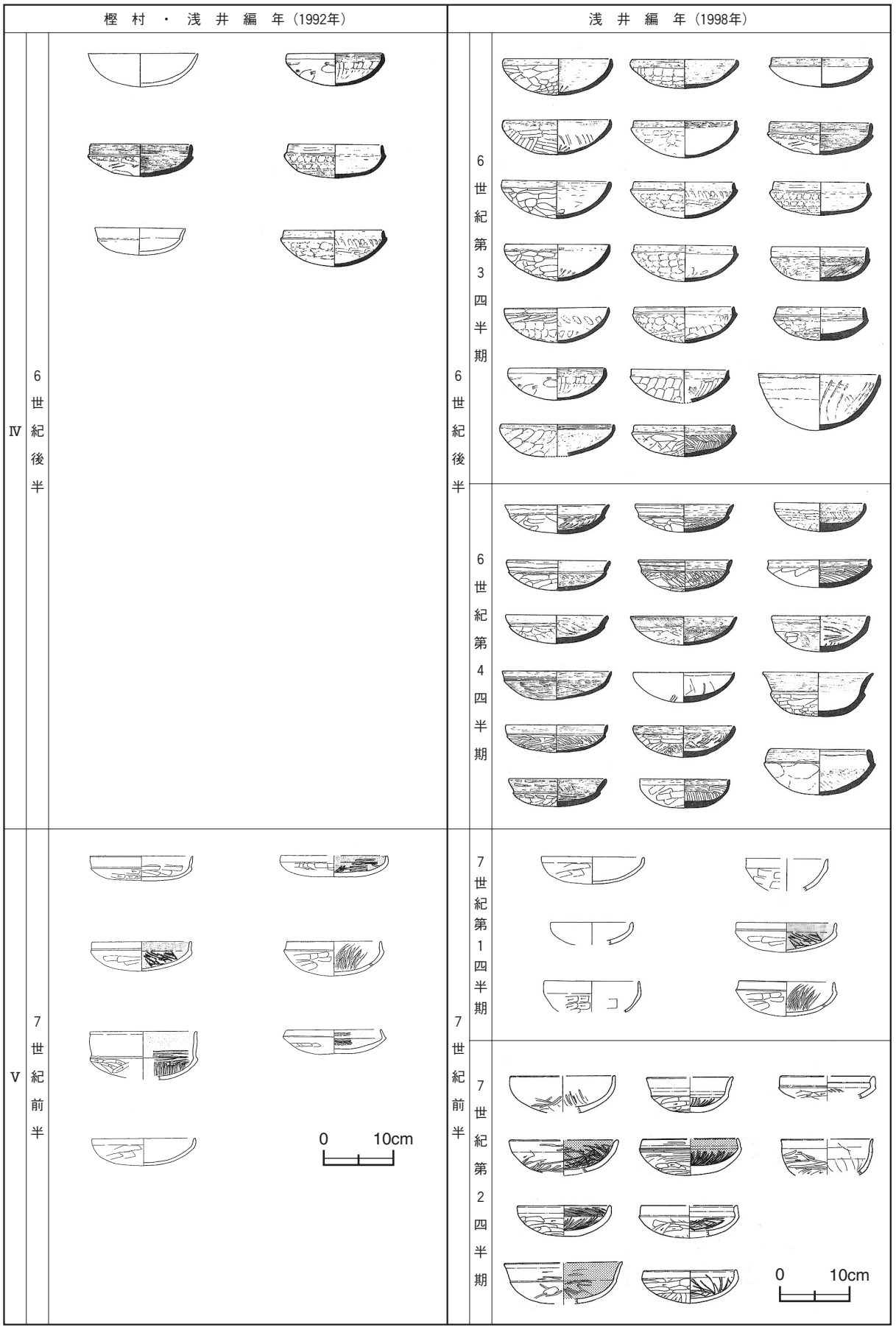
3　古墳時代後期の集落

(1) 茨城県北部の古墳時代後期の土器編年

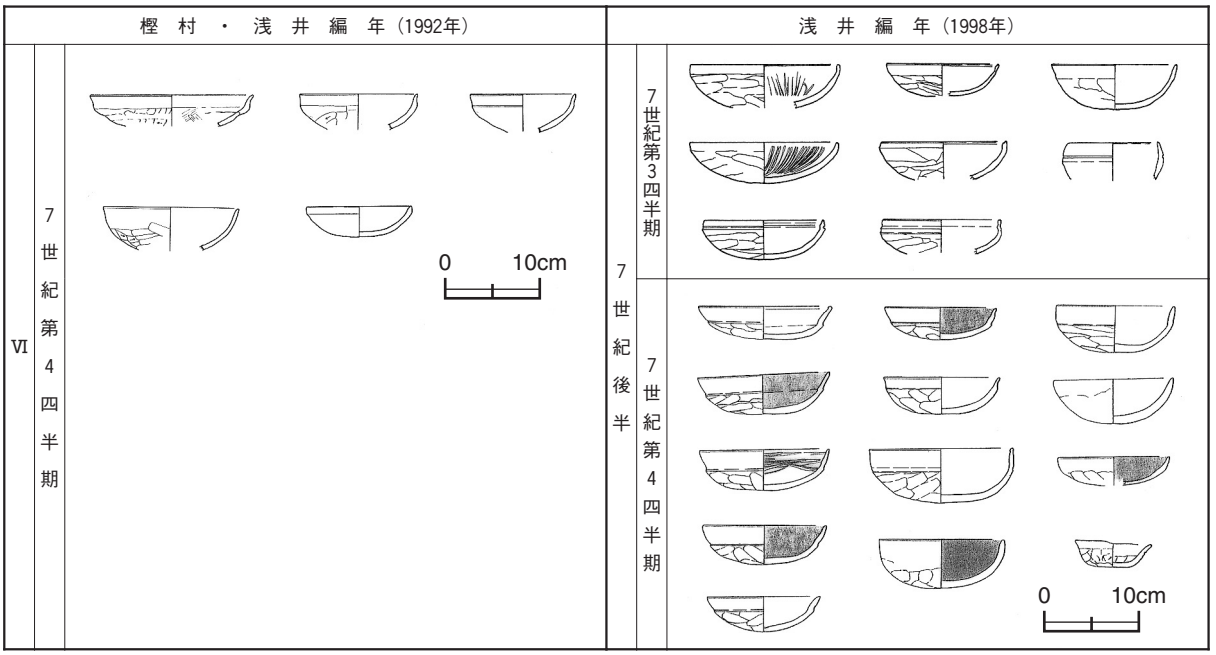
茨城県北部の古墳時代後期の土器編年は，樫村宣行氏と浅井哲也氏が久慈川・那珂川流域の資料を中心に組み立てている[20][21]。両氏が設定した第Ⅳ～Ⅶ段階，６世紀第３四半期から７世紀第４四半期の土器群の内，主に坏を基準にして，出土した土器群から古墳時代後期の土器群を抽出する（第234図①②）。

	Ⅳ　期		Ⅴ　期		Ⅵ　期	
樫村・浅井 (1992年)	・須恵器坏蓋模倣から坏身模倣へ変換 ・口縁部が短く直立するＩ類の増加 ・黒色処理の増加 ・高坏は，この期まで		・平底気味で，Ⅳ期と比べ，口径が大きく器高がさらに低くなり扁平化 ・黒色処理はⅣ期より減少		Ⅴ期より法量の小形化が進む	
浅井 (1998年)	６世紀第３四半期	６世紀第４四半期	７世紀第１四半期	７世紀第２四半期	７世紀第３四半期	７世紀第４四半期
	・須恵器身模倣坏 ・半球形が主体	・須恵器蓋模倣坏が主体 ・東北系の底部と口縁部の境に明瞭な段を持ち，口縁部が大きく外反するＥ類と半球形が主体	・扁平化が進む ・須恵器身模倣坏が主体	・須恵器身模倣坏が主体 ・口径が縮小し，小形化 ・須恵器身模倣坏が主体	・土師器坏が最も小形になる。 ・高坏は，この期まで	・口径が再び拡大 ・底部は丸底から平底に移行

樫村・浅井氏が設定した段階ごとの坏の特徴（樫村・浅井1992年，浅井1998年より）



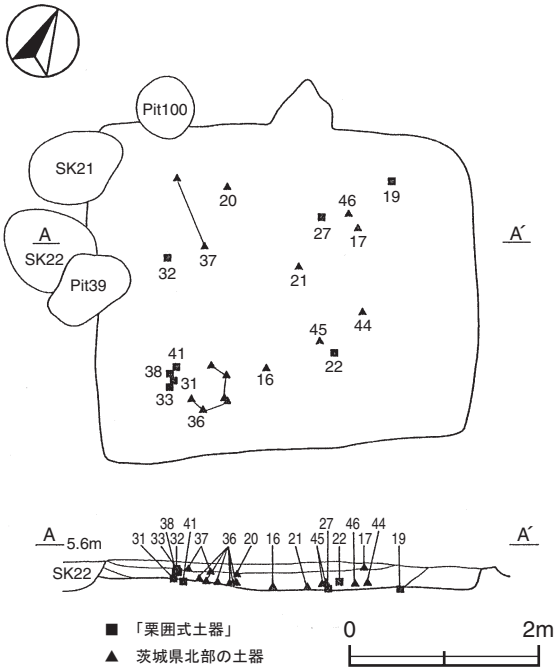
第234図①　茨城県北部の古墳時代後期土器編年（樫村・浅井1992年，浅井1998年より　加除作成）



第234図②　茨城県北部の古墳時代後期土器編年（樫村・浅井1992年，浅井1998年より　加除作成）

(2) 仁井谷遺跡第13号住居跡出土の土器群の時期－坏の検討から－

仁井谷遺跡第13号住居跡からは，栗囲式土器以外に，以下の特徴の坏と高坏が出土している。●丸底の底部から内湾ぎみに立ち上がって，口縁部は短く直立するもで，深身（器高指数39.85）なもの。第16図－16・17・20が該当する。●平底ぎみの丸底から内湾ぎみに立ち上がって，口縁部はやや外傾している。第16図－18が該当する。●平底ぎみの丸底から内湾ぎみに立ち上がって，口縁部は短く直立する。第16図－21が該当する。18と21は，浅身（器高指数26．81，20．68）である。高坏（第16－28）の坏部は，16などの坏の形態をしており，脚部は柱状で，裾部が「ラッパ」状に広がっている。内面の調整は，摩滅のため判然としないものもあるが，ヘラ磨きやナデである。黒色処理は，21は淡い黒で，雑な感じを受け，28が綺麗に黒く仕上げられている。以上の特徴は，茨城県北部の古墳時代後期の土器に共通するものと考えられる。住居跡内での栗囲式土器との出土状況は，壁際から土砂が堆積し，中央部がくぼ地化した時に一括廃棄されたもと判断できる状態である（第235図）。このような状況から，厳密には第13号住居跡に伴うものではないが，東北南部の栗囲式土器と茨城県北部の土器群の同時性を確認できる。40は竈に掛かったまま遺棄されており，本住居に確実に伴っている。茨城県北部の坏は，口径が大きく扁平であることから，樫村・浅井編年の第Ⅴ期の７世紀前半，浅井編年の７世紀前葉にあてはめることができる。深身の坏も組成に加わっていることから，７世紀前半でも古い時期と考えられる。栗囲式土器については，清水遺跡の第Ⅳ群土器[22]，仲田茂司氏の栗囲式



第235図　第13号住居跡土器出土状況図

古段階[23] 及び古墳時代後期土器様式の第Ⅴ期[24]，村田晃一氏の３群土器[25]，石本弘氏のⅡ期２段階[26] にあてはめることができ，７世紀前半でも古い時期があてはめられている。以上，両地域の土器編年にあてはめても矛盾せず，第13号住居跡出土の坏は，７世紀前半の古い時期と考えられる。

(3) 仁井谷・古屋敷遺跡における古墳時代後期の土器の抽出と集落の認定

第13号住居跡の土器群を基準に，古墳時代後期の土器を抽出してみると，３時期の土器群にまとめられる。**Ⅰ期第13号住居跡より古い時期**。第21号住居跡出土の土器群。これはⅡ期の第20号住居跡に切られているため，層位的にも確認されている。**Ⅱ期第13号住居跡と同時期**。第11・20・23号住居跡，第２号方形竪穴遺構，第13号溝跡出土の土器群，また，古屋敷遺跡（市）第13号住居跡出土の栗囲式の甕[27] は，「８世紀前半」を訂正し，本期に入れる。**Ⅲ期第13号住居跡より新しい時期**。第２・８号住居跡出土の土器群である。第２号住居跡の須恵器蓋の形態的特徴は，土生郎治氏が紹介した水戸市山田窯跡の蓋[28] や桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）犬田神社前遺跡第205号住居跡出土の蓋[29] と近似しており，同時期のものと考えられる。土師器坏は，第８号住居跡出土のものと同様に，体部と底部の境の段はなく，底部は平底または平底ぎみの丸底である。第４号住居跡出土の土師器坏も，この期の特徴を有しており，本期に属する可能性が高い。その他，時期を明確にできないが，第15号住居跡出土の栗囲式の甕は，古墳時代後期後半と考えられる。また，土器は出土していないが，遺構間の重複関係から，第10号住居跡も古墳時代後期に属するものと考えられる。

以上が，遺構の重複関係及び土器の形態の特徴から導き出した，相対的な新旧関係である。これに，第13号住居跡の土器群を基準に年代をあてはめていくと，第Ⅰ期．６世紀後半，第Ⅱ期．７世紀前半，第Ⅲ期．７世紀後半と考えられる。このように，古墳時代後期の集落を仁井谷・古屋敷遺跡で認定し，神岡上遺跡群における古墳時代後期の集落の初例とする。市教育委員会で報告されたような，奈良時代に新設された集落群ではなく，すでに前時代に形成されていた集落を取り込んで，律令期にさらに発展していくものと考えられ，集落群の消長と性格を考える上でも，新たな資料が得られたものと考えられる。また，この地域の盟主墳である神岡上第３号墳の近くに，同時期の集落が確認されたことにもなり[30]，古墳時代後期の集落が確認されたことは，今回の調査におけるおおきな成果といえるだろう。

4　仁井谷遺跡で確認された道路跡の性格と年代

仁井谷遺跡では，市教育委員会の調査ですでに，道路跡が確認されている（道路状遺構ＳＡ01と報告されている）。しかし，その性格については触れられておらず，年代については，「隣接・重複するどの遺構よりも，道路状遺構の方が新しいと考えられる」とあるのみで[31]，不明な点が多い。この仁井谷遺跡の道路跡の性格・年代の位置付けがなされないままでいることは，常陸国の古代史を考える上で大きな損失といえる。今回の調査で確認された道路跡の属性をここでもう一度検討し，仁井谷遺跡における道路跡の性格及び年代について位置付けをおこなう。

(1) 側溝

側溝が１条だけ確認され，側溝は，Ｂ10f1区付近で途切れている。これは，現代の土地改良のため削平されたためと考えられ，掘削法は，「土坑連結法」と呼ばれるものではなく，本来は，底面の高さがほぼ揃っている１条の溝と推測される。覆土は自然堆積で，掘り返しの痕跡は確認されていない。

(2) 路面構築法

側溝側の地山の灰白色砂を残して掘削し，掘削部に粘土を混ぜ込んだ砂を盛る，「オープンカット工法」

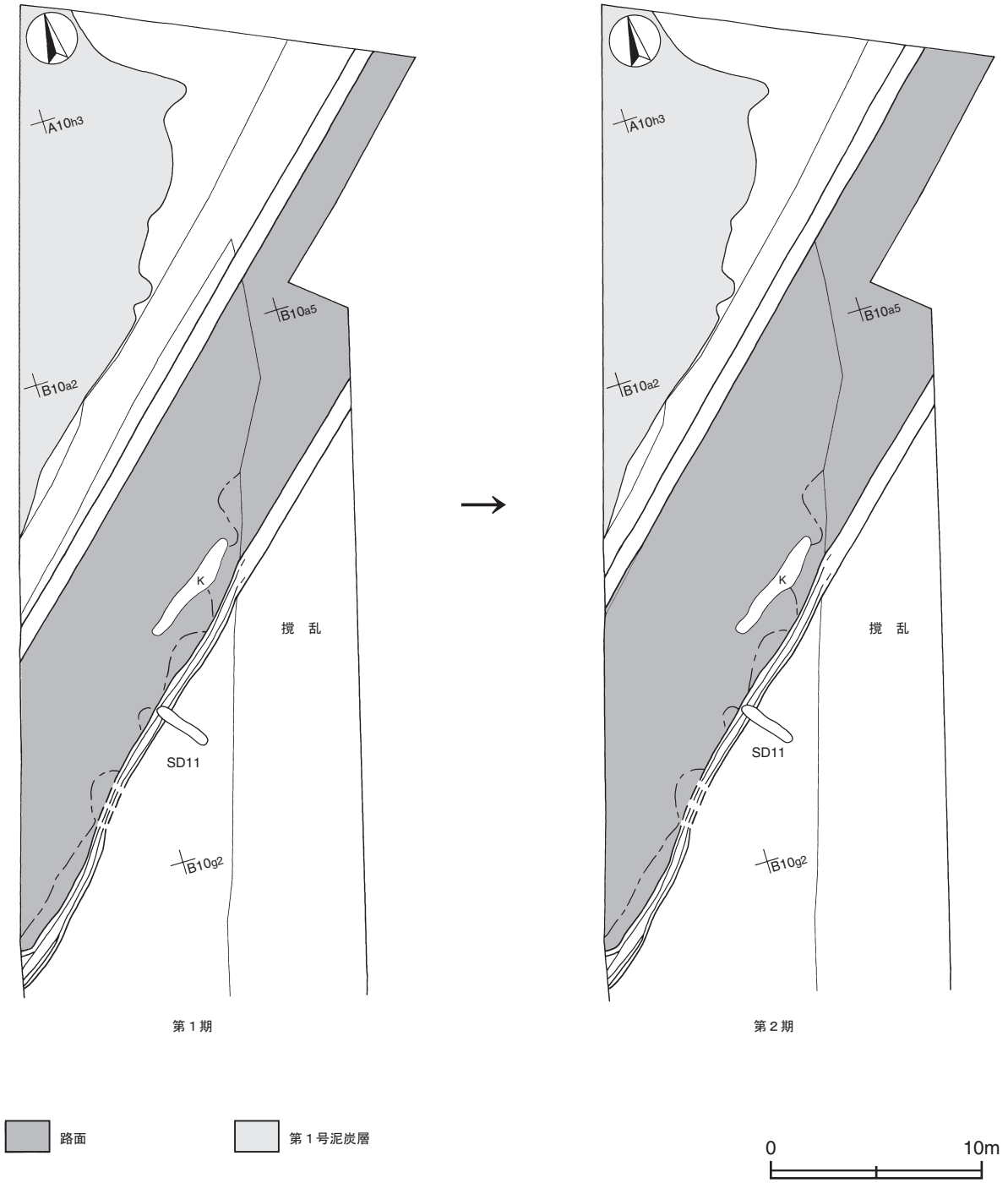
で構築されている。地山の砂及び側溝内の自然堆積土と比べて，非常に固く締まっており，硬化は明白である。本来の「路面」は，後世の削平により遺存していないと考えられ，通行による硬化ではないと捉えられる。この硬化土は，路面構築のために持ち込んだ「路面構築土」，と考えられる。地山の砂や旧地表の黒色砂とも色調も質も全く違い，当遺跡の基本層序にも見当たらない異質なものである。作道されてから機能していた時期においても，道路の範囲は容易に分かったものと考えられる。路面構築土内の北側には，他の路面構築土と色調が異なる砂が，帯状に長く確認されている。路面構築土の南側に延びる側溝と平行しているため，調査時の最初は側溝と考えた。しかし，他の路面構築土と平面・断面でも新旧が明らかであり，掘り方は側溝と違い凹凸が激しい。堆積土もやはり固く締まっていることから，新たに掘り返した後に盛られた路面構築土と考えられる。新しい掘り返しの底面には，道路の走行方向と同じくして連続して並んでいるピットが10基確認されている。ピットの覆土は，旧地表の黒色砂がみられず，路面構築土と同じ固く締まった砂であることから，ピットが掘削されてから開口していた時間はなく，掘り返しの際に一緒に掘削され埋土されたものと考えられる。

(3) 道路の幅員

側溝は，路面構築土の南側にしか確認されていない。路面構築土の掘り返しに伴い，壊されたものと考えられ，土層断面図Ａ－Ａ′に側溝の壁の立ち上がりが，一部確認できるだけである。確認できる壁の立ち上がりの位置に，南側の側溝と同じ幅の側溝を推定すると，側溝間の芯々距離が7.6mで，側溝間の内側の距離は，6.9mとなる。路面を掘り返し，路面構築土を再充填した後の側溝も，調査では確認されていない。土地整備前の現代の道路の側溝が，路面構築土のすぐ脇に，ほぼ同じ走行方向で確認されている。その現代の側溝の外側には，道路跡の北側側溝の痕跡はないため，この現代の道路の側溝によって壊されたものと考えられる。この現代の側溝の幅内に，路面構築土を再充填した後の北側の側溝を推定すると，側溝間の芯々距離が９ｍで，側溝間の内側の距離は，8.2mとなる。

以上，側溝間の芯々距離は，7.6mから９ｍという幅の増幅が推測でき，路面構築土の再掘削は路面拡幅のためのものと考えらえる(第236図)。(市)道路状遺構ＳＡ01も，●断続的な側溝●最深110㎝に達する地山の掘削が認められ，地山の砂とは異なる路面構築土を盛っており，硬化が確認されている●走行方向は，Ｎ－50°－Ｅ。である。幅を規制している側溝があること，路面の構築の際に地山の掘削･構築土の充填という構築に際して手間をかけていること，構築土が視覚的に捉えやすく，道路としての空間認識が容易，という特徴がある。走行方向も今回の道路跡と全く同じであることから，同一の道路跡と考えられ，未調査区域も含めて約120mの直線の道路跡が，砂丘上に復元できる。砂は，他の土壌よりも荷重に耐えられること[32] 及び水分を含むと硬く締まる性質がある。第１号道路跡の断ち割り調査で，路面構築土直下の地山の砂が湿っていたことが確認されている。道路跡は第１号泥炭層のすぐ脇に作道されている。湿地に近接しているため，地下水位が近い場所と考えられる。そのため，路面構築土直下の砂は，水分を含んで締まっているものと考えられる。荷重に強い砂が，さらに固く締っているこの場所は，砂丘上の中で地盤が一番安定していると考えられる。道路を作道する際に，砂丘の中で地盤が安定しているこの場所を，分かって選択している可能性も推測できる。逆に，道路を拡幅することによって，湿地（泥炭）に近くなりすぎている。泥炭は荷重に弱く，沈んでしまう性質を持つ[33]。現代でも泥炭地に工事を行う場合には，様々な手を加える。拡幅に際して，路面構築土を突き固めるだけではなく，地盤の不安定で沈んでしまう泥炭地側には，道路を安定させるための，より多くの対策が必要と考えられる。道路の走行方向と一致する連続したピットは，道路跡の路肩の位置にあり，拡幅後の路面構築土の流出を防ぐための，土留めの杭

及び柵の可能性が高い。このように仁井谷遺跡の道路跡からは，その土地の地質に合った土木技術と，それを選択する高い知識がうかがえる。

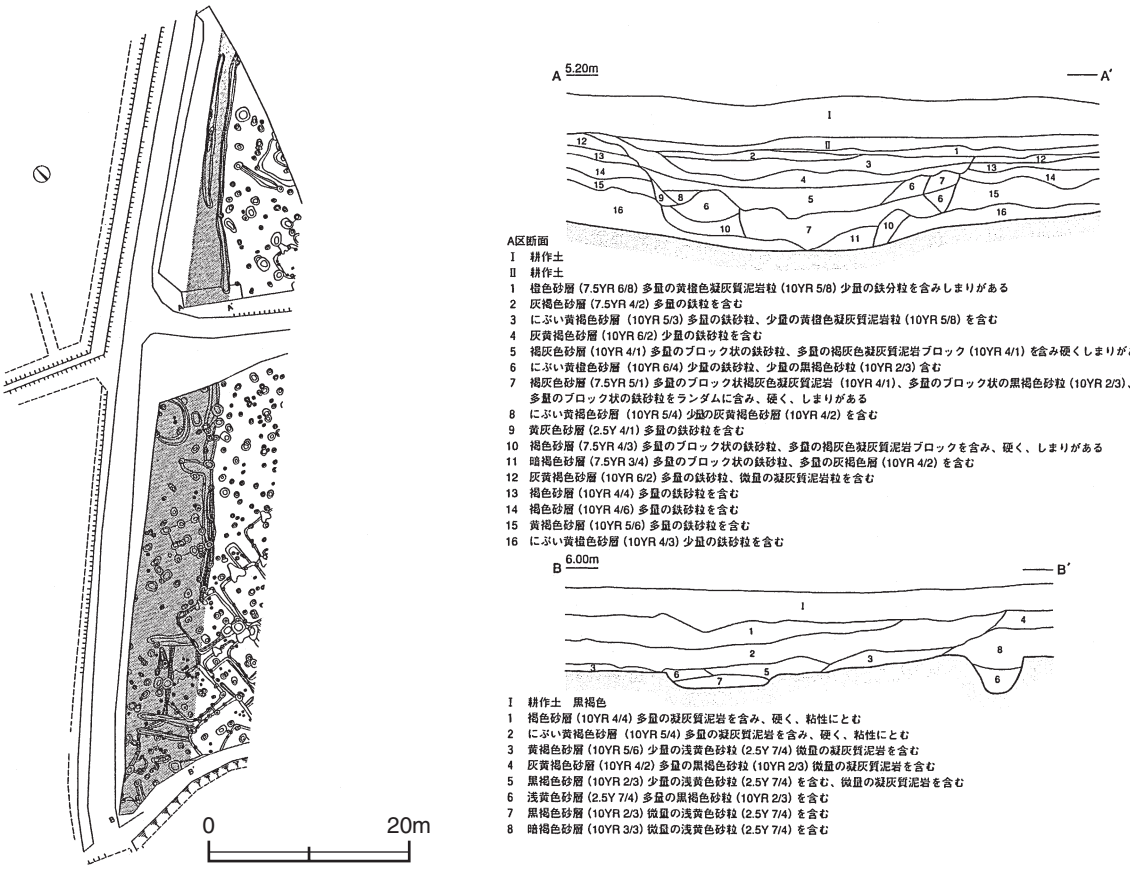


第236図　仁井谷遺跡第１号道路跡変遷図（上端のみの側溝は，推定した側溝）

(4) 仁井谷遺跡の道路跡の性格

近江俊秀氏は，古代の道路跡を幅員と側溝の有無から分類し，古代道路跡の性格を推察する方法を提示している[34]。古代官道は近江氏が分類したⅠ群に属し，駅路推定路線上，古代官道推定路線上で確認された道路跡は，幅５ｍ以上で，側溝などの幅員を規制する施設を持つか，その構造そのもの（オープンカット工法及び盛土工法など）が，幅員を規制する方法を取っているという共通した属性を持っていると指摘

している。また，近江氏は古代官道を作道する際，「何にもっとも留意しているか」という視点から，①「都と地方拠点とを結ぶ全国的な道路網であり，その路線計画にあたっては，直進性が強く指向されている」②「道路の幅員を視覚的に捉えられるよう，幅員を明示するための施設等を持っている」③「通行の安全性もしくは，安定を計るためさまざまな土木工法を用いるとともに，その補修や維持管理についても力が注がれている」という点を，古代官道に見られる共通の属性としている[35]。仁井谷遺跡における道路跡は，断続的である側溝を持ち，オープンカット工法という必然的に幅員が明示できる工法を採用している。また，構築土を突き固め，より堅牢な道路にするための工夫が見てとれる（第237図）。①については，現



第237図　仁井谷遺跡（市）　道路状遺構ＳＡ01実測図（大渕・小川2004年より）

在確認されている約120mについては，直線性を確認できたが，路線の全区間が直線かどうかは不明である。今後，路線の復元及び推定箇所の発掘調査により，直線性を明らかにする必要がある。①が欠けるが，②と③の条件は満たしているものと考えられ，道路の敷設においての土木事業に力を注ぎ，幅員の規模に規制が働いていること。また，幅員の明示を行うなど，象徴的な意味合いを持たせていることが，仁井谷遺跡の道路跡から確認できる。以上のことから，作道にあたって，官の意志が強く働いている古代官道と考えられる（第238図）。

(5) 道路跡の年代

道路跡の時期，特に敷設された時期を特定することの難しさは，周知されている。道路跡の年代決定を困難にしている理由として，●廃棄の場でないため，直接関係する土器の出土例が極めて少ないこと。●土器が出土しても，常に流入の可能性を想定しておかなければならないこと。●道路は使用されている間補修されるため，出土した土器が敷設された時期とは必ずしも一致しない。などが考えられる[36]。仁井谷遺跡の道路跡からは，多くの須恵器の甕片が出土している。この須恵器大甕片の出土状況を検討し，道路

第238図　仁井谷遺跡・富士ノ腰遺跡遺構全体図（大渕・小川2004年をもとに1,000分の１現況図で作成）

跡の敷設時期について考えてみたい。

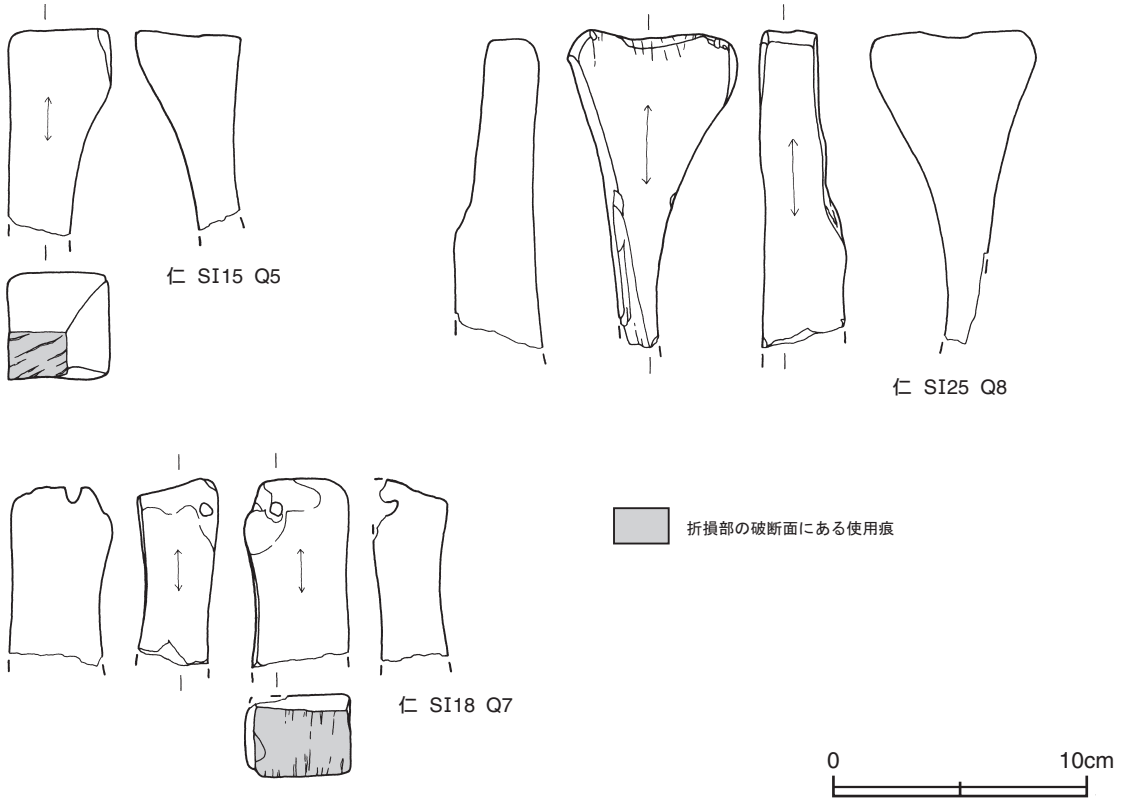
第１号道路跡からは，器面・破断面が摩滅していない，比較的大きな破片も含めた須恵器甕片が出土している。須恵器口縁部片（第31図－TP1）から復元できる口径は，約42㎝になる。また，体部片（第32図－TP2）の曲面からも，かなりの大きさの甕が想定される。須恵器の甕は，接合関係がほとんどみられず，個体に復元できないことから，完形または破損品ではなく，すでに破片だったものと考えられる。出土位置は，拡幅時の際に伴って掘削されたピットである，Ｐ７・Ｐ８を中心とした80㎝ほどの範囲内に限定されている。出土層位に多少の上下が確認されるが，上下から出土した破片同士が接合することからも，拡幅時の路面構築に際しての一括性がうかがえる。路面構築土中のため，自然に流れ込むことはない。また，拡幅後の改修の痕跡も確認されていないことから，拡幅後の混入も考えられない。これらのことから，拡幅に際しての路面構築に伴うものと限定して考えることができる。須恵器の甕は，器面調整にカキ目が採用されていることから，古墳時代の須恵器甕と考えられ，湖西産など他地域からの搬入品ではなく，県内のいずれかの窯で焼かれたものが，持ち込まれたと考えられる。報告書に掲載した須恵器甕の胎土の特徴をまとめたものが，以下の表である。海面骨針は確実に含有しており，その量も多いが，チャートの含有率は低いものと考えられる[37]。

番　号		胎土の特徴	番号	胎土の特徴	番号	胎土の特徴	番号	胎土の特徴
報告書第31図	TP１	海綿骨針 角張った石英・長石 灰色のチャート	TP８	海綿骨針 角張った石英・長石	TP15	海綿骨針 角張った石英・長石	TP22	海綿骨針 角張った石英・長石
報告書第32図～	TP２	海綿骨針 角張った石英・長石 長石の粒は大きい	TP９	海綿骨針 角張った石英・長石 灰色のチャート	TP16	海綿骨針 角張った石英・長石 ※磁鉄鉱付着	TP23	角張った石英・長石 花崗岩質の４㎜ほどの礫 緑がかかった礫
	TP３	海綿骨針 角張った石英・長石	TP10	海綿骨針 角張った石英・長石	TP17	海綿骨針 角張った石英・長石	TP24	海綿骨針 角張った石英・長石
	TP４	海綿骨針 角張った石英・長石	TP11	海綿骨針 角張った石英・長石 灰色のチャート	TP18	海綿骨針 角張った石英・長石	TP25	海綿骨針 角張った石英・長石 灰色のチャート
	TP５	海綿骨針 角張った石英・長石 ※器面の内面に，植物の圧痕がある。	TP12	海綿骨針 角張った石英・長石	TP19	海綿骨針 角張った石英・長石 灰色のチャート	TP26	海綿骨針 角張った石英・長石
	TP６	海綿骨針 角張った石英・長石	TP13	海綿骨針 角張った石英・長石 粒径の小さい灰色のチャート	TP20	海綿骨針 角張った石英・長石		
	TP７	海綿骨針 角張った石英・長石	TP14	海綿骨針 角張った石英・長石	TP21	海綿骨針 角張った石英・長石 灰色のチャート		

仁井谷遺跡第１号道路跡出土の須恵器甕の胎土の特徴

茨城県県北部で確認されている，須恵器窯跡の生産開始時期は，常陸太田市幡山２号窯跡が６世紀末から７世紀初頭，東海村馬頭根１号窯跡が７世紀第３四半期と考えられている[38]。また，水戸市山田窯跡で採集された須恵器は，前述のように，７世紀後半と考えられている。第１号道路跡から出土した須恵器甕を生産した窯跡及び年代は明確にできないが，幡山窯跡，馬頭根窯跡，山田窯跡の範疇に入るものと考えられ，仁井谷遺跡第２号住居跡出土の７世紀後半の須恵器蓋と，ほぼ同時期のものと考えられる。このように，７世紀後半の須恵器甕が，路面拡幅時の構築土内から出土したこととなる。７世紀後半の住居跡（第２・８号住居跡）は，第１号道路跡からかなり離れた位置に分布しており，これらの住居跡に壊された痕跡は，確認されていない。路面構築土にした可能性は低い。須恵器甕は，道路の拡幅以前にすでに集落で保有しており，それが破損して器としての機能が停止した後に，その破片を路面構築土に入れたものと考えられる。よって，道路跡の拡幅時期以前の敷設時期を，７世紀後半の範囲以内，さらに絞ると７世紀の終わり頃と考えられる。次に，道路の敷設時期を集落から出土した砥石と須恵器，常総型甕の流通か

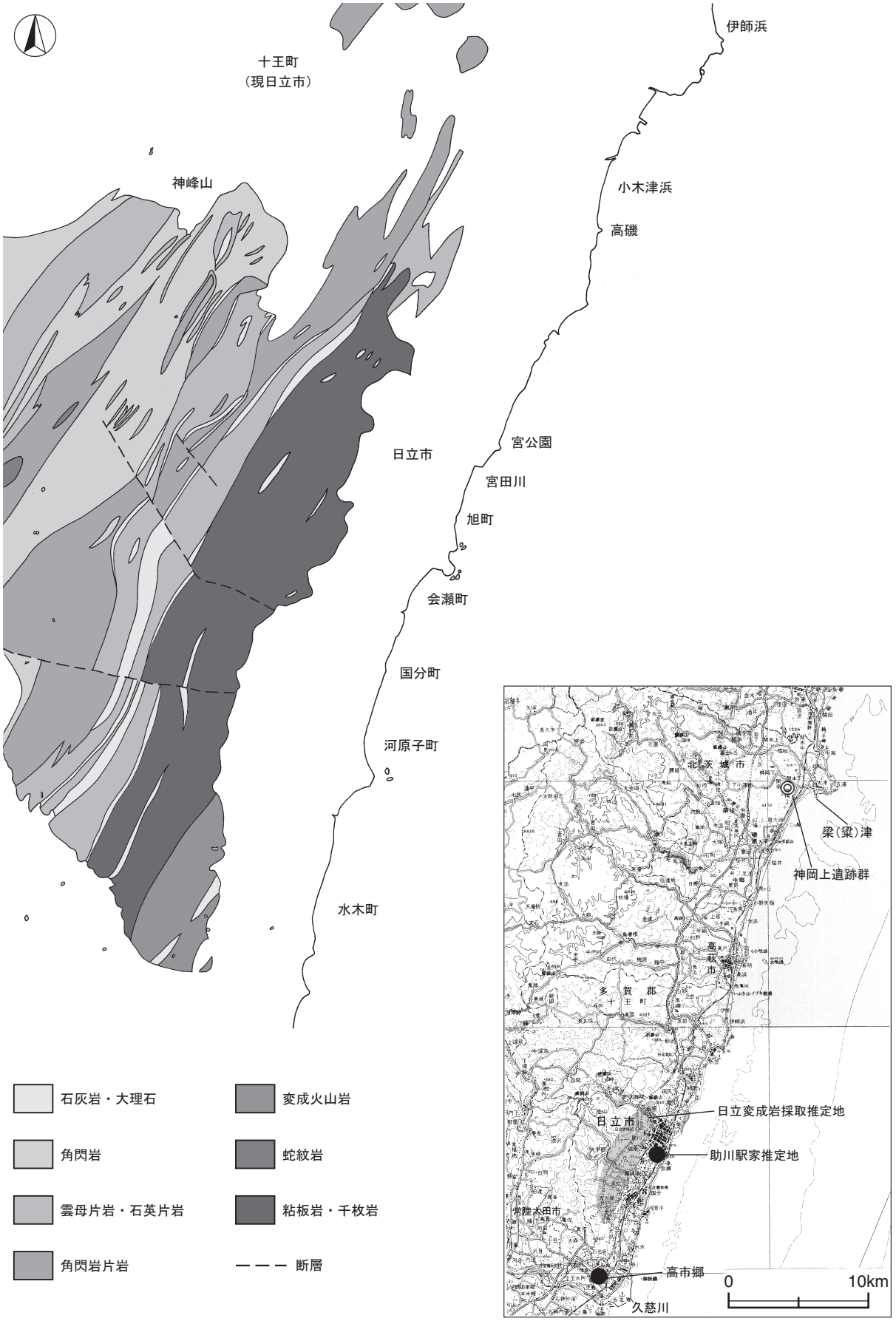
らも考えてみたい。日立変成岩の珪質片岩39）を石材とした砥石が，仁井谷遺跡第15・25号住居跡から合計２点出土している（第239図）。日立変成岩は，日立市神峰山から石名坂の間にしかない岩質で，採取地



第239図　茨城県日立市周辺と福島県に石材採取地が推定される砥石（仁：仁井谷遺跡）

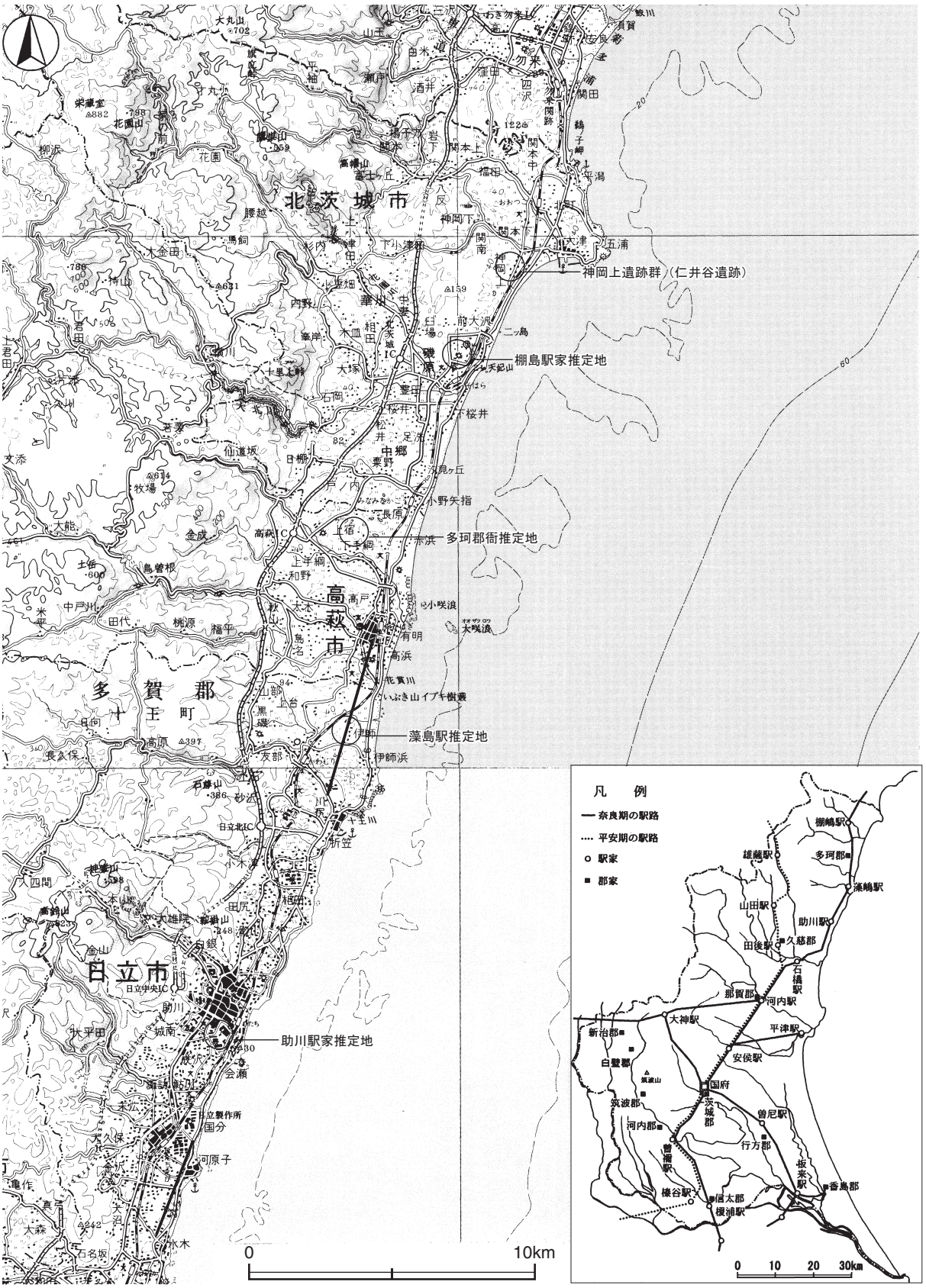
が限定できるものである。日立変成岩製の砥石については，ひたちなか市武田石高遺跡における佐々木義則氏と矢野徳也氏の共同研究があり，流通については佐々木義則氏が詳細にまとめている[40]。佐々木氏は，水運（久慈川，太平洋）と陸運（駅路）の結節地にあり，市の開かれた場所と考えられる古代久慈郡高市郷を交易地と考えている（第240図）。須恵器については，新治産の８世紀初頭の須恵器蓋が，叶南前Ｂ遺跡第19号住居跡から出土していることが確認されている[41]。古屋敷遺跡第１号住居跡出土の８世紀前葉の坏，甕（第163図－5，第164図－15Ａ・Ｂ）も胎土に白雲母を含んでいることから，新治産と考えられる。また，白雲母を含む新治窯跡群付近が生産の中心地と推定されている[42]，常総型甕（第163図－12）も古屋敷遺跡第１号住居跡からは出土している。砥石・新治産須恵器・常総型甕の流通には，官道が整備され，遠隔地を結ぶ流通路の役割を果たしていたと考えられており[43]，筆者もその考えに賛成する。第15号住居跡出土の日立変成岩製の砥石は，古墳時代後期後半，７世紀代と考えられる栗囲式土器とともに出土しており，この時期に集落に持ち込まれていたと考えられる。また，８世紀の初めの生産開始期の新治産の須恵器が，この地まで流通していたことは，窯の生産開始以前に官道がすでに整備されており流通路が出来ていたため，この地まで運ぶことを可能にしたものと考えられる。このように砥石，須恵器，常総型甕の流通からも，仁井谷遺跡で確認された官道の敷設時期を７世紀後半の範囲以内に考えることは，妥当なものと考えられる。

敷設時期が７世紀後半になる官道は，駅路が該当する。駅路の敷設時期は，７世紀後半から８世紀前半という年代幅の中で収まる[44]。国府以北の東海道である五万堀古道の，調査及び報告者である仲村浩一郎氏も再検討の結果，その敷設時期を７世紀後半としている[45]。このように仁井谷遺跡における官道は，駅



第240図　日立変成岩の採取推定地域と日立市の表層地質模式図
（佐々木2000年（右）と茨城県農地局農地計画課1995年（左）より加除作成）

路としても差し支えないものと考えられるが，棚島駅家及び藻島駅家まで，また，『続日本紀』にある養老3（719）年の「岩城国に初めて駅家十ヵ所を設けた」[46] という海道の駅家までの路線が推定･復元されていないことから，駅路の可能性が高いことを指摘しておくだけに留めたい（第241図）。



第241図　常陸国多珂郡内の駅家推定所在地と計画道路想定路線図（木下1992年）をもとに，国土地理院20万分の１図で作成（右下）従来の常陸国の駅路網（中村2000年より引用）

5　集落の変遷

神岡上遺跡群において，古墳時代後期にすでに集落が形成されていたことは，すでに述べている。古墳時代後期の集落は，第Ⅰから第Ⅲ期まで変遷し，６世紀後半から７世紀後半の年代を与えた。第Ⅲ期以降，つまり律令期である奈良時代以降の集落は，第Ⅳから Ⅶ期まで変遷する。住居跡の年代は，出土した土器及び重複関係をもとにしており，掘立柱建物跡については，年代が確実な住居跡との主軸方向及び位置関係と重複関係を考慮して決定している。律令期以降の土器については，佐々木義則氏と赤井博之氏らの常陸国における須恵器の編年研究[47]と，佐々木義則氏のロクロ土師器坏の研究[48]を参考にしている。奈良時代以降は，常陸国の土器編年だけを基準にしているが，その理由は，新治産及び木葉下産の須恵器が生産開始とともに，多珂郡新居郷まで一定量流通していたことを，今回の調査でも追認できたからである。また，集落の変遷においては，官道と考えられる仁井谷遺跡第１号道路跡の走行方向と，各住居跡及び掘立柱建物跡の主軸方向の関係を意識して記述していく。

(1)　**Ⅰ期**（第242図）

仁井谷遺跡の第21号住居跡が該当する。遺構同士の重複及び現代の削平で，遺存状態が悪く主軸方向は不明である。第Ⅱ期の第20号住居跡との重複関係から，それよりも古いことは確実である。この住居跡が，神岡上遺跡群における，古墳時代後期の住居跡の初現になる。現段階では１軒だけしか確認されていないが，この時期に，集落が形成されたものと考えられる。

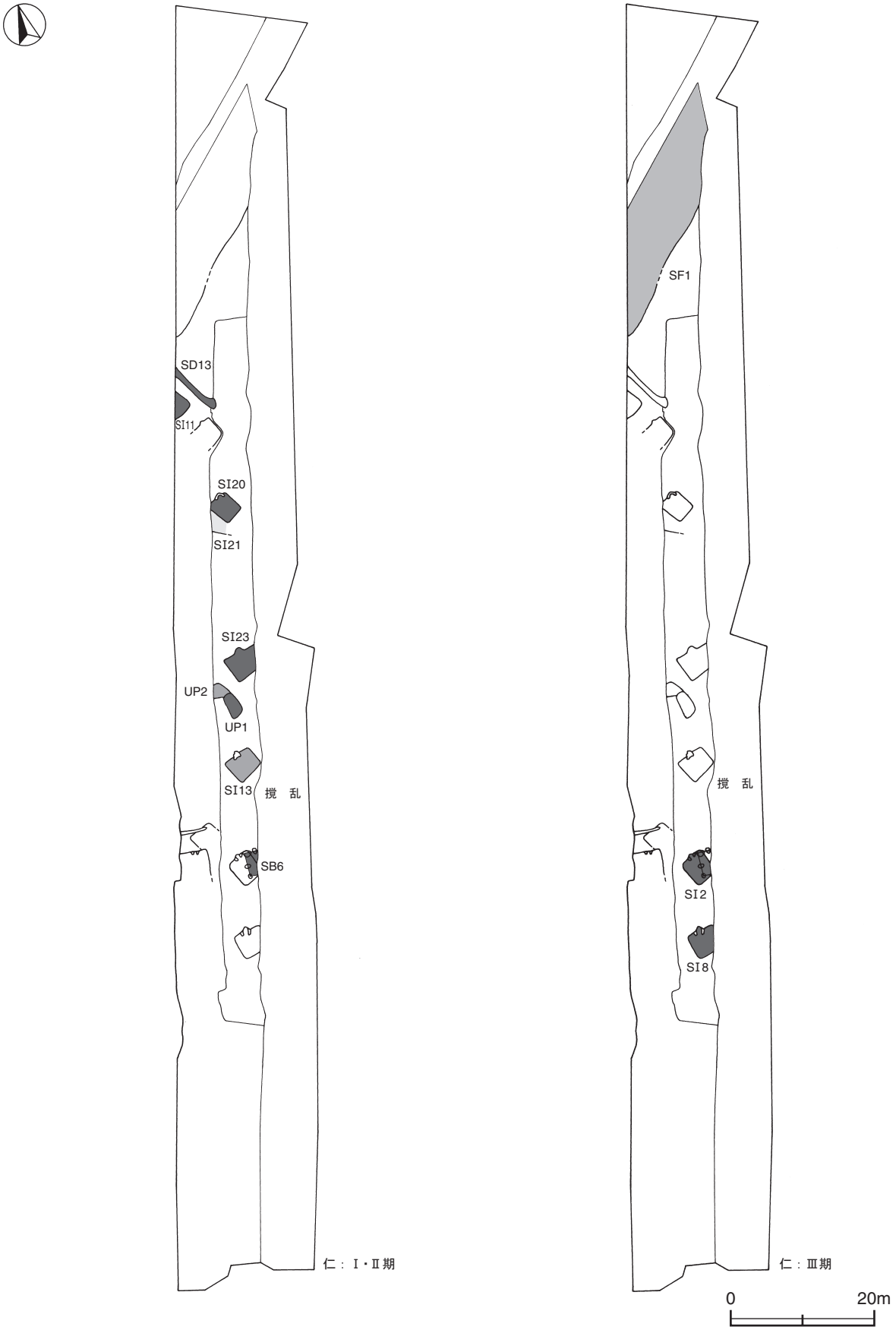
(2)　**Ⅱ期**（第242図）

仁井谷遺跡の第11・13・20・23号住居跡，第６号掘立柱建物跡，第２号方形竪穴遺構，第13号溝跡，古屋敷遺跡（市）第13号住居跡が該当する。住居跡の主軸方向は，14～28度の範囲ですべて西に振れている。第13号住居跡に確実に伴う土器は，竈に掛かったまま出土した甕２個体だけである。その他は，覆土中に一括廃棄されたもので，厳密には本住居に伴うものではない。本住居の北西にある第23号住居跡の平面形は，第13号住居跡と同じく，東西に長い長方形である。確実に東西に長い長方形の住居跡は，この２軒だけである。出土した坏の特徴も，第13号住居跡と同じである。第13号住居跡と比べて，遺存する住居の掘り込みは浅いが，確認面の標高は同じであることから，もともと第13号住居跡より浅いものと推測される。このことから，出土遺物の少なさは，現代の削平によるものではないと考えられる。一括性の高い廃棄された土器が，多量に出土している第13号住居跡と，それと対照的に出土遺物が少ない第23号住居跡は，住居形態と坏の特徴が共通している。このことから，第13号住居から第23号住居への移動が推測される。第13号住居が廃絶した後，移動して同じ形態の住居を構築して生活する。それの廃絶とともに，砂の堆積によってくぼ地化している昔の住居跡に，保有していた生活道具を廃棄したものと推測される。ここに土器型式に表われない，住居の移動（新旧）を想定する。第13号住居跡と第23号住居跡の間に，第１・第２号方形竪穴遺構が位置している。出土土器及び重複関係から，第13号住居跡と第２号方形竪穴遺構が，第23号住居跡と第１号方形竪穴遺構が組み合わさるものと考えられる。住居の移動に伴い，第２号方形竪穴遺構が埋めて，新しく第１号方形竪穴遺構を構築したものと考えられる。第６号掘立柱建物跡は東西棟で，第Ⅲ期の第２号住居跡との重複関係から，それよりも古いのは確実であり，第Ⅱ期に属すると考えられる。この時期にすでに，掘立柱建物を持つ集落が形成されていたものと考えられる。

(3)　**Ⅲ期**（第242図）

仁井谷遺跡の第２・８号住居跡が該当する。この時期に，官道（第１号道路跡）が敷設される。官道の走行方向はＮ－50°－Ｅで，住居跡の主軸方向は，第２号住居跡がＮ－26°－Ｗで，第８号住居跡がＮ－

10°－Wである。官道の走行方向と合わせるというよりも，その主軸方向を向けている。また，官道は集落がない土地ではなく，集落の中を通るように作道されたことになる。



第242図　集落変遷図（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期　仁：仁井谷遺跡）

年代についてはすでに述べているが，第Ⅰ期を６世紀後半，第Ⅱ期を７世紀前半，第Ⅲ期を７世紀後半とする。時期を明確にできないが，重複関係から第４・10・15号住居跡，第６号溝跡が古墳時代後期後半に帰属するものと考えられる。以上，住居跡11軒，掘立柱建物跡１棟，方形竪穴遺構２基，溝跡２条が，古墳時代後期の遺構である。古墳時代後期の集落は，仁井谷・古屋敷遺跡にだけ確認されており，砂丘上の中で，より標高が高い位置に占地している。

(4) **Ⅳ期**（第243図）

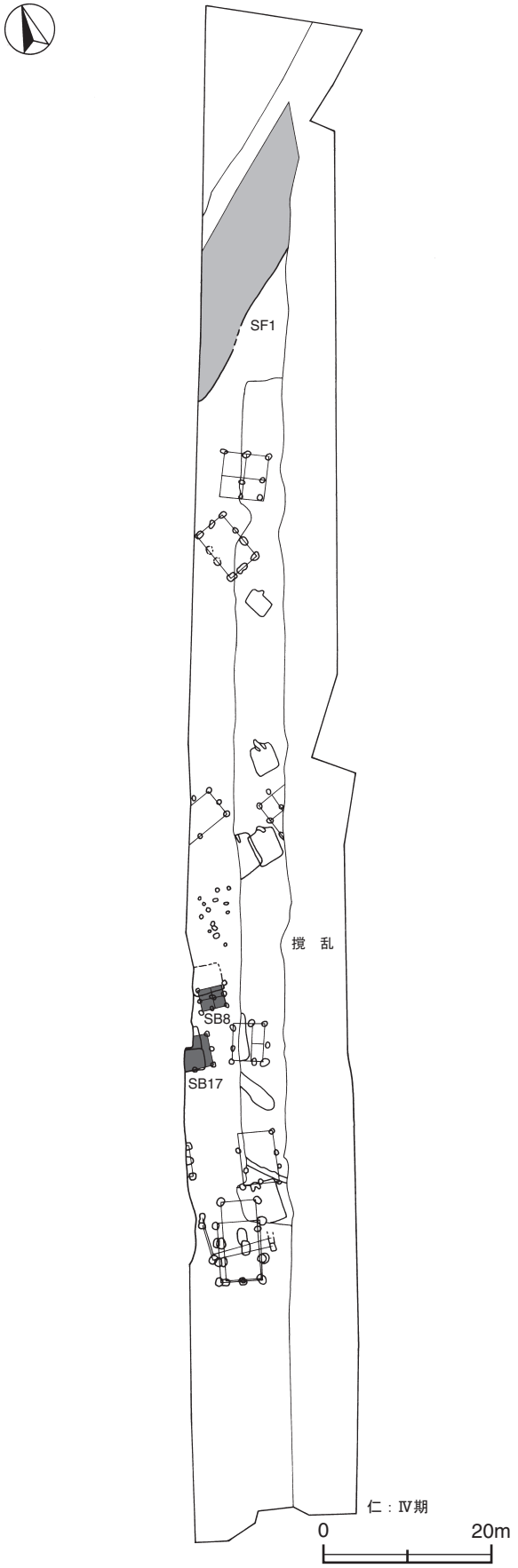
神岡上遺跡群の集落群は，古墳時代から継続して律令期に入る。律令期の最初の住居は，古屋敷遺跡第１号住居跡が該当する。主軸方向はＮ－26°－Ｗであり，本住居からは新治産の須恵器坏と甕，白雲母を含有する常総型甕が出土している。新治窯跡の生産と流通が開始されたばかりの須恵器や，製塩土器と考えられている鉢形土器，長頸瓶が出土している住居跡である。本住居を囲むように，第１号掘立柱建物跡（側柱　Ｎ－13°－Ｗ），第３号掘立柱建物跡（側柱　Ｎ－25°－Ｗ），第６号掘立柱建物跡（総柱　Ｎ－18°－Ｗ）が建てられている。第５号掘立柱建物跡（構造・主軸方向不明）は，柵（第１・２号柵跡）を伴う建物である。柵跡は重複がないため，同時に存在した可能性も考えられる。第５号掘立柱建物跡は重複関係から，第３号掘立柱建物跡よりも新しいが，配置から比較的短い時期差と推測され，第３号掘立柱建物跡からの建て替えが考えられる。このように住居跡を中心として，一定の空間を保ちながら，北側と南東側に建物を持つ構成・配置が考えられる。その範囲内で，建物を建て替えながらまとまりを維持していたものと考えられる。仁井谷遺跡の今回の調査では，本期に帰属するものは，第８・17号掘立柱建物跡だけである。第８号掘立柱建物跡（総柱　桁行方向Ｎ－90°）は重複関係から，この時期に帰属するものと考えられ，南側に位置する第17号掘立柱建物跡（側柱　桁行方向Ｎ－87°－Ｗ）の東西棟と，建物群を構成している。古屋敷遺跡で確認された建物群の主軸方向は，官道にその主軸方向を向けており，前代のⅡ・Ⅲ期と変わらないものと考えられる。

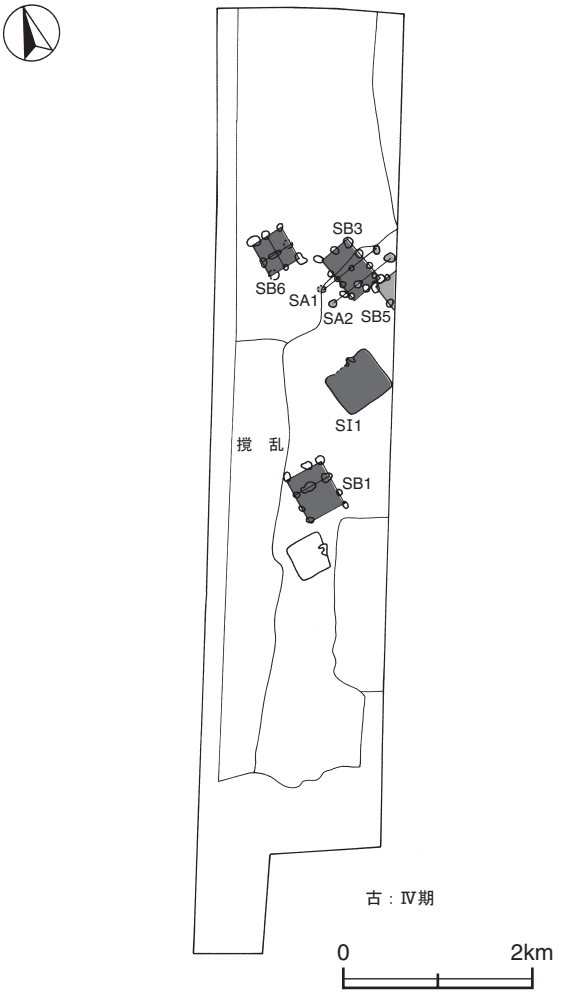
(5) **Ⅴ期**（第244図）

仁井谷遺跡の第１・６・７・17号住居跡，第４・11号掘立柱建物跡，第１・２号柵跡が該当する。住居跡の主軸方向は，第１・17号住居跡がＮ－０°，第６・７号住居跡は，主軸方向が不明である。第４・11号掘立柱建物跡（側柱）の主軸方向は，Ｎ－18～20°－Ｅと揃っている。住居跡と掘立柱建物跡の主軸方向が，揃っていないのがⅣ期の古屋敷遺跡の建物群との違いである。掘立柱建物跡だけ見ると，本期で初めて官道の走行方向と揃えるように東に振れ，官道を意識した建て方がうかがえる。住居跡と掘立柱建物跡の構成は，第６・７号住居跡と第４号掘立柱建物跡が隣接しており，そのまとまりから少し空間を取って，南に柵を伴う第１号住居跡がある。柵跡の柱穴の形状は長方形で，規模も大きく深さもあり，埋土も互層をなしている。柵としては，堅牢な作りがうかがえる。柵は重複関係から，第２号柵から第１号柵への建て替えが考えられる。第６・７号住居跡と第４号掘立柱建物跡と第１号住居跡は，間に一定の空間を取る構成・配置と考えられる。

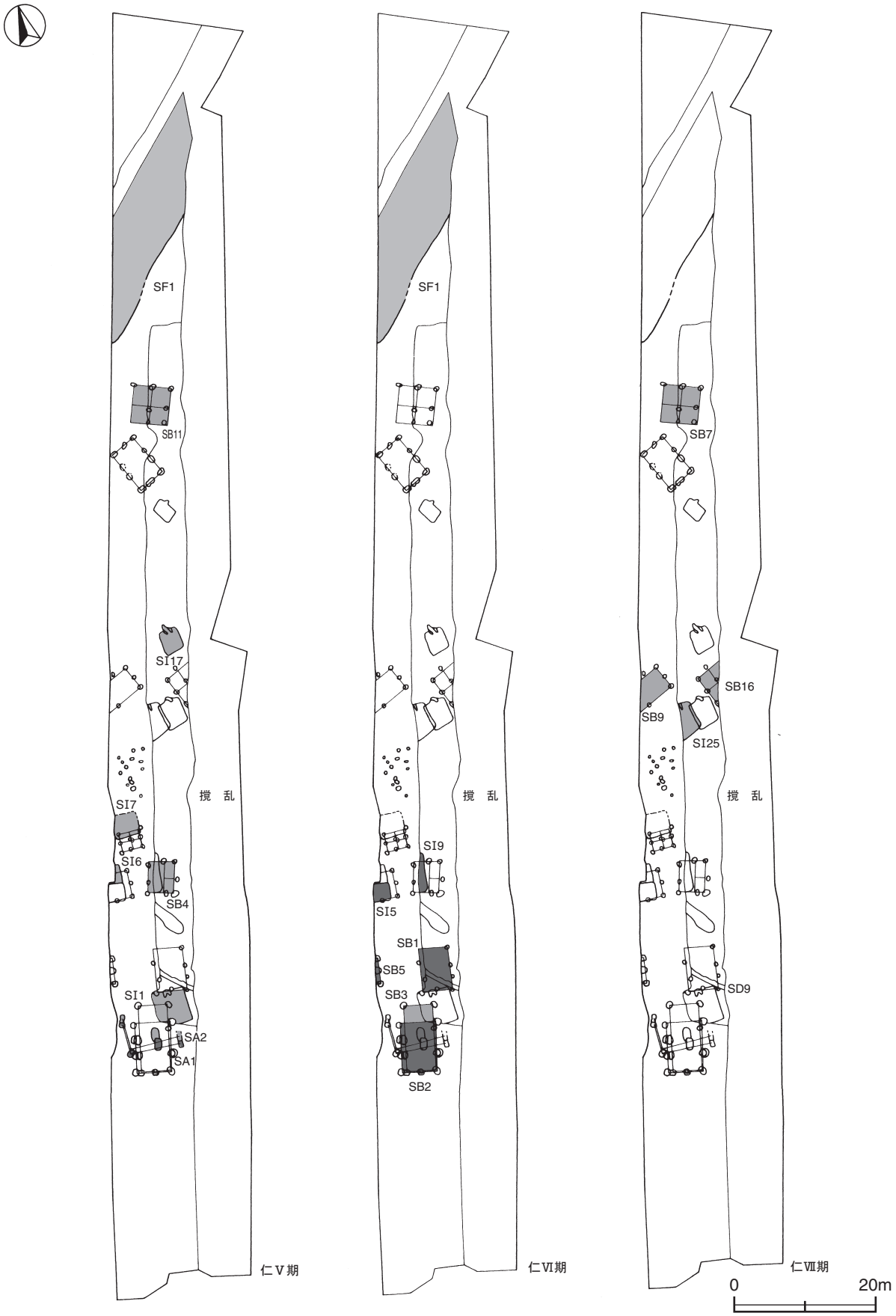
(6) **Ⅵ期**（第244図）

仁井谷遺跡の第５・９号住居跡，第１・２・３・５号掘立柱建物跡が該当する。主軸方向Ｎ－15°－Ｅの第２・３号掘立柱建物跡（側柱）と住居跡の遺存する壁の傾きは，ほぼ揃っているものと考えられる。Ⅴ期同様，官道の走行方向と揃えるように建てられている。本期の掘立柱建物跡は，柱穴の形状が長方形で，規模も大きく深さもあり，今までにない堅牢な作りがうかがえる。第５・９号住居跡は隣接して東西に並列しており，少し空間を取って南に第２・３・５号掘立柱建物跡があり，第５号掘立柱建物跡は東西





第243図　集落変遷図（Ⅳ期　仁：仁井谷遺跡　古：古屋敷遺跡）



第244図　集落変遷図（Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ期　仁：仁井谷遺跡）

棟と推測される。住居跡の一群と一定の空間を保ちながら，南側に建物群が配置される構成である。第３号掘立柱建物から第２号掘立柱建物への建て替えが考えられ，ひとつのまとまりの範囲内で建物を建て替えながら，そのまとまりを維持していたものと考えられる。

(7) **Ⅶ期**（第245図）

仁井谷遺跡の第25住居跡，第７・９・16号掘立柱建物跡が該当する。住居跡の主軸方向はＮ－10°－Ｗで，掘立柱建物跡の主軸方向は，第７号掘立柱建物跡（側柱）と第16号掘立柱建物跡（総柱）がＮ－22～25°－Ｗである。Ⅵ期では，官道の走行方向を揃えるような建て方だったのが，Ⅲ・Ⅳ期のように官道に主軸方向が向くような建て方に変化している。第25号住居跡を囲むように，第９号掘立柱建物跡（側柱　Ｎ－68°－Ｅ），第16号掘立柱建物跡が建てられており，一群を形成している。その一群から北側に距離を取って，第７号掘立柱建物跡がある。一定の空間を共有するひとつのまとまりが考えられる。

以上，第Ⅰ期を６世紀後半とし，そこから第Ⅶ期までの集落の変遷を見てきた。各期の年代は，Ⅳ期を８世紀前葉，Ⅴ期を８世紀中葉，Ⅵ期を８世紀後葉，Ⅶ期を９世紀中葉とした。９世紀前葉の住居跡及び掘立柱建物跡は，北茨城市教育委員会の調査で確認されており，6世紀後半から９世紀中葉まで継続した集落群と考えられる。９世紀後葉以降の集落は，北茨城市教育委員会の調査でも確認されていない。本集落群は，９世紀中葉をもって終焉を迎えることを，改めて追認できたと考えられる。また，すでに集落がある場所に，Ⅲ期になって官道が作道されていることも今回の調査で確認され，官道と集落の在り方を考える上で，大きな成果が得られたものと考えられる。叶南前Ａ遺跡の第１号泥炭層を境にして，神岡上遺跡に向かって標高が低くなり，砂丘と砂丘の間の低地と考えられる。ここには，集落は確認されていない。集落は古墳時代後期と変わらず，砂丘上でもより標高の高い位置を選んで形成しているものと考えられ，集落の初現から終焉まで一貫した占地の在り方がうかがえる。

6　おわりに

集落群の中に官道を持つこの遺跡群は，どのような性格で，その時代の中でどのような役割を担ってきたのかを念頭において考察を進めてきた。これまでの記述をもう一度振り返えり，本遺跡群の性格を考えてまとめとしたい。

『常陸国風土記』の多珂国造の領域と，多珂と石城の建評の記事について，古墳及び横穴墓から出土した鈴鏡・鈴釧の比較検討から，共通の葬送儀礼文化圏が想定されている[49]。仁井谷・古屋敷遺跡から出土した栗囲式土器は，胎土に黒雲母が含有されている。これは，遺跡群の後背にある丘陵が花崗岩を基盤としており[50]，ここから供給されたものと考えられる。今回の調査で確認された栗囲式土器は，胎土の特徴から搬入品ではなく在地で製作されたものと考えられ，土器からも東北地方南部との共通した文化圏が想定される。浜通りのいわき市応時遺跡出土の甕は，ハケ目調整しない傾向にあり常陸との関係が指摘されているが[51]，今回出土した栗囲式土器の甕は，外面ハケ目調整であり，中通りなどとの関係を考慮する必要が考えられる。

この地域の盟主墳と考えられる，神岡上第３号墳と同時期の６世紀後半には，集落が営み始められ，継続している。その集落の中を縦断するように，官道は作道されている。この官道は駅路の可能性が高く，藻島駅路跡[52] 以北から陸奥国の海道10駅にまでの路線復元に，大きな資料を提供したものと考えられる。また，この道路跡の位置付けがなされたことにより，棚島駅家の位置が磯原付近であるという推定が，より蓋然性の高いものになってきたと考えられる。

集落の初現は６世紀後半に求められ，そのまま継続して律令期を迎える。８世紀には，掘立柱建物を多数

保有する集落群として大きく発展する。駅家（陸路），津（梁津　海路）の結節点に広がるこの地域は，交通の要衝地と考えられ，神岡上遺跡群は，人や物資の流通を担った一大拠点と考えられる。そして，それは伝統的な支配や習慣などを基盤として持っていた集落に，公の力が働いて発展した，駅家周辺の官的な集落群と考えられる。この集落群は，９世紀中葉に終焉を迎える。河内郡内の「郡衙周辺集落」「拠点的長期継続型集落」「長期継続型集落」と呼ばれる集落は，９世紀後葉に継続または規模を拡大する傾向[53]である。また，常陸国の各郡の拠点的集落も，河内郡と同様な消長を示している[54]。神岡上遺跡群は，この消長の在り方と異なっており，これは，中央の征夷と関わった集落の消長と考えられる。常陸国が深く征夷と関わっていることは，すでに周知のことである。709（和銅２）年の征夷は，中央政府の政治的な意図に基づいた，本格的な征夷の最初のものである[55]。724（神亀元）年以降，「坂東」と呼ばれる征夷を支援する地域が設定され，征夷戦が本格化する。774（宝亀）５年に海道の蝦夷が反乱を起こし，「38年戦争」が開始され，その征夷も905（延暦24）年の「徳政相論」によって中止が決定される。その後の811（弘仁２）年の征夷は，大規模ではなく，縮小されている。坂東の中でも陸奥国と直に接した国の最北端にある，多珂郡梁津郷と新居郷の交通の要衝地に，中央の征夷に深く関わる集落群が形成され，征夷の中止とともに集落も衰退し，終焉を迎えたものと考えられる。

今回の調査は，神岡上遺跡群の消長とその性格を考える上で，大きな成果を挙げたものと考えられる。すでに報告されている資料の再検討を行い，今回の成果と合わせた時に，この遺跡群の本当の姿が見えてくるものと考えられる。

註

1）瓦吹堅　志田諄一「第二章　国境の港と勿来関　第一節　常陸路の終点と梁津」『北茨城市史』上巻　北茨城市　1988年６月
2）磯部一洋　柏義夫「北茨城市海岸に砂浜の浸食を探る」『地質ニュース』第451号　1992年３月
3）水戸市気象台防災業務課の山口広氏のご教示による。砂丘の形成時期と現代では，最多風向に違いがあるものと考えられる。
4）註２と同じ
5）小川和博　大渕淳志「神岡上遺跡・南前遺跡　北茨城市神岡上地区ほ場整備地内埋蔵文化財発掘調査報告書第１集」『北茨城市文化財調査報告』Ⅸ　北茨城市教育委員会　1999年12月
6）整理中に，つくば市下河原崎谷中台遺跡から，「根太」と思われる炭化材が出土した。神岡上遺跡群の竪穴住居跡では，その痕跡は確認されていない。しかし，そのような床材を，想定しておくべきだろう。
7）検出された花粉化石群集は，分解に強いものだけが残された可能性があり，正確に周辺植生を反映されていない可能性も踏まえた分析結果をもとにした古植生であることを付記しておく。
8）大渕淳志　小川和博「富士ノ腰遺跡・神岡上遺跡・叶南前Ａ遺跡・叶南前Ｂ遺跡・古屋敷遺跡・仁井谷遺跡　県営ほ場整備事業神岡上地区埋蔵文化財発掘調査報告書第２集」『北茨城市文化財調査報告』11　北茨城市教育委員会　2005年３月
小川和博　大渕淳志「神岡上遺跡・南前遺跡　北茨城市神岡上地区ほ場整備地内埋蔵文化財発掘調査報告書第１集」『北茨城市文化財調査報告』Ⅸ　北茨城市教育委員会　1999年12月
9）秋本吉徳『常陸国風土記全訳注』講談社学術文庫1518　株式会社講談社　2001年10月
10）佐藤敏幸「東北地方における７世紀から８世紀前半の土器研究史－関東系土師器研究の現状と新たな研究視点の模索－」『宮城考古学』第８号　宮城考古学会　2006年５月
11）氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会　1957年３月
12）甕には，明確に段を形成しないものもあることも註で述べている。
13）工藤哲司　成瀬茂「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第43集　仙台市教育委員会　1982年８月
14）丹羽茂　小野寺祥一郎　阿部博志「清水遺跡　東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書第77集』 宮城県教育委員会　1981年３月
15）桑原滋郎「東北地方北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について」『考古学雑誌』第61巻第４号　日本考古学会　1976年３月
16）阿部義平「東国の土師器と須恵器－多賀城外の出土土器をめぐって－」『帝塚山考古学№１』 帝塚山大学考古学研究室　1968年10月
17）仲田茂司「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』 日本考古学協会　1997年10月
18）註５と同じ。この第13号住居跡出土の甕の器面調整は，報告書の本文中には「タタキ」，遺物観察表には「ハケメ」と記載されている。筆者の実見の結果，ハケ目と訂正する。なお，第６号住居跡出土の甕も実見している。
19）仲田茂司「陸奥国における奈良時代土師器」『歴史』第72輯　東北史学会　1989年３月
20）樫村宣行　浅井哲也「常陸地域の鬼高式土器－久慈川・那珂川流域を中心として－」『月刊考古学ジャーナル』 ニュー・サイエンス社　1992年１月
21）浅井哲也「古墳時代の土器－常陸の古墳時代後期の土器編年確立に向けて－」『紀要』第34号　茨城県立太田第一高等学校　1998年３月
22）註14と同じ
23）註19と同じ
24）註17と同じ
25）村田晃一「宮城県における６・７世紀の土器様相」『東国土器研究』第４号　東国土器研究会　1995年５月
26）石本弘「福島県における律令期成立以前の土器様相」『東国土器研究』第４号　東国土器研究会　1995年５月
27）註５と同じ

28）土生郎治「山田窯跡表採遺物について」『研究ノート』５号　財団法人茨城県教育財団　1996年６月
29）鴨志田祐一　早川麗司「犬田神社前遺跡２　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ｘ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第248集　2005年３月
30）ａ瓦吹堅「北茨城の古墳－出土鏡を中心に－」『いわき地方史研究』第37号　いわき地方史研究会　2000年９月
ｂ稲田健一「高萩市赤浜古墳群第４号墳の鉄鏃」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会　2003年４月
31）註５と同じ
32）地盤工学会　土のはなし編集グループ「土の話」Ⅱ　技報堂出版株式会社　1979年３月
33）註32と同じ
34）近江俊秀「古代道路跡遺構の形態からみたその性格」『古代交通研究』第７号　古代交通研究会　1997年11月
35）近江俊秀「道路遺構の変遷」『古代交通研究』第10号　古代交通研究会　1997年11月
36）中村太一氏が，年代決定の困難さについてまとめている。 中村太一『日本の古代道路を探す　律令国家のアウトバーン』平凡社　2000年５月
37）ＮＰＯ法人アサザ基金の矢野徳也氏に，20倍の顕微鏡で観察していただいた。記して感謝を申し上げる。
38）酒井清治　伊藤博幸編「Ⅰ関東　７茨城県」『須恵器集成図録第４巻東日本編Ⅱ』雄山閣　1995年11月
39）矢野徳也氏に，観察していただき，採取地などもご教示頂いた。珪質片岩のほかに，福島県いわき市の石森山付近の岩質に求められると推測される，溶岩が砕けて堆積したと考えられる石を素材とした砥石も出土している（第18号住居跡Ｑ７）。北からの石材の流通を示す資料である。
40）佐々木義則「２　岩質･形態からみた武田石高遺跡出土砥石の特徴」『武田石高遺跡　奈良・平安時代編』『（財）ひたちなか市文化･スポーツ振興公社文化財調査報告』第19集　ひたちなか市教育委員会　財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社　2000年１月
41）赤井博之　佐々木義則「茨城県における須恵器の流通－供膳具を中心とした須恵器の肉眼観察による産地同定と今後の課題」『婆良岐考古』第28号　婆良岐考古同人会　2006年５月
42）佐々木義則「２　武田石高遺跡における土師器甕の変遷」『武田石高遺跡　奈良・平安時代編』『（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第19集　ひたちなか市教育委員会　財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社　2000年１月
43）佐々木義則「考古資料からみた常陸国の流通」『古代常陸国シンポジウム－常陸国風土記・国府・郡家－』古代常陸国シンポジウム実行委員会　明治大学古代学研究所　2006年11月
44）近江俊秀「第３章　駅路の成立と展開　第２節　駅路の成立」『古代国家と道路』青木書店　2006年６月
45）仲村浩一郎「常陸国府以北の駅路について」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会　2003年４月
46）宇治谷孟『続日本紀』（上）　講談社学術文庫1030　講談社　1992年10月
47）ａ佐々木義則「木葉下窯跡群産坏ＡＩの変化について－消費地における形態と調整技法の様相－」『婆良岐考古』第17号　婆良岐考古同人会　1995年５月
ｂ赤井博之　佐々木義則「新治窯跡群産須恵器坏ＡＩの変化－消費地の様相－」『婆良岐考古』第18号　婆良岐考古同人会　1996年５月
ｃ佐々木義則「木葉下窯跡群の須恵器須恵器生産－奈良時代前半を中心に－」『婆良岐考古』第19号　婆良岐考古同人会　1996年５月
ｄ赤井博之　吉澤悟「茨城県千代田町一丁田窯跡出土の須恵器の検討」『婆良岐考古』第19号　婆良岐考古同人会　1996年５月
48）佐々木義則「常陸におけるロクロ成形土師器坏の展開－古代久慈・那珂・信太の三郡を中心として－」『婆良岐考古』第20号　1998年５月
49）大竹憲治「考古学から見た岩城評の成立－特に多珂と岩城出土の鈴鏡・鈴釧・鐙瓦を中心に－」『いわき地方史研究』第41号　いわき地方史研究会　2004年９月
50）矢野徳也氏にご教示頂いた。
51）柳沼賢治　佐久間正明「栗囲式土器の成立過程」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会　2005年10月
52）片平雅俊「藻島駅路跡」『平成18年度総会資料　第28回研究発表会資料』茨城県考古学協会　茨城県考古学協会　2006年６月
53）佐々木義則「常陸国河内郡における掘立柱建物跡群の展開－８・９世紀の様相－」『婆良岐考古』第27号　婆良岐考古同人会　2005年５月
54）瓦吹堅「考古学からみた常陸」『古代常陸国シンポジウム－常陸国風土記・国府・郡家－』古代常陸国シンポジウム実行委員会　明治大学古代学研究所　2006年11月
55）鈴木拓也「桓武朝の征夷と造都に関する試論」『近畿大学文芸学部論集　文学・芸術・文化』13巻２号通巻第32号　近畿大学文芸学部　2002年３月

参考文献

茨城県市編集委員会『茨城県史』原始古代編　茨城県　1985年３月
茨城県立歴史館『茨城県史料』古代編　茨城県　1968年11月
近江俊秀『古代国家と道路』　青木書店　2006年６月
折原洋一「神岡上古墳群－北茨城市関南町神岡上－」『北茨城市文化財調査報告』Ⅵ　北茨城市教育委員会　1995年10月
瀬谷義彦監修『図説那珂・久慈・多賀の歴史』　郷土出版社　2004年11月
瓦吹堅「砂浜の遺跡－茨城県北茨城市内の様相－」『地域考古学の展開－村田文夫先生還暦記念論文集－』 村田文夫先生還暦記念論文集刊行会　2002年５月
北茨城市市史編さん委員会『北茨城市史』上巻　北茨城市　1988年６月
木下良「常総地域の古代交通通路について」『常総地域における交通体系の歴史的変遷に関する総合的研究　平成２・３年度文部省科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究報告書　課題番号02301049』研究者代表岩崎宏之　1992年３月
日下哉『図解　日本地形用語事典』第２版　東洋書店　2003年８月
古代交通研究会編『日本古代道路事典』　2004年５月　八木書店　2004年５月
高萩市史編纂専門委員会『高萩市史』上　高萩市役所　1969年11月
日立市『新修日立市史』上巻　日立市　1994年９月
中村太一ａ『日本古代国家と計画道路』　吉川弘文館　1996年７月
ｂ『日本の古代道路を探す』　平凡社　2000年５月
山村信榮「古代道路の構造」『古代交通研究』第10号　古代交通研究会　2001年２月
吉村武彦編『古代史の基礎知識』角川選書373　角川書店　2005年３月

付章　古屋敷遺跡・神岡上遺跡・叶南前Ａ遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北茨城市に所在する古屋敷遺跡，神岡上遺跡，叶南前Ａ遺跡は，茨城県最北部の太平洋岸に形成された狭小な海岸平野に位置する。磯部･柏（1992）や瓦吹（2002）などに記載された付近の地形に関する記載によれば，海岸平野にはおよそ南北方向に伸びる２列の砂丘が分布するとされている。東側の砂丘はほぼ現海岸と国道６号との間に挟まれた狭い範囲に海岸沿いに伸びており，西側の砂丘は，それよりも低平で幅が広く，現在では県道里根・神岡上線とその道路沿いに分布する集落がのっている。これらの海岸砂丘の形成については，詳細は不明であるが，おそらく縄文海進最盛期後の海退期に形成された浜堤を基盤として，離水の進行にしたがって，砂丘が形成されていったと考えられる。各砂丘列の形成年代も，明らかにされていないが，西側の砂丘には縄文時代中期の墓域を示す遺跡が確認されている（瓦吹，2000）ことから，西側の砂丘は，新しくともそれ以前には形成していた可能性がある。古屋敷遺跡，神岡上遺跡，叶南前Ａ遺跡は，いずれも西側砂丘上の西縁部に位置し，神岡上遺跡の一部は砂丘と背後の丘陵との間に形成された低地にかかっている。

本報告では，これら３遺跡でそれぞれ設定された以下の３課題について，自然科学分析の手法を用いることにより，検討を行うものである。

１）古屋敷遺跡では，古代とされる竪穴住居跡の覆土が暗灰色を呈する砂層であり，住居跡の構築されている地山を構成する黄白色の砂層との色調の違いが顕著に認められた。ここでは，覆土における色調の原因を調べることを目的とし，砂を構成する鉱物の由来（重鉱物分析）と粒径組成および土壌として見た場合の色調の原因となる腐植含量を調べ，さらに関東における代表的な黒色土である黒ボク土（火山灰土）の影響をリン酸吸収係数により計る。

２）神岡上遺跡では，砂丘上に形成された凹地に植物遺体を多量に含む黒色土層の堆積が認められた。この黒色土層について，その形成年代を調べる目的で土層中に含まれる指標テフラの検出(テフラ分析)を行い，堆積環境および植生を中心とした周辺環境を,珪藻,花粉の各微化石分析と材,種実遺体の同定により推定する。

３）叶南前Ａ遺跡で検出された近世とされる井戸跡より出土した井戸枠材の樹種同定を行い，当時の用材について検討する。

Ⅰ．古屋敷遺跡における住居跡覆土の分析

１．試料

試料は，古代とされる竪穴住居跡SI-１の覆土および地山から採取した。SI-１の覆土は，発掘調査所見により，１層から５層までの分層がなされている。このうち，覆土の主体は１層であり，２～４層はブロック状を呈し，局所的に認められるにすぎない。また，５層は住居の床面直上に薄く堆積する覆土である。覆土はいずれも細粒～中粒の砂からなる砂層であるが，色調に若干の違いが認められている。

１層は暗灰色を呈し，葉理等の堆積構造は認められない。周囲の遺物包含層と同様の色調を呈することから，これが覆土の由来と考えられている。一方，５層は，黄白色を呈するが，植物痕による撹乱により，上位の１層の暗灰色砂が斑状に混在している。砂層は軟弱であり，貼床と言えるような硬化層は認められない。地山も黄白色を呈する細粒～中粒砂により構成されており，一部に植物痕による撹乱は認められるが，葉理や級化構造などの堆積構造は認められない。

試料は，１層の上部と下部より，それぞれ試料番号１と試料番号２，５層より試料番号３，地山より試料番号４の合計４点を採取した。分析には，このうち，試料番号２と４の２点を選択する。

２．分析方法

(1) 重鉱物分析

試料約40ｇに水を加え超音波洗浄装置により分散，250メッシュの分析篩を用いて水洗し，粒径１/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後，篩別し，得られた粒径１/４㎜－１/８㎜の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離，重鉱物をそれぞれ250粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は，「その他」とした。

なお，本分析では，各試料の砂粒について実体顕微鏡による概査をしたところ，暗灰色を呈する１層の試料番号２には，有色鉱物が多い傾向が認められた。このことから，上記の篩別後の段階で，試料を取り分け，粒径１/４㎜－１/８㎜の砂分全体において，有色鉱物（重鉱物と黒雲母）および灰色や黒色を呈する岩石片を含めた暗色粒子とそれ以外の主に石英や長石類の鉱物片からなる明色粒子との比を求めた。

(2) 土壌理化学分析・粒度分析

腐植含量はチューリン法，リン酸吸収係数は2.5％リン酸アンモニウム液法，粒径組成はピペット法（土壌標準分析・測定法委員会，1986）でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

１）分析試料の調製

試料を風乾後，土塊を軽く崩して２㎜の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし，分析に供する。また，風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し，0.5㎜篩を全通させ，粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については，105℃で４時間乾燥し，分析試料水分を求める。

２）腐植含量

粉砕土試料0.100～0.500ｇを100㎖三角フラスコに正確に秤りとり，0.4Ｎクロム酸・硫酸混液10㎖を正確に加え，約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後，0.2％フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2Ｎ硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org－Ｃ乾土％）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（％）を算出する。

３）リン酸吸収係数

乾土として10.00ｇになるように風乾細土試料を遠沈管にはかり，2.5％リン酸アンモニウム液(pH 7.0)20㎖を加え，時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し，そのろ液100μℓを50㎖メスフラスコに正確にとり，水約35㎖とリン酸発色ａ液10㎖を加えて定容し，よく振り混ぜる。発色後30分間放置し，420㎚で比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5％リン酸アンモニウム液（pH 7.0）のリン酸量から差引き，リン酸吸収係数を求める。

４）粒径組成（ピペット法）

風乾細土試料10.00ｇに水と30％過酸化水素水を加え，熱板上で有機物の分解を行う。分解終了後，遠心洗浄を２回行い，水を約500㎖加え，撹伴しながら30分間音波処理を行う。この液を500㎖沈底瓶に移し，往復振とう機で１時間振とうした後，水で１ℓに定容した。沈底瓶を１分間激しく振り，直ちに静置して所定の時間に５㎝の深さから懸濁液10㎖を採取する。採取懸濁液を蒸発乾固し，乾燥・秤量する（シルト・粘土の合量）。さらに所定の時間が経過した後，沈底瓶から懸濁液を５㎝の深さから10㎖採取し，蒸発乾固・乾燥・秤量する（粘土含量）。沈底瓶に残ったシルト・粘土をサイフォンを使ってすべて洗い流し，その残査を乾燥・秤量する（砂含量）。これを0.2㎜φの篩でふるい分け，篩上の残留物を秤量する（粗砂含量）。これらの測定値をもとに粗砂（2.0－0.2㎜）・細砂（0.2－0.02㎜）・シルト（0.02－0.002㎜）・粘土（0.002㎜以下）４成分の合計を100とする各成分の重量％を求め，国際法による土性区分を行う。

３．結果

(1) 重鉱物分析

結果を表１，図１に示す。重鉱物組成は，２点の試料ともに斜方輝石が最も多く，次いで角閃石がやや多く，少量の単斜輝石と不透明鉱物を伴うという組成である。ただし，試料番号４は，試料番号２に比べて角閃石の量比が高く，不透明鉱物が少ない。一方，明色粒子と暗色粒子の量比では，試料番号２の暗色粒子の量比は40％に近く，試料番号４のそれは20％にやや足りない程度であり，有意な差として認められた。

表1. 古屋敷遺跡SI-1住居跡覆土の重鉱物分析結果

層名	試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	角閃石族	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	合計	明色粒子	暗色粒子	合計
１層	2	142	22	41	0	4	0	2	30	9	250	160	90	250
地山	4	108	28	88	1	0	6	0	3	16	250	208	42	250

＊明色粒子：石英・長石類・風化粒など
＊暗色粒子：重鉱物・黒雲母片・灰色岩石片など

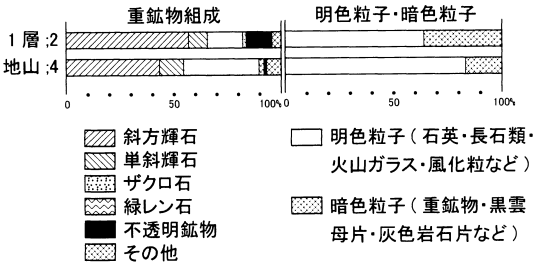


図1. 古屋敷遺跡SI-1住居跡覆土の重鉱物組成

(2) 土壌理化学分析・粒度分析

結果を表２に示す。腐植含量は，両試料ともに特に高いという値ではなく，むしろ地山の試料番号４は著しく低い値である。リン酸吸収係数は，試料番号２が350と低い値であるのに対し，試料番号４は1100とやや高い値を示す。粒径組成では，両試料ともに粗砂の多い砂であり，シルト・粘土分は極めて微量である。

表2. 古屋敷遺跡SI-1住居跡覆土の土壌理化学分析・粒度分析結果

層名	試料番号	土色	腐植含量（%）	リン酸吸収係数	粒径組成				
					粗砂（%）	細砂（%）	シルト（%）	粘土（%）	土性
１層	2	2.5Y3/2　黒褐	1.04	350	57.4	39.2	2.2	1.2	S
地山	4	2.5Y5/3　黄褐	0.11	1100	49.8	48.7	1.3	0.2	S

注.（1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

４．考察

覆土の１層は，地山に比べれば，腐植含量は多く，わずかにシルト・粘土分が多いものの，基本的には砂であり，特に土壌化が進んだ状態とは判断されない。また，１層の示す低いリン酸吸収係数は，黒ボク土の混在もほとんどないことを示唆する。したがって，１層の暗い色調は，構成する砂の粒子自体に由来する可能性がある。重鉱物組成には大きな違いは認められなかったが，覆土の１層には，地山に比べて暗色粒子が有意に多かった。このような砂の組成が，１層の暗い色調の原因になっていると考えられる。

暗色粒子の主体は重鉱物であるが，重鉱物粒子が濃集して堆積することは，砂丘の基盤となっている浜堤の形成環境(波浪によって打ち上げられて堆積する)によっては，自然に生じ得る現象である。実際に，Ｊ７h0区で作製された自然堆積した砂層の深掘断面では，14層に，黒色砂層と黄灰色砂層とが，それぞれ厚さ５～10㎜程度で20枚ほどの互層を形成している状況が認められている。この黒色砂について，実体顕微鏡により，砂粒を構成する粒子の確認をしたところ，上述した覆土の１層と同様に斜方輝石と不透明鉱物が比較的多く含まれており，これらが黒色の色調の原因となっていることが看取された。これらのことから，覆土の１層が由来するとされた周囲の遺物包含層を構成する砂層は，おそらく浜堤を構成している砂層であると考えられ，堆積時にはすでに暗色を呈していたと考えられる。

なお，須貝ほか（1957）や日本の地質「東北地方」編集委員会（1989）などの記載から，砂粒中の重鉱物のうち，角閃石は主に北茨城市背後の阿武隈山地を構成する花崗閃緑岩に由来すると考えられるが，輝石類の由来については，海岸平野に臨む丘陵～山地を構成する新第三紀の凝灰岩や砂岩，泥岩類であるとは考えにくい。おそらく，赤城火山や男体火山などから東方に分布する噴出物に由来する可能性がある。

Ⅱ．神岡上遺跡における黒色土の分析

１．試料

試料は，神岡上遺跡Ⅰ区s４h5KH-1断面より採取した。本断面は，砂丘上の凹地にあり，現代の盛土の下位に，最も厚いところで約２ｍの埋積層が確認されている。発掘調査所見では，埋積層は上位より１層から５層までの分層がなされており，１層は盛土下の撹乱層，２層は黒色土層であり，その中部にレンズ状の砂層である３層を狭在する。詳細には３層より上位の２層は植物遺体をほとんど含まない黒色粘土層であるが，３層より下位の２層は，草本質の植物遺体を多量に含む腐植質シルトである。２層の下位に厚く堆積する砂層も３層とされており，細粒～中粒の砂により構成されている。厚い砂層の３層の下位には５層とされた厚い黒褐色を呈する腐植質シルト層が堆積する。５層には木本質の植物遺体や種実遺体なども包含されている。

試料は，レンズ状の３層を挟んで２層上部，レンズ状の３層，その下位の２層下部，厚い砂層の３層の各層より１点ずつ，試料番号１～４を採取し，５層からは，上部より試料番号５，中部より試料番号６を採取した。試料採取位置の断面を柱状図にして，図２に示す。

テフラ分析には，試料番号３，５の２点，珪藻および花粉の微化石分析には試料番号１，３，５の３点を選択し，試料番号５については，さらに種実分析も行った。

なお，ここでは，５層より出土した自然木３点（自然木サンプル１，２，４）と種実遺体４点（№９）についても，それぞれ材の樹種同定と種実同定を行う。

２．分析方法

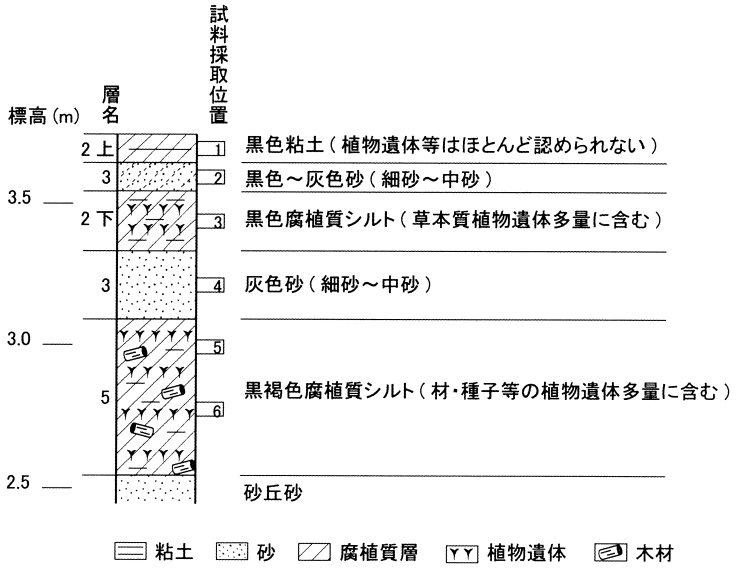


図2. 神岡上遺跡Ⅰ区 s4h5 区 KH-1 試料採取断面柱状図

(1) テフラ分析

試料約20ｇを蒸発皿に取り，水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し，上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後，実体顕微鏡下にて観察する。観察は，テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし，その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は，バブル型は薄手平板状，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり，軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し，過酸化水素水，塩酸処理，自然沈降法の順に物理・化学処理を施して，珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後，カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入して，永久プレパラートを作製する。検鏡は，光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い，メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し，珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定･計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は，原口ほか（1998），Krammer（1992），Krammer & Lange-Bertalot（1986，1988，1991ａ，1991ｂ），渡辺（2005）などを参照し，分類体系は Round *et al.*（1990）に従った。

同定結果は，海水生種，淡水生種の順に並べ，その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお，淡水生種はさらに細かく生態区分し，塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また，環境指標種についてはその内容を示す。そして，産出個体数100個体以上の試料については，産出率2.0％以上の主要な種類について，主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また，産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として，完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は，淡水生種については安藤（1990），陸生珪藻については伊藤・堀内（1991），汚濁耐性については，Asai & Watanabe（1995），渡辺（2005）の環境指標種を参考とする。また，珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表３に示す。

表3. 珪藻化石の生態性区分および環境指標種群の説明

	塩分濃度に対する区分 Lowe（1974）による	
海 水 生 種	強塩性種	塩分濃度 40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種（海水生種）	塩分濃度 40.0～30.0‰に生育する種
汽 水 生 種	中塩性種（汽水生種）	塩分濃度 30.0～0.5‰に生育する種
淡 水 生 種	貧塩性種（淡水生種）	塩分濃度 0.5‰以下に生育する種
	淡水生種の生態性区分	
塩　　分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	小量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH Hustedt（1937-38）による	真酸性種	pH7.0 以下に生育し，特に pH5.5 以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0 付近に生育し，pH7.0 以下の水域で最も良く生育する種
	pH 不定性種	pH7.0 付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0 付近に生育し，pH7.0 以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0 以上に生育し，特に pH8.5 以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流　　水 Hustedt（1937-38）による	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが，流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが，止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群（小杉，1988による）	
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(B)	塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35～12‰の海域で海藻（草）に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12～4‰の汽水域で海藻（草）に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26～5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群
海水泥質干潟指標種群(E1)	30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12～2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂，泥，水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20～2‰の河口域で浮遊生活，あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群

主に淡水域での指標種群（安藤，1990による）	
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群(K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘，扇状地，自然堤防，後背湿地などに集中して出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5ｍ以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が１ｍ前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群(P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群(Q)	水中でなく，多少の湿り気のある土壌表面，岩の表面，コケなど常に大気に曝された好気的環境（陸域）に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群

陸域での指標種群（伊藤・堀内,1991による）	
陸生珪藻Ａ群(RA)	陸生珪藻の中でも，分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻Ｂ群(RB)	陸生珪藻Ａ群に随伴し，陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが，乾湿に対する適応性の不明なもの

(3) 花粉分析

試料約10ｇについて，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い，物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し，400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表，および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を，草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として，百分率で出現率を算出し図示する。

(4) 材同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。作製したプレパラートは，生物顕微鏡で木材組織を観察し，その特徴から種類を同定する。なお，同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については，島地･伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また，各樹種の木材組織の配列の特徴については，林（1991），伊東（1995，1996，1997，1998，1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(5) 種実分析

土壌試料200cc（217.2ｇ）を水に浸し，0.5㎜目の篩を通して水洗する。篩内の残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し，同定可能な種実や２㎜角以上の木材や炭化材を抽出する。

種実を双眼実体顕微鏡下で観察し，現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994），日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）との対照から，種類と部位を同定して個数を求める。100個以上確認された木材は，容量を求める。分析後の種実遺体等は，70％エタノール溶液による液浸保存を施して保管する。

３．結果

(1) テフラ分析

２点の試料からはともに，処理後に得られた砂分中に，スコリア，火山ガラス，軽石のいずれも認めることはできなかった。

（２）珪藻分析

結果を表４，図３に示す。珪藻化石の産出頻度は全般的に少なく，試料番号３から堆積環境を検討する上で

有意な量が産出したが，試料番号１と５は非常に少なかった。完形殻の出現率は，何れも約40％以下と化石の保存状態は悪かった。産出分類群数は，合計で20属25分類群である。

試料番号３は，陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が全体の約５割を占め多産した。これに次いで，淡水生種が約30％，第三紀絶滅種を含む海水生種が約15％産出した。主な産出種は，水域にも陸域にも生育する陸生珪藻Ｂ群の *Eunotia praerupta* var. bidens が約50％と優占し，耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys*，流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Eunotia pectinalis* var. *undulata*，止水性の *Eunotia gracialis* 等を伴う。優占種の *Eunotia praerupta* var. *bidens* は，弱酸性を呈した水域に生育する沼沢湿地付着生種群でもある。海生種としては，化石の保存の悪い *Coscinodiscus* spp., *Stephanopyxis* spp. 等が産出した。

化石の少なかった試料番号１と５は，試料番号３とほぼ同様な種類が少量産出したに過ぎない。

表４．神岡上遺跡Ⅰ区 s4h5 区 KH-1 の珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境指標種	２階上	２階下	５階
	塩分	pH	流水		1	3	5
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				2	2	1
Coscinodiscus spp.	Euh				1	3	3
Denticulopsis spp.	Euh				2	−	−
Eunotogramma marinum (W.Smith)Peragallo	Euh				−	−	1
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	1	1	−
Stephanopyxis spp.	Euh				−	3	5
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A,B	6	2	6
Thalassiosira spp.	Euh				2	2	1
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	−	−	1
Aulacoseira crenulata (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		−	1	−
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	−	1	−
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	1	−
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve　var. ovalis	Ogh-ind	al-il	ind	T	−	1	−
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		−	2	−
Epithemia spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	1	−
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		−	4	−
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow var. minor	Ogh-hob	ind	ind	O,T	1	−	−
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	−	6	2
Eunotia pectinalis var. ventralis (Ehr.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	1	−
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	2	50	4
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	1	−
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	−	1	1
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		−	1	−
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	−	1	−
Gomphonema subclavatum (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	2	−
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2	−
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	−	7	−
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	1	−	−
Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	2	1	−
Pinnularia borealis var. brevicostata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	−	−
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	−	1	−
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		−	1	−
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		−	1	−
Synedra ulna (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	−	1	1
海水生種					14	13	17
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0
淡水生種					9	88	9
珪藻化石総数					23	101	26

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
Euh　：海水生種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi　：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群
A：外洋指標種，B：内湾指標種（小杉, 1988）
O：沼沢湿地付着生種（安藤, 1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上は Asai and Watanabe, 1995）
R：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群，RI：未区分，伊藤・堀内, 1991）

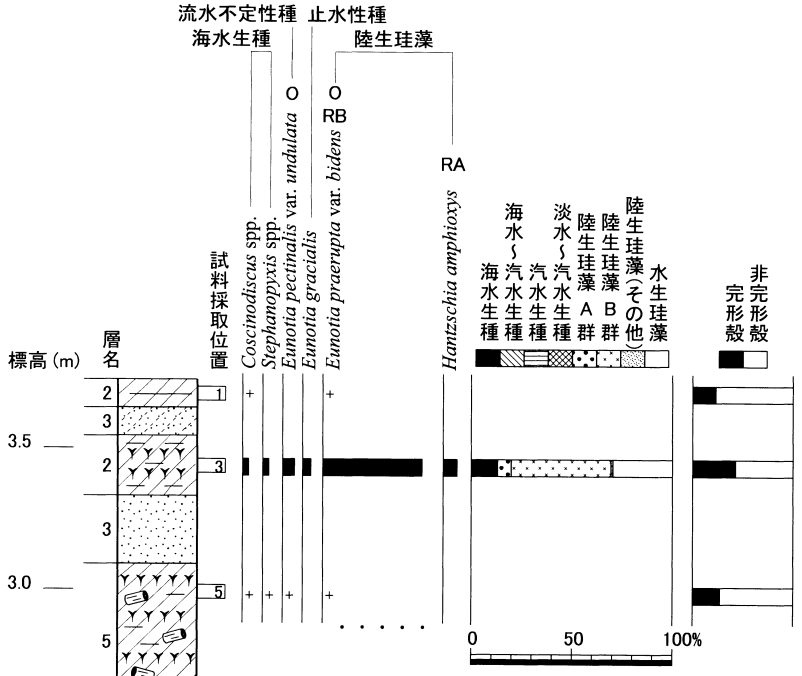


図 3. 神岡上遺跡 I 区 s4h5 区 KH-1 の主要珪藻化石群集の層位分布
海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。
なお、＋は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種群
O: 沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)
R: 陸生珪藻(RA:A 群, RB:B 群, RI: 未区分、伊藤・堀内, 1991)

(3) 花粉分析

結果を表５，図４に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは，種類間の区別が困難なものを示す。なお，木本花粉総数が100個体未満のものは，統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので，出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

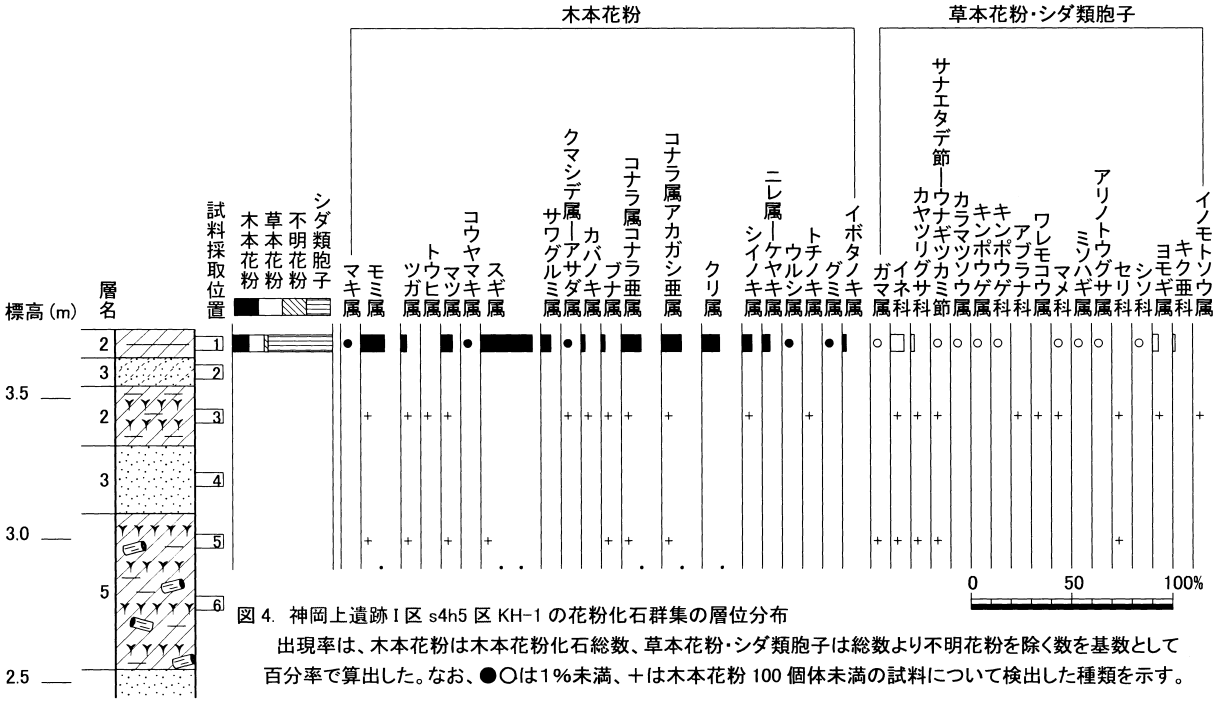


図 4. 神岡上遺跡 I 区 s4h5 区 KH-1 の花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

分析試料中最下位にあたる試料番号５では，花粉化石の産出状況が悪く，定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかった。わずかに検出された種類をみると，木本花粉ではモミ属，ツガ属，マツ属，スギ属，コナラ属コナラ亜属などが，草本花粉ではガマ属，イネ科，カヤツリグサ科，サナエタデ節－ウナギツカミ節などが，１～数個体検出されるのみである。

試料番号３では，試料番号５と比較すると，個体数・種類数とも多く検出するが，定量解析を行えるだけの個体数を得られておらず，化石の保存状態も悪い。検出した種類をみると，木本花粉ではモミ属が多く産出し，ツガ属，カバノキ属，コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，シイノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科，カヤツリグサ科，マメ科，ヨモギ属などが認められる。

分析試料最上位にあたる試料番号１では，かろうじて定量解析が行えるだけの個体数を得ることができたが，花粉化石の保存状態は悪い。木本花粉をみるとスギ属が最も多く産出し，モミ属，マツ属，サワグルミ属，コナラ亜属，アカガシ亜属，クリ属，シイノキ属，ニレ属－ケヤキ属などを伴う。草本類をみるとイネ科が多く産出し，カヤツリグサ科，ヨモギ属，キク亜科などを伴う。また，本試料ではシダ類胞子が多産する。

表５．神岡上遺跡Ｉ区 s4h5 区 KH-1 の花粉分析結果

種　　類	２階上	２階下	５階
試料番号	1	3	5
木本花粉			
マキ属	1	－	－
モミ属	12	37	2
ツガ属	3	3	1
トウヒ属	－	1	－
マツ属	6	1	1
コウヤマキ属	1	－	－
スギ属	26	－	1
サワグルミ属	5	－	－
クマシデ属－アサダ属	1	1	－
カバノキ属	2	2	－
ブナ属	2	1	1
コナラ属コナラ亜属	10	3	3
コナラ属アカガシ亜属	10	9	1
クリ属	9	－	－
シイノキ属	5	2	－
ニレ属－ケヤキ属	4	－	－
ウルシ属	1	－	－
トチノキ属	－	1	－
グミ属	1	－	－
イボタノキ属	2	－	－
草本花粉			
ガマ属	2	－	1
イネ科	41	5	1
カヤツリグサ科	12	11	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	2	1	1
カラマツソウ属	2	－	－
キンポウゲ属	1	－	－
キンポウゲ科	3	－	－
アブラナ科	－	1	－
ワレモコウ属	－	1	－
マメ科	5	3	－
ミソハギ属	1	－	－
アリノトウグサ属	1	－	－
セリ科	－	1	1
シソ科	1	－	－
ヨモギ属	18	11	－
キク亜科	8	－	－
不明花粉	25	4	－
シダ類胞子			
イノモトソウ属	－	1	－
他のシダ類胞子	404	30	－
合　計			
木本花粉	101	61	10
草本花粉	97	34	5
不明花粉	25	4	0
シダ類胞子	404	31	0
総計（不明を除く）	602	126	15

(4) 材同定

樹種同定結果を表６に示す。神岡上遺跡の自然木は，針葉樹１種類（カヤ）と広葉樹１種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）イチイ科カヤ属

表６．神岡上遺跡Ｉ区 s4h5 区 KH-1 出土材の樹種同定結果

遺　跡	遺構・位置	試料名	樹　種
神岡上遺跡	Ｉ区 s4h5 区 KH-1	自然木サンプル１	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		自然木サンプル２	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		自然木サンプル４	カヤ

軸方向組織は仮道管のみで構成され，樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には２本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で，１分野に１－４個。放射組織は単列，１－10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. *Prinus*）ブナ科

環孔材で，孔圏部は１－２列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１－20細胞高のものと複合放射組織とがある。

(5) 種実分析

結果を表７に示す。泥炭層から検出された種実遺体は，３点がオニグルミに，１点がコナラ亜属に同定された。土壌試料（試料番号５）からは，木本のクワ属１個，草本９分類群（ミクリ属，ヒルムシロ属，カヤツリグサ科，タデ属，トウゴクサバノオ，キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属，オトギリソウ属，セ

リ科，シロネ属）129個，計130個の種実が検出された他に，木の芽，木材，炭化材，不明植物，昆虫などが確認された。以下に，本分析で得られた種実の形態的特徴などを，木本，草本の順に記す。

表７．神岡上遺跡Ⅰ区 s4h5 区 KH-1 の種実分析結果

試料の質		分類群	部位	検出量	備考
種実	№.9	オニグルミ	核	3 個	食痕２個，半分１個
		コナラ亜属	殻斗	1 個	
土壌200cc	5	クワ属	種子	1 個	
(217.2g)		ミクリ属	果実	3 個	
		ヒルムシロ属	果実	5 個	
		カヤツリグサ科	果実	53 個	
		タデ属	果実	11 個	
		トウゴクサバノオ	種子	1 個	
		キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属	核	1 個	
		オトギリソウ属	種子	2 個	
		セリ科	果実	47 個	
		シロネ属	果実	6 個	
		木の芽		1 個	
		木材		8 cc	2mm 角以上
		炭化材		40 個	2mm 角以上
		不明植物		6 個	
		昆虫		24 個	

＜木本＞

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）クルミ科クルミ属

核の完形と破片が検出された。灰褐色，広卵体で頂部が尖る。長さ3.5－４㎝，幅３㎝程度。完形２個は，１本の明瞭な縦の縫合線上に齧歯類（ネズミなど）によると考えられる食痕（円形の孔）が認められる。破片１個は，縫合線上に沿って半分に割れている。核は木質，硬く緻密で，表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り，ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。

・コナラ亜属（*Quercus* subgen. *Quercus*）ブナ科コナラ属

殻斗が検出された。灰褐色，椀型。径２㎝，高さ８㎜程度。表面には狭卵形の鱗片が覆瓦状に配列する。椀の壁は厚く，先端はやや細く内側を向く。先端が細く鋭く上向きに伸びるミズナラ（*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson）よりも，ナラガシワ（*Quercus. aliena* Blume.）の殻斗に似る。

・クワ属（Morus）クワ科

種子が検出された。灰褐色，三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で，他方は稜になりやや薄い。長さ1.5㎜，径1.2㎜程度。一辺が鋭利で，基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

日本に分布するクワ属は，ケグワ，オガサワラグワ，ヤマグワ，ハチジョウグワの４種と栽培種のマグワがある。ケグワ，オガサワラグワ，ハチジョウグワは分布地が限られており，本地域には分布していないことから，ヤマグワやマグワに由来する可能性がある。

＜草本＞

・ミクリ属（*Sparganium*）ミクリ科

果実が検出された。淡灰褐色，楕円体。長さ4.5㎜，径2.2㎜程度。頂部はやや尖り，基部は切形。果皮はスポンジ状で，表面には数本の隆条が縦列する。

・ヒルムシロ属（*Potamogeton*）ヒルムシロ科

果実が検出された。淡灰褐色，左右非対称な倒卵体でやや偏平。長さ２㎜，幅1.6㎜，厚さ１㎜程度。頂部に嘴状の太い花柱基部が残る。側面の正中線上に深い縦溝と稜があり，その基部に１個の刺状突起がある。果皮はスポンジ状でざらつく。

果皮表面は光沢があり，不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。淡－黒褐色，レンズ状または三稜状倒卵体。径1.5－３㎜程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸び，基部は切形。基部から伸びる髭状の腕をもつ個体がみられる。果皮表面には微細な網目模様がある。

・タデ属（*Polygonum*）タデ科

果実が検出された。黒色，両凸レンズ状広卵体。長さ３㎜，径2.2㎜程度。基部に萼がある。両面正中線上に鈍稜がある。果皮表面には明瞭な網目模様がある。ヤナギタデ（Polygonum hydropiper L.）の果実に似る。

・トウゴクサバノオ（*Isopyrum trachyspermum* Maxim.）キンポウゲ科シロカネソウ属

種子が検出された。淡褐色，偏球体。径0.7㎜程度。種皮は薄く，表面には小突起が密布しざらつく。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*）バラ科

核（内果皮）が検出された。淡灰褐色，腎形でやや偏平。径1.2㎜程度。内果皮は厚く硬く，表面には数個の隆条が斜上する。

・オトギリソウ属（*Hypericum*）オトギリソウ科

種子が検出された。黒褐色，線状長楕円体。両端は短い突起状。長さ1.2㎜，径0.6㎜程度。種皮は微細で横長の凹点による網目模様が配列する。

・セリ科（Umbelliferae）

果実が検出された。黄褐色，楕円体でやや偏平。長さ2.3㎜，幅1.4㎜，厚さ0.5㎜程度。果皮はスポンジ状で，腹面と背面には数本の幅広い稜があり，その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・シロネ属（*Lycopus*）シソ科

果実が検出された。淡褐色，三稜状広倒卵体。長さ２㎜，径１㎜程度。背面は平らで，両側にはスポンジ状の翼がある。腹面の正中線上は鈍稜をなし，基部は切形で長楕円形の臍がある。

４．考察

(1) 黒色土の形成環境について

２層および５層の形成年代については，年代指標を全く得ることができなかった。前述したように，西側の砂丘は，縄文時代中期頃にはすでに人間活動が展開していたとされていることに基づけば，古くとも縄文時代以降の堆積物と考えられるが，現時点では詳細は不明である。

堆積環境を検討するのに有意な量の珪藻化石が産出した試料は，２層下部から採取された試料番号３に限られた。本試料からは，陸生珪藻Ｂ群であり沼沢湿地付着生種群でもある *Eunotia praerupta* var. bidens が優占し，沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種を伴うことで特徴付けられた。優占種は，その他の陸生珪藻を多く含まなかったことから本地点では，水生珪藻として沼沢～湿地等の水域に生育した種として判断される。よって，２層下部は水生植物の繁茂する弱酸性を呈した沼沢～湿地のような湿潤な環境で堆積したと考えられる。すなわち，砂丘の凹地に形成された湿地の堆積物であったことが考えられる。

化石の少なかった２層上部の試料番号１と５層の試料番号５は，堆積環境について検討することは困難である。ただし，５層は木本質の植物遺体や種実遺体を含む腐植質シルトであることから，２層下部と類似する沼沢～湿地のような湿潤な環境で堆積した可能性がある。化石が少なかった原因については，珪藻化石が堆積後の続成作用によって分解したか，あるいは堆積物自体にもともと珪藻化石が少量しか含まれていなかったことが考えられる。これらの試料において検出された珪藻化石が溶解していたことを考慮すると，前者の可能性が高い。ただし，溶解が生じた具体的な物理条件は不明である。

なお，今回分析した全ての試料から第三紀絶滅種を含む海水生種が少量ながら産出した。これらの海水生種の給源としては，海岸平野の西側に分布する丘陵を構成している新第三系中新統の白土層群や湯長谷層群（日本の地質「関東地方」編集委員会，1986）があげられる。これらの海成層が丘陵を流れる河川によって削剥されて，海岸平野にもたらされたと考えられる。

(2) 黒色土形成時の周辺植生について

今回の花粉分析では，花粉化石の検出状況は悪く，古植生推定のための定量解析を行うだけの個体数を得ることができた試料は，２層上部の試料番号１のみであった。その試料番号１においても，産出状況は良好といえず，花粉化石の保存状態も悪い。産出した木本類についてみると，モミ属，ツガ属，マツ属，スギ属など針葉樹に由来する花粉化石が多く認められ，シダ類胞子も多産した。一般的に花粉やシダ類胞子は，腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており，落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。また，草本類においても比較的分解に強い花粉や，分解が進んでも同定可能な花粉が検出されている。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では，花粉は酸化や土壌微生物によって分解･消失するとされている（中村，1967;徳永･山内，1971）。これらのことから今回検出された花粉化石群集は，堆積後の経年変化により分解・消失し，分解に強い花粉が選択的に残された可能性があり，当時の周辺植生を正確に反映していない可能性がある。この点を踏まえた上で，古植生について検討する。

検出した木本類についてみると，モミ属，ツガ属，マツ属などの針葉樹，ブナ属，コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹，コナラ属アカガシ亜属，シイノキ属などの常緑広葉樹が，全試料を通じて比較的多く検出される。本地域の潜在自然植生（人間の影響を一切停止したときに，現在の気候，地形，土壌条件下で成立すると考えられる自然植生）をみると，海岸沿いはハマボウクラス（砂丘植生）が，低地部ではイノデ－タブノキ群集，シラカシ群集などが，河畔沿いなどにはオニスゲ－ハンノキ群集，クサヨシ－ハンノキ群集，ジャヤナギ－アカメヤナギ群集，タチヤナギ群集などが分布し，標高の高い部分ではシキミ－モミ群集が分布するとされている（宮脇編著，1986）。よって，検出されたマツ属などは海岸沿いに，アカガシ亜属，シイノキ属などの照葉樹林要素は低地部に，サワグルミ属，クマシデ属－アサダ属，コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属などは河畔沿いや低湿地などに，モミ属，ツガ属，ブナ属などは，より標高の後背の高い山地・丘陵部部などに生育していたものに由来する可能性がある。

なお，試料番号１採取層準の２層上部で，スギ属が多産する。スギは有用材であり，古くから管理・維持あるいは植林などがされてきた。本地域の現存植生をみても，スギ・ヒノキ・サワラ植林が多く認められる（宮脇編著，1986）。よって，２層上部の堆積年代は比較的新しく，周辺において，植林などのスギ属が多く存在した可能性がある。

草本類では，イネ科をはじめとしてカヤツリグサ科，サナエタデ節－ウナギツカミ節，キンポウゲ科，マメ科，ヨモギ属，キク亜科などが認められる。これらの多くは，開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であることから，遺跡内あるいはその周囲の草地に生育していたものに由来すると思われる。

５層から出土した自然木は，針葉樹のカヤと落葉広葉樹のコナラ節であった。カヤは，主に暖地に分布し，アカガシ亜属等の常緑広葉樹と共に生育する。一方，コナラ節は，本地域では二次林の構成種であるコナラが一般的である。木材出土層準の花粉分析では検出状況が悪いが，コナラ亜属，アカガシ亜属，ブナ属，スギ属などの花粉化石が僅かに検出されており，木材の樹種構成とも矛盾しない。

５層の種実分析では，木本３分類群（オニグルミ，コナラ亜属，クワ属）５個，草本９分類群（ミクリ属，ヒルムシロ属，カヤツリグサ科，タデ属，トウゴクサバノオ，キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ

属，オトギリソウ属，セリ科，シロネ属）129個の種実が検出された。

木本類はいずれも落葉広葉樹で，オニグルミは川沿いなどの湿った場所を好んで生育し，コナラ亜属は山野に普通にみられる種類である。クワ属は，伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する種類である。これらの樹木は，本遺跡付近の森林や林縁部などに生育していたものに由来すると思われる。

オニグルミ，コナラ亜属などの堅果類は，コナラ亜属はアク抜きを要するが，食用・長期保存が可能で収量も多いことから，古くから植物質食糧として利用されてきた有用植物である。今回確認されたオニグルミの核には食痕があり，コナラ亜属は可食部ではない殻斗の検出であることから，人間が利用した痕跡は認められないが，当該期の本遺跡周辺の森林から植物質食糧として採取・利用されていた可能性はあると考えられる。クワ属は果実が食用可能である。

一方，草本類は，人里近くに開けた草地を形成する，いわゆる人里植物に属する種類を多く含むことから，調査区周辺に生育していたものに由来すると考えられる。水生植物のミクリ属，ヒルムシロ属や，やや湿ったところに生育する種類を含むカヤツリグサ科，タデ属，セリ科，シロネ属などが含まれることから，周辺域に水湿地の存在が推定される。

Ⅲ．叶南前Ａ遺跡井戸跡出土材の同定

１．試料・分析方法

試料は，叶南前Ａ遺跡の第２号井戸跡から出土した井戸枠材１点（№30）である。なお，分析方法は前掲の通りである。

２．結果

叶南前Ａ遺跡の井戸枠材は，針葉樹のモミ属に同定された。以下に解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（*Abies*）マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで，晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞にはじゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１－４個。放射組織は単列，１－20細胞高。

３．考察

叶南前Ａ遺跡の第２号井戸跡の井戸枠は，井戸の底面に溝を掘ってそこに板を差込み，埋土で支える構造を呈する。樹種同定を実施した井戸枠は，何点か出土した井戸枠材の１点で，針葉樹のモミ属に同定された。モミ属は，木理が通直で割裂性が高く，加工は容易であるが保存性はやや低い。割裂性が高く，板状の加工が容易なことが利用された背景に考えられる。

周辺では隣接する叶南前Ｂ遺跡で，近世の井戸跡（SE-１）から出土した井戸枠材についても樹種同定が実施されている(大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部，2005)。その結果をみると，クリが最も多く，他にサワラ，イヌガヤ，フジキ，複維管束亜属，ヒノキ属，カツラが認められているが，モミ属の利用は認められず，今回の結果とは異なる。この違いは，井戸の構築時期，構築方法，部位等の違いを反映している可能性がある。２号井戸跡では，今回同定を実施した他にも井戸枠材が出土しており，今後，これらの井戸枠材についても樹種を明らかにした上で比較・検討したいと考える。

引用文献

安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

Asai, K. & Watanabe, T.,1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom,10,* 35-47.

土壌標準分析・測定法委員会編，1986，土壌標準分析・測定法．博友社，354ｐ.

原口　和夫・三友　清史・小林　弘，1998，埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527-600.

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所.

Hustedt, F., 1937-1938, *Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra.* Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Expedition,Teil I~III,Band.15,p.131-506,Band.16,p.1-155,274-394.

石川　茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328ｐ.

磯部一洋・柏　義夫，1992，北茨城海岸に砂浜の侵食を探る．地質ニュース，451，12－19.

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料32，京都大学木質科学研究所．66-176.

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料35，京都大学木質科学研究所，47-216.

伊藤　良永・堀内　誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，23-45.

瓦吹　堅，2002，砂浜の遺跡－茨城県北茨木市内の様相－．地域考古学の展開－村田文夫先生還暦記念論文集－，259-269.

小杉　正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1－20.

Krammer, K., 1992, *PINNULARIA.* eine *Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.* J.CRAMER, 353p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986, *Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.* Gustav Fischer Verlag,876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, *Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* Gustav Fischer Verlag, 536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, *Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.* Gustav Fischer Verlag, 230p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b, *Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.* Gustav Fischer Verlag, 248p.

Lowe, R.L,1974, *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.* 334p.
In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005.Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

宮脇　昭（編著），1986，日本植生誌　関東，至文堂，641ｐ.

中村　純，1967，花粉分析．古今書院，232ｐ.

中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642ｐ.

日本の地質「東北地方」編集委員会，1989，日本の地質２　東北地方．共立出版，338ｐ.

日本の地質「関東地方」編集委員会，1986，日本の地質３　関東地方．共立出版，335ｐ.

農林省農林水産技術会議事務局監修，1967，新版標準土色帖.

Round, F. E.., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990, *The diatoms. Biology & morphology of the genera.* 747p. Cambridge University Press, Cambridge.

島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176ｐ.

須貝貫二・松井　寛・佐藤　茂・喜多河庸二・佐々木実・宮下美智夫・河内英幸，1957，日本炭田図１　５万分の１常磐炭田地質図，地質調査所.

大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部，2005，叶南前Ｂ遺跡井戸跡SE01出土井戸枠の樹種同定.「県営ほ場整備事業神岡上地区埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　富士ノ腰遺跡・神岡上遺跡・叶南前Ａ遺跡・叶南前Ｂ遺跡・古屋敷遺跡・仁井谷遺跡」，北茨城市教育委員会，34－38.

徳永　重元・山内　輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50－73.

渡辺　仁治，2005，淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo，pH耐性能．　内田老鶴圃，666ｐ.

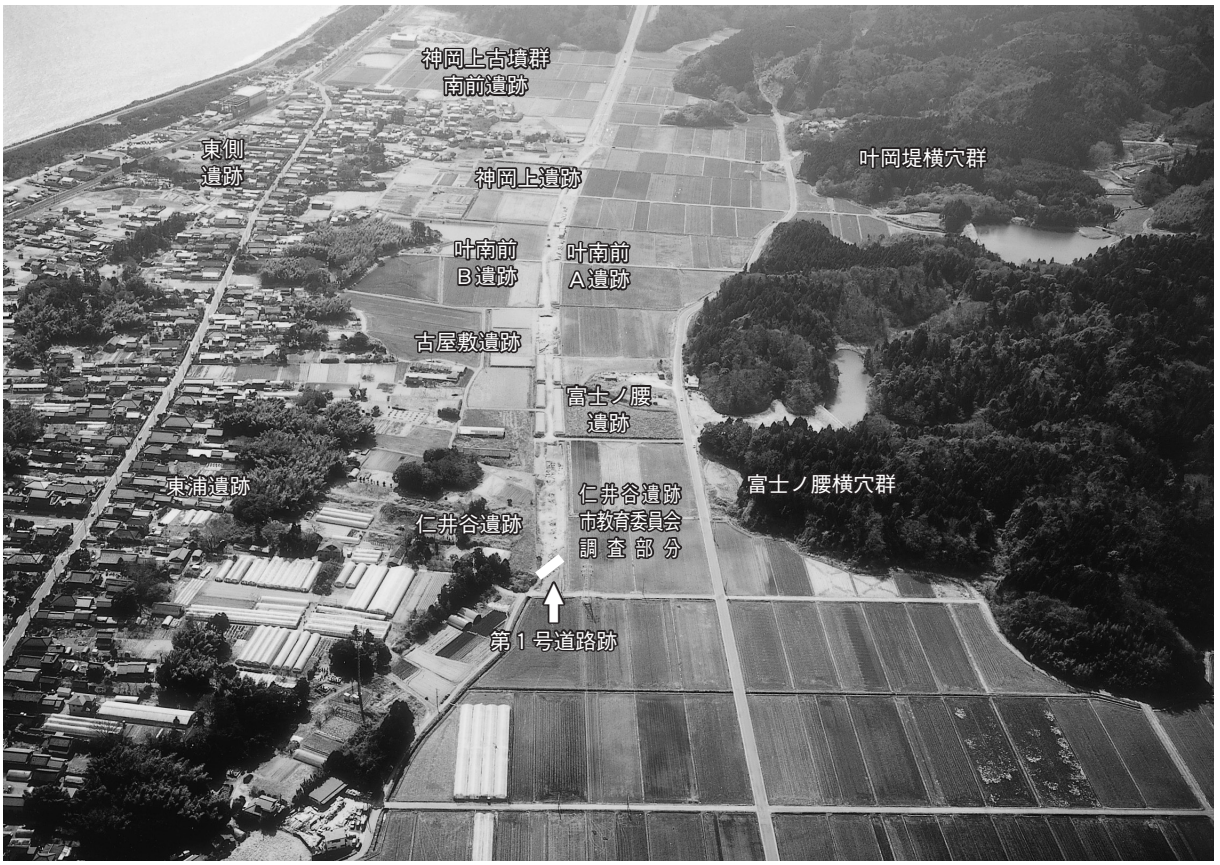
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編)，1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122ｐ.［Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

写　真　図　版

仁井谷　遺　跡
神岡上　遺　跡
古屋敷　遺　跡
叶南前Ａ　遺　跡

神岡上遺跡群遠景（西方向から）

神岡上遺跡群遠景（南西方向から）



神岡上遺跡群遠景（北方向から磯原方面を望む）

第 1 号住居跡
完 掘 状 況

第 1 号住居跡
遺 物 出 土 状 況

第 1 号住居跡
竈 完 掘 状 況

第 13 号 住 居 跡
遺物出土状況（1）

第 13 号 住 居 跡
遺物出土状況（2）

第 17 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第4・6号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第7号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第8号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第１号道路跡
ピット完掘状況

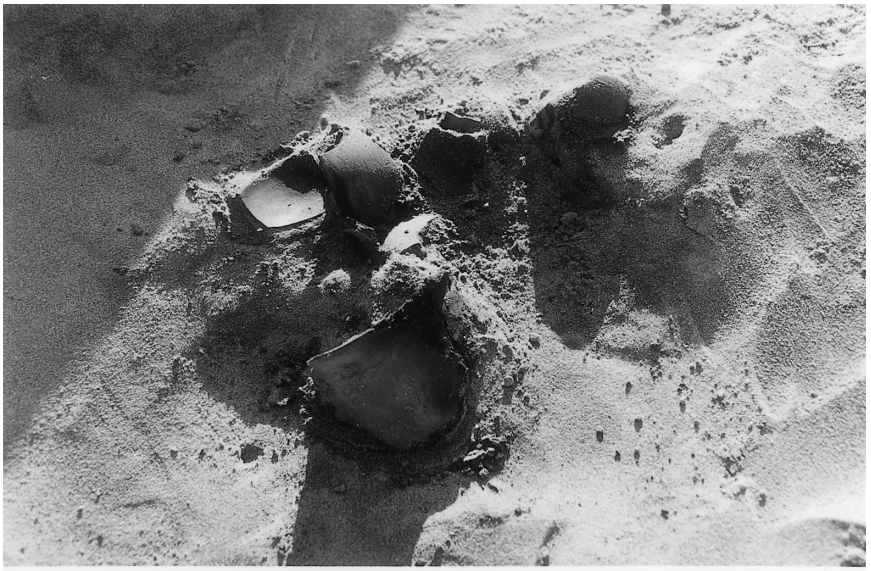
第１号道路跡
遺物出土状況

第１号道路跡
路面構築状況

第 5 号溝跡
遺物出土状況

第 13 号溝跡
遺物出土状況（1）

第 13 号溝跡
遺物出土状況（2）



第 8 号 溝 跡
遺 物 出 土 状 況

第 12 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 23 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 1 号 泥 炭 層
完　掘　状　況

第 1 号 泥 炭 層
植物遺体出土状況

第 1 号 泥 炭 層
堆　積　状　況

第１号住居跡
完掘状況

第１号住居跡
遺物出土状況

第１号住居跡
竈完掘状況

第 1 号住居跡
竈遺物出土状況

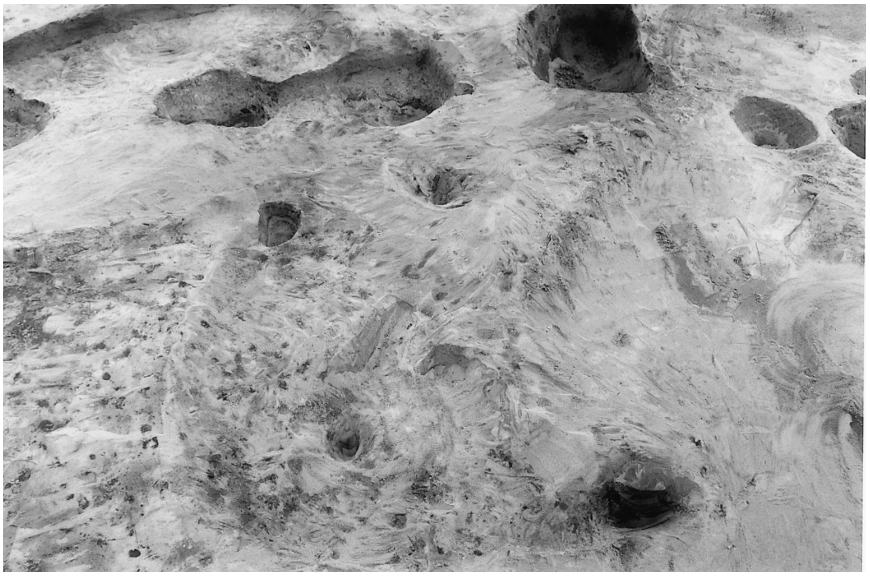
第 1 号住居跡
土層堆積状況（1）

第 1 号住居跡
土層堆積状況（2）

第 2 号住居跡
完　掘　状　況

第 2 号住居跡
遺物出土状況（1）

第 2 号住居跡
遺物出土状況（2）



第 3 号住居跡
完　掘　状　況

第 3 号住居跡
遺物出土状況

第 4 号住居跡
完　掘　状　況

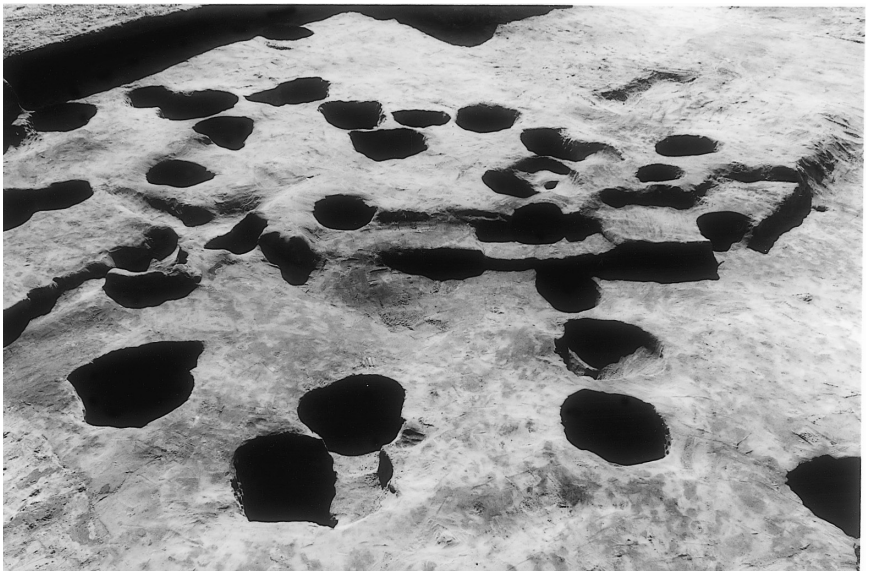
第 4 号 住 居 跡
遺物出土状況（1）

第 4 号 住 居 跡
遺物出土状況（2）

第 4 号 住 居 跡
遺物出土状況（3）

第 1 号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第 2 号掘立柱建物跡
完　掘　状　況



第 3 号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第5号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第6号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第1・2号柵跡
完　掘　状　況

第１号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第２号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

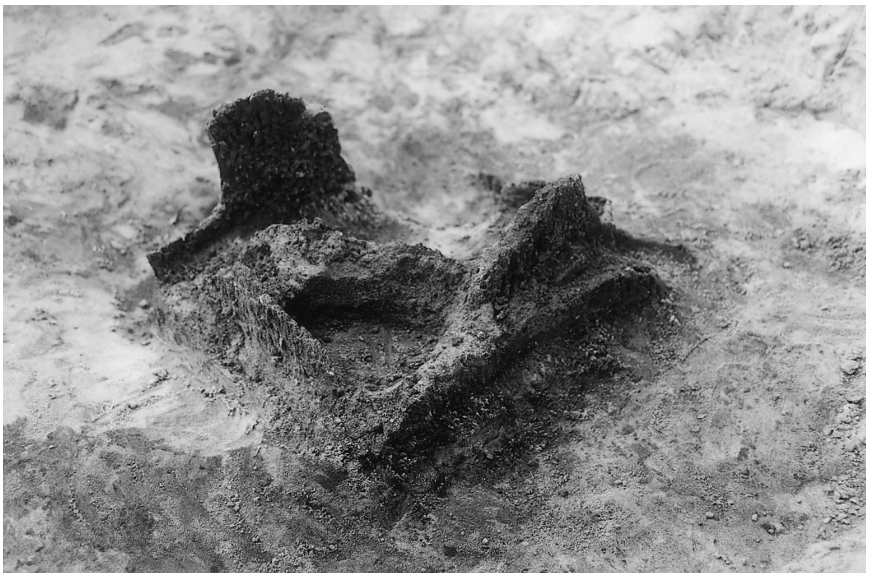
第３・４・６号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第５号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

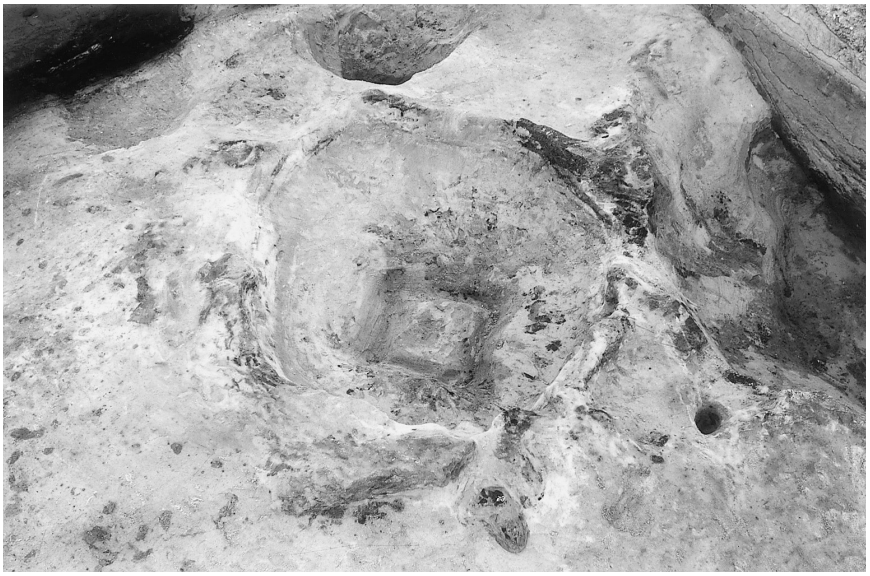
第１号井戸跡
完　掘　状　況

第１号井戸跡
土層堆積状況

第２号井戸跡
完掘状況

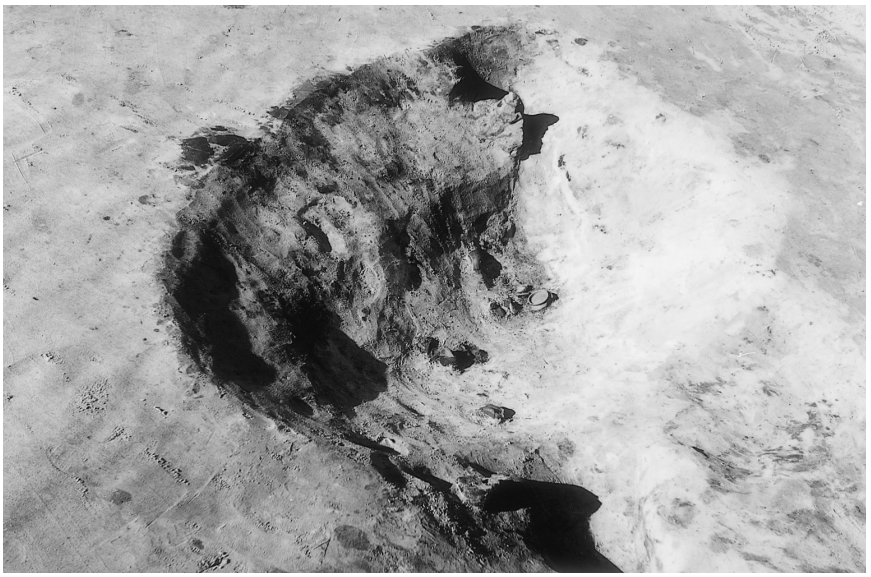


第２号井戸跡
井戸枠出土状況



第２号井戸跡
堀り方完掘状況

第 2 号井戸跡
遺物出土状況



第 29 号土坑
遺物出土状況（1）

第 29 号土坑
遺物出土状況（2）

SI2-79

第１号火葬墓-130

SI13-18

SI8-1

SI13-16

SI13-19

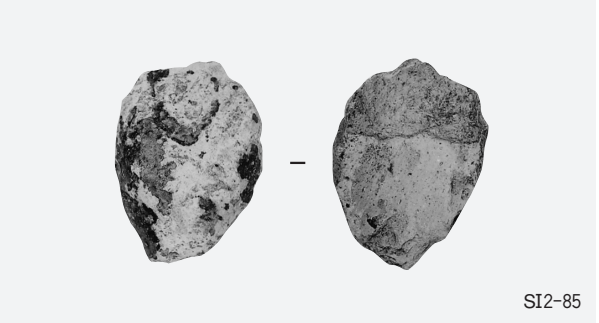
SD1-132

SK18-137

SK19-138

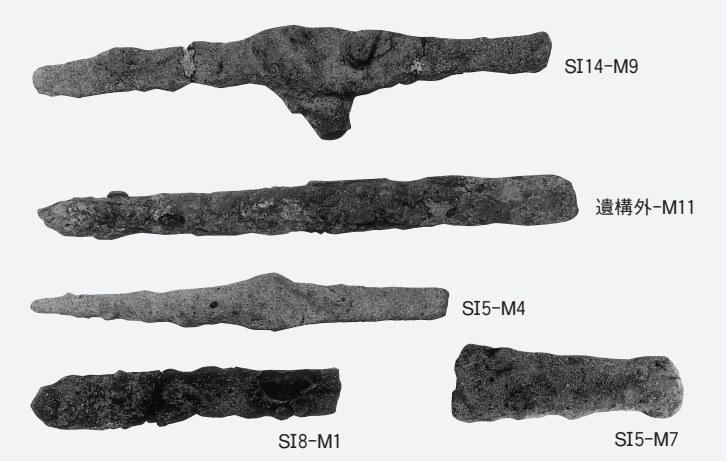
SD13-65

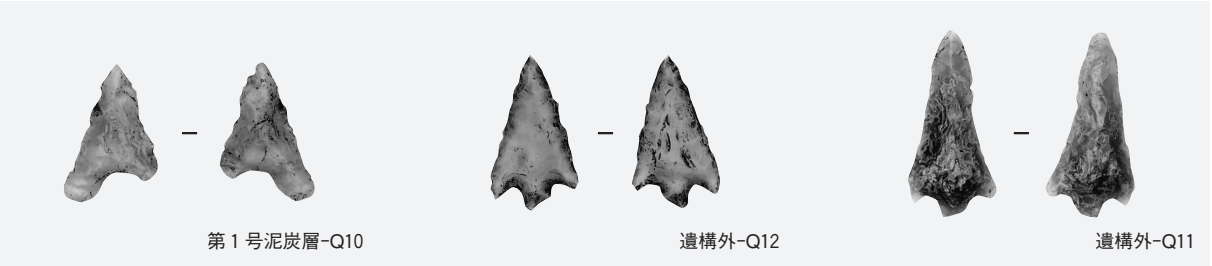
SI13-27


SI2-85

第２・８・13号住居跡，第１・13号溝跡，第18・19号土坑，第１号火葬墓出土遺物

第２・５・13号住居跡，第13号溝跡出土遺物





第１・４・５・６・８・13・14・15号住居跡，第１号泥炭層，遺構外出土遺物（金属製品，石器）

SD8-4

SD8-2

SD8-1

SD8-3

SK23-26

SK23-25

SK23-29

SK23-32

第 8 号溝跡，第23号土坑出土遺物

SI4-2

SI4-3

SI1-6

SK2-23

SI1-5

SI1-7

SI1-8

SI1-15A

第 1・4 号住居跡，第 2 号土坑出土遺物

(叶)第１号泥炭層-30

(叶)SK29-20

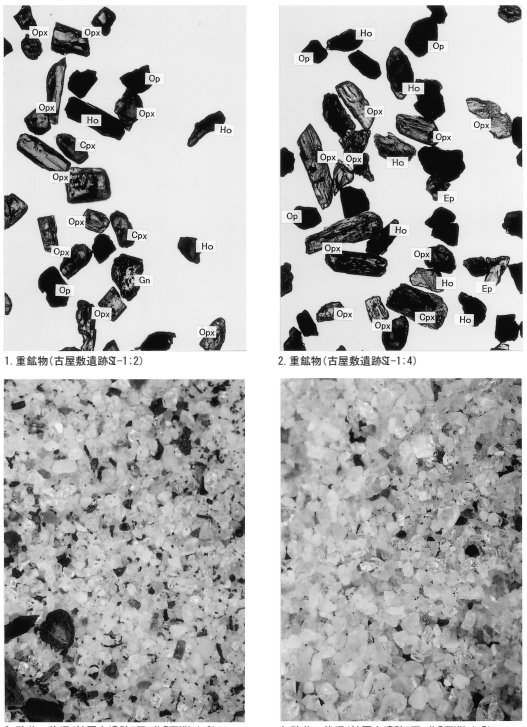
(叶)SK29-19

(叶)SI1-TP1

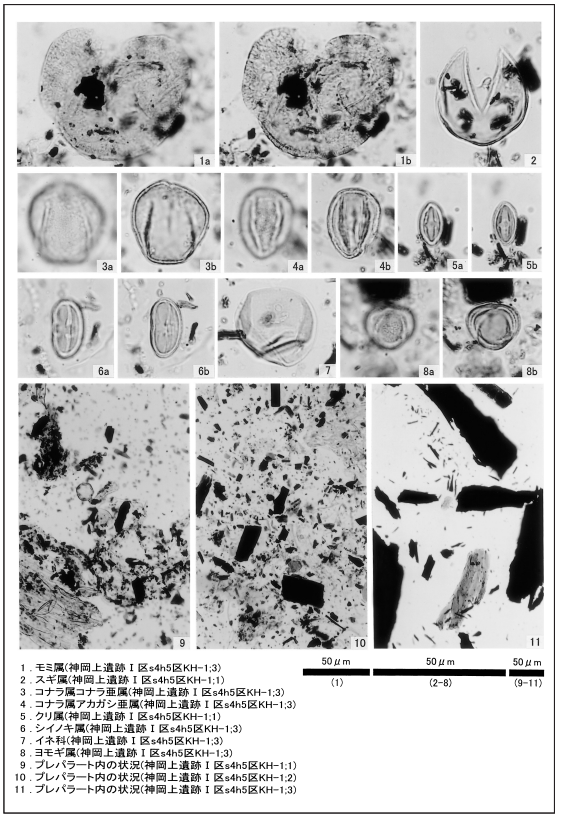
(仁)SI1-72

(神)SK23-27

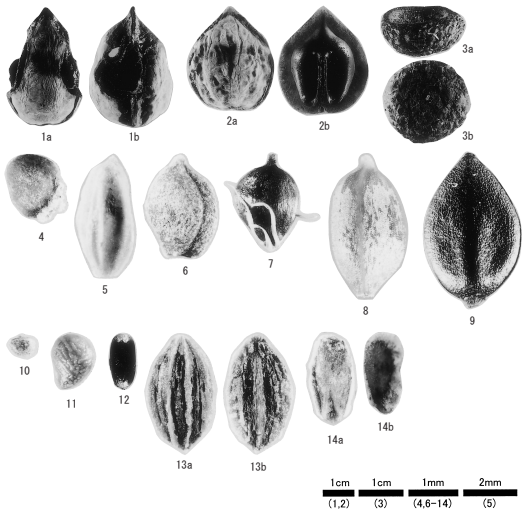
第１号住居跡・第29号土坑・第１号泥炭層出土遺物（叶南前Ａ遺跡），第１号住居跡出土遺物（仁井谷遺跡），第23号土坑出土遺物（神岡上遺跡）



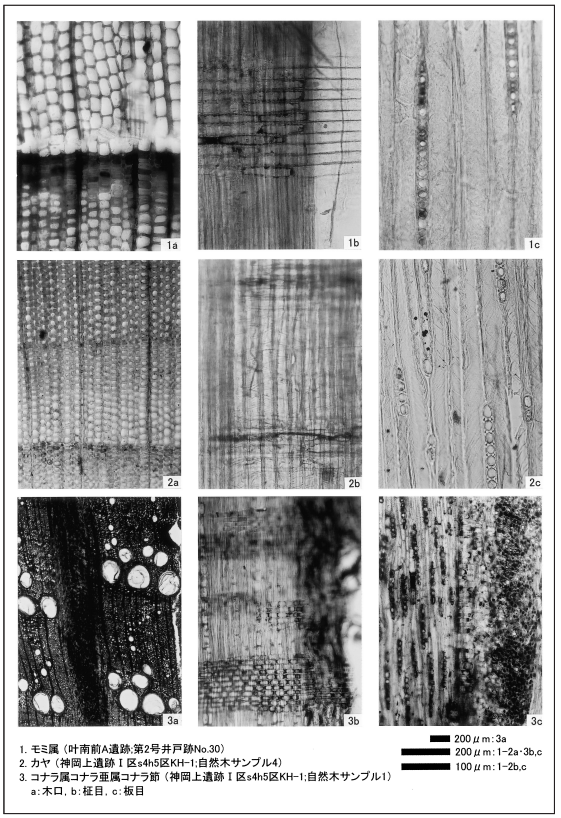
重鉱物・砂分の状況



花粉化石



種実遺体



木材

茨城県教育財団文化財調査報告第275集

仁　井　谷　遺　跡
神　岡　上　遺　跡
古　屋　敷　遺　跡
叶南前A　遺　跡

一般県道里根神岡上線道路改良事業地内
埋　蔵　文　化　財　調　査　報　告　書

平成19(2007)年　3月19日　印刷
平成19(2007)年　3月23日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ　029－225－6587

印刷　株式会社　いばらき印刷株式会社
〒319－1112　茨城県那珂郡東海村村松字平原3115－3
ＴＥＬ　029－282－0370